茨城県教育財団文化財調査報告第32集

竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書12

南三島遺跡5区

昭和61年3月

住宅・都市整備公団　茨城開発局
財団法人　茨城県教育財団

南三島遺跡５区正誤表

頁	行	誤	正
挿図目次	第14図	実測図	拓影図
表目次	表23	歯顎	歯牙
2	21	第３図	第２図
13	6	土坑117	土坑113
28	第11図	住居跡出土	住居跡遺物出土
29	住居跡出土 土器観察表 第13図　6	不良	砂粒 不良
33	第14図	実測図	拓影図
69	4	池線	沈線
96	1	M14	M13
100	6・7	東側には，ほぼ床面直上に，第19号，第20号，第24号，第26号	南側には，第19号，第20号，北側に第24号，中央部に第18号，第26号
153	土錘解説表 第106図　6	球状	管状
167	土錘解説表 第116図　21	球状	管状
173	住居跡出土 土器観察表 第122図　14	先端部ぜ	先端部が
200	第137図	実測図	拓影図
201	第138図	実測図	拓影図
249	12	南東側	南東側で
305	第196図	第27号住居跡地点貝塚	第27号地点貝塚
365	表23	歯顎リスト	歯牙出土リスト
374	19	ＳＫ135	ＳＫ138
375	18	ＳＫ135	ＳＫ138

茨城県教育財団文化財調査報告第32集

竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書12

南三島遺跡5区

昭和61年3月

住宅・都市整備公団　茨城開発局
財団法人　茨城県教育財団

序

龍ヶ崎市の北部台地に，住宅・都市整備公団が，竜ヶ崎ニュータウンの建設を進めています。その地域内には，数多くの埋蔵文化財の存在が確認されております。

財団法人茨城県教育財団は，これらの埋蔵文化財を記録保存するため，住宅・都市整備公団と埋蔵文化財発掘調査事業について委託契約を結び，発掘調査を実施いたしました。

昭和59年度は南三島遺跡５区のほか，３遺跡の調査を行い，郷土の歴史の解明に大きな成果を上げることができました。

昭和60年度には，南三島遺跡５区の整理を行い，調査結果の報告書を刊行するはこびとなりました。本書が学術研究の資料としてはもとより，教育・文化の向上の一環として広く活用されますことを希望してやみません。

なお，発掘調査及び整理を進めるにあたり，委託者である住宅・都市整備公団からいただいた御協力に対し，厚く感謝申し上げます。また，茨城県教育委員会，龍ヶ崎市教育委員会をはじめ，関係各機関及び関係各位から御指導，御協力をいただいたことに，衷心より謝意を表します。

昭和61年３月

財団法人　茨城県教育財団

理事長　　竹　内　藤　男

例　　言

1　本書は，住宅・都市整備公団の委託により，財団法人茨城県教育財団が，昭和59年度に発掘調査を実施した龍ヶ崎市羽原町に所在する南三島遺跡５区の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　南三島遺跡５区の調査・整理に関する当教育財団の組織は，次のとおりである。

理事長		竹内藤男	
副理事長		川又友三郎	
常務理事		綿引一夫	～昭和60年３月
		萩原藤之助	昭和60年４月～
事務局長		小林洋	～昭和60年３月
		堀井昭生	昭和60年４月～
調査課長		青木義夫	
企画管理班	班長	市毛洋一	～昭和60年３月
		北畠健	昭和60年４月～
	主任調査員	加藤雅美	
	主事	鈴木三郎	～昭和60年３月
	〃	田所多佳男	昭和60年４月～
	〃	海老沢一夫	～昭和60年３月
	〃	大曽根徹	
	〃	山崎初雄	昭和60年４月～
調査第二班	班長	安蔵幸重	昭和59年度
	主任調査員	中村幸雄	昭和59年度調査
	〃	中根節男	昭和59年度調査，60年度整理・執筆
整理班長		石井毅	昭和60年度

3　本書は，発掘担当者の協力を得て，中根節男が執筆・編集を担当した。

4　本書の作成にあたり，埼玉大学教養部助教授小池裕子氏に貝類遺体・獣骨・魚骨・植物遺体の同定を依頼し，御指導を得るとともに玉稿をいただいた。また人骨については，国立科学博物館人類研究室の佐倉朔博士に鑑定していただき，石器の石質鑑定は，茨城県立上郷高等学校教頭蜂須紀夫氏の御指導を得た。

5　本書に使用した記号等については，第３章第１節２の記載方法の項を参照されたい。

6　発掘調査及び出土遺物の整理等に際し，御指導・御協力を賜った関係各機関及び各位に対し，感謝の意を表わしたい。

目　　次

序
例　言
第１章　調査経緯……1
　第１節　調査に至る経過……1
　第２節　調査方法……2
　　1　地区設定……2
　　2　層序の検討……2
　　3　遺構確認……4
　　4　遺構調査……4
　第３節　調査経過……5
第２章　位置と環境……8
　第１節　地理的環境……8
　第２節　歴史的環境……8
第３章　遺構と遺物……13
　第１節　遺跡の概要と遺構・遺物の記載方法……13
　　1　遺跡の概要……13
　　2　遺構・遺物の記載方法……13
　第２節　竪穴住居跡……21
　　1　縄文時代……22
　　2　弥生時代……110
　　3　古墳時代……111
　　4　平安時代……176
　第３節　土坑……178
　第４節　地下式坑……203
　第５節　埋甕……210
　第６節　炉穴・屋外炉……219
　第７節　溝……221
　第８節　井戸状遺構……233
　第９節　地点貝塚……234

第10節　その他の人工遺物…… 310
1　遺構外出土遺物…… 310
2　石器…… 312
3　土器片錘・管状土錘・円板…… 320
4　把手・土製品…… 325
5　貝刃・貝製品…… 325
第4章　まとめ…… 331
第1節　遺　　構…… 331
1　竪穴住居跡について…… 331
2　土坑について…… 339
3　溝について…… 341
4　地下式坑について…… 342
5　地点貝塚について…… 342
第2節　遺　　物…… 346
1　土器について…… 346
2　土製品・貝製品・石器について…… 351
3　自然遺物について…… 352
終　章　む　す　び…… 354
附　章　南三島遺跡5区地点貝塚出土の自然遺物同定…… 355

挿　図　目　次

第 1 図　南三島遺跡５区配置図･大調査区名称図……3
第 2 図　南三島遺跡５区土層柱状図……4
第 3 図　南三島遺跡５区小調査区名称図……4
第 4 図　南三島遺跡５区地形図……7
第 5 図　南三島遺跡周辺地形及び周辺遺跡位置図…… 11
第 6 図　南三島遺跡５区遺構分布図…… 21
第 7 図　第２号住居跡実測図・遺物出土位置図…… 23
第 8 図　第２号住居跡出土遺物実測図・拓影図(1)…… 25
第 9 図　第２号住居跡出土遺物実測図・拓影図(2)…… 26
第 10 図　第３号住居跡実測図…… 27
第 11 図　第３号住居跡遺物出土位置図・遺物接合関係図…… 28
第 12 図　第３号住居跡出土遺物実測図(1)…… 31
第 13 図　第３号住居跡出土遺物実測図(2)…… 32
第 14 図　第３号住居跡出土遺物実測図(3)…… 33
第 15 図　第３号住居跡出土遺物拓影図(4)…… 34
第 16 図　第３号住居跡出土遺物拓影図(5)…… 35
第 17 図　第４号住居跡実測図…… 36
第 18 図　第４号住居跡出土遺物拓影図…… 36
第 19 図　第７号住居跡実測図…… 37
第 20 図　第７号住居跡出土遺物拓影図(1)…… 39
第 21 図　第７号住居跡出土遺物実測図・拓影図(2)…… 40
第 22 図　第８号住居跡実測図…… 41
第 23 図　第８号住居跡出土遺物実測図･拓影図…… 42
第 24 図　第11号住居跡実測図…… 44
第 25 図　第11号住居跡出土遺物拓影図(1)…… 45
第 26 図　第11号住居跡出土遺物実測図(2)…… 46
第 27 図　第12号住居跡実測図…… 47
第 28 図　第12号住居跡出土遺物実測図･拓影図…… 48
第 29 図　第13号住居跡実測図…… 50
第 30 図　第13号住居跡出土遺物拓影図…… 51
第 31 図　第14号住居跡実測図…… 52
第 32 図　第14号住居跡出土遺物実測図･拓影図…… 53
第 33 図　第15号住居跡実測図…… 55
第 34 図　第15号住居跡出土遺物拓影図…… 55
第 35 図　第26・31号住居跡実測図…… 57
第 36 図　第26号住居跡出土遺物実測図･拓影図…… 58
第 37 図　第31号住居跡出土遺物実測図(1)…… 61
第 38 図　第31号住居跡出土遺物拓影図(2)…… 62
第 39 図　第31号住居跡出土遺物拓影図(3)…… 63
第 40 図　第32・34号住居跡実測図…… 64
第 41 図　第32号住居跡出土遺物拓影図(1)…… 65
第 42 図　第32号住居跡出土遺物実測図・拓影図(2)…… 66
第 43 図　第33号住居跡実測図…… 68
第 44 図　第33号住居跡出土遺物拓影図(1)…… 70
第 45 図　第33号住居跡出土遺物拓影図(2)…… 71
第 46 図　第33号住居跡出土遺物拓影図(3)…… 72
第 47 図　第33号住居跡出土遺物実測図・拓影図(4)…… 73
第 48 図　第36号住居跡実測図…… 74
第 49 図　第38号住居跡実測図…… 77
第 50 図　第38号住居跡遺物出土位置図・遺物出土関係図…… 78
第 51 図　第38号住居跡出土遺物実測図(1) …… 79
第 52 図　第38号住居跡出土遺物実測図・拓影図(2)…… 80
第 53 図　第38号住居跡出土遺物拓影図(3)…… 81
第 54 図　第38号住居跡出土遺物拓影図(4)…… 82
第 55 図　第39号住居跡実測図…… 85
第 56 図　第39号住居跡遺物出土位置図・遺物接合関係図…… 86
第 57 図　第39号住居跡出土遺物実測図(1)…… 87
第 58 図　第39号住居跡出土遺物実測図(2)…… 88
第 59 図　第39号住居跡出土遺物実測図(3)…… 89
第 60 図　第39号住居跡出土遺物実測図・拓影図(4)…… 90
第 61 図　第39号住居跡出土遺物拓影図(5)…… 91
第 62 図　第39号住居跡出土遺物拓影図(6)…… 92
第 63 図　第40号住居跡実測図…… 94
第 64 図　第40号住居跡出土遺物実測図･拓影図…… 95
第 65 図　第41号住居跡実測図…… 97
第 66 図　第41号住居跡遺物出土位置図・遺物接合関係図…… 98
第 67 図　第41号住居跡出土遺物実測図・拓影

図(1)…… 99
第 68 図　第41号住居跡出土遺物拓影図(2)……100
第 69 図　第42号住居跡実測図……101
第 70 図　第42号住居跡出土遺物拓影図……102
第 71 図　第43号住居跡実測図・遺物出土位置図・遺物接合関係図……103
第 72 図　第43号住居跡出土遺物実測図・拓影図……105
第 73 図　第44・45号住居跡実測図……107
第 74 図　第46号住居跡出土遺物拓影図……108
第 75 図　第46号住居跡実測図……109
第 76 図　第 1 号住居跡実測図・遺物出土位置図・遺物接合関係図……111
第 77 図　第 1 号住居跡出土遺物実測図・拓影図……112
第 78 図　第 5 号住居跡実測図・遺物出土位置図・遺物接合関係図……113
第 79 図　第 5 号住居跡出土遺物実測図(1)……116
第 80 図　第 5 号住居跡出土遺物実測図(2)……117
第 81 図　第 5 号住居跡出土遺物実測図(3)……118
第 82 図　第 9 号住居跡出土遺物実測図……119
第 83 図　第 9 号住居跡実測図・遺物出土位置図・遺物接合関係図……120
第 84 図　第10号住居跡実測図……123
第 85 図　第10号住居跡遺物出土位置図・遺物接合関係図……124
第 86 図　第10号住居跡出土遺物実測図(1)……125
第 87 図　第10号住居跡出土遺物実測図(2)……126
第 88 図　第16号住居跡実測図・遺物出土位置図……127
第 89 図　第16号住居跡出土遺物実測図……129
第 90 図　第17号住居跡実測図・遺物出土位置図……130
第 91 図　第17号住居跡出土遺物実測図……131
第 92 図　第18号住居跡実測図・遺物出土位置図・遺物接合関係図……133
第 93 図　第18号住居跡出土遺物実測図(1)……135
第 94 図　第18号住居跡出土遺物実測図(2)……136
第 95 図　第19号住居跡実測図……137
第 96 図　第19号住居跡出土遺物実測図(1)……138
第 97 図　第19号住居跡出土遺物実測図(2)……139
第 98 図　第20号住居跡実測図……141
第 99 図　第20号住居跡出土遺物実測図……143
第100図　第21号住居跡実測図・遺物出土位置図・遺物接合関係図……144
第101図　第21号住居跡出土遺物実測図……146
第102図　第22号住居跡実測図……147
第103図　第22号住居跡出土遺物実測図……148
第104図　第24・25号住居跡実測図……149
第105図　第24号住居跡出土遺物実測図……152
第106図　第25号住居跡出土遺物実測図……153
第107図　第23・27号住居跡・カマド実測図……154
第108図　第27号住居跡出土遺物実測図……155
第109図　第28号住居跡実測図・遺物出土位置図・遺物接合関係図……156
第110図　第28号住居跡出土遺物実測図……159
第111図　第29号住居跡実測図・遺物出土位置図……160
第112図　第29号住居跡出土遺物実測図……161
第113図　第30号住居跡実測図・遺物出土位置図・遺物接合関係図……162
第114図　第30号住居跡出土遺物実測図……163
第115図　第32・34号住居跡遺物出土位置図・遺物接合関係図……165
第116図　第34号住居跡出土遺物実測図……166
第117図　第35号住居跡実測図……168
第118図　第35号住居跡出土遺物実測図……169
第119図　第37号住居跡実測図……171
第120図　第37号住居跡遺物出土位置図・遺物接合関係図……172
第121図　第37号住居跡出土遺物実測図(1)……174
第122図　第37号住居跡出土遺物実測図(2)……175
第123図　第23号住居跡出土遺物実測図……177
第124図　土坑実測図(1)……186
第125図　土坑実測図(2)……187
第126図　土坑実測図(3)……188
第127図　土坑実測図(4)……189
第128図　土坑実測図(5)……190
第129図　土坑実測図(6)……191
第130図　土坑実測図(7)……192
第131図　土坑実測図(8)……193
第132図　土坑実測図(9)……194
第133図　土坑実測図(10)……195
第134図　土坑出土遺物実測図(1)……197
第135図　土坑出土遺物実測図(2)……198
第136図　土坑出土遺物実測図(3)……199
第137図　土坑出土遺物拓影図(4)……200
第138図　土坑出土遺物拓影図(5)……201
第139図　地下式坑実測図(1)……208

第140図　地下式坑実測図(2)……209
第141図　埋甕遺構実測図(1)……211
第142図　埋甕遺構実測図(2)……212
第143図　埋甕遺構の掘り方の長径方向……212
第144図　埋甕の傾斜角度……212
第145図　埋甕遺構出土遺物実測図(1)……214
第146図　埋甕遺構出土遺物実測図(2)……215
第147図　埋甕遺構出土遺物実測図(3)……216
第148図　埋甕遺構出土遺物実測図(4)……217
第149図　埋甕遺構出土遺物実測図(5)……218
第150図　埋甕遺構出土遺物実測図(6)……219
第151図　炉穴・屋外炉実測図……220
第152図　第１号溝実測図(1)……221
第153図　第２号溝実測図(2)……222
第154図　第３号溝実測図(3)……224
第155図　第４－Ａ・４－Ｂ・４－Ｃ・５・６・７－Ａ・７－Ｂ・８号溝実測図(4)……227 228
第156図　第９号溝実測図(5)……232
第157図　井戸状遺構実測図……233
第158図　発掘資料の分別作業図……234
第159図　第１・２・３・14号地点貝塚実測図(1)……273
第160図　第４・15・16・21・27・28号地点貝塚実測図(2)……274
第161図　第13・22・25号地点貝塚実測図(3)……275
第162図　第13・31・33・34・35号地点貝塚実測図(4)……276
第163図　第６・11・12号地点貝塚実測図(5)……277
第164図　第７・８・９・29・30号地点貝塚実測図(6)……278
第165図　第５・10・32号地点貝塚実測図(7)……279
第166図　第18・19・20・23・24・26号地点貝塚実測図(8)……280
第167図　第17号地点貝塚実測図・第17号地点貝塚ハマグリ・シオフキ殻高分布図(9)……281
第168図　第17号地点貝塚実測図・第17号地点貝塚ハマグリ・シオフキ殻高分布図(10)……282
第169図　第１号地点貝塚人骨出土位置図……283
第170図　第１号地点貝塚出土遺物拓影図……284
第171図　第２号地点貝塚出土遺物拓影図……285
第172図　第３号地点貝塚出土遺物拓影図……285
第173図　第４号地点貝塚出土遺物拓影図……286
第174図　第５号地点貝塚出土遺物実測図・拓影図……286
第175図　第６号地点貝塚出土遺物実測図・拓影図……287
第176図　第７号地点貝塚出土遺物拓影図……289
第177図　第８号地点貝塚出土遺物拓影図……289
第178図　第９号地点貝塚出土遺物拓影図……290
第179図　第10号地点貝塚出土遺物実測図・拓影図……291
第180図　第11号地点貝塚出土遺物実測図・拓影図……293
第181図　第12号地点貝塚出土遺物拓影図……294
第182図　第13号地点貝塚出土遺物実測図・拓影図……295
第183図　第14号地点貝塚出土遺物拓影図……296
第184図　第15号地点貝塚出土遺物拓影図……296
第185図　第16号地点貝塚出土遺物拓影図……296
第186図　第17号地点貝塚出土遺物実測図・拓影図(1)……298
第187図　第17号地点貝塚出土遺物実測図・拓影図(2)……299
第188図　第19号地点貝塚出土遺物拓影図……301
第189図　第20号地点貝塚出土遺物拓影図……301
第190図　第21号地点貝塚出土遺物拓影図……301
第191図　第22号地点貝塚出土遺物拓影図……302
第192図　第23号地点貝塚出土遺物拓影図……303
第193図　第24号地点貝塚出土遺物拓影図……303
第194図　第25号地点貝塚出土遺物拓影図……304
第195図　第26号地点貝塚出土遺物拓影図……304
第196図　第27号地点貝塚出土遺物拓影図……305
第197図　第28号地点貝塚出土遺物実測図・拓影図……305
第198図　第29号地点貝塚出土遺物拓影図……305
第199図　第30号地点貝塚出土遺物拓影図……306
第200図　第31号地点貝塚出土遺物実測図・拓影図……307
第201図　第32号地点貝塚出土遺物拓影図……307
第202図　第33号地点貝塚出土遺物拓影図……307
第203図　第34号地点貝塚出土遺物実測図・拓影図……308

第204図　第35号地点貝塚出土遺物拓影図……308
第205図　遺構外出土遺物実測図……311
第206図　石器実測図(1)……312
第207図　石器実測図(2)……316
第208図　石器実測図(3)……317
第209図　石器実測図(4)……318
第210図　石器実測図(5)……319
第211図　土器片錘実測図(1)……326
第212図　土器片錘実測図(2)……327
第213図　土器片錘・管状土錘・土製円板実測図(3)……328
第214図　把手・土製品実測図……329
第215図　貝刃・貝製品実測図……330
第216図　縄文時代中期加曽利EⅢ・EⅢ～EⅣ，縄文時代後期称名寺式，堀之内Ⅰ式期住居跡分布図……334
第217図　古墳時代（五領Ⅰ・Ⅱ期）住居跡長軸方向……336
第218図　弥生・古墳（五領Ⅰ・Ⅱ期）・平安時代住居跡分布図……337
第219図　地点貝塚・埋甕遺構分布図……344
第220図　南三島遺跡（５区）出土土器変遷図……350
第221図　魚骨の組成図……358
第222図　SM１・10・13・17・28・34地点貝塚遺構配置図……366
第223図　ハマグリの成長速度……367
第224図　SM１の貝層の季節性……369
第225図　SM17の貝層の季節性……370
第226図　SM28の貝層の季節性……372
第227図　SM34の貝層の季節性……373

表　目　次

表１　南三島遺跡周辺遺跡一覧表……12
表２　土坑一覧表(1)……182
土坑一覧表(2)……183
土坑一覧表(3)……184
土坑一覧表(4)……185
表３　埋甕一覧表……210
表４　炉穴・屋外炉一覧表……219
表５　第１号地点貝塚層名対照表……238
表６　貝類遺体集計表……309
表７　石器一覧表(1)……312
石器一覧表(2)……313
石器一覧表(3)……314
石器一覧表(4)……315
表８　土器片錘一覧表(1)……320
土器片錘一覧表(2)……321
土器片錘一覧表(3)……322
土器片錘一覧表(4)……323
土器片錘一覧表(5)……324
表９　管状土錘・円板一覧表……325
表10　土製品一覧表……325
表11　貝刃一覧表……325
表12　貝製品一覧表……330
表13　住居跡分類集計表……332
表14　縄文時代住居跡一覧表……337
表15　弥生時代住居跡一覧表……338
表16　古墳時代住居跡一覧表……338
表17　平安時代住居跡一覧表……339
表18　土坑形態分類一覧表……339
表19　土坑の形態別分類……340
表20　地点貝塚の形態別分類……343
表21　地点貝塚一覧表……345
表22　南三島遺跡５区出土魚骨の同定結果一覧表(1)……359
(2)……360
(3)……361
(4)……362
(5)……363
(6)……364
表23　イノシシ歯顎出土リスト……365
表24　ハマグリの冬輪時の殻高成長(1)……368
(2)……368

写 真 図 版 目 次

ＰＬ　1　発掘前全景，遺構確認
ＰＬ　2　作業風景
ＰＬ　3　第２号住居跡，第２号住居跡遺物出土状況，第３号住居跡
ＰＬ　4　第３号住居跡遺物出土状況，第４号住居跡，第７号住居跡
ＰＬ　5　第８号住居跡，第11号住居跡，第12号住居跡
ＰＬ　6　第13号住居跡，第14号住居跡，第15号住居跡
ＰＬ　7　第15号住居跡，第24・25・26・31号住居跡，第26号住居跡
ＰＬ　8　第32号住居跡，第33号住居跡，第33号住居跡遺物出土状況
ＰＬ　9　第38号住居跡，第38号住居跡遺物出土状況，第38号住居跡炉土層
ＰＬ　10　第39号住居跡，第40号住居跡，第41号住居跡
ＰＬ　11　第41号住居跡炉（土器片囲い炉），第42号住居跡，第43号住居跡
ＰＬ　12　第44・45号住居跡，第39・41・44・45号住居跡，第37・46号住居跡
ＰＬ　13　第１号住居跡，第５号住居跡，第５号住居跡遺物出土状況
ＰＬ　14　第５号住居跡遺物出土状況，第９号住居跡，第10号住居跡
ＰＬ　15　第10号住居跡遺物出土状況，第16号住居跡，第17号住居跡
ＰＬ　16　第18号住居跡，第19号住居跡，第20号住居跡
ＰＬ　17　第20号住居跡遺物出土状況，第21号住居跡，第22号住居跡
ＰＬ　18　第23号住居跡，第24・25号住居跡，第27号住居跡
ＰＬ　19　第28号住居跡，第29号住居跡，第32・34号住居跡
ＰＬ　20　第35号住居跡，第37号住居跡，第37号住居跡遺物出土状況
ＰＬ　21　第２号土坑，第４号土坑，第７号土坑，第８号土坑，第11号土坑，第12号土坑，第13号土坑，第14号土坑
ＰＬ　22　第15号土坑，第17号土坑，第19号土坑，第20号土坑，第22号土坑，第23号土坑，第25号土坑，第30号土坑
ＰＬ　23　第31号土坑，第37号土坑，第41号土坑，第44号土坑，第45号土坑，第47号土坑，第47号土坑遺物出土状況，第49号土坑
ＰＬ　24　第51号土坑，第52号土坑，第60号土坑，第61号土坑，第62号土坑，第63号土坑遺物出土状況，第66号土坑，第67号土坑
ＰＬ　25　第72号土坑，第74号土坑，第75号土坑，第78号土坑，第97号土坑，第97号土坑遺物出土状況，第102号土坑，第127号土坑
ＰＬ　26　第１号地下式坑，第３号地下式坑，第４号地下式坑，第５号地下式坑，第７号地下式坑，第８号地下式坑，第９号地下式坑
ＰＬ　27　埋甕遺構遺物出土状況(1)
ＰＬ　28　埋甕遺構遺物出土状況(2)
ＰＬ　29　第２号溝，第３号溝，第４－Ａ・４－Ｂ・４－Ｃ号溝，第４－Ａ・４－Ｂ・４－Ｃ・６・７－Ａ・７－Ｂ・８号溝，第５号溝，第９号溝
ＰＬ　30　第１号地点貝塚，第１号地点貝塚人骨出土状況，第１号地点貝塚遺物出土状況，第４号地点貝塚，第５号地点貝塚断面，第６号地点貝塚，第６号地点貝塚鳥骨出土状況，第８号地点貝塚断面
ＰＬ　31　第10号地点貝塚，第11号地点貝塚植物遺体出土状況，第11号地点貝塚，第13号地点貝塚，第13号地点貝塚，第13号地点貝塚，第17号地点貝塚，第17号地点貝塚断面
ＰＬ　32　第17号地点貝塚断面，第17号地点貝塚遺物出土状況，第17号地点貝塚獣骨出土状況，第39号住居跡内貝層，第40号住居跡内貝層，第40号住居跡内貝層，第32号地点貝塚獣骨出土状況，第34号地点貝塚
ＰＬ　33　第28号地点貝塚（ステレオ写真法）

7層，8層，9層，10層
ＰＬ　34　全景
ＰＬ　35　住居跡出土遺物
ＰＬ　36　住居跡出土遺物
ＰＬ　37　第31号住居跡出土遺物
ＰＬ　38　住居跡出土遺物
ＰＬ　39　第39号住居跡出土遺物(1)
ＰＬ　40　第39・41・43号住居跡出土遺物(2)
ＰＬ　41　第39号住居跡出土遺物(3)
ＰＬ　42　第39号住居跡出土遺物(4)
ＰＬ　43　第５号住居跡出土遺物
ＰＬ　44　住居跡出土遺物
ＰＬ　45　住居跡出土遺物
ＰＬ　46　住居跡出土遺物
ＰＬ　47　住居跡出土遺物
ＰＬ　48　住居跡出土遺物
ＰＬ　49　住居跡出土遺物
ＰＬ　50　住居跡出土遺物
ＰＬ　51　住居跡・土坑出土遺物
ＰＬ　52　土坑出土遺物
ＰＬ　53　埋甕遺構出土遺物(1)
ＰＬ　54　埋甕遺構出土遺物(2)
ＰＬ　55　埋甕遺構出土遺物(3)
ＰＬ　56　埋甕遺構出土遺物(4)
ＰＬ　57　地点貝塚出土遺物(1)
ＰＬ　58　地点貝塚出土遺物(2)
ＰＬ　59　遺構外出土遺物
ＰＬ　60　石器(1)
ＰＬ　61　石器(2)
ＰＬ　62　石器(3)
ＰＬ　63　土器片錘(1)
ＰＬ　64　土器片錘(2)
ＰＬ　65　土製円板・土製品・管状土錘
ＰＬ　66　土製品・注口土器
ＰＬ　67　把手
ＰＬ　68　地点貝塚出土貝刃
ＰＬ　69　地点貝塚出土貝輪・垂飾ｲ)
ＰＬ　70　地点貝塚出土貝
ＰＬ　71　第１号地点貝塚出土人骨
ＰＬ　72　魚骨・獣骨・植物遺体

第1章　調査経緯

第1節　調査に至る経過

住宅・都市整備公団は，龍ヶ崎市街地の北部台地上に竜ヶ崎ニュータウンの建設を進めている。この計画は首都圏の膨大な住宅用地の需要に対し，住宅地の大量供給と，周辺都市との有機的結合をめざした調和のある開発をめざしている。このニュータウンは自然の保全に留意した潤いのある生活環境を創出することを目的としている。さらに地域内に就業の場を計画し，居住者の地元定着化をも意図している。

竜ヶ崎ニュータウン建設計画は，当初日本住宅公団が計画し，昭和46年1月「竜ヶ崎牛久都市計画事業」として市街地開発事業に関する都市計画が決定され，事業名を「北竜台及び龍ヶ岡特定土地区画整理事業」と称した。しかし昭和51年4月，宅地開発公団茨城開発局が設立されたため，日本住宅公団に代って事業を引き継ぎ実施することになった。なお，宅地開発公団と日本住宅公団は，昭和56年10月1日付をもって統合し，新たに「住宅・都市整備公団」として発足した。これに伴い従来の契約によって生じた権利・義務はそのまま新公団に継承されることになった。

土地区画整理事業の実施される地区は，住宅・都市整備公団所有の土地および一般土地所有者の土地等で，事業面積は北竜台で小柴新田町・柏田町の全域と若柴町・稲荷新町・馴馬町・南中島町・別所町の一部で326.6ha，龍ヶ岡で貝原塚町・羽原町・八代町・長峰町の各一部の344.9haの計671.5haに及んでいる。その現況は，北竜台においては山林原野が約70%，畑及び水田等の耕地が約24%を占め，龍ヶ岡においては山林原野が約50%，畑及び水田等の耕地が約40%以上を占めている。

茨城県教育委員会は，地元龍ヶ崎市教育委員会と昭和45年に行った開発地域内の埋蔵文化財分布調査に基づき，22遺跡について，文化財保護の立場から必要な措置を講ずるため協議を重ねた。その後，昭和51年7月に再度分布調査を兼ねた確認調査を実施して，新たに7遺跡，さらに昭和57年までに5遺跡を追加した。この分布調査の結果に基づき，茨城県教育委員会，龍ヶ崎市教育委員会及び宅地開発公団が北竜台及び龍ヶ岡特定土地区画整理事業地内の埋蔵文化財包蔵地の取り扱いについて再度協議を重ね，34遺跡（北竜台17遺跡，龍ヶ岡17遺跡）の内31遺跡について現状保存が困難なため，記録保存の措置を講ずることになった。

茨城県教育財団は，県内各地の大規模開発事業に係る埋蔵文化財発掘調査の増加に対応するため，茨城県教育委員会の指導により，昭和52年4月埋蔵文化財を担当する調査課を本部に設置した。茨城県教育財団は「北竜台及び龍ヶ岡特定土地区画整理事業の施行に係る埋蔵文化財発掘調査」の業務委託契約を当時の宅地開発公団と締結し，竜ヶ崎ニュータウン計画区域内の埋蔵文化

財発掘調査を継続して実施してきた。

昭和59年度の発掘調査遺跡は，南三島遺跡５区と尾坪台遺跡・十三塚のほか，前年度から継続の屋代Ｂ遺跡である。

なお，発掘調査は茨城県教育財団本部調査課調査第２班が担当した。

参考文献

(1)　「竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書10」南三島遺跡１・２区　茨城県教育財団　昭和59年

第２節　調査方法

１　地区設定

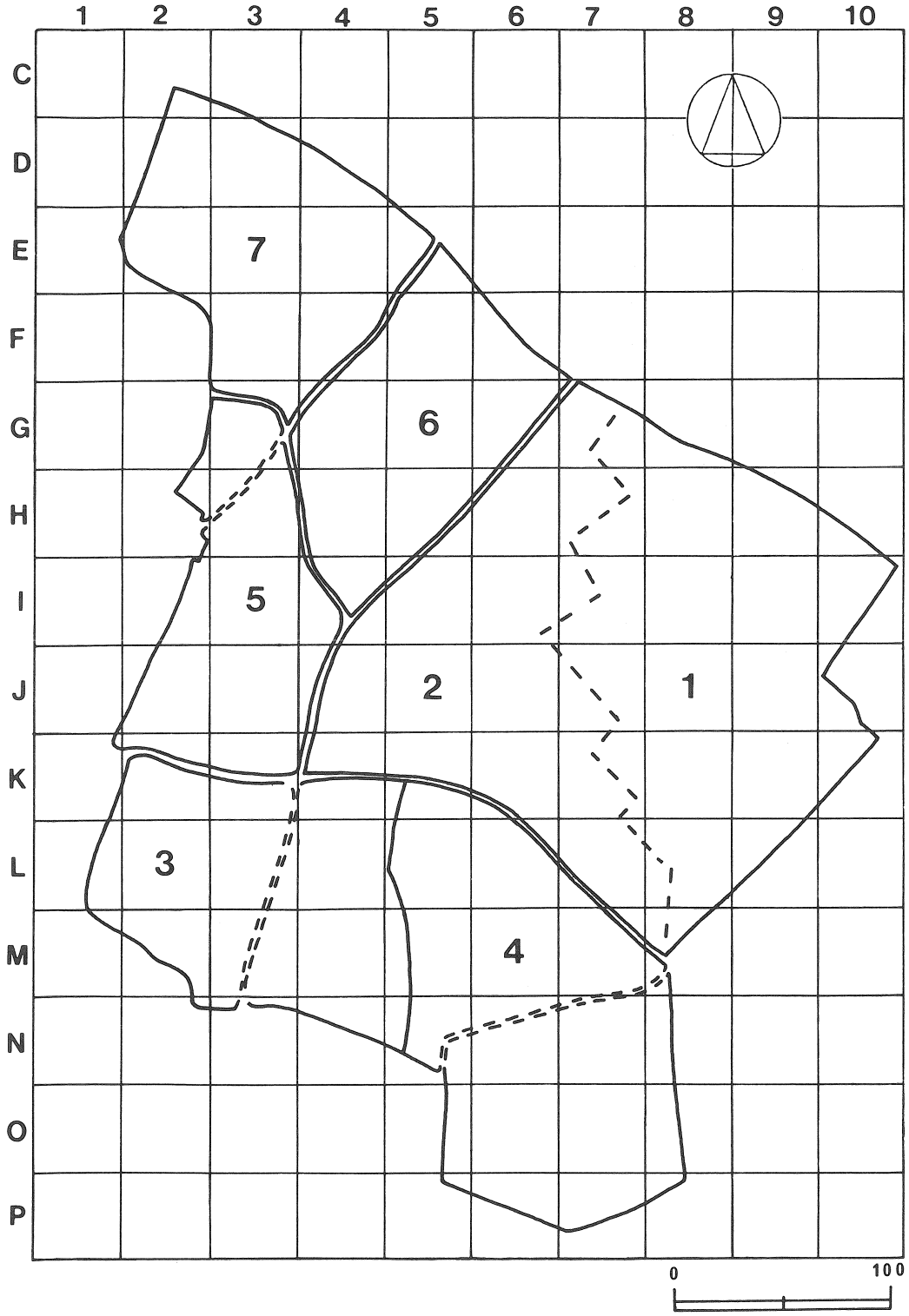
南三島遺跡は，100,311㎡あり１区から７区に分け，昭和59年度の南三島遺跡５区の調査対象面積は，10,526㎡である。

当遺跡の地区設定は，日本平面直角座標第Ⅸ系，Ｘ座標－8,540ｍ，Ｙ座標＋33,500ｍの交点を基準点として，40ｍ四方の大調査区を設定した。その大調査区を東西南北に10等分して４ｍ四方の小調査区を設定した。すなわち，40ｍ四方の大調査区内に４ｍ四方の小調査区を100個設定した。

大調査区は，基準点から北方へ320ｍ，西方へ400ｍの点を起点とし，北から南へ大文字のアルファベットで「Ａ」・「Ｂ」・「Ｃ」……とし，西から東へ「１」・「２」・「３」……と大文字を付して，Ａ１区・Ｂ２区等とした。小調査区は，同様に，北から南へ小文字のアルファベットで「ａ」・「ｂ」・「ｃ」……とし，西から東へ「１」・「２」・「３」と小文字を付した。各小調査区の名称は，大調査区と小調査区を合せて「$A1a_1$」・「$B2b_2$」のように表記した。

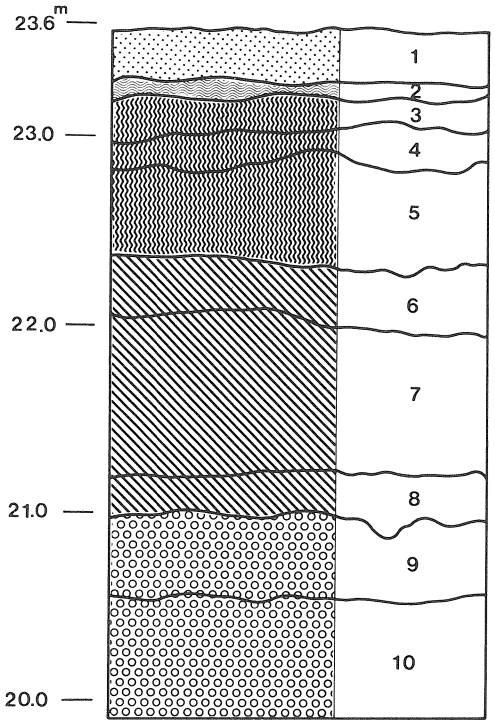
２　層序の検討　（第３図）

南三島遺跡５区の基本的層序についてみると，１は表土層で25cmほどの厚さを有しており比較的軟らかい。２は暗褐色土層で，ローム層への漸移層と考えられる。３～８まではローム層で厚さ2.3ｍほどである。３・４はソフトローム層で褐色土層，５は黄褐色土層で色調や含有物に相違がみられる。６・７はハードローム層，また，８は黄褐色土層で粘性がある。９は粘土粒子の混入が多くみられ，ローム層から粘土層への漸移層と考えられる。10は粘土層になる。当遺跡における地下式坑の一部には，10層の粘土層まで掘り込まれているものもみられるが，ほとんどの



第１図　南三島遺跡５区配置図・大調査区名称図

遺構は６層までである。

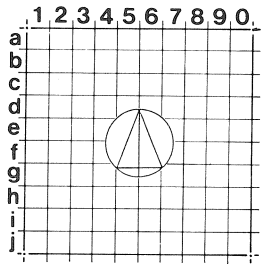


1　Hue　7.5ＹＲ　3/2　黒褐色　表土層
2　Hue　7.5ＹＲ　3/4　暗褐色　表土からローム層への漸移層
3　Hue　7.5ＹＲ　4/6　褐色　ローム（部分的に攪乱が入る）
4　Hue　10 ＹＲ　4/6　褐色　ローム（ロームブロック含む）
5　Hue　10 ＹＲ　5/6　黄褐色　ローム（ロームブロック含む）
6　Hue　7.5ＹＲ　5/6　明褐色　ハードローム
7　Hue　7.5ＹＲ　4/4　褐色　ハードローム
8　Hue　10 ＹＲ　5/6　黄褐色　やや粘性をおび，スコリヤを含む。
9　Hue　2.5ＹＲ　4/4　にぶい赤褐色　スコリヤを含む。
10　Hue　7.5ＹＲ　5/3　にぶい褐色　スコリヤを含む。きわめて粘性強い。

第２図　南三島遺跡土層柱状図

3　遺構確認

当遺跡における遺構確認作業は，最初に全調査区の25％の割合で東西南北に設定したトレンチを発掘し，遺構，遺物の有無及び出土状況等を観察する方法で実施した。その結果，遺構，遺物の分布状況が濃密であり，５区全域に遺構が確認された。また，遺構確認面までが40～50cmと比較的深いため，重機による表土除去を実施した。その後正確なプラン確認を進め，多数の土器片とともに，確認調査の段階で竪穴住居跡が約50軒，土坑が約100基，溝９条，地点貝塚35基を確認した。



第３図　南三島遺跡小調査区名称図

4　遺構調査

住居跡の調査は，長径方向とそれに直交する方向に土層観察用ベルトを設けて四分割して掘り

込む四分割法で実施し，地区の名称は北から時計回りに１～４区とした。土坑の調査は，長軸で二分する二分割法を用いた。溝の調査は，５～10ｍの間隔に土層観察用ベルトを残して掘り込みを実施した。地点貝塚の調査は，貝層の堆積状況を観察するために長軸で二分するとともに，平面観察により貝類組成による区分から貝殻の廃棄単位を確認して，廃棄された貝層ごとに貝殻を採取し収納した。小さな貝ブロックについては，長軸で二分する二分割法を適用した。

土層観察は，色相，含有物，混入物の種類や量及び粘性等を総合的に観察し，分類の基準とした。色相の判定は『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄著，日本色研事業株式会社）を使用した。

遺構や遺物の平面実測は，水糸方眼地張測量で行った。土層断面や遺構断面の実測は，遺跡内の水準点からレベルを用いて水糸を水平にセットし，水糸を基準線として実測した。縮尺は，1/20を基本にしたが，部分的な微細図は1/5，1/10の縮尺で作成した。

遺物出土状況の実測は，原位置を保って記録し，遺物出土状況計測表を利用して遺物を取り上げた。遺物の取り上げは，地点とレベルを記入した後，カードと遺物台帳に併記した。

記録の過程は，土層断面写真撮影→土層断面図作成→遺物出土状況写真撮影→遺物出土状況図作成（計測表も使用）→平面写真撮影→断面図作成→平面図作成を基本とした。図面や写真等に記録できない事項に関しては，発掘調査日誌に記録し，さらに，遺構カードに整理した。

第３節　調査経過

南三島遺跡５区は調査対象面積10,526㎡で，昭和59年７月11日に発掘調査を開始し，昭和60年３月26日に調査を完了した。

以下発掘調査の経過について，その概要を月別に記述する。

昭和59年度

7　月　11日に当遺跡の発掘調査を開始し，器材置場の設置，発掘器材の搬入，整理，テントの設営などを実施した。翌12日から５区の調査区域の確認を行い，東西南北に遺構確認のためのトレンチを設定した。試掘は調査面積の25％の割合で実施し，ローム面まで約30～40cm掘り下げた。Ｉ３・Ｊ３・Ｋ３区では縄文土器片が多数出土し，併せて，竪穴住居跡，土坑，溝などの遺構も検出した。

8　月　猛暑の中，前月に引き続いて試掘を行う。その結果，Ｉ３・Ｊ３・Ｋ３区を中心に遺構が濃密に存在することが把握できたので，20日から重機を導入して，５区の全面表土除去作業を開始した。表土除去が終了した地区から遺構の確認作業を進めた。

9　月　12日には重機による表土除去作業が終了した。17日からは調査区の設定作業に取りか

かり，大調査区の基本杭を打ち，小調査区の杭打ちを実施した。26日に遺構確認状況の全景写真撮影を行った。遺構確認作業の結果，当遺跡は，地点貝塚を伴う縄文時代中・後期から古墳時代前期にかけての複合遺跡であることが判明した。翌27日から遺構調査に入り，Ｇ３区の第１号溝の調査を開始した。

10　月　Ｈ３・Ｉ３・Ｊ４区の遺構調査を進め，竪穴住居跡９軒，土坑10基，溝５条の調査を終了した。調査した竪穴住居跡は，縄文時代６軒，古墳時代３軒であった。

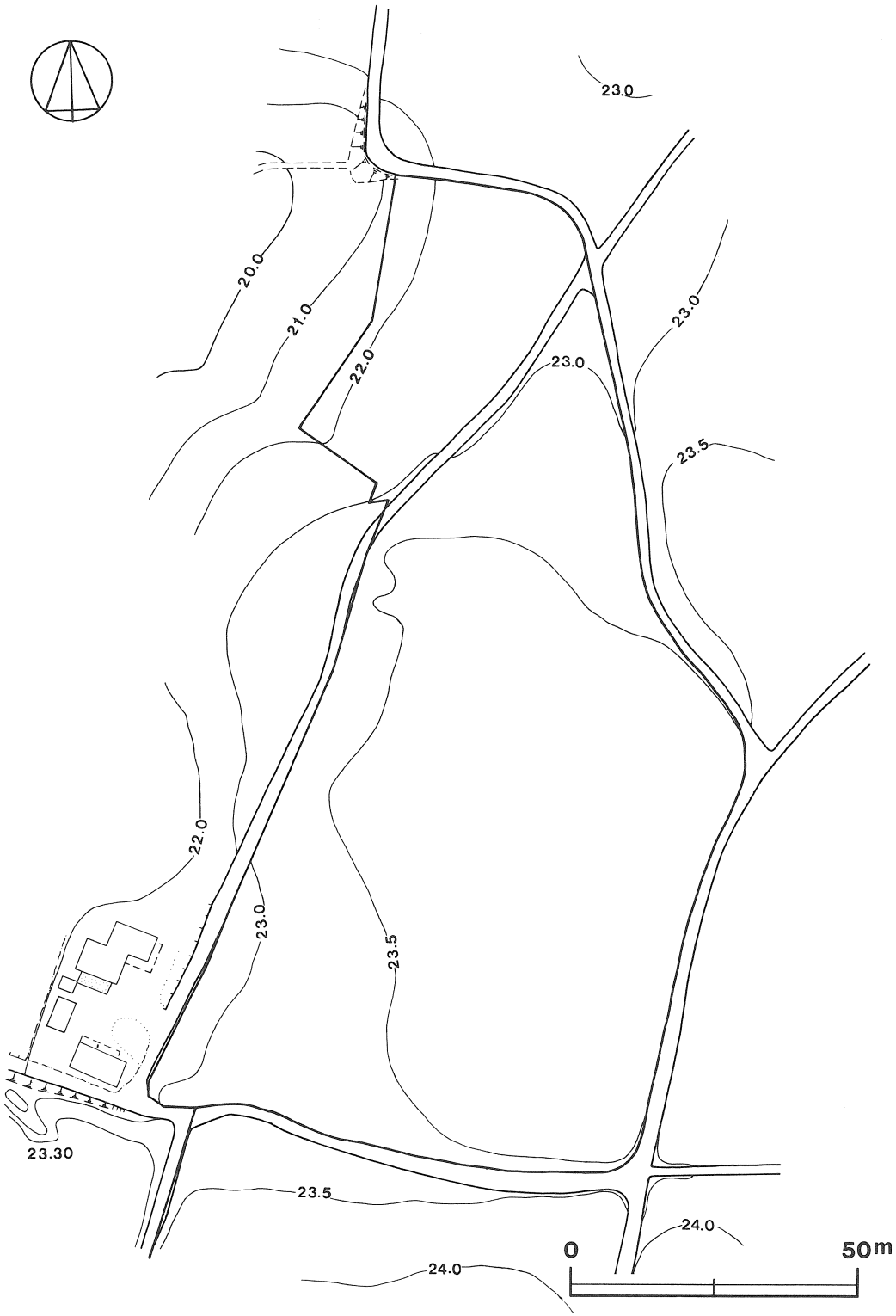
11　月　Ｊ３・Ｊ４区を中心に遺構調査を継続し，竪穴住居跡は縄文時代５軒，古墳時代５軒，土坑25基，溝３条を調査した。５日には第１回の班内研修会を開き，「貝塚の調査方法」について埼玉大学助教授小池裕子氏の御指導を受け，地点貝塚の調査を開始する。

12　月　前月同様Ｊ３区の遺構調査を行い，古墳時代の竪穴住居跡８軒，土坑15基，地下式坑12基，溝４条，地点貝塚２基の調査を終了した。地下式坑は，中世以降のものと考えられるが，調査した結果，遺物はほとんど出土しなかった。25日発掘器材の点検及び整理を行い年末年始の休暇に入る。

1　月　７日には発掘調査の諸準備を行い，Ｋ４区から発掘調査を再開する。Ｋ３区で縄文時代後期と古墳時代前期の竪穴住居跡の重複がみられた。厳寒期に入り霜柱の影響も大きく，調査の進捗にやや支障をきたしはじめてきたが，竪穴住居跡は縄文時代４軒，古墳時代１軒，平安時代１軒，土坑29基，溝１条の調査を終了した。地点貝塚の調査では，獣骨や魚骨も出土した。

2　月　上旬にはＪ３区の中の地点貝塚の密集しているところの調査を行う。５日には第２回の班内研修会を開き，前回に続き，埼玉大学助教授小池裕子氏から「貝層の剝ぎ取り方法，発掘資料の分別作業」などについて御指導をいただいた。一方，事務所においては，貝層サンプルの水洗いと魚骨の選別作業を開始する。下旬までには，竪穴住居跡は縄文時代５軒，古墳時代２軒，土坑26基の調査を終了した。

3　月　例年になく雨の多い月で，調査も予定より遅れがちであったが，竪穴住居跡は縄文時代24軒，弥生時代１軒，古墳時代19軒，平安時代１軒の合せて45軒，土坑140基，溝12条，地点貝塚35基の調査を終了した。16日には航空写真撮影，23日には現地説明会を実施して，昭和59年７月から昭和60年３月までの９ヶ月にわたる南三島遺跡５区の発掘調査を完了した。



第 4 図　南三島遺跡 5 区地形図

第２章　位置と環境

第１節　地理的環境

南三島遺跡５区は，茨城県龍ヶ崎市羽原町南大藤1,510ほか14筆に所在する。

龍ヶ崎市は，茨城県の南端部に位置し，当市の東側は，新利根村，西側は茎崎町，藤代町，取手市に，そして，南側は利根町，河内村に，また，北側は牛久町に接している。

市街地は，国鉄常磐線佐貫駅から関東鉄道龍ヶ崎線の終点である龍ヶ崎駅付近からほぼ東西２㎞にわたり細長く開けており，小貝川の氾濫によって形成された標高5.6ｍ前後の自然堤防の上に成り立っている。その周辺は，鬼怒川や小貝川によって開析された沖積低地で県内有数の穀倉地帯となっている。市の南西側には，北相馬台地の先端部にあたる奥山台地が横たわっており，東側には利根川によって開析された平坦な沖積低地が開けている。また，市の北側には，筑波台地から東に延びる稲敷台地が迫り，この稲敷台地は，常磐線付近から東に延びて浮島に至り，北は霞ヶ浦，南は利根川低地に至るまでの標高20～30ｍほどの比較的平坦な台地である。

南三島遺跡は，この稲敷台地の南端，別所町から南東へ延びた幅１㎞標高22～25ｍの台地縁辺部に所在している。当遺跡の北側は，八代町から貝原塚町にかけて支谷が入り込んでおり，縁辺部は急斜面を呈している。南側も急傾斜をしながら，龍ヶ崎市街地を含む沖積低地へ続いている。また，当遺跡の南東約800ｍには，昭和58年度から調査している屋代Ｂ遺跡が所在している。

南三島遺跡の調査対象面積は100,311㎡で，１区から７区に分割している。今回の調査対象面積は５区の10,526㎡で，調査前の現況は大半が畑である。南側の一部には荒地が含まれる。

第２節　歴史的環境

霞ヶ浦を中心に，利根川水系の小貝川，鬼怒川，渡良瀬川などが流れる常総台地は古くから人々の絶好の居住地であった。県内で発見された縄文時代の貝塚の80％以上はこの地域に所在している。なかでも，この常総台地の１つに含まれる稲敷台地には，明治12年に飯島魁・佐々木忠次郎博士によって，我が国ではモースの大森貝塚調査につぐ第２回目の貝塚調査がなされた陸平（おかだいら）貝塚[1]（美浦村）をはじめとして学史上著名な遺跡が数多く見られる。『茨城県遺跡地図』[2]には，福田（東村），広畑（桜川村），所作（桜川村），椎塚（江戸崎町），上高津（土浦市）などの貝塚が登載されている。なかでも，近年の調査から上高津貝塚は，縄文後期の代表的な貝塚遺構と判明し，当台地は，縄文時代を中心とした遺跡の宝庫ともいえる。

さて，南三島遺跡は，龍ヶ崎市の北部，稲敷台地の南端に位置しており，当遺跡の周辺は，前

述したように沖積低地と洪積台地が複雑に入り込んだ地形を呈しており，原始時代には平地林や入江を利用して狩猟・採集の生活が営まれ，古代になると沖積低地を利用しての水稲耕作が行われ多くの遺跡が残されている。竜ヶ崎ニュータウンの建設に伴って，記録保存すべき遺跡は茨城県教育財団が発掘調査を実施してきた。

先土器時代の遺跡としては，昭和53年度に調査した沖餅遺跡[(3)]〈23〉が所在し，スクレイパー等の多くの石器類を出土した。

縄文時代になると，早・前期には廻り地Ｂ遺跡〈29〉(早・前期)，打越Ｃ遺跡[(4)]（前期）〈26〉からそれぞれ住居跡が検出されている。中期には昭和54年度調査した，赤松遺跡[(5)]〈24〉からフラスコ状土坑を伴う馬蹄形の集落跡が検出されている。さらに，中期から後期にかけての遺跡としては，大規模な南三島遺跡〈８〉が所在する。昭和56・57年度調査の１・２区，昭和57・58年度調査の６・７区そして，今回調査した５区までで，中期から後期にかけての住居跡351軒が検出されている。また，昭和54・55年度調査した廻り地Ａ遺跡[(6)]〈18〉は地点貝塚を伴う環状集落である。

弥生時代の遺跡としては，昭和54年度に調査をし，４軒の竪穴住居跡を検出した外八代遺跡[(7)]〈５〉，と昭和55年度の調査で県南地方で例のない28軒の住居跡を検出した屋代Ａ遺跡[(8)]〈６〉をあげることができる。今後この地方における弥生時代の解明の貴重な資料になると考えられる。

古墳時代の遺跡としては，南三島遺跡２・５区の他に，昭和52・53年度調査を実施し，小型の動物形土製品を検出した松葉遺跡[(9)]〈21〉，昭和57年度調査した平台遺跡[(10)]〈19〉，昭和59年度調査した尾坪台遺跡[(11)]〈４〉も該当し，土師式土器を伴う遺跡が多数検出されている。

奈良・平安時代の遺跡としては，前述の外八代遺跡，屋代Ａ遺跡をあげることができる。

この他，中世の城館跡として馴馬城跡（県指定史料）若柴城跡，長峰城跡，昭和53年度調査をして枡形の掘立柱建築跡15棟を検出した外八代遺跡，さらに昭和58年度から調査し，五輪塔，宝篋印塔や，銅製小型仏像などを出土している屋代城跡などが所在している。

このように，龍ヶ崎市内の北部台地には，原始，古代から各時代にわたり多くの遺跡が点在しており，古代文化の繁栄が推察される。

参考文献

(1) Ｉ.ＩIJIMA, AND C.SASAKI,「OKADAIRA SHELL MOUNDS AT HITACHI」(『TŌKYŌ DAIGAKU. SCIENCE DEPTMENT』MEMOIRV OL. I. PART１) TŌKYŌ DAIGAKU　明治16年

(2) 茨城県教育委員会「茨城県遺跡地図」　茨城県教育委員会　昭和52年

(3) 竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書３「沖餅遺跡」茨城県教育財団　昭和55年

(4)　竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書５「前清水遺跡・大羽谷津遺跡・打越Ａ遺跡・打越Ｃ遺跡・廻り地Ｂ遺跡」茨城県教育財団　昭和56年

(5)　竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書４「赤松遺跡」茨城県教育財団　昭和55年

(6)　竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書７「廻り地Ａ遺跡」茨城県教育財団　昭和57年

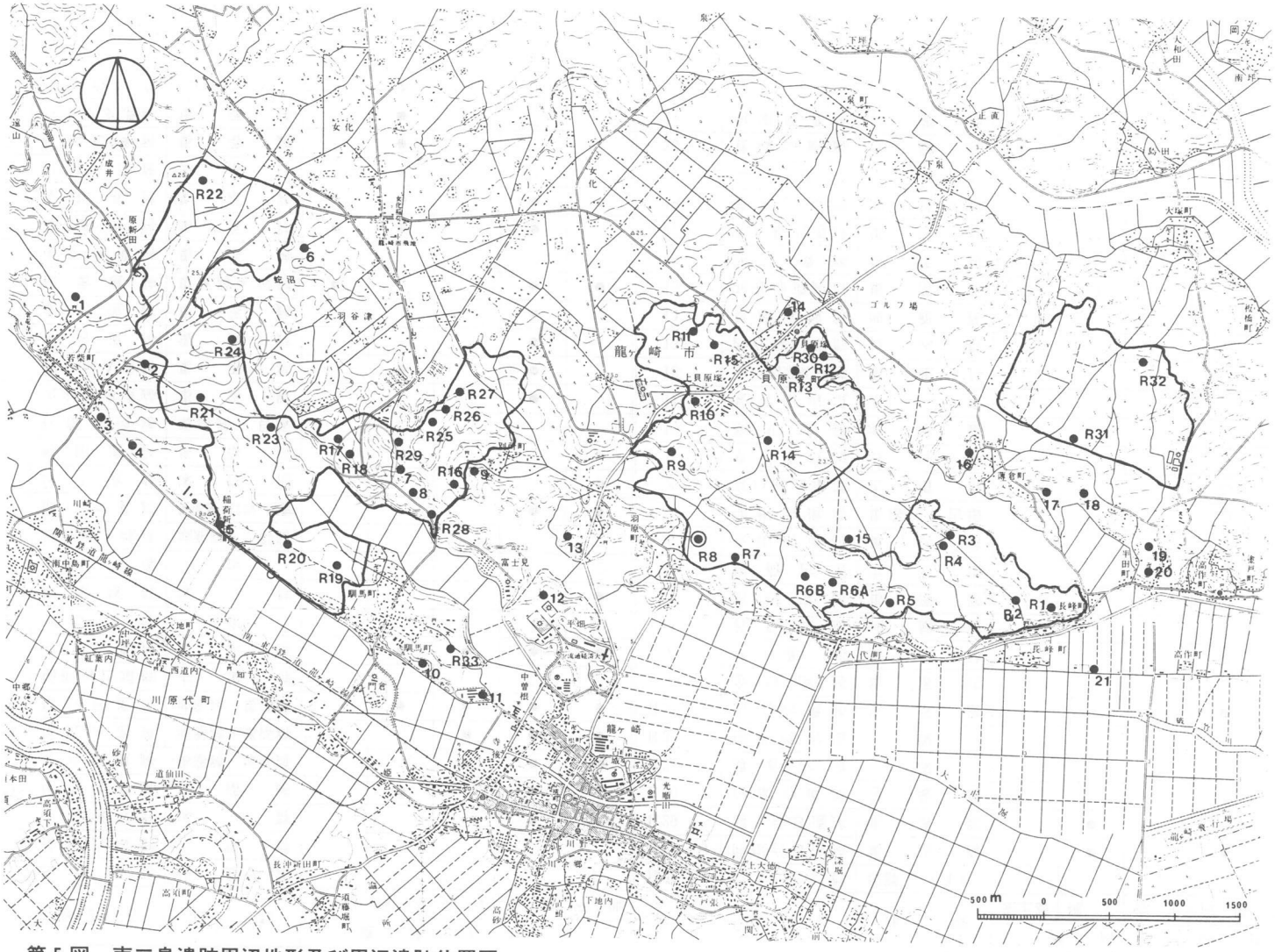
(7)　竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書２「外八代遺跡」茨城県教育財団　昭和55年

(8)　竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書６「成沢遺跡・屋代Ａ遺跡」茨城県教育財団　昭和57年

(9)　竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書１「松葉遺跡」茨城県教育財団　昭和54年

(10)　竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書８「平台遺跡」茨城県教育財団　昭和58年

(11)　尾坪台遺跡の調査は，昭和59年度，当教育財団によって実施され，住居跡やＴピットを含む土坑の調査が行われた。時期は古墳時代前期を中心としたものである。



第５図　南三島遺跡周辺地形及び周辺遺跡位置図

表1　南三島遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	種類	遺跡の時代				
			先土器	縄文	弥生	古墳	その他
R1	長峰城跡	城館跡					○
R2	長峰古墳群	古墳群				○	
R3	十三塚塚群	塚群				●	●
R4	尾坪台遺跡	集落跡		●		●	
R5	外八代遺跡	集落跡・城館跡			●	●	●
R6－A	屋代A遺跡	城館跡・集落跡			●	●	●
R6－B	屋代B遺跡	城館跡・集落跡		●	●	●	●
R7	稲荷塚古墳群	古墳群				○	
R8	南三島遺跡	集落跡		●	●	●	●
R9	ダンゴ塚	塚					○
R10	町田塚群	塚群					●
R11	かがみ塚	塚					○
R12	高井城下城跡	城館跡・寺院跡					○
R13	前清水遺跡	集落跡・貝塚・塚群				●	●
R14	塚下遺跡	塚群他					●
R15	町田遺跡	集落跡		●			●
R16	行部内遺跡	集落跡・貝塚		○			
R17	大羽谷津遺跡	集落跡				●	
R18	廻り地A遺跡	集落跡		●		●	
R19	平台遺跡	集落跡				●	
R20	成沢遺跡	集落跡				●	
R21	松葉遺跡	集落跡・塚群	●			●	●
R22	庚申塚遺跡	集落跡		○		○	
R23	沖餅遺跡	集落跡	●	●		●	
R24	赤松遺跡	集落跡	●	●		●	●
R25	打越A遺跡	集落跡		●			
R26	打越C遺跡	集落跡		●			
R27	ウツブタ遺跡	集落跡		●			
R28	仲根台塚群	塚群(1～2号)		●			●

番号	遺跡名	種類	遺跡の時代				
			先土器	縄文	弥生	古墳	その他
R28－A	仲根台塚群	塚群(3・4号)					●
R28－B	仲根台B遺跡	集落跡		●		●	●
R29	廻り地B遺跡	集落跡		●			
R30	白蔵寺遺跡	包蔵地					
R31	薄倉古墳	塚					●
R32	稲荷峰古墳	塚					●
R33	山王台遺跡	集落跡				●	●
1	金塚遺跡	集落跡	○	○		○	
2	林遺跡	集落跡				○	
3	若柴城跡	城館跡					○
4	宿畑遺跡	集落跡				○	
5	稲荷古墳	古墳				○	
6	永山前遺跡	集落跡		○			
7	仲根台遺跡	集落跡・古墳		○		○	
8	奈戸岡古墳群	古墳群				○	
9	堂ノ下貝塚	貝塚群		○			
10	馴馬城跡	城館跡					○
11	愛宕山古墳	古墳				○	
12	奈戸岡祭祀遺跡	祭祀跡				○	
13	西花輪貝塚群	貝塚群		○			
14	貝原塚城跡	城館跡					○
15	向井原遺跡群	集落跡	○	○		○	
16	西平遺跡	集落跡		○			
17	馬込稲荷遺跡	集落跡		○			
18	要害山館跡	城館跡					○
19	半田遺跡	集落跡				○	
20	登城山館跡	城館跡					○
21	向須賀遺跡	包蔵地		○	○		

●印は発掘調査を実施した遺跡

第３章　遺構と遺物

第１節　遺跡の概要と遺構・遺物の記載方法

１　遺跡の概要

南三島遺跡５区は，北側に６・７区，東側に２区，南側に３区が隣接し，縄文時代中期から後期，そして古墳時代前期を中心とした集落跡である。

当遺跡からは調査の結果，竪穴住居跡45軒，土坑117基，地下式坑９基，地点貝塚35基，埋甕14基，炉穴１基，屋外炉５基，溝12条，井戸状遺構１基が検出された。

縄文時代の遺構としては，中期から後期にかけての竪穴住居跡24軒と，その大部分がほぼ同時期に比定されると思われる土坑や地点貝塚35基，埋甕14基，早期後葉に比定される炉穴１基，屋外炉５基を検出した。住居跡は，当遺跡の中央部から南側に集中しており，一部は重複が著しく，個々のプランが不明確なものや，新旧関係の不明なものもみられる。土坑は，円形や楕円形を呈するものが多く検出されている。地点貝塚は，その大半が当遺跡の南側寄りの住居跡や土坑内覆土から検出されている。埋甕は当遺跡のやや南側寄りの，住居跡内に５基，土坑内に９基が検出された。炉穴は当遺跡の中央部から検出され，炉穴・屋外炉各１基の覆土や周囲からは，早期後葉の土器片が少量出土している。

弥生時代の遺構としては，当遺跡中央部からやや北側に竪穴住居跡１軒が検出され，住居跡の南コーナー部寄りに半完形の弥生式土器が出土した。

古墳時代の遺構としては，前期に比定される竪穴住居跡18軒を検出した。中でも当遺跡東部から検出された第５号住居跡からは，54個の土玉と，良好な甑と甕のセットが完形で出土している。

平安時代の遺構としては，竪穴住居跡１軒が古墳時代前期の住居跡と重複して検出された。出土した土器の中には，内黒処理が施された高台付坏などがある。

その他の遺構としては，溝が12条，地下式坑９基，井戸状遺構１基が検出された。溝の中で，特に第５号溝は，２区の第３号溝の延長であり，南東から北西方向に走っている。地下式坑は，その大部分が当遺跡の南西側の支谷に向かう傾斜地に検出されている。なお，溝や地下式坑及び井戸状遺構に伴う遺物は出土していない。これらの遺構については出土遺物も少なく時期が不明確である。

２　遺構・遺物の記載方法

本書における遺構・遺物の記載方法は，下記の要領で統一した。

(1) 使用記号

本書で使用した記号は，次のとおりである。

名　称	記号	名　称	記号	名　称	記号	名　称	記号
住居跡	SI	埋　甕	M	井戸状遺構	SE	拓本土器	TP
土　坑	SK	炉・カマド	F	地下式坑	SY	石　器	Q
地点貝塚	SM	柱穴・貯蔵穴	P	土　器	P	貝製品	S
炉穴・屋外炉	FP	溝	SD	土製品	DP		

(2) 遺構の表示

本書で使用した遺構・遺物等の表示方法は，次のとおりである。

= 炉跡　= 焼土　= カマド

= 貝層　● = 土器　★ = 石器

(3) 土層の分類記号

当遺跡から検出した遺構の土層色調は，「新版標準土色帖」(小山正忠・竹原秀雄編著・日本色研事業株式会社発行）を使用し，その後，整理の段階で，土層を次のように分類記号化し，図中にその記号をもって記載した。

番号	土色名	色相	明度／彩度
1	褐　色	Hue 7.5YR	4/3・4/4・4/6
2	暗褐色	Hue 7.5YR	3/3・3/4
3	黒褐色	Hue 7.5YR	3/1・3/2・3/2
4	極暗褐色	Hue 7.5 YR	2/3
5	明褐色	Hue 7.5YR	5/6・5/8
6	にぶい褐色	Hue 7.5YR	5/3・5/4
7	にぶい褐色	Hue 7.5YR	7/4
8	灰褐色	Hue 7.5YR	4/2
9	浅黄橙色	Hue 7.5YR	8/3・8/4
10	灰白色	Hue 7.5YR	8/2
11	褐　色	Hue 10 YR	4/4
12	明褐色	Hue 10 YR	3/4
13	赤褐色	Hue 2.5YR	4/6・4/8
14	にぶい赤褐色	Hue 2.5YR	3/3・3/4・3/6
15	にぶい赤褐色	Hue 2.5YR	4/4
16	明赤褐色	Hue 2.5YR	5/8
17	極暗赤褐色	Hue 2.5YR	2/2・2/3・2/4
18	赤灰色	Hue 2.5YR	4/1・5/1
19	赤褐色	Hue 5 YR	4/6・4/8
20	にぶい赤褐色	Hue 5 YR	4/3・4/4
21	暗赤褐色	Hue 5 YR	3/2・3/4

含有物

- a　ローム粒子を含む。
- b　ローム小ブロックを含む。
- c　ローム中ブロックを含む。
- d　ローム大ブロックを含む。
- e　焼土粒子を含む。
- f　焼土小ブロックを含む。
- g　炭化粒子を含む。
- h　炭化物を含む。
- i　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を含む。
- j　焼土粒子・焼土ブロックを含む。
- k　焼土粒子・炭化粒子を含む。
- l　粘土を含む。
- m　灰を含む。
- n　攪乱

※　「小ブロック」は直径５mm以下のものとした。「中ブロック」は直径５～20mmのものとした。「大ブロック」は直径20mm以上のものとした。含有物の量については，少量検出されたものを基準とし，やや多くみられるものについては「，」，さらに，多くみられるものは「〃」を付加して表示した。

(4)　貝層の分類記号

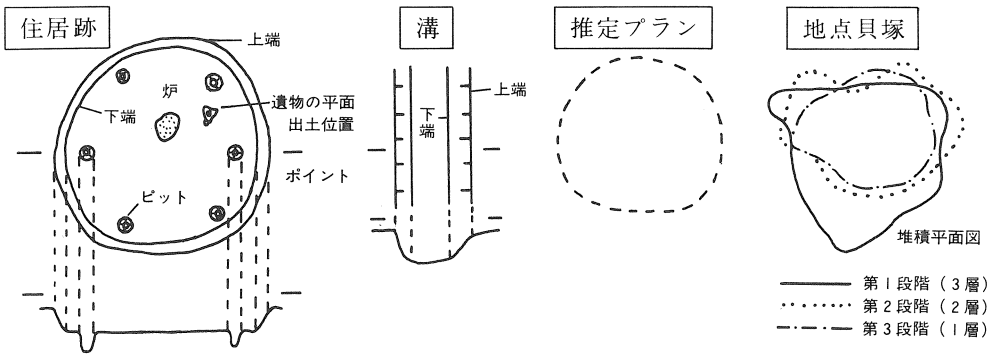
当遺跡から検出された貝層を次のように分類記号化し，図中にその記号をもって記載した。

番号	貝層名	含有物
22	純貝層	o　ハマグリを主体としている。
23	混土貝層	p　シオフキを主体としている。
24	混貝土層	q　サルボウを主体としている。
25	破砕貝層	r　ヤマトシジミを主体としている。
		s　ヒメシラトリガイを主体としている。

※　貝層に含まれる貝の量については，主体に含まれる貝を基準とし，少量含まれる貝については「，」を付加して表示した。

(5)　遺物実測図の作成方法と掲載方法

本書における遺構実測図の作成方法は，次のとおりである。



①　竪穴住居跡・土坑・溝・井戸状遺構は，縮尺1/20の原図をトレースして版組し，それをさらに1/3に縮小して掲載することを基準とした。

②　竪穴住居跡からの出土遺物は，住居跡の平面図及び断面図に出土位置をドットで落とした。また，接合されたものはすべて線で結び，実測図や拓影図として掲載したものについては，固有の番号を付した。

③　地点貝塚や埋甕は，縮尺1/10の原図をトレースして版組し，それをさらに1/3・1/4に縮小して掲載した。

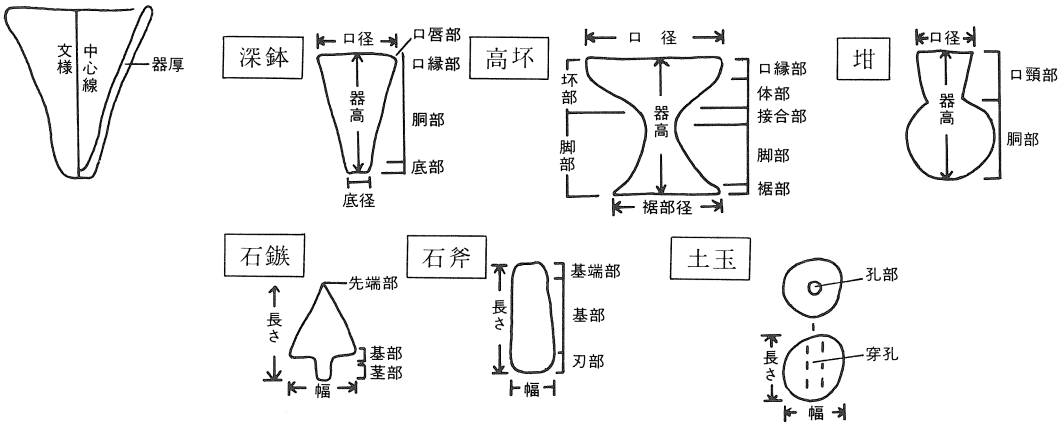
④　炉穴・カマドは縮尺1/10の原図をトレースして版組し，それをさらに1/3に縮小して掲載した。

⑤　レベルはｍ単位で記載した。

⑥　遺構実測図の掲載については，できるだけ遺構番号順とした。

(6)　遺物実測図の作成方法と掲載方法

各部位の名称と法量表現のための名称



①　土器の実測方法は４分割法を用い，中心線を挟んで左側½に外面，右側½に内面及び断面を記録した。

②　土器拓影図は，断面を右側に掲載した。

③　土器の色調は，土層と同じ土色帖を用いて判別した。

④　土器片錘の実測図は抉（えぐ）りを上下にして掲載した。

⑤　土製品は，三角図法を基本とし，正面の左測面を軸に反転したものを断面として右側に，上側面を軸に反転したものを平面として下側に実測した。また，遺物によっては，反転軸と各図の置き方を逆転させて実測したものもある。

⑥　隆線は ≡≡ で表し，微隆線は ≡-≡ で表した。

⑦　沈線は ⊃ で表し，縄文は ▨ で表した。

⑧　敲きの範囲は，←□ □→ (=═══=) で表し，磨りの範囲は，←○○→ (:::::::) で表した。

⑨　遺物の版組は，¼・⅓に縮尺したものを掲載の基準としたが，大きさによりそれ以外の縮尺を使用して掲載した図版もある。

(7)　表の見方について

それぞれの表の見方は，次のとおりである。

ア　住居跡一覧表

住居跡番号	位置	長径方向（長軸方向）（主軸方向）	平面形	規模		床面	ピット数	炉・カマド	覆土	出土遺物	時期	備考
				長径×短径(m)	壁高(cm)							

① 住居跡番号は発掘調査の過程で付した番号をそのまま使用し，途中で住居跡と認められず調査を中止したものは欠番とした。

② 位置は，小調査区（グリッド）名で表した。他の調査区にまたがる場合は，遺構の占める面積の割合が大きい小調査区名をもって表示した。

③ 方向は，長径ないし長軸が，また，カマドを付設している住居跡については主軸が，座標北からみてどの方向にどれだけ傾いているかを角度で表示した。（N－15°－E，N－15°－W），（　）を付したものは，推定を表し，形状不明の場合は空欄とした。

④ 平面形は，現存している形状の上端面で判断し，円形・楕円形の場合は下記の分類基準を設け表示した。（　）を付したものは推定を表し，形状不明なものは空欄とした。

・ 円形（短径：長径＝１：1.1未満のもの）。楕円形（短径：長径＝１：1.1以上のもの）。また，形の整わないものは，不整○○形と表示した。

⑤ 規模の欄の長径・短径は，平面形の上端面の計測値であり，壁高は，残存壁高の計測値である。なお，平面形が円形・楕円形の場合は，長径・短径とし，隅丸方形・隅丸長方形の場合には，長軸，短軸とした。また，カマドのある住居跡についてはカマドのある方位を主軸とした。

⑥ 床面は，土坑一覧表の「底面」の項に準じて，「平坦」，「凹凸」，「ゆるい起伏」に分類表記した。

⑦ ピット数は，その住居跡に伴うものと考えられるピット数を記した。

⑧ 炉・カマドは，炉の種類を表し，炉やカマドをもたないものは空欄とした。

⑨ 覆土は，堆積の状態が自然堆積の場合は「自然」，人為的堆積の場合は「人為」，不明の場合は「不明」と記した。

⑩ 出土遺物は，出土した土器片の出土点数，それに代表的な遺物名を記した。

⑪ 時期は，出土遺物から時期判定の可能な範囲で土器形式をもって記した。なお，磨耗等により不明のものは空欄とした。

⑫ 備考は，重複関係等について記した。

イ 土坑一覧表

土坑番号	位　置	長径方向	平面形	規　模		壁　面	底　面	覆　土	形　態	出土遺物	備　考	図版番号
				長径×短径(m)	深さ(cm)							

① 土坑番号は，整理の段階で地点貝塚，地下式坑，炉穴，屋外炉，埋甕，井戸状遺構に分類整理できたものについては欠番とした。

② 壁面は，底面からの立ち上がり状態によって次のとおり分類表記した。

およそ80°～90°の傾き―垂直 およそ60°未満の傾き―ゆるやかに立ち上がる。

およそ60°～80°未満の傾き――外傾 開口部がくびれている袋状

③　底面は，次のとおりに分類して表した。

平坦 皿状 凹凸 ゆるい起状

④　土坑の形態分類の基準については，次のとおり表した。

・　平面形

Ⅰ　円形　Ⅱ　楕円形　Ⅲ　隅丸方形，方形　Ⅳ　隅丸長方形，長方形　Ⅴ　不定形

・断面形

A　円筒状　B　皿状　C　袋状

・規模（長径・長軸の長さ）

1　1ｍ未満　2　1ｍ以上2ｍ未満　3　2ｍ以上

・　深さは，底面から確認面までの垂直線の長さを実測した。（ピットは除く。）

a　50cm未満　b　50cm以上100cm未満　c　100cm以上。

以上のものを組み合わせて，形態を「IA2b」のように表示した。

（例　IA2b……平面形が円形で，断面形は円筒状を呈し，規模は，1ｍ以上2ｍ未満で，深さが，50cm以上100cm未満のもの。）

⑤　図版番号は，実測図中の番号である。

※　上記以外の項目については，住居跡一覧表の記載方法に準じた。

ウ　地点貝塚一覧表

地点貝塚番号	位置	長径方向	平面形	規模		出土遺物	時期	備考
				長径×短径(m)	層厚(cm)			

①　規模の欄の層厚は，貝層の堆積厚を表した。

②　出土遺物は，出土した土器・貝・魚骨・獣骨・植物遺体の代表的なものについて記した。

※　上記以外の項目については，住居跡，土坑一覧表に準じた。

エ　埋甕遺構一覧表

埋甕番号	位置	長径方向	平面形	傾斜角	掘り方規模		覆土	出土遺物	備考
					長径×短径(m)	深さ(cm)			

①　傾斜角は，埋設されていた土器の傾きを示し，水平からの角度で表した。

②　掘り方規模は，埋甕施設の掘り込み規模を記した。

③　出土遺物は，土器の形式を分類可能な範囲で記し，不明の場合は空欄とした。

※　上記以外の項目については，住居跡，土坑一覧表の記載方法に準じた。

オ　炉穴・屋外炉一覧表

番　　号	位　　置	長径方向	平　面　形	規　　模		炉跡の規模		出土遺物	備　　考
				長径×短径(m)	深さ(cm)	長径×短径(m)	深さ(cm)		

①　規模は，炉穴全体の規模を示し，この中で最長部を長径とし，長径に直交する最大幅の部分を短径とした。深さは，掘り込み面から，足場までの最も深い部分の計測値を記した。

②　炉跡の規模は，炉床の最長部を長径とし，長径に直交する最大幅の部分を短径とした。深さは，足場から炉床までの最も深い部分の計測値を記した。

③　土坑の掘り込みが認められない屋外炉については，規模の欄は空欄とした。

※　上記以外の項目については，住居跡，土坑一覧表の記載方法に準じた。

カ　出土土器観察表

図版番号	器　　種	法量(cm)	器形の特徴及び文様（手法の特徴）	胎土・焼成・色調	備　　考

①　図版番号は，実測図中の番号である。

②　器種は，縄文土器の場合には深鉢形土器というように，……形土器と表した。

③　法量は，Ａ－口径，Ｂ－器高，Ｃ－底径，Ｄ－台部径を示し，単位はcmである。なお，Ａ・Ｃの（　）は推定値であり，Ｂの（　）は残存高である。

④　器形の特徴及び文様は，縄文土器の場合最初に器形を述べ，次に文様について述べた。土師器の場合はこの欄を器形の特徴と手法の特徴と二つの欄に分けた。

⑤　胎土・焼成・色調は，上段に胎土，二段目に焼成の貝合，下段に色調を表した。

⑥　備考は，土器の完存率や土器の固有番号(Ｐ番号)等を表示した。

キ　土器片錘・土製品・石器・石製品・貝製品一覧表

土器片錘一覧表

図版番号	出土地点	長（cm）	幅（cm）	厚（cm）	重さ(ｇ)	台帳番号	備　　考

土製品一覧表

図版番号	器　　種	出土地点	大きさ（cm）			重量(ｇ)	備　　考
			長さ	幅	厚さ		

石器・石製品一覧表

図版番号	名　　称	台帳番号	出土地点	大きさ（cm）			重量(g)	石　　質	備考
				長さ	幅	厚さ			

貝製品一覧表

図版番号	出土地点	層　　位	大きさ（cm）		重量(g)	貝　　種	備　　考
			高	長			

① 図版番号は，実測図中の番号である。

② 台帳番号は，遺物の個別番号である。

③ 出土地点は，出土した遺構あるいは小調査区名を記した。

④ 大きさの欄の長さ，幅，厚さは，それぞれ最大長，最大幅，最大厚の計測値である。また，大きさ，重量の欄の（　）内数値は，欠損土器片錘，土製品，石器の残存値である。

⑤ 石質の欄は，その石器を作る母岩の岩石名を表示した。

⑥ 貝製品の大きさの欄の高は，殻高，長は，殻長の計測値である。

⑦ 備考の欄は，遺物の形態や特徴等を表示した。

⑧ 貝製品の一覧表は，器種によって，別項目を設けたものもある。

※ 上記以外の項目については，出土土器観察表の記載方法に準じた。

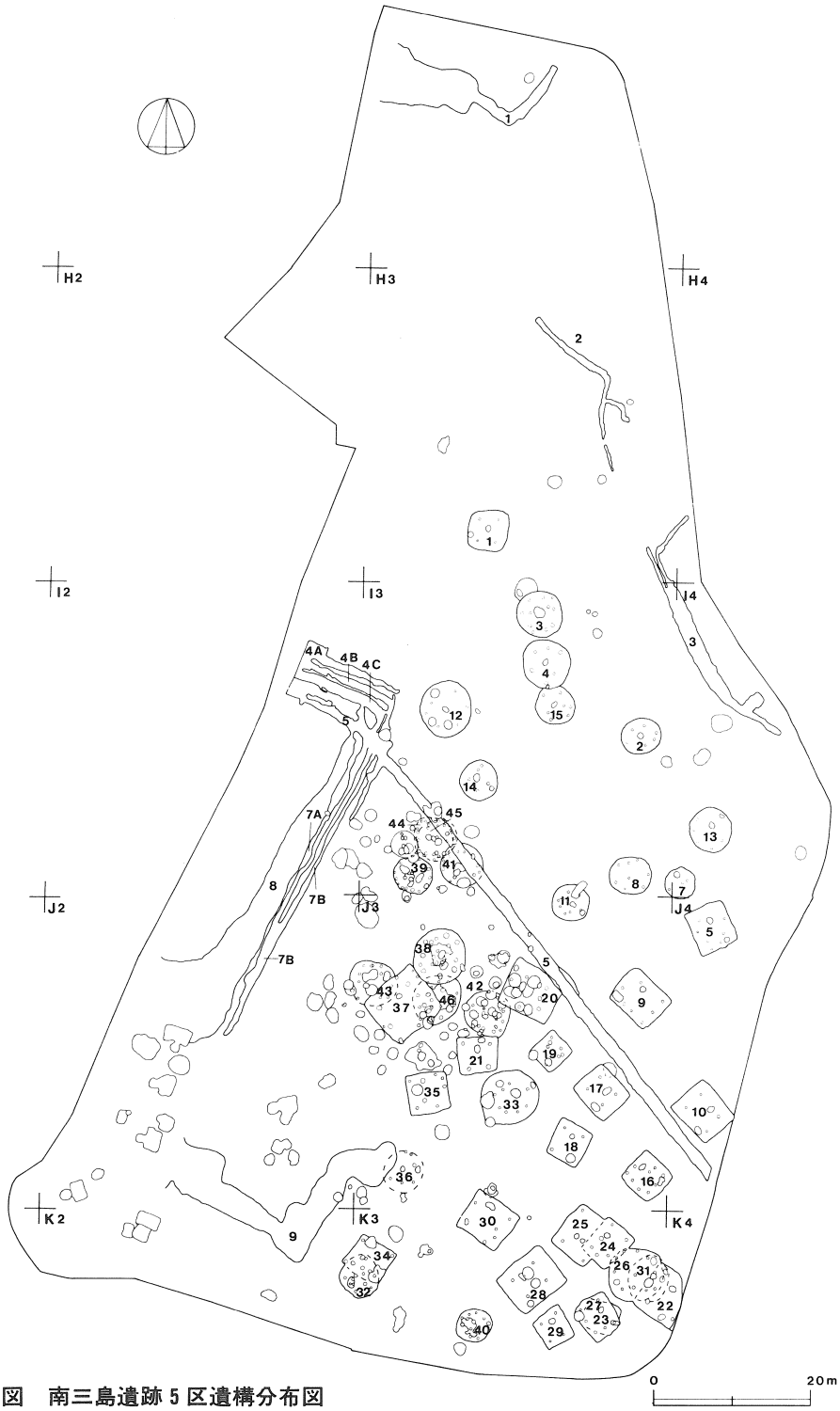
ク 貝類遺体集計表

	1	2	3	4	5						
種類 / 貝塚名 地点	ハマグリ	ナミマガシワ	ヤマトシジミ	アサリ	オキシジミ						計

① 種類は，サンプリングした貝名を表示した。

② 数は，サンプリングした貝の個体数を記した。

第２節　竪穴住居跡



第６図　南三島遺跡５区遺構分布図

1　縄文時代

第2号住居跡（第7図）

本跡は，調査区の南東部I3e_9区を中心に確認された住居跡で，第15号住居跡の南東側6.9mに位置している。

平面形は，長径5.09m，短径4.45mの楕円形を呈しており，長径方向は，N－76°－Eを指している。

壁は，ソフトロームにロームブロックが混じり，硬く締まっている。南西壁は外傾して立ち上がり，他の壁はほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は，22～30cmである。床面は，東側，南側のピットの内側や炉の周囲は，ロームがよく踏み固められて硬く凹凸がみられる。北側及び西側は全体的に平坦でロームが締まっている。炉は，中央部に位置し，長径80cm，短径68cmの楕円形を呈し，床面を25cmほど擂鉢（すりばち）状に掘りくぼめた地床炉である。炉内には，焼土粒子，炭化粒子を少量含んだ褐色土が堆積している。炉床は，ロームが熱を受け赤化して硬いレンガ状を呈し凸凹していることから，長期間使用されていたことがうかがえる。ピットは，6か所検出されているが，配列や規模からいずれも主柱穴と考えられ，長径21～28cm，短径19～27cm，深さ32～42cmの規模を有している。柱穴の配列や床面の状況からP_2とP_3，あるいは，P_2とP_6の間が出入口と考えられる。

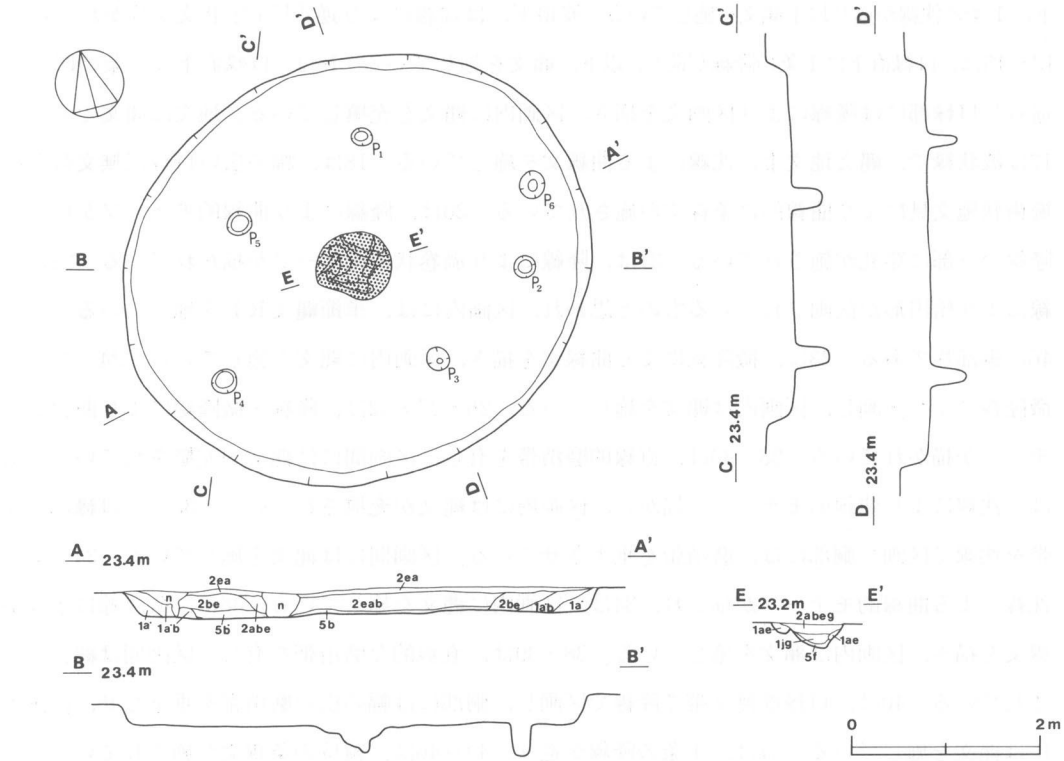
覆土は，暗褐色土を主体にレンズ状に自然堆積している。覆土中には，ローム粒子や焼土粒子を極少量含み締まりを帯びている。壁際には，ローム粒子を含んだ褐色土が締まりを帯びて堆積している。

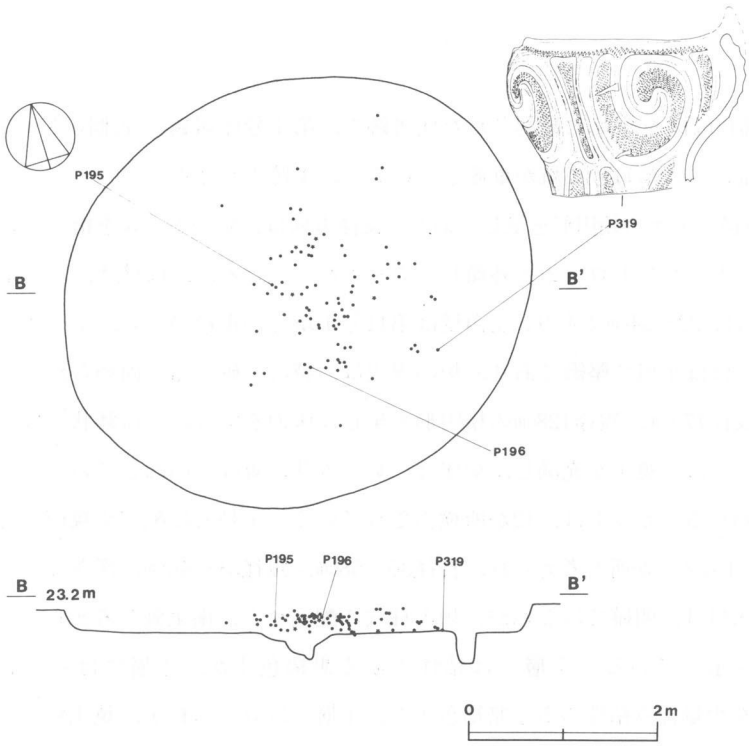
遺物は，縄文土器片1,168点，石器2点が出土している。これらの多くは，住居跡の南東側の覆土中層から出土している。本跡は，出土遺物の大半が縄文時代中期の加曽利E期のものであるので，同時期に比定されるものと思われる。

第2号住居跡出土土器

住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
第8図1	深鉢形土器	A 18.5 B(14.8)	平縁を呈する口縁部で，1か所の小突起を口縁部に有し，口縁部は強く内彎し，胴部でしまる。胴下半部は切断されたように打ちかかれている。口縁直下に凹線を巡らし，その下を廻る隆線上には単節縄文LRを施文している。器面全体には，両側になぞりが加えられた微隆線により渦巻状のモチーフと縦長の区画文を4単位描き，区画内・外に単節縄文LRを施文している。内面は，横位のナデ。	砂粒 普通 黄橙色	60% P319
47	深鉢形土器	B(3.5) C 7.5	底部片で，底部がやや突出している。内・外面共ナデが加えられている。	砂粒・長石・石英 普通 灰褐色	10% P196
48	深鉢形土器	B(4.6) C 6.4	底部片で，外面は縦位のナデが，内面はナデが加えられている。	砂粒・長石・石英 普通 橙色	10% P195





第７図　第２号住居跡実測図・遺物出土位置図

第８・９図は，第２号住居跡から出土した縄文土器及び土器片の実測図・拓影図である。2・3・19は，口縁部無文帯を残し，以下に縄文を施している。2は，内彎する口縁部から胴部にかけての大きな破片である。4～22は口縁部片である。4～11は，口縁部無文帯を1条の微隆線，沈線，凹線で区画し以下に縄文を施している。12は，波状縁を呈し，口縁直

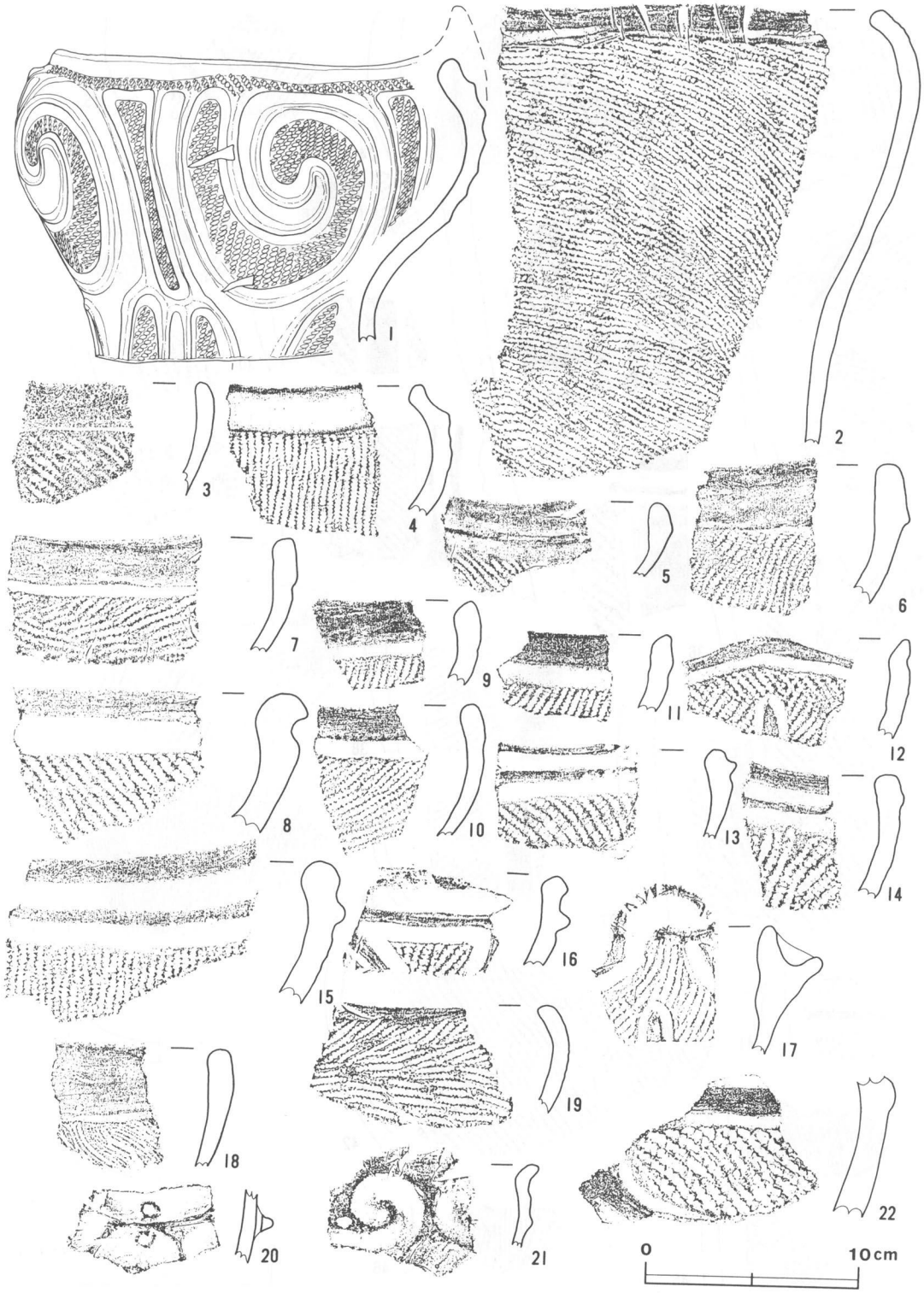
下に１条の沈線が巡り以下縄文を施している。波頂下には沈線により逆「U」字状文が描かれている。13～15は，口縁直下に１条の隆線が巡り，以下に縄文を施している。16は，口縁直下に１条の凹線を巡らし口縁部には隆線により区画文を描き，区画内に縄文を充塡（じゅうてん）している。地文は縄文である。17は波状縁で，縄文地文上に沈線による曲線文を施している。18は，幅の広い口縁部無文帯下に櫛歯状施文具により曲線的に条線文が施されている。20は，隆線により曲線的モチーフが描かれ，隆線の一部に穿孔が施されている。21は，隆線により渦巻状のモチーフが描かれている。22は隆線により楕円形が区画されているものと思われ，区画内には，単節縄文ＲＬを施している。23～46は胴部片である。23は，微隆線による曲線文を描き，区画内に縄文を施している。24・25は，微隆線により区画し，区画内は縄文を施している。26・27・32は，隆線・微隆線により曲線的モチーフが描かれている。28～30は，直線的磨消帯を有し，区画間には縄文が充塡されている。31は，沈線により曲線的モチーフが描かれ，区画内には縄文が充塡されている。33は，口縁部文様帯を沈線で区画し胴部には，磨消帯を垂下させている。区画間には縄文を施している。34・35は，沈線による曲線的モチーフが描かれ，34は，区画内に縄文を施している。36は，微隆線により曲線文を描き，区画内は縄文を施している。38・39は，直線的な磨消帯を有し，区画間は縄文が施されている。40は，口縁部無文帯で隆線で区画し，胴部には幅の広い磨消帯を垂下させ，区画間には縄文を施している。41は，１条の隆線が巡り，43～46は，縦位の条線文が施されている。

第３号住居跡（第10図）

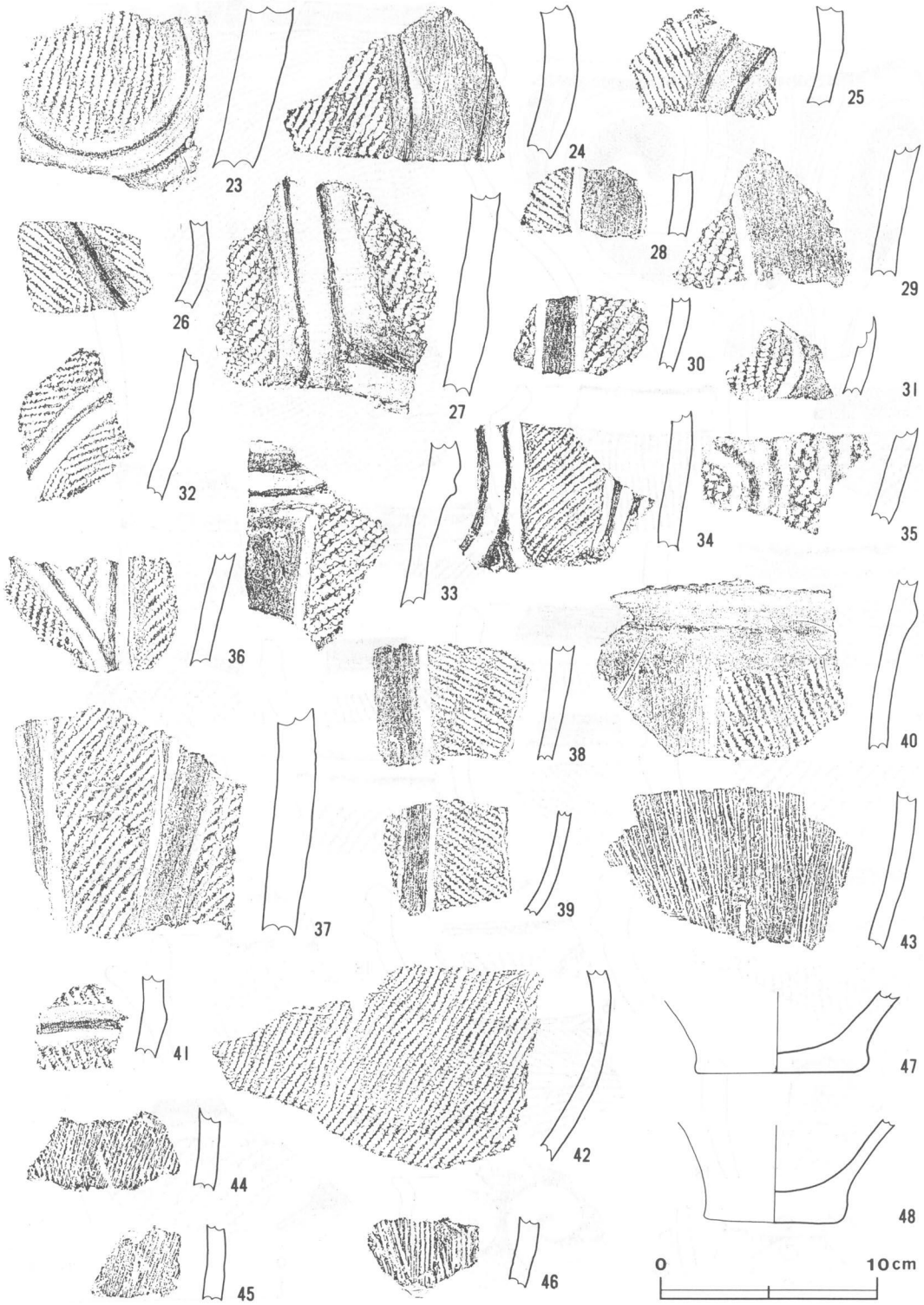
本跡は，調査区の中央部I3b_6区を中心に確認された住居跡で，第４号住居跡の北側0.5mに位置している。本跡の北西部には，第11号土坑が重複しているが，本跡よりは古い。

平面形は，長径7.90m，短径5.67mの楕円形を呈しており，長径方向は，N－31°－Wを指している。壁は，ロームブロック混じりのソフトロームで外傾して立ち上がっているが，南壁は，ほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は，22～34cmであり，北西壁は第11号土坑との重複のため，７～10cmしか残っていない。床面は，ほぼ平坦で堅緻（けんち）であり，炉の周辺は，特に，硬く踏み固められている。炉は中央部に位置し，長径170cm，短径128cmの楕円形を呈し，床面を32cmほど擂鉢状に掘りくぼめた地床炉である。炉内には，焼土が充満し，炉床は，レンガ状に焼けて凸凹しているので，長期間使用されたものと思われる。ピットは，12か所検出されている。主柱穴は配列や規模からP_1・P_4・P_6・P_7・P_9・P_{10}・P_{12}の７か所と考えられ，長径30～58cm，短径31～46cm，深さ33～42cmの規模を有している。出入口は，明確ではないが，炉と柱穴の配列から，南東側が考えられる。

覆土は，自然堆積の様相を示している。上層には粘性のある黒褐色土が，中層にはローム粒子，焼土粒子，炭化粒子を少量含み粘性のある暗褐色土が，下層にはローム粒子，焼土粒子，炭化粒子を少量含み締まりを帯びた褐色土が堆積している。

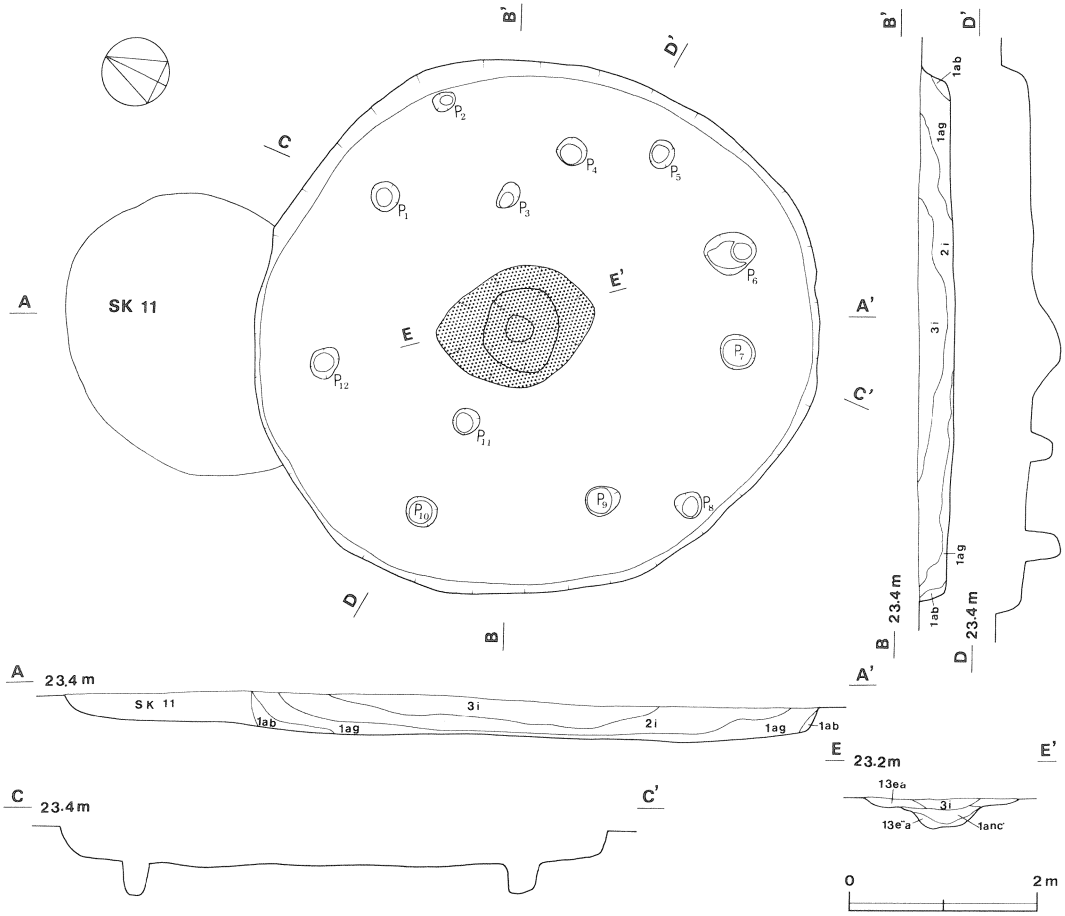


第8図　第2号住居跡出土遺物実測図・拓影図　(1)



第 9 図　第 2 号住居跡出土遺物実測図・拓影図 (2)

遺物は，住居跡の中央部から北西部に集中しており，そのほとんどが，覆土から出土しており縄文土器片2,539点，石器１点が出土している。本跡は，出土遺物の大半が，縄文時代中期の加曽利Ｅ期のものであるので，同時期に比定されるものと思われる。

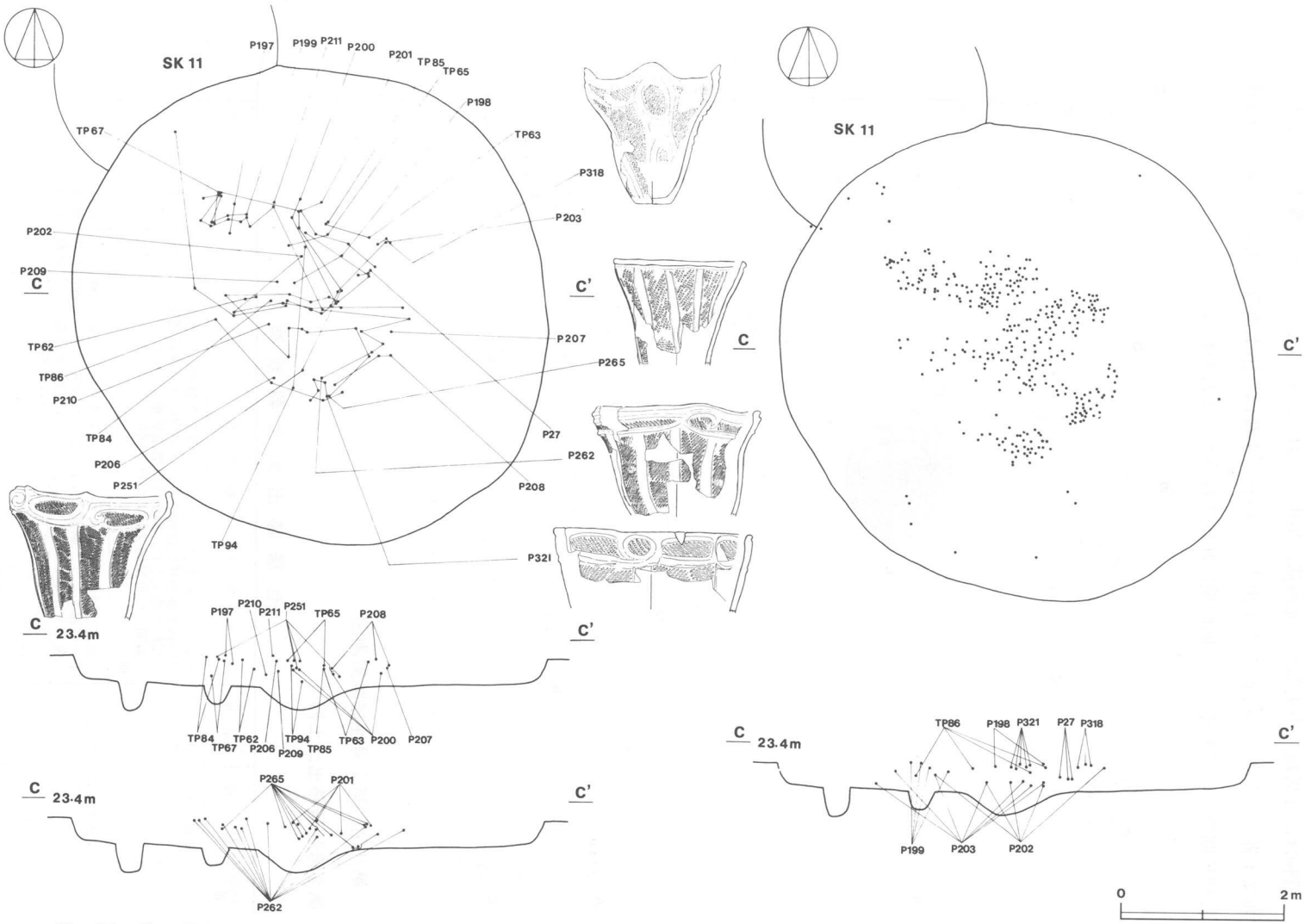


第10図　第３号住居跡実測図

第３号住居跡出土土器

住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
第12図 1	深鉢形土器	A(40.0) B(28.0)	キャリパー形を呈している。口縁部文様帯は，隆線により楕円形状や渦巻状に区画され，区画内には，単節縄文ＲＬが横位回転で施文され，胴部には磨消懸垂文を垂下させている。区画間には単節縄文ＲＬが縦位回転で施文されている。内面横ナデ。	砂粒 普通 橙色	30% P262
2	深鉢形土器	A 31.2 B(25.8)	口縁部が胴部中位から外反して立ち上がる。平縁の口縁部に1条の凹線が巡り，胴部には11単位のやや幅の狭い直線的な磨消懸垂文が垂下している。区画間には粗い単節縄文ＲＬが縦位，斜位回転で施文されている。内面は剥離が著しく整形方向は不明。	砂粒・長石 普通 褐色	70% P265
3	深鉢形土器	A(34.2) B(14.0)	キャリパー形を呈している。口縁部文様帯は，隆線による楕円文と長方形区画文の組み合せで構成され，口縁部下端には，	砂粒 普通	10% P321



第11図　第３号住居跡出土位置図・遺物接合関係図

			１条の沈線が巡っている。区画内は単節縄文ＬＲと複節縄文ＬＲＬが重なって充填されている。胴部には磨消懸垂文が垂下し，磨消帯には１条の沈線を施している。区画間の胴部上半に単節縄文ＬＲを，胴下半部に複節縄文ＬＲＬが縦位回転で施文されている。内面は横ナデ。	褐色	
4	深鉢形土器	A 23.4 B 24.5 C 6.2	波状を呈する口縁部は内彎して立ち上がり，胴中央部でゆるやかにくびれる。各波頂部下には，縦長の楕円区画文が上下２単位に隆線で描がかれ，単節縄文ＲＬが縦位回転で施文されている。波底部には，隆線による渦巻状と半楕円形の区画文が構成されている。区画内及び胴部には単節縄文ＲＬが縦位回転で施文されている。内面横ナデ。	砂粒 普通 にぶい褐色	70% P 318
5	深鉢形土器	A(37.6) B(32.0)	平縁の口縁部には，６単位の突起を有するものと思われる。口縁部文様帯は，隆線による楕円文と渦巻文とを組み合せ，楕円文の区画内には，単節縄文ＲＬが横位に施文されている。胴部には磨消帯が施され，区画間に単節縄文ＲＬが縦位に施文されている。内面横ナデ。	砂粒 普通 暗褐色	40% P 251
第13図 6	深鉢形土器	A(31.6) B(23.7)	キャリパー形を呈している。口縁直下に凹線を巡らし，胴部にはやや幅の狭い磨消懸垂文が垂下している。区画間には縄文が施文されている。内面上半部横ナデ，下半部縦ナデ。口縁部に部分的にスス布着。	不良 にぶい褐色	20% P 201
7	深鉢形土器	A(30.4) B(11.8)	平縁を呈する口縁部から胴部にかけての破片である。口縁部無文帯下から胴部にかけて，沈線により楕円形状の区画文を描き，区画内には縄文を施し，区画間を磨り消している。内面口縁部横ナデ，胴部縦ナデ。	砂粒・長石・雲母 普通 にぶい褐色	10% P 199
8	深鉢形土器	A(27.2) B(20.1)	胴部から口縁部にかけての破片である。口縁部は１条の沈線で無文帯と文様帯を区画し，文様帯には沈線により楕円形状文が区画され，区画内には，縄文が施文れている。胴部には磨消帯が垂下し，その間には斜位のナデが施されている。内面ナデ。	砂粒・長石・雲母 スコリア・礫 普通 にぶい褐色	20% P 200
9	深鉢形土器	B(7.0) C 7.0	底部片である。外面は直線的磨消帯の末端と，区画間には縄文が施されている。内面ナデ。	砂粒・長石・石英・雲母 普通 にぶい橙色	10% P 206
10	深鉢形土器	B(6.8) C 7.4	底部片である。外面には磨消帯と区画間には縄文が施文されている。内面ナデ。	砂粒・長石 普通 にぶい赤褐色	10% P 197
11	深鉢形土器	B(8.5) C 6.6	底部片である。外面は縄文が施されている。内面ナデ。	砂粒・長石・石英・礫 普通 明赤褐色	10% P 208
12	深鉢形土器	B(3.2) C(7.2)	底部片である。外面に沈線が施されている末端がみえる。内面ナデ。	砂粒・長石・礫・雲母 普通 にぶい褐色	10% P 204
13	深鉢形土器	B(7.9) C 5.6	底部片である。外面は両側にナゾリを加えた微隆線が縦位に施され，区画間には縄文が施されている。内面はナデ。	砂粒 普通 にぶい褐色	10% P 207
14	深鉢形土器	B(5.1) C 7.0	底部片である。外面は直線的磨消帯と区画間には縄文が施されている。	砂粒・長石・雲母 礫 普通 明赤褐色	10% P 210
15	深鉢形土器	B(31.2) C 7.0	胴部上位がややくびれ，胴部中位でやや張りを有している。口縁部は欠損している。胴部には磨消懸垂文が施され，区画間には縄文が施されている。内面縦ナデ。	砂粒・長石・雲母 普通 明赤褐色	40% P 202

第14・15・16図は，第３号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。16～18は，山形の波頂部を有する口縁部片で，隆線により楕円形や円形に区画している。楕円区画内には，縄文を施している。16は，胴部に直線的磨消帯が垂下している。19～51は口縁部片である。19～21は，隆線で渦巻きと楕円形状の区画がなされ，区画内には縄文が施されている。22～25は平縁で，隆線による楕円区画内に縄文を施している。26は，山形の波頂部を有すると思われ，口縁部を沈線で

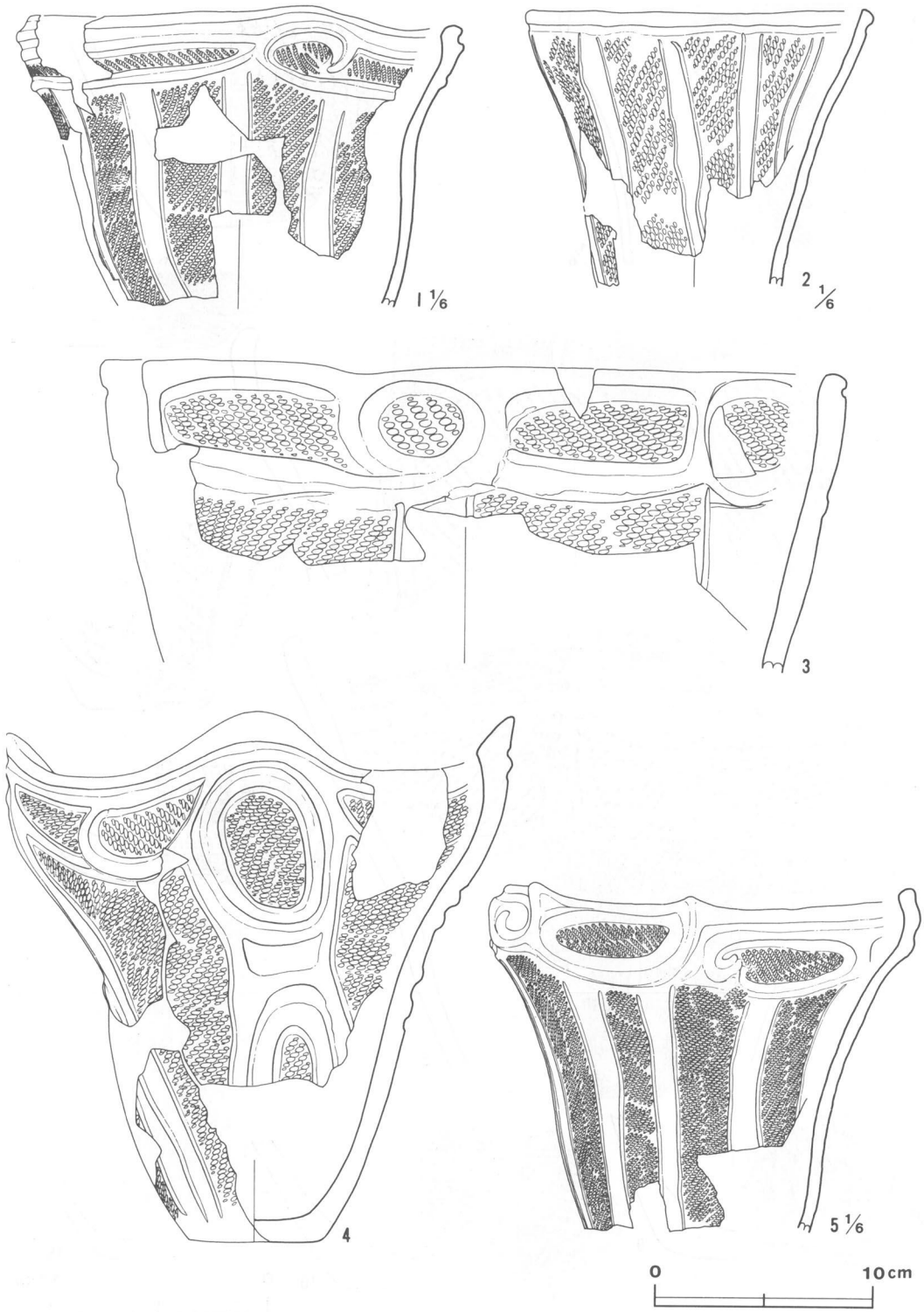
円形に区画し，区画内に縄文を施している。27・28は，平縁で沈線による楕円区画内に縄文を施している。29は，波状縁を呈し，隆線による長楕円形区画内に縄文を施している。30は，口縁部無文帯を１条の凹線と連続した刺突文で区画し，以下に縄文を施している。31は，幅の狭い口縁部無文帯を有し，以下は縄文を施している。32は，頸部から「く」の字状を呈してほぼ直線的に立ち上がる幅の広い無文帯を有し，以下は縄文が施されている。33・34は，口縁部無文帯に隆線を巡らし，以下は縄文が施されている。35～38は，隆線，沈線により楕円区画をし，区画内には縄文を施している。39は，口縁部無文帯下に１条の沈線を巡らし，口縁部の中央部には，円形の刺突文が連続して施されている。40は，口縁部無文帯下に２条の沈線を巡らし，沈線内に縄文が施されている。41は，口縁直下に１条の凹線が巡り，以下は縄文が施されている。また，縄文地文上には凹線により勾玉状の形が描かれている。42・43は，沈線で逆「U」字状の区画がなされている。42は，区画間に，43は，区画内に縄文が施されている。44は，口縁部無文帯に円形刺突文を巡らし，以下に縄文を施している。45は，平縁で沈線により楕円形を区画していると思われ，区画内には縄文を施している。46は，口縁部に２条の沈線を巡らし，沈線内にキザミ目を施している。以下は縄文を施している。47は，細沈線が斜位に施されている。48・49は，口縁部無文帯に凹線と沈線が１条巡り，以下縄文が施されている。50・51は，口縁部下端に１条の沈線を巡らし，以下に条線文を縦位に施文している。52～64は胴部片である。52～56は，いずれも直線的磨消帯を有し，区画間には縄文が施されている。57は，沈線文が施され，区画内に縄文が施されている。58・60は，隆線により，59は，沈線により曲線文が描かれ，区画内には縄文が施されている。61～64は，条線文が施されている。

第４号住居跡（第17図）

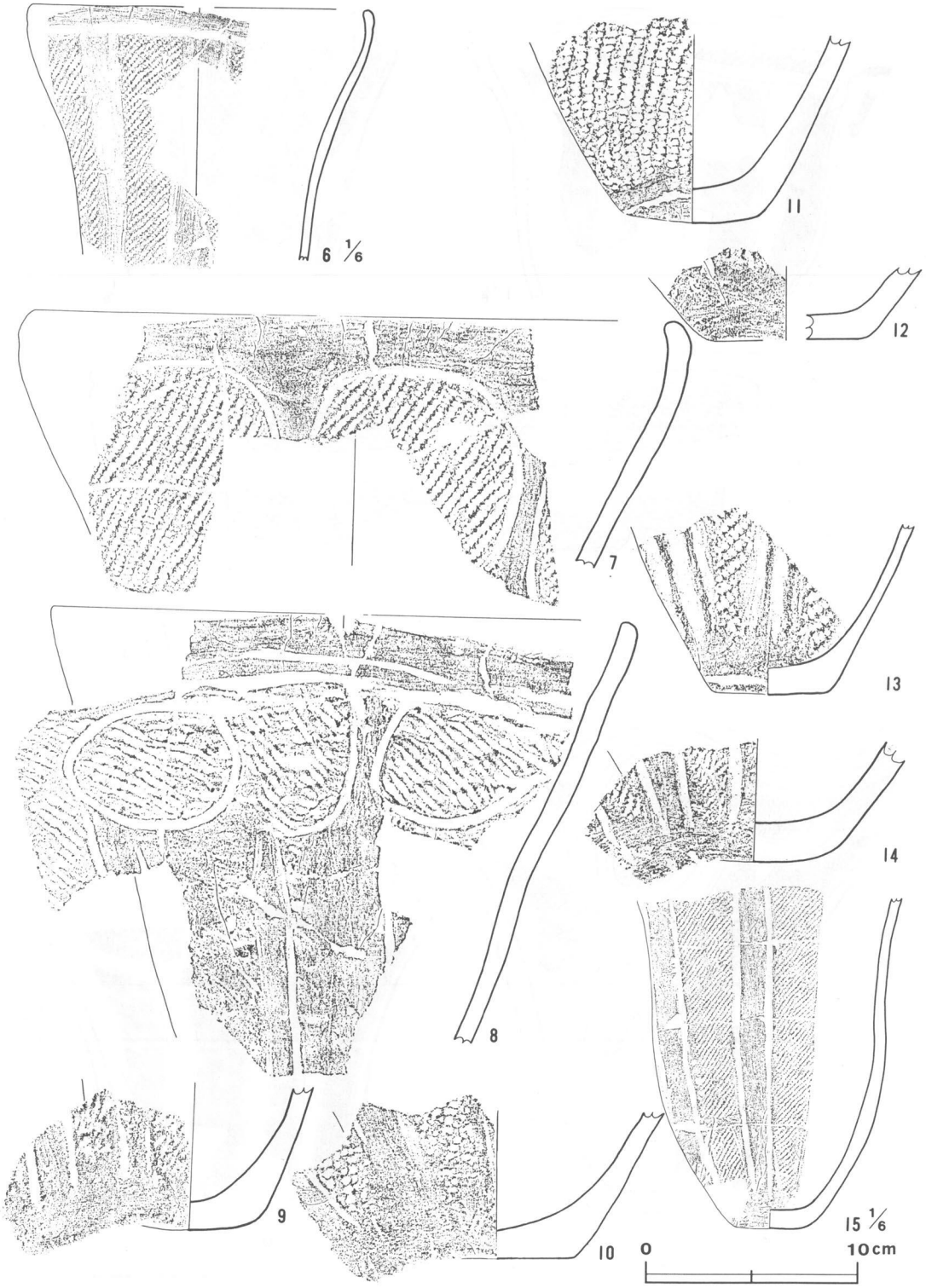
本跡は，調査区の中央部I3c_6区を中心に確認された住居跡で，第３号住跡跡の南側0.4ｍに位置している。本跡の南側は，第15号住居跡と一部重複しているが，本跡は，第15号住居跡の床面上に構築されていることから，本跡の方が新しいものである。

平面形は，長径6.72ｍ，短径6.04ｍの楕円形を呈しており，長径方向は，N－38°－Wを指している。壁は，締まりのあるロームで，ほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は，14～18cmである。床面は，全体的に平坦で，特に，炉の周辺は硬く踏み固められている。炉は，ほぼ中央部に位置し，長径85cm，短径60cmの不整楕円形を呈し，床面を７cmほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉内には，焼土粒子を極少量含む褐色土が堆積している。炉床は，ロームが焼けて硬く赤化している。ピットは，７か所検出されている。P_1～P_3，P_5～P_7の６か所が，配列や規模から主柱穴と思われ，長径30～54cm，短径30～45cm，深さ41～52cmの規模を有している。

覆土は，上層にローム粒子を極少量含む褐色土が，下層に多量のローム粒子を含む明褐色土



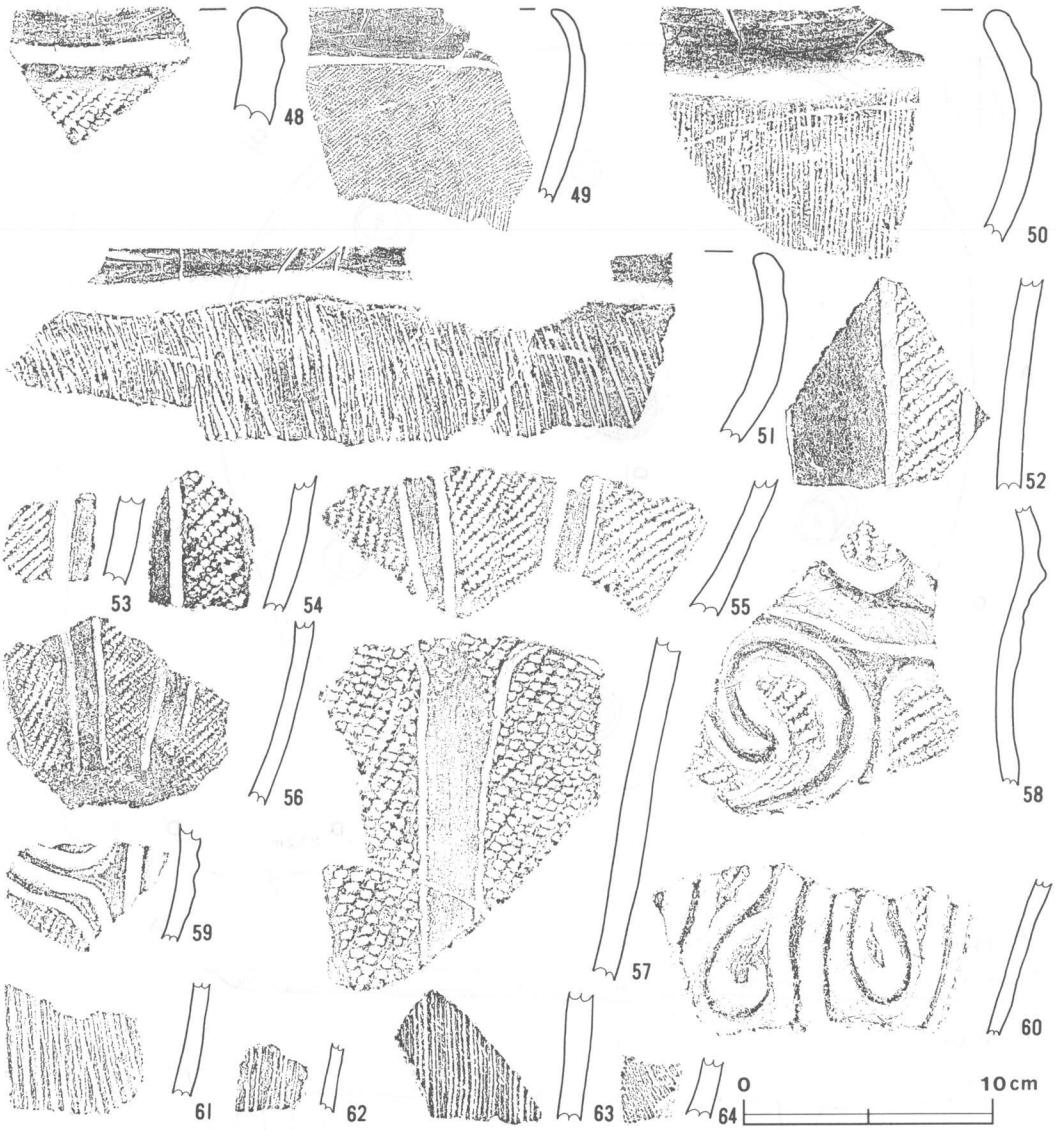
第12図　第３号住居跡出土遺物実測図　(1)



第13図　第３号住居跡出土遺物実測図　(2)

第14図　第３号住居跡出土遺物実測図（3）

第15図　第３号住居跡出土遺物拓影図　(4)



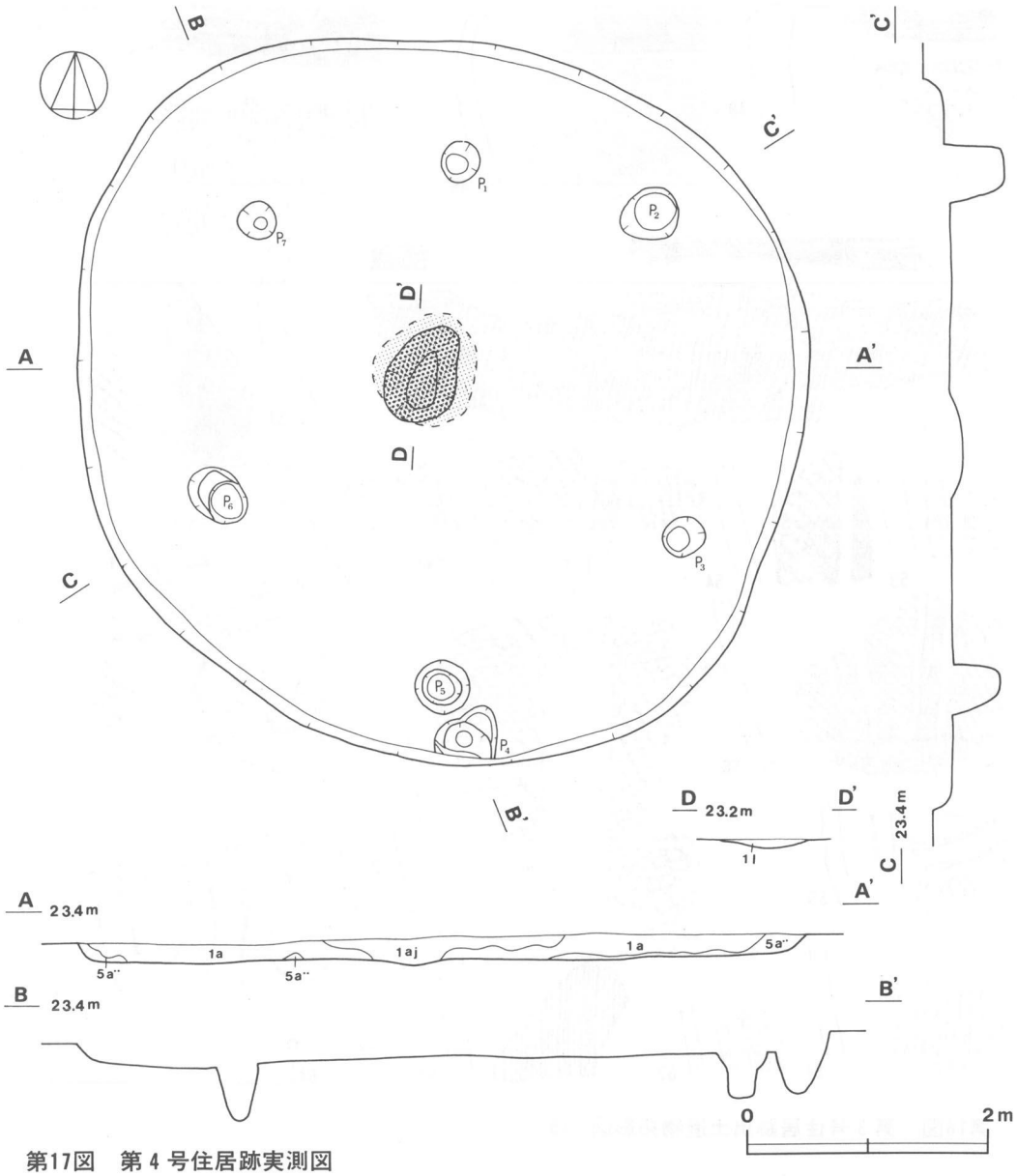
第16図　第３号住居跡出土遺物拓影図　(5)

が自然堆積している。

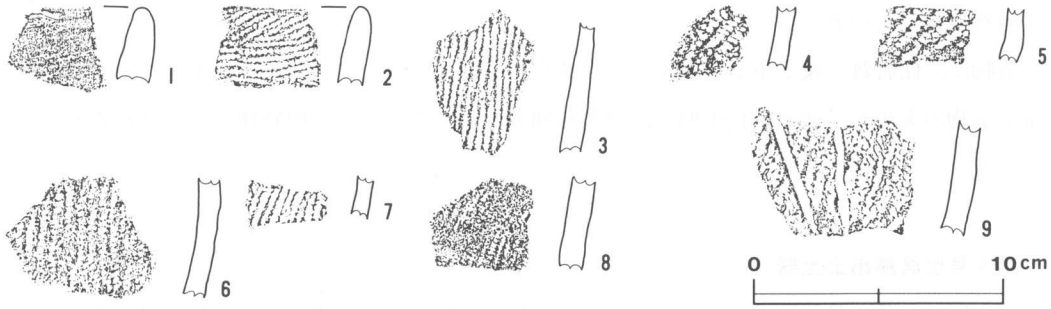
遺物は，住居跡の覆土中より縄文土器片28点，石器１点が出土しているにすぎない。本跡は，出土遺物の大半が，縄文時代中期の加曽利Ｅ期のものであるので，同時期に比定されるものと思われる。

第４号住居跡出土土器

第18図は，第４号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。１・２は口縁部片で，１は，



第17図　第４号住居跡実測図



第18図　第４号住居跡出土遺物拓影図

無文であり，２は，縄文が施されている。３～９は胴部片で，３～８は，縄文だけが施され，９は，縄文地文上に沈線が垂下している。

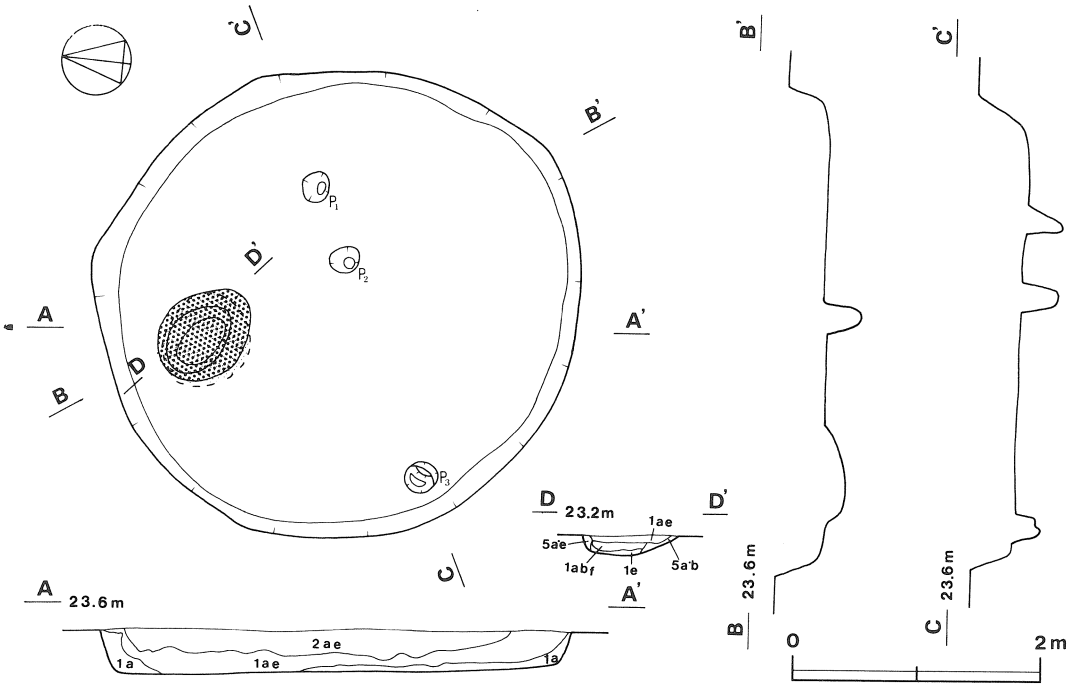
第７号住居跡（第19図）

本跡は，調査区の南東部I4j₁区を中心に確認された住居跡で，第８号住居跡の東側1.8ｍに位置している。

平面形は，長径3.92ｍ，短径3.80ｍのほぼ円形を呈している。壁は，締まりのあるロームで，遺存状態が良く，南東壁はほぼ垂直に，他の壁は外傾して立ち上がっている。壁高は，32～38cmである。床面は，全体的に平坦で，ロームブロックを含み堅緻である。炉は，中央から北西寄りに位置し，長径83cm，短径67cmの楕円形を呈し，床面を16cmほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉内には，焼土粒子，炭化粒子が少量含まれているが，炉床は比較的軟らかく，長期間使用したものとは考えられない。ピットは，３か所検出され，しかも，ほぼ一直線上に配列されており，いずれも主柱穴と考えられる。主柱穴の規模は，長径25～27cm，短径21～24cm，深さ24～30cmである。

本跡の覆土は，上層にローム粒子を少量含む暗褐色土が，下層にローム粒子，焼土粒子を少量含む褐色土が自然堆積の状態で堆積している。

遺物は，住居跡西側の覆土から縄文土器片527点が出土している。本跡からの出土遺物の大半は，縄文時代中期の加曽利Ｅ期のものなので，本跡は，ほぼ同時期のものと思われる。



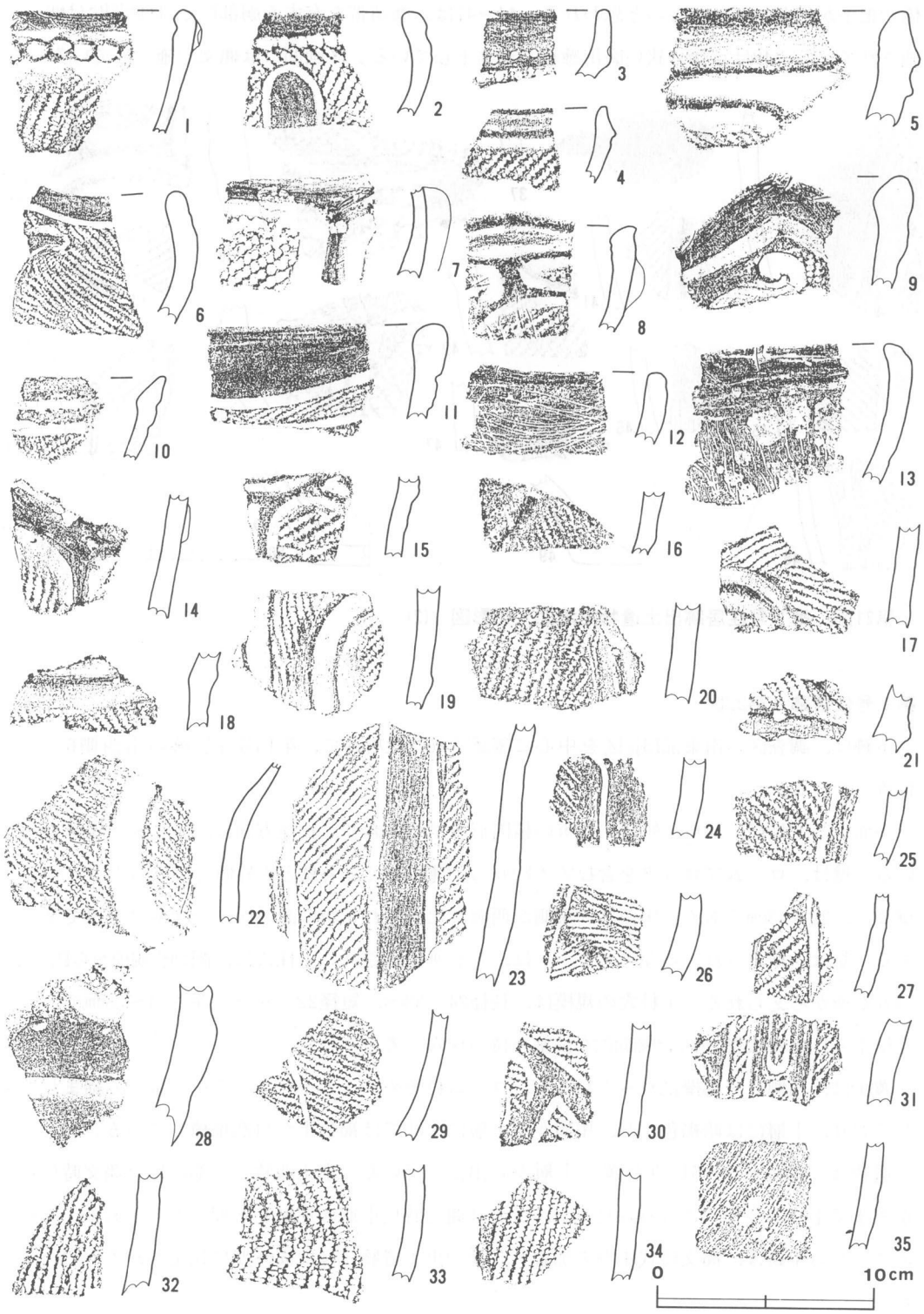
第19図　第７号住居跡実測図

第７号住居跡出土土器

住居跡出土土器観察表

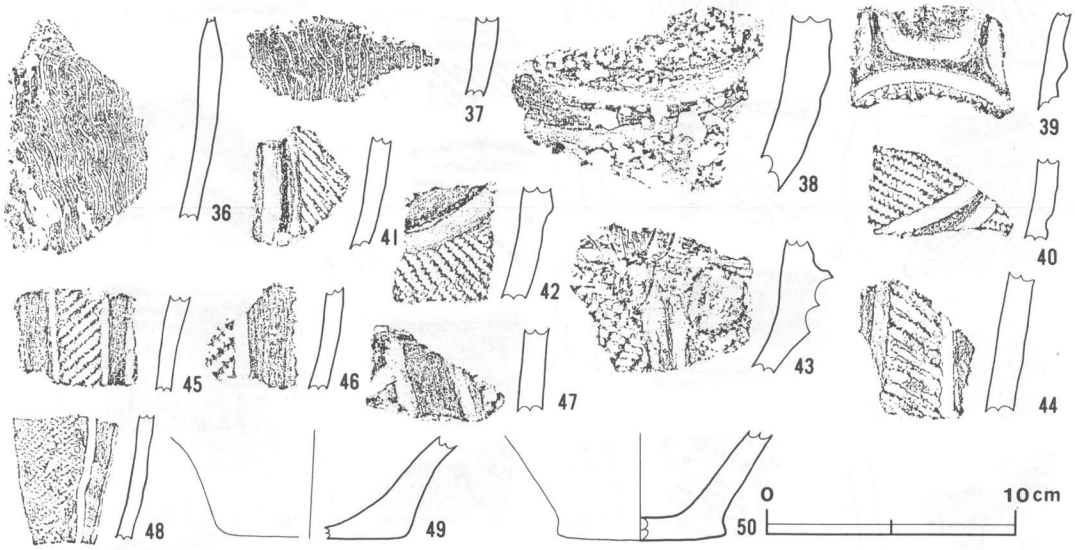
図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備　考
第21図 49	深鉢形土器	B(4.4) C(7.2)	底部片である。内・外面共丁寧なナデが加えられている。	砂粒・長石・雲母・スコリア 普通 明褐灰色	10% P212
50	深鉢形土器	B(4.2) C(6.7)	底部片である。底部はやや突出している。	砂粒・長石・石英・雲母 普通 にぶい褐色	10% P213

第20・21図は，第７号住居跡から出土した縄文土器及び土器片の実測図・拓影図である。１～５は平縁の口縁部片である。１は，口縁部に大きめの刺突を施した隆線を巡らし，以下は縄文を施している。２は，口縁に沿って１条の沈線を巡らし，沈線上には連続して刺突文を施している。以下には縄文地文上に沈線により曲線的モチーフを描き，モチーフ内を磨り消している。３は，無文の口縁部下端に並行して刺突文を巡らしている。４・５は，口縁部無文帯を１条の微隆線で区画し，４は，以下に縄文を施文している。５は，以下に微隆線により曲線的モチーフを描いていると思われる。モチーフ内には縄文が施文されている。６～８は口縁部片である。６は，波状縁を呈し，幅の狭い口縁部無文帯の下端を１条の沈線が巡り，以下には縄文地文上に沈線による曲線文が描かれている。７は，隆線により口縁部文様帯を区画し，区画内には縄文を施文している。８は，隆線により楕円形状を区画するものと思われ，区画内を磨り消し，以下には縄文を施文している。９は，山形の突起を有する口縁部片で，口縁直下に太い沈線を１条巡らし，突起下には，太い沈線により渦巻状文を描いている。10～13は平縁の口縁部片で，10は，口縁部無文帯に２条の沈線を巡らしている。11は，幅の広い口縁部無文帯下に２条の沈線を巡らし，区画内には縄文を充塡している。12・13は，櫛歯状施文具により条線文が描かれている。14～48は胴部片である。14・15は，隆線により，16～22は，微隆線により曲線的モチーフが描かれ，区画の内外には縄文が施文されている。23・24は，磨消懸垂文が垂下し，区画間は縄文が施文されている。25～27は，縄文地文上に沈線が垂下している。28は，凹線で曲線的モチーフが描かれている。29は，縄文地文上に沈線が施されている。30は，沈線により幾何学的文様が描かれ，区画内は磨り消されている。31は，磨消帯の中に沈線で曲線的モチーフが描かれ，モチーフ内には縄文が施され，区画間にも縄文が施されている。32・33は，縄文が施されている。34は，縄文の地文に１条の凹線が施されている。35は，条線文が斜位に，36・37は，条線文が波状に施されている。38は，２条の太い沈線により曲線文が描かれ，区画外には縄文が施されている。また，内・外面とも摩滅気味である。39は，隆線により曲線的モチーフが描かれている。40は，２条の沈線が施されている。41・42は，微隆線による区画がなされており，区画外には縄文が施されている。43は，磨消帯を有する胴部片で，



第20図　第７号住居跡出土遺物拓影図　(1)

橋状把手が付されていたものと思われる。44～47は，磨消帯を有する胴部片で，区画間には縄文が施されている。48は，幅の狭い磨消懸垂文が垂下している。区画間には縄文が施されている。



第21図　第７号住居跡出土遺物実測図・拓影図　(2)

第８号住居跡（第22図）

本跡は，調査区の南東部I3j_9区を中心に確認された住居跡で，第13号住居跡の南西側6.3ｍに位置している。

平面形は，長径5.36ｍ，短径4.74ｍの楕円形を呈しており，長径方向は，N－78°－Wを指している。壁は，ロームブロックを含むソフトロームで軟らかく，各壁とも外傾して立ち上がっている。壁高は，29～43cmである。床面は，東側が西側に比べてわずかに高いが，全体的に平坦で堅緻である。炉は，検出されていない。ピットは，８か所検出され，主柱穴は，配列や規模からP_2～P_7の６か所が考えられる。主柱穴の規模は，長径24～33cm，短径22～30cm，深さ24～28cmである。北壁下のP_1と中央部のP_8は補助的な役割を持つ柱穴と考えられる。

覆土は，西側に一部攪乱がみられるが，ローム粒子やローム小ブロックを少量含み締まりを帯びており，上層には暗褐色土が，中層から下層にかけては褐色土が自然堆積している。

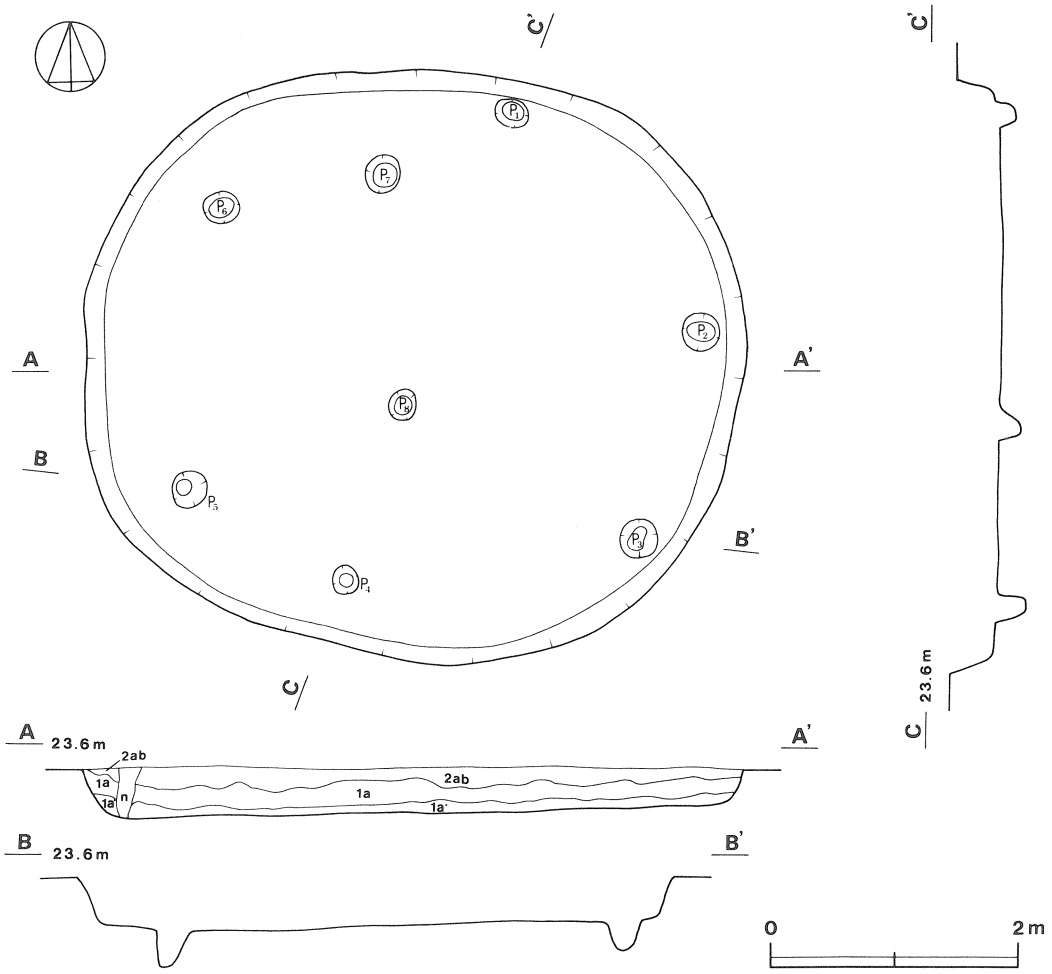
遺物は，縄文土器片512点が覆土上層から出土している。出土遺物の一部には，縄文時代後期前葉まで下りそうなものもみられるが，大半は縄文時代中期の加曽利Ｅ期のものである。これらのことから本跡は，縄文時代中期の加曽利Ｅ期の出土遺物とほぼ同時期に比定されるものと思われる。

第８号住居跡出土土器

住居跡出土土器観察表

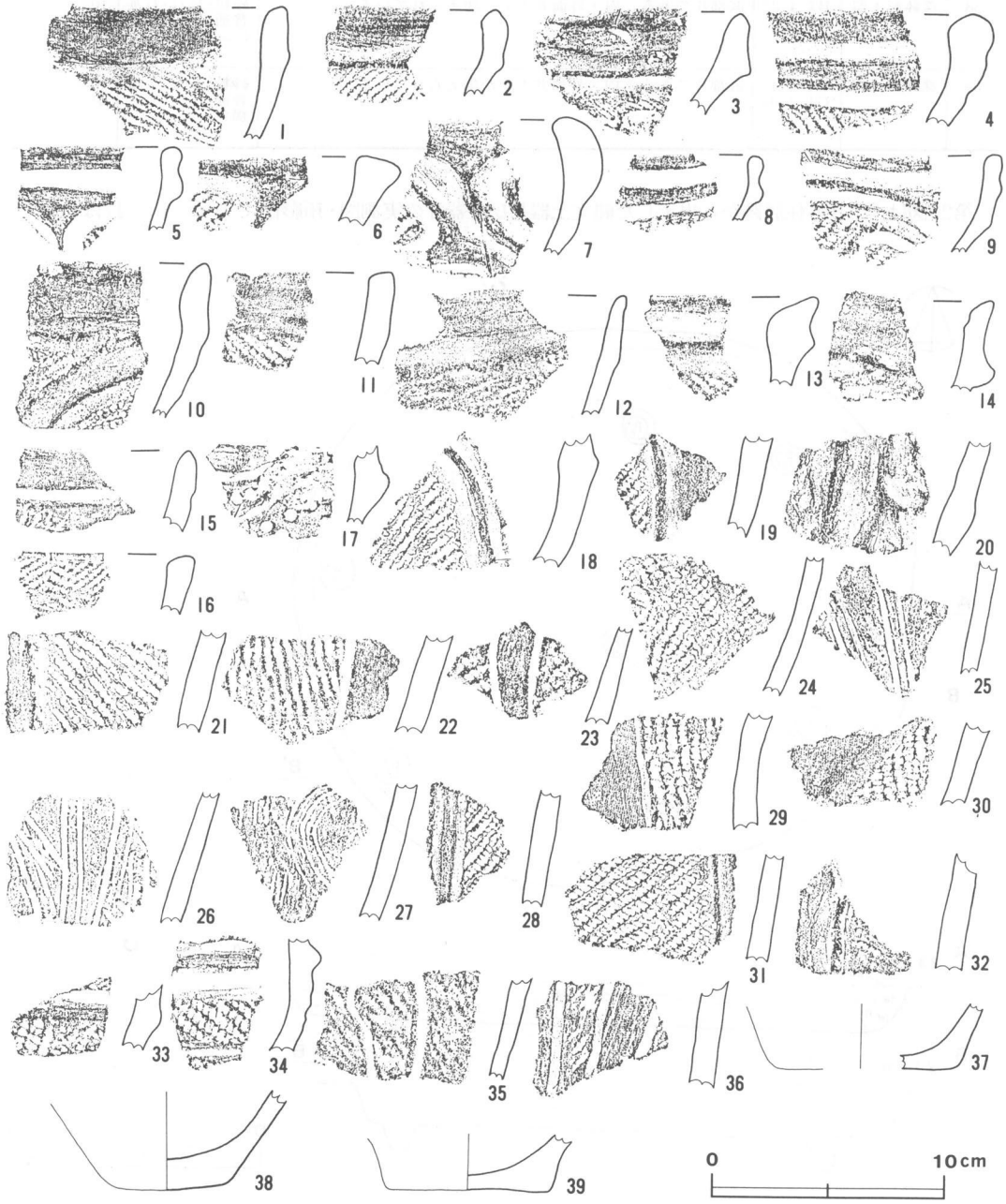
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
第23図 37	深鉢形土器	B(2.7) C(7.8)	底部片である。内・外面共ナデが加えられている。	砂粒・長石・雲母 普通 灰褐色	10% P218
38	深鉢形土器	B(4.2) C(4.6)	底部片である。内・外面共ナデが加えられている。	砂粒・長石・石英 普通 にぶい橙色	10% P216
39	深鉢形土器	B(2.4) C(7.0)	底部片である。内・外面共ナデが加えられている。	砂粒・長石・雲母 普通 褐色	10% P217

第23図は，第８号住居跡から出土した縄文土器及び土器片の実測図・拓影図である。1 ～17は口縁部



第22図　第８号住居跡実測図

片である。1～3は，口縁部無文帯下に1条の微隆線を巡らし，以下に縄文を施文している。4は，口縁部無文帯に2条の凹線を巡らし，以下に縄文を施文している。5は，口縁部無文帯下に1条の沈線を巡らし，以下に沈線で曲線的モチーフを描き，区画内に縄文を施文している。6は，凹線により口縁部文様帯を区画し，区画内には縄文を施文している。7は，口縁部に隆線による曲線的モチーフを描き，内部に縄文を施文している。8は，口縁直下に凹線と隆線を巡らし，以下に縄



第23図　第8号住居跡出土遺物実測図・拓影図

文を施文している。9は，口縁直下に1条の凹線を巡らし，以下は隆線により曲線的モチーフを描き，内部に縄文を施文している。10は，口縁部無文帯を1条の微隆線で区画し，以下に縄文地文上になぞりによる曲線文を描いている。11・12は，口縁部無文帯下に微隆線を巡らし，以下縄文を施している。13は，口縁直下に微隆線を巡らし，以下縄文を施している。14は，口縁部無文帯下に1条の沈線が巡り，以下に縄文が施されている。16は，全面に縄文を施している。17は，円形刺突文により曲線的モチーフが描かれている。18～33は，胴部片である。18～20は，隆線により曲線的モチーフが描かれ，18・19は，区画内に縄文が施文されている。21は，磨消帯が垂下している。22・23も磨消帯を有し，区画内には縄文が施文されている。24は，縄文だけが施されている。25・26は，半截竹管状施文具による条線文が縦位，斜位に施されている。27は，条線文により曲線文が描かれている。28～30は，磨消帯を有する胴部片である。31・32は，微隆線が垂下している。33は，隆線による区画が施されている。34は，隆線により文様構成がなされ，区画内に縄文が施されている口縁部片と思われる。35・36は胴部片で，35は，沈線が曲線的に施され，36は，磨消帯が垂下している。

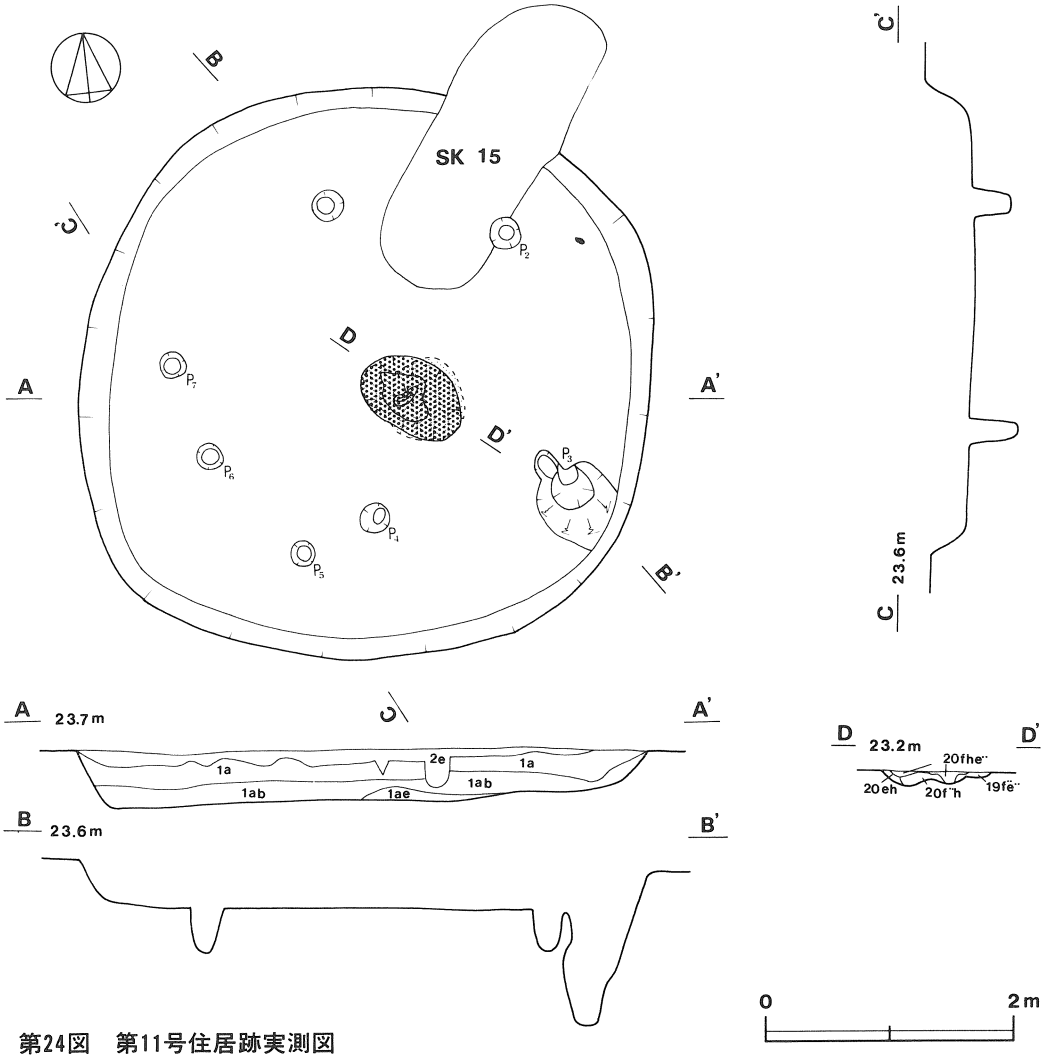
第11号住居跡（第24図）

本跡は，調査区の南東部J3a_7区を中心に確認された住居跡で，第8号住居跡の南西側3.2mに位置している。本跡は，北東側で第15号土坑と重複している。

平面形は，長径4.95m，短形4.8mのほぼ円形を呈している。壁は，締まりのあるロームで外傾して立ち上がり，壁高は，30～43cmである。床面は，硬く全体的に平坦であるが，炉の北側は，特に，硬く踏み固められている。炉は，中央からやや南東側に位置し，長径91cm，短径58cmの楕円形を呈し，床面を深さ13cmほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉内には多量の焼土粒子や少量の炭化物を含むにぶい赤褐色土が堆積し，炉床は，ロームが熱を受けて硬くレンガ状に焼けて凹凸状を呈している。ピットは，7か所検出され，P_1～P_3・P_5・P_7・P_8が配列から主柱穴と考えられる。主柱穴の規模は，長径21～27cm，短径20～26cm，深さ31～40cmである。P_4は，長径79cm，短径63cm，深さ95cmの規模を有し，本跡の中で一番大きいピットであることから柱穴の1つとも考えられる。

覆土は，3層からなり，上層には少量の焼土粒子を含む暗褐色土が，中層から下層にかけては，少量のローム粒子を含む褐色土が自然堆積の状態で堆積している。

遺物は，住居跡内に散在しており，覆土から縄文土器片261点，石7点が出土している。本跡は，出土遺物の大半が縄文時代後期初頭のものなので，同時期に比定されるものと思われる。



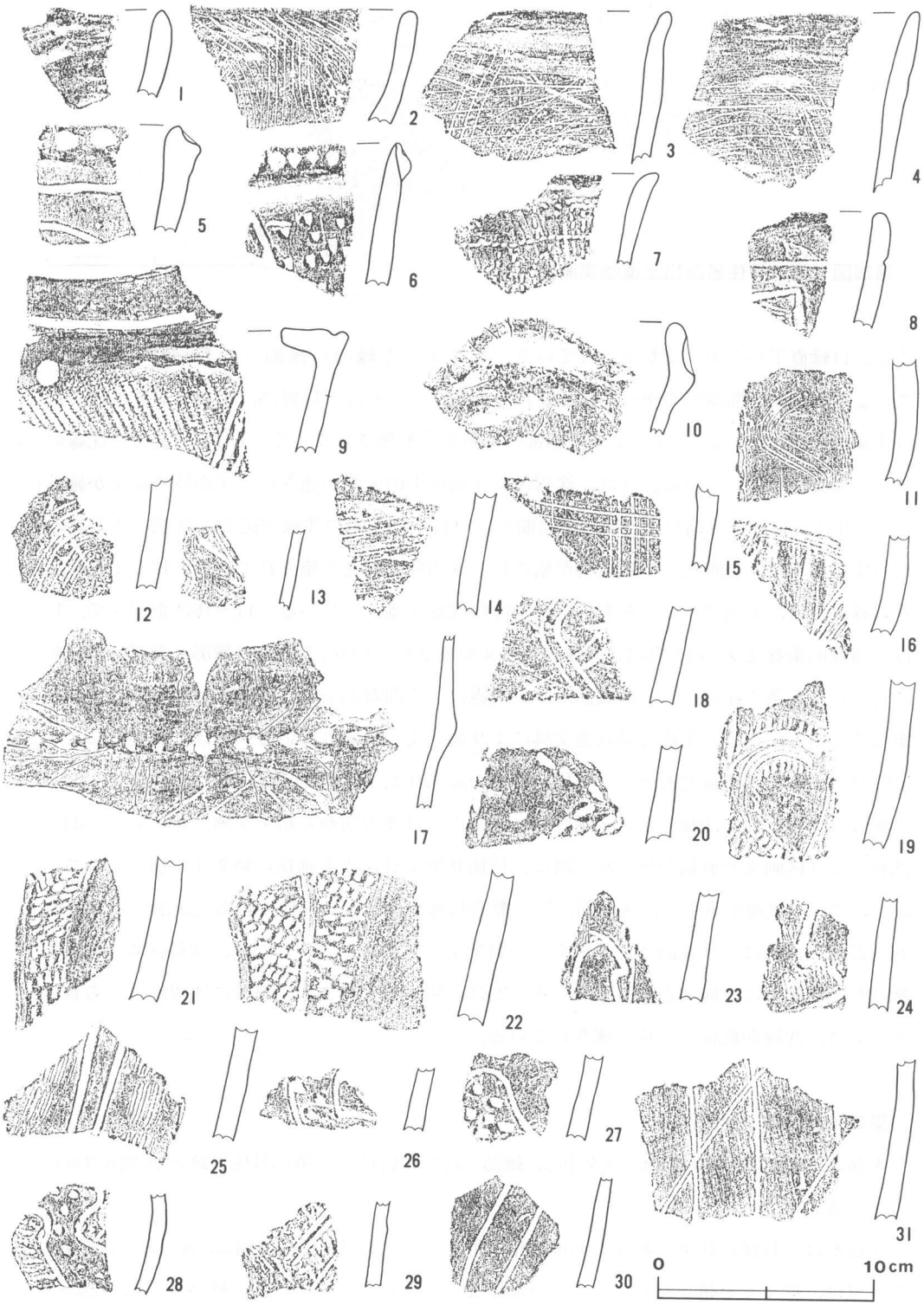
第24図　第11号住居跡実測図

第11号住居跡出土土器

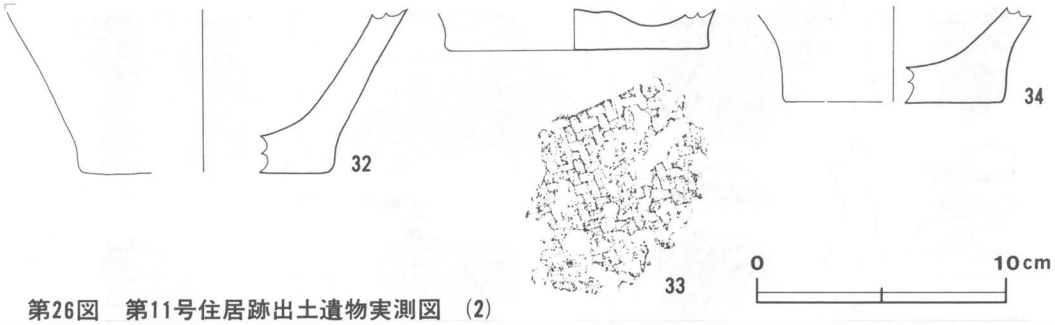
住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
第26図 32	深鉢形土器	B(6.6) C(10.2)	底部片である。外面縦ナデ。内面ナデ。	砂粒・長石 普通 にぶい橙色	10% P220
33	深鉢形土器	B(11.6) C(10.6)	底部片である。外面は摩滅が激しい。内面ナデ。底部に網代痕を有す。	砂粒・長石 普通 橙色	10% P221
34	深鉢形土器	B(3.5) C(8.8)	底部片である。内・外面共ナデ。	砂粒・長石・礫 普通 にぶい橙色	10% P223

第25図は，第11号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。1は，波状を呈する口縁部



第25図　第11号住居跡出土遺物拓影図　(1)



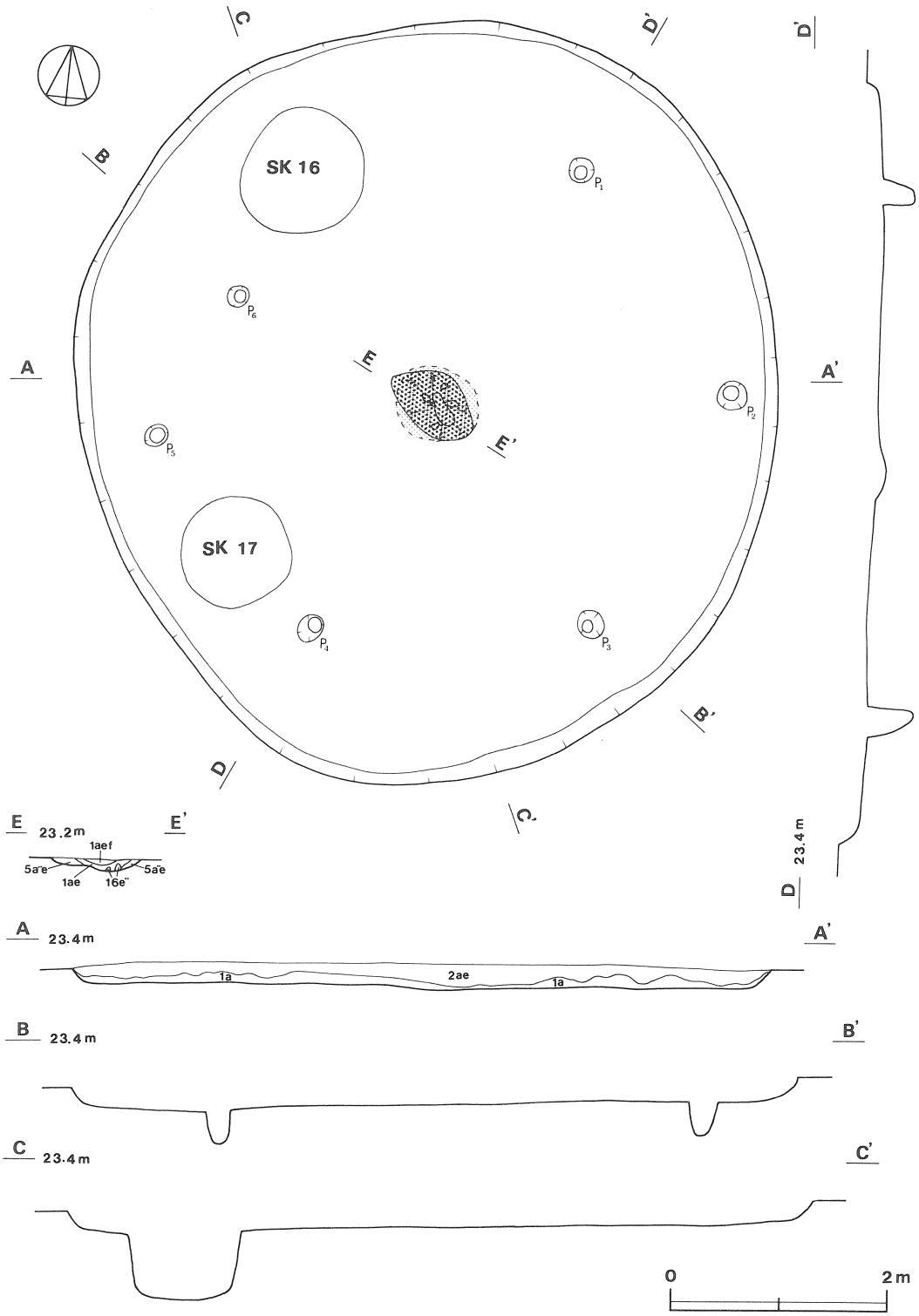
第26図　第11号住居跡出土遺物実測図（2）

片で，口縁直下から条線文が施されている。2～9は平縁の口縁部片である。2・3は，条線文により直線的，曲線的モチーフが描かれている。5・6は，口唇部に刺突文が施され，胴部には沈線が施されている。さらに，6の胴部には刺突文も施されている。7は，刺突文を沈線の様にみたてて文様を描いている。8は，沈線により幾何学的区画が施され，区画外に縄文が施されている。9は，口縁部上端がほぼ直角に屈曲し，口唇上に1条の沈線が巡る。以下には2条の沈線が斜位に施され，区画内には刺突文が施され，区画間は縄文が施されている。10は山形状を呈する口縁部片で，突起の下に凹を有し，以下は細沈線が垂下している。11～16は胴部片で，11～13は，曲線的条線文が，14～16は，直線的条線文が施されている。17は，口縁部と胴部の境に刺突文の付された1条の隆線が巡り，胴部には，沈線による曲線的モチーフが描かれている。18～31は胴部片である。18は，半截竹管状施文具により曲線文が描かれている。19は，刺突具により刺突文や押し引き文の曲線的モチーフが描かれている。20は，刺突文が施されている。21・22は，同一の胴部片と思われ，沈線により区画され，区画内には多方向から刺突が施されている。23・24は，沈線により区画文や直線が施され，24は，櫛歯状施文具による細長い刺突文が加えられている。25は，2条の沈線が垂下し，区画間には，櫛歯状施文具により細長い刺突文が加えられている。26・27は，沈線により区画され，区画内に刺突文が施されている。28は，沈線区画内に刺突文が施され，区画外には縄文が施されている。29は，粗い縄文地文上に斜位に沈線が加えられている。30・31は，沈線が縦位，斜位に施されている。

第12号住居跡（第27図）

本跡は，調査区の中央部I3e$_3$区を中心に確認された住居跡で，第15号住居跡の西側8.3mに位置している。

平面形は，長径7.16m，短径6.56mの楕円形を呈しており，長径方向は，N－9°－Eを指している。壁は，締まりを帯びたロームで，外傾しながら立ち上がっている。壁高は，13～23cmでロームへの掘り込みは比較的浅い。



第27図　第12号住居跡実測図

床面は，平坦で堅緻である。炉は，ほぼ中央部に位置し，長径89cm，短径57cmの楕円形を呈し，床面を深さ９cmほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉内には，少量の焼土粒子を含む褐色土が堆積している。炉床は，ロームが熱を受けて焼土化し，凹凸状を呈している。ピットは，６か所検出され，P_1～P_6は，長径22～30cm，短径20～29cm，深さ27～44cmの規模を有している。P_1とP_6はややはなれているが，配列や規模からいずれも主柱穴と考えられる。

覆土は，上層に少量のローム粒子と極少量の焼土粒子を含む軟らかい暗褐色土が，下層には極少量のローム粒子を含み締まりのある褐色土が自然堆積している。

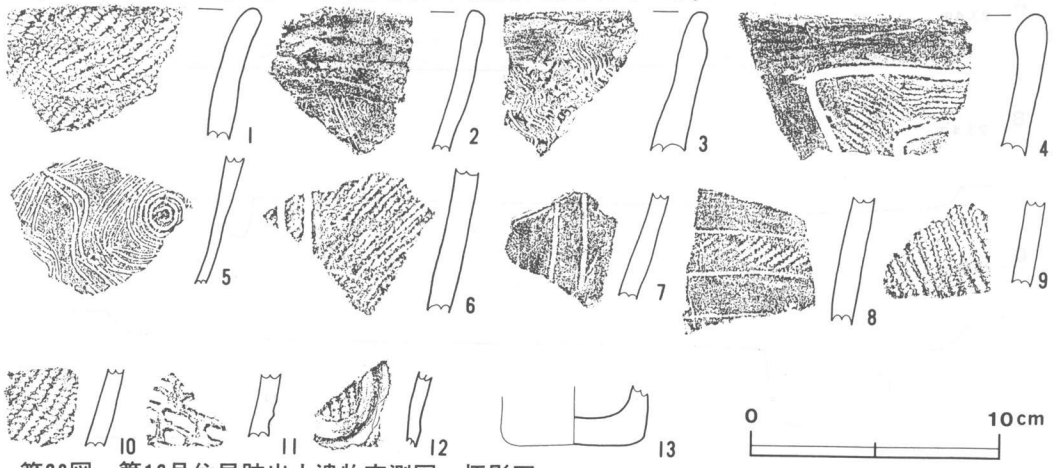
遺物は少なく，住居跡内より縄文土器片43点が散在して出土している。本跡は，出土遺物の大半が，縄文時代後期前葉のものであるので，ほぼ同時期に比定されるものと思われる。

第12号住居跡出土土器

住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
第28図 13	深鉢形土器	B(2.0) C(5.5)	底部片である。内・外面共ナデ。	砂粒・長石 普通 灰褐色	10% P230

第28図は，第12号住居跡から出土した縄文土器及び土器片の実測図・拓影図である。１～４は，平縁の口縁部片である。１は，全面に縄文が施されている。２は，口縁部無文帯下に櫛歯状施文具により斜位に条線文が施されている。３は，口縁直下から波状の条線文が垂下している。４は，沈線により口縁部文様帯が区画され，区画内には縄文が施されている。５～12は胴部片である。５は，沈線により曲線的モチーフが描かれている。６は，縄文の地文上に２条の沈線が垂下している。７は，２条の沈線が垂下している。８は，２条の沈線が巡り，２条の沈線内には縄文が帯状に施されている。９・10は，縄文だけが施されている。11は，雨垂れ状に刺突文が施されている。12は，微隆線により曲線文が区画され，区画内には縄文が施されている。



第28図　第12号住居跡出土遺物実測図・拓影図

第13号住居跡（第29図）

本跡は，調査区の南東部I4h_2区を中心に確認された住居跡で，第７号住居跡の北東側3.2ｍほどに位置している。

平面形は，長径5.75ｍ，短径5.37ｍの楕円形を呈しており，長径方向は，N－２°－Eを指している。壁は，ロームブロックを含む締まりのあるロームで，東壁は，ほぼ垂直に立ち上がり，他は，外傾して立ち上がっている。壁高は，32～40cmである。床面は，西側が平坦で，東側は多少凸凹しているが，ロームブロック混じりで硬く踏み固められている。炉の周囲の床面は，やや低くなっている。炉は，中央からやや北側に位置し，長径93cm，短径61cmの楕円形を呈し，床面を深さ18cmほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉内には，多量の焼土粒子を含み，炉床の北西側は，ロームが熱を受けてレンガ状に硬く赤化し，凹凸状を呈している。

本跡の覆土は３層からなり，上層の一部には，攪乱がみられるが，いずれも褐色土で自然堆積している。上層から中層にかけては，少量のローム粒子，焼土粒子を含み軟らかい褐色土が，下層には極少量のロームブロックを含み硬い褐色土が堆積している。

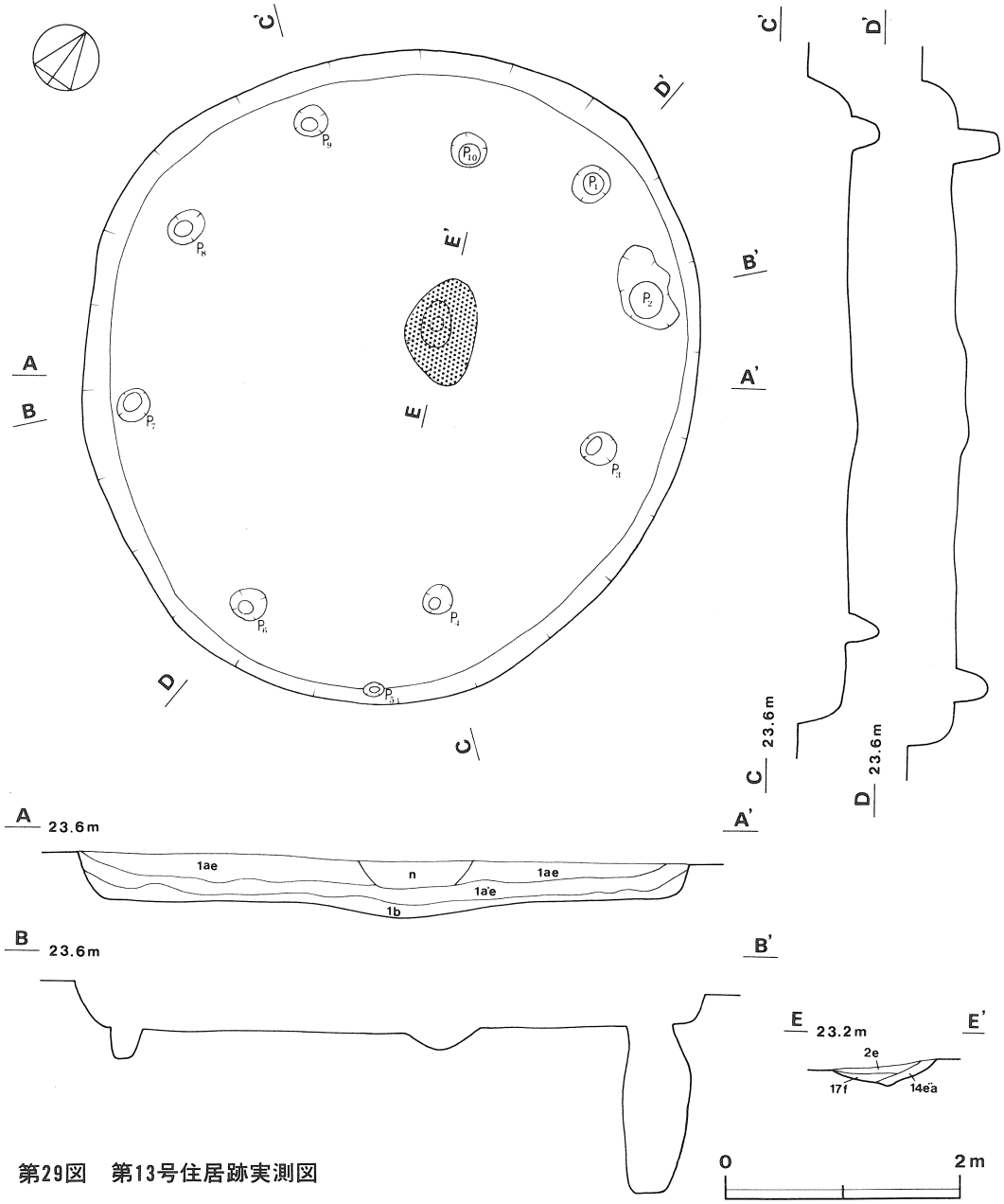
遺物は，住居跡全域の覆土から縄文土器片359点，石４点が出土している。本跡は，出土遺物の大半が縄文時代後期前葉のものなので，ほぼ同時期に比定されるものと思われる。

第13号住居跡出土土器

第30図は，第13号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。１～５は口縁部片である。１は，縄文が施されており，内側の口縁直下に１条の沈線が巡っている。２は，波状縁で，縄文が施されている。３は，口縁直下に２条の沈線が巡り，縄文地文上に斜位の沈線が施されている。４は，小突起を有し，沈線により文様構成が施されている。５は，沈線による過巻文が描かれている。６～21は胴部片である。６～９は，縄文地文上に沈線により直線文，曲線文が施されている。10は，縄文地文上に隆線を巡らし，その隆線上には円形刺突文が施されている。11は，磨消帯が垂下し，区画間に縄文を施文している。12は，縄文地文上に沈線による曲線的モチーフを描いている。13は，波状に条線文が施されている。14は，微隆線による曲線文が描かれている。15～21は，縄文が施されている。22は，隆線による「８」の字状文を貼付した口縁部片である。23～29は胴部片である。23は，条線文を施している。24は，縄文地文上に細沈線が施されている。25～27は，沈線により区画が施され，区画内に刺突文が施されている。28は，沈線により区画され，区画内には縄文が施されている。29は，微隆線により「U」字状が区画され，区画内に縄文が施されている。

第14号住居跡（第31図）

本跡は，調査区の中央部I3g_4区を中心に確認された住居跡で，第12号住居跡の南東側4.2ｍに

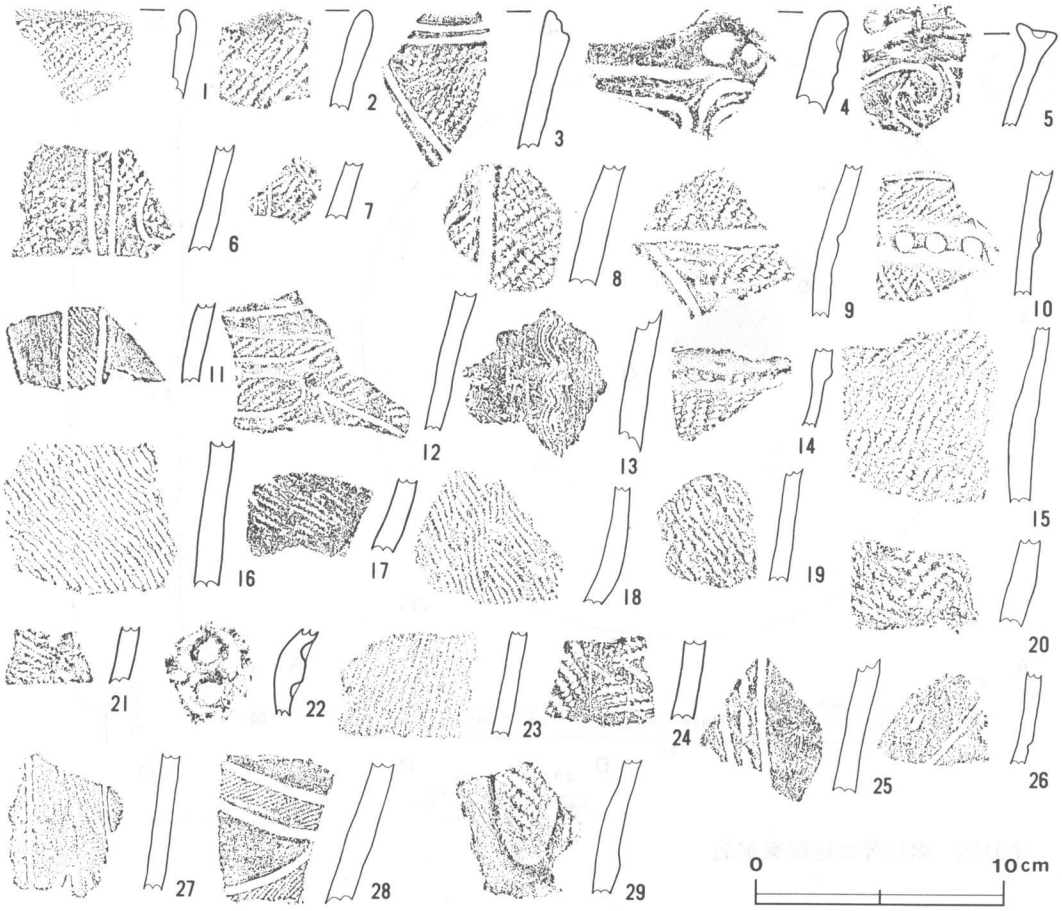


第29図　第13号住居跡実測図

位置している。

平面形は，長径5.10m，短径4.75mの楕円形を呈しており，長径方向は，N－5°－Eを指している。壁は，明瞭で硬く締まり，外傾して立ち上がっているが，南東側の一部は，攪乱を受けている。壁高は，23～33cmである。

床面は，全体的に平坦で堅緻であるが，南東側の2か所のピット間は，特に，ロームが硬く踏

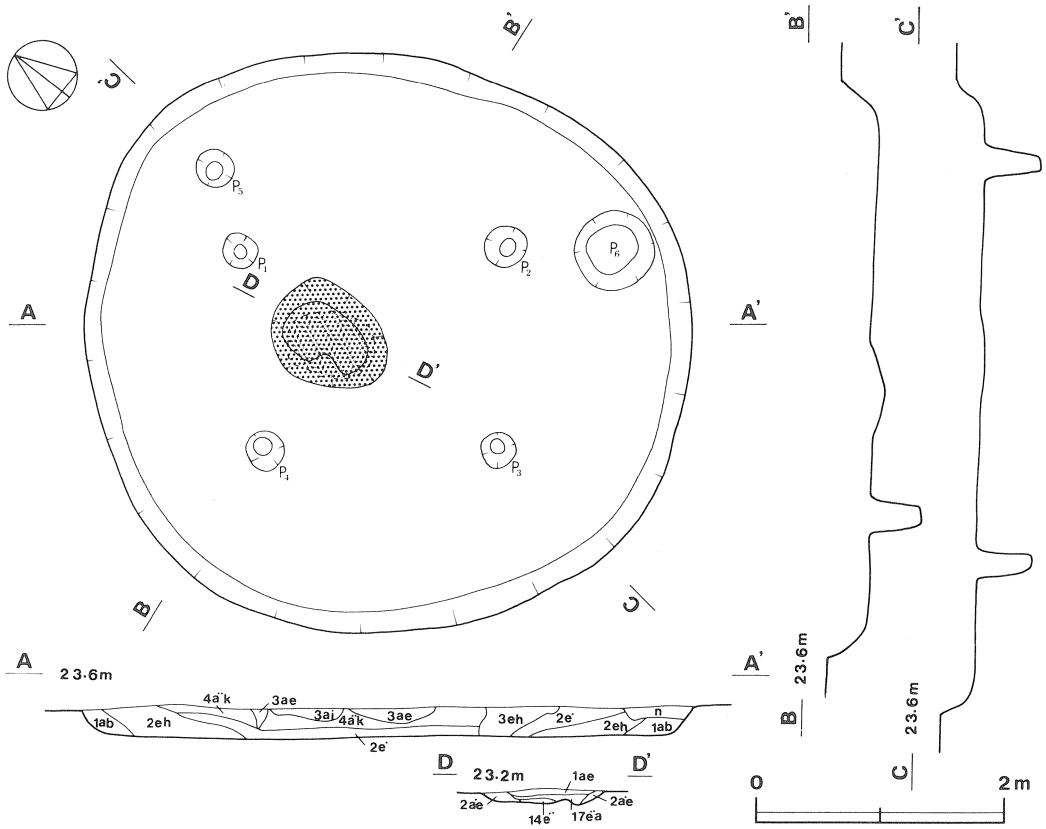


第30図　第13号住居跡出土遺物拓影図

み固められている。炉は，中央からやや北西側に位置し，平面形は，長径102cm，短径78cmほどの楕円形を呈し，床面を深さ12cmほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉内には多量の焼土粒子が含まれ，炉床はロームがレンガ状に赤く焼けている。ピットは，５か所検出されている。P_1～P_4は，直径28～33cmのほぼ円形を呈し，深さ38～47cmの規模であり，配列から主柱穴と考えられる。主柱穴は，ほぼ方形状に配列されている。北壁際のP_5は径32cm，深さ46cmで配列から補助的な柱穴と考えられる。また，南東壁に接して検出されたP_6は，性格不明の落ち込みで，径53cmほどの円形を呈し，深さ18cmほどの鍋状に掘り込まれており，底面が凸凹している。

本跡の覆土は，耕作や木の根による攪乱が多くみられる。上層には，少量の焼土粒子，炭化粒子を含むやや軟らかい極暗褐色土が，下層には，少量の焼土粒子を含み締まりのある暗褐色土が，壁際には，褐色土が自然堆積の状態で堆積している。

遺物は，縄文土器片249点，石１点が住居跡全域の覆土から出土している。本跡は，出土遺物の大半が縄文時代後期前葉のものなので，ほぼ同時期に比定されるものと思われる。



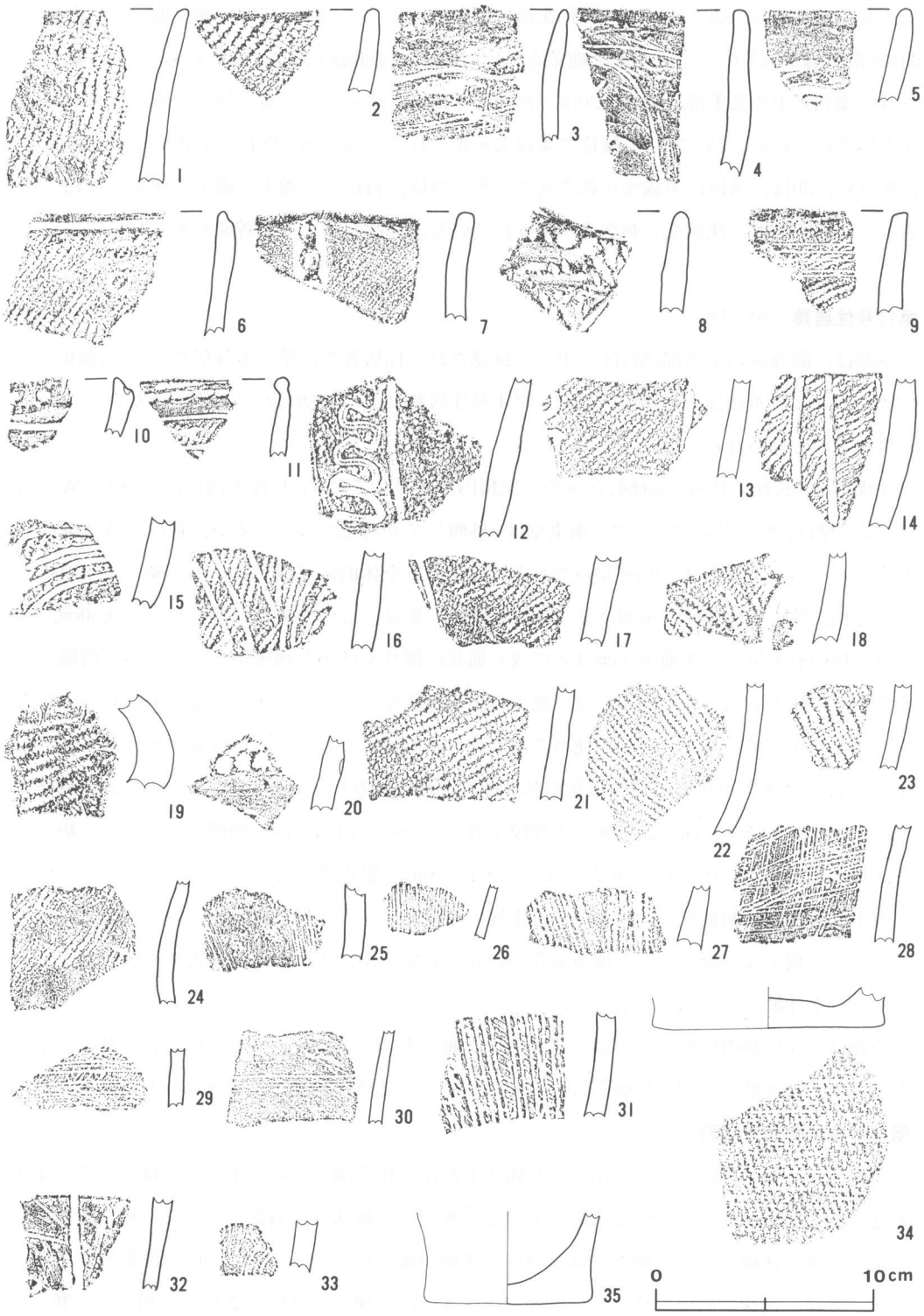
第31図　第14号住居跡実測図

第14号住居跡出土土器

住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
第32図 34	深鉢形土器	B 1.4 C(10.8)	底部片である。内・外面共ナデ。底部に網代痕を有す。	砂粒・長石・石英 普通 灰褐色	10% P233
35	深鉢形土器	B 4.1 C(7.0)	底部片である。内・外面共縦ナデ。	砂粒・長石・石英 普通 にぶい橙色	10% P237

第32図は，第14号住居跡から出土した縄文土器及び土器片の実測図・拓影図である。1～11は口縁部片である。1・2は，縄文が施されている。3～5は，口縁部無文帯下に1条の沈線が巡り，4・5は，以下に沈線が施されている。6は，口縁直下に1条の沈線が巡り，以下縄文が施されている。7は，縄文地文上に縦位に連鎖状の隆線が垂下している。8は，口縁直下に円形刺突文が巡る。9は，縄文地文上に数条の沈線が横位に施されている。10は，口唇部に円形刺突文が施され，また，11は，口縁直下に押し引き文が施され，横位の平行沈線内に縄文が施されている。12～33は胴部片



第32図　第14号住居跡出土遺物実測図・拓影図

である。12・13は，縄文地文上に蛇行沈線文が施されている。14～17は，縄文地文上に直線的，曲線的に沈線が施されている。18は，縄文地文上に沈線による曲線文が描かれている。19は，縄文が施された橋状把手の把手部である。20は，刺突文を横位に巡らしていると思われる。21～24は，縄文が施されている。25～27は，縦位に条線文が施されている。28・29は，交差するように条線文が施され，30は，横位に条線文が施されている。31は，斜位の沈線上に縦位の沈線が重ねて施文されている。32は，沈線文と刺突文が施されている。33は，波状の条線文が施されている。

第15号住居跡（第33図）

本跡は，調査区の中央部I3d$_7$区を中心に確認された住居跡で，第２号住居跡の北西側6.7ｍに位置している。本跡は，北壁の一部を，第４号住居跡によって切られていることから，本跡の方が古いものと思われる。

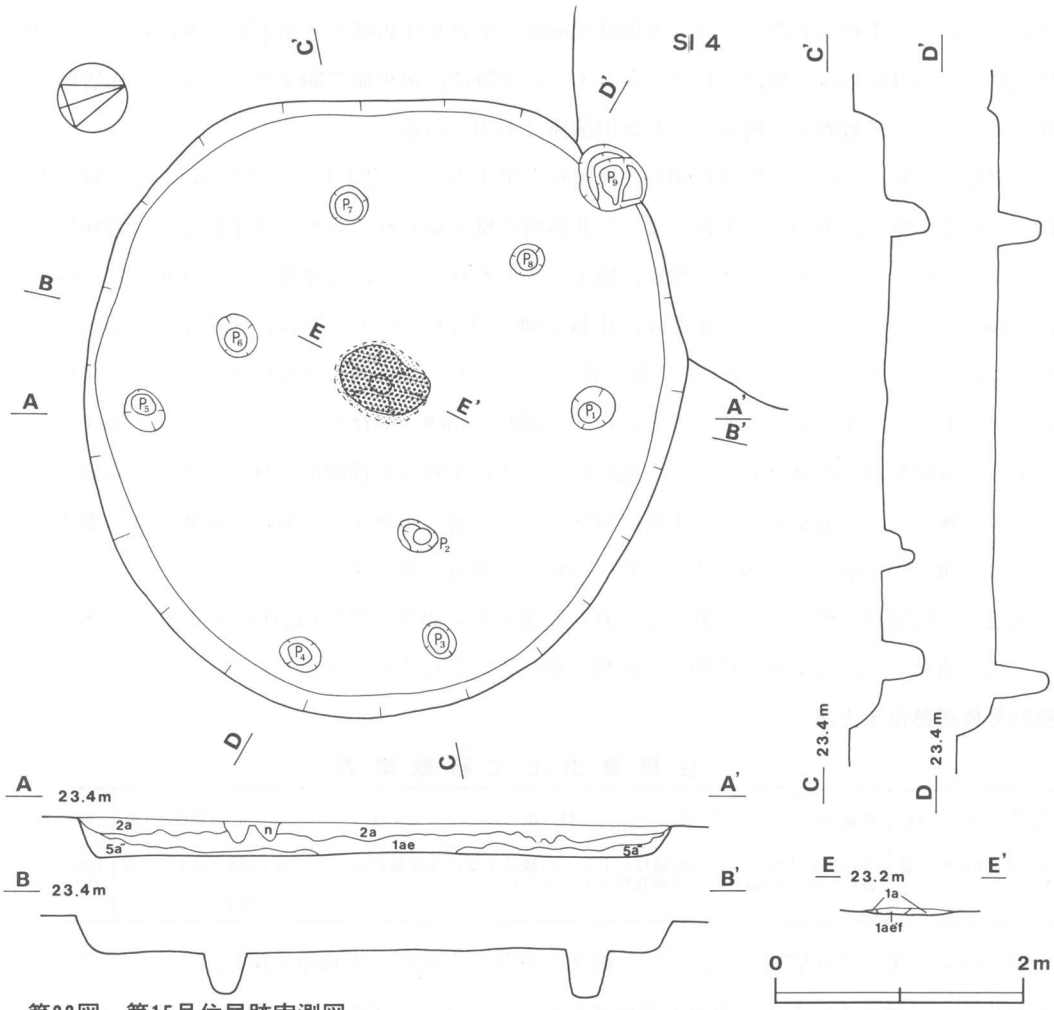
平面形は，長径5.17ｍ，短径4.76ｍの不整楕円形を呈しており，長径方向は，N－49°－Wを指している。壁は，軟らかいロームで，南東壁は，外傾して立ち上がっているが，他は，ほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は，25～30cmである。床面は，全体的に平坦でロームが硬く踏み固められているが，第４号住居跡の床面より５cmほど低い。炉は，ほぼ中央部に位置し，長径80cm，短径50cmの楕円形を呈し，床面を３cmほどに浅く皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉の西側からはやや多くの焼土が出土し，他からは，焼土の出土は少なかった。炉床は，部分的にロームが火熱を受けて赤化しているが，長期間使用された炉とは思われない。ピットは８か所検出されている。主柱穴は，炉を取り囲むように五角形状に配列されているP_1・P_2・P_6～P_8と思われ，長径30～37cm，短径25～33cm，深さ29～40cmの規模を有している。出入口は，明確ではないが，炉の位置や，柱穴の配列からP_3・P_4，あるいは，P_4・P_5の間が想定される。

覆土は，壁際に明褐色土が検出され，上層に暗褐色土が，下層に褐色土がレンズ状に自然堆積している。覆土は，焼土粒子を極少量含み，ローム粒子が，床面や壁際に近ずくにつれて混入しており，全体的によく締まっている。

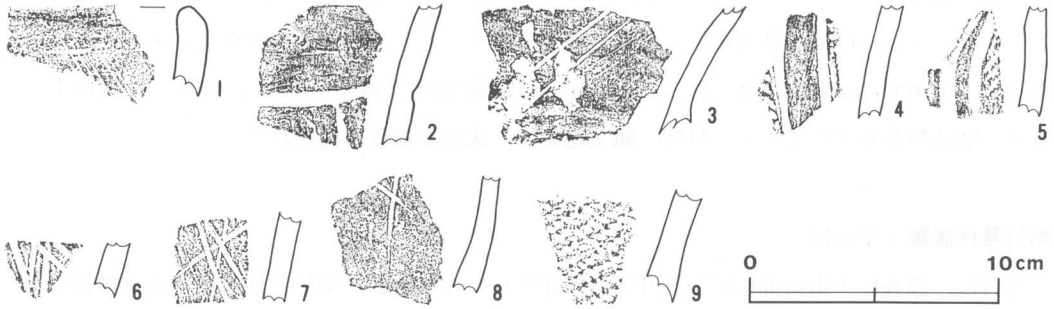
遺物は，住居跡内に散在しており，覆土から縄文土器片54点が出土している。本跡は，出土遺物の大半が縄文時代中期の加曽利Ｅ期のものなので，ほぼ同時期に比定されるものと思われる。

第15号住居跡出土土器

第34図は，第15号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。１は，口縁部片で，条線文が施されている。２は，口縁部上端が欠損した無文の口縁部から胴部にかけての破片で，口縁部下端に１条の沈線が巡り，胴部には，斜位の沈線が施されている。３～９は胴部片である。３・６～８は，沈線が斜位に施されている。４・５は，沈線により区画され，区画内には磨り消しがなされている。９は，縄文が施されている。



第33図　第15号住居跡実測図



第34図　第15号住居跡出土遺物拓影図

第26号住居跡（第35図）

本跡は，調査区の南東部K3c₀区を中心に確認された住居跡で，第40号住居跡の北東側15.8mに

位置している。本跡の北西側には，古墳時代前期の第24号住居跡が，南東側にも，同じく古墳時代前期の第22号住居跡が検出されている。また，本跡は，南東側で縄文時代の第31号住居跡と重複しているが，土層断面を検討しても新旧関係は不明である。

平面形は，長径7.45m，短径7.00mの楕円形を呈するものと思われ，長径方向は，N－42°－Eを指している。壁は，第24号住居跡によって北西側の壁が切られており，南東側も第22号住居跡によって切られている。残っている壁は，締まりのあるロームで，北東壁は，ほぼ垂直に，南東壁は外傾して立ち上がっている。床面は，比較的硬く平坦であり，炉は，検出されなかった。ピットは，15か所検出されているが，本跡に伴うピットは，P_1～P_9の9か所と思われる。主柱穴は，P_1・P_3・P_4・P_5・P_7の5か所と考えられ，長径29～43cm，短径28～40cm，深さ32～55cmの規模を有し，五角形状に配列されている。他のピットは，配列から補助的な柱穴と考えられる。

本跡の覆土は，3層からなり，上層に暗褐色土，中層に褐色土，下層に明褐色土が自然堆積している。覆土の下層は，上層に比べてローム粒子を多量に含み締まっている。

遺物は，住居跡の壁に沿って散在しており，覆土から縄文土器片132点が出土している。本跡は，出土遺物から，縄文時代中期の加曽利E期に比定されるものと思われる。

第26号住居跡出土土器

住居跡出土土器観察表

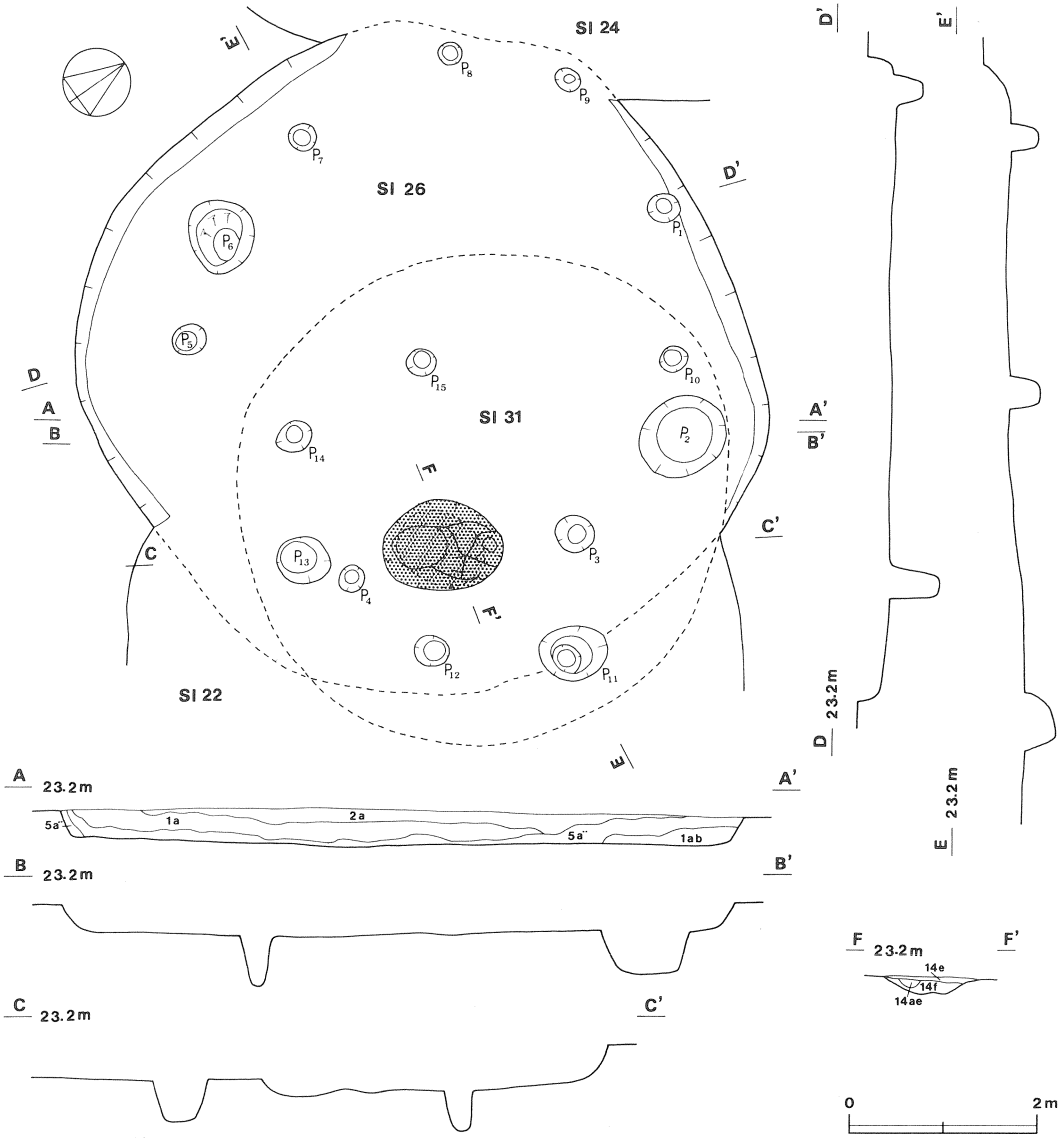
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
第36図 1	深鉢形土器	A(41.0) B(8.0)	幅の広い口縁部片である。口縁部下端には隆線が巡っている。口縁部内・外面共横ナデが施されている。	砂粒・長石・石英 やや不良 橙色	10% P239

第36図は，第26号住居跡から出土した縄文土器及び土器片の実測図・拓影図である。2は，口縁部片で，口縁直下に1条の凹線と刺突文を巡らし，以下に沈線による曲線的モチーフを描き，区画外に縄文が施されている。3・4は，隆線・沈線により楕円形に区画し，区画内に縄文を施している。5は，口縁部無文帯下に縄文を施している。6～9は，磨消懸垂文が垂下している胴部片で，区画間には縄文が施されている。10・11は胴部片である。10は，隆線と沈線による曲線文と磨消帯が垂下している。11は，縄文地文上に沈線が横位に施されている。

第31号住居跡（第35図）

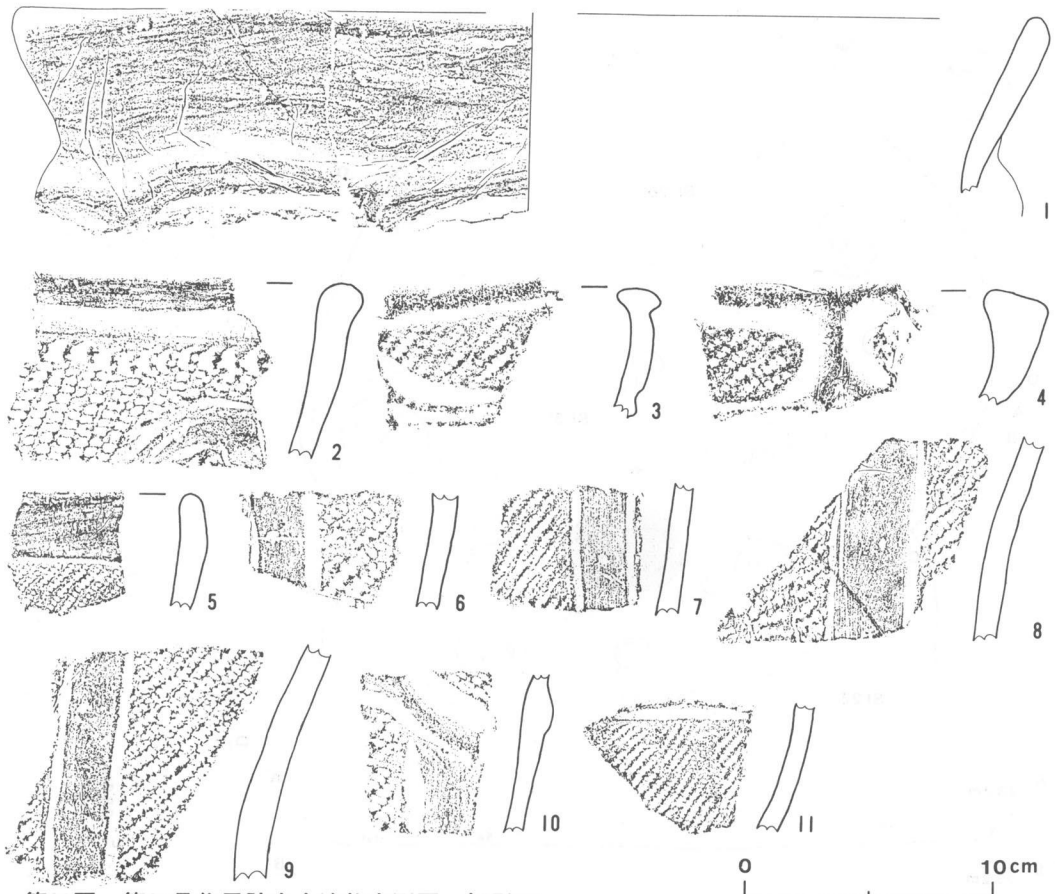
本跡は，調査区の南東部K3c_0区を中心に確認された住居跡で，第40号住居跡の北東側18.3mに位置している。本跡の南東側は，古墳時代前期の第26号住居跡によって切られている。また，北西側では，第26号住居跡と重複しているが，本跡との新旧関係は，土層断面を検討しても不明である。

平面形は，炉の位置や，ピットの配列からの推定になるが，長径5.30m，短径5.05mの



第35図　第26・31号住居跡実測図

不整円形を呈し，長径方向は，N－20°－Eを指すものと思われる。壁は検出されず，床面は，第26号住居跡とほぼ同一レベルにあって，全体的に平坦で，比較的硬い。炉は，中央からやや南側に位置し，長径131cm，短径98cmの楕円形を呈し，床面を深さ18cmほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉内には，多量の焼土粒子を含む暗赤褐色土が堆積し，炉床は，ロームが熱を受けて硬く赤化しているので，長期間使用されたものと考えられる。ピットは，本跡の推定範囲内に，9か所検出されている。本跡に伴うピットは，P_{10}～P_{15}の6か所と思われる。そのうち主柱穴は，P_{10}・P_{11}・P_{13}・P_{15}の4か所と考えられ，長径32～76cm，短径29～58cm，深さ29～57cmの規模を



第36図　第26号住居跡出土遺物実測図・拓影図

有し，不整方形状に配列されている。その他は，補助柱穴と考えられる。

本跡の覆土は，３層からなり，上層には暗褐色土が，中層には褐色土が，下層には明褐色土が締まりを帯びて自然堆積している。

遺物は，住居跡の中央から南側に集中して縄文土器片964点が覆土から出土している。本跡は，出土遺物の大半が縄文時代中期の加曽利Ｅ期のものであるので，ほぼ同時期に比定されるものと思われる。

第31号住居跡出土土器

住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
第37図 1	深鉢形土器	A(58.0) B(56.4)	突起を有する口縁部から胴部にかけての破片である。口縁部は沈線と隆線で，渦巻状文と長方形の区画文が構成され，区画内には単節縄文ＬＲが横位に施文され，胴部には直線的磨消帯を施し，区画内には１条の沈線を垂下させている。区画間の胴部上位に単節縄文ＬＲを縦位に，胴部中位から下位にかけては複節縄文ＬＲＬを縦位に施文している。内面横ナデ。	砂粒・長石 普通 橙色	30% P254

2	深鉢形土器	A 19.3 B(15.2)	口縁部がやや内彎し，胴部は徐々にすぼまる。口縁部には半截竹管状工具による連続する刺突文が施されている。胴部には沈線により7単位の逆「U」字状文が描かれ，地文としては単節縄文RLが縦位に施文されている。外面は摩滅気味である。内面横ナデ。	砂粒 普通 褐色	50% 炭化物付着 P253
3	深鉢形土器	A(32.6) B(8.2)	平縁を呈する口縁部片である。沈線と隆線により渦巻状文と横長の区画文や楕円形状文を描き，区画内に縄文を充填している。内面ナデ。	砂粒 普通 にぶい橙色	10% P309
4	深鉢形土器	B(3.7) C(8.5)	底部片で，外面には縄文が施されている。内面ナデ。	砂粒・長石・石英 普通 橙色	30% P255
5	深鉢形土器	B(5.3) C(8.2)	底部片で，内・外面共縦位のナデが加えられている。	砂粒・長石 普通 明暗褐色	40% P311
6	深鉢形土器	A(35.6) B(15.0)	キャリパー形を呈している。口縁部文様帯は，隆線と沈線により楕円文と長方形の区画文が構成されている。区画内は単節縄文RLが施文されている。胴部には，やや幅の狭い磨消懸垂文が垂下している。区画間には単節縄文RLが施文されている。内面ナデ。	砂粒 普通 黒褐色	10% P243
7	深鉢形土器	B(27.9) C(8.0)	胴下半部から小さな底部へ至る器形を呈している。胴部は微隆線により区画が施され，区画内は縄文が施文されている。胴部下位は縦位のナデが加えられている。内面縦ナデ。内・外面共摩滅気味。	砂粒 普通 にぶい橙色	10% P241

第38・39図は，第31号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。8は，波状縁を呈する口縁部から胴部にかけての大破片で，口縁部文様帯は，沈線と隆線により渦巻文と楕円区画文が施され，区画内には縄文が施されている。胴部には，磨消帯が垂下している。9～30は口縁部片である。9・10は，波状縁を呈し，口縁直下に1条の沈線が巡り，沈線により渦巻文が施されている。11・12は，隆線により退化した渦巻文や楕円区画文が施され，区画内には縄文が施されている。13～15は，波状縁を呈し，13は，隆線により楕円区画文が施され，14・15は，口縁直下に1条の沈線が巡り，沈線により円形や楕円形に区画され，区画内には縄文が施されている。16～18は，波状縁を呈し，口縁部無文帯を微隆線で区画し，以下に縄文を施文している。19・20は，波状縁を呈し，口縁部無文帯下を微隆線で区画している。21は，口縁部無文帯下に縄文を施している。22は，口縁部無文帯を区画する微隆線が，左右よりせり上がって小突起を形成し，この部分が山形状に突起している。以下に磨消帯が施され，区画間には縄文が施されている。23は，波状縁を呈し，沈線により区画文を施していると思われ，区画内には縄文と沈線を横位に施し，沈線の先端は渦巻状を呈している。24・25は，沈線により楕円区画文を構成し，区画内には縄文を施している。26は，沈線により楕円形を区画し，区画内には縄文を施し，以下には磨消懸垂文が垂下し，区画外には縄文が施されている。27は，幅の狭い口縁部無文帯下に磨消懸垂文を垂下させ，区画間には縄文を施している。28は，口縁部に刺突文が連続して施され，以下に沈線により逆「U」字状文が描かれ区画内は磨り消され，区画間は縄文が充填されている。29は，口縁部無文帯下に1条の沈線が巡り，以下には沈線により逆「V」字状のモチーフが描かれ，

区画内は磨り消されている。30は，口縁直下に１条の凹線が巡り，以下には２条の沈線により逆「U」字状文を区画し，区画内外に縄文が施されている。凹線直下の区画間には円形刺突文が施されている。31は，口縁部無文帯と胴部を隆線により区画し，胴部には縄文を施している。32～40は口縁部片である。32は，平縁の幅の狭い口縁部無文帯下に櫛歯状施文具による条線文が施されている。33は，隆線により口縁部文様帯を構成し，区画内には縄文が施されている。34は，隆線による渦巻文が，35は，隆線による区画文が施されている。36は波状縁で，波頂部の口唇部に沈線により渦巻文が施されている。37は平縁で，１条の沈線と円形刺突文が並行して巡り，以下に縄文が施されている。38・39は，口縁部無文帯下に微隆線を巡らし，以下には櫛歯状施文具により縦位に条線文が施されている。40は，半截竹管により沈線が斜位に施されている。41～52は胴部片である。41は，磨消帯を有して区画間には縄文を施している。42は，３条の沈線が垂下し，沈線内は縄文と磨り消しが施されている。43は，縄文の地文上に２条の沈線が垂下している。44は，沈線による曲線的モチーフが描かれている。45・46は，沈線により区画文が描かれ，区画内には縄文が施されている。47は，隆線による曲線的モチーフが描かれている。48は，縄文が施されている。49・50は，曲線的な条線文が描かれている。51は，沈線が多条に施され，52は，隆線により曲線的なモチーフが描かれている。

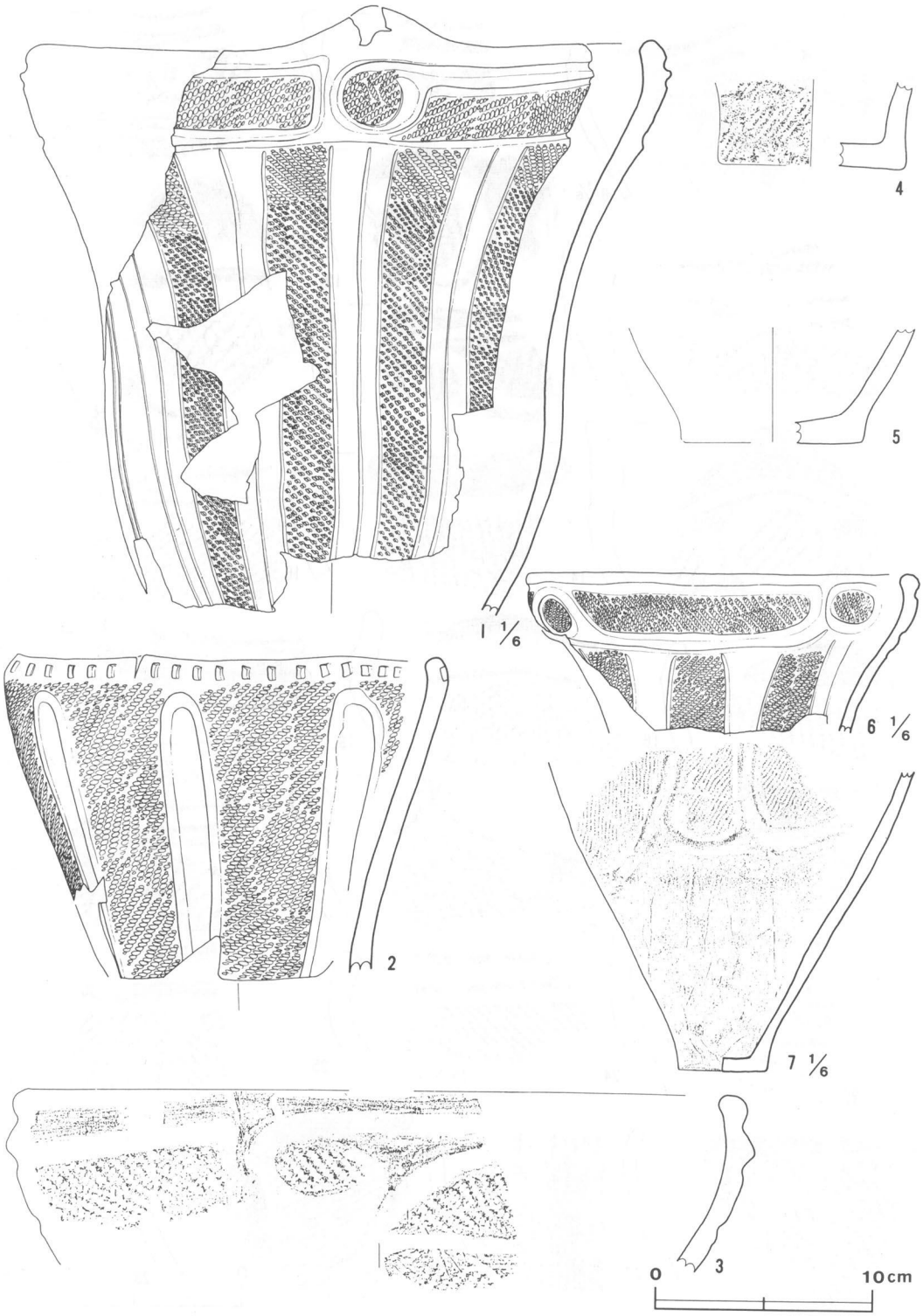
第32号住居跡（第40図）

本跡は，調査区の南部K3c$_1$区を中心に確認された住居跡で，第40号住居跡の北西側11.2ｍに位置している。本跡の北東側の床面が，古墳時代前期の第34号住居跡によって切られているので本跡の方が古い遺構である。

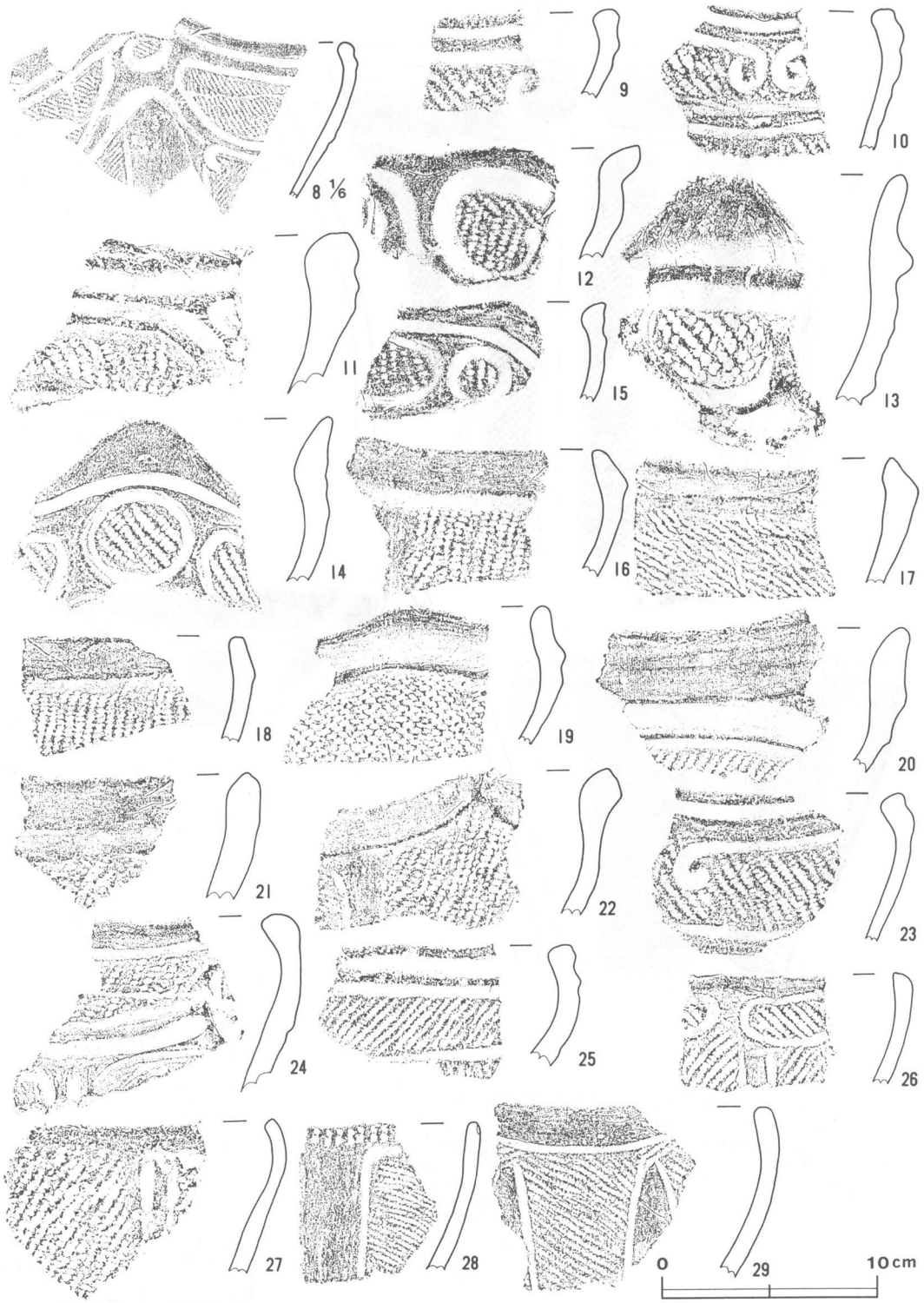
平面形は，推定で長径5.2ｍ，短径5.0ｍの不整円形を呈しており，長径方向は，N－6°－Eを指しているものと思われる。壁は，締まりのあるロームで，南東壁は，ほぼ垂直に，他は，外傾して立ち上がっている。壁高は，18～22cmである。床面は，中央部が若干高く硬く踏み固められて多少凹凸がみられる。床面の南側は，攪乱された新しい落ち込みがみられる。北東部は，第34号住居跡によって切られており，本跡の床面と第34号住居跡の床面との高低差は，約４cmである。炉は検出されなかった。ピットは，13か所検出され，主柱穴は，P_5・P_6・P_9・P_{11}・P_{16}・P_{17}の６か所と考えられる。主柱穴の規模は，長径30～56cm，短径25～48cm，深さ28～53cmである。

覆土は，上層に締まりのある暗褐色土が，下層には軟らかい褐色土が自然堆積している。

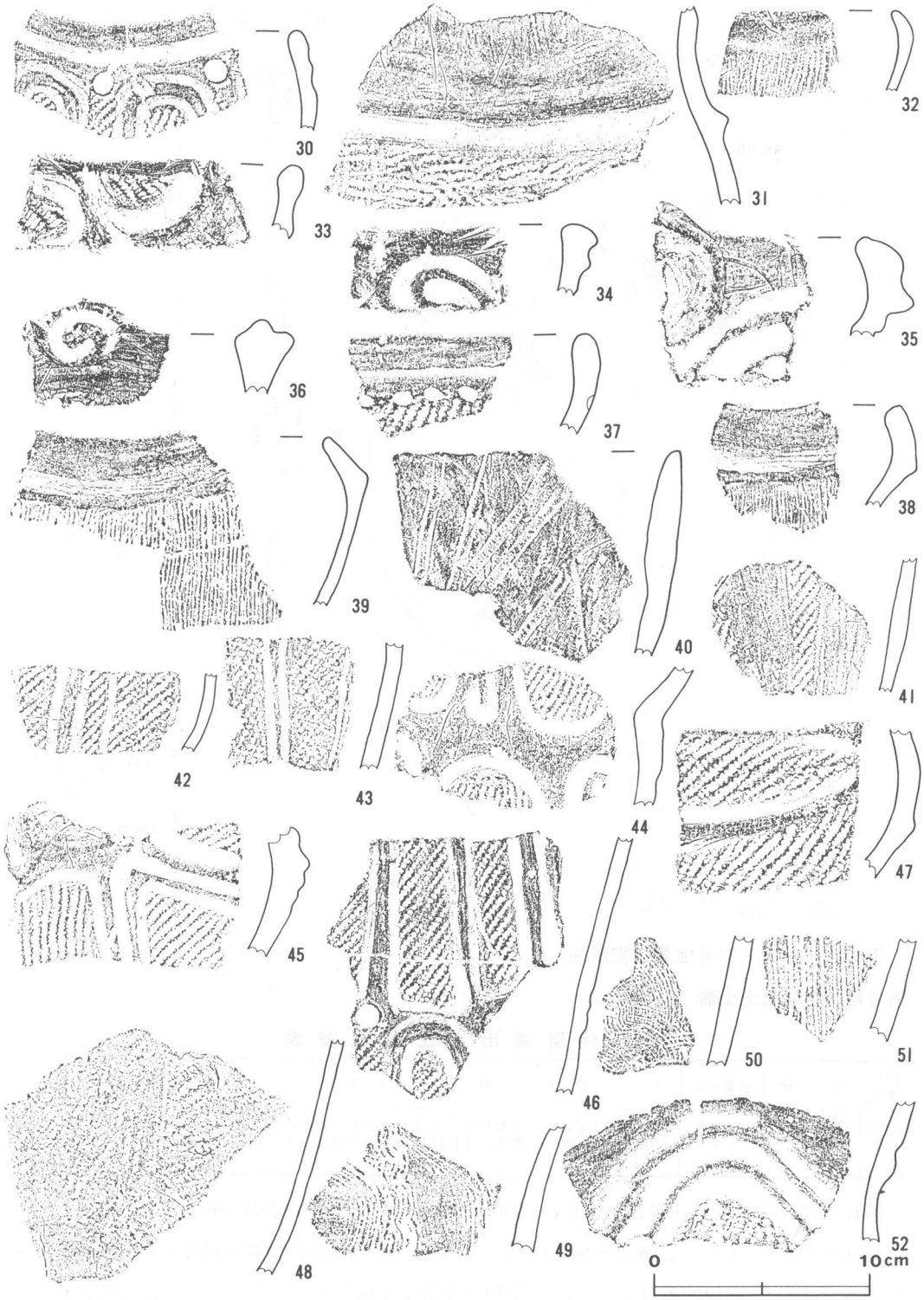
遺物は，覆土中から縄文土器片1,222点，石１点が出土している。西側のほぼ床面から，深鉢形土器の底部（第42図60）が出土している。本跡は，出土遺物から，縄文時代後期前葉に比定されるものと思われる。



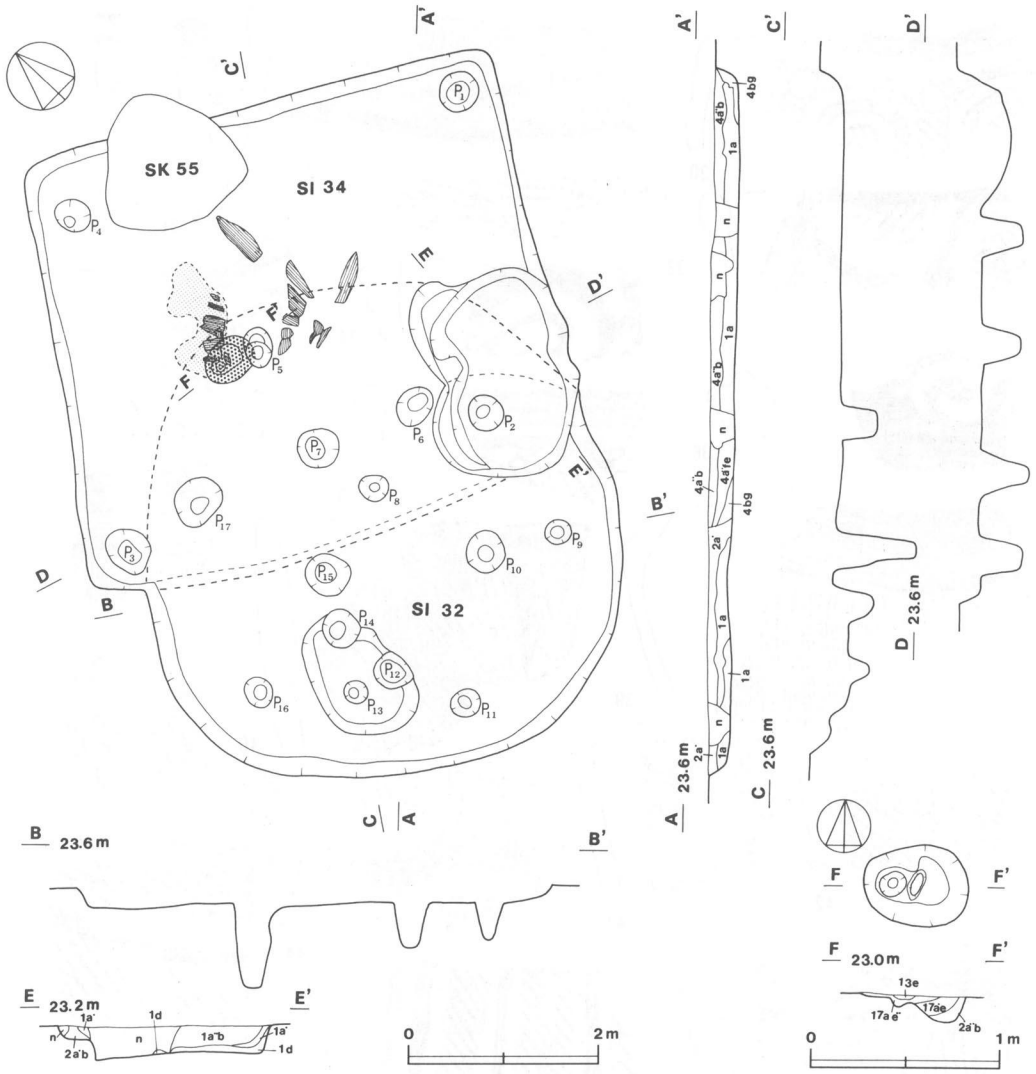
第37図　第31号住居跡出土遺物実測図　(1)



第38図　第31号住居跡出土遺物拓影図　(2)



第39図　第31号住居跡出土遺物拓影図　(3)



第40図　第32・34号住居跡実測図

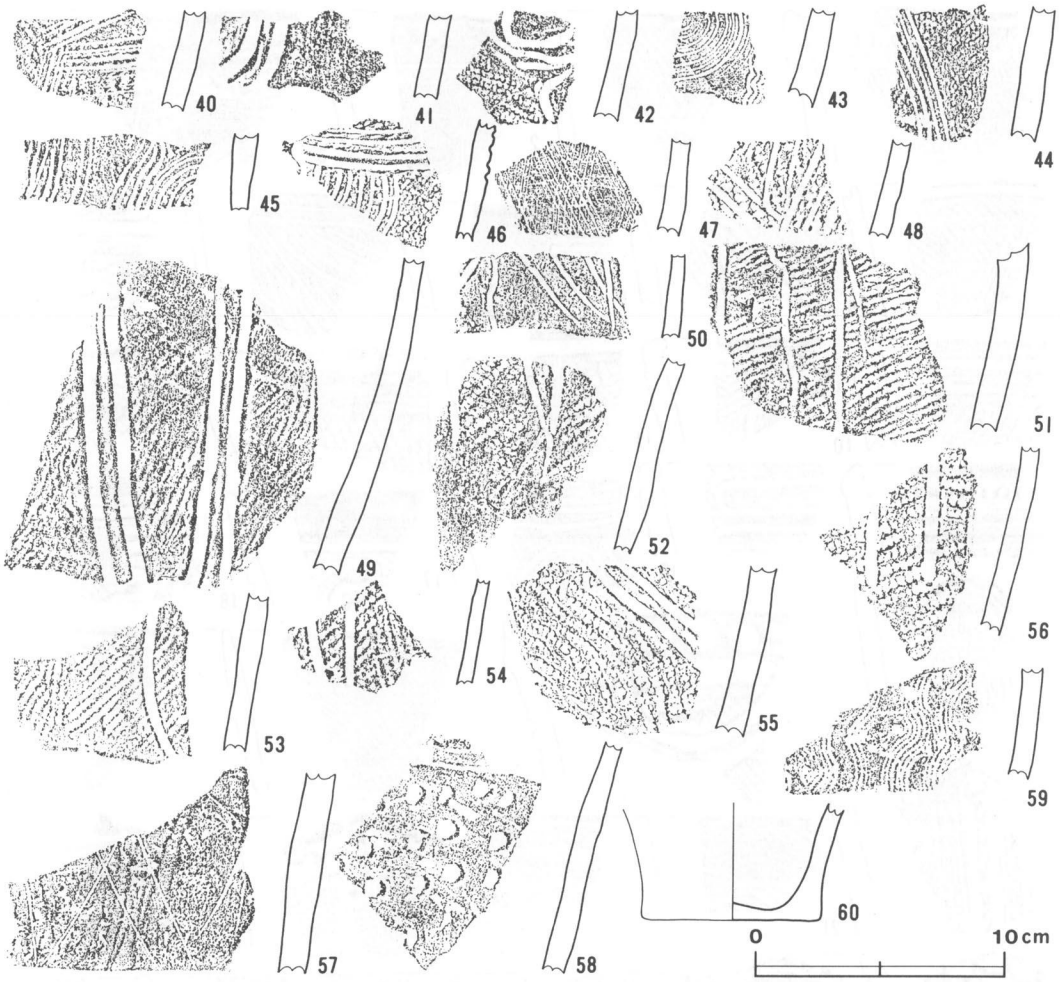
第32号住居跡出土土器

住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
第42図 60	深鉢形土器	B(4.8) C 7.2	胴部下位は平底からやや外反して立ち上がる。胴部中位以上欠損。胴部外面ヘラ磨き，上位に縄文が施されている。内面ナデ。	砂粒 普通 にぶい橙色	10% P164

第41・42図は，第32号住居跡から出土した縄文土器及び土器片の実測図・拓影図である。1～29は，口縁部片である。1・2は，縄文が施されている。3・4は，口縁部無文帯と胴部との境に1条の沈線が施され，3は，曲線的条線文が，4は，斜位に条線文が施されている。5は，口唇部に1条の沈線が巡り，縄文地文上に斜位に平行沈線が施されている。6は，4条の平行沈線により区画文が

第41図　第32号住居跡出土遺物拓影図　(1)



第42図　第32号住居跡出土遺物実測図・拓影図　(2)

描かれている。7～9は，縄文地文上に沈線が，横位，斜位に施されている。10は，口縁部に2条の沈線が巡り，以下沈線により曲線的モチーフが描かれている。11は，沈線により曲線的文様が描かれている。12・13は，口唇部に1条の沈線が巡り，以下縄文が施されている。14・15は，キザミ目が施された隆線が貼付されている。16は，沈線による横長の楕円区画文が施されている。17は，口縁部に3条の沈線が巡り，胴部には，沈線による曲線的モチーフが描かれている。地文は縄文である。18・19は，蛇行沈線が垂下している。20は，波状口縁を呈する口縁部片で，波頂部から平行沈線が垂下し，それを挟んで，沈線により弧状文が描かれている。21は，口縁部に施された円形刺突文からキザミ目が施された隆線が垂下し，それを挟んで縦位に数条単位の平行沈線が施されている。22は，口縁部に円形刺突文が巡り，2条の沈線による弧状文が描かれている。23・24は，内側に1条の沈線が巡り，外面は縄文が施されている。25は，波状縁を呈し，内

側に１条の沈線を有しており，口縁直下に刺突を施した隆線が巡る。波頂下からも同様の隆線がわずかに垂下している。26は，粘土ひもを口縁部に縦位に貼付し，その下端に刺突を加えている。27・28は，沈線が横位，斜位に施されており，内側には１条の沈線が巡る。29は，沈線により幾何学的モチーフが描かれ，区画内に縄文が施されている。30～59は胴部片である。30は，キザミ目の付された隆線が垂下している。31～34は，蛇行沈線が垂下している。35は，幅の広い２条の沈線が垂下し，区画内には蛇行沈線が垂下している。36・37は，沈線により曲線的，直線的文様が描かれている。38は，縄文地文上に沈線による区画文を施している。39・40は，沈線が斜位に施されている。41・42は，沈線による曲線文が施されている。43は，沈線が同心円上と波状に施されている。44・45は，縄文地文上に半截竹管状工具による沈線が曲線的に斜位に施されている。46は，沈線を横位に巡らし，さらに，同様の沈線で曲線的モチーフが描かれている。47は，条線文を斜位に施している。48は，縄文地文上に半截竹管状工具による沈線が斜位に施されている。49は，縄文地文上に２条単位の沈線が垂下している。50～56も縄文地文上に沈線が，斜位，縦位に，また，曲線的に施されている。57は，細沈線が斜位に交差するように施されている。58は，破片上端部に細い２条の沈線が巡り，以下「Ｄ」字状を呈する刺突文が横位に数段施されている。59は，条線文が波状に施されている。

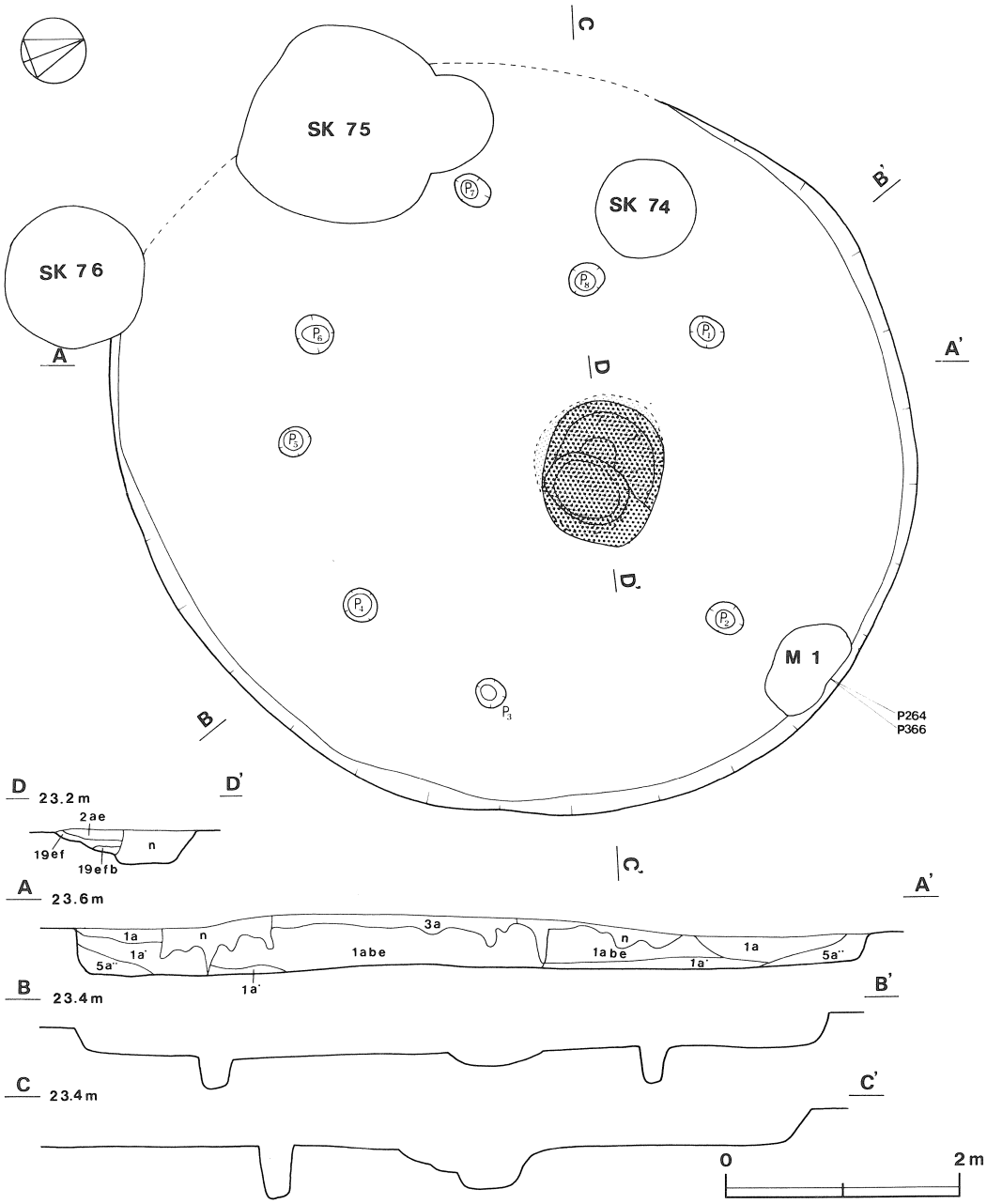
第33号住居跡（第43図）

本跡は，調査区の南部J3g_5区を中心に確認された住居跡で，第42号住居跡の南側4.3ｍに位置している。本跡の北西側で第74号土坑，西側で第75号土坑，南西側では第76号土坑と重複している。

平面形は，長径が推定で7.04ｍ，短径6.37ｍの楕円形を呈しており，長径方向は，N－33°－Eを指していると思われる。壁は，黒色土混じりのソフトロームで軟らかい。西壁は，耕作による攪乱と，３基の土坑が重複していたため，立ち上りは不明である。他の壁は，外傾して立ち上り，壁高は，24～35cmである。床面は，締まりのあるロームで，中央部が若干凹んでいる。炉は，中央からやや北東よりに位置している。炉の南東側は，攪乱により切られているため，平面形は推定で長径118cm，短径103cmの楕円形を呈し，床面を深さ19cmほど，皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉内には，少量の焼土粒子，焼土ブロックを含む赤褐色土が推積している。炉床は，ロームが熱を受けレンガ状に赤く焼けて硬く，特に，北西側では，赤化した焼土ブロックが凹凸状を呈している。ピットは，８か所検出されている。主柱穴は，P_1～P_3・P_5・P_7と考えられ，規模は，長径20～36cm，短径24～27cm，深さ31～48cmで，五角形状に配列されている。

覆土は，一部攪乱を受けているが，下層や壁際は，褐色土，明褐色土が自然流入的に堆積している。覆土には，ローム粒子，焼土粒子が含まれ，床面に近ずくにつれてローム小ブロックが混入し締まっている。

遺物は，縄文土器片2,848点，埋甕1基，石2点が出土している。縄文土器片は，住居跡の中央部及び西部に集中し，覆土の上層から中層にかけて多く出土している。住居跡の西側の覆土中から底部片（第47図67）が出土している。また，北東壁際の床面には，深鉢形土器（第145図1）が正位で埋設されており，埋甕として使われたものと思われる。さらに，この埋甕の蓋として使われたと思われる深鉢形土器（第146図2）が，この埋甕の上面から一括して出土している。



第43図　第33号住居跡実測図

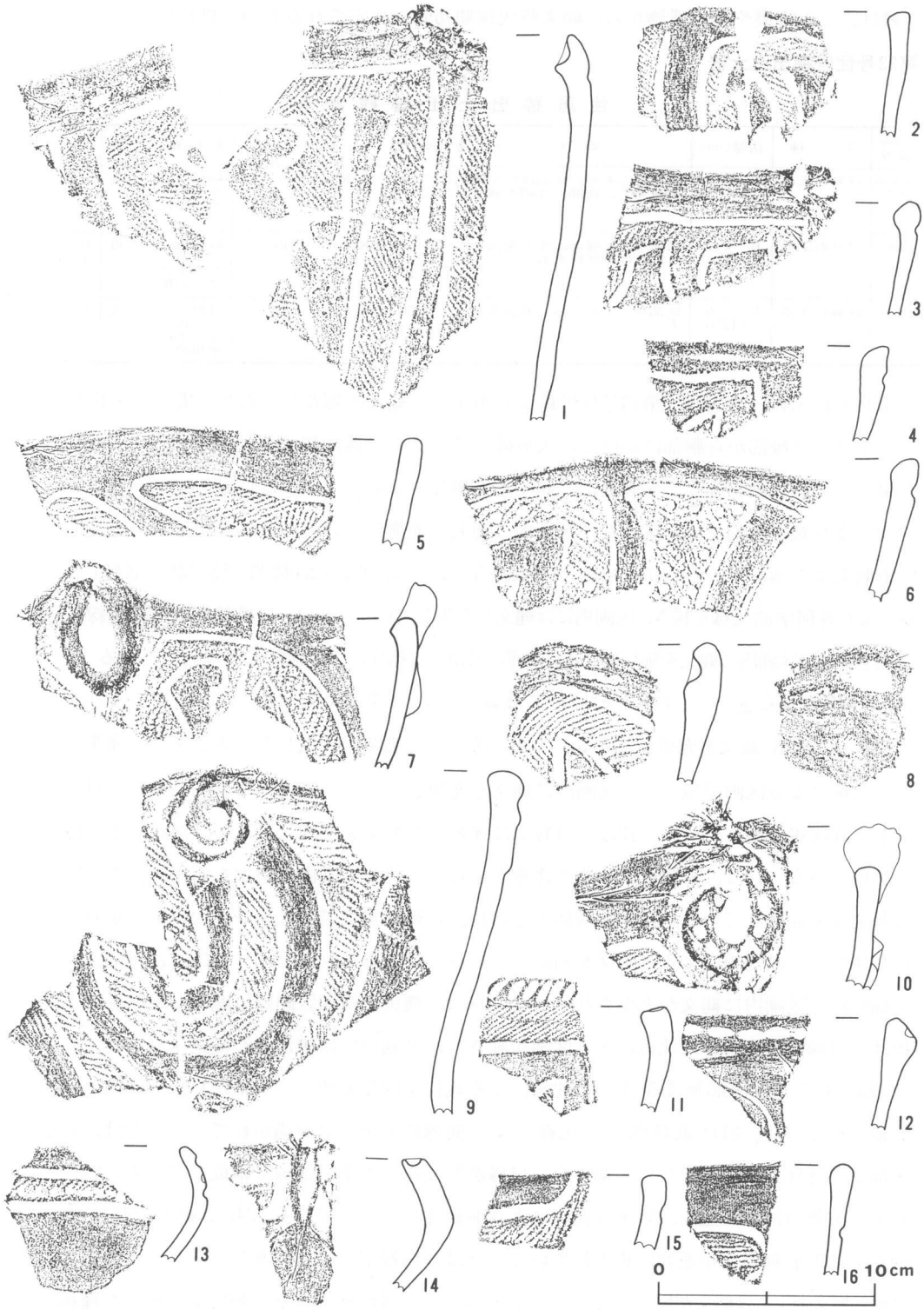
本跡は，この埋甕や他の遺物から，縄文時代後期初頭に比定されるものと思われる。

第33号住居跡出土土器

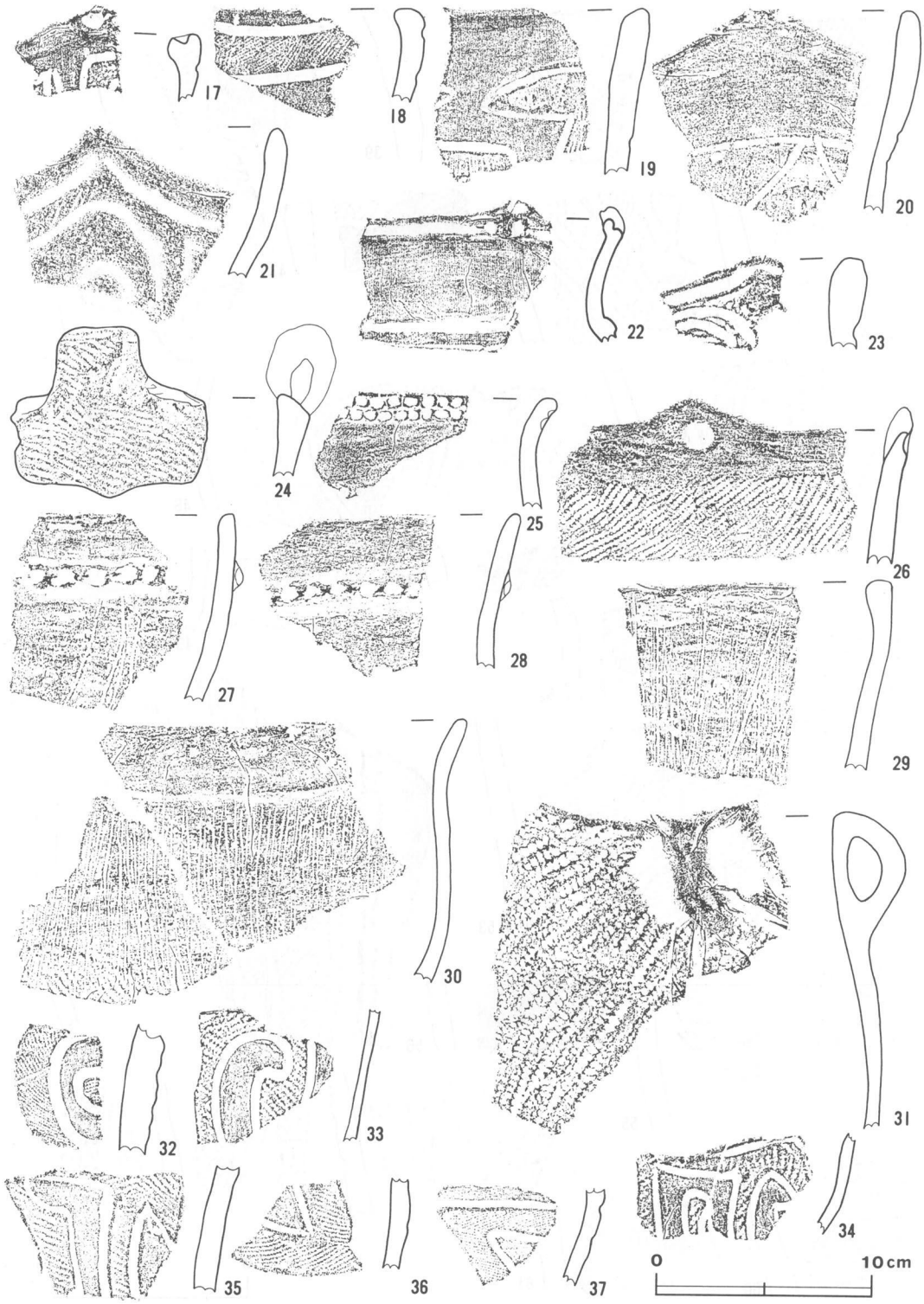
住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
第47図 67	深鉢形土器	B 6.3 C 10.0	底部片である。底部はやや突出しており，外面は縦ナデ，内面横ナデ。底部には網代痕を有している。	砂粒・長石・石英 やや不良 明赤褐色	10% P 244
68	深鉢形土器	B 4.7 C(12.0)	底部片で，底部はやや突出している。外面縦ナデ，内面ナデ。底部には網代痕を有している。	砂粒・長石・雲母・石英 やや不良 にぶい橙色	10% P 250
69	深鉢形土器	B 2.0 C(12.0)	底部片である。内・外面共ナデ。底部には網代痕を有している。	砂粒・長石・石英・雲母 やや不良 明褐色	10% P 249

第44・45・46・47図は，第33号住居跡から出土した縄文土器及び土器片の実測図・拓影図である。1は，口縁部から胴部にかけての大形破片である。口縁部無文帯と胴部には，池線により「M」字状の区画を施し，区画内には縄文を充填している。2～29は口縁部片である。2～6は，沈線により幾何学的文様を区画し，区画内に縄文を充填している。6は，区画内の縄文地文上に円形刺突文を施している。7・8は，波状縁を呈し，7は，波頂部に隆帯を楕円状に貼付し，以下沈線により幾何学的文様を描き，区画内には縄文を充填している。8は，口縁部無文帯に沈線による区画文を施して区画内に縄文を施している。内面の波頂下に指圧による刺突文が施されている。9は，波頂下に隆線による逆「C」字状文を貼付し，隆線上には，1条の沈線を加え，以下沈線により渦巻状文を描き，区画内に縄文を充填している。10は，波状下に刺突文を施した「J」字状の隆帯を貼布し，以下沈線による区画を施して，区画内に縄文を充填している。11は，口唇部にキザミ目を巡らし，以下には沈線を施している。12は，口唇部に連続した刺突文を施し，以下は沈線による曲線文が描かれている。13は，口縁部に2条の沈線を巡らし，沈線区画内に縄文を充填し，さらに連続した刺突文を巡らしている。14は，浅鉢と思われ，口縁部無文帯には，やや太い沈線が垂下し，それを挟むように沈線による区画文が描かれているものと思われる。15～17は，沈線による区画文が描かれ，区画内に縄文が充填されている。18は，横位の沈線区画内に縄文が充填されている。19は，口縁部無文帯下に沈線による区画が施され，区画内には細沈線が縦位に施されている。20は波状縁で，口縁部無文帯下には沈線による幾何学的なモチーフが描かれ，区画内には刺突文が施されている。21は波状縁で，沈線による曲線的モチーフが描かれている。22は，口縁部が頸部より外反して立ち上がり，幅の広い口縁部無文帯を2条の沈線で構成している。23は，口縁直下に1条の沈線が巡り，以下は沈線により曲線文が描かれている。24は，把手を有し，25は，口縁直下に円形刺突文が並列に施されている。26は，口縁部に突起を有し，突起下に刺突文を施し，口縁部無文帯下には縄文が施されている。27・28は，口縁部無文帯下に刺突文を施した隆線が貼付され，27は，以下に細沈線が施されている。29は，条線文が縦位に施されている。30は，口縁部

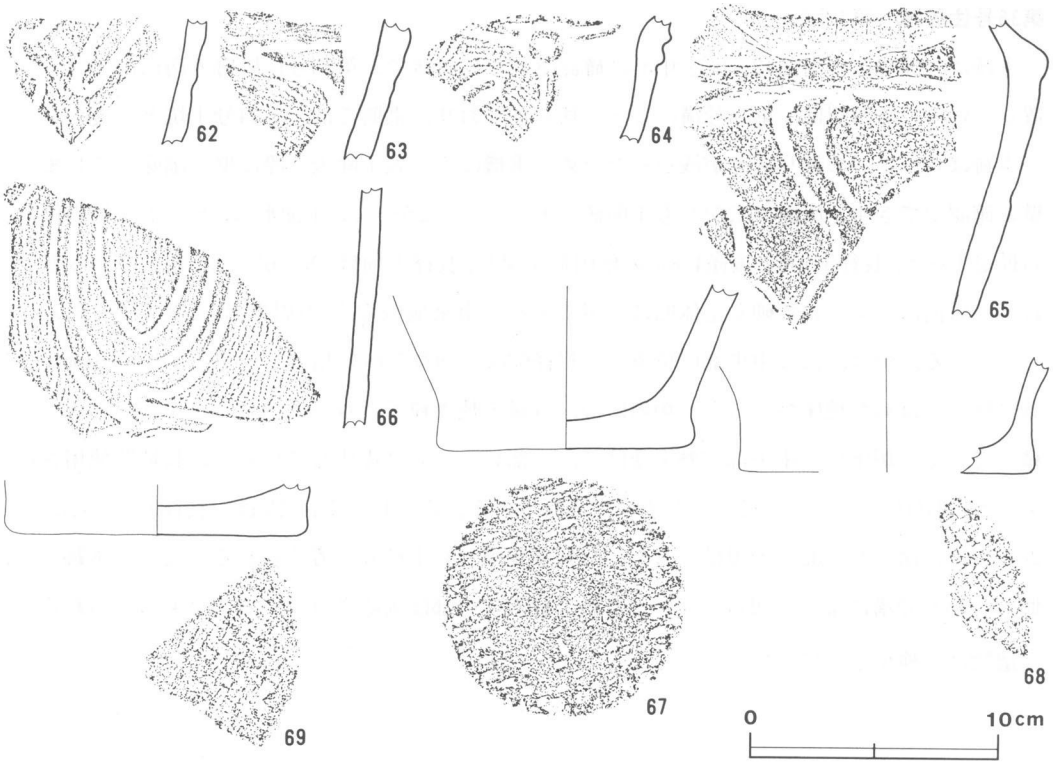


第44図　第33号住居跡出土遺物拓影図 (1)



第45図　第33号住居跡出土遺物拓影図 (2)

第46図　第33号住居跡出土遺物拓影図　(3)



第47図　第33号住居跡出土遺物実測図・拓影図　(4)

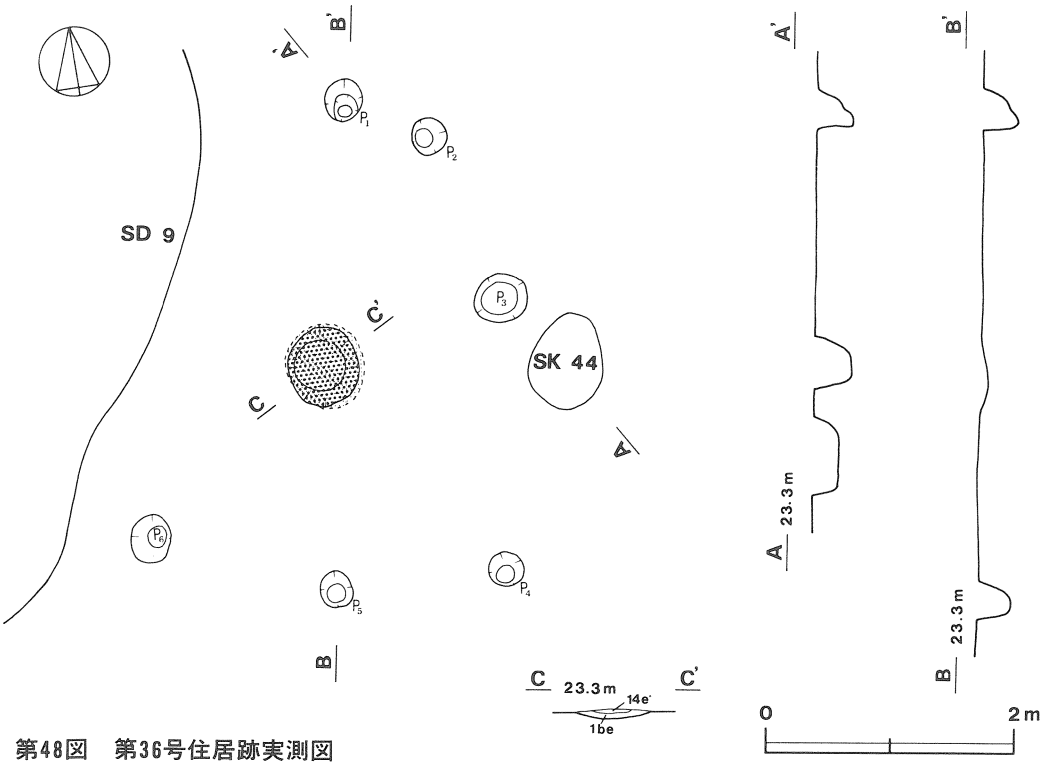
から胴部にかけての破片で，口縁部は頸部よりやや外反して立ち上がり，口縁部無文帯と胴部との境には１条の沈線が巡り，胴部には櫛歯状施文具による条線文が縦位に施され，下半部には，縄文が施されている。31は，口縁部に橋状把手を有する口縁部から胴部にかけての破片で，器外面には縄文が施されている。32～66は胴部片である。32・33は，沈線による曲線的モチーフが描かれ区画内に縄文が充塡されている。34～37は，沈線による幾何学的モチーフが描かれ，区画内に縄文が施されている。38～53は沈線による曲線的モチーフが描かれ，モチーフ内には縄文が施されている。54は，刺突が加えられた太い隆線が垂下し，また，沈線により曲線的モチーフが区画され，区画内には縄文が充塡されている。55・56は，沈線による曲線的モチーフが施されている。55は，区画内に円形刺突文が施されている。57～59は，沈線区画の縄文帯に刺突文が施されている。60は，刺突文と曲線的な条線文が組み合わされている。61は，沈線区画内に刺突文が施されている。62～64は，沈線による幾何学的モチーフが描かれ区画内は磨り消しが施されている。65は，口縁部下端に１条の沈線が巡り，胴部には２本組みの沈線で曲線的モチーフが描かれ，区画間には小さな刺突文が縄文状に施されている。66は，縄文地文上に沈線により，曲線的モチーフが施され，区画内には磨り消しが施されている。

第36号住居跡（第48図）

本跡は，調査区の南部J3i_2区を中心に確認された住居跡で，第33号住居跡の南西側10.4mに位置している。北西側は，第9号溝によって切られており，東側では，第44号土坑と重複している。

本跡はロームへの掘り込みが浅かったため，重機による表土除去の際に壁を削除してしまい，壁の確認ができず，床面の広がりも不明確であった。したがって，平面形は，ピットや炉の位置から推定すると，長径5.2m，短径4.8mの楕円形を呈し，長径方向は，N－6°－Eを指していると思われる。床面は，ロームで硬く全体的に平坦である。南東側及び炉の周囲は，特に硬く踏み固められている。炉は，ほぼ中央部に位置し，長径63cm，短径55cmの楕円形を呈し，床を6cmほどⅢ状に掘りくぼめた地床炉である。炉内には，少量の焼土粒子，ロームブロックを含む褐色土が堆積している。炉床は，中央部が熱を受けて，一部レンガ状に赤化しているが，長期間使用されたものとは思われない。ピットは，6か所検出されている。P_1・P_3・P_4・P_6は，長径29～45cm，短径28～39cm，深さ28～35cmの規模を有し，配列や規模から主柱穴と考えられる。なお，本跡の北西側は，第9号溝によって切られているため，柱穴の一部は削除されていることも考えられる。

遺物は，検出されていない。



第48図　第36号住居跡実測図

第38号住居跡（第49図）

本跡は，調査区の南部J3b_3区を中心に確認された住居跡で，第42号住居跡の北西側3.2mに位置している。本跡の中央部より南側では，第46号住居跡と重複しているが，土層断面図から本跡の方が古く，中央部よりやや南側では，第73号土坑と重複しているが，新旧関係は不明である。南西側は，古墳時代前期の第37号住居跡と接している。また，中央部よりやや南東側に第11号地点貝塚が検出されている。床面より5～10cmほどの覆土上に貝が堆積していることから，本跡の廃絶後，シオフキを主体にした貝が投棄されたものと思われる。

平面形は，長径7.29m，短径6.74mの楕円形を呈し，長径方向は，N－24°－Eを指している。壁は，南西壁の一部の立ち上がりは不明である。全体的に黒色土混じりのローム壁で軟らかく，外傾して立ち上がり，壁高は，12～28cmである。床面は，平坦で堅緻であり，特に，炉の周囲には灰が広がり硬く踏み固められている。炉は，中央からやや北東寄りに位置し，長径115cm，短径75cmの楕円形を呈し，南西側を縄文土器片で囲った2段掘り込みを有する地床炉である。床面から炉床までの深さは，27cmほどで，段部から炉床までの深さは，21cmほどである。土器片で囲った炉内には，上層に焼土粒子を極少量と灰を少量含む軟らかい灰褐色土，中層に焼土粒子を少量，灰を多量に含み硬く締まっている浅黄橙色土，下層に焼土粒子を少量，灰を多量に含む締まりを帯びた灰白色土がレンズ状に堆積している。炉床は，レンガ状に赤化し硬く焼けている。ピットは，19か所検出されている。主柱穴は，配列や規模から，P_1・P_3・P_8・P_{10}・P_{12}・P_{13}の6か所と考えられ，長径53～70cm，短径48～64cm，深さ31～71cmの規模を有している。P_6は，長径86cm，短径68cmの楕円形を呈し，床面を31cmほど擂鉢状に掘り込んでおり，覆土から小型のハマグリが少量検出されている。

覆土の中央からやや南東側に，シオフキを主体にした貝層がみられ，北側から貝が投棄された状態で堆積している。覆土は，この貝層を取り囲むように上層に極少量の焼土粒子を含む締まりのある暗褐色土，下層に少量の焼土粒子を含む締まりを帯びた暗褐色土が自然堆積の状態で堆積している。

遺物は，住居跡のほぼ中央部に所在する第11号地点貝塚を取り囲むように覆土上層から下層にかけて，縄文土器片2,283点，石6点が，北側に若干集中して出土している。住居跡のやや東側の覆土から深鉢形土器の大破片（第51図2），南西壁際の覆土から深鉢形土器（第51図3），西側の覆土から深鉢形土器（第51図1）が出土している。さらに，本跡に伴うものと思われる埋甕（M10）が南側に検出され，床面を28cmほど掘り込んで正位で埋設されている。

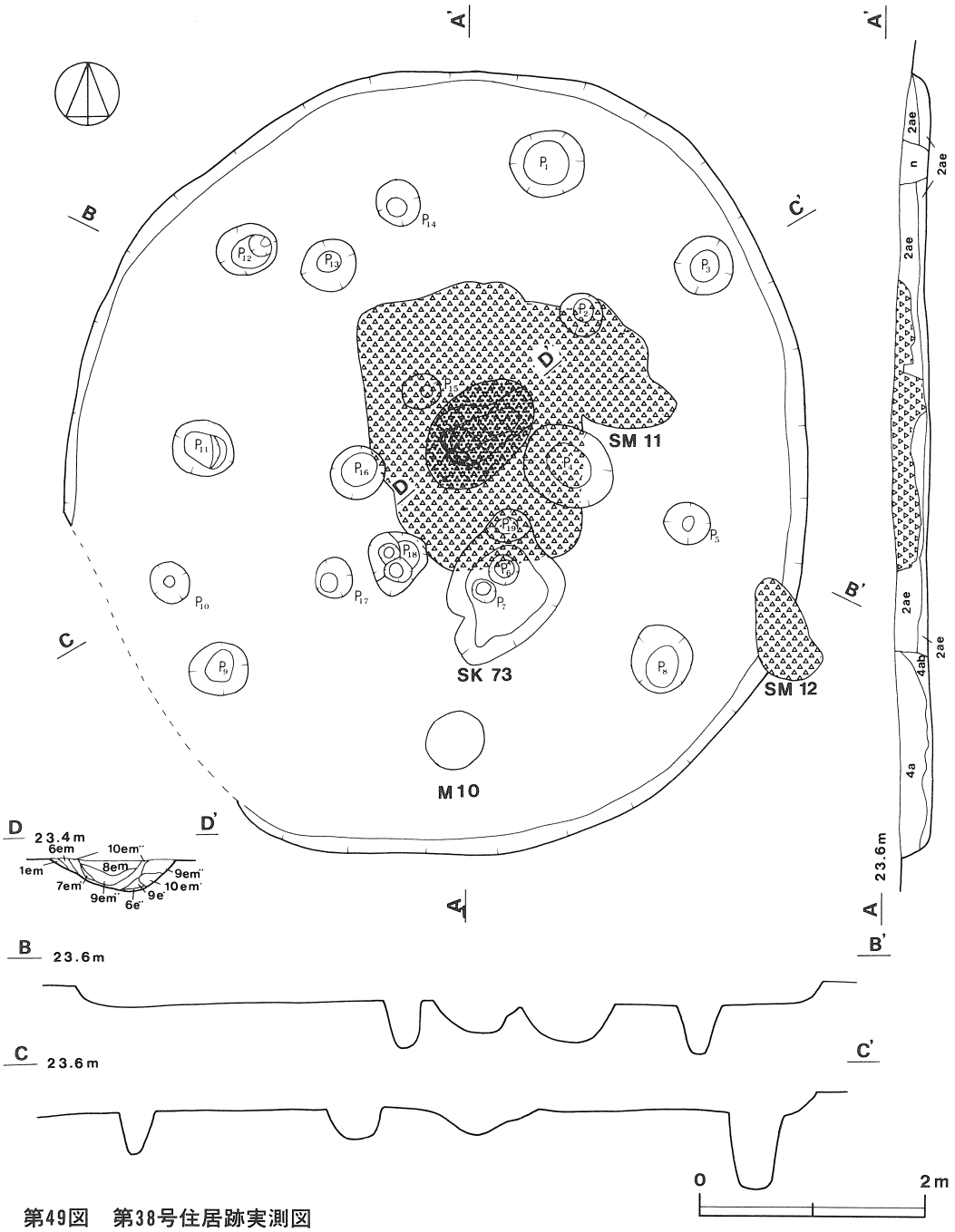
本跡は，出土遺物や埋甕から縄文時代後期前葉に比定されるものと思われる。

第38号住居跡出土土器

住居跡出土土器観察表

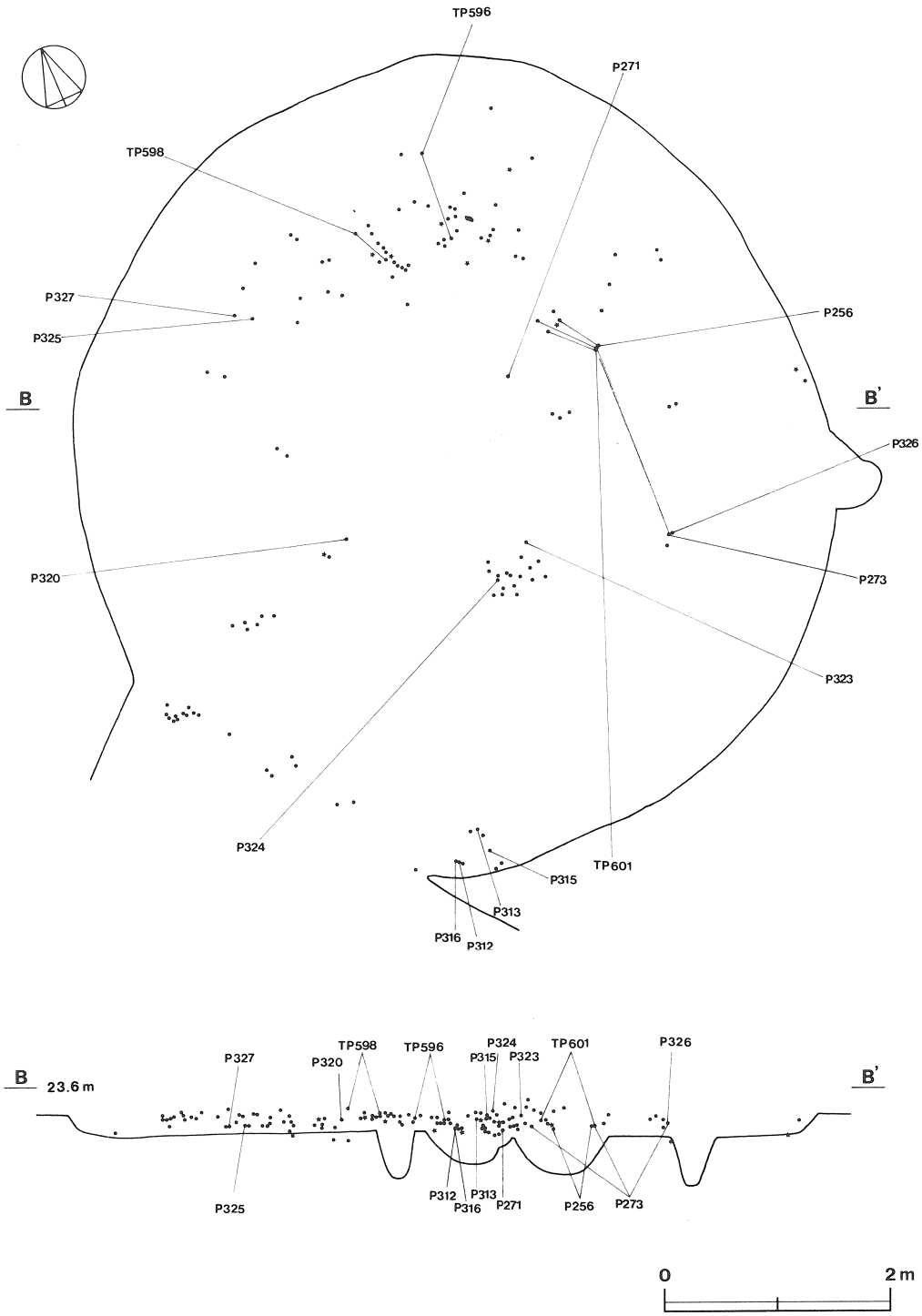
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
第51図 1	深鉢形土器	A 26.7 B(23.0)	波状を呈する口縁部に4単位の小突起を有し，胴下半部からほぼ外傾して立ち上がっている。口縁部には，櫛歯状工具による条線文が巡り，胴部には小突起から垂下する条線文を中心に，条線文が波状，弧状に描かれる。内面横ナデ。	砂粒・長石 普通 暗赤褐色	80% P320
2	深鉢形土器	A(30.4) B(32.2)	口縁部から胴部にかけての大形破片で，口縁部には小突起を有し，2個の円形刺突文を横位に施し，1条の沈線が巡る。縄文地文上の胴部には，突起下から2条の沈線により「し」の字状と逆「し」の字状を呈するモチーフを交互に施している。内面横位のヘラナデ。	砂粒 普通 にぶい褐色	20% P256
3	深鉢形土器	A(29.6) B(27.4)	平縁の口縁部が内彎して立ち上がり，器面全体に雑な無節縄文が施されている。胴部下位は縦位のヘラナデが施されている。内面胴上半部横ナデ。	砂粒 普通 にぶい黄橙	40% P313
4	深鉢形土器	A(29.8) B(25.5)	口縁部はほぼ外傾して立ち上がる。口縁部は幅の狭い無文帯で，胴部には縄文が施文されている。胴下半部は縦位のナデが施されている。内面縦ナデ。	砂粒 普通 にぶい橙色	20% P323
5	深鉢形土器	A(27.8) B(27.5)	胴部上位が若干張り底部が欠損している。幅の広い口縁部無文帯下に2条の沈線が巡り，胴部には単節縄文LRが横位，斜位に施文されている。胴部下位は丁寧な縦位のヘラミガキが加えられている。内面胴上半部横ナデ，下半部縦ナデ。	砂粒 普通 にぶい橙色	70% P316
6	深鉢形土器	A(36.5) B(20.4)	外傾して立ち上がる平縁の口縁部から胴部にかけての破片である。口縁直下に連続して太めの円形刺突文を施している。胴部には沈線による格子目状文を描いている。内面ナデ。	砂粒 普通 浅黄橙色	15% P312
7	深鉢形土器	B(2.8) C(10.5)	底部片である。外面は縦位のナデが加えられている。内面横ナデ。	砂粒 普通 にぶい橙色	10% P327
8	深鉢形土器	B(9.3) C 11.0	底部片で，外面は縦位のナデが加えられている。内面ナデ。	砂粒 普通 明赤褐	15% P271
第52図 9	深鉢形土器	A 16.8 B(15.5)	口縁部が胴部から外傾して立ち上がっている。全面に縄文が施されている。胴下半部欠損。内面胴上半部横ナデ，胴下半部縦ナデ。	砂粒 普通 にぶい褐色	70% P278
10	深鉢形土器	A(25.2) B(17.5)	口縁部は若干くびれる頸部からやや外反して立ち上がっている。幅の狭い口縁部無文帯を有し，以下全面に縄文を施文している。内面胴上半部横ナデ，胴下半部斜位のヘラナデ。	砂粒 普通 にぶい褐色	10% P325

第52・53・54図は，第38号住居跡から出土した縄文土器及び土器片の実測図・拓影図である。11は，波状縁を呈する口縁部から胴部にかけての大形の破片である。幅の広い口縁部無文帯下の縄文地文上には，沈線による蕨手文と曲線文が描かれている。12～33は口縁部片である。12・13は，波状縁を呈し，沈線による蕨手文が描かれている。14は，波状縁を呈する口縁部無文帯下に1条の沈線が巡り，縄文地文上に沈線による蕨手文が描かれている。15は，口縁部無文帯下に沈線が曲線的に施されている。16～18は，条線文が施されており，16は，縦位に，17・18は，波状に施されている。19は，口縁直下に条線文が巡り，以下縄文地文上に条線文が弧状に施されている。20は，頸部から内彎して立ち上がり，口縁直下に1条の沈線が巡り，以下は蛇行沈線が施されている。地文は無文である。21は，沈線により文様が施されている。22は，縄文地文上に沈線を横位，斜位に施している。23は，波状縁を呈し，突起下に円形の穿孔を施し，以下縄文地文上に沈線を垂下させている。24は，突起をもち，突起には4個の円形押圧文を施し，口縁部には1条の沈線が巡る。突起下に沈線による蕨手文を区画し，区画内に縄文を充填している。25は，円形刺突文の施された口縁直下から数条の沈線が垂下している。26～28は，口縁直下に1条の沈線が

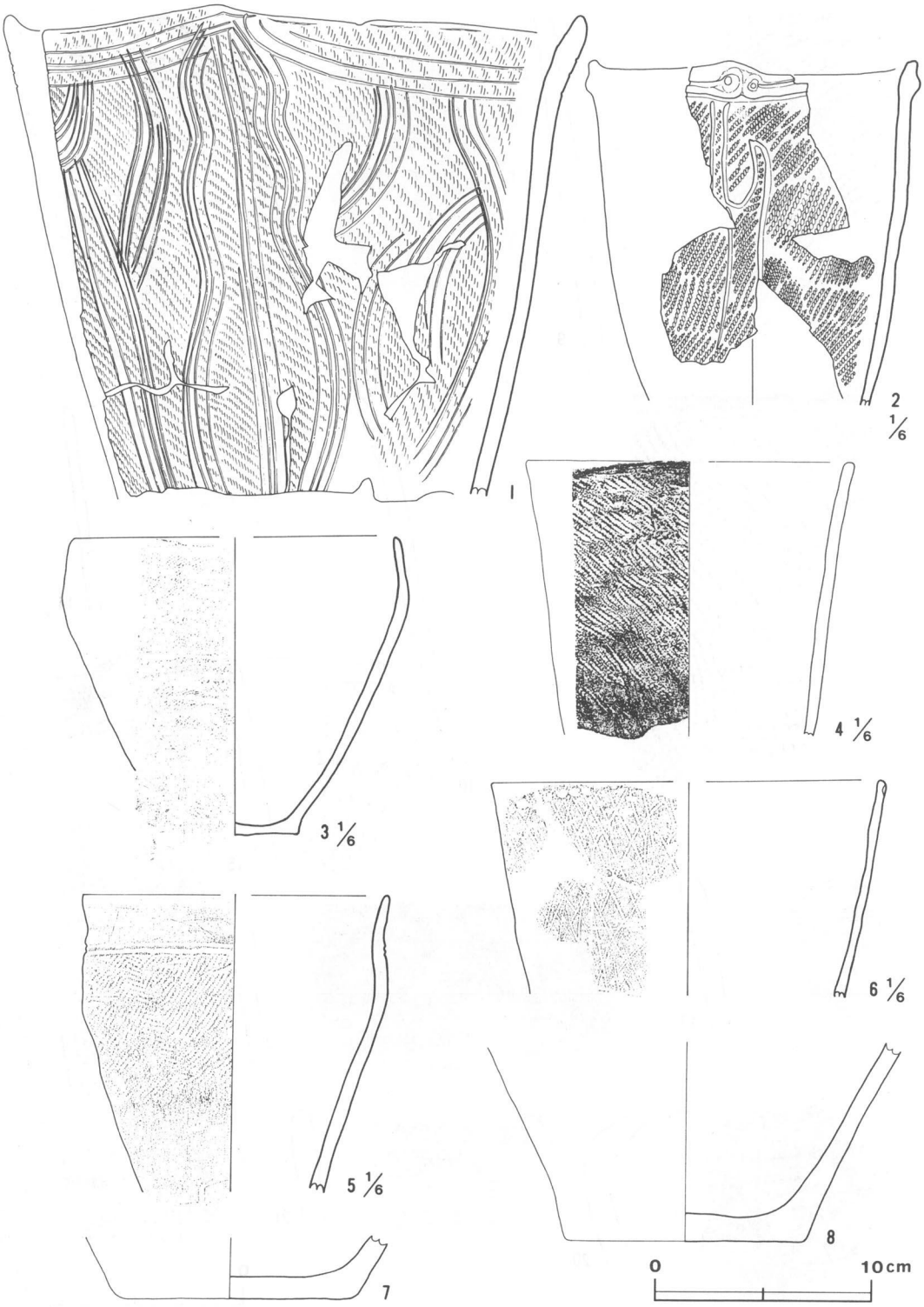


第49図　第38号住居跡実測図

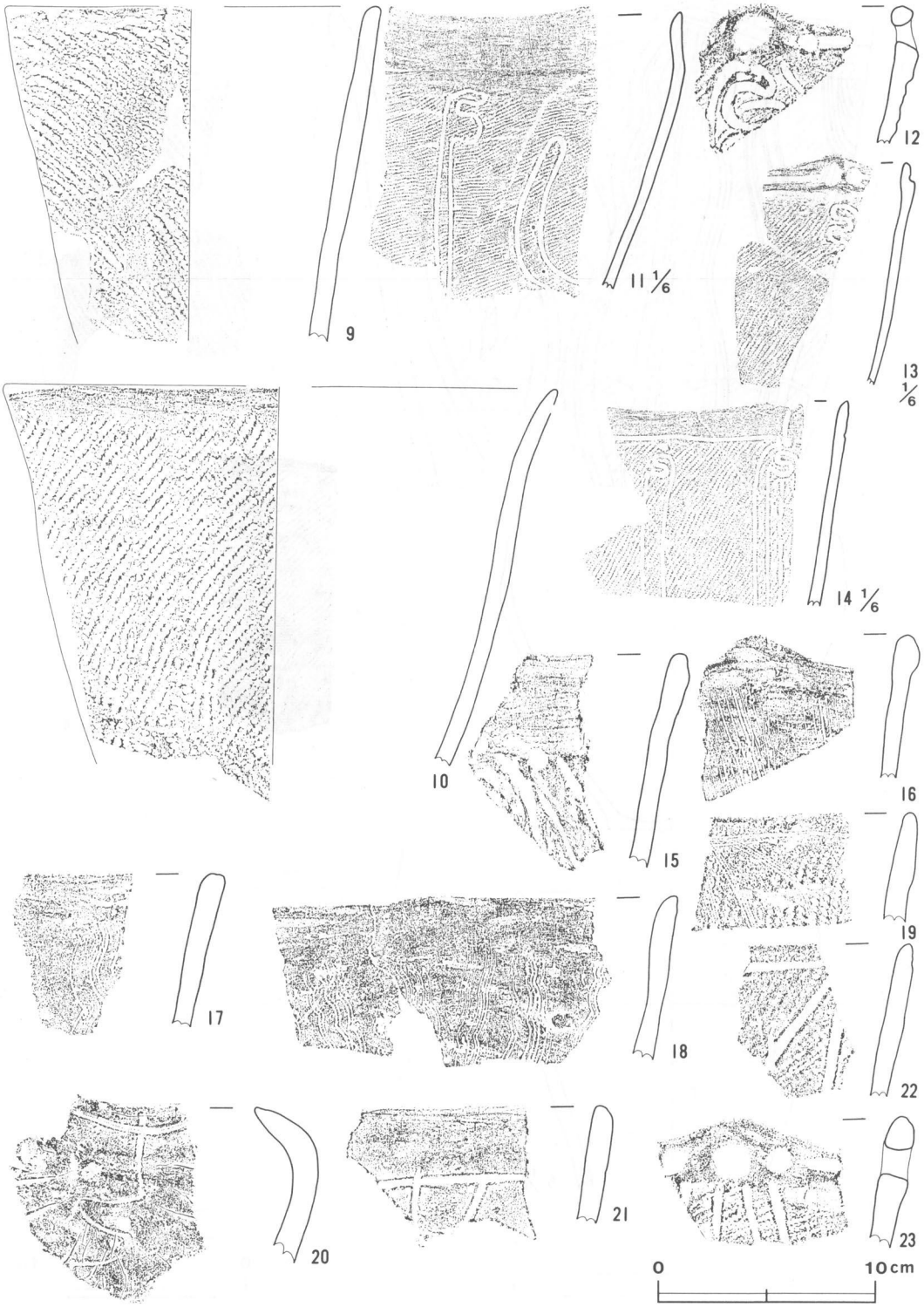
巡り，胴部は縄文地文上に沈線による区画文が描かれている。29は，粒の粗い縄文地文上に横長の楕円区画が沈線で施されている。30は，沈線が斜位に，曲線的に施されている。31は，口縁直下に円形刺突文が連続して施され，以下は縄文が施されている。32は，小突起に棒状刺突文が施



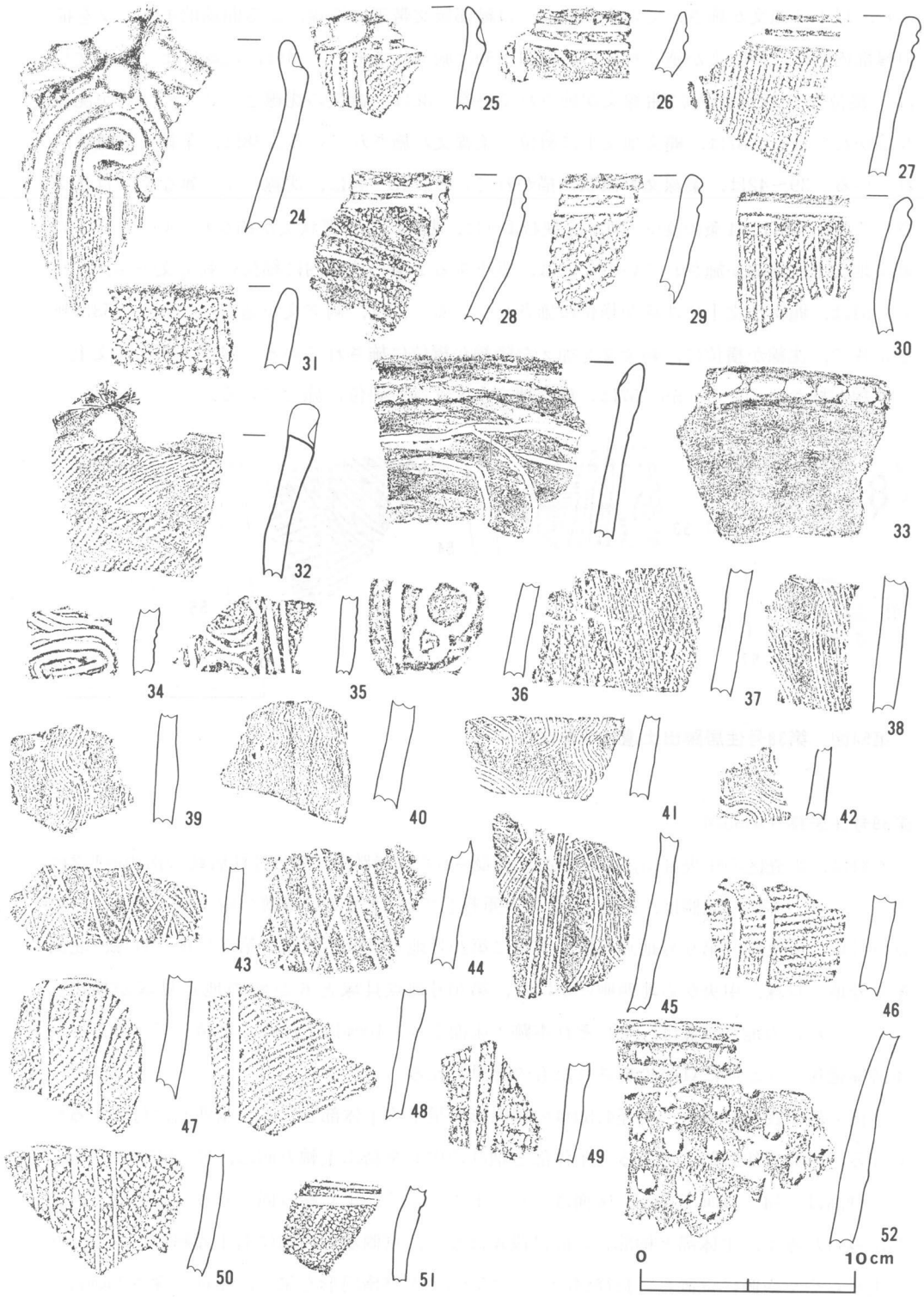
第50図　第38号住居跡遺物出土位置図・遺物出土関係図



第51図　第38号住居跡出土遺物実測図　(1)

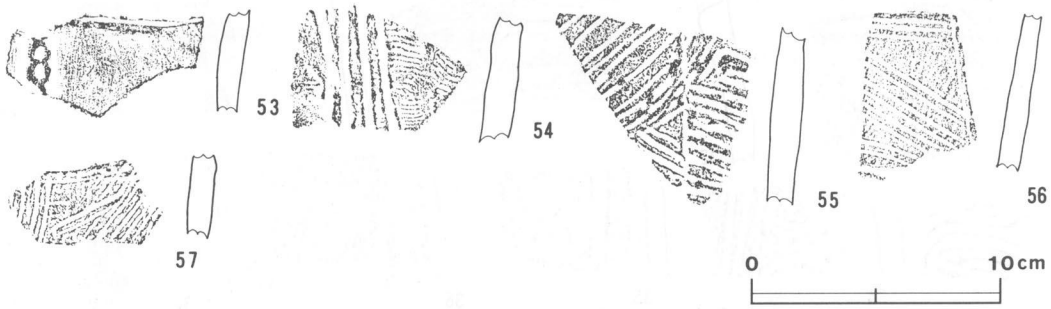


第52図　第38号住居跡出土遺物実測図・拓影図　(2)



第53図　第38号住居跡出土遺物拓影図　(3)

され，以下は縄文が施されている。33は，口縁部無文帯下に沈線による曲線的モチーフを描き，口縁部内側には押圧文が施されている。34～59は胴部片である。34は，沈線により渦巻文が，35は，縦位の沈線区画内に曲線文が施されている。36は，縦位の沈線と「８」の字文が沈線により描かれている。37は，縄文地文上に斜位の条線文が施されている。38は，条線文が弧状に施されている。39～42は，条線文が波状に描かれている。43・44は，沈線により雑な格子目状文が施されている。45は，４条の縦位の沈線を挟むように，沈線により弧状文が描かれている。46～49は，縄文地文上に沈線が施されている。50は，垂下する２条の沈線内に細長い刺突文が加えられている。51は，縄文地文上に沈線が横位に施されている。52は，刺突文が施されている。53は無文の胴部片で，沈線が横位に，刺突文を加えた隆線が縦位に施されている。54は，縄文地文上に４条の沈線が施されている。55～57は，縄文地文上に沈線を斜位に施している。



第54図　第38号住居跡出土遺物拓影図　(4)

第39号住居跡（第55図）

本跡は，調査区の中央部I3j_2区を中心に確認された住居跡で，第41号住居跡の南西側1.2ｍに位置している。本跡の北側は，第127号土坑と重複している。また，本跡の中央から東側に，第８号地点貝塚，南東側に第９号地点貝塚，南側に第29号地点貝塚，西側に第７号地点貝塚，北西側に第６号地点貝塚，中央から北西側にかけて，第30号地点貝塚と６か所の地点貝塚が検出されている。これらの地点貝塚は，それぞれ本跡の床面より，10cm以上浮いて堆積していることから，本跡廃絶後，６か所に貝が投棄されたものと思われる。

平面形は，長径4.94ｍ，短径4.50ｍの楕円形を呈する主体部と，その南西側に付帯する柄部からなる『柄鏡形住居跡』である。主体部と柄部の中心を結ぶ主軸方向は，N－14°－Eを指している。壁高は，14～31cmである。床面は，ハードロームで，よく踏み固められていて硬く，多少凹凸がみられるが，主体部と柄部との間に段差はなく，東側から西側に若干傾斜している。炉は，中央からやや南側に位置し，長径64cm，短径55cmの不整楕円形を呈し，床面を深さ26cmほど擂鉢状に掘りくぼめた地床炉である。炉内には，焼土ブロックを少量と灰を多量に含む浅黄橙色土が

充満している。炉床は，レンガ状に赤化し硬く焼けている。ピットは，主体部の壁に沿って13か所，柄部の南西端に１か所検出されており，主体部に検出されたピット相互の間隔は一定していない。ピットは，長径29～48cm，短径23～48cm，深さ48～91cmの規模を有し，やや内側に傾斜しているものもみられる。これらは壁柱穴と考えられるが，主柱穴が確認されていないので，主柱穴のかわりになったと思われる。柄部に検出された大型ピットは，長径72cm，短径63cm，深さ65cmの規模を有し，その位置からみて，出入口に関する柱穴と思われる。あるいは，埋甕が抜き取られたピットとも考えられるが，確かではない。

本跡の覆土は，部分的に耕作による攪乱がみられるが，上層には焼土粒子，炭化粒子を極少量含む暗褐色土が，下層にはローム小ブロックを極少量含む褐色土が自然堆積している。また，床面より若干浮いた状態で，ハマグリやシオフキを主体にした第８号地点貝塚の混貝土層が確認されている。

遺物は，住居跡の中央部から南側を中心に覆土から縄文土器片8,362点，石６点が出土している。住居跡の北側の覆土から小型深鉢形土器の胴下半（第57図６），南側の覆土からほぼ半完形の深鉢形土器（第57図１），口縁部から胴部にかけての破片（第57図５，第58図８）が出土している。

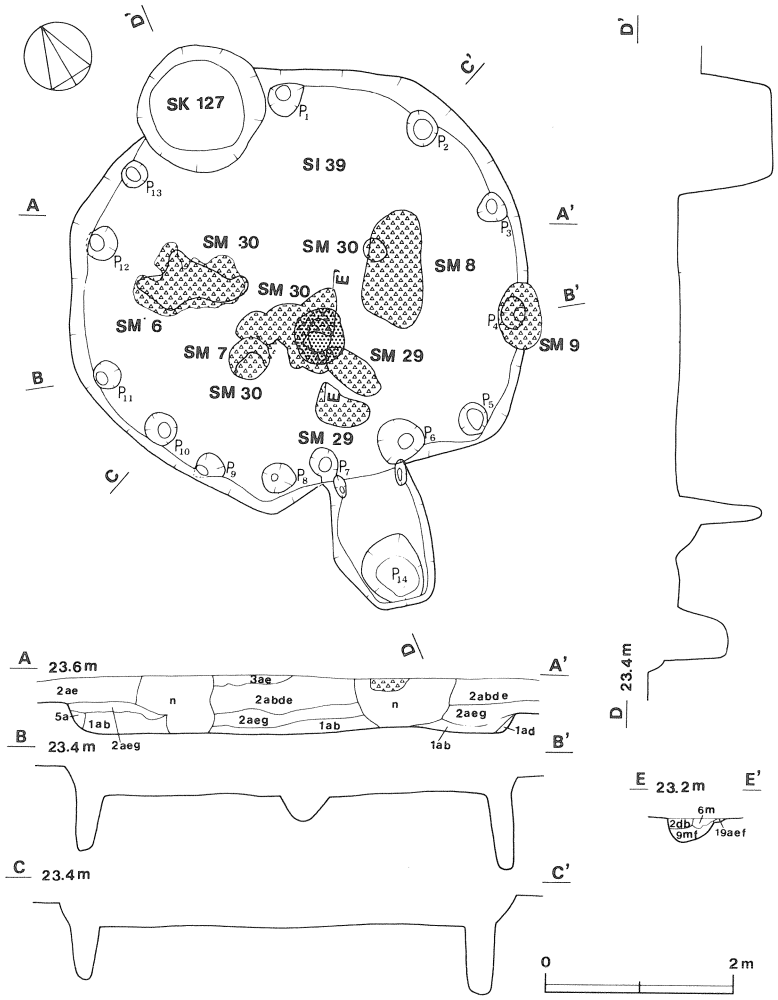
本跡は，出土遺物から縄文時代後期前葉に比定されるものと思われる。

第39号住居跡出土土器

住居跡出土土器観察表

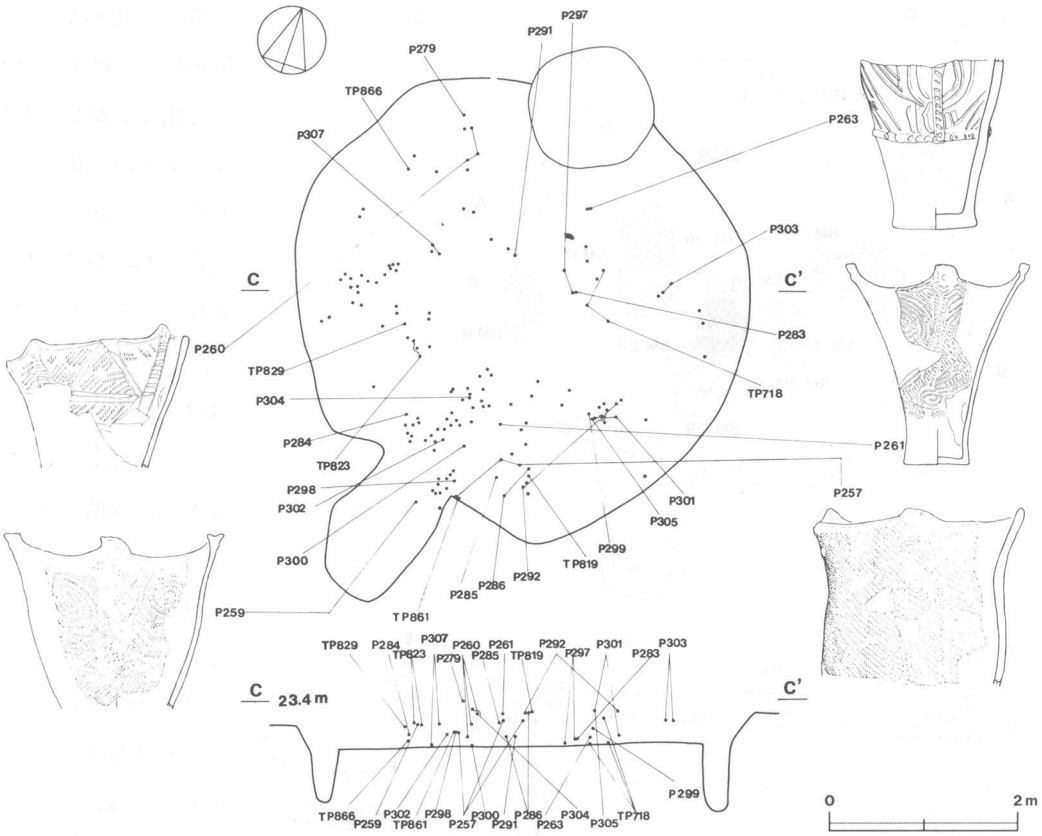
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
第57図1	深鉢形土器	A(27.6) B(30.2) C 10.0	波状を呈する口縁部が，底部からゆるやかに外反している。内・外面及び側面に刺突が施されている突起を有し，口唇部は１条の沈線が巡る。突起下には，棒状工具による３条の沈線により弧状文，渦巻状文が描かれ，その間を３条の沈線で結んでいる。沈線区画間には渦巻状文，曲線文が描かれている。胴下半部は縦位のナデが加えられ，光沢を有している。内面ナデ。	砂粒 普通 褐色	40% P261
2	浅鉢形土器	A 27.4 B 20.4 C 9.7	平縁で３単位の小突起を有するものと思われ，平底の底部から大きく内彎しながら口縁部に至る。口縁部には２条の沈線が巡り，その下端から沈線による渦巻文，半弧状文，曲線文を描き１～２本の沈線で連結している。縄文を地文としている。内面横ナデ。	砂粒 普通 橙色	80% P258
3	鉢形土器	A(14.5) B 8.3 C 8.8	内彎しながら立ち上がる口縁部で，胴部上位で大きく張りを有してる。胴部には縄文を施文している。内面横ナデ。	砂粒 普通 浅黄橙色	50% P289
4	深鉢形土器	A 37.2 B(23.6)	胴部中位がややふくらみ，平縁を呈する口縁部がゆるやかに外反している。突起下に２本組みの沈線を２本垂下させ，沈線間には同様の沈線により鋸歯状のモチーフを描いている。突起間には粗い鋸歯状のモチーフが充填され，複節縄文を地文としている。内面ナデ。	砂粒 普通 黒褐色	30% P266
5	深鉢形土器	A(20.6) B(19.0)	口縁部が外反し，頸部でゆるやかにくびれている。口縁直下に１条の沈線が巡る。突起下には２条の沈線により，逆「U」字状文が描かれ，区画内には３条の沈線が鋸歯状に垂下している。単節縄文ＲＬを地文としている。内面胴上半部横ナデ，下半部縦ナデ。	砂粒 普通 暗褐色	30% P257
6	深鉢形土器	B(12.7) C 6.3	底部から胴部中位は直線的に外傾して立ち上がる。胴部上位が切断されたように欠損している。胴部には２単位の斜位にキザミ目の付された隆線が垂下し，それを挟んで４条の沈線による弧状文が描かれ，弧状間には斜位の沈線が充填される。文様帯の下限は，１条の斜位のキザミ目が付された隆線が巡っている。底部は突出している。胴部下位は縦位のヘラナデ，内面は縦位のナデ。	砂粒 普通 橙色	50% P263

第58図 7	深鉢形土器	A 26.8 B(20.0)	波状を呈する深鉢形土器の胴上半部片である。口縁部は4単位の突起を有するものと思われ，口縁直下に1条の沈線が巡る。波頂下には円形刺突文が施され，胴部の縄文地文上には太い沈線により蛇行沈線文が描かれている。内面ナデ。	砂粒 普通 灰褐色	30% P267
8	深鉢形土器	A(46.4) B(37.2)	波状縁の口縁部から胴部にかけての破片である。口縁部に1条の沈線が巡り，突起下に3～5条の沈線により弧条文を入り組ませて垂下させている。突起間には沈線による渦巻状文と蛇行文を組み合せたモチーフを施している。地文は縄文で，内面胴上半横ナデ，胴下半縦ナデ。	砂粒 普通 暗褐色	30% P259
9	深鉢形土器	A(15.4) B(12.8)	口縁部がわずかに外傾して立ち上がっている。口唇部に1条の沈線が巡り，胴部には4単位の蛇行沈線が垂下する。蛇行沈線の上端と下端を沈線により連結し，区画間には円形刺突文を施した平行沈線が垂下する。地文は縄文である。内面口縁部横ナデ，胴部縦ナデ。	砂粒 普通 にぶい赤褐色	30% P306
10	深鉢形土器	A(14.4) B(16.3)	やや外反して立ち上がる口縁部である。櫛歯状施文具により口縁部には横位に，胴部には縦位，斜位に条線文が施されている。内面上半部横ナデ，下半部縦ナデ。	砂粒 普通 にぶい褐色	30% P274
11	深鉢形土器	A(18.2) B(17.8)	胴部中位に最大径を有する口縁部から胴部にかけての破片である。沈線による粗い格子目状文を施している。内面横ナデ。	砂粒 普通 にぶい橙色	40% P281
12	深鉢形土器	A(34.0) B(20.6)	口縁直下に2条の沈線が巡り胴部には幅の広い平行沈線が縦位に施され，区画内には蛇行沈線が垂下している。これを挟むように沈線により弧状文が描かれていると思われる。地文には単節縄文ＬＲが施されている。内面上半部横ナデ，下半部縦ナデ。	砂粒 普通 にぶい赤褐色	20% P302
第59図 13	深鉢形土器	A(27.4) B(21.2)	口縁部が胴部からほぼ外傾して立ち上がっている。口縁部に1条の沈線が巡る。突起下に円形の貼付文を付し，やや幅の広い2条の沈線を垂下させ，沈線間には横位の沈線をはしご状に充填して縦位に区画している。区画間には，横位，斜位の沈線を施している。地文は粗い単節縄文ＬＲである。内面上半部横ナデ，下半部縦ナデ。	砂粒 普通 黒褐色	30% P260
14	深鉢形土器	A(22.8) B(16.8)	頸部から内彎して立ち上がる口縁部から胴部にかけての破片である。幅の広い口縁部には，横位，縦位に沈線が施され，胴部との境には1条の沈線が巡っている。胴部には縦位の丁寧なナデが施されている。内面胴上半部横ナデ，下半部縦ナデ。	砂粒 普通 にぶい赤褐色	30% P299
15	深鉢形土器	A(26.5) B(22.0)	口縁直下に1条の沈線が巡る。胴部には縄文地文上に沈線により縦位，斜位に文様が区面されている。内面上半部横ナデ，下半部縦ナデ。	砂粒 普通 褐灰色	20% 胴部上位にスス付着 P300
16	深鉢形土器	A(10.2) B 17.0 C 5.0	底部から口縁にかけてゆるやかに外反している小型深鉢形土器である。口縁には1～2条の沈線が巡り，胴部には単節縄文ＬＲ地文上に沈線により渦巻状文が描かれている。区画間には縦位の平行沈線が描かれ，底部はやや突出し，全体的に摩滅気味である。内面ナデ。	砂粒 普通 浅黄橙色	60% P307
17	深鉢形土器	A(23.2) B(26.9)	口縁部が外傾して立ち上がっている。器面全体に単節縄文ＲＬが施文されている。内面上半部横ナデ，下半部縦ナデ。	砂粒 普通 にぶい褐色	20% P303
18	深鉢形土器	B(10.4) C(9.0)	胴下半部片で，底部はやや突出している。外面はヘラ状工具により縦位に太めの条線文を施した後に細沈線を斜位に施している。外面底部は摩滅気味である。内面斜位のナデ。	砂粒 普通 にぶい褐色	10% P293
第60図 19	深鉢形土器	A(23.0) B(18.0)	波状を呈する口縁部から胴部にかけての深鉢形土器である。口縁直下には，2条の沈線が巡り，縄文地文上の胴部には1条の沈線が垂下し，それを挟むように2条の沈線により弧状文が描かれている。内面ナデ。	砂粒 普通 灰褐色	10% P282
20	深鉢形土器	A(21.6) B(17.8)	口縁部から胴部にかけての深鉢形土器で，口縁部は頸部からやや内彎して立ち上がる。口縁部から胴部には櫛歯状施文具により縦位，斜位に条線文が施されている。内面ナデ。	砂粒 普通 浅黄橙色	30% P286
21	深鉢形土器	B(9.6) C 8.3	底部片で，外面には縄文が施されている。内面縦ナデ。	砂粒 普通 明赤褐色	10% P296
22	深鉢形土器	B(7.5) C 7.2	底部片で，底部がやや突出している。内・外面共縦位のナデが加えられている。	砂粒 普通 にぶい橙色	10% P294



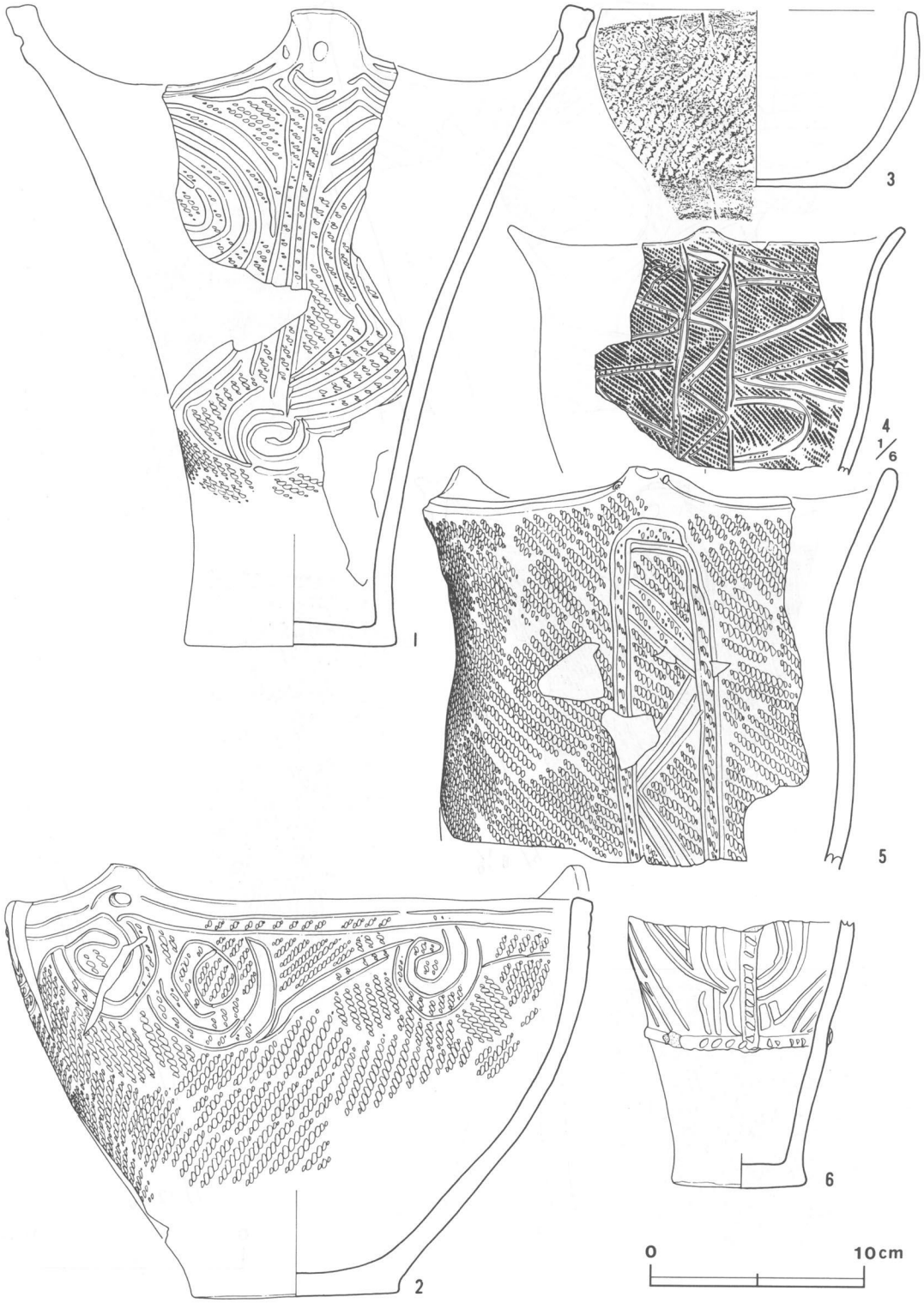
第55図　第39号住居跡実測図

第60・61・62図は，第39号住居跡から出土した縄文土器及び土器片の実測図・拓影図である。23～26は口縁部から胴部にかけての大破片である。23・24は波状縁を呈し，23は，口縁部に1条の沈線が巡り，胴部には縄文地文上に曲線的モチーフが描かれている。24は，口縁部に2条の沈線が巡り，胴部には，縄文上に波頂部から垂下する平行沈線と，それを挟んで沈線による弧状文が描かれている。25は，幅の狭い口縁部無文帯下に1条の沈線が巡る。胴部には縄文地文上に垂下する2条の沈線を挟んで，3条の沈線による弧状文と2条単位の沈線が垂下し，その間に縦長の長楕円形のモチーフがそれぞれ描かれている。26～41は口縁部片である。26は，波頂部に2個の円形刺突文が縦位に施され，口縁部には1条の沈線が巡る。以下には縄文地文上に沈線による弧状文が描かれている。27は，口唇部に棒状工具による刺突文が施され，以下には縦位の沈線が施され，地文は無文である。28は，口縁直下に1条の沈線が巡り，以下には，沈線で曲線的モチーフが描かれている。29は，小突起を有する口縁部から胴部にかけての破片で，2条の沈線が口縁直下に巡り，以下は沈線が縦位と斜位に施されている。地文は縄文である。30は，縄文地文上の口縁部に円形刺突文が4個施され，その右側には沈線により横長の楕円区画が施されている。31は，口縁部無文帯下の縄文地文上に横位と斜位の沈線が施されている。32は，口唇部にキザミ目が施され，以下横位のナデが加えられている。33は，口縁部に1条の沈線が巡り，波頂部に2個の刺突文が施され，それを挟むように沈線による弧状文が描かれている。刺突文下

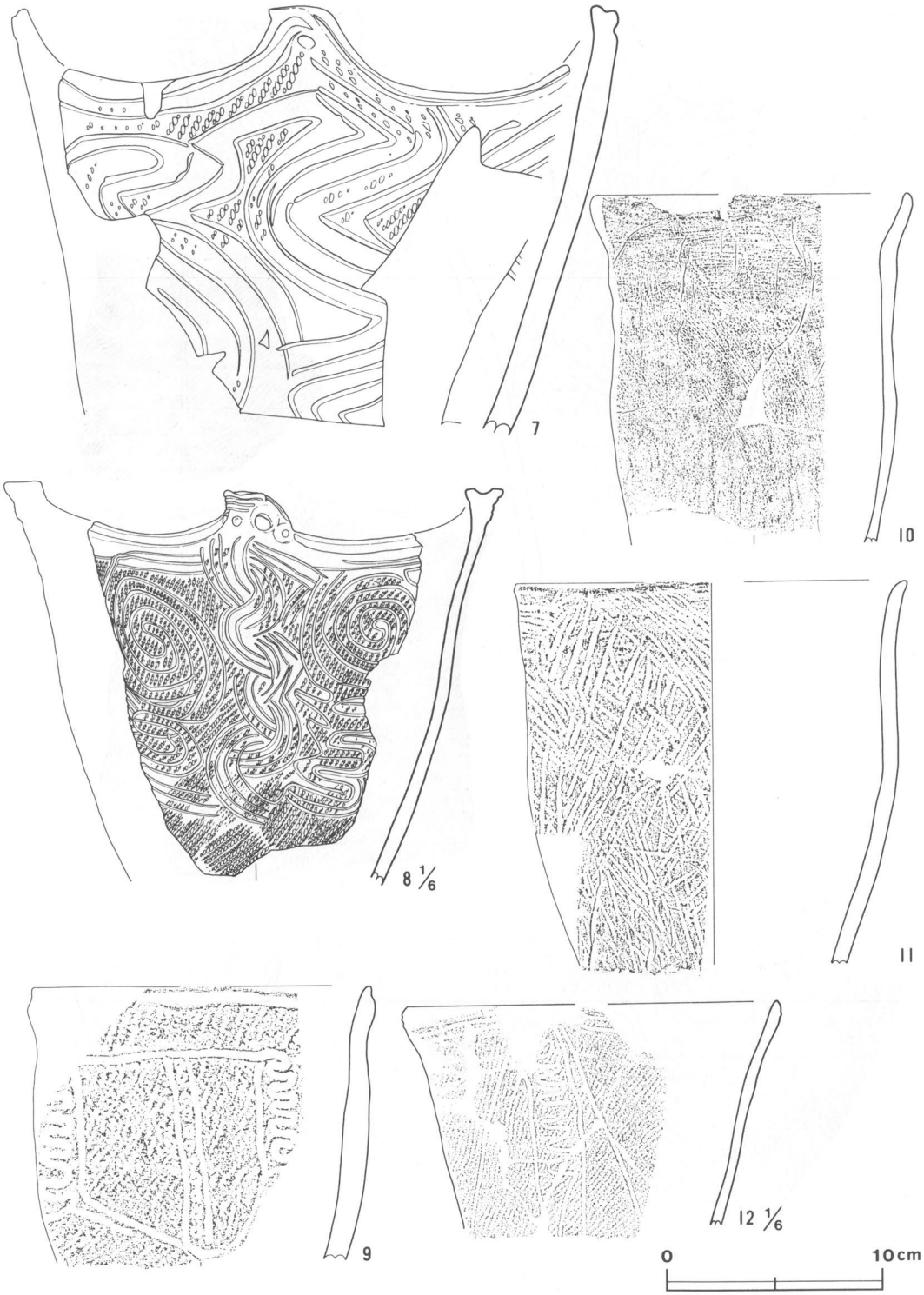


第56図　第39号住居跡遺物出土位置図・遺物接合関係図

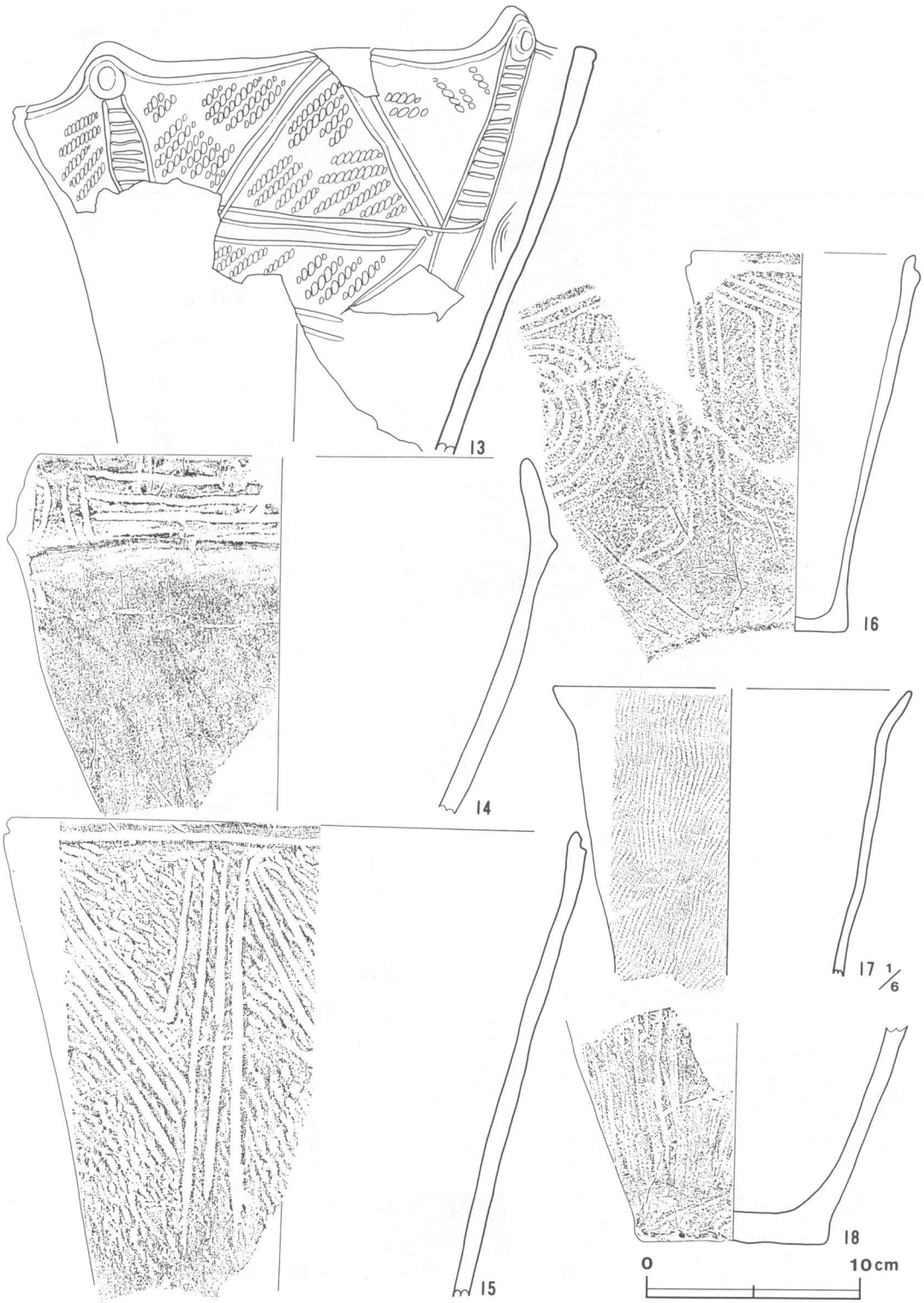
には，キザミ目を付した隆線が垂下している。34は，口縁部無文帯下に沈線による逆「U」字状の区画文が施され，区画内には縄文が，区画間には刺突文が縦位に施されている。内面には，部分的に赤彩痕がみられる。35は，口縁部に3条の沈線が巡り，以下の縄文地文上には，沈線により曲線的モチーフが施されている。36は，縄文地文上に沈線による曲線的モチーフが描かれている。37は，口縁部に突起を有して2条の沈線が巡り，以下は縄文地文上に沈線により斜行文と弧状文が描かれている。38は，波状部に3個の円形刺突文が施され，波状部下に沈線による曲線的モチーフが描かれている。39～41は，波状縁を呈し，39は，縄文地文上に斜位の沈線が施されている。40は，キザミ目が施された突起を有し，そこから垂下する2組の平行沈線内には，斜位の右下り，左下りの3条単位の沈線が施されている。地文は縄文である。41は，波状部に2個の円形刺突文が施され，それを挟むように1条の沈線が巡り，胴部の縄文地文上に沈線文が曲線的に施されている。42は，頸部から外反して立ち上がる口縁部から胴部にかけての破片である。口縁部の2個の円形刺突文下に太い沈線で蕨手文が描かれ，それを挟むように沈線で弧状文が描かれている。地文は縄文である。43～54は口縁部片である。43は，波状縁で縄文地文上に沈線による蕨手文が施されている。44は，波状縁を呈し，波状部には円形貼付文を付し，口縁部には1条の



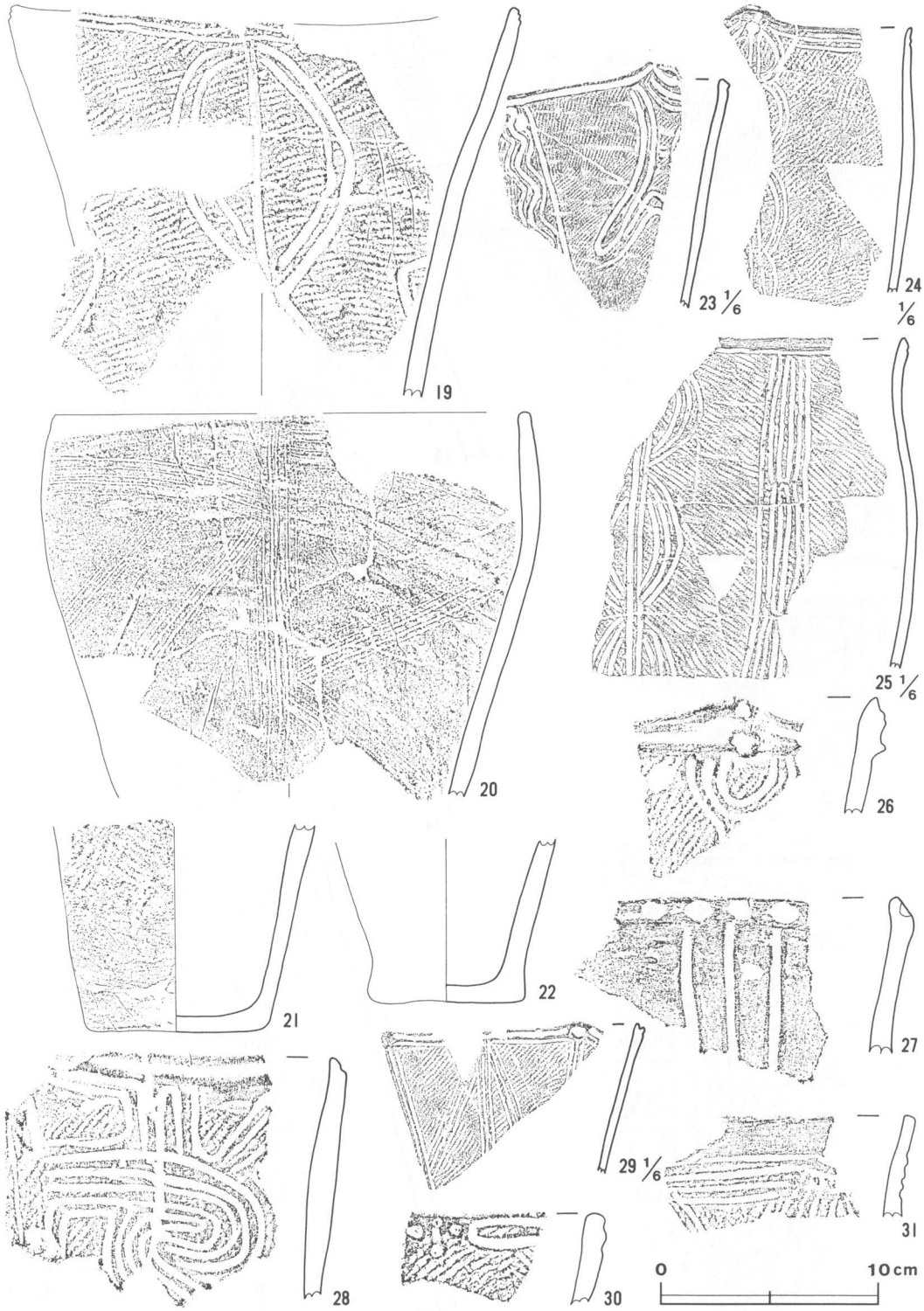
第57図　第39号住居跡出土遺物実測図　(1)



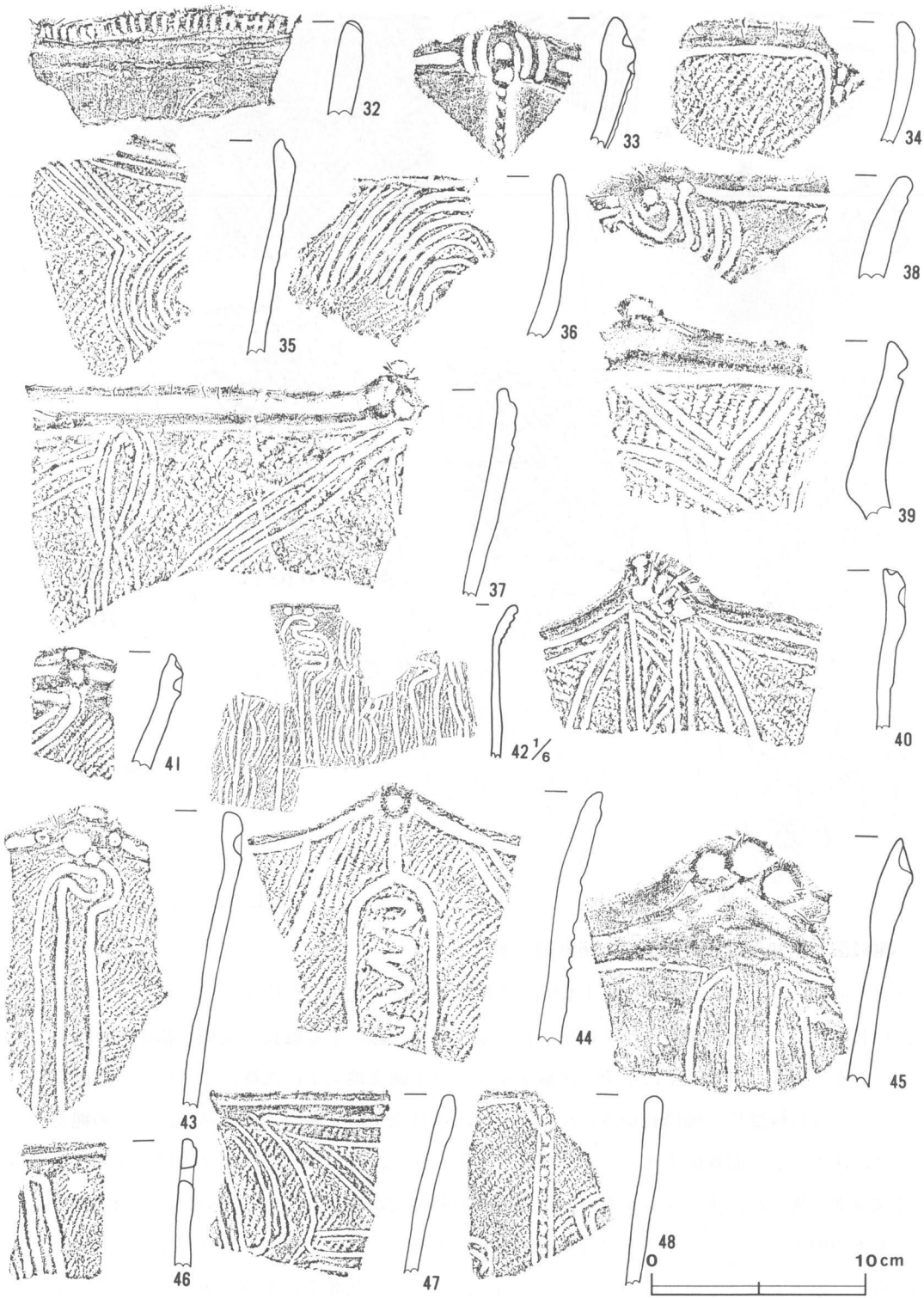
第58図　第39号住居跡出土遺物実測図　(2)



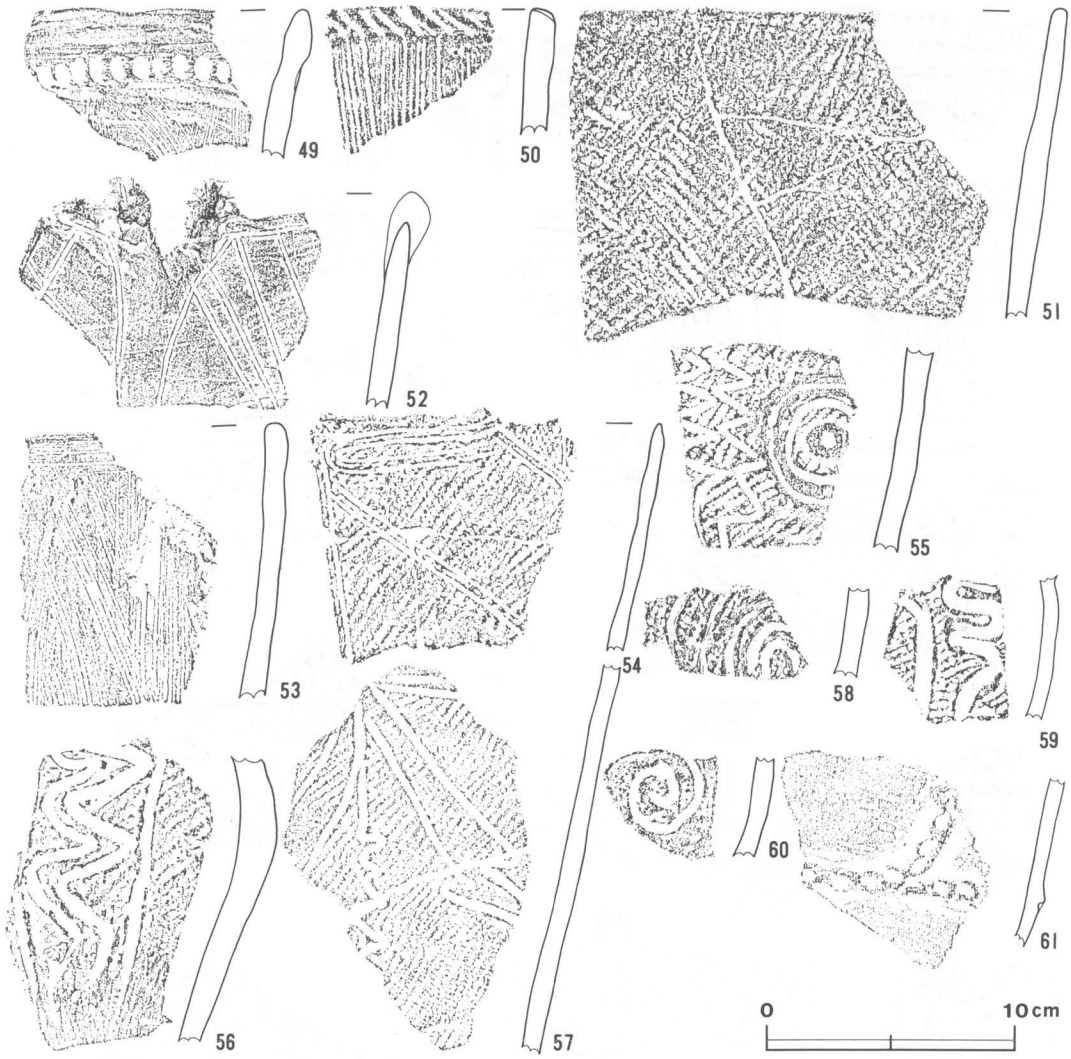
第59図　第39号住居跡出土遺物実測図（3）



第60図　第39号住居跡出土遺物実測図・拓影図 (4)



第61図　第39号住居跡出土遺物拓影図　(5)



第62図　第39号住居跡出土遺物拓影図（6）

沈線が巡る。以下には，縄文地文上に蛇行沈線文と斜位の沈線文が描かれている。45は，波頂部に棒状工具による円形刺突文が3個施され，胴部には沈線による縦長の文様が描かれ，地文は無文である。46は，口縁直下に1条の沈線が巡り，以下縄文地文上に沈線による縦長の区画文が描かれている口縁部片で補修孔がみられる。47は，口縁直下に1条の沈線が巡り，以下の縄文地文上には沈線による曲線的モチーフが描かれている。48は，沈線による区画文内に2条の沈線による曲線文が施され，垂下する沈線の区画間に円形刺突文が施されている。49は，口縁部無文帯下に1条の刺突文を巡らし，以下には条線文を斜位に施している。50は，口唇部に斜位のキザミ目を施し，以下条線文を縦位に施している。51は，縦位の羽状縄文が全面に施されている。52は，波状を呈する口縁部に1対の突起をもち，胴部には，沈線が斜位に施されている。地文は無文で

ある。53は，口縁直下から条線文が横位，縦位，斜位に施されている。54は，縄文地文上に沈線で直線的，曲線的な文様が描かれている。55～61は胴部片である。55は，縄文地文上に，２条の沈線により円形文が描かれ，その中心には刺突文を施した円形貼付文が付されている。円形文の左側には，２条の稲妻状蛇行沈線文が垂下している。56は，縄文地文上に幅の広い平行沈線が垂下し，平行沈線内には２条の蛇行沈線文が施されている。57は，縄文地文上に沈線による斜行文と蛇行文とが組み合わされて描かれている。58は，縄文地文上に沈線による曲線的モチーフが描かれている。59は，縄文地文上に沈線文と蛇行沈線文が施されている。60は，沈線による渦巻文が施されている。61は，刺突文が施された隆線が貼付されており，地文は無文である。

第40号住居跡（第63図）

本跡は，調査区の南部K3d$_4$区を中心に確認された住居跡で，第32号住居跡の南東側11.2mに位置している。本跡内の中央からやや西側に，第23号地点貝塚が，床面より若干浮いて確認されているので，本跡の廃絶後，間もなく貝の投棄が行われたものと思われる。

平面形は，長径4.7m，短径4.24mの不整楕円形を呈し，長径方向は，N－70°－Eを指している。壁は，東側が褐色土混じりで攪乱を受けているが，その他は，締まりのあるロームで外傾して立ち上がり，壁高は，16～22cmである。床面は，ローム小ブロックを含み硬く中央からやや南西側が，若干高くなっており，硬く踏み固められている。東壁際に，わずかに焼土の散布が認められたが，床面への掘り込みがなく炉とは確認することができなかった。ピットは，９か所検出されているが，床面の南西側からは検出されていない。主柱穴は，明確でないが，中央のP_6・P_{10}が考えられ，長径34～47cm，短径34～47cm，深さ31～35cmの規模を有している。

覆土は，上層にハマグリ，サルボウを主体とした第23号地点貝塚を取り囲むようにして，極少量の炭化物を含む黒褐色土，下層に少量のローム粒子を含む暗褐色土が自然堆積している。

遺物は，住居跡の全域にわたり覆土から縄文土器片554点，石１点が出土している。本跡は，出土遺物から，縄文時代後期初頭に比定されるものと思われる。

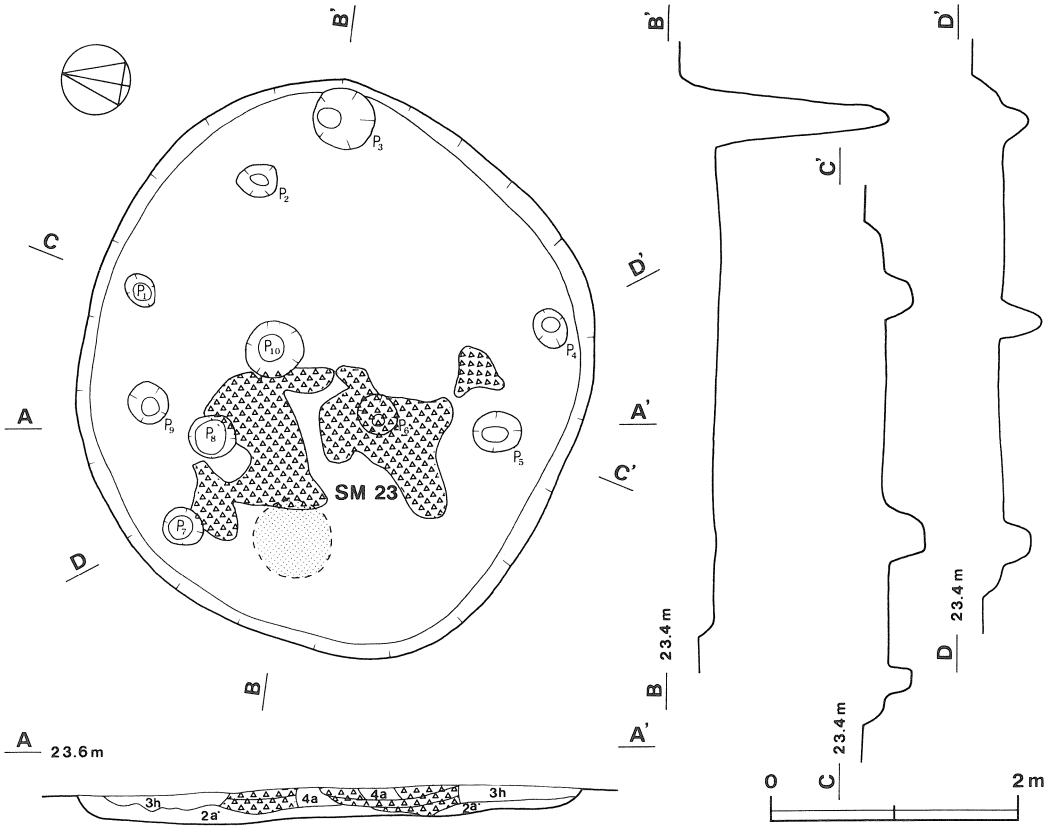
第40号住居跡出土土器

住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
第64図 22	深鉢形土器	B(3.4) C 8.4	底部片で，内・外面共縦位のヘラナデが施されている。	砂粒 普通 にぶい橙色	10% P335

第64図は，第40号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。１～９は口縁部片である。１・２は，口縁部無文帯下に１条の細沈線が巡り，以下細沈線が斜位に施されている口縁部片である。３は，口縁部無文帯下に，条線文が斜位に施されている。４は，半截竹管により斜位に沈

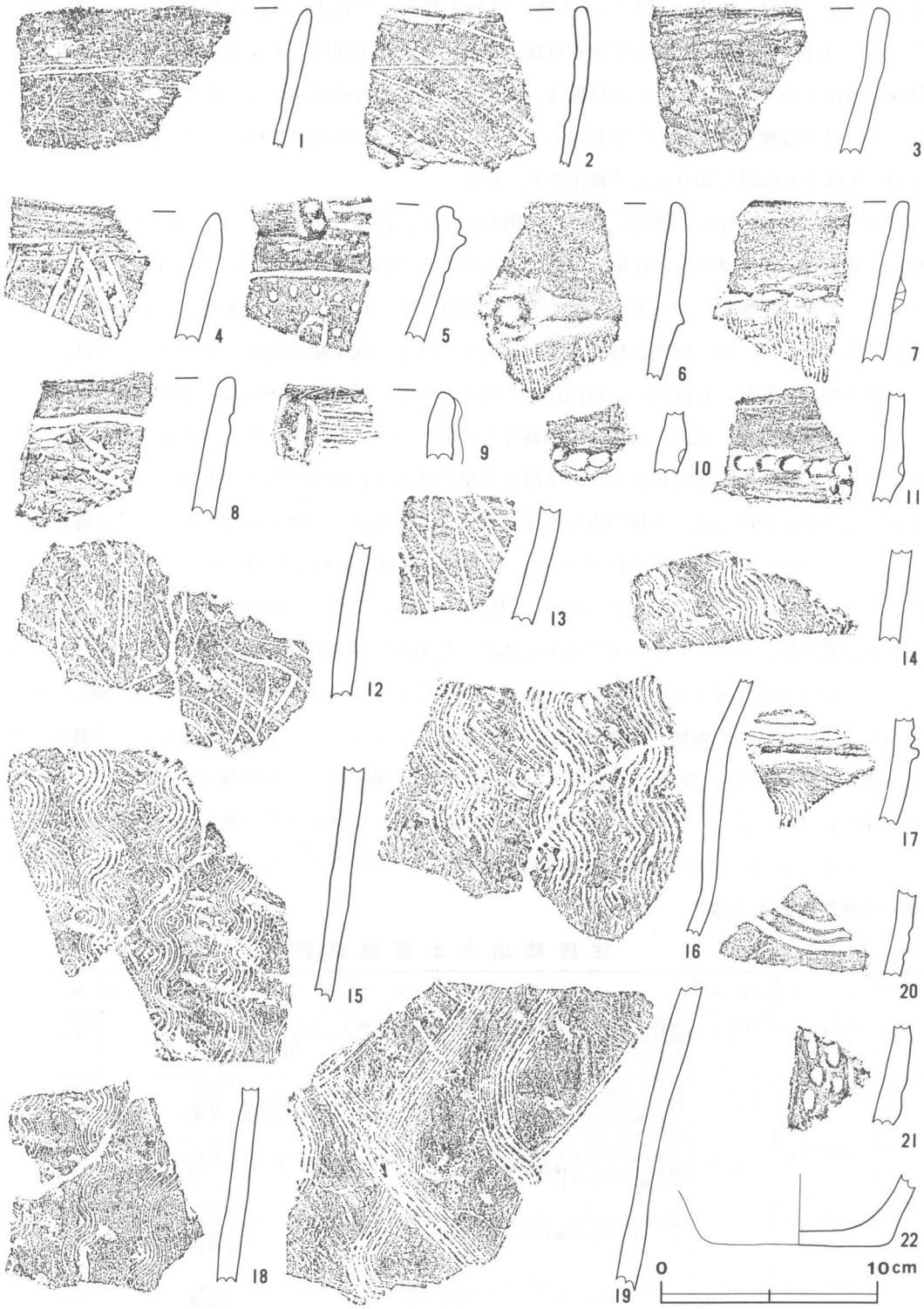
線が施されている。5は，口唇部に刺突を加えた隆線を貼付し，その右側に2条の沈線を施している。口縁部無文帯下に1条の沈線を巡らし，以下沈線による曲線文が施され，区画外には刺突文が施されている。6は，幅の広い口縁部無文帯下に隆線を巡らして刺突文を加えた円形文を施している。以下に条線文が斜位に施されている。7も幅の広い口縁部無文帯下に刺突文を施した隆線を巡らし，以下には条線文が波状に施されている。8は，口縁部無文帯に1条の沈線を巡らし，以下に雑な縄文を施している。9は，波状を呈し，口縁部に縦長の刺突文を加えた隆線を貼付し，横位に条線文を施している。10～21は胴部片である。10・11は，刺突文を横位に施している。12は，沈線を曲線的に，13は，沈線を格子目状に施している。14～16・18は，条線文が波状に施されている。19は，条線文が曲線的に施されている。20は，2条の沈線が施され，21は，2条の沈線が垂下し，沈線内には刺突文が施されている。



第63図　第40号住居跡実測図

第41号住居跡（第65図）

本跡は，調査区の中央部I3j$_4$区を中心に確認された住居跡で，第39号住居跡の北東側1.2mに位置している。本跡の南側は，第118号土坑と重複しているが，新旧関係は不明である。北西壁に



第64図　第40号住居跡出土遺物実測図・拓影図

接して埋甕（M14）が出土したが，本跡の遺物と照合した結果，本跡よりも古いことが判った。さらに，本跡の北東側に第５号地点貝塚，中央からやや南西側に第10号地点貝塚，第32号地点貝塚が検出されている。これらの貝塚は，ほぼ床面直上から確認されているので，本跡の廃絶後，間もなく貝が投棄されたものと思われる。また，北西方向から南東方向にかけて，第５号溝が，本跡の床面を６cmほど切り込んで検出されている。

平面形は，長径5.68m，短径5.45mの楕円形を呈し，長径方向は，N－6°－Wを指している。壁は，北西壁，南東壁の一部は第５号溝により切られており不明であるが，その他の壁は，締まったロームで，外傾して立ち上がっている。壁高は，６～16cmである。床面は，全体的に平坦で堅緻である。特に，炉の周囲は移植ゴテが通らないほどに硬く踏み固められている。炉は，中央から南西側に位置し，長径95cm，短径78cmの楕円形を呈し，床面を19cmほど擂鉢状に掘りくぼめている。炉壁の北東，北西，南西側に土器片を設置した『土器片囲い炉』である。炉内には，上層に極少量の焼土を含む暗褐色土が，下層に少量の焼土を含む赤灰色土が堆積している。また，上層から下層にかけては，多量の灰が充満している。炉床は，火熱を受けてレンガ状に赤化している。ピットは，９か所検出されているが，主柱穴は，ほぼ方形に配列されているP_2・P_5・P_6・P_9と思われる。主柱穴は，長径25～32cm，短径19～25cm，深さ16～50cmの規模を有している。

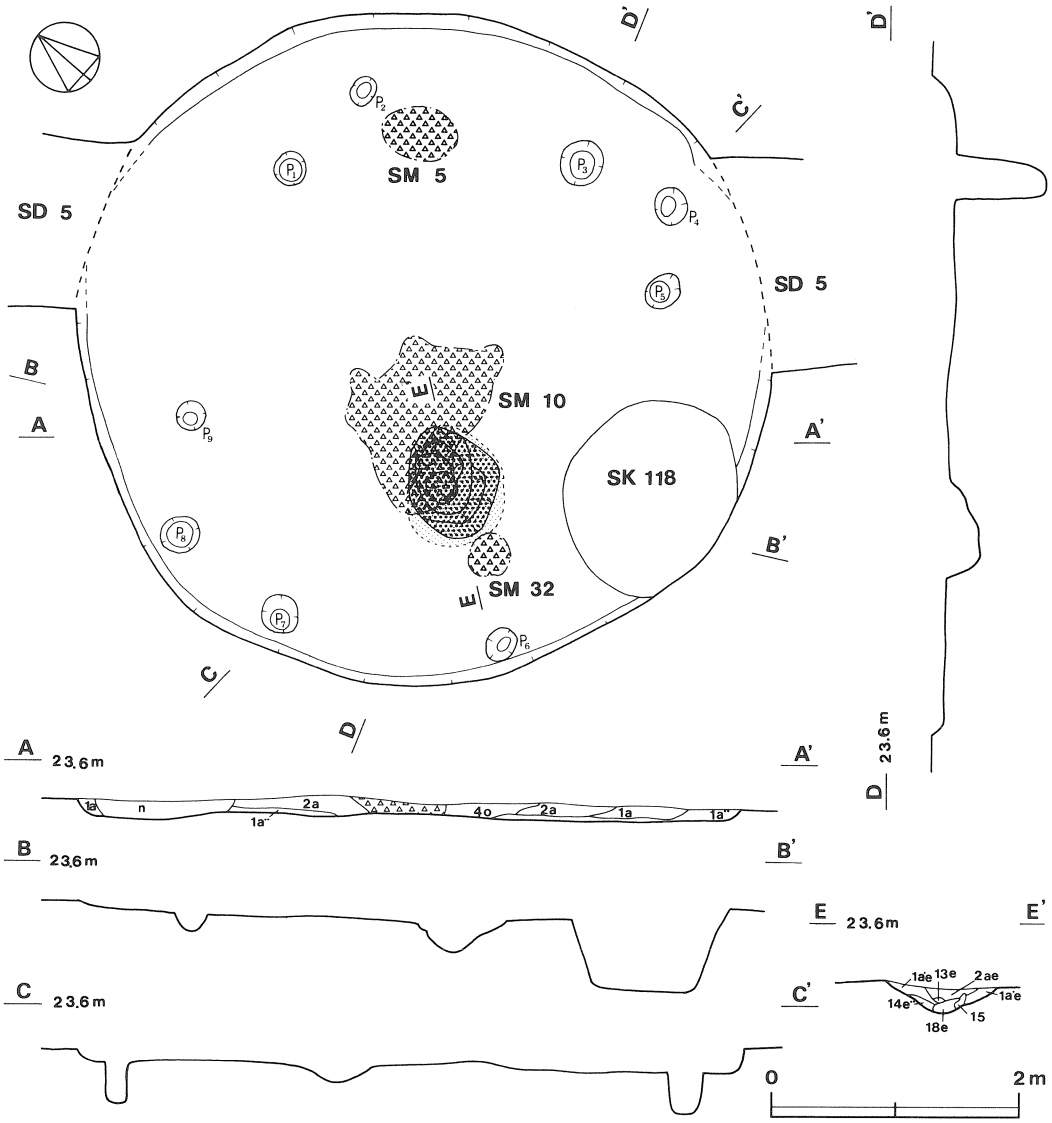
本跡の覆土は，ハマグリやシオフキを主体にした第10号地点貝塚を取り囲むようにして，上層にローム粒子を極少量含む暗褐色土，下層にローム粒子を多量に含む褐色土が自然堆積している。

遺物は，住居跡の北西側から縄文土器片261点が出土している。南側の床面から，深鉢形土器の大破片（第67図１），覆土から深鉢形土器の大破片（第67図３）炉内覆土から斜位で深鉢形土器（第67図２）が出土している。南西壁際のほぼ床面から深鉢形土器の底部片（第67図５）が出土している。本跡は，出土遺物から縄文時代後期前葉に比定されるものと思われる。

第41号住居跡出土土器

住居跡出土土器観察表

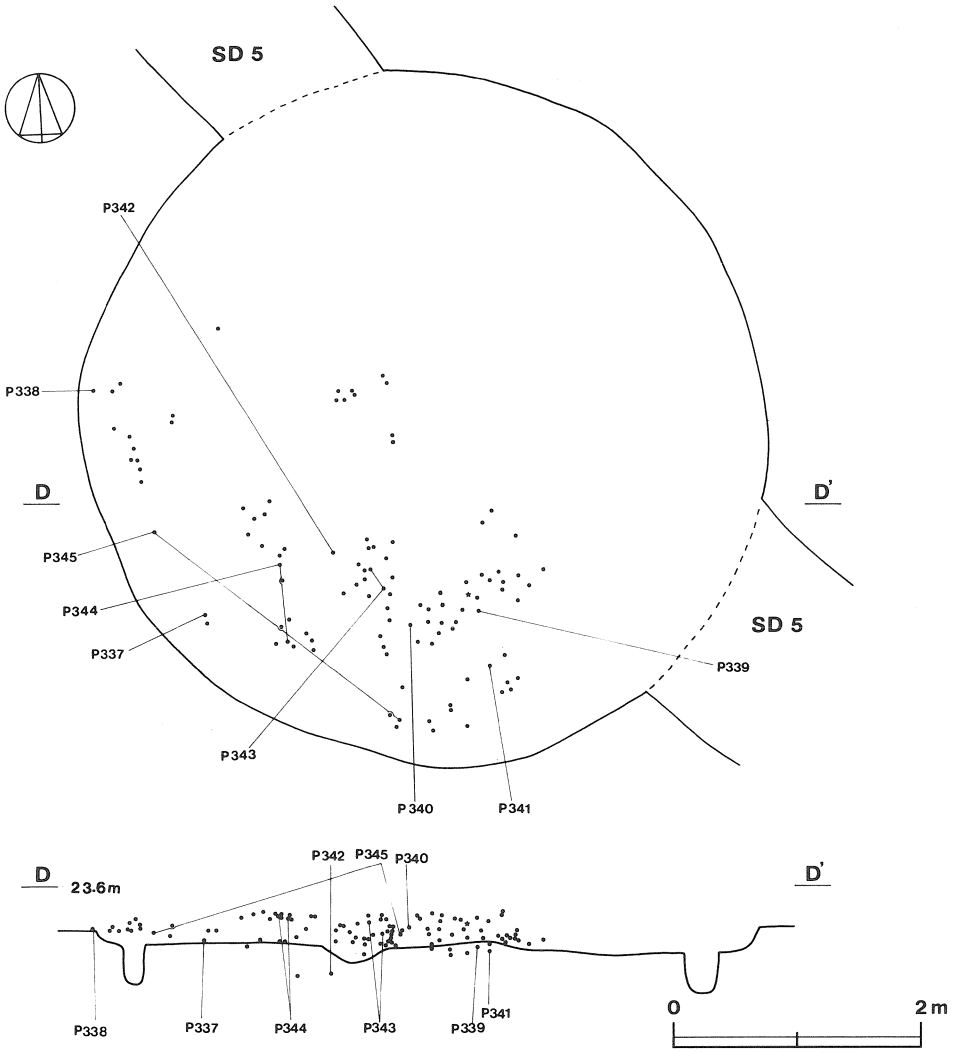
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
第67図 1	深鉢形土器	A(29.0) B(21.8)	波状縁を呈する口縁部から胴部にかけての破片である。口縁部は頸部から外反して立ち上がり，胴部中位がやや張りを有している。口縁部無文帯下に縄文を施文している。内面上半部横ナデ，下半部縦ナデ。	砂粒 普通 橙色	40% P341
2	深鉢形土器	A(36.5) B(18.2)	炉内より出土した口縁部から胴部にかけての破片である。口縁部が外反気味に立ち上がり，ほぼ円筒状を呈すると思われる。幅の広い口縁部無文帯には補修孔を有し，以下縄文が全面に施文されている。	砂粒 普通 赤褐色	20% P342
3	深鉢形土器	A 15.0 B(10.2)	４単位の突起を有すると思われる口縁部から胴部にかけての破片である。口縁部は頸部からやや外反して立ち上がる。全面に縄文が施されている。内面ナデ。	砂粒 普通 にぶい褐色	20% P343
4	深鉢形土器	B(7.6)	深鉢形土器の胴下半部片である。上端に縄文が施文されている。内・外面共縦位のナデが加えられている。	砂粒 普通 橙色	20% P344
5	深鉢形土器	B 7.2 C(12.0)	平底の底部から外傾して立ち上がる底部から胴下半部の破片である。外面共縦位のナデが加えられている。	砂粒 普通 橙色	10% P337



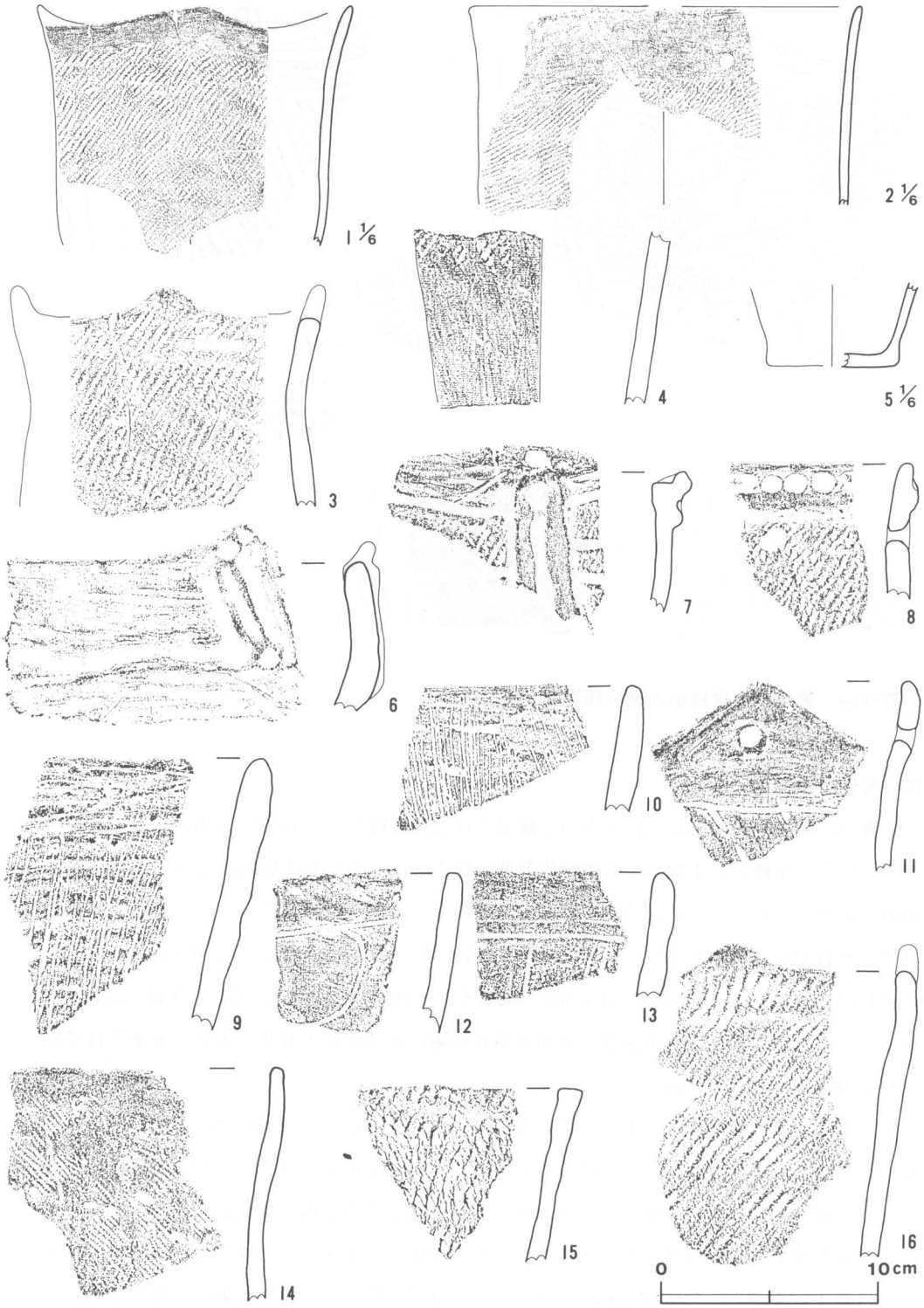
第65図　第41号住居跡実測図

第67・68図は，第41号住居跡から出土した縄文土器及び土器片の実測図・拓影図である。6～16は口縁部片である。6は，頸部から内彎気味に立ち上がり，突起を有し，突起下に沈線を施した隆線を貼付し，その両端に刺突文が施されている。口縁部無文帯は，横位のナデが加えられている。7は，波状縁を呈し，波頂下に幅の広い隆帯を貼付し，円形刺突文と縦位の沈線を施している。口縁部の縄文地文上には数条の沈線を巡らしている。8は，口縁部には3個の円形刺突文と沈線を横位に施し，以下縄文が施文され，1個の補修孔がみられる。9・10は，平縁で，9は，横位，縦位に，10は，縦位に条線文が施されている。11は，山形状を呈し，口縁部には，1個の穿孔が施され，

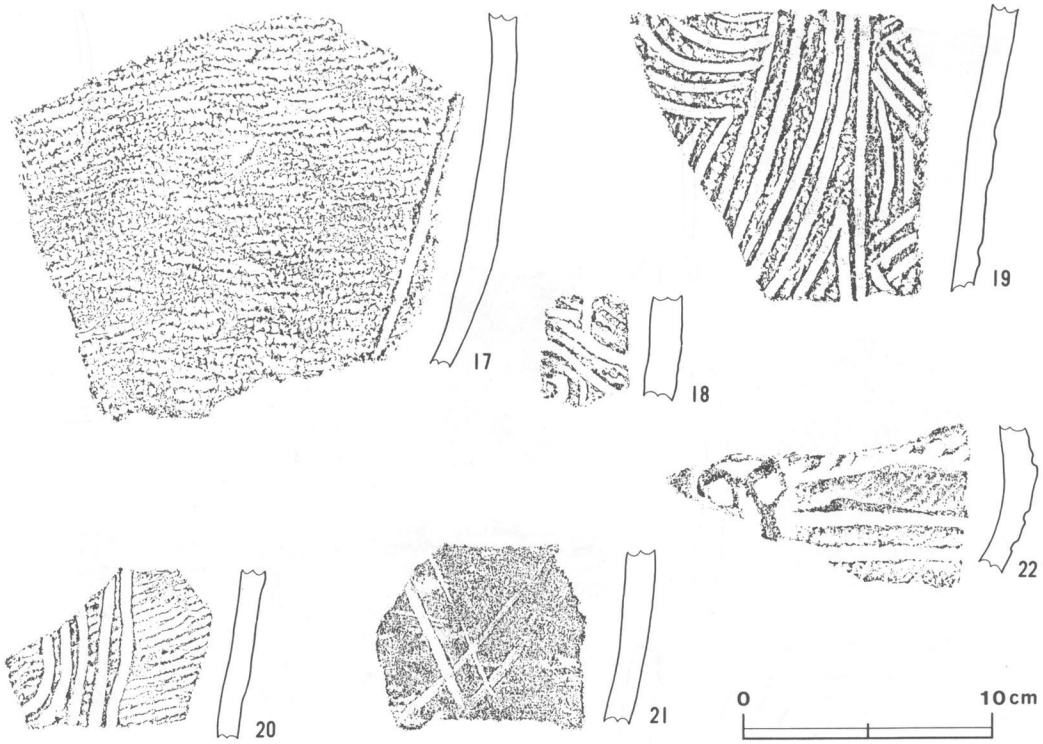
口縁部下端に１条の沈線が，以下斜位に沈線が施されている。12・13は，口縁部無文帯下に１条の沈線が巡る。12は，以下沈線により曲線文が描かれ，13は，斜位に沈線が施されている。14・15は，平縁で，全面に縄文が施されている。16は，突起を有し全面に縄文が施されている。17～22は胴部片である。17は，縄文地文上に沈線が斜位に施されている。18・19は，縄文地文に沈線により直線的，曲線的に文様が描かれている。20は，縄文地文上に沈線による曲線的モチーフが描かれている。21は，沈線が斜位に施されている。22は，刺突文を加えた２個の円形文とそこから垂下する隆線を貼付し，縄文地文上に沈線を横位に施している。



第66図　第41号住居跡遺物出土位置図・遺物接合関係図



第67図　第41号住居跡出土遺物実測図・拓影図 (1)



第68図　第41号住居跡出土遺物拓影図　(2)

第42号住居跡（第69図）

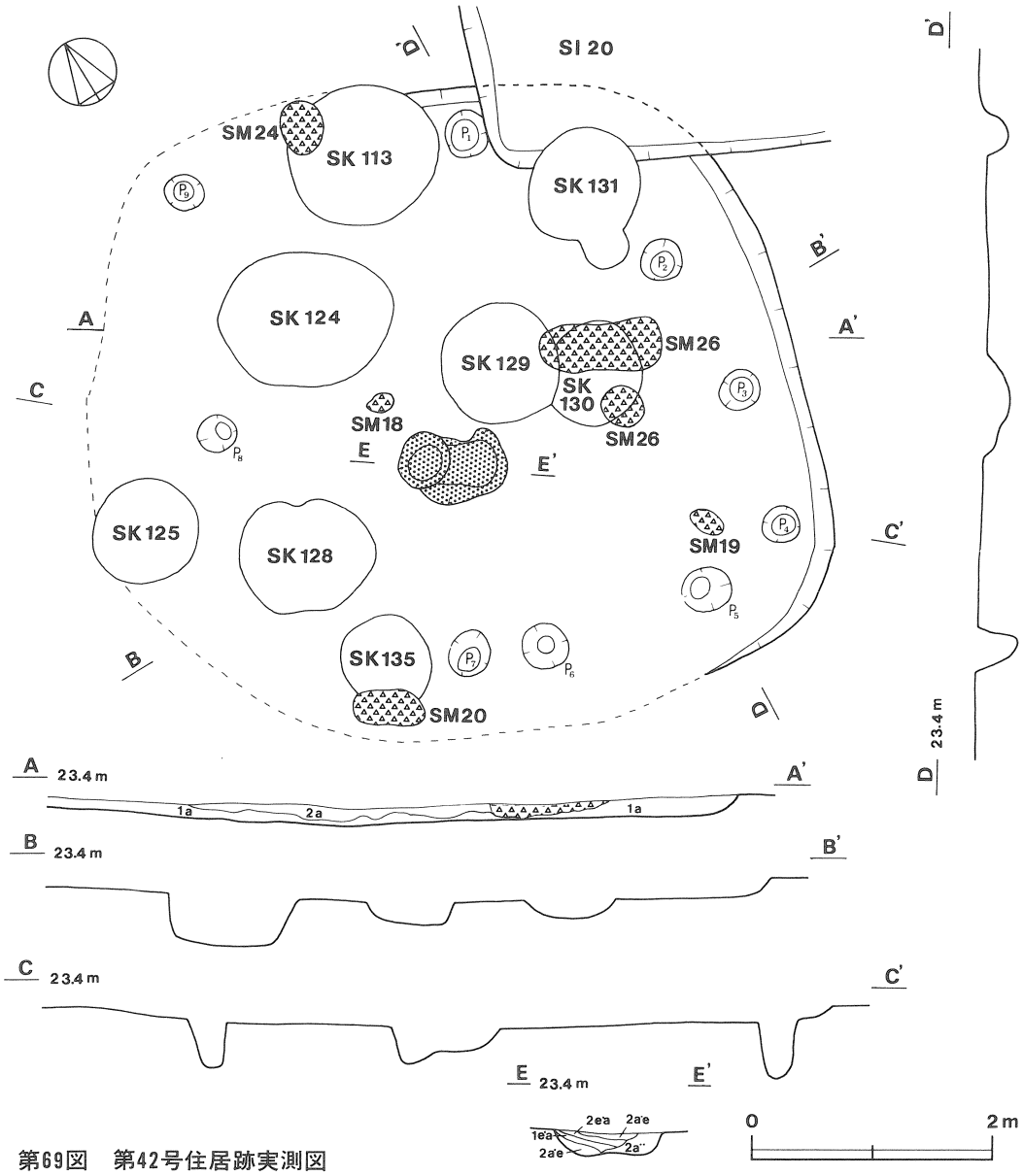
本跡は，調査区の南部J3d$_5$区を中心に確認された住居跡で，第38号住居跡の南東側3.2mに位置している。本跡の北東部は，古墳時代前期に比定される第20号住居跡により切られ，南側も古墳時代前期に比定される第21号住居跡によって，壁の一部が切られている。さらに，本跡内には，北側に第113号，第124号土坑，北東側に第131号土坑，東側には第129号，第130号土坑，南西側に第135号土坑，西側に第125号，第128号土坑とそれぞれ重複している。また，東側には，ほぼ床面直上に，第19号，第20号，第24号，第26号地点貝塚が確認されており，本跡が廃絶されて間もなく貝が投棄されたものと思われる。

平面形は，住居跡や土坑と重複しているため，推定であるが，長径6.83m，短径5.88mの不整楕円形を呈し，長径方向は，N－22°－Wを指すものと思われる。床面は，炉の周囲がよく踏み固められて硬いが，その他は軟弱である。炉は，中央部からやや南側に位置し，長径89cm，短径55cmの不定形を呈し，階段状に掘り込まれている。床面から炉床までの深さは30cmほどである。炉内には焼土が充満し，炉床は火熱を受けてレンガ状に赤化している。北西側の炉床から，火熱を受けた縄文土器片が一点出土している。ピットは，10ヶ所から検出されており，長径32～43cm，

短径31～29cm，深さ19～42cmの規模を有している。P_1・P_3・P_5・P_8・P_9の５ヶ所が，規模や配列から主柱穴と考えられる。

本跡の覆土は，ほぼ床面から上層にかけてはハマグリを主体とした第26号地点貝塚が堆積しているが，上層には極暗褐色土，下層には褐色土が自然堆積している。

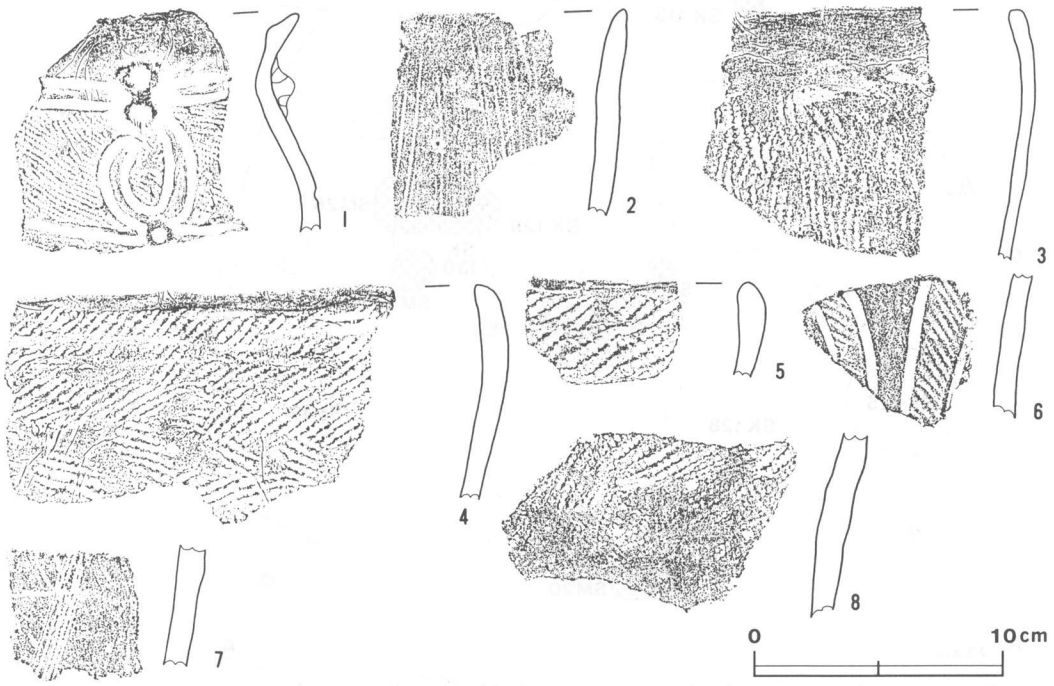
遺物は，少量であり，縄文土器片が15点出土しているにすぎない。これらの土器片は，ほとんどが覆土から出土しており，炉内出土の土器片を含めて，大半が縄文時代後期前葉に比定されるものと思われる。



第69図　第42号住居跡実測図

第42号住居跡出土土器

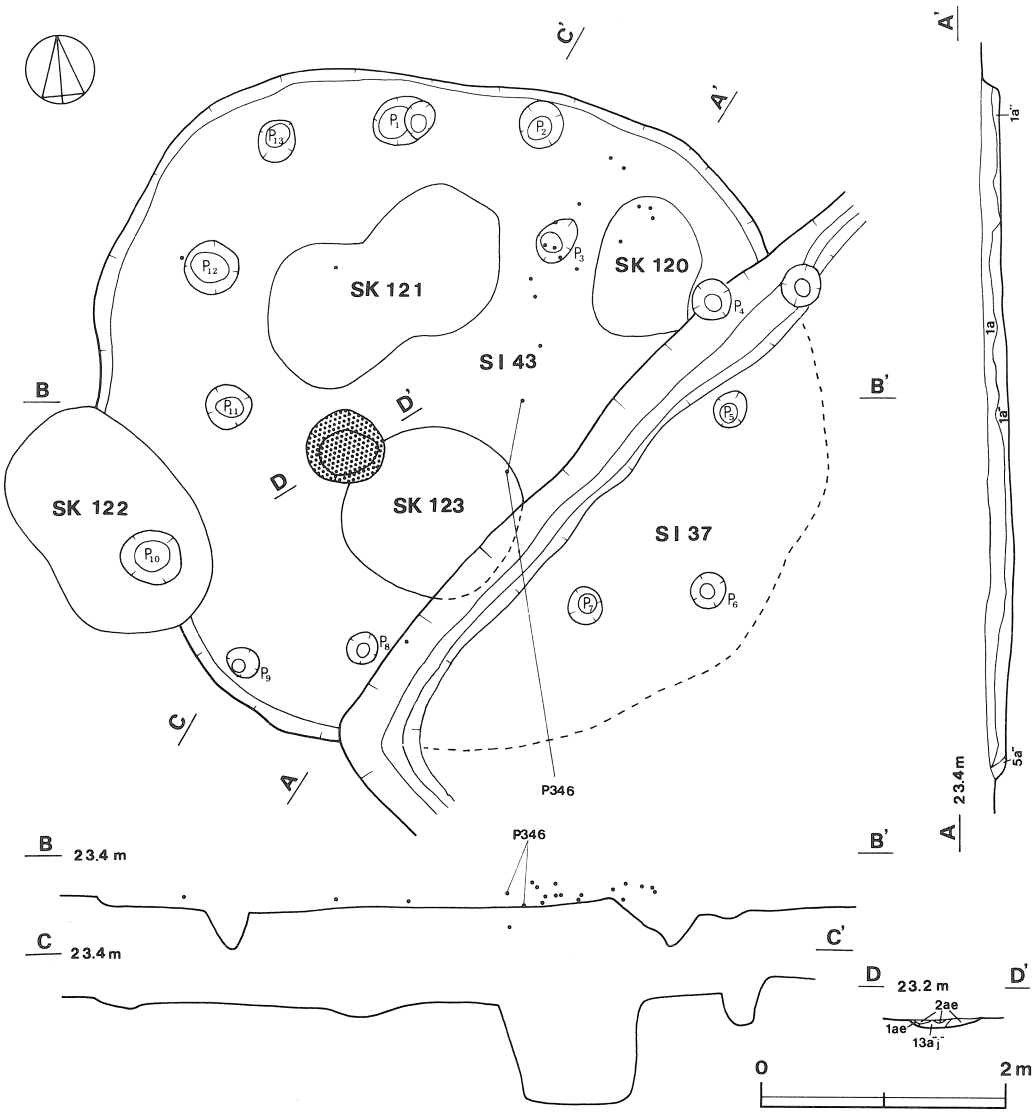
第70図は，第42号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。1は，口縁部が頸部より外反して立ち上がる口縁部から胴部にかけての破片である。口縁部無文帯の2条の沈線と胴部上位の1条の沈線が横位に施され，区画内には縄文が施されている。頸部には，「8」の字状の貼付文が施され，そこから2条の沈線による逆「C」字状文が描かれ，区画内は磨り消されている。文様の下端には，刺突を有する円形貼付文が施されている。2は，条線文が縦位に施されている胴部片である。3～5は口縁部片である。3は，口縁部無文帯に縄文が施されている。4は，本跡の炉覆土から出土し，全面に縄文が施され，5も縄文が施されている。6～8は胴部片である。6は，沈線で曲線文が描かれ，区画内に縄文が充填されている。7は，条線文が斜位に施されている。8は，縄文が施されている。



第70図　第42号住居跡出土遺物拓影図

第43号住居跡（第71図）

本跡は，調査区の南部J3c₁区を中心に確認された住居跡で，第38号住居跡の南西側2.6mに位置している。本跡は，南東側が古墳時代前期に比定される第37号住居跡によって切られ，本跡床面の北東側に第120号土坑，南側に第123号土坑，東側に第122号土坑，北側に第121号土坑が重複している。第120号，第121号，第122号土坑は，出土遺物から，また第123号土坑の上面には，



第71図　第43号住居跡実測図・遺物出土位置図・遺物接合関係図

本跡の炉が構築されていることから，本跡の方が新しい遺構である。

平面形は，住居跡や土坑と重複しているため推定であるが，長径6.15m，短径5.65mの不整楕円形を呈し，長径方向は，N－45°－Wを指していると思われる。壁は，締まりのあるロームで，北壁は，ほぼ垂直に立ち上がり，西壁はゆるやかに外傾して立ち上がっている。床面は，全体的に軟弱であるが，炉の周囲は踏み固められて硬い。炉は中央部よりも西側に位置し，長径67cm，短径56cmの楕円形を呈し，床面を6cmほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉内には，焼土が充満し，炉床はロームが熱を受けて硬く焼けて凹凸している。ピットは，13ヶ所検出されている。

主柱穴は，P_1・P_4・P_7・P_{11}の４ヶ所と考えられ，長径32～53cm，短径30～40cm，深さ11～48cmの規模を有している。

本跡の覆土は，上層に少量のローム粒子を含む褐色土，下層に多量のローム粒子を含む褐色土が自然堆積している。

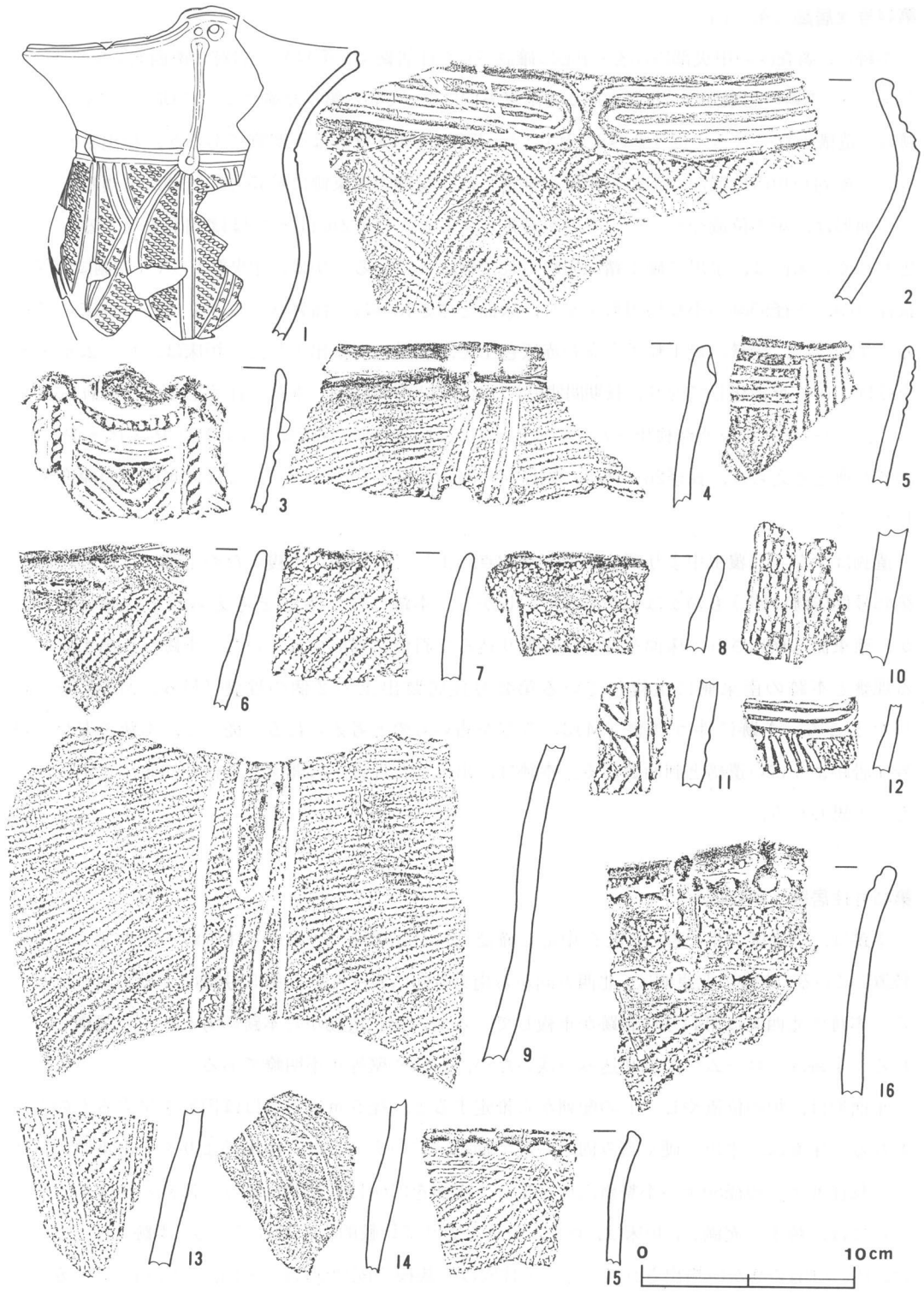
遺物は，住居跡全域の覆土から縄文土器片653点出土している。これらの土器片の大半は，縄文時代後期前葉のものであるので，本跡は，ほぼ同時期に比定されるものと思われる。

第43号住居跡出土土器

住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
第72図 1	深鉢形土器	A(15.6) B(15.8)	口縁部が大きく外反し，頸部はくびれをもち，胴下半部がふくらむ器形を呈している。口縁部は幅の広い無文帯を有し，２単位の突起を有すると思われる。頸部まで細い沈線を垂下させ，隆線の下端には２本の沈線を巡らしている。胴部下端には隆線下端から２本単位の沈線による弧状文を描き，区画間に斜行する沈線文が充填されている。内面上半部横ナデ，下半部縦ナデ。	砂粒・砂礫 普通 赤褐色	40% P268

第72図は，第43号住居跡から出土した縄文土器及び土器片の実測図・拓影図である。２は，口縁部から胴部にかけての破片で，幅の広い口縁部には，２条の沈線により横長の楕円形を区画し，区画間には，２個の円形刺突文を縦位に施している。胴部には羽状縄文が施されている。３は，大小の山形状突起を有する口縁部片で，円形刺突文を施した波状部からキザミ目を付した隆線を垂下させ，同様の隆線を上端に弧状に区画している。区画内外には沈線による曲線的モチーフを描いている。４は，口縁直下に１条の隆線を巡らし，幅の狭い口縁部無文帯には３個の円形刺突文が施されている。円形刺突文下には４条の沈線が斜位に施され，以下に縄文が施されている。５～８は口縁部片である。５は，口縁直下に１条の沈線を巡らし，以下縄文地文上に沈線が横位，縦位に施されている。６は，口縁部無文帯下に縄文が施され，７は，全面に縄文が施されている。８は，縄文地文上に沈線が斜位に施されている。９～14は胴部片である。９は，縄文地文上に２条の幅の広い沈線を垂下させ，その沈線内には沈線による縦長の楕円形状文を描き，その下には２条の沈線を縦位に施している。10は，刺突文を施した後に２条の沈線が縦位に施されている。11は，縄文地文上に沈線が斜位に，曲線的に施されている。12は，沈線が横位，斜位に施されている。13は，縄文地文上に沈線が斜位に，14は，沈線が曲線的にそれぞれ施されている。15・16は口縁部片で，15は，口縁直下に棒状工具による押圧文を施した隆線を巡らし，以下縄文地文上には，沈線を数条単位で横位，斜位に施している。16は，波状縁を呈し，口縁部の縄文の地文上には，棒状工具による押圧を加えた２条の隆線を横位に，また，同様の隆線を縦位に貼付している。



第72図　第43号住居跡出土遺物実測図・拓影図

第44号住居跡（第73図）

本跡は，調査区の中央部I3i_3区を中心に確認された住居跡で，第14号住居跡の南西側4.5mに位置している。本跡の北東側は，北西方向から南東方向に走っている第5号溝によって切られている。本跡は，遺構のロームへの掘り込みが浅いため，規模・形状・壁等は不明瞭であるが，検出されたピットの配列や炉の位置から本跡の規模を推定した。本跡の南東側に第45号住居跡が重複している。

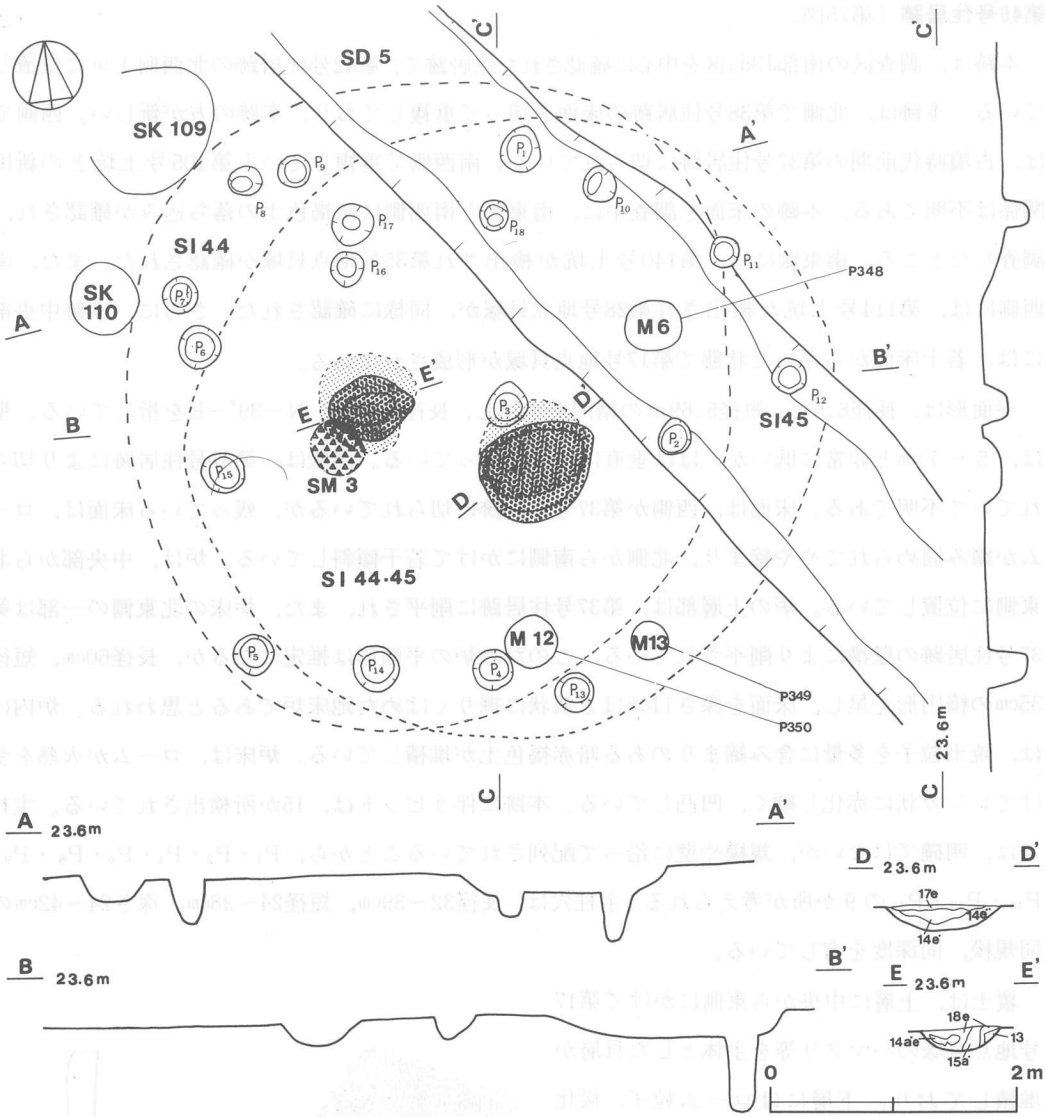
平面形は，炉の位置やピットの配列から推定すると，径5.2mほどのほぼ円形を呈するものと思われる。床面は，平坦で硬く踏み固められて締まっている。炉は，中央部からやや西側に位置し，長径71cm，短径55cmの不整楕円形を呈し，床面を深さ18cmほど擂鉢状に掘りくぼめた地床炉である。炉内には，少量の焼土粒子を含む赤灰色土と，多量の灰が出土した。炉床は，ロームが火熱を受けて硬く焼土化しており，長期間使用されたものと思われる。本跡に伴うものと思われるピットは，P_1～P_9の9か所が検出されている。主柱穴は，配列や規模などからP_1・P_2・P_4～P_6・P_9の6か所と考えられ，長径26～36cm，短径24～34cm，深さ19～30cmで，ほぼ同規模，同深度を有している。

遺物は少なく，覆土中より縄文土器片が28点出土しているが，重複のため本跡に伴うものか，第45号住居跡に伴うものかはわからない。しかし，本跡に伴うものと考えられる埋甕（M12）が，南東側に検出され，床面を22cmほど掘り込んで斜位に埋設されていた。本跡から出土している埋甕と本跡の南東側に重複している第45号住居跡出土の2個の埋甕（M6，M13）を比較したところ，本跡に伴う埋甕（M12）の方が古いものと考えられる。従って，本跡の方が第45号住居跡より古い遺構と判断される。本跡は，出土した埋甕から縄文時代後期初頭に比定されるものと思われる。

第45号住居跡（第73図）

本跡は，調査区の中央部I3i_3区を中心に確認された住居跡で，第14号住居跡の南西側4.5mに位置している。本跡の北東側は，北西方向から南東方向に走っている第5号溝によって切られている。本跡の北西側に第44号住居跡が重複しているが，出土遺物から本跡の方が新しい遺構と思われる。本跡は，ロームへの掘り込みが浅いため，形状や壁等が不明瞭である。

平面形は，炉の位置やピットの配列から推定すると，径5mほどのほぼ円形を呈するものと思われる。床面は，平坦で硬く踏み固められて締まっている。炉は，中央部よりやや南東側に位置し，長径99cm，短径80cmの不整楕円形を呈し，床面を21cmほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉内には，焼土が充満し，炉床は，ロームが熱を受けて比較的よく焼けている。本跡に伴うピットは，P_{10}～P_{18}の9か所検出されている。主柱穴は，規模や配列からP_{10}・P_{12}～P_{15}・P_{17}の6か所と考えられ，直径27～39cm，深さ27～65cmの規模を有している。これらの主柱穴は，ほぼ六角形状



第73図　第44・45号住居跡実測図

に配列されている。

遺物は，覆土から縄文土器片が28点出土しているが，遺物の多くは，第44号住居跡と重複しているため，本跡に伴うものかどうかはわからない。しかし，本跡に伴う遺物として考えられる埋甕が２個出土している。埋甕（Ｍ６）は，北東側の第５号溝により胴上半部を切られて出土している。埋甕（M13）は，南東側床面からほぼ完形で出土している。本跡は出土している埋甕から縄文時代後期初頭に比定されるものと思われる。

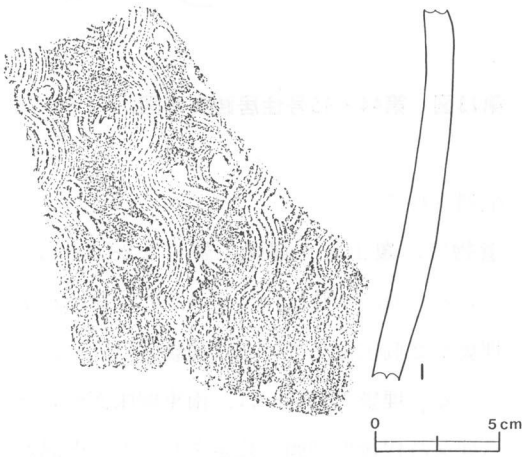
第46号住居跡（第75図）

本跡は，調査区の南部J3d$_3$区を中心に確認された住居跡で，第42号住居跡の北西側１ｍに位置している。本跡は，北側で第38号住居跡の床面を切って重複しており，本跡の方が新しい。西側では，古墳時代前期の第37号住居跡に切られている。南西側で重複している第105号土坑との新旧関係は不明である。本跡の床面を調査中に，南東側と南西側に暗褐色土の落ち込みが確認され，調査したところ，南東側には，第140号土坑が検出され第35号地点貝塚が確認された。また，南西側には，第114号土坑が検出され第28号地点貝塚が，同様に確認された。さらに，本跡中央部には，若干床面から浮いた状態で第17号地点貝塚が形成されている。

平面形は，長径6.6ｍ，短径5.69ｍの楕円形を呈し，長径方向は，N－39°－Eを指している。壁は，５～７cmと非常に低いが，ほぼ垂直に立ち上がっている。西壁は，第37号住居跡により切られていて不明である。床面は，西側が第37号住居跡に切られているが，残っている床面は，ロームが踏み固められてやや締まり，北側から南側にかけて若干傾斜している。炉は，中央部から北東側に位置している。炉の上層部は，第37号住居跡に削平され，また，炉床の北東側の一部は第37号住居跡の壁溝により削平されている。このため炉の平面形は推定になるが，長径60cm，短径35cmの楕円形を呈し，床面を深さ11cmほど皿状に掘りくぼめた地床炉であると思われる。炉内には，焼土粒子を多量に含み締まりのある暗赤褐色土が堆積している。炉床は，ロームが火熱を受けてレンガ状に赤化し硬く，凹凸している。本跡に伴うピットは，15か所検出されている。主柱穴は，明確ではないが，規模や壁に沿って配列されていることから，P_1・P_2・P_4・P_6・P_8・P_9・P_{11}・P_{13}・P_{14}の９か所が考えられる。主柱穴は，長径32～39cm，短径24～38cm，深さ24～42cmの同規模，同深度を有している。

覆土は，上層に中央から東側にかけて第17号地点貝塚のハマグリ等を主体とした貝層が堆積しており，下層にはローム粒子，炭化粒子，破砕貝片を極少量含み締まりのある極暗褐色土が，壁際にはローム粒子を少量含み締まりのある褐色土が自然堆積している。

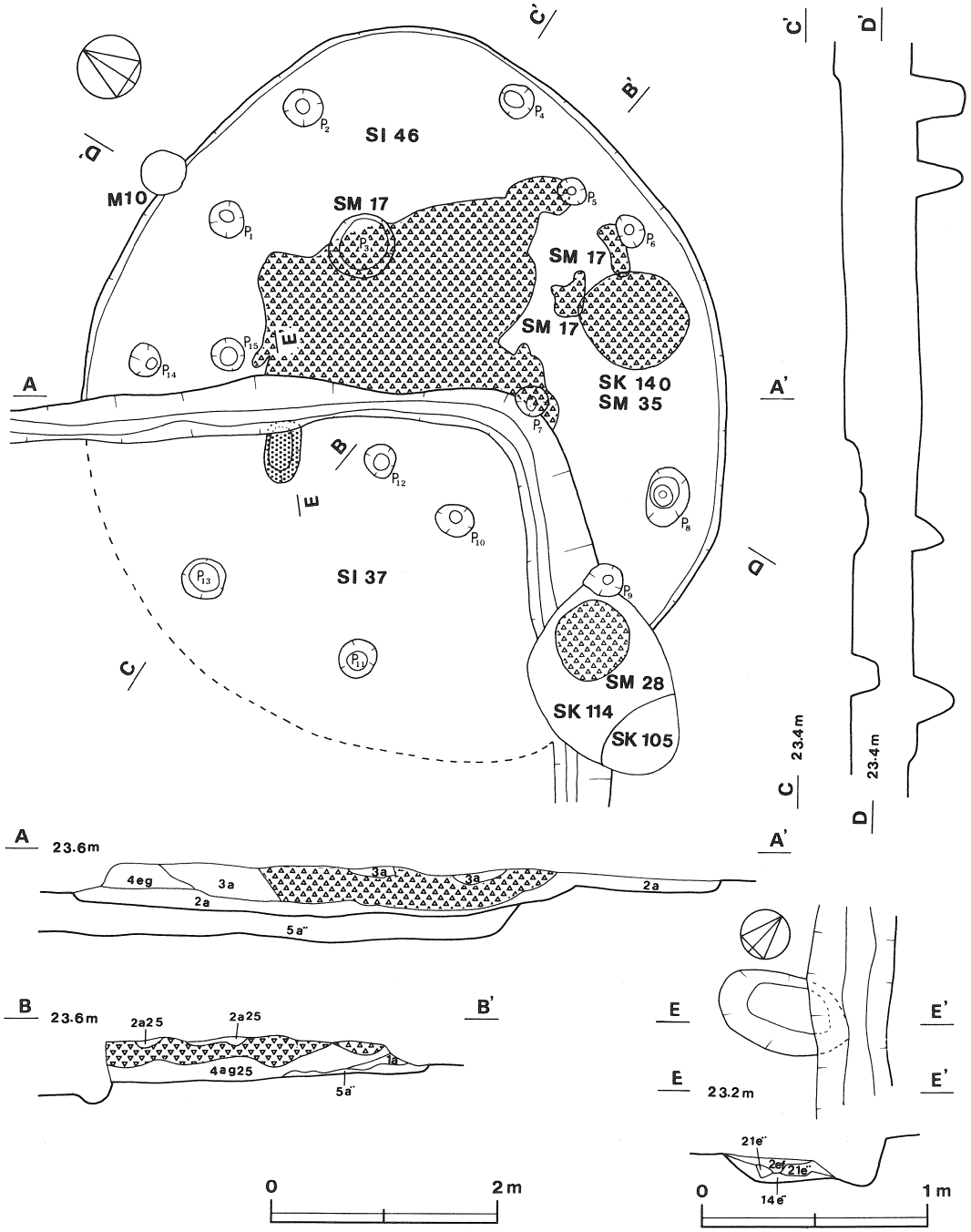
遺物は，中央部に投棄された貝層及び覆土から縄文土器片が1,640点出土している。土器片の大半は，縄文時代後期前葉に比定されるものなので，本跡は，ほぼ同時期のものと思われる。



第74図　第46号住居跡出土遺物拓影図

第46号住居跡出土土器

第74図は，第46号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。１は，胴部片で，条線文が波状に施されている。



第75図　第46号住居跡実測図

2　弥生時代

第１号住居跡（第76図）

本跡は，調査区の北部H3i_4区を中心に確認された住居跡で，調査区の最北部に位置している。本跡の北東側17ｍには，第２号溝が，北西方向から南西方向に走っている。

平面形は，長軸5.4ｍ，短軸5.16ｍの隅丸方形を呈しており，長軸方向は，N－10°－Eを指している。壁は，締まりのあるロームで，ほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は，７～14cmで，ロームへの掘り込みは比較的浅い。床面は，硬く踏み固められているが，中央部に向かい若干底く傾斜している。炉は，ほぼ中央部に位置し，長径87cm，短径63cmの楕円形を呈し，床面を北側は７cmほど，南側は33cmほど階段状に掘りくぼめた地床炉である。炉内には，上層に，焼土粒子や焼土小ブロックを含む極暗赤褐色土が，下層には，焼土粒子を極少量含む褐色土が堆積している。ピットは，４か所検出され，規模や配列からいずれも主柱穴と考えられる。主柱穴は，径24～27cmのほぼ円形で，深さ39～61cmの規模を有しており，方形状に規則的に配列されている。貯蔵穴は，南西コーナー部に検出されており，平面形は，径73cmほどの円形を呈し，深さ48cmの規模で掘り込んで構築されている。貯蔵穴の西壁は，ほぼ垂直に，他の壁は，外傾しながら立ち上がっており，底面は硬く平担である。貯蔵穴の覆土は，上層には暗褐色土が，下層には褐色土が自然堆積している。

本跡の覆土は，上層にローム粒子を極少量含む黒褐色土が，下層にはローム粒子を少量含む暗褐色土が自然堆積している。

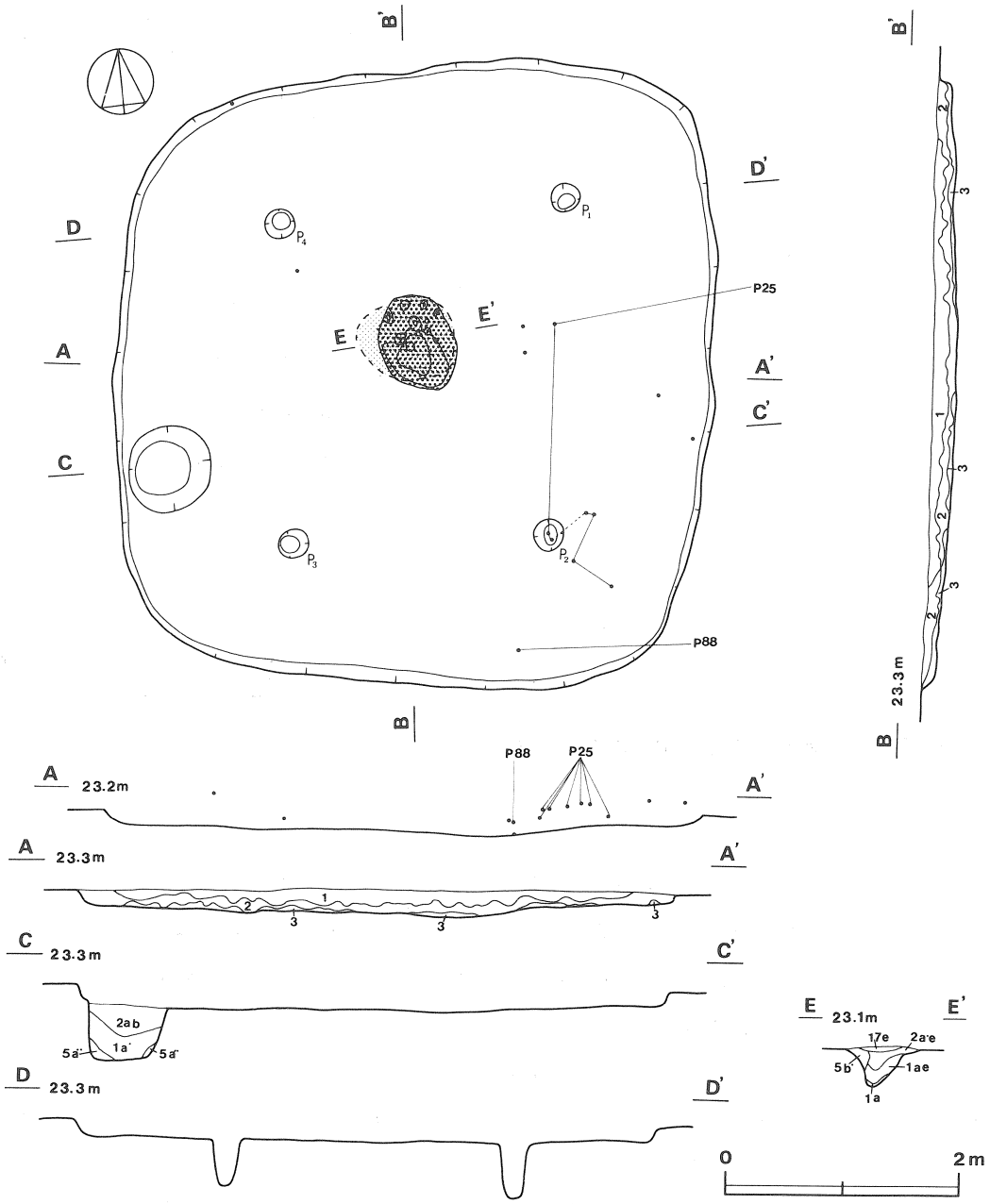
遺物は少なく，縄文土器片，弥生式土器片が45点出土したのみである。縄文土器片は，周囲から流れ込んだものと考えられる。本跡に伴う遺物としては，南東側床面直上から半完形の弥生式土器の小型甕形土器（第77図１）が横位で出土している。本跡は出土遺物から，弥生時代後期に比定されるものと思われる。

第１号住居跡出土土器

住居跡出土土器観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備　考
第 77 図 1	甕形土器	A(21.1) B(23.5)	複合口縁でややくびれ，頸部から外反して立ち上がる。胴部中位にやや張りを有してる。口唇部から口縁部，胴部に撚糸文が施されている。頸部は無文帯となり斜位に細いハケ目が施されている。内面横ナデ。	砂粒 普通 黒褐色	40% P25

第77図は，第１号住居跡から出土した弥生式土器及び土器片の実測図・拓影図である。２・３は撚糸文が施されている胴部片である。４は，木葉痕がみられる底部片である。

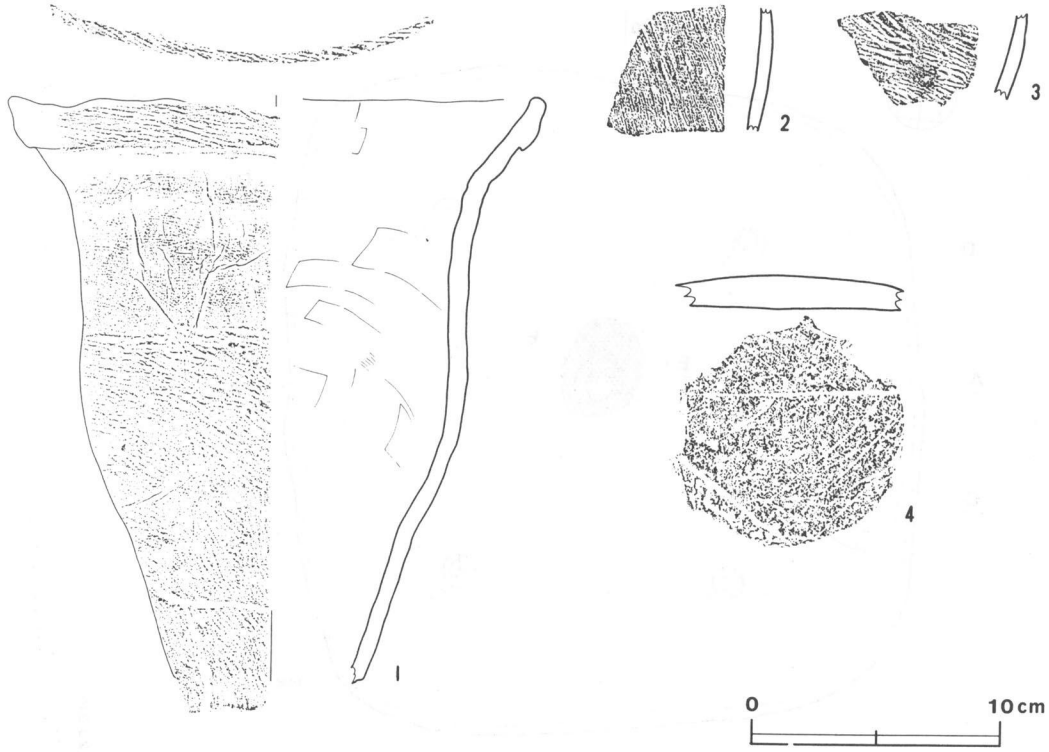


第76図　第１号住居跡実測図・遺物出土位置図・遺物接合関係図

3　古墳時代

第５号住居跡（第78図）

本跡は，調査区の南東部J4a₂区を中心に，確認された住居跡で，第９号住居跡の南東側７ｍに

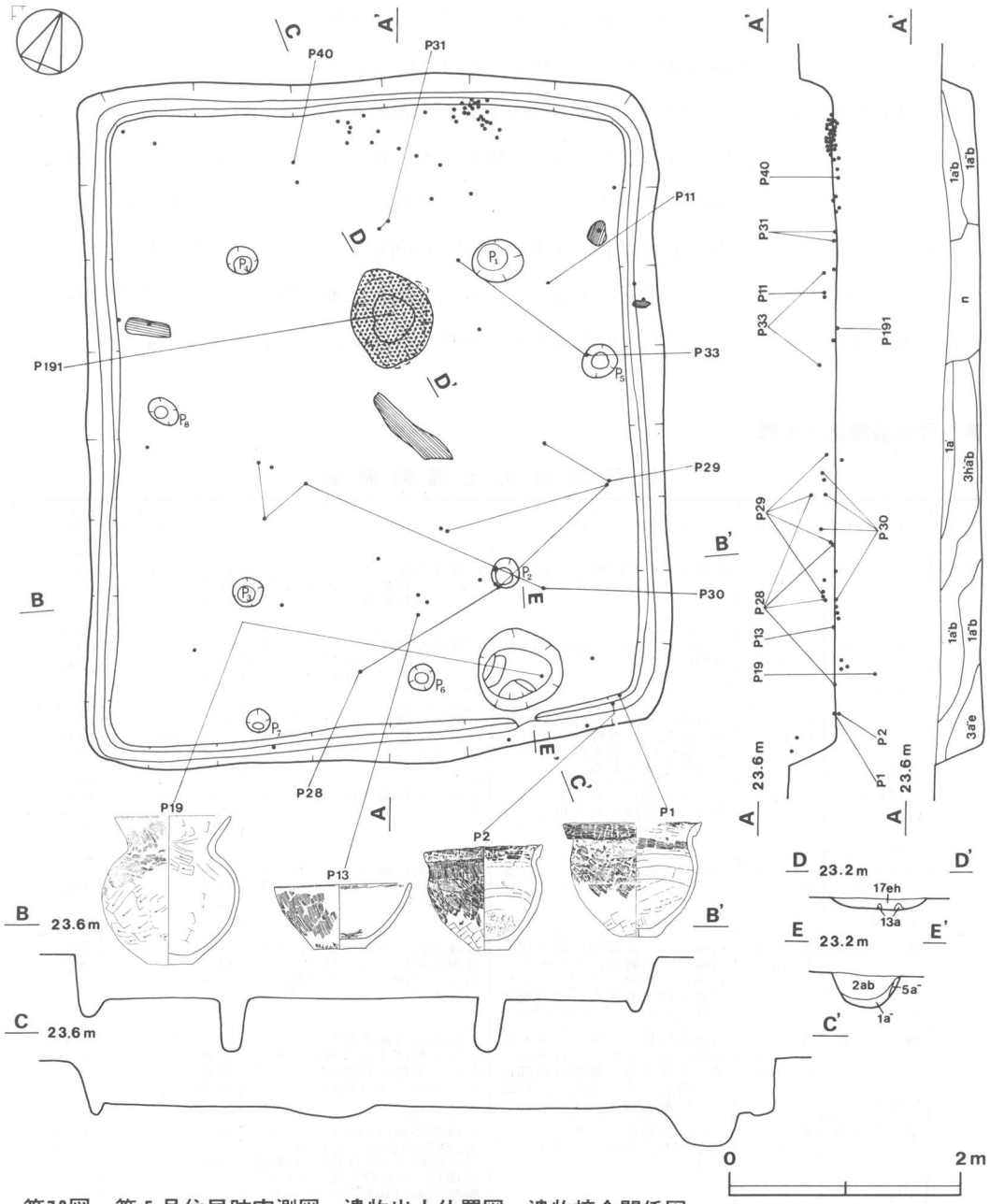


第77図　第１号住居跡出土遺物実測図・拓影図

位置している。

平面形は，長径5.92m，短形5.01mの隅丸長方形を呈しており，長軸方向は，N－21°－Wを指している。壁は，明瞭で，硬く締まりを帯びたロームである。北東壁，北西壁は外傾して，その他の壁は，ほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は，32～49cmで，当調査区から検出された遺構の中でも，掘り込みの深い住居跡の１つである。壁下には，幅16～21cm，深さ11～19cmほどの壁溝が全周している。床面は，平担で，硬く踏み固められており，特に，炉の周辺は堅緻である。炉は，中央部からやや北側に位置し，長径82cm，短径68cmの楕円形を呈しており，床面を８cmほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉内には，多量の焼土が充満し，炉床はレンガ状に硬く焼けている。ピットは８か所検出され，その中でP_1～P_4が主柱穴と思われる。主柱穴は，径26～46cmのほぼ円形を呈し，規模は，深さ44～47cmである。貯蔵穴は，南壁側の南東コーナー部よりに検出され，平面形は，長径77cm，短径69cm，深さ35cmの楕円形を呈している。壁は，外傾して立ち上がり，底面はやや硬く，やや凹凸状を呈している。貯蔵穴の覆土は，上層に締まりのある暗褐色土が，下層にローム粒子を多量に含み，締まりのある褐色土が自然堆積している。

本跡の覆土は，中央部の上層にローム粒子を含む褐色土が，下層にはローム小ブロックの他



第78図　第５号住居跡実測図・遺物出土位置図・遺物接合関係図

に，炭化物や焼土粒子を含む黒褐色土がレンズ状に自然堆積している。特に，壁際や床面上から焼土や炭化材が検出され，中でも北東壁，南東壁に倒れるように炭化材が検出されていることから，本跡は火災に遭ったものと考えられる。

遺物は，縄文土器片620点，土師器片327点，石器２点が住居内から出土している。縄文土器片

は，周囲からの流れ込みと思われ，覆土から出土している。本跡に伴う遺物としては，北東側の床面より若干浮いて土師器の高坏形土器の坏部（第79図4）が，南東側のほぼ床面上より，ほぼ半完形の甕形土器（第79図9），甕形土器（第79図8），甕形土器の胴部片（第80図15），東コーナー部のほぼ床面より，完形の甕形土器と甑形土器が，甕形土器（第79図7）の上に甑形土器（第79図6）をのせている状態で，やや傾斜して出土している。また貯蔵穴の底面から小型壺形土器（第79図3）が横位で出土している。南側床面直上より埦形土器（第79図1）が正位で，また北壁に沿って床面から土玉が54個出土している。北側の床面直上より台付甕形土器の胴下半部片（第80図16）・甕形土器（第80図14）が出土している。出土遺物から本跡は，古墳時代の五領期に比定される。

第5号住居跡出土土器

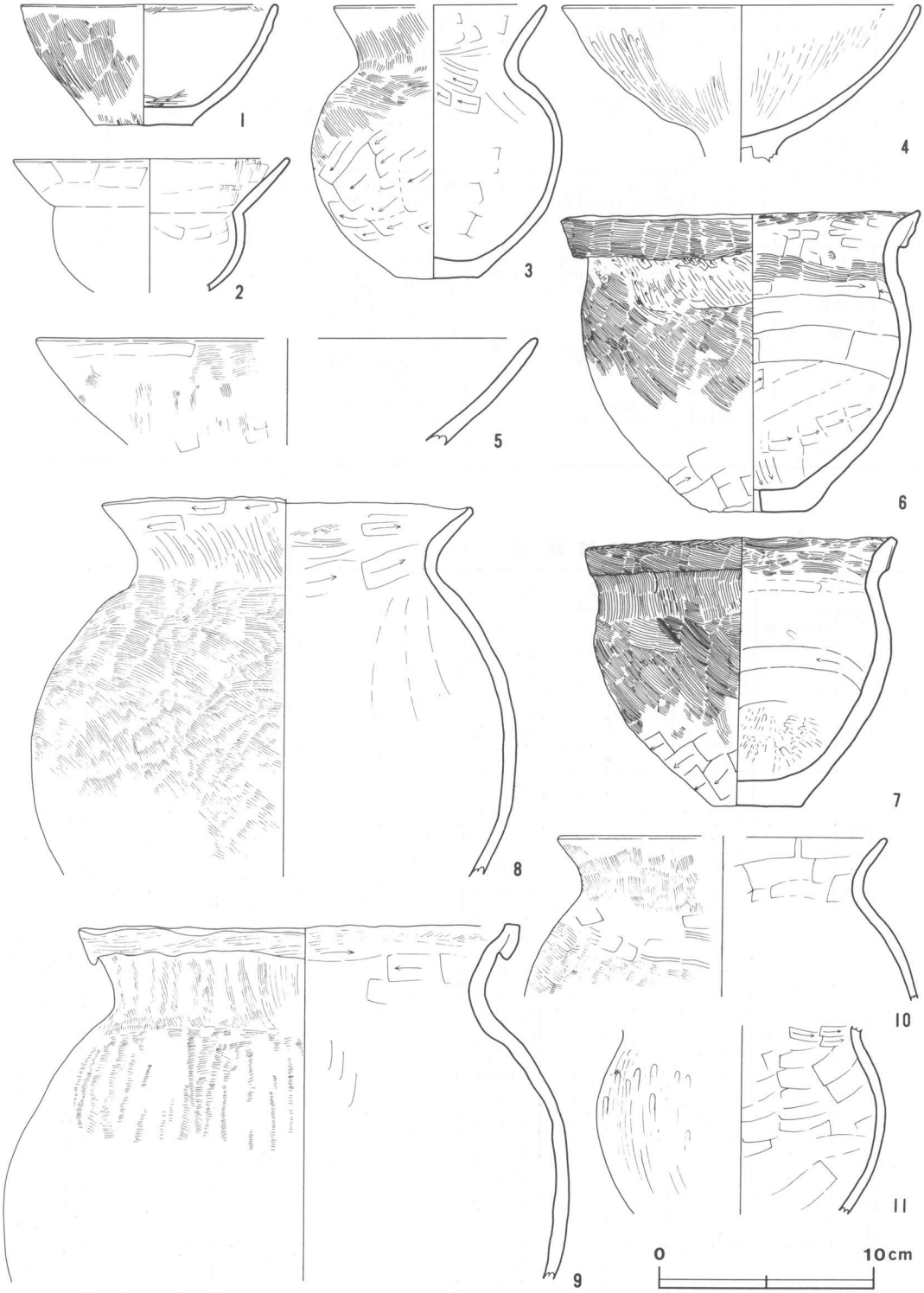
住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第79図1	埦形 土器 土師器	A 11.8 B 5.6 C 4.5	底部よりやや内彎して立ち上がる。底部は平底である。	口縁部外面は横ナデ。体部外面はハケ目整形。口縁部内面はハケ目整形後ナデ。	砂粒・雲母 橙色 普通	95% P13
2	坩形 土器 土師器	A 12.7 B（6.2）	口径が大きく，口縁はほぼ直線的にのびる。	口縁部外面は横ナデ，一部縦位のヘラ磨き，胴部内・外面共ヘラナデ。口縁部内面ヘラ磨き。	砂粒 明赤褐色 普通	30% P42
3	壺形 土器 土師器	A（9.9） B 12.7 C 3.6	口縁部は頸部より外反し，胴部は底部より内彎して立ち上がり胴上位に最大径を有する。底部は平底である。	外面の口縁部から胴上位はハケ目，下位はヘラナデ。内面はヘラナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	85% P19
4	高坏形土器 土師器	A 16.8 B（7.3）	坏部が内彎して立ち上がり，脚部は接合部から欠損している。	坏部内・外面共縦位のヘラ磨き。	砂粒・雲母 明赤褐色 不良	50% 内面一部摩滅 P11
5	高坏形土器 土師器	A（23.2） B（5.0）	高坏形土器の坏部片で，坏部は内彎気味に立ち上がる。	坏部外面は縦位のハケ目整形後，横位のナデ。坏部内面は丁寧なナデ。	砂粒 黒褐色 良好	10% P40
6	甑形 土器 土師器	A 16.8 B 13.9 C 4.5	口縁部は，直線的に開き複合口縁で，口唇部に稜がある。胴部は，内彎して開き，上位に最大径を有する。底部中央に径1.8cmほどの穿孔がある。	口縁部内・外面は横位，胴部外面は斜位のハケ目，下位外面はヘラ削り。内面は横位のヘラナデ。	砂粒・長石 橙色 普通	100% P 1
7	甕形 土器 土師器	A 14.0 B 12.0 C 3.6	口縁部は複合口縁で，やや直線的に立ち上がり，口唇部で更に外反する。胴部は底部から内彎して立ち上がり，胴部上位に最大径を有する。	口縁部内外面共横位のハケ目整形，胴部上位は縦位の中位から，下位は斜位のハケ目整形，胴部内面は横位のヘラナデ。	砂粒・長石・石英 橙色 普通	100% P 2
8	甕形 土器 土師器	A 17.1 B（17.8）	口縁部は頸部から外反して立ち上がり，胴中位で最大径を有する。	口縁部外面は斜位のハケ目整形，胴部外面の上位は横位，下位は斜位のハケ目整形，口縁部内面はハケ目整形後ヘラナデ，胴部内面は縦位のヘラナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	40% P29
9	甕形 土器 土師器	A 20.35 B（16.7）	口縁部は，頸部から外反して立ち上がる複合口縁である。胴部はほぼ球形を呈すると思われる。	口縁部上位は内・外面共横位のハケ目整形，下位外面は斜位，胴部外面は横位のハケ目整形。胴部内面はヘラナデ。	砂粒 橙色 普通	40% P28
10	甕形 土器 土師器	A（15.4） B（7.6）	口縁部はやや外反して開き，器厚は薄い。	口縁部外面はハケ目整形，胴上位は斜位のハケ目整形。口縁部内面は横位のナデ，胴上位は横位のヘラナデ。	砂粒 明赤褐色 普通	20% P33
11	甕形 土器 土師器	B（8.9）	胴部は球形を呈している。	外面はヘラ磨き調整。内面は横位のヘラナデ。	砂粒 明赤褐色 普通	10% 摩滅が激しい P38

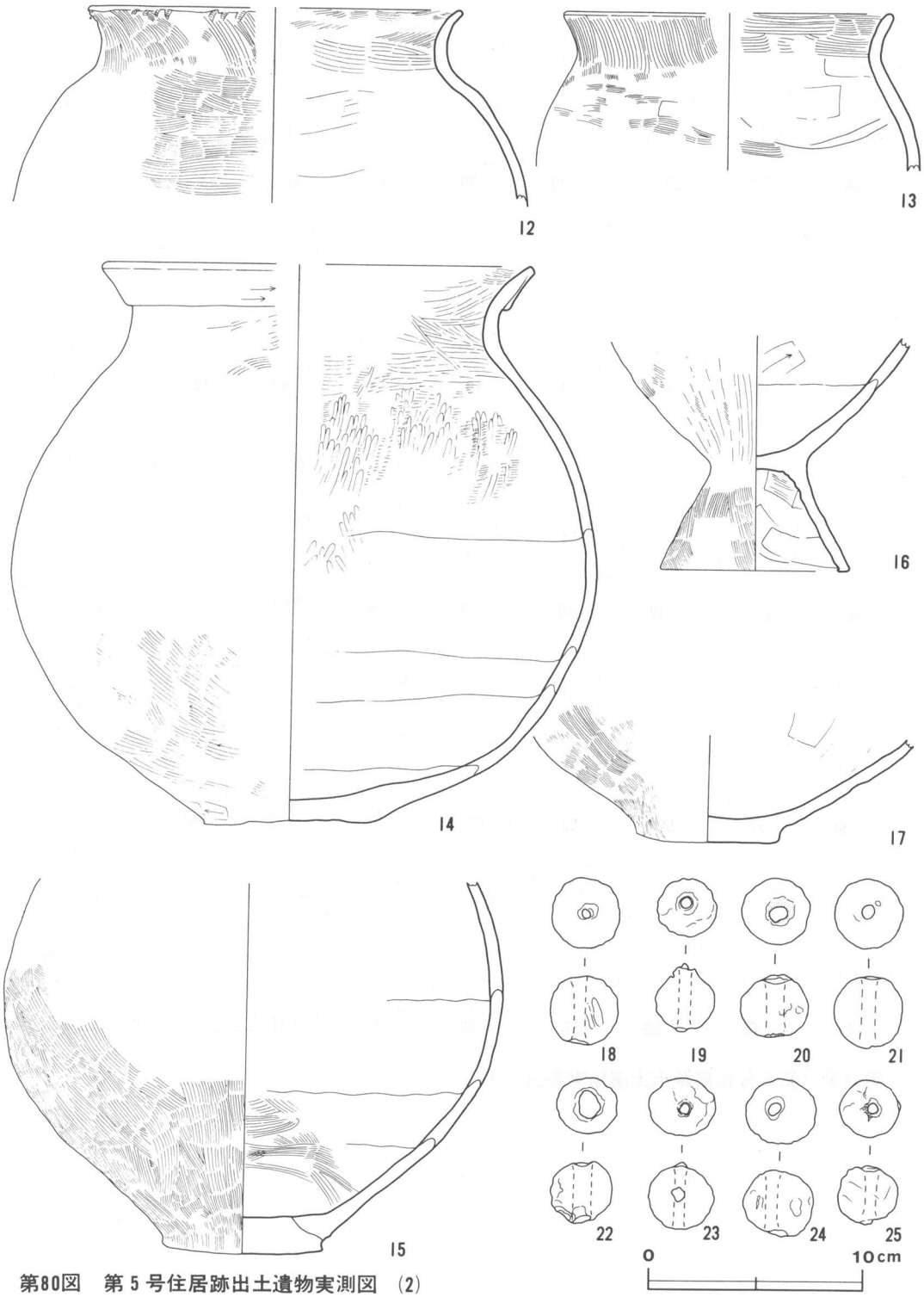
第80図 12	甕形　土器 土師器	A(17.5) B(9.2)	口縁部は，頸部より一旦やや垂直気味に立ち上がり，端部で外反して開く。	口唇部にキザミ目が施され，口縁部から胴部外面は斜位のハケ目整形。口縁部から胴部内面はヘラナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	10% P 37
13	甕形　土器 土師器	A(15.6) B(7.3)	口縁部から胴部にかけての破片で，口縁部はやや外反して立ち上がる。	口縁部は外面が斜位に内面が横位にハケ目整形，胴部外面はハケ目整形後に雑なヘラナデ，内面は横位のヘラナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	10% P 36
14	甕形　土器 土師器	A(20.2) B 26.3 C　7.8	口縁部は，頸部より外反して立ち上がり，複合口縁である。胴部は，ほぼ球形を呈し，中位に最大径を有する。	口縁部外面は横ナデ，内面は横位のハケ目，胴部は斜位のハケ目整形，胴部外面は横位のハケ目整形後縦位のヘラ磨き，下位はヘラナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	60% P 191
15	甕形　土器 土師器	B(17.7) C　7.5	胴部は大きく内彎しながら立ち上がり，胴中位で最大径を有する。底部は平底である。	胴部外面は中位に斜位，下位に縦位のハケ目整形。胴部内面は中位に横位のヘラナデ。下位はハケ目整形。	砂粒 にぶい橙色 普通	30% P 30
16	台付甕形土器 土師器	B(11.0) D　8.9	胴部は接合部から内彎気味に立ち上がり，台部は接合部から裾部へ，外傾して開く。	胴部下位に内・外面共にヘラナデ，台部外面は縦位のハケ目整形，内面は横位のヘラナデ，一部にハケ目痕が残る。	砂粒 にぶい橙色 普通	30% P 31
17	甕形　土器 土師器	B(5.1) C　6.7	平底の底部から，胴部は大きく広がり，内彎して立ち上がる。	胴部外面は縦位のハケ目整形，胴部内面はヘラナデ整形，部分的にハケ目痕が残る。	砂粒 赤褐色 普通	15% P 34

土 錘 解 説 表 （球状土錘・管状土錘）

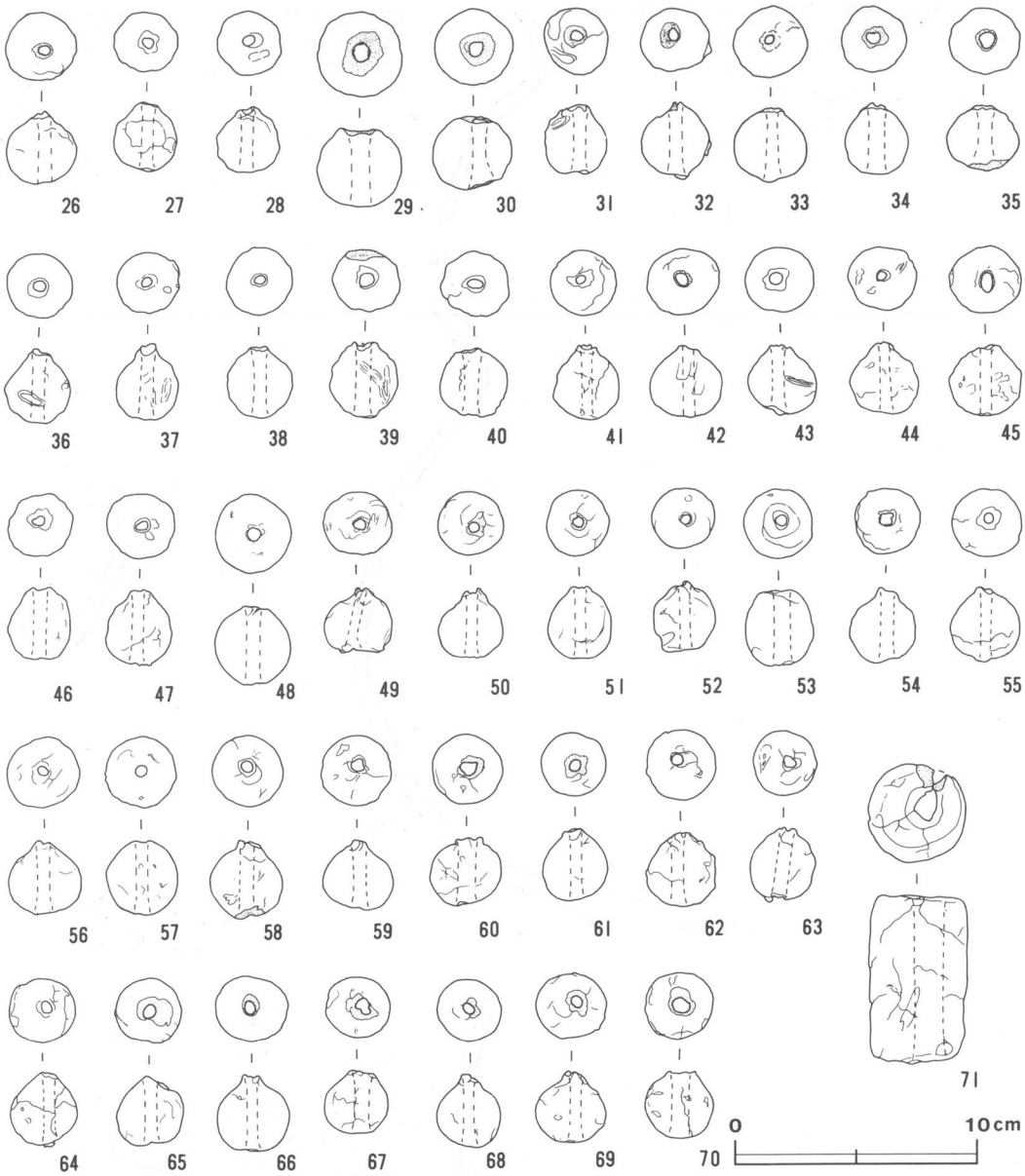
図版番号	名　称	長さ×幅 (cm)	孔　径 (cm)	重　さ (g)	備　考	図版番号	名　称	長さ×幅 (cm)	孔　径 (cm)	重　さ (g)	備　考
第80図 18	球状土錘	3.2×3.2	0.7	35	極暗褐色	第81図 45	球状土錘	3.0×3.0	0.5	26	褐　色
19	〃	3.2×2.8	0.6	21	極暗褐色	46	〃	3.0×2.7	0.6	21	黒褐色
20	〃	2.9×3.2	0 6	30	橙　色	47	〃	3.1×2.8	0.6	26	黒褐色
21	〃	3.4×3.3	0.7	39	明褐色	48	〃	3.3×3.1	0.6	31	赤褐色
22	〃	2.7×2.8	0.7	24	褐　色	49	〃	2.8×2.8	0.4	19	褐　色
23	〃	3.2×3.1	0.6	30	灰褐色	50	〃	2.9×2.7	0.5	18	黒褐色
24	〃	3.2×3.2	0.7	31	褐　色	51	〃	3.0×2.6	0.5	20	黒褐色
25	〃	2.8×2.8	0.6	21	明褐色	52	〃	2.9×2.6	0.5	18	黒褐色
第81図 26	〃	3.0×2.9	0.6	25	黒褐色	53	〃	3.3×2.8	0.7	27	橙　色
27	〃	2.7×2.6	0.7	20	黒褐色	54	〃	3.2×2.7	0.6	20	褐　色
28	〃	2.7×2.6	0.6	20	暗褐色	55	〃	3.2×2.8	0.5	21	褐灰色
29	〃	3.5×3.2	0.7	40	褐　色	56	〃	3.1×3.0	0.6	22	褐　色
30	〃	3.1×3.1	0.6	31	明褐色	57	〃	3.2×2.9	0.5	29	明褐色
31	〃	2.9×2.6	0.6	20	黒褐色	58	〃	3.3×2.9	0.5	21	黒褐色
32	〃	3.2×3.2	0.6	21	明褐色	59	〃	2.9×2.9	0.5	21	黒褐色
33	〃	3.1×3.1	0.6	30	黒褐色	60	〃	2.9×2.9	0.7	21	黒褐色
34	〃	3.0×2.7	0.7	22	暗褐色	61	〃	3.0×2.7	0.5	19	褐　色
35	〃	2.8×2.8	0.7	21	極暗褐色	62	〃	3.1×2.8	0.5	22	褐　色
36	〃	3.1×2.7	0.6	21	黒褐色	63	〃	3.1×2.6	0.7	20	暗褐色
37	〃	3.2×2.5	0.6	20	暗褐色	64	〃	3.2×2.7	0.5	21	黒褐色
38	〃	3.0×2.7	0.6	22	褐　色	65	〃	2.9×2.7	0.6	19	褐　色
39	〃	3.1×2.8	0.6	21	黒褐色	66	〃	3.2×3.0	0.6	21	黒褐色
40	〃	2.9×2.7	0.8	21	黒褐色	67	〃	2.7×2.7	0.7	17	黒褐色
41	〃	3.1×2.7	0.5	21	黒褐色	68	〃	3.0×2.7	0.5	19	褐　色
42	〃	3.0×2.9	0.5	26	褐　色	69	〃	3.0×2.9	0.6	21	褐　色
43	〃	2.9×2.8	0.5	22	灰褐色	70	〃	2.8×2.7	0.8	19	黒褐色
44	〃	3.0×2.8	0.5	20	褐　色	71	管状土錘	7.0×4.1	1.3	85	黒褐色



第79図　第５号住居跡出土遺物実測図（1）



第80図　第５号住居跡出土遺物実測図　(2)



第81図　第５号住居跡出土遺物実測図　(3)

第９号住居跡（第83図）

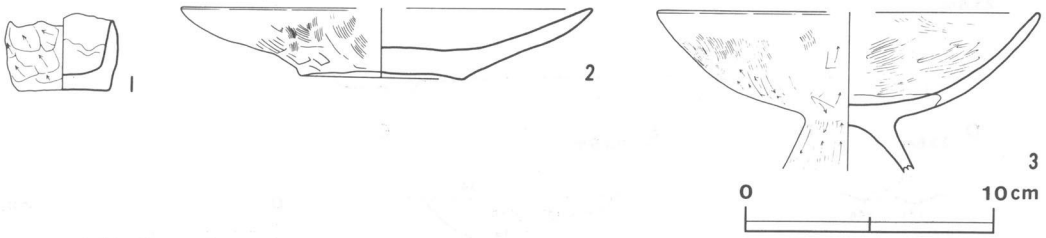
本跡は，調査区の南東部J3d_0区を中心に確認された住居跡で，第５号住居跡の南西７ｍに位置している。

平面形は，長軸6.60m，短軸5.08ｍの隅丸長方形を呈しており，長軸方向は，N－46°－Wを指している。壁は，明確で硬く締まっており，ほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は，26～53cmである。床面は，全体的に平坦で硬く踏み固められており，特に，炉の南側から貯蔵穴に至る床面は硬い。炉は，中央から北側に位置し，長径76cm，短径59cmの楕円形を呈し，床面を深さ９cmほどの皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉内には，少量の焼土粒子を含む暗赤褐色土が堆積し，炉床はロームが熱を受けて硬く焼け凸凹している。貯蔵穴は，南西コーナー寄りの北西壁に接して検出され，平面形は，長軸154cm，短軸92cmの隅丸長方形を呈し，床面を深さ37cm掘り込んでいる。貯蔵穴の壁は，南東壁，北西壁はゆるやかに外傾して立ち上がり，他は，ほぼ垂直に立ち上がっている。底面は北東側より，南東側が深く掘り込まれている。貯蔵穴の覆土は，上層に暗褐色土が，下層に褐色土が，ともに締まりを帯びて自然堆積している。

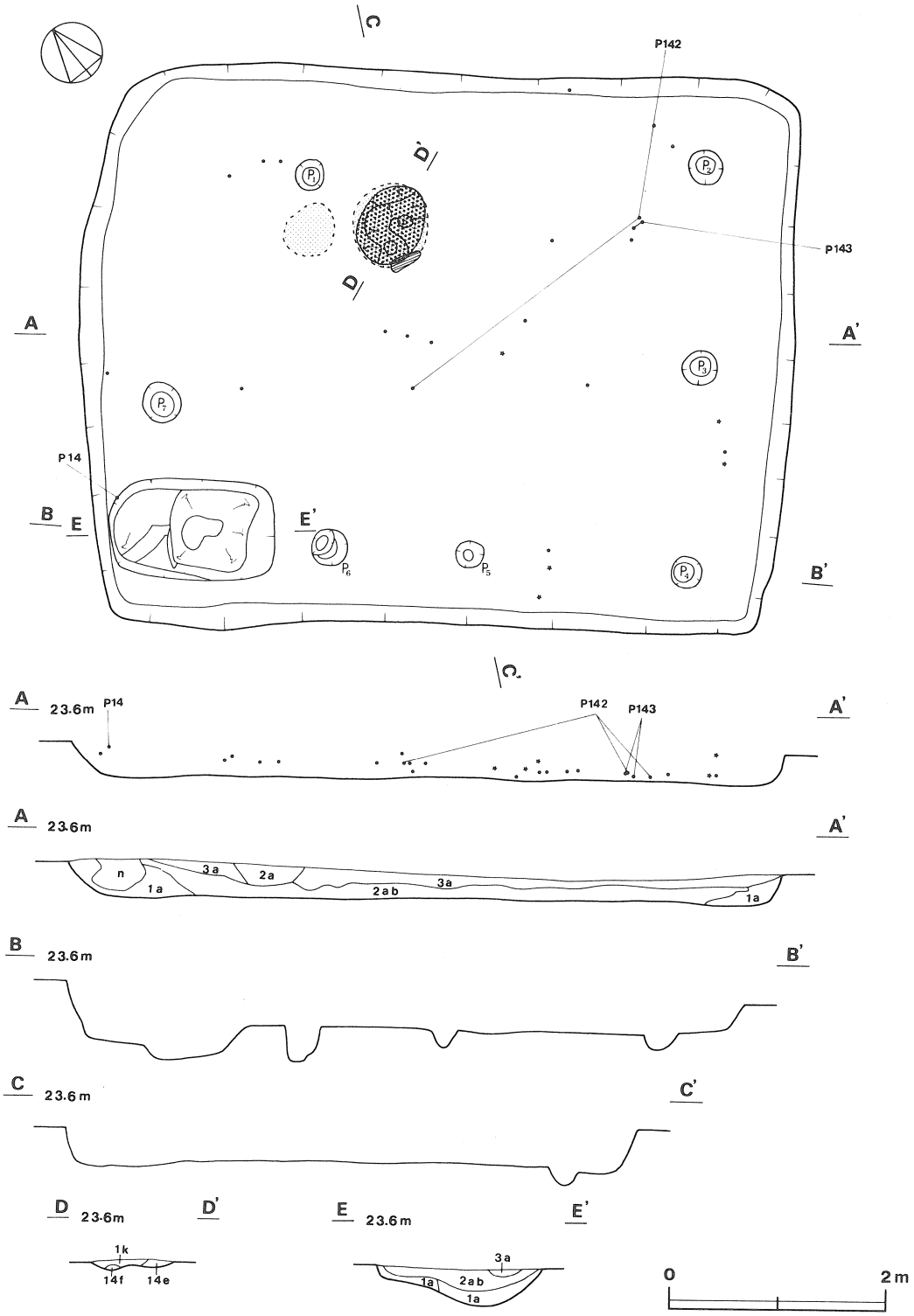
ピットは，７か所検出されており，規模や配列からP_1・P_2・P_4・P_6の４か所が主柱穴と考えられる。主柱穴は，長径31～36cm，短径28～34cm，深さ16～36cmの規模を有しており，P_1・P_6はやや南東寄りであるが，ほぼ方形状に規則的に配列されている。出入口としては，炉の位置やピットの配列等から，南西壁側のP_5とP_6の間が考えられる。

本跡の覆土は２層からなり，北西壁際に一部攪乱跡がみられるが，上層には極少量のローム粒子を含む締まりのある黒褐色土が，下層には少量のローム粒子・ローム小ブロックを含む暗褐色土が，自然堆積の状態で堆積している。

遺物は，縄文土器片897点，土師器片80点，石器１点，石４点が出土している。縄文土器片は，周囲から流れ込んだものと考えられ，覆土上層から出土している。本跡に伴う土師器片は，中層から床面にかけて出土しており，東側のほぼ床面からは，高坏形土器の坏部（第82図3）や，ほぼ半完形の皿状の土師器（第82図2）が，西側の覆土中層から完形のミニチュア土器（第82図1）が出土している。本跡は，出土遺物から古墳時代の五領期に比定される。



第82図　第９号住居跡出土遺物実測図



第83図　第９号住居跡実測図・遺物出土位置図・遺物接合関係図

第９号住居跡出土土器

住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第82図 1	ミニチュア土器 土師器	A 4.1 B 3.1 C 3.7	底部よりやや内彎気味に立ち上がる。	内・外面共ヘラナデ，一部に輪積痕が残る。	砂粒・雲母 にぶい橙色 良好	100% P14
2	皿状形土器 土師器	A(16.5) B 2.8 C 6.6	体部は平底の底部より外傾して立ち上がる。	外面は雑なハケ目整形。内面は横位のヘラナデ。	砂粒 灰褐色 普通	50% P143
3	高坏形土器 土師器	A(15.3) B(6.5)	坏部は接合部から内彎しながら大きく開いて立ち上がる。	外面は粗いハケ目整形。内面は丁寧なヘラ磨き調整。	砂粒 にぶい橙色 普通	15% P142

第10号住居跡（第84図）

本跡は，調査区の南東部J4g_2区を中心に確認された住居跡で，第９号住居跡の南東側9.7ｍに位置している。

平面形は，長軸6.60ｍ，短軸5.41ｍほどの隅丸長方形を呈しており，長軸方向は，N－41°－Wを指している。壁は，締まりのあるロームで，北東壁は外傾して立ち上がり，他の壁は，ほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は，31～43cmである。床面は，ほぼ平坦であり硬く，特に，炉の東側から南側にかけては，明確に床面とわかるほど硬く踏み固められている。炉は，中央部よりやや北東側に位置し，長径96cm，短径68cmの不整楕円形を呈し，床面を深さ10cmほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉内には焼土が充満し，炉床も，ロームが熱を受けてレンガ状に硬く焼けている。貯蔵穴は，南コーナー寄りの南西壁に接して検出され，平面形は，長径101cm，短径76cmの楕円形を呈し，床面を深さ30cmほどに，鍋状に掘り込んでいる。貯蔵穴の覆土は，上層には焼土粒子，炭化粒子を少量含む黒褐色土が，下層にはロームブロック，焼土粒子を少量含む褐色土が自然堆積している。ピットは４か所検出されており，P_1～P_4は，配列や規模からいずれも主柱穴と思われる。主柱穴の規模は，長径24～34cm，短径22～31cm，深さ40～52cmである。

本跡の覆土は，２層からなり，上層には黒褐色土が，下層には褐色土が自然堆積している。下層から床面直上にかけて多量の焼土や，炭化材が検出されている。特に，中央部の炭化材は，重なるように倒れて焼けていることから，本跡は，火災に遭ったものと思われる。

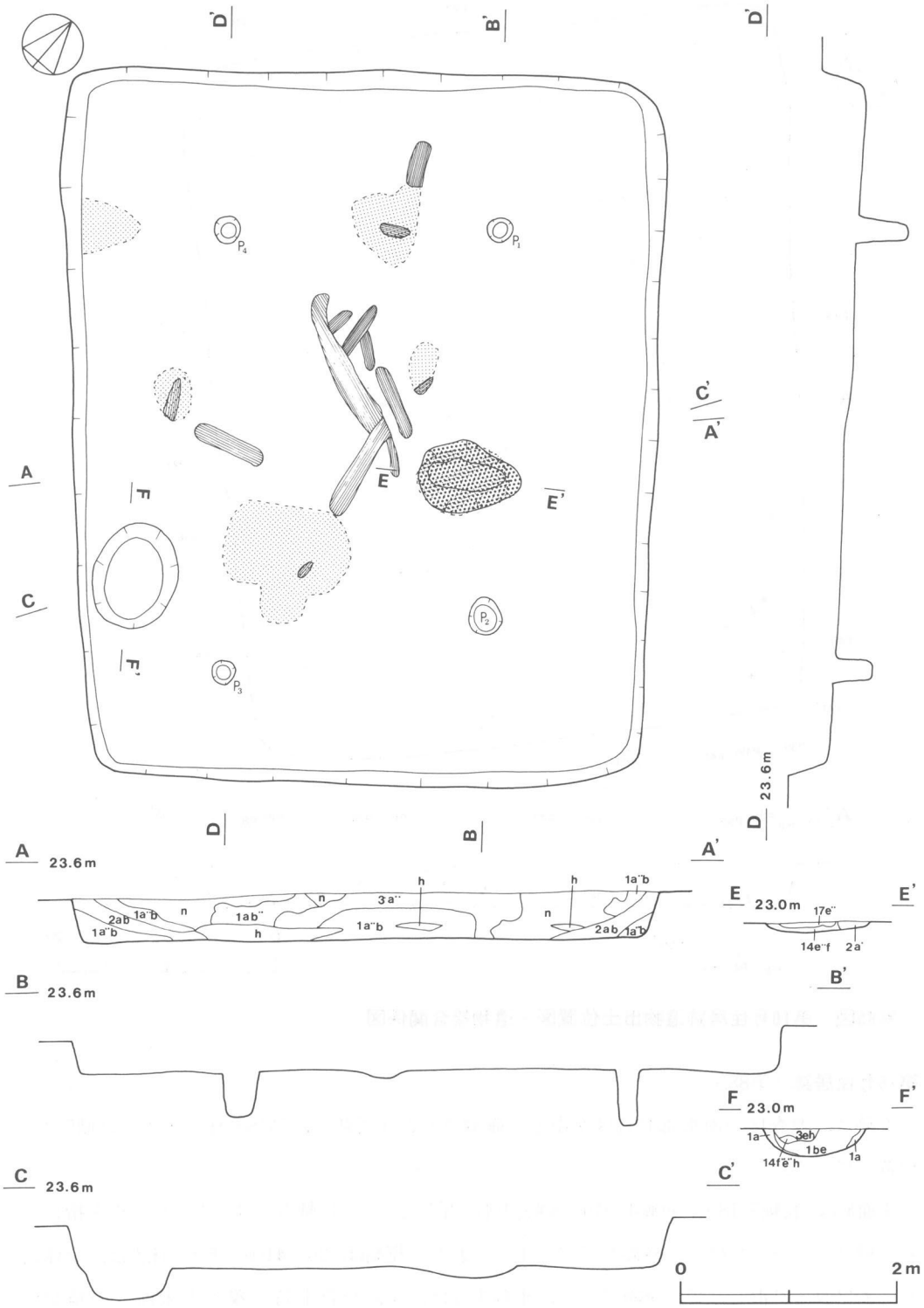
遺物は，縄文土器片571点，土師器片145点，石１点が出土している。縄文土器片は，周囲からの流れ込みと思われ，覆土の上層から出土している。本跡に伴う遺物としては，東コーナー寄りの北東壁際の床面直上から台付甕形土器片（第86図5）が，南コーナー部の床面直上から甕形土器の口縁部片（第87図10）が，ほぼ床面から破砕された状態で台付甕形土器（第86図１）に坩形土器（第86図８）の胴部が出土している。東側のほぼ床面上より半完形の甕形土器（第87図13）が，

北コーナー部の床面上から完形の埦形土器（第86図７）が出土している。本跡は，出土遺物から古墳時代の五領期に比定される。

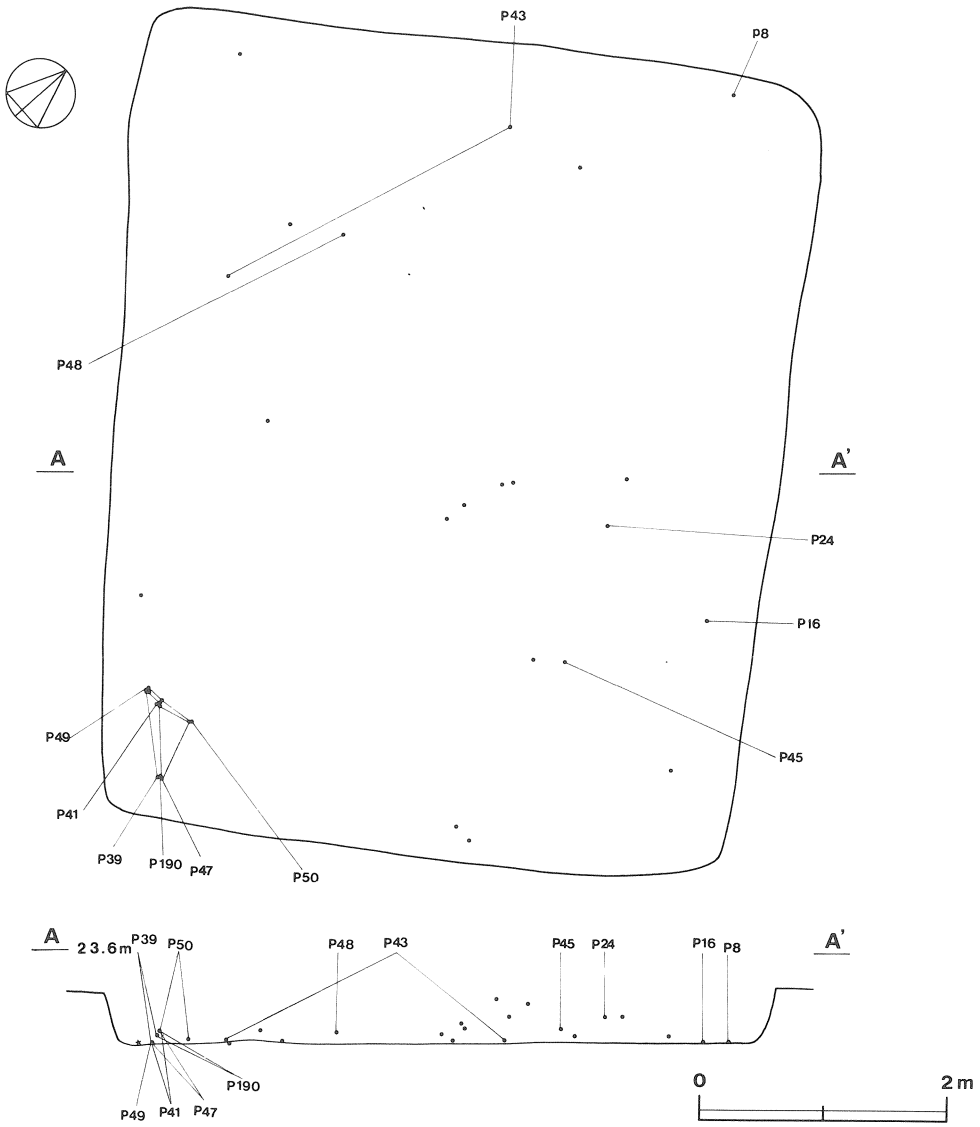
第10号住居跡出土土器

住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第86図 1	台付甕形土器 土師器	A 20.4 B 41.1 D 11.8	口縁部は，頸部から外反して立ち上がる。胴部は下ぶくれを呈し，最大径を下位に有する。台部はほぼ直線的に開いて裾部に至る。	口縁部外面は横位・斜位に，内面は横位にハケ目整形，胴部外面横位・斜位にハケ目整形，一部ヘラナデ，胴部・台部内面はヘラナデ。	砂礫・砂粒 にぶい橙色 普通	70% P190
2	台付甕形土器 土師器	A 15.5 B(18.7)	口縁部は頸部から外反して立ち上がる。胴部は底部から内彎して立ち上がり，胴部中位に最大径を有する。	口縁部から胴中位の外面は斜位の，下位は縦位のハケ目整形。口縁部内面は横位のハケ目整形，胴部内面は横位のヘラナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	70% 底部欠損 P48
3	台付甕形土器 土師器	A 13.9 B(19.0)	口縁部は頸部から外反して立ち上がり，胴部はほぼ球形を呈し，胴部中位に最大径を有する。	口縁部外面から胴中位にかけて斜位の下位は縦位のハケ目整形。口縁部内面は横位のハケ目整形，胴部はヘラナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	70% 底部欠損 P41
4	台付甕形土器 土師器	B(5.4) D 8.4	台付甕形土器の台部で，接合部から外反して立ち上がる。	台部外面は接合部から裾部に縦位のハケ目整形。台部内面は，横位のハケ目整形。	砂粒 にぶい橙色 良好	18% P24
5	台付甕形土器 土師器	B(6.0)	台部は外傾して立ち上がる。	台部外面はハケ目整形。台部内面はヘラナデ。	砂粒 にぶい褐色 普通	10% P141
6	台付甕形土器 土師器	B(7.0) D 5.6	台部は接合部から「ハ」の字に開く。	台部外面は縦位のハケ目整形。台部内面の裾部は横位のハケ目，中位から接合部にかけて横位のヘラナデ。	砂粒 にぶい赤褐色 普通	40% P43
7	埦形 土器 土師器	A 7.5 B 5.0 C 3.5	口縁部はわずかに外傾しながら立ち上がり，体部は内彎しながら立ち上がる。底部は平底である。	口縁部外面は横ナデ，体部外面はハケ目後ヘラナデ。口縁部内面は横位のハケ目，体部内面はナデ。	砂粒 にぶい黄橙色 良好	99% P 8
8	坩形 土器 土師器	B(11.8)	口縁部，底部を欠く胴部片で，扁平な球形を呈する。胴部最大径は中位にある。	胴部外面はハケ目整形後ナデ。胴部内面は横位のヘラナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	30% P50
第87図 9	甕形 土器 土師器	A(20.6) B(5.4)	口縁部はやや外反して立ち上がる。	口唇部にキザミ目，口縁部外面は斜位のハケ目整形。口縁部内面は横位のハケ目整形。	砂粒 黒褐色 普通	5% P46
10	甕形 土器 土師器	A(20.6) B(5.0)	口縁部は外反して立ち上がる。	口唇部にキザミ目が施されている。口縁部内・外面共ハケ目整形。	砂粒 にぶい橙色 普通	5% P49
11	甕形 土器 土師器	A 16.8 B 17.7 C 5.3	口縁部は外傾して立ち上がり，胴上位に最大径を有する。底部は平底である。	口縁部内・外面共横位のヘラナデ，胴部外面はヘラ磨き。胴部内面はヘラナデ。	砂粒 橙色 普通	90% P39
12	壺形 土器 土師器	B(23.5) C 7.5	胴部はほぼ球形を呈し，胴中位に最大径を有する。底部は平底である。	胴部外面は縦位の丁寧なヘラ磨き，胴部内面は横位のヘラナデが施されている。	砂粒 明赤褐色 普通	70% P47
13	甕形 土器 土師器	B(18.8) C 5.7	胴部はほぼ球形を呈し胴中位に最大径を有する。底部は平底である。口縁部は欠損している。	胴部外面は縦位のヘラ磨き。胴部内面はヘラナデ。	砂粒・雲母 長石， にぶい橙色 普通	60% P16
14	甕形 土器 土師器	B(2.7) C 7.2	底部片で，底部に木葉痕がみられる。	内・外面共ヘラナデ。	砂粒 にぶい赤褐色 普通	10% P45
15	壺形 土器 土師器	B(3.1) C 4.6	底部から内彎して立ち上がる。	胴部外面はヘラナデ。胴部内面はヘラ磨き。	砂粒 明赤褐色 普通	10% P44



第84図　第10号住居跡実測図

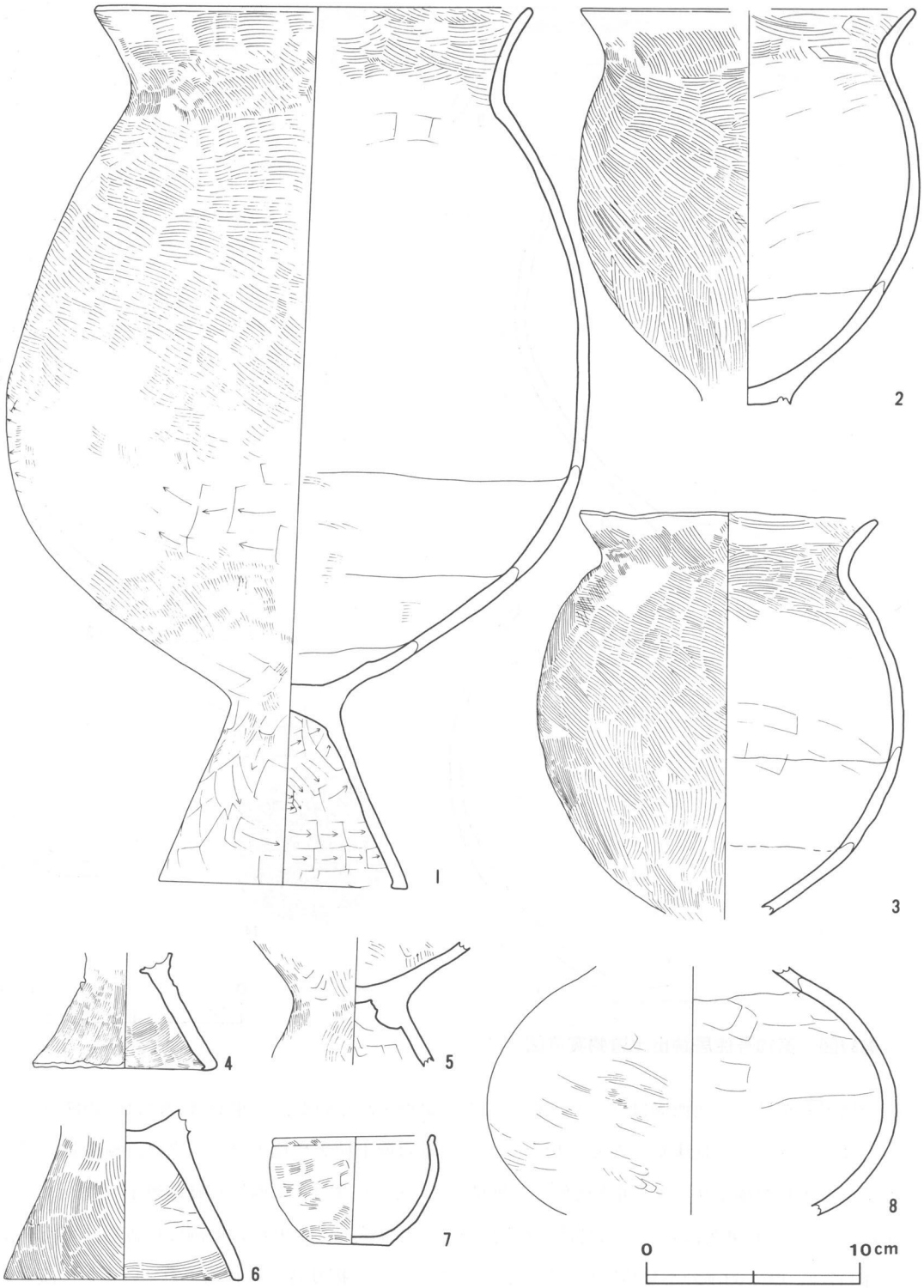


第85図　第10号住居跡遺物出土位置図・遺物接合関係図

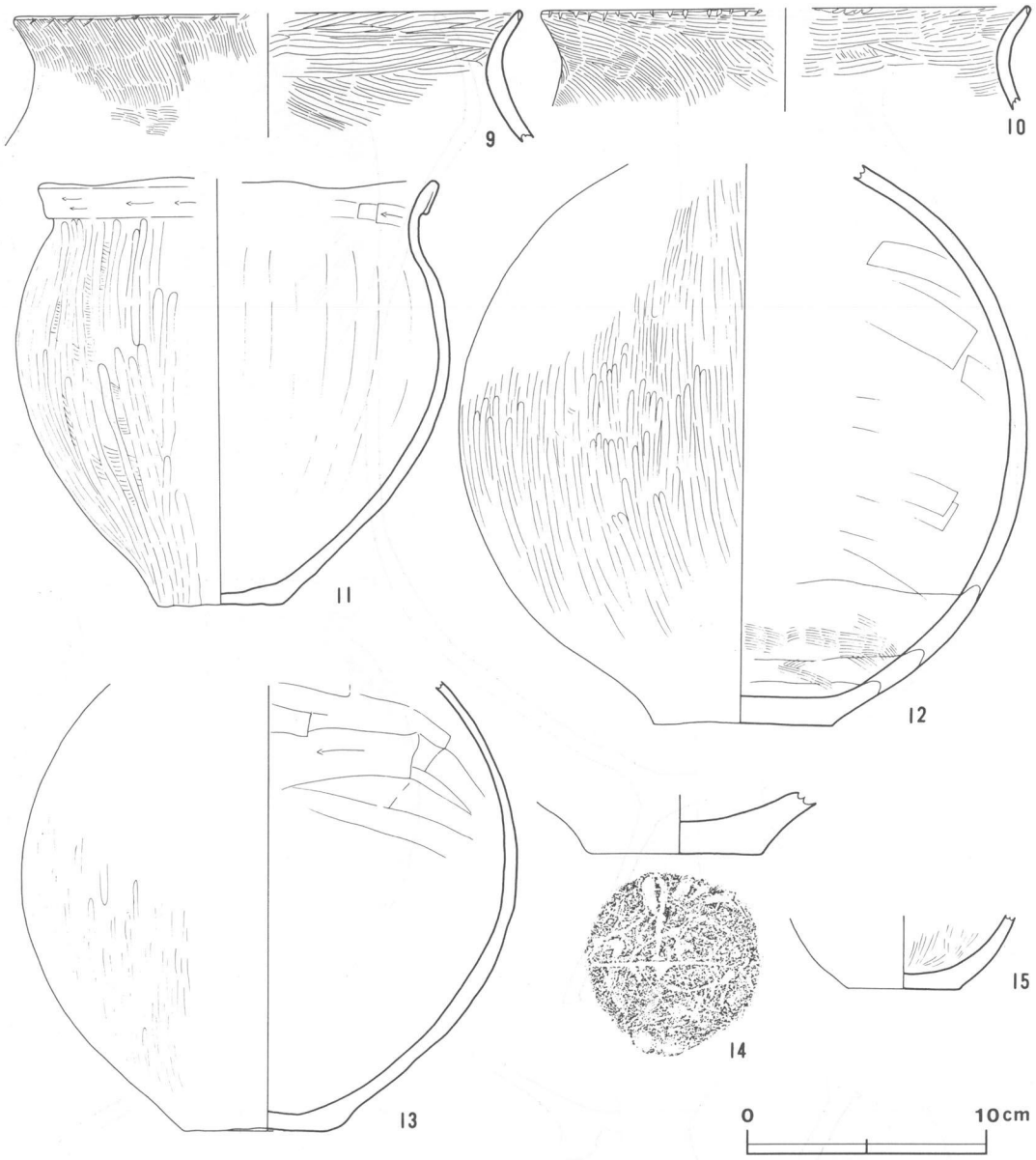
第16号住居跡（第88図）

本跡は，調査区の南東部J3i$_0$区を中心に確認された住居跡で，第18号住居跡の南東側5.9mに位置している。

平面形は，長軸5.18m，短軸4.94mの隅丸方形を呈しており，長軸方向は，N－46°－Wを指している。壁は，ロームで硬く，外傾して立ち上っており，壁高は，26～41cmである。床面は，全体的にロームブロック混じりで，堅緻であり，東側半分は，床面が若干高く覆土と床面との境が明瞭に確認出来るほど硬く踏み固められている。炉は，中央から北西側に位置し，長径90cm，短径52

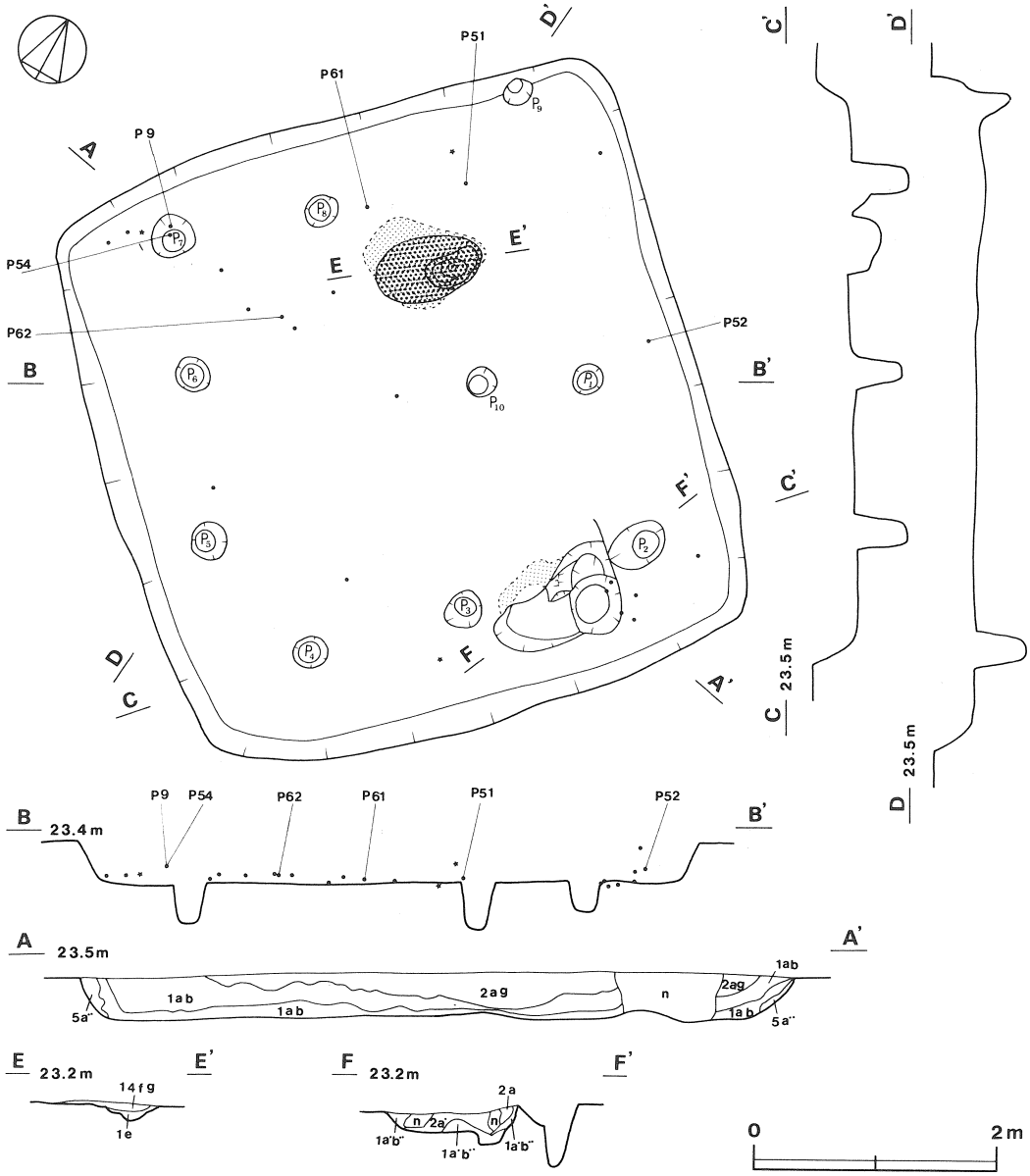


第86図　第10号住居跡出土遺物実測図　(1)



第87図　第10号住居跡出土遺物実測図（2）

cmの楕円形を呈し，南西側はほとんど掘りこみが認められないが，北東側は13cmほどの深さに掘りくぼめられている地床炉である。炉内には，少量の焼土粒子や焼土ブロックに，極少量の炭化粒子が混入した締まりのある暗赤褐色土が堆積している。炉床は，南西側が硬い焼土ブロック状を呈しているが，北東側はわずかに焼けた程度である。貯蔵穴は，中央から東側に位置し，平面形は，長径117cm，短径69cmの不整楕円形を呈し，床面を22cmほど掘り込んで構築されている。貯蔵穴の覆土は，上層は，暗褐色土で，一部攪乱されているが，下層には，褐色土が堆積している。ピッ



第88図　第16号住居跡実測図・遺物出土位置図

トは，10か所検出されており，規模や配列からP_2・P_4・P_7と，やや北西壁際のP_9の４か所が主柱穴と考えられる。主柱穴の規模は，長径27～50cm，短径26～35cm，深さ29～50cmである。

本跡の覆土は，上層に極少量の炭化粒子を含む暗褐色土が，下層には褐色土が，レンズ状に自然堆積している。

遺物は，住居跡の全域にわたり，土器片472点，石３点が出土しており，土器片の大半は土師器片である。北東壁際の中央部覆土から，完形に近いミニチュア土器（第89図2）が，西コーナー部

の覆土からは器台形土器の脚部（第89図10）と完形の手捏土器（第89図１）が，また，ほぼ床面からは，高坏形土器の坏部片（第89図７）が出土している。本跡は，出土遺物から古墳時代の五領期に比定される。

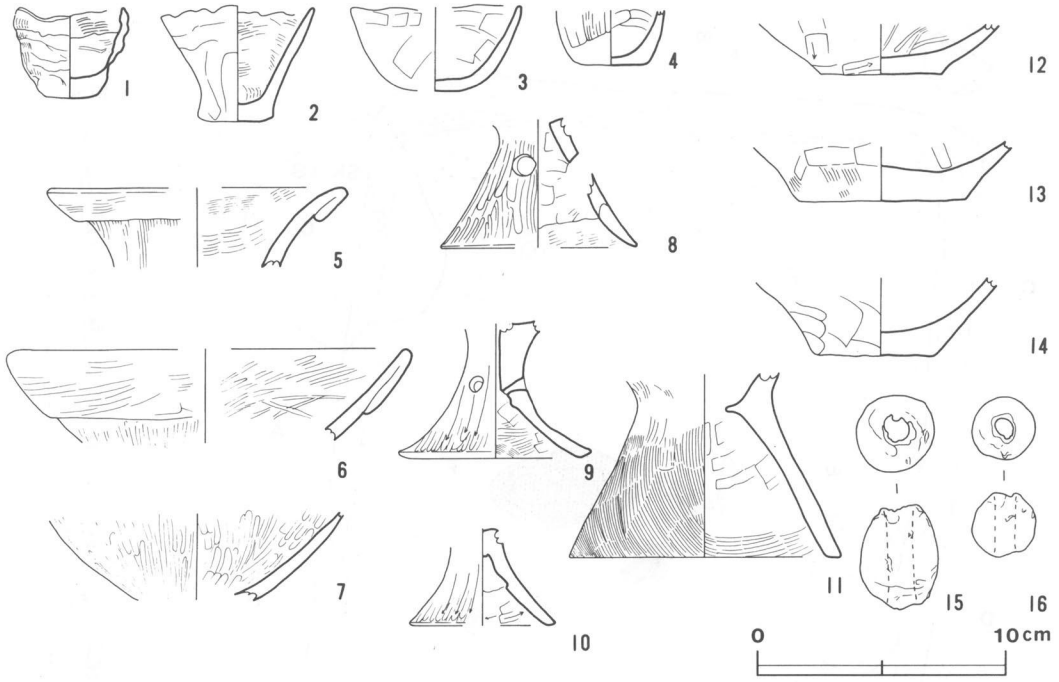
第16号住居跡出土土器

住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第89図 1	手捏土器 土師器	A 4.2 B 3.6 C 2.1	体部は底部から口縁部にかけて内彎しながら立ち上がる。底部は平底である。	体部外面は横ナデ，縦位のハケ目整形後横ナデ。体部内面は横のハケ目整形。	砂粒 にぶい橙色 良好	100% P 9
2	ミニチュア土器 土師器	A 6.2 B 4.6 C 3.0	底部は平底で，体部はほぼ直線的に開きながら立ち上がる。	体部外面はナデ整形。体部内面はハケ目整形後横ナデ。	砂粒 橙色 普通	95% P52
3	ミニチュア土器 土師器	A 6.8 B 3.4 C(2.4)	底部からやや内彎しながら開いて，立ち上がる。	体部内・外面共ヘラナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	40% P59
4	ミニチュア土器 土師器	B(2.2) C 2.6	底部よりやや内彎しながら立ち上がる。底部は平底である。	体部外面は部分的にハケ目整形。体部内面は横ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	40% P57
5	壺形 土器 土師器	A 3.5 B(3.2)	複合口縁で，外反して立ち上がる。	口縁部外面は横位・縦位にハケ目整形。口縁部内面は横位のハケ目整形。	砂粒 にぶい褐色 普通	10% P64
6	甕形 土器 土師器	A(16.4) B(3.8)	複合口縁である。	口縁部の内・外面ともヘラ磨	砂粒 明赤褐色 普通	10% P63
7	高坏形土器 土師器	B(3.1)	坏部は接合部からやや内彎しながら立ち上がる。	胴部内・外面とも丁寧なヘラ磨き。	砂粒 橙色 普通	30% 脚部欠損 P62
8	器台形土器 土師器	B(5.4) C 8.0	接合部からほぼ直線的に開き，裾部で外反して開く。接合部に中央孔，脚部に２孔がある。	脚部外面は縦位のヘラ磨き。脚部内面は横位のヘラナデ，裾部にハケ目整形。	砂粒 赤褐色 普通	30% P56
9	器台形土器 土師器	B(5.5) C 7.8	脚部は接合部から「ハ」の字に開いているが，裾部はいびつである。接合部に中央孔，脚部に３孔がある。	脚部外面は縦位のヘラ磨き。脚部内面は横位のハケ目整形の後横ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	50% P53
10	器台形土器 土師器	B(3.9) C 6.0	接合部から「ハ」の字状に開く。	脚部外面は縦位のヘラ磨き。脚部内面は横ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	40% P54
11	台付甕形土器 土師器	B(7.5) D 11.0	接合部から「ハ」の字状に開く。	台部外面は斜位のハケ目整形。台部内面は横位のヘラナデ，裾部は横位のハケ目整形。	砂粒 赤色 普通	50% P51
12	甕形 土器 土師器	B(2.0) C 4.9	底部片で平底を呈し，器厚は0.5cmほどである。	胴部外面はヘラナデ。胴部内面はヘラナデ後ヘラ磨き。	砂粒 にぶい褐色 普通	20% P60
13	甕形 土器 土師器	B(2.4) C 6.8	胴下位は底部よりほぼ直線的に開く底部片で，平底である。	胴部内・外面共ハケ目整形後ヘラナデ。	砂粒 明赤褐色 普通	10% P58
14	甕形 土器 土師器	B(3.2) C 9.5	胴部下位は平底の底部よりやや内彎して開く。	胴部内・外面共ヘラナデ。	砂粒 にぶい赤褐色 普通	10% P55

土錘解説表（球状土錘）

図版番号	名称	長さ×幅(cm)	孔径(cm)	重さ(g)	備考	図版番号	名称	長さ×幅(cm)	孔径(cm)	重さ(g)	備考
第89図 15	球状土錘	4.0×3.1	1.1	37	明褐色	第89図 16	球状土錘	2.6×2.6	0.8	16	浅黄色



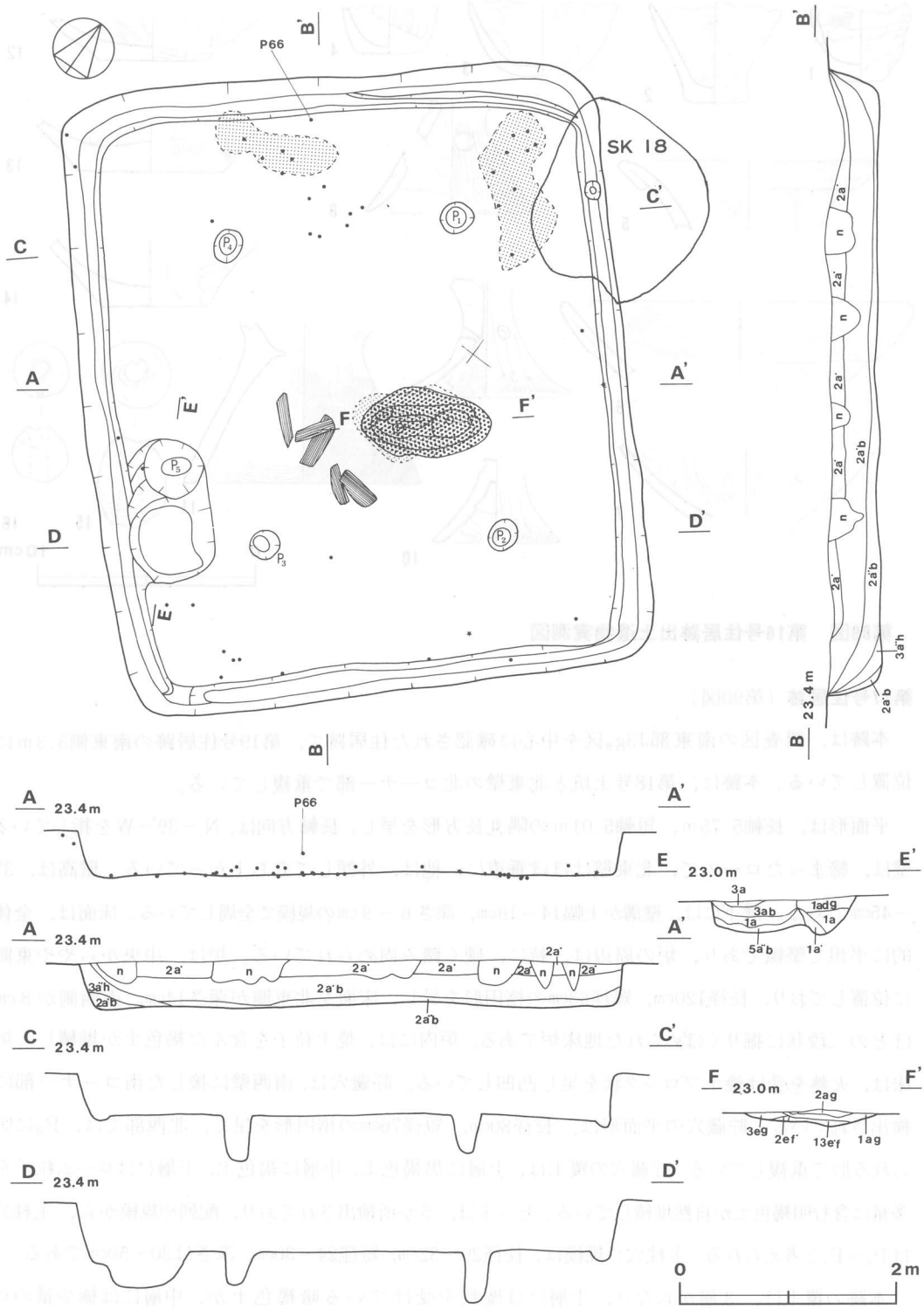
第89図　第16号住居跡出土遺物実測図

第17号住居跡（第90図）

本跡は，調査区の南東部J3g_8区を中心に確認された住居跡で，第19号住居跡の南東側3.3mに位置している。本跡は，第18号土坑と北東壁の北コーナー部で重複している。

平面形は，長軸5.75m，短軸5.01mの隅丸長方形を呈し，長軸方向は，N－39°－Wを指している。壁は，締まったロームで，北東壁はほぼ垂直に，他は，外傾して立ち上がっている。壁高は，37～45cmである。壁下には，壁溝が上幅14～19cm，深さ6～9cmの規模で全周している。床面は，全体的に平坦で堅緻であり，炉の周辺は，特に，硬く踏み固められている。炉は，中央からやや東側に位置しており，長径120cm，短径63cmの楕円形を呈し，床面を北東側が深さ14cm，南西側が8cmほどの二段状に掘りくぼめられた地床炉である。炉内には，焼土粒子を含んだ褐色土が堆積し，炉床は，火熱を受け焼土ブロック状を呈し凸凹している。貯蔵穴は，南西壁に接した南コーナー部に検出されている。貯蔵穴の平面形は，長径80cm，短径76cmの楕円形を呈し，北西部では，P_5に切られる形で重複している。貯蔵穴の覆土は，上層に黒褐色土，中層に褐色土，下層にはローム粒子を多量に含む明褐色土が自然堆積している。ピットは，5か所検出されており，配列や規模から，主柱穴はP_1～P_4と考えられる。主柱穴の規模は，長径29～32cm，短径24～30cm，深さは30～50cmである。

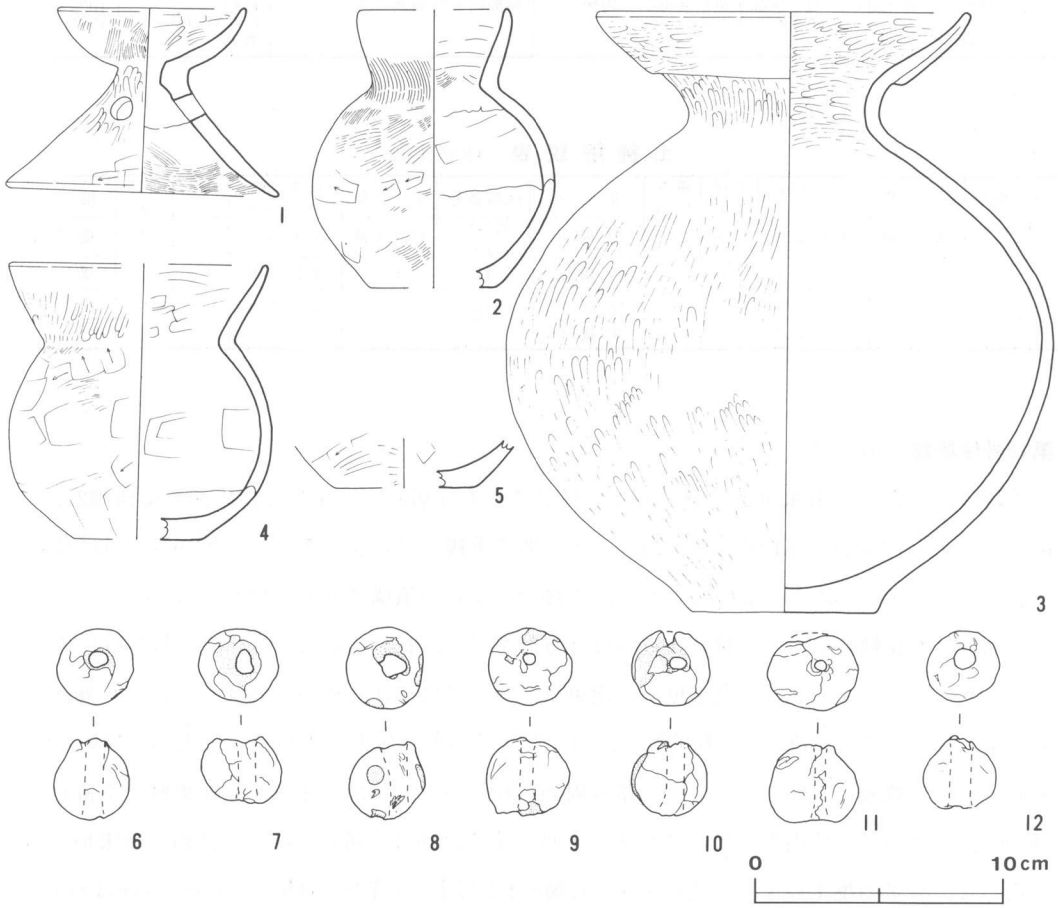
本跡の覆土は，3層からなり，上層には攪乱を受けている暗褐色土が，中層には極少量のローム小ブロックを含む暗褐色土が，下層には褐色土がレンズ状に自然堆積している。特に，焼土



第90図　第17号住居跡実測図・遺物出土位置図

が，北西壁に沿って床面より若干浮いた状態で堆積し，炭化材が南コーナー部に検出されていることから，本跡は，火災に遭ったものと考えられる。

遺物は，住居跡の全域から縄文土器片1,446点，土師器片160点，石２点が出土している。縄文土器片は，覆土からの出土で，周囲から流れ込んだものと思われる。本跡に伴う土師器片は，壁際に沿った下層から出土している。南コーナー部のほぼ床面直上から集中して土玉（第91図６～12）10個が，また，北西壁際の覆土中層から小型壺形土器（第91図２）が出土している。本跡は，出土遺物から古墳時代の五領期に比定される。



第91図　第17号住居跡出土遺物実測図

第17号住居跡出土土器

住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第91図1	器台形土器	A 7.5	器受部はやや内彎して立ち上	器受部外面はハケ目整形後横	砂粒	70%

	土師器	B 7.6 C 11.0	がり，脚部は「ハ」の字状に開く。脚部上位に3孔，接合部に中央孔ある。	ナデ，脚部外面はヘラ磨き。器受部内面は横ナデ，脚部内面は下位にハケ目整形。	にぶい橙色 普通	P65
第91図 2	壺形 土器 土師器	A(5.9) B(11.3) C(4.9)	口縁部は頸部より「く」の字状に開き，上端でやや内彎して立ち上がる。胴部はほぼ球形を呈し，胴中位に最大径を有する。	口縁部外面はハケ目整形後横位のナデ。胴部外面は斜位にハケ目整形。口縁部内面は横位のナデ，胴部内面はヘラナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	50% P66
3	壺形 土器 土師器	A 15.0 B 24.2 C 7.4	口縁部は頸部より内彎気味に立ち上がり，先端部で内彎する複合口縁である。胴部はほぼ球形を呈し，底部は平底である。	口縁部内・外面に横位のヘラ磨き，胴部外面は縦位のヘラ磨き，胴部内面はヘラナデ整形が施されている。	砂粒 赤褐色 普通	70% P194
4	甕形 土器 土師器	A(10.4) B(11.2) C(5.0)	口縁部は頸部から「く」の字状を呈して立ち上がり，上端でやや内彎する。胴部はほぼ球形を呈し，胴中位に最大径を有する。底部は平底。	口縁部外面は縦位のヘラ磨き，口縁部内面は横位のヘラデ，胴部内・外面共横位のヘラナデ。	砂粒 明赤褐色 普通	30% P68
5	甕形 土器 土師器	B(2.0) C(5.6)	胴部下位が底部から内彎して立ち上がる。	胴部内・外面共ヘラナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	10% P67

土 錘 解 説 表（球状土錘）

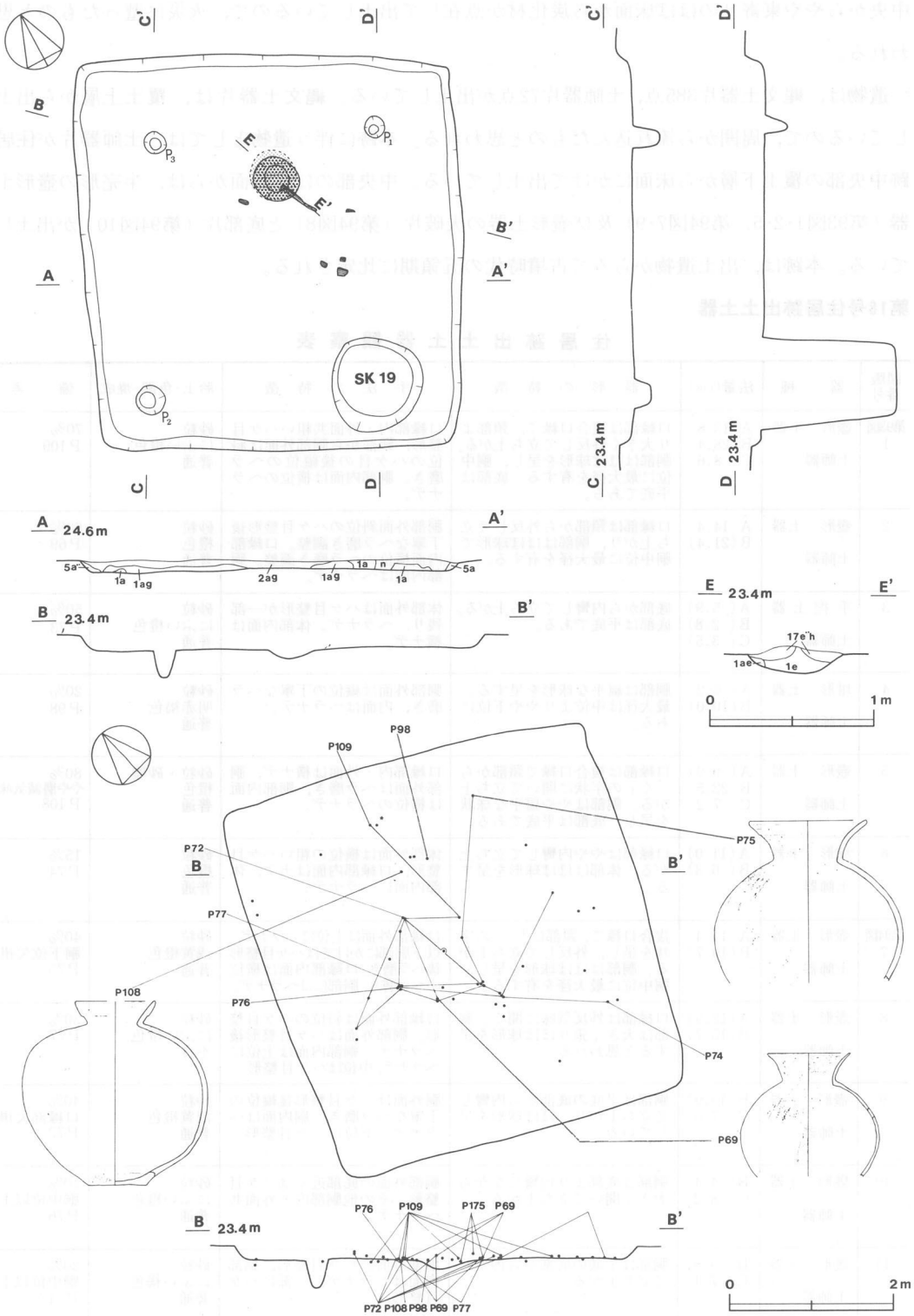
図版番号	名 称	長さ×幅 (cm)	孔径 (cm)	重さ (g)	備 考	図版番号	名 称	長さ×幅 (cm)	孔径 (cm)	重さ (g)	備 考
第91図 6	球状土錘	3.3×3.0	0.8	29	黒 褐 色	第91図 10	球状土錘	3.0×3.1	0.7	(28)	褐 灰 色
7	〃	2.8×3.2	0.7	27	暗 褐 色	11	〃	3.1×3.6	0.5	33	褐 色
8	〃	3.2×3.1	1.0	31	暗 褐 色	12	〃	2.9×2.9	0.8	22	橙 色
9	〃	3.2×3.3	0.5	33	黒 褐 色						

第18号住居跡（第92図）

本跡は，調査区の南東部J3h_7区を中心に確認された住居跡で，第17号住居跡の南西側2.2mに位置している。本跡は，第19号土坑と南コーナー部で重複している。本跡は，第19号土坑に切られており，貼り床も認められないことから，本跡の方が古い遺構であると思われる。

平面形は，長軸4.84m，短軸4.70mのほぼ方形を呈し，長軸方向は，N－27°－Eを指している。壁は，締まりのあるロームで，北東壁から南東壁にかけては，ゆるやかに外傾し，他は，外傾して立ち上がっている。壁高は，比較的低く，11～23cmである。床面は平坦で，中央部及び炉の周辺のロームは，農家の土間のように硬く踏み固められている。炉は，中央から北東側に位置し，長径58cm，短径51cmの楕円形を呈しており，床面を深さ11cmほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉内には，少量の焼土粒子，炭化粒子を含む褐色土が締まりを帯びて堆積している。炉床はわずかに焼けた程度で軟らかく，短期間の使用であったと思われる。ピットは，3か所検出されている。規模は，長径27～39cm，短径24～30cm，深さ25～35cmで，配列からみていずれも主柱穴と考えられる。配列から南側にも主柱穴の存在が想定されるが第19号土坑によって床面が切られたために消滅したものと思われる。

覆土は，耕作による攪乱が多くみられるが，基本的には自然堆積である。上層には暗褐色土が，下層には褐色土が堆積し，覆土は，極少量の炭化粒子を含み締まりを帯びている。また，本跡は，



第92図　第18号住居跡実測図・遺物出土位置図・遺物接合関係図

中央からやや東寄りのほぼ床面から炭化材が点在して出土しているので，火災に遭ったものと思われる。

遺物は，縄文土器片385点，土師器片72点が出土している。縄文土器片は，覆土上層から出土しているので，周囲から流れ込んだものと思われる。本跡に伴う遺物としては，土師器片が住居跡中央部の覆土下層から床面にかけて出土している。中央部のほぼ床面からは，半完形の壺形土器（第93図1・2・5，第94図7・9）及び壺形土器の大破片（第94図8）と底部片（第94図10）が出土している。本跡は，出土遺物からみて古墳時代の五領期に比定される。

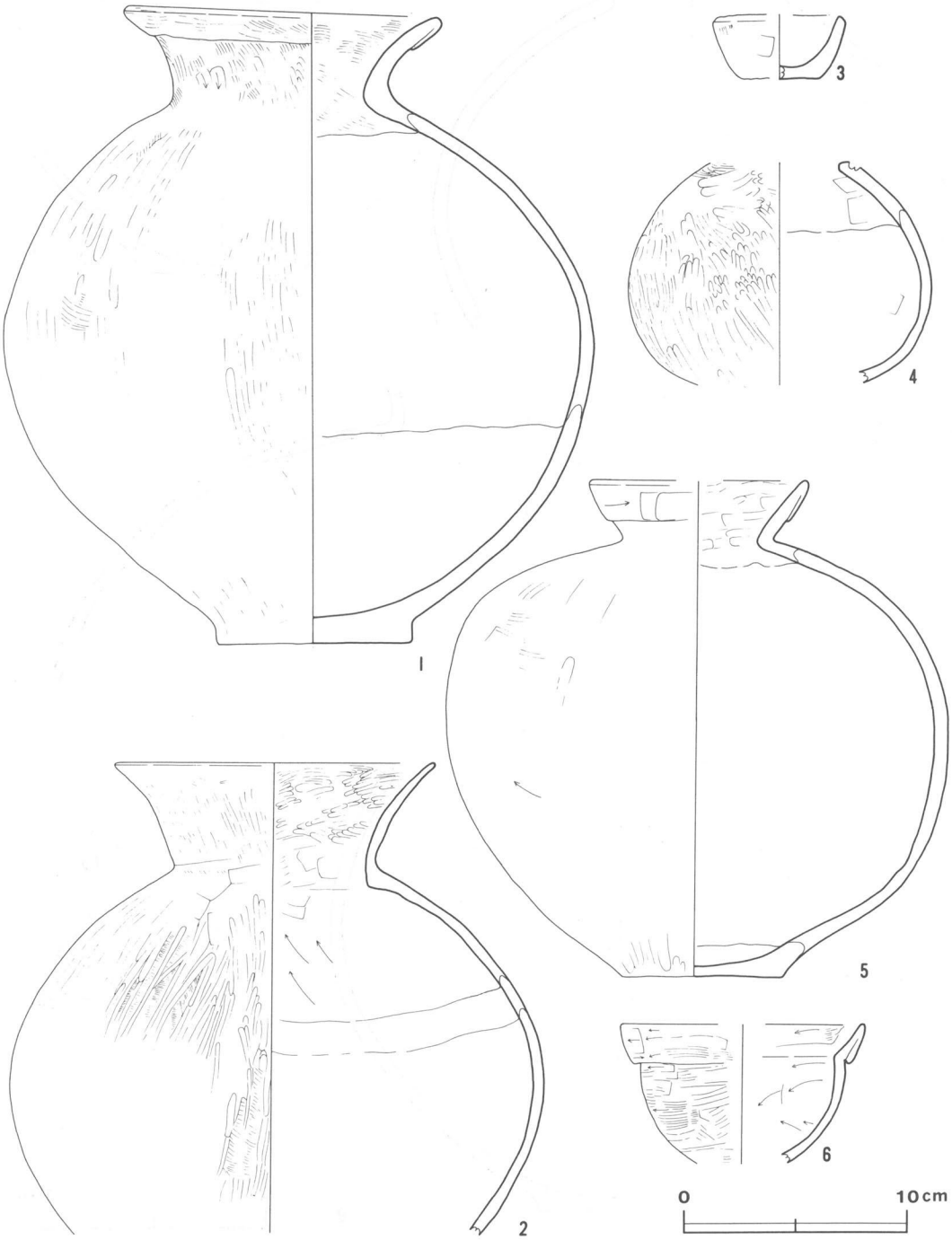
第18号住居跡出土土器

住居跡出土土器観察表

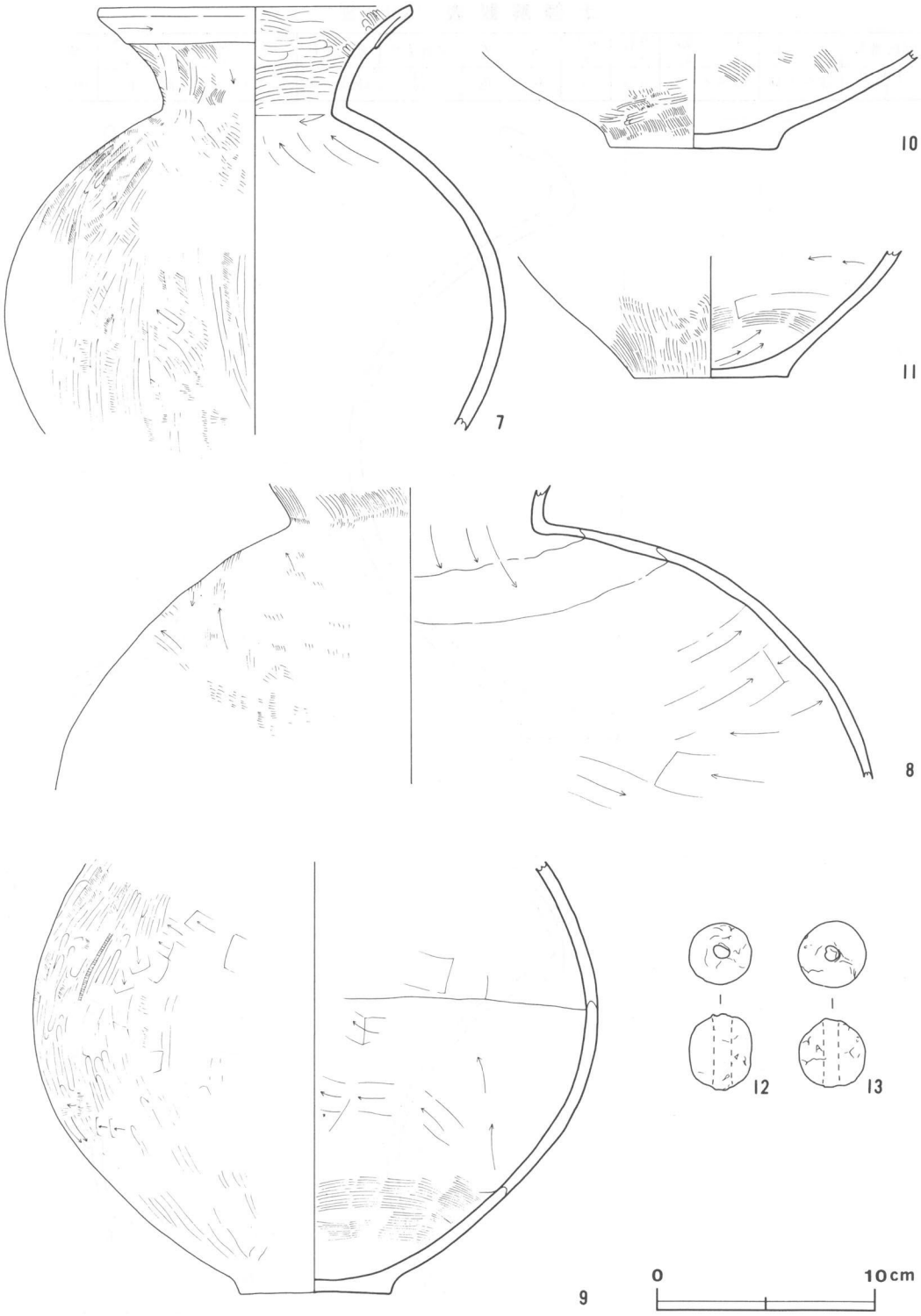
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第93図 1	壺形 土器 土師器	A 13.8 B 28.4 C 8.6	口縁部は複合口縁で，頸部より大きく外反して立ち上がる。胴部はほぼ球形を呈し，胴中位に最大径を有する。底部は平底である。	口縁部内・外面共粗いハケ目整形，頸部から胴部外面は斜位のハケ目の後縦位のヘラ磨き。胴部内面は横位のヘラナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	70% P109
2	壺形 土器 土師器	A 14.4 B(21.4)	口縁部は頸部から外反して立ち上がり，胴部はほぼ球形で胴中位に最大径を有する。	胴部外面斜位のハケ目整形後丁寧なヘラ磨き調整。口縁部内面横位のヘラ磨き調整。胴部内面はヘラナデ。	砂粒 橙色 普通	60% P69
3	手捏土器 土師器	A(5.9) B(2.8) C(3.5)	底部から内彎して立ち上がる。底部は平底である。	体部外面はハケ目整形が一部残り，ヘラナデ。体部内面は横ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	50% P73
4	坩形 土器 土師器	A(6.2) B(10.0)	胴部は扁平な球形を呈する。最大径は中位よりやや下位にある。	胴部外面は縦位の丁寧なヘラ磨き，内面はヘラナデ。	砂粒 明赤褐色 普通	20% P98
5	壺形 土器 土師器	A(9.9) B 22.5 C 7.2	口縁部は複合口縁で頸部から「く」の字状に開いて立ち上がる。胴部はやや扁平な球状を呈し，底部は平底である。	口縁部内・外面は横ナデ，胴部外面はヘラ磨き，胴部内面は横位のヘラナデ。	砂粒・砂礫 橙色 普通	80% やや磨滅気味 P108
6	埦形 土器 土師器	A(11.0) B(6.3)	口縁部はやや内彎して立ち上がる。体部はほぼ球形を呈する。	体部外面は横位の粗いハケ目整形，口縁部内面はナデ，体部内面にヘラナデ。	砂粒 橙色 普通	15% P74
第94図 7	壺形 土器 土師器	A 14.4 B(19.7)	複合口縁で，頸部は「く」の字状を呈し，外反して立ち上がる。胴部はほぼ球形を呈し，胴中位に最大径を有する。	口縁部外面は上位にヘラナデ，以下胴部にかけてはハケ目整形後ヘラ磨き。口縁部内面は横位のヘラ磨き，胴部にはヘラナデ。	砂粒 浅黄橙色 普通	40% 胴下位欠損 P75
8	壺形 土器 土師器	A(12.9) B(13.7)	口縁部は外反気味に開く。胴部は大きく張りほぼ球形を呈すると思われる。	口縁部外面は斜位のハケ目整形。胴部外面はハケ目整形後ヘラナデ。胴部内面は上位にヘラナデ，中位はハケ目整形。	砂粒 にぶい橙色 不良	30% P77
9	壺形 土器 土師器	B(19.9) C 7.0	胴部は平底の底部から内彎して立ち上がり，ほぼ球形を呈している。	胴外面はハケ目整形後縦位の丁寧なヘラ磨き。胴内面はヘラナデ，下位にハケ目整形。	砂粒 浅黄橙色 普通	40% 口縁部欠損 P72
10	甕形 土器 土師器	B(4.4) C 8.2	胴部は底部より内彎しながら大きく開いて立ち上がる。	胴部外面の底部近くはハケ目整形，その他胴部内・外面共ヘラナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	10% 胴中位以上 P76
11	甕形 土器 土師器	B(5.8) C 7.1	胴部は平底の底部から内彎して立ち上がる。	胴部外面はハケ目整形，胴部内面はヘラナデ，一部にハケ目整形。	砂粒 にぶい褐色 普通	20% 胴中位以上 P71

土錘解説表（球状土錘）

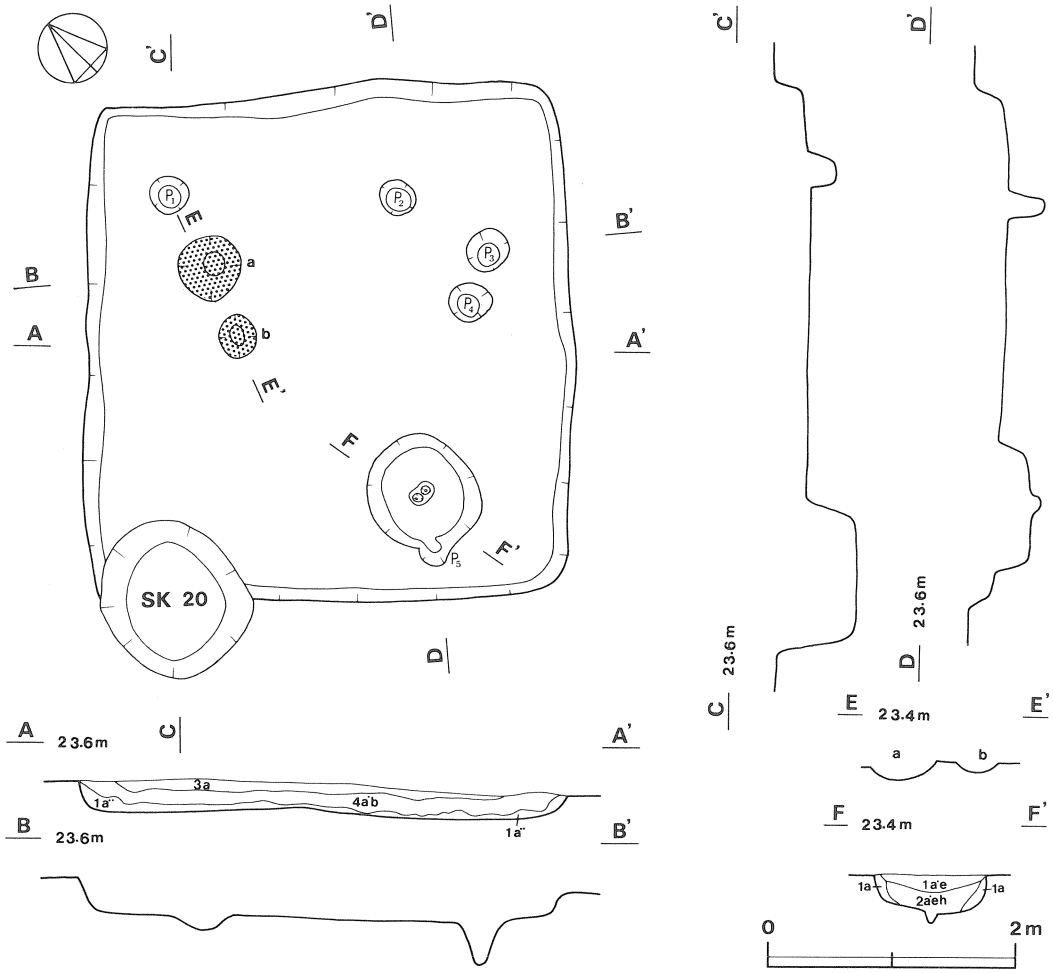
図版番号	名称	長さ×幅 (cm)	孔径 (cm)	重さ (g)	備考	図版番号	名称	長さ×幅 (cm)	孔径 (cm)	重さ (g)	備考
第94図 12	球状土錘	3.5×2.8	0.9	30	橙色	第94図 13	球状土錘	3.2×3.1	0.7	30	明赤褐色



第93図　第18号住居跡出土遺物実測図（1）



第94図　第18号住居跡出土遺物実測図　(2)

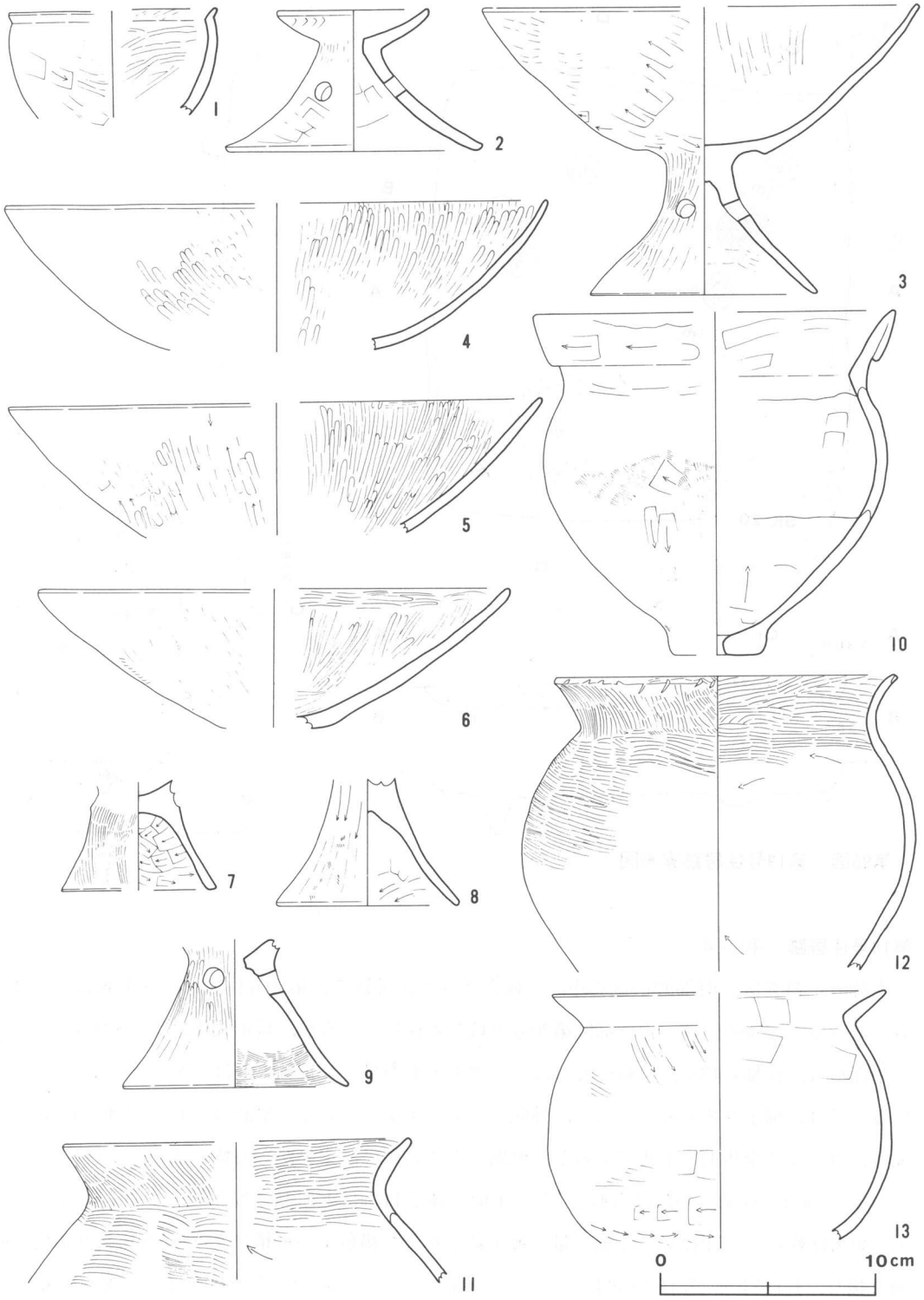


第95図　第19号住居跡実測図

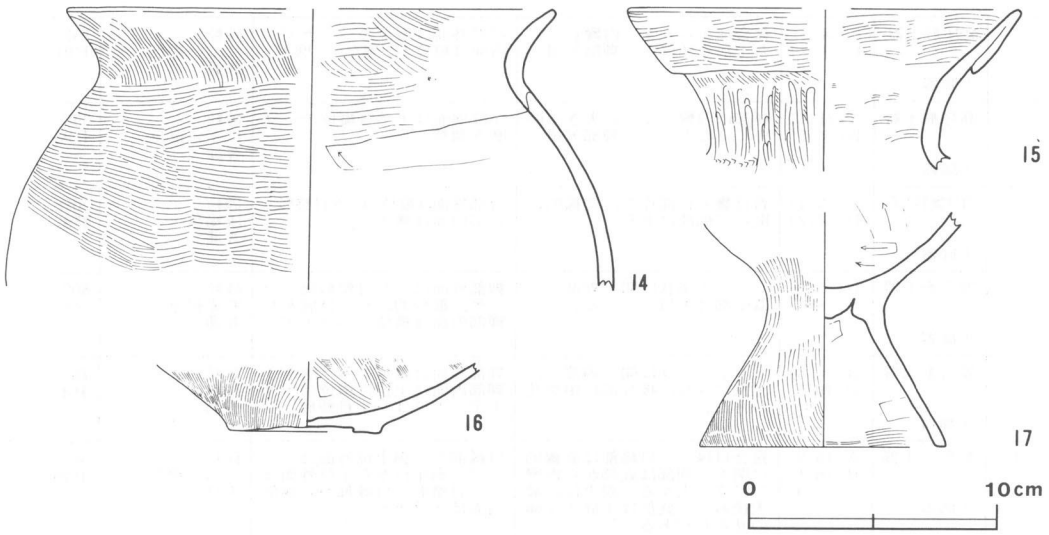
第19号住居跡（第95図）

本跡は，調査区の南部J3e$_7$区を中心に確認された住居跡で，第20号住居跡の南東側1.4mに位置している。本跡の西コーナー部に第20号土坑が重複しているが，新旧関係は不明である。

平面形は，長軸4.13m，短軸3.92mほどの隅丸方形を呈し，長軸方向は，N－48°－Eを指している。壁は，締まりのあるロームで，外傾して立ち上がっている。壁高は，17～25cmである。床面は，ロームで全体的に平坦であるが，軟弱である。炉は，中央から北側に大小2か所検出されている。炉aは，径52cmのほぼ円形を呈し，床面を深さ11cmほど皿状に掘り込んでいる地床炉である。炉床は軟らかく，内部には，極少量の焼土粒子を含む褐色土が堆積している。炉bは，炉aの南西側に接し，長径34cm，短径29cmほどの楕円形を呈している。掘り込みは8cmほどの浅い地床炉で，炉内には焼土も少なく，炉床も軟らかい。貯蔵穴は，南コーナー部に位置し，平面形は，長径96cm，



第96図　第19号住居跡出土遺物実測図　(1)



第97図　第19号住居跡出土遺物実測図（2）

短径87cmほどの楕円形を呈し，床面から底面までの深さは27cmで，中央部にピット状の落ち込みが検出されている。主柱穴は，P_1・P_2・P_5の３か所と思われ，規模は，長径24～32cm，短径23～30cm，深さ23～30cmである。南コーナー部のP_5は，貯蔵穴の南西側に重複して検出されている。西コーナー部の主柱穴は，第20号土坑によって消滅したものと思われる。

本跡の覆土は，自然堆積の状態を示し，上層にはやや硬い黒褐色土がみられ，下層には壁側から極暗褐色土，褐色土が流れ込んだ状態で堆積している。

遺物は，縄文土器片1,252点，土師器片382点，石２点が出土している。縄文土器片は，周囲からの流れ込みと思われる。本跡に伴う遺物は，土師器片で中央から北西側や，東コーナー部の覆土下層から集中して出土している。本跡は，出土遺物から古墳時代の五領期に比定されるものである。

第19号住居跡出土土器

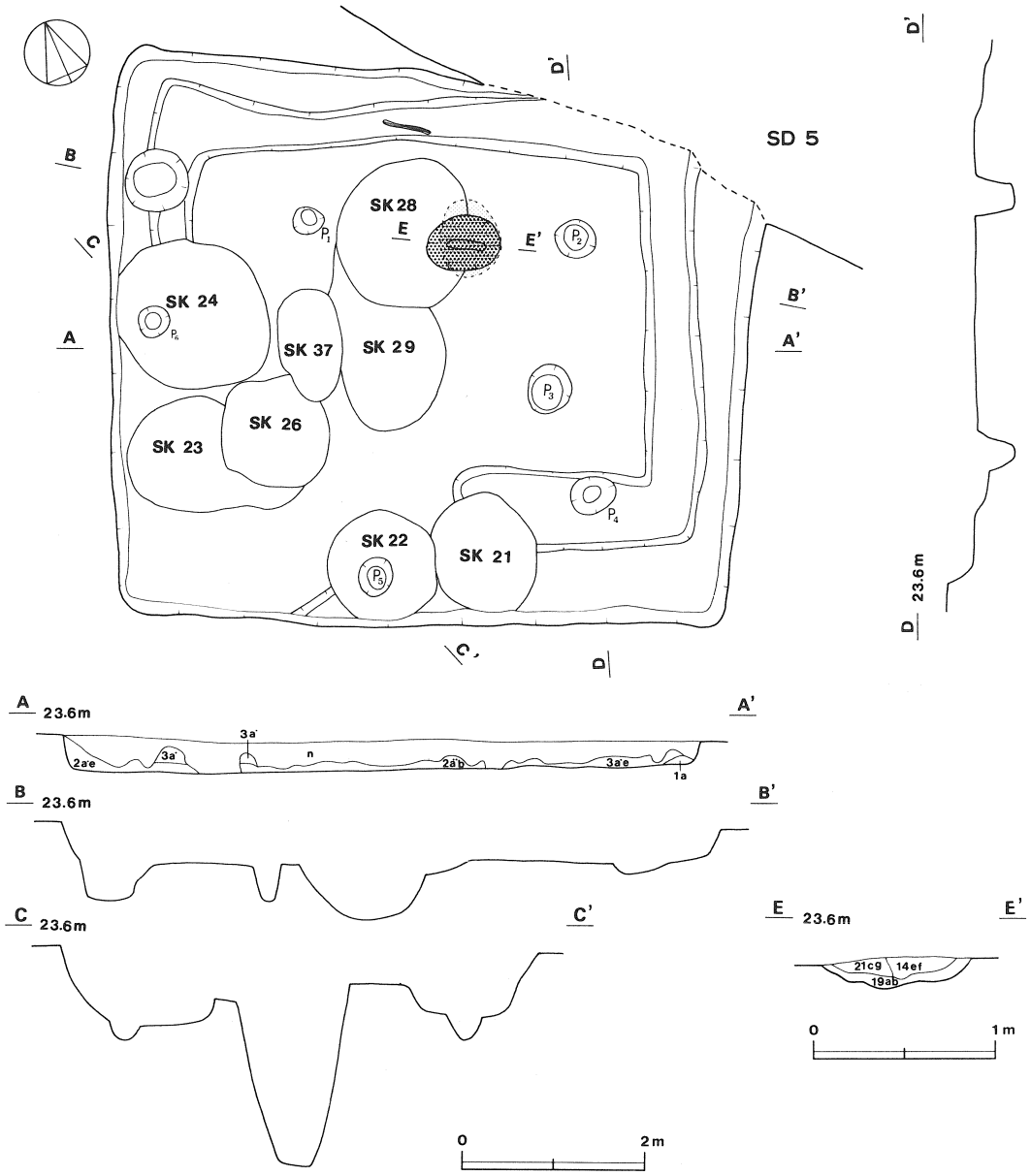
住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第96図 1	埦形土器 土師器	A（9.7） B（5.0）	口縁部は頸部よりほぼ直線的に立ち上がり，胴部は内彎しながらすぼまる。	体部外面はハケ目整形後，横位のヘラナデ。体部内面，横位のヘラナデ。	砂粒 橙色 普通	10% P91
2	器台形土器 土師器	A 7.0 B 6.6 C 12.0	器受部は内彎して立ち上がる。脚部は「ハ」の字状に開く。脚部中位に３孔，接合部に中央孔あり。	器受部から脚部内・外面共ナデが，頸部内面にヘラナデ。	砂粒 橙色 普通	90% P81
3	高坏形土器 土師器	A（20.2） B 13.4 D 10.5	坯部はやや内彎しながら立ち上がる。接合部は丸味をおび，脚部は「ハ」の字状に開き，脚部上位に３孔がある。	坯部外面は斜位のヘラナデ，脚部外面は縦位のヘラ磨き，坯部内面はヘラ磨き，脚部内面はナデ整形，裾部は細かいハケ目整形。	砂粒 明赤褐色 普通	70% P78
4	高坯形土器 土師器	A（25.3） B（6.9）	坯底部以下を欠損する坯部片で，接合部から内彎しながら開いて立ち上がる。	坯部内・外面共丁寧なヘラ磨き。	砂粒 褐色 普通	10% P95

5	高坏形土器 土師器	A(24.8) B(6.2)	接合部から大きく内彎して立ち上がる坏部片。脚部欠損	坏部外面は縦位のヘラナデ。内面は縦位の丁寧なヘラ磨き。	砂粒 にぶい褐色 普通	15% P94
6	高坏形土器 土師器	A(21.9) B(6.5)	坏部は内彎しながら大きく開いて立ち上がる。脚部欠損。	坏部内面はナデ後縦位のヘラ磨き調整。	砂粒 にぶい橙色 普通	35% P93
7	台付甕形土器 土師器	B(5.1) D(7.2)	台付甕の台部片で，直線的に開いて裾部に至る。	台部外面は縦位のハケ目整形。台部内面は横ナデ。	砂粒 灰褐色 普通	20% P92
8	器台形土器 土師器	B(5.9) D 8.5	「ハ」の字状に開く脚部で，器受部は欠損している。	脚部外面はハケ目整形後ヘラナデ，部分的にハケ目痕あり。脚部内面は横位のヘラナデ。	砂粒 明赤褐色 普通	60% P86
9	器台形土器 土師器	B(6.8) D 10.5	「ハ」の字状に開く脚部で，上位に3孔，接合部に中央孔がある。	脚部外面は縦位のヘラ磨き。脚部内面は上位に横位のヘラナデ，下位はハケ目整形。	砂粒 橙色 普通	70% P83
10	甑形　土器 土師器	A(16.9) B 16.1 C 3.9	複合口縁で，口縁部は直線的に開く。胴部は底部から内彎して立ち上がる。胴上位に最大径あり。底部は平底で4㎜のせん孔がある。	口縁部から胴上位外面はヘラナデ，胴中位から下位外面はハケ目整形。口縁部から胴部内面はヘラナデ。	砂粒 にぶい橙色 不良	30% P79
11	甕形　土器 土師器	A(15.8) B(6.8)	口縁部は頸部より外反して立ち上がり，胴部はほぼ球形を呈するものと思われる。	口縁部外面は斜位に，胴部は横位に粗いハケ目整形。口縁部内面は横位の粗いハケ目整形，胴部はヘラナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	10% 胴中位以下欠損 P87
12	甕形　土器 土師器	A 16.0 B(13.8)	口縁部は外反して立ち上がり，胴部はほぼ球形を呈する。	口縁部にキザミ目が施され，口縁部外面は斜位のハケ目整形。胴部外面と口縁部内面に粗いハケ目整形，胴部にヘラナデ。	砂粒 黒褐色 普通	50% 胴部下位欠損 P80
13	甕形　土器 土師器	A(15.6) B(11.7)	頸部は「く」の字状を呈し，口縁部はほぼ外傾して立ち上がる。胴部はほぼ球形を呈し，胴部中位に最大径を有する。	口縁部内・外面共横ナデ，胴上位外面はハケ目整形，中位から下位は横位のヘラナデ。胴部内面はヘラナデ。	砂粒 明赤褐色 普通	20% P84
第97図 14	甕形　土器 土師器	A(19.5) B(11.4)	頸部は「く」の字状を呈し，口縁部は大きく内彎して立ち上がる。胴部はほぼ球形を呈し，胴中位に最大径を有する。	口縁部外面斜位のハケ目整形，胴部外面は横位のハケ目整形。口縁部内面は横位のハケ目整形，胴部内面は横位のヘラナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	10% 胴部下位欠損 P90
15	壺形　土器 土師器	A(16.0) B(6.5)	口縁部は複合口縁で，頸部より外反しながら立ち上がる。	口縁部は内・外面共横位のハケ目整形。下位外面はハケ目整形後ヘラ磨き。	砂粒 にぶい赤褐色 普通	10% P82
16	甕形　土器 土師器	B(2.9) C 6.0	胴部下位からの底部片で，雑なつくりである。胴部下位は底部から内彎しながら大きく開く。	胴部外面は縦位のハケ目整形。脚部内面は雑な横位のハケ目整形。	砂粒 明赤褐色 普通	15% P85
17	台付甕形土器 土師器	B(9.5) D 10.0	胴部下位は接合部から内彎して立ち上がり，台部は直線的に開いて裾部に至る。	胴部下位から台部にかけて外面は縦位のハケ目整形。胴部内面はヘラナデ，台部裾部にハケ目整形。	砂粒 橙色 普通	20% 胴部中位以上欠損 P81

第20号住居跡（第98図）

本跡は，調査区の中央部J3d_6区を中心に確認された住居跡で，第9号住居跡の西側6.2mに位置している。本跡は，西側で縄文時代の第42号住居跡の北東側を切っており，本跡の東コーナー部は，第5号溝によって切られている。中央部で第29号土坑，北側で第28号土坑，南側で第21・22号土坑，西側で第23号・24・26・37号土坑と重複している。本跡とこれらの土坑との新旧関係は，第28号土坑の上面に炉が構築されていることや，また，出土遺物等から第23・24・26・28・29号土坑より本跡の方が新しいが，第21・22号土坑との新旧関係は不明である。



第98図　第20号住居跡実測図

平面形は，長軸7.2m，短軸6.1mの隅丸長方形を呈し，長軸方向は，N－58°－Wを指している。壁は，ソフトロームで軟らかく，外傾して立ち上がり，壁高は，27～39cmである。壁溝は，北西壁際から北東壁，南東壁の中央部にかけて，上幅40～85cm，下幅25～75cm，深さ7～10cmの規模で周回している。床面は，ほぼ平坦で硬く踏み固められている。炉は，中央から北東側のP_1とP_2の間に位置しており，長径82cm，短径58cmの楕円形を呈し，床面を深さ16cmほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉内には，多量の焼土粒子と極少量の焼土ブロックを含む暗赤褐色土が堆積し，炉床

は，ロームが熱を受けてレンガ状に赤く焼けて多少凹凸状を呈している。貯蔵穴は，北コーナー部寄りに検出され，平面形は，直径70cmのほぼ円形を呈し，床面を深さ43cmほど鍋状に掘り込んでいる。ピットは6か所検出され，主柱穴は，規模や配列からP_1・P_2・P_4の3か所が考えられる。主柱穴は，長径36～51cm，短径32～42cm，深さ30～44cmの規模を有している。

覆土は，上層がほとんど攪乱を受けているが，下層や壁際の土層は，自然堆積の様相を呈している。下層には極少量のローム小ブロックを含む暗褐色土が，壁際には極少量の焼土粒子を含む暗褐色土が堆積している。

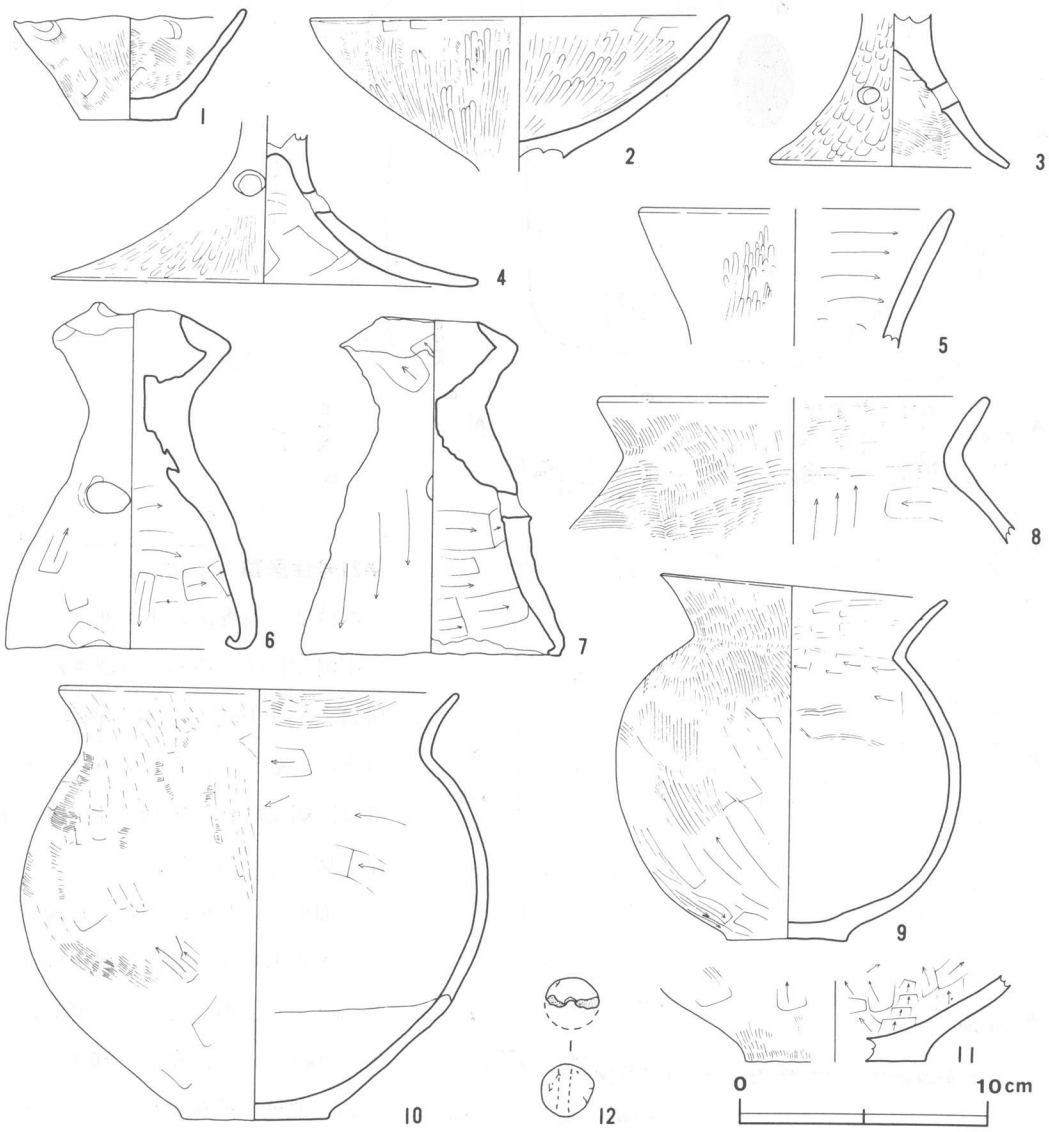
遺物は，縄文土器片3,697点，土師器片111点，石12点が出土している。縄文土器片は，周囲からの流れ込みと思われ，覆土上層から出土している。本跡に伴う遺物としては，土師器片が覆土下層の壁に沿って出土している。北東側の覆土下層から完形の炉器台形土器（第99図7），高坏形土器の坏部（第99図2），高坏形土器の脚部（第99図4）が，南東側の覆土下層から半完形の小型甕形土器（第99図9），高坏形土器の脚部（第99図3）が，北西側の覆土下層からほぼ完形の甕形土器（第99図10）が出土している。本跡は，出土遺物から古墳時代の五領期に比定される。

第20号住居跡出土土器

住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第99図1	埦形 土器 土師器	A 9.3 B 4.5 C 3.9	体部は底部よりほぼ直線的に外傾して立ち上がる。底部は平底である。	口縁部外面は横ナデ，体部外面は斜位のハケ目整形。体部内面は横位のハケ目整形。	砂粒 にぶい橙色 普通	70% P17
2	高坏形土器 土師器	A 17.0 B(6.2)	坏部は接合部から内彎しながら立ち上がる。	内・外面共放射状に丁寧なヘラ磨き。	砂粒 赤褐色 普通	70% 脚部欠損 P96
3	高坏形土器 土師器	B(6.2) D 9.7	脚部は「ハ」の字状に開き，脚部中位に3孔あり。	脚部外面は縦位のヘラ磨き。脚部内面は上位にヘラナデ，裾部はハケ目整形。	砂粒 にぶい橙色 普通	30% P104
4	高坏形土器 土師器	B(6.5) D 17.2	脚部裾部は大きく開いている。脚部には直径1.3cmほどの孔が3ヶ所に穿たれている。	脚部外面は縦位のヘラミガキ，内面は横位のヘラナデ。	砂粒・雲母 橙色 普通	30% P12
5	坩形 土器 土師器	A(12.8) B(5.6)	口縁部片で頸部よりほぼ直線的に立ち上がる。	口縁部外面は縦位のヘラ磨き。口縁部内面は横位のヘラナデ。	砂粒 灰褐色 普通	10% P97
6	炉器台形土器 土師器	A 3.3 B 14.7 C 9.6	口縁部は頸部より外傾しながら立ち上がる。脚部は内彎して開き，1孔が穿たれ，接合部にも中央孔が穿たれている。	器受部から脚部外面は縦位のヘラナデ。内面は横位のヘラナデ。	砂粒 にぶい橙色 良好	100% P26
7	炉器台形土器 土師器	A 3.8 B 13.7 C 10.9	口縁部は頸部より一旦外傾した後内傾しながら立ち上がる。脚部は「ハ」の字状に開き，3孔と中央孔が穿ったれている。	器受部から脚部外面はヘラナデ。器受部内面はヘラナデ，脚部内面はヘラ削り。	砂粒 にぶい橙色 良好	100% P21
8	甕形 土器 土師器	A(15.9) B(6.0)	口縁部は頸部から「く」の字状を呈して立ち上がる。	口縁部外面は斜位の，胴部外面は横位のハケ目。口縁部内面は横位のハケ目，胴部内面はヘラ削り。	砂粒 黒褐色 普通	10% P108
9	甕形 土器	A 11.5 B 14.3	口縁部は「く」の字状を呈する頸部より外反しながら立	口縁部から胴部外面はハケ目整形。口縁部から胴部内面は	砂粒 にぶい橙色	60% P99

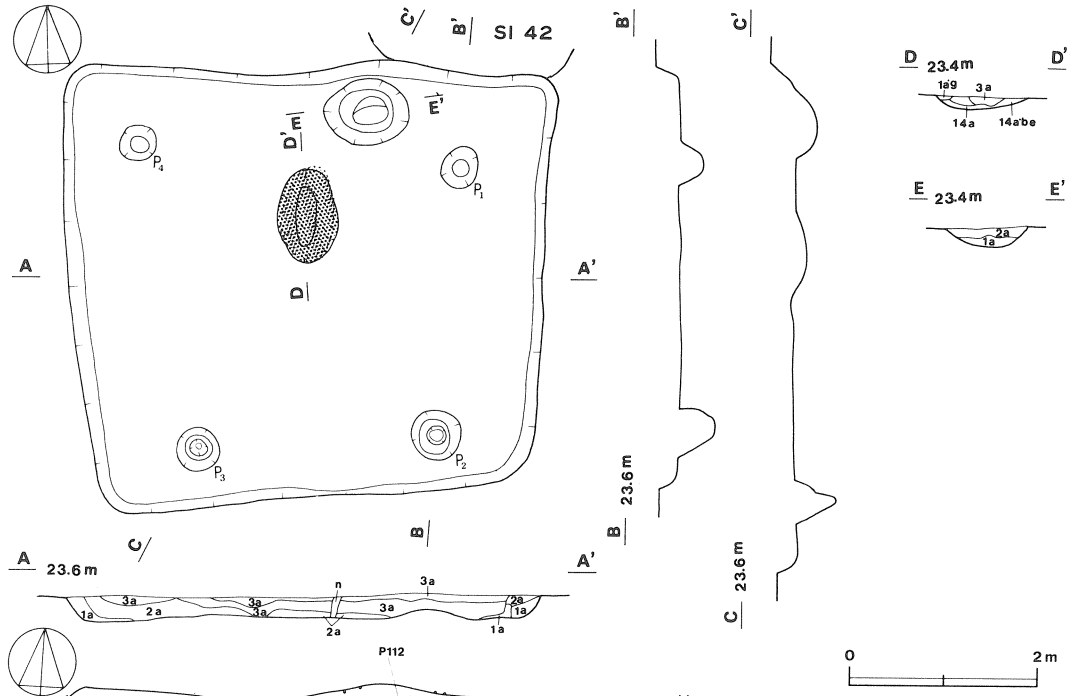
	土師器	C 4.8	ち上がる。胴部はほぼ球形を呈し，胴中位に最大径を有する。底部は平底である。	ヘラナデ。	普通	
10	甕形 土器 土師器	A 15.8 B 17.3 C 5.9	口縁部は頸部より外反しながら立ち上がり，胴部はほぼ球形を呈し，胴部中位に最大径を有する。	口縁部から胴部外面はハケ目整形後粗いヘラ磨き。口縁部内面はハケ目整形後横位のヘラナデ，胴部内面はヘラナデ。	砂粒 橙色 普通	90% P 100
11	甕形 土器 土師器	B(3.5) C(7.2)	底部片は平底であり，器厚は0.6～1.0cmほどである。	胴部外面はハケ目整形。胴部内面はヘラナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	10% P 101

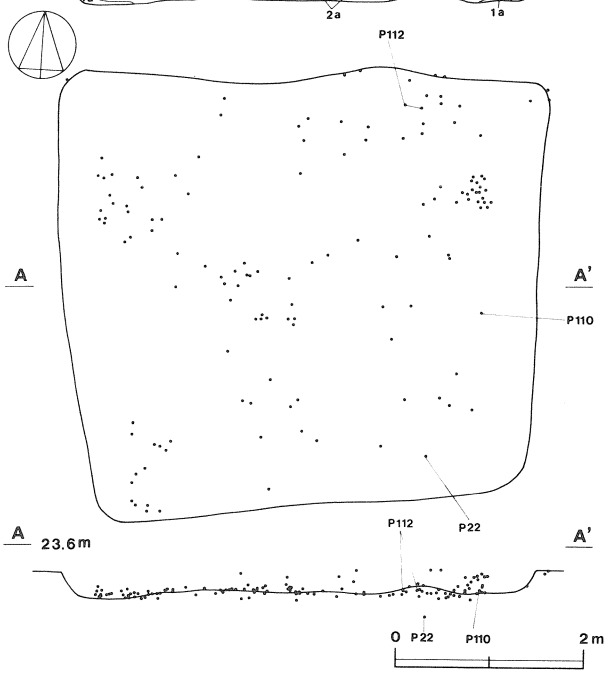


第99図　第20号住居跡出土遺物実測図

土錘解説表（球状土錘）

図版番号	名　称	長さ×幅 (cm)	孔径 (cm)	重さ (g)	備　考	図版番号	名　称	長さ×幅 (cm)	孔径 (cm)	重さ (g)	備　考
第99図 12	球状土錘	2.2×2.2	0.5	(8)	橙　色						





第100図　第21号住居跡実測図・遺物出土位置図・遺物接合関係図

第21号住居跡（第100図）

本跡は，調査区の中央部より，やや南側J3f_4区を中心に確認された住居跡で，第19号住居跡の西側4.2mほどに位置している。北東コーナー部は，縄文時代の第42号住居跡の南壁を切っている。

平面形は，長軸5.04m，短軸4.60mの不整方形を呈し，長軸方向は，N－82°－Eを指している。壁高は，20～26cmであり，壁は，締まったロームで北壁の貯蔵穴付近がゆるやかに立ち上がっているほかは，ほぼ外傾して立ち上がっている。床面は，中央部が若干高くなっているが，全

般的に平坦で，きわめて硬く踏み固められている。炉は，地床炉で中央から北側に位置している。平面形は，長径100cm，短径66cmの楕円形を呈し，床面を深さ14cmほど皿状に掘りくぼめている。炉の南側の覆土からは，土師器片が出土しているが，焼土の量は少なく，炉床もそれほど焼けていないため，さほど長期的に使用されたものでない と考えられる。北壁に接して，やや北東コーナー部に貯蔵穴が検出され，平面形は，長径91cm，短径72cmの楕円形を呈し，床面を21cmほど掘り込んで構築されている。貯蔵穴の覆土は，上層に暗褐色土，下層に褐色土が自然堆積をしている。ピットは，4か所検出されているが，規模や配列から，いずれも主柱穴と思われる。主柱穴は，ほぼ円形を呈し，長径41～55cm，短径38～54cm，深さ29～45cmの規模を有している。出入口は，炉の位置や柱穴の配列等から南側のP_2・P_3の間が想定される。

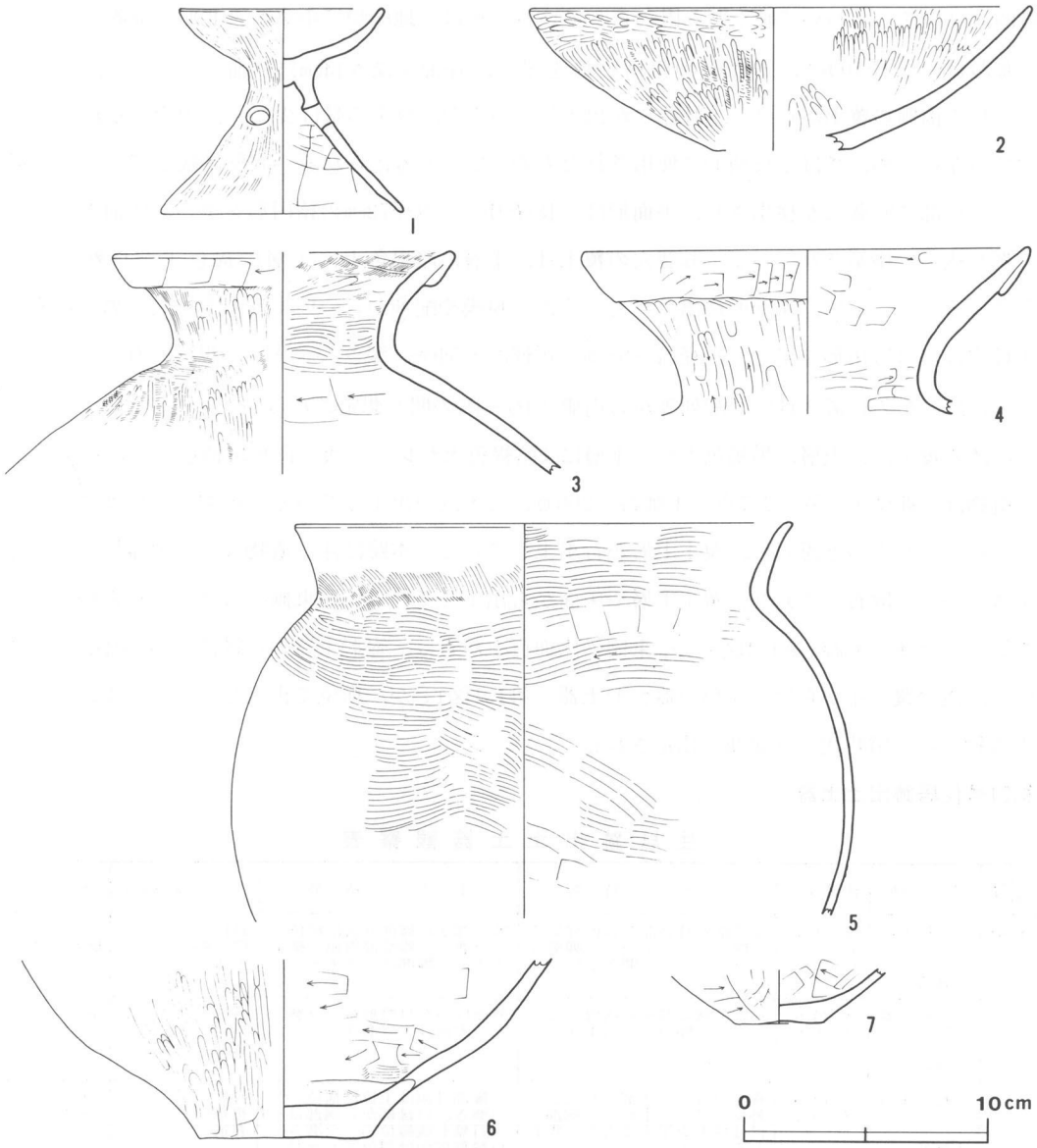
本跡の覆土は，上層に黒褐色土が，下層には暗褐色土がレンガ状に自然堆積をしている。

遺物は，縄文土器片3,227点，土師器片206点，石1点が出土している。縄文土器片は，周囲から流れ込んだものと思われ，覆土上層から出土している。本跡に伴う遺物は，土師器片で住居跡全域にわたり散布しており，覆土下層や床面から出土している。北東側のほぼ床面から胴部下位を欠損した甕形土器（第101図5）が，東側の床面直上からは，壺形土器の口縁部（第101図4）が逆位で，P_2の覆土中からは，完形の器台形土器（第101図1）が，横位で出土している。本跡は，出土遺物から古墳時代の五領期に比定される。

第21号住居跡出土土器

住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第101図 1	器台形土器 土師器	A 8.4 B 8.5 C 10.0	器受部が接合部から内彎気味に開いて立ち上がる。脚部は「ハ」の字状に開き上位に3孔あり。	器受部から脚部外面は縦位のヘラ磨き。器受部内面に横位のナデ，脚部はヘラナデ。	砂粒 明赤褐色 普通	98% 磨滅気味 P22
2	高坏形土器 土師器	A 20.6 B(5.9)	坏部は接合部から内彎しながら大きく開いて立ち上がる。	外面はハケ目整形後ヘラ磨き。内面はヘラ磨き。	砂粒 橙色 普通	50% P107
3	壺形 土器 土師器	A(13.5) B(9.1)	複合口縁で，頸部より大きく外反して立ち上がる。胴部はほぼ球形を呈するものと思われる。	口縁部外面は上位に横位のヘラ磨き，口縁部から胴部はハケ目整形後縦位のヘラ磨き。口縁部内面は斜位のハケ目，胴部内面はヘラナデ。	砂粒 橙色 普通	10% P105
4	壺形 土器 土師器	A 18.3 B(6.4)	複合口縁で，頸部から外反して立ち上がる。	口縁部外面は横位のヘラナデ，頸部外面は縦位の丁寧なヘラ磨き。口縁部内面は横位のヘラナデ。	砂粒 赤褐色 普通	20% 胴部欠損 P110
5	甕形 土器 土師器	A 20.5 B(16.4)	口縁部は外傾して立ち上がり，端部でやや外反する。胴部はほぼ球形を呈し，胴中位に最大径を有する。	口縁部，胴部外面は斜位のハケ目整形。口縁部内面は横位のハケ目整形，胴部内面はヘラナデ。	砂粒 灰褐色 普通	40% P112
6	甕形 土器 土師器	B(7.4) C 7.0	胴部は平底の底部から内彎して立ち上がる。	胴部外面は縦位の丁寧なヘラ磨き。胴部内面はヘラナデ。	砂粒 にぶい赤褐色 普通	30% 胴部中位以上欠損 P106
7	甕形 土器 土師器	B(2.2) C 3.6	平底の底部片である。	内・外面共ヘラナデ	砂粒 橙色 普通	10% P111

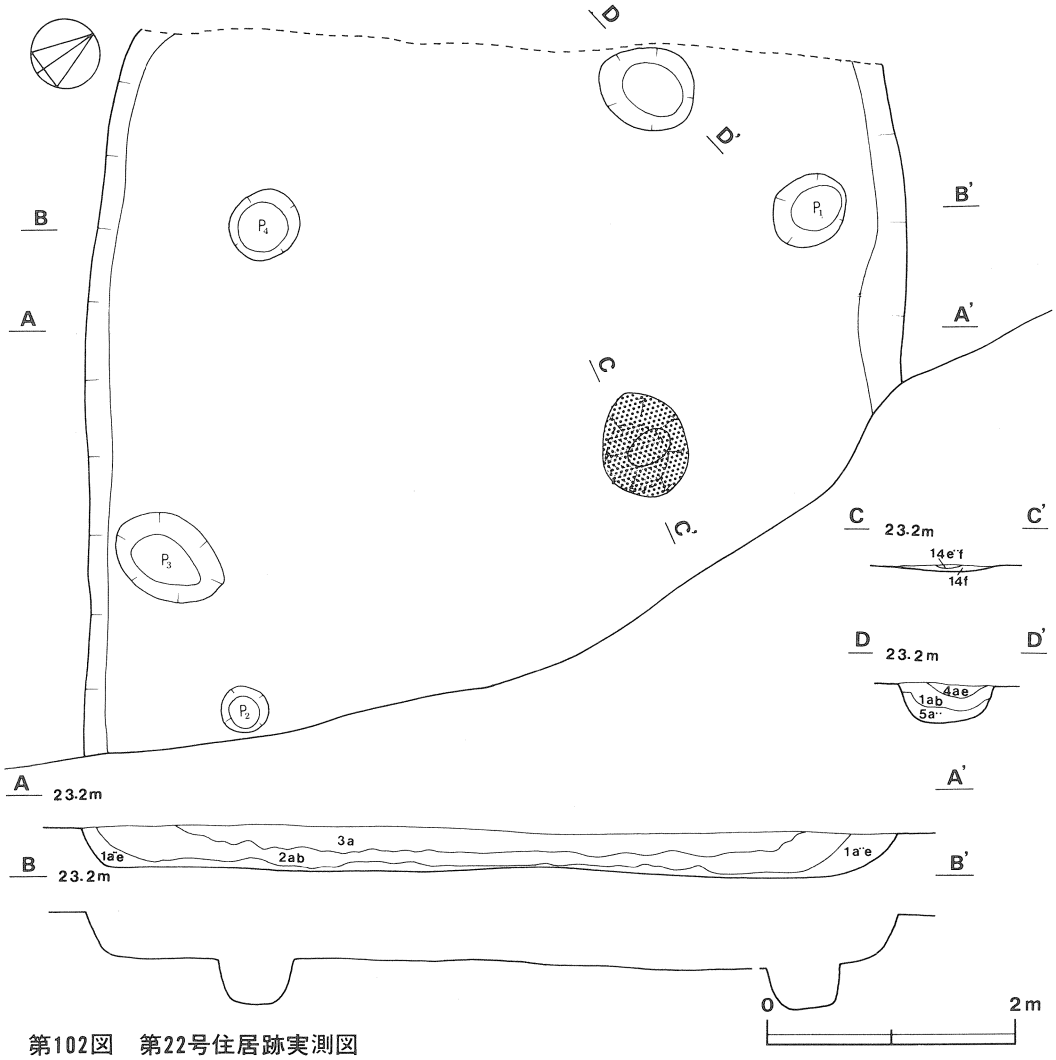


第101図　第21号住居跡出土遺物実測図

第22号住居跡（第102図）

本跡は，調査区の南東部K3c₀区を中心に確認された住居跡で，第16号住居跡の南側9.5mに位置している。本跡は，縄文時代の第26・31号住居跡を掘り込んで構築されている。東側半分は，農道のため調査は不可能であった。

平面形は，長軸が推定で，7.10m，短軸6.60mの隅丸長方形を呈しており，長軸方向は，N－53°－Wを指しているものと思われる。壁は，締まりのあるロームでほぼ垂直に立ち上がり，壁高は，28



第102図　第22号住居跡実測図

～36cmである。床面は，全体的に硬く，炉の周囲は，特に，硬く踏み固められており，北東側は若干傾斜している。炉は，中央からやや北側に位置し，長径90cm，短径71cmの楕円形を呈し，床面を4cmほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉内には，少量の焼土ブロックを含む暗褐色土が堆積し，炉床は赤化し硬く焼けている。貯蔵穴は，北コーナー部に検出されており，平面形は，長径82cm，短径70cmの楕円形を呈しており，深さは，31cmの規模である。ピットは4か所検出されているが，規模や配列からP_1・P_2・P_4が主柱穴と考えられる。主柱穴は，長径42～64cm，短径36～55cm，深さ34～48cmの規模を有している。なお，北東側の主柱穴は，農道の下にあるものと推定される。

本跡の覆土は，3層からなり，上層には黒褐色土が，中層には暗褐色土が，下層には明褐色土

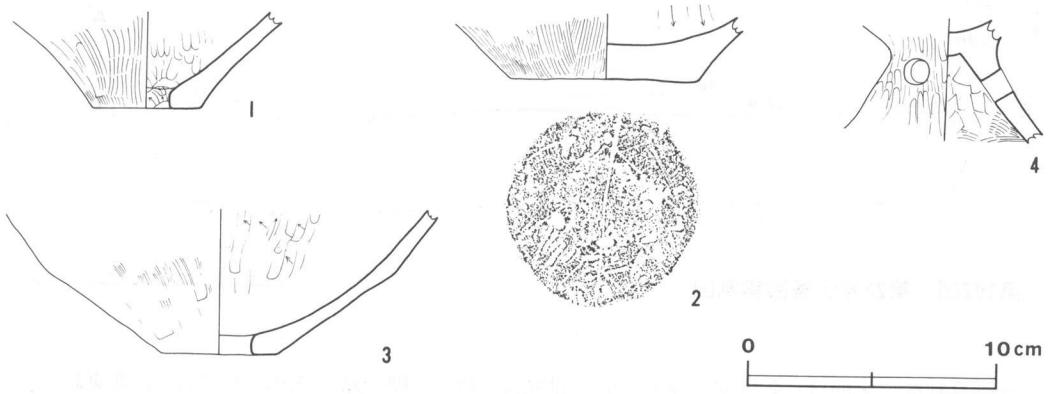
がレンズ状に自然堆積している。覆土下層には，焼土粒子が少量含まれている。

遺物は，縄文土器片2,837点，土師器片223点，石４点が住居跡全域の覆土から出土している。縄文土器片は，周囲から流れ込んだものと思われ，覆土上層から出土している。本跡に伴う遺物としては，土師器片が，覆土の下層及び床面から少量出土している。本跡は出土遺物から，古墳時代の五領期に比定される。

第22号住居跡出土土器

住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第103図 1	甑形土器 土師器	B(3.9) C 4.4	胴下位は底部よりほぼ直線的に立ち上がる。底部に穿孔あり。	胴部外面は縦位のヘラ磨き後ハケ目整形。胴部内面は縦位のヘラ磨き。	砂粒 にぶい橙色 普通	10% P115
2	甕形土器 土師器	B(2.7) C 7.5	大型の平底の底部片で，底部に木葉痕あり。	胴部外面は縦位のハケ目整形。内面はヘラナデ。	砂粒 にぶい褐色 普通	10% P113
3	甑形土器 土師器	B(5.9) C 4.6	胴部は底部からやや内彎気味に立ち上がる。底部に径2.6cmの孔あり。	胴部外面はハケ目整形。胴部内面は粗いヘラ磨き。	砂粒 橙色 普通	20% P114
4	高坏形土器 土師器	B(5.0)	接合部から「ハ」の字状に開く脚部片である。３孔を有している。	脚部外面は丁寧な縦位のヘラ磨き。内面は横位のヘラナデ。	砂粒 明赤褐色 普通	30% P120

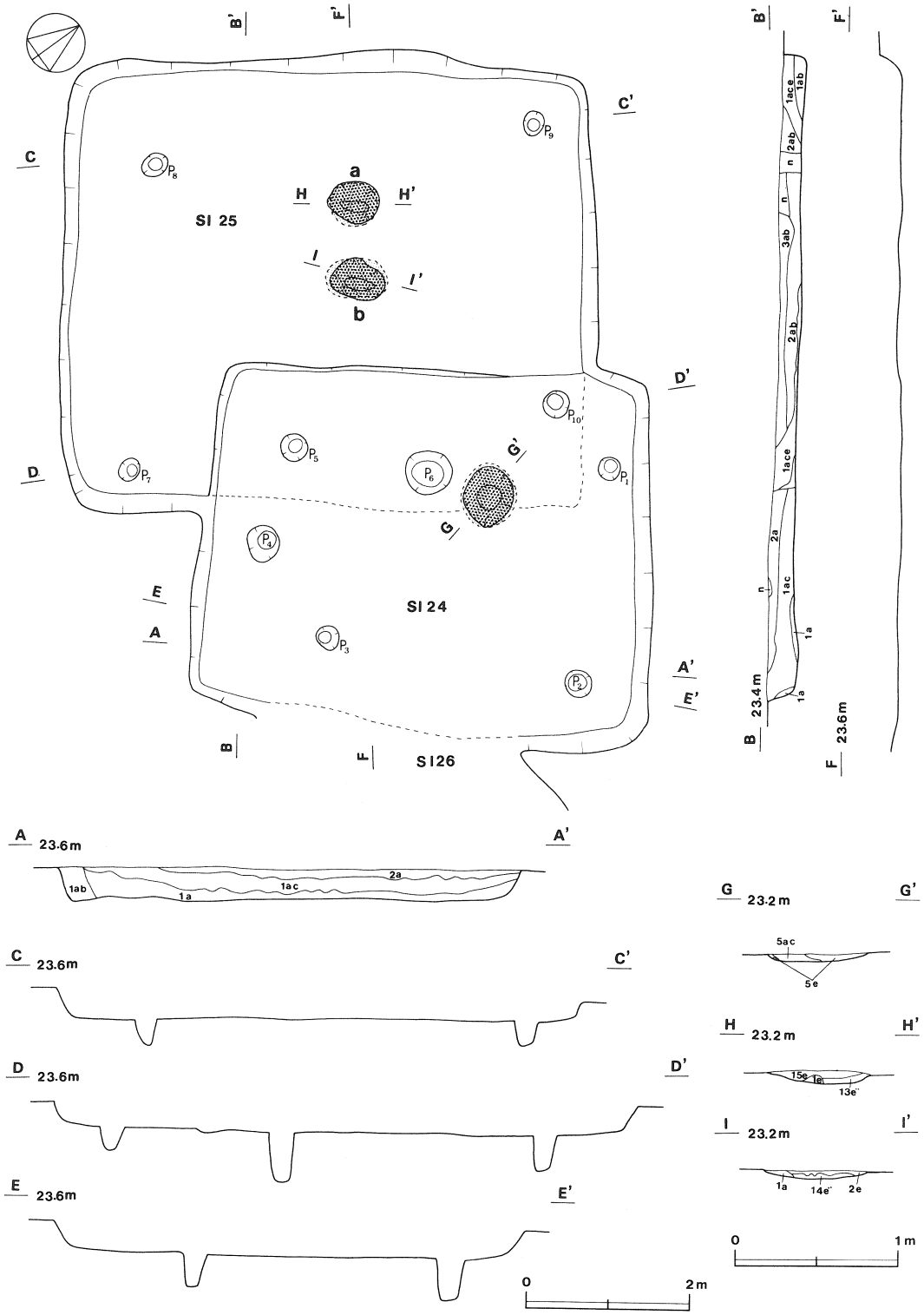


第103図　第22号住居跡出土遺物実測図

第24号住居跡（第104図）

本跡は，調査区の南東部K3b$_9$区を中心に確認された住居跡で，第28号住居跡の北東側4.1mに位置している。本跡の北西側は，古墳時代前期の第25号住居跡と南東側は縄文時代中期の第26号住居跡と重複しているが，本跡は，土層断面図を検討した結果第25号住居跡より古く，第26号住居跡より新しい遺構である。

平面形は，長軸5.6m，短軸4.6mの隅丸長方形を呈しており，長軸方向は，N－40°－Eを指して



第104図　第24・25号住居跡実測図

いる。壁は，締まったロームで，外傾して立ち上がっており，壁高は，31～33cmである。床面は，ほぼ平坦で堅緻であり，特に，炉の北側から東側は硬く踏み固めている。本跡は，第25号住居跡の東側の床面を約6cmほど掘り込んでおり，また，第26号住居跡の西側の床面を約5cmほど掘り込んでいる。炉は，中央から北側に位置し，長径74cm，短径60cmの楕円形を呈し，床面を深さ4cmほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉は，浅い掘り込みで，炉内には，焼土も少なく，長期間使用されたものとは思われない。ピットは5か所検出され，P_1～P_3・P_5は，長径27～38cm，短径26～35cm，深さ43～62cmの規模を有し，配列から主柱穴と考えられる。P_4は，長径49cm，短径41cmの楕円形を呈し，床面を100cm掘り込んでおり，本跡のピットの中では，一番深い掘り込みである。炉の位置や柱穴の配列から，南西側に出入口の施設が考えられる。

本跡の覆土は，3層からなり，上層は暗褐色土でローム粒子を極少量含み軟らかく，中層から下層にかけては，褐色土でローム粒子を少量含み締まりがあり，自然堆積の状態で堆積している。

遺物は，縄文土器片1,089点，土師器片261点，石1点が出土している。縄文土器片は，周囲からの流れ込みと思われ，覆土上層から出土している。本跡に伴う土師器片は，主に中央より北東壁に沿って出土している。本跡のほぼ中央部の覆土下層から，ミニチュア土器（第105図1），高坏形土器の脚部（第105図3）が出土している。北東側の覆土中層から，甕形土器の破片（第105図4），底部を欠いた壺形土器（第105図8）が出土している。本跡は，出土遺物から古墳時代の五領期に比定される。

第24号住居跡出土土器

住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第105図 1	ミニチュア土器 土師器	A 5.3 B 2.8 C 4.1	体部は底部からやや内彎して立ち上がる。底部は平底である。	体部外面は上位に横位のヘラナデ，下位に部分的に縦位のハケ目整形。体部内面はハケ目整形。	砂粒 にぶい橙色 普通	100% P130
2	ミニチュア土器 土師器	B（3.2） C 0.9	底部片で丸底の底部から内彎気味に立ち上がる。	体部内・外面共ナデ。	砂粒 にぶい褐色 普通	40% P136
3	高坏形土器 土師器	B（4.8） D 19.1	脚部はゆるやかに開きながら裾部に至り，脚部上位に3孔を有する。	脚部外面は縦位の丁寧なヘラ磨き。脚部内面は上位にヘラナデ，中位から下位にかけては粗いハケ目整形。	砂粒 赤色 普通	40% P125
4	甕形土器 土師器	A(21.1) B(11.8)	口縁部は頸部から外反しながら立ち上がる。胴部はほぼ球形を呈するものと思われる。	口縁部外面は斜位のハケ目整形，内面は横位のハケ目整形。胴部外面は横位のハケ目整形，胴部内面は横位のヘラナデ。	砂粒 にぶい褐色 普通	10% P127
5	甕形土器 土師器	A(22.3) B(19.6)	口縁部は頸部よりやや外反して立ち上がり，胴部はほぼ球形を呈している。	口縁部内・外面共横ナデ。胴部外面は斜位のハケ目。胴部内面は横位のヘラナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	25% P124
6	台付甕形土器 土師器	A(22.3) B(19.6)	口縁部は頸部より外反して立ち上がる。胴部最大径は上位にある。	口縁部外面は斜位のハケ目整形。胴部外面は横位斜位のハケ目整形後一部ナデ。口縁部内面は横位のヘラナデ。	砂粒 橙色 普通	30% P131

7	甕形　土器 土師器	A(16.6) B(5.2)	頸部より外反して立ち上がる。口縁部片である。	口唇部にキザミ目，口縁部外面は斜位に，内面は横位にハケ目整形。胴部外面は横位のハケ目整形，内面はヘラナデ。	砂粒 褐色 普通	10% P128
8	壺形　土器 土師器	A 14.0 B(26.1)	口縁部は「く」の字状を呈する頸部よりやや外反して立ち上がる。胴部はほぼ球形を呈し，胴中位に最大径を有する。	口縁部，胴部共外面は縦位の丁寧なヘラ磨き。口縁部内面は丁寧なヘラ磨き，胴部内面は横位のヘラナデ。	砂粒 橙色 普通	70% P126

第25号住居跡（第104図）

本跡は，調査区の南東部K3a_8区を中心に確認された住居跡で，第30号住居跡の東側６ｍに位置している。本跡の東側には，第24号住居跡が重複しており，土層断面を検討した結果，本跡の方が新しい遺構と判断される。

平面形は，推定で長軸6.54ｍ，短軸5.60ｍの隅丸長方形を呈し，長軸方向は，N－42°－Eを指している。壁は，ロームで硬く締まり，北東壁は，ほぼ垂直に，その他の壁は，外傾して立ち上がっている。壁高は，24～31cmである。床面は，多少凹凸があるが，全体的にほぼ平坦で堅緻である。特に，炉の周囲は硬く踏み固められており，移植ゴテが通らないほどである。本跡の床面と第24号住居跡の床面の高低差は，６cmあり，本跡の方が高い。炉は，中央から北西側に２基並んで検出された。炉aの平面形は，長径64cm，短径52cmの楕円形を呈し，床面を７cmほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉内には，焼土粒子を多量に含んだ赤褐色土が堆積している。炉床は，ロームが熱を受けて赤く焼けている。炉bの平面形は，長径68cm，短径50cmの不整楕円形を呈し，床面を５cmほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉内には，焼土粒子を多量に含んだ暗褐色土が堆積している。炉床は，炉aよりも凹凸が激しく，レンガ状に焼けており，使用頻度が高かったものと思われる。ピットは５か所検出されているが，P_7～P_{10}は，長径30～35cm，短径26～33cm，深さ29～46cmの規模を有しており，配列からいずれも主柱穴と考えられる。

本跡の覆土は，レンズ状に自然堆積しており，覆土には，ローム粒子，ローム小ブロックが少量含まれている。上層はやや軟らかい極暗褐色土が，下層には締まりのある暗褐色土が堆積している。

遺物は，住居跡の全域から縄文土器片750点，土師器片123点，石１点が出土している。覆土上層から出土している縄文土器片は，周囲から流れ込んだものと思われる。本跡に伴う遺物としては，土師器片が覆土の下層を中心に出土しており，本跡は，古墳時代の五領期に比定される。

第105図　第24号住居跡出土遺物実測図

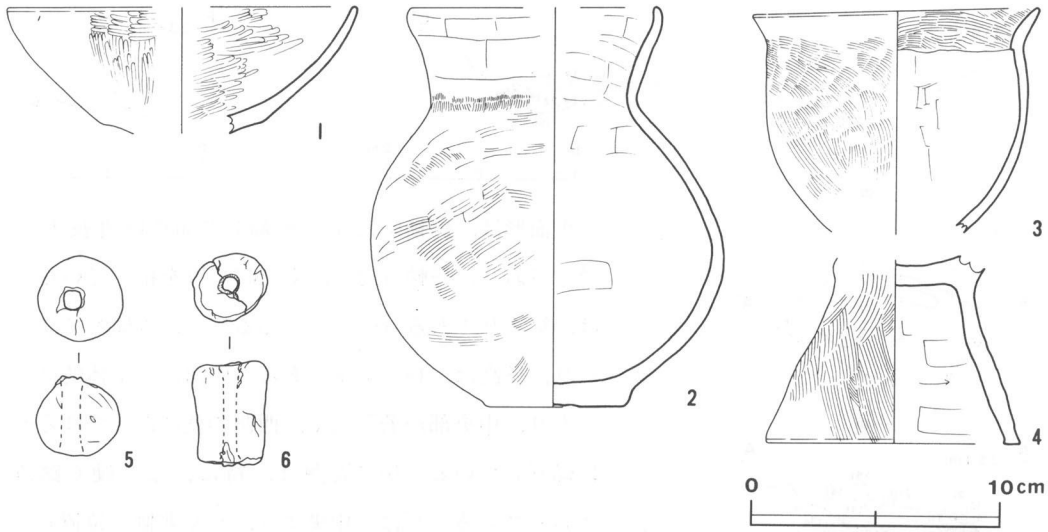
第25号住居跡出土土器

住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第106図 1	高坏形土器 土師器	A(13.9) B(5.1)	坏部はやや内彎して立ち上がる。坏部下位の外面に稜を有している。	外面は放射状の丁寧なヘラ磨き。内面は横位のヘラ磨き。	砂粒 赤色 普通	10% 脚部欠損 P133
2	壺形土器 土師器	A(10.1) B 16.2 C 5.5	口縁部はやや外反しながら立ち上がり，先端部でやや内彎して立ち上がる。胴部はほぼ球形，底部はやや突出気味の平底である。	口縁部内・外面は横ナデ。胴部外面はハケ目整形。胴部内面はヘラナデ。	砂粒 橙色 普通	95% P 6
3	甕形土器 土師器	A 11.4 B(9.0)	複合口縁で，頸部より外反して立ち上がり，先端部から内側に折り返してある。胴部は内彎して底部に至る。	口縁部外面は横ナデ，胴部外面は斜位のハケ目整形。口縁部内面は横位のハケ目整形，胴部内面はヘラナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	50% 底部欠損 P132
4	台付甕形土器 土師器	B(7.2) D 10.2	台部は接合部から外反している。	台部外面は細かいハケ目後，太いハケ目整形。台部内面は横位のヘラナデ整形。	砂粒 橙色 良好	10% P 3

土錘解説表（球状土錘）

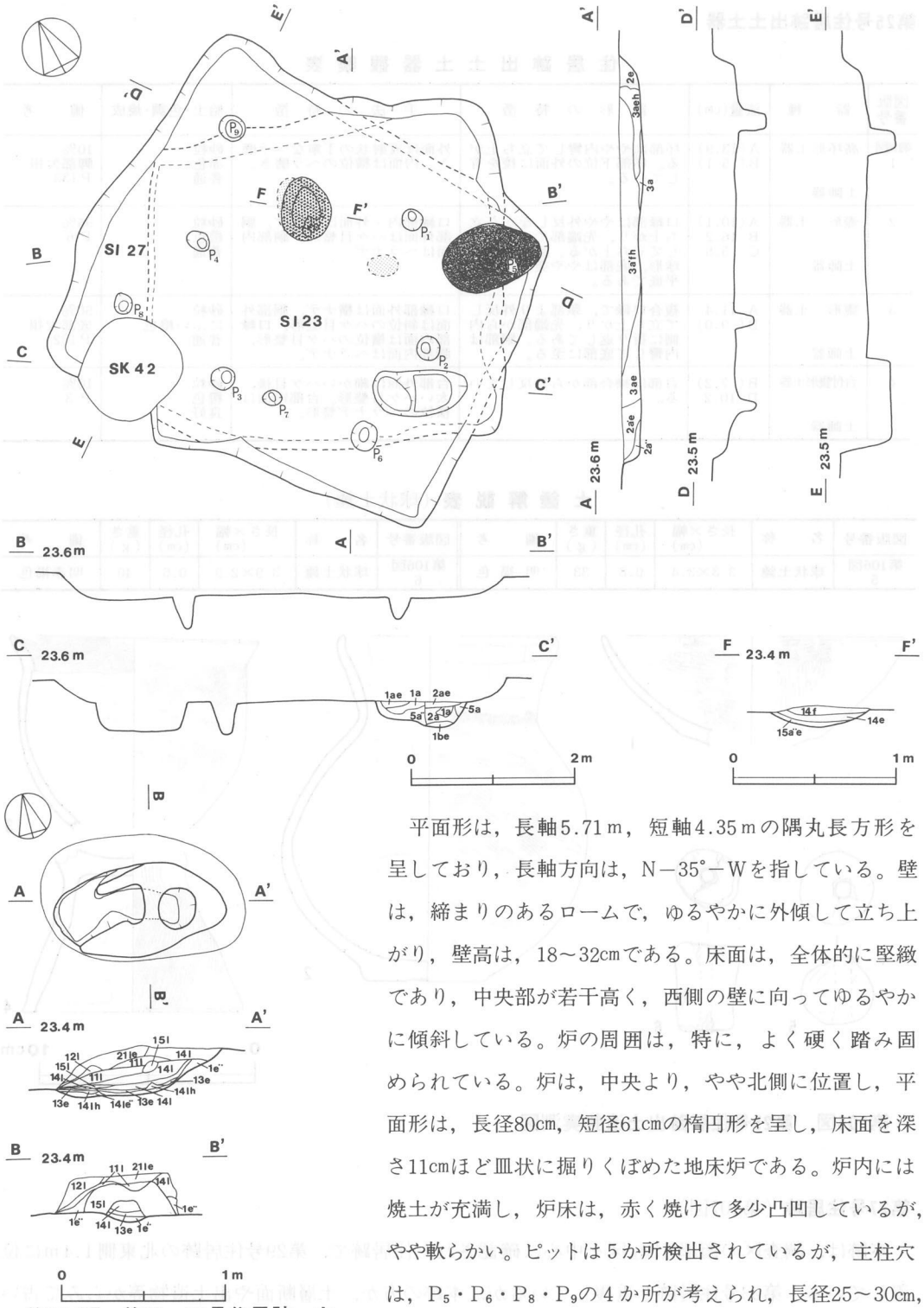
図版番号	名称	長さ×幅(cm)	孔径(cm)	重さ(g)	備考	図版番号	名称	長さ×幅(cm)	孔径(cm)	重さ(g)	備考
第106図 5	球状土錘	3.3×3.4	0.8	33	明褐色	第106図 6	球状土錘	3.9×2.9	0.6	40	明赤褐色



第106図　第25号住居跡出土遺物実測図

第27号住居跡（第107図）

本跡は，調査区の南部K3d$_8$区を中心に確認された住居跡で，第29号住居跡の北東側1.4mに位置している。第23号住居跡と重複しているが，本跡の方が，土層断面や出土遺物等からみて古い遺構である。また，本跡の西コーナー寄りの南西壁の一部は，第42号土坑に切られている。



第107図　第23・27号住居跡・カマド実測図

平面形は，長軸5.71ｍ，短軸4.35ｍの隅丸長方形を呈しており，長軸方向は，N－35°－Wを指している。壁は，締まりのあるロームで，ゆるやかに外傾して立ち上がり，壁高は，18～32cmである。床面は，全体的に堅緻であり，中央部が若干高く，西側の壁に向ってゆるやかに傾斜している。炉の周囲は，特に，よく硬く踏み固められている。炉は，中央より，やや北側に位置し，平面形は，長径80cm，短径61cmの楕円形を呈し，床面を深さ11cmほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉内には焼土が充満し，炉床は，赤く焼けて多少凸凹しているが，やや軟らかい。ピットは5か所検出されているが，主柱穴は，P_5・P_6・P_8・P_9の4か所が考えられ，長径25～30cm，短径22～34cm，深さ23～37cmの規模を有している。特に，

P_5は第23号住居跡のカマドの直下から検出されている。P_7はやや規模が小さく，配列から出入口的な施設に利用されたピットではないかと思われる。

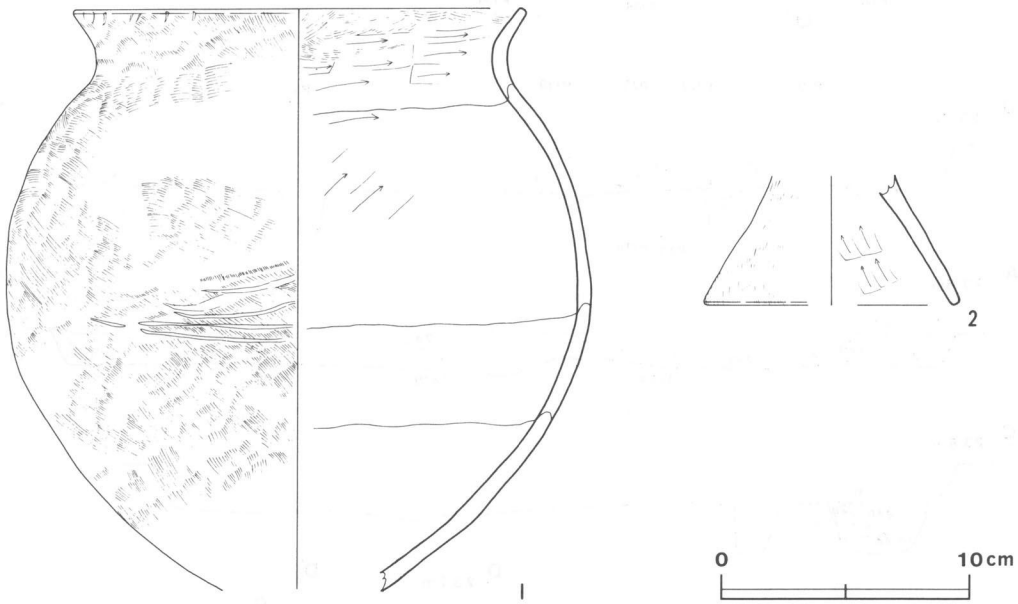
本跡の覆土は，第23号住居跡に大部分が削平されており，残された土層より観察すると，全体的にローム粒子，焼土粒子，炭化物を含み締まっている。色調は暗褐色土を呈し自然堆積の状態を示している。

本跡及び第23号住居跡より出土した遺物は，土器片706点，石３点である。土器片の大半は周囲から流れ込んだと思われる縄文土器片で，覆土から出土している。本跡に伴う遺物は，第23号住居跡に切られていない北コーナー部及び北東側から土師器片がわずかに25点出土しているに過ぎない。北コーナー部の覆土より台付甕形土器（第108図1），台付甕形土器の台部片（第108図2）が出土している。本跡は，出土遺物から古墳時代の五領期に比定される。

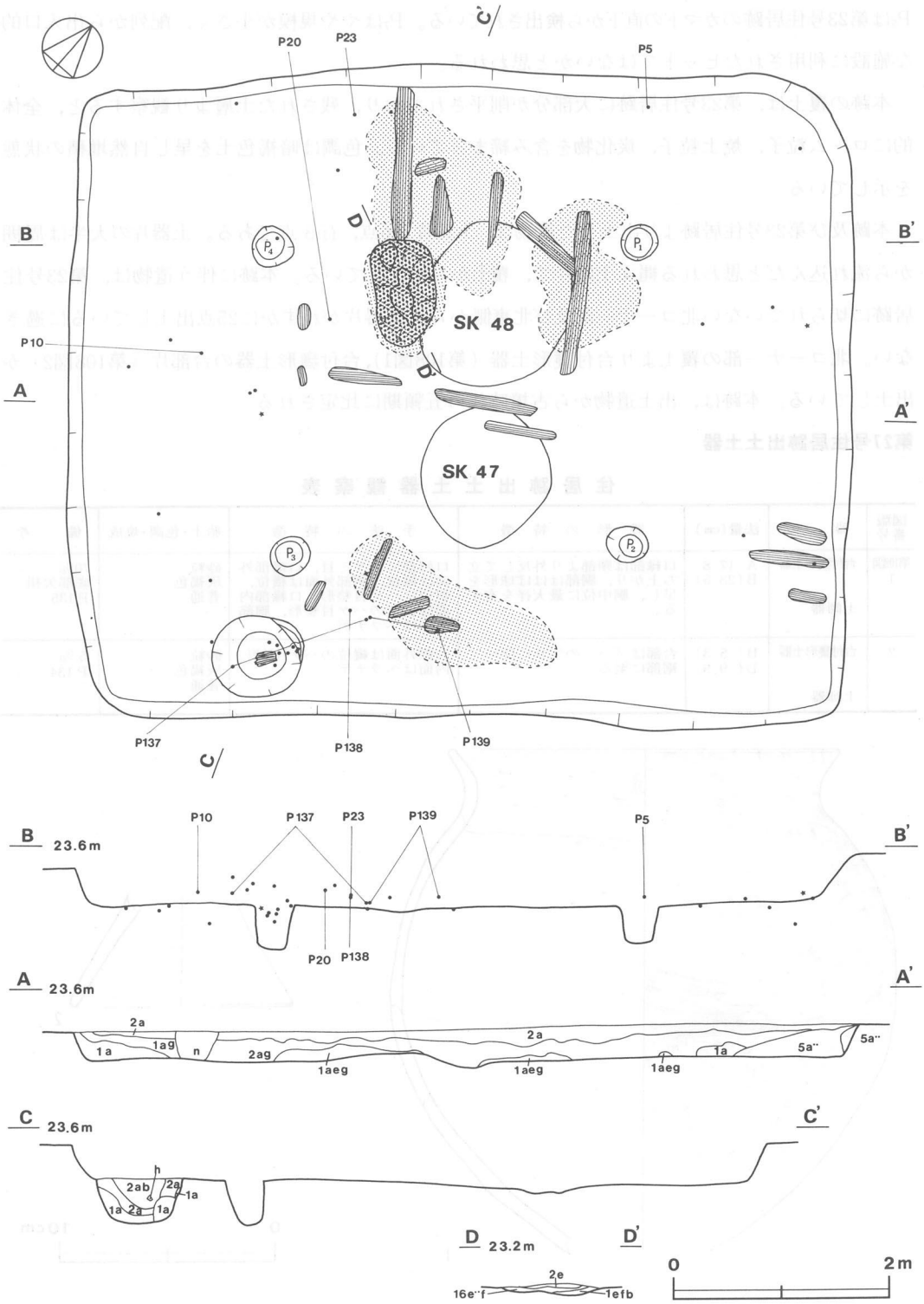
第27号住居跡出土土器

住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第108図 1	台付甕形土器 土師器	A 17.8 B(23.5)	口縁部は頸部より外反して立ち上がり，胴部はほぼ球形を呈し，胴中位に最大径を有する。	口唇部にキザミ目，口縁部外面は縦位，胴部外面は横位，斜位にハケ目整形。口縁部内面は横位のハケ目整形，胴部内面はヘラナデ。	砂粒 灰褐色 普通	70% 底部欠損 P135
2	台付甕形土器 土師器	B(5.3) D(9.9)	台部は「ハ」の字状に開いて裾部に至る。	台部外面は縦位のハケ目整形。内面はヘラナデ。	砂粒 灰褐色 普通	5% P134



第108図　第27号住居跡出土遺物実測図



第109図　第28号住居跡実測図・遺物出土位置図・遺物接合関係図

第28号住居跡（第109図）

本跡は，調査区の南部K3c$_6$区を中心に確認された住居跡で，第29号住居跡の北西部1.5mに位置している。本跡は，第47号・48号土坑と重複しているが，土坑の上面より炭化材が検出され，しかも，第48号土坑上には本跡の炉が構築されている。これらのことから，本跡の方が新しいものと考えられる。

平面形は，長軸7.34m，短軸6.05mの隅丸長方形を呈しており，長軸方向は，N－48°－Eを指している。壁は，締まりのあるロームで，床面からほぼ垂直に立ち上がり，壁高は，38～43cmである。

床面は，硬く，中央部に向って低く傾斜し，多少凹凸がみられる。炉は，中央からやや西側に位置し，長径100cm，短径57cmの不整楕円形を呈し，床面を深さ8cmほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉内には，焼土が充満し，炉床は，ロームが熱を受けて焼土ブロック化し凹凸状を呈している。貯蔵穴は，南コーナー部寄りの南東壁際に検出されている。平面形は，長径84cm，短径74cmの楕円形を呈し，床面から底面までの深さは40cmである。貯蔵穴の覆土は，上層に炭化物を含む暗褐色土が，下層に褐色土がレンズ状に自然堆積している。ピットは，4か所検出され，長径37～40cm，短径33～39cmの円形を呈し，深さ34～48cmで，ほぼ同一規模であり，配列からいずれも主柱穴と考えられる。

本跡の覆土は，3層からなり，上層から中層にかけては暗褐色土が，下層には褐色土が自然堆積している。本跡は，覆土中層から下層にかけて，少量の焼土粒子と多量の炭付材が検出されていることから焼失家屋と考えられる。

遺物は，縄文土器片1,353点，土師器片261点，石4点が出土している。縄文土器片は，周囲から流れ込んだものと思われ，覆土上層から出土している。中層から下層にかけては，本跡に伴う土師器片が壁際に沿って出土している。南側のほぼ床面から台付甕形土器の脚部片（第110図5），半完形に近い甕形土器（第110図7）が，床面から若干浮いた状態で高坏形土器の脚部（第110図4）が出土している。西側の床面より若干浮いた状態で完形の器台形土器（第110図2・3），甕形土器の口縁部片（第110図6）が出土している。北側の床面より若干浮いた状態で完形の埦形土器（第110図1）が出土している。本跡は，出土遺物から古墳時代の五領期に比定される。

第28号住居跡出土土器

住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第110図 1	埦形土器 土師器	A 12.5 B 5.2 C 4.2	体部は底部から内彎して立ち上がり，底部は平底である。	口縁部内・外面共ハケ目整形後横ナデ，体部外面は斜位のハケ目整形後一部ヘラナデ。体部内面は部分的にヘラ磨き。	砂粒・長石 砂礫 橙色 良好	100% P 5
2	器台形土器	A 7.8 B 8.7	脚部は「ハ」の字状に開いている。脚部上位には径 1.3cm	口縁部外面は横ナデ，器受部から脚部外面は縦位のヘラ磨	砂粒 橙色	100% P 10

	土師器	C 11.4	ほどの孔が3ケ所，器受部から脚部にかけて径5cmの中央孔が穿っている。	き。器受部内面は横ナデ，脚部内面は横位のハケ目整形。	良好	
3	器台形土器 土師器	A 4.6 B 9.9 C 11.4	脚部は「ハ」の字状に開き，上部に径 1.5cmほどの中央孔を有する。	脚部外面は縦位のハケ目整形後，ヘラナデ整形。脚部内面は横位のハケ目整形が施されている。	砂粒 にぶい橙色 普通	98% P20
4	高坏形土器 土師器	B(6.9) D(11.4)	脚部は「ハ」の字状に開いて裾部に至る。脚部上位に3孔がある。	脚部外面は縦位のヘラ磨き。脚部内面はヘラナデ。	砂粒 にぶい赤褐色 普通	20% P138
5	台付甕形土器 土師器	B(7.7) D(9.4)	台部は接合部から内彎気味に開いて裾部に至る。	台部内・外面共ヘラナデ。	砂粒 にぶい橙色 良好	30% P139
6	甕形 土器 土師器	A(12.9) B(4.5)	口縁部は頸部から「く」の字状を呈してやや外反して立ち上がる。	口縁部外面は縦位のハケ目整形。内面は横位のハケ目整形。	砂粒 灰褐色 普通	5% P23
7	甕形 土器 土師器	A 17.0 B(21.2)	口縁部は頸部から「く」の字状を呈してほぼ直線的に立ち上がり，胴部はほぼ球形を呈する。	口縁部外面は斜位のハケ目整形，内面は横位のハケ目整形。胴部外面は斜位にハケ目整形，内面は縦位のヘラナデ。	砂粒 にぶい黄橙色 普通	60% P137
8	甕形 土器 土師器	A 19.5 B 28.0 C 7.2	口縁部は頸部から外反して立ち上がり，胴部はほぼ球形を呈し，胴中位に最大径を有する。底部は平底である。	口縁部外面は縦位の，内面は横位のハケ目整形。胴部外面は横位，斜位のハケ目整形，胴部内面はヘラナデ。底部に木葉痕あり。	砂粒 にぶい褐色 普通	60% P32

土 錘 解 説 表（球状土錘）

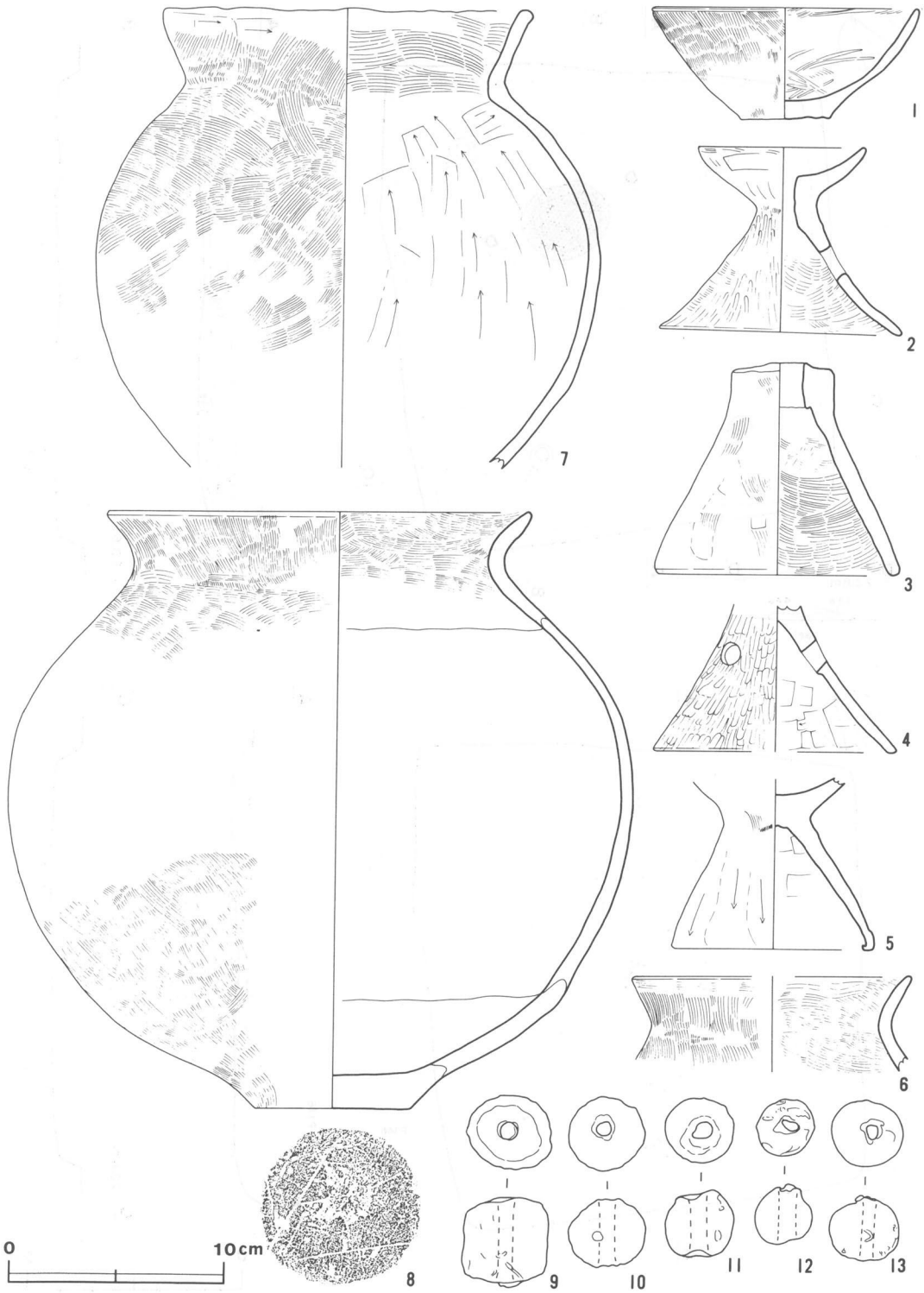
図版番号	名 称	長さ×幅 (cm)	孔径 (cm)	重さ (g)	備 考	図版番号	名 称	長さ×幅 (cm)	孔径 (cm)	重さ (g)	備 考
第110図 9	球状土錘	4.3×3.9	0.8	71	明 褐 色	第110図 12	球状土錘	2.9×2.7	0.7	19	明 褐 色
10	〃	3.3×3.6	0.8	41	明 褐 色	13	〃	3.2×3.3	0.6	33	黒 褐 色
11	〃	3.1×3.2	0.8	30	明赤褐色						

第29号住居跡（第111図）

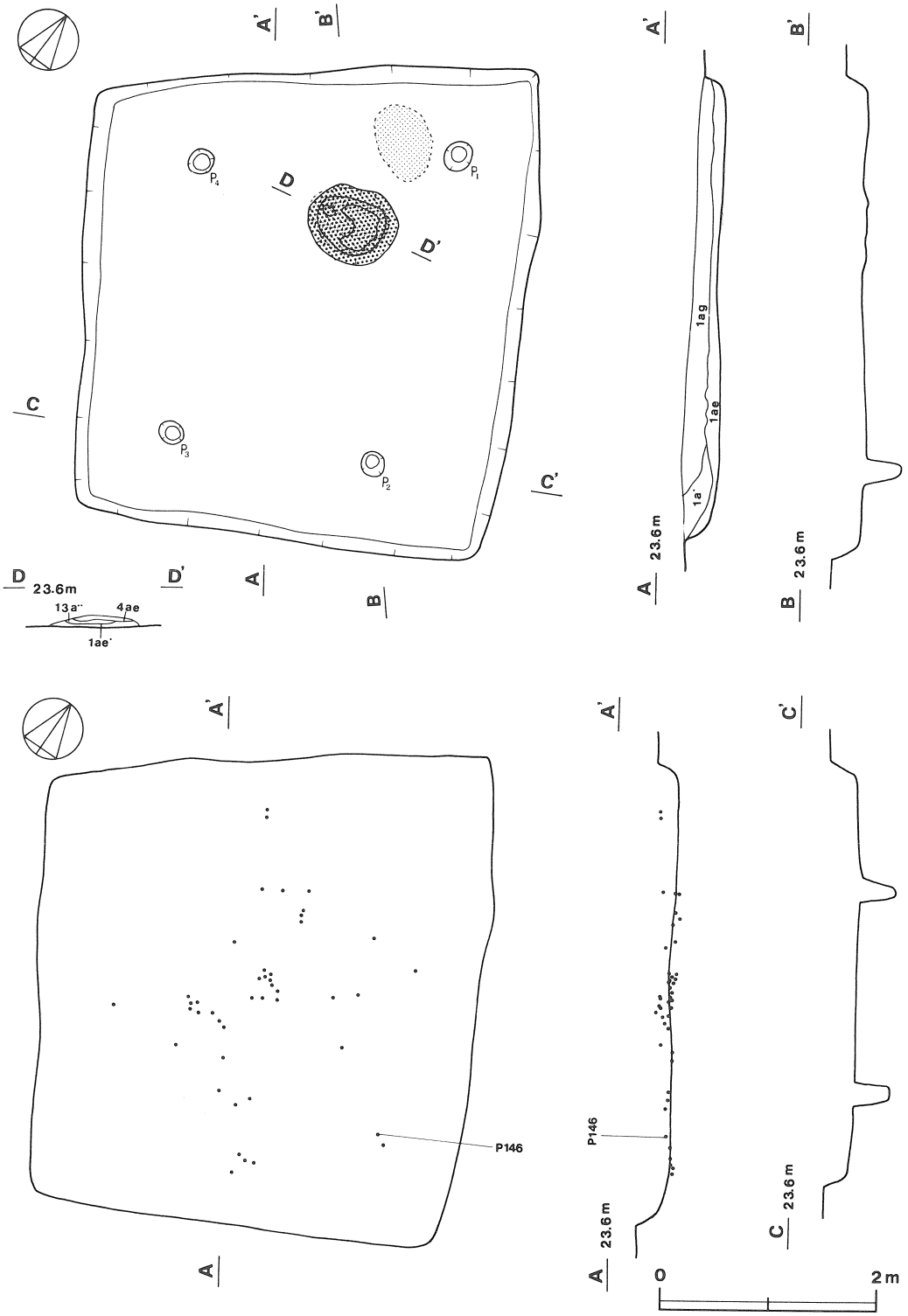
本跡は，調査区の南部K3d$_7$区を中心に確認された住居跡で，第27号住居跡の南西側1.3mに隣接している。

平面形は，長軸4.36m，短軸4.04mの隅丸台形を呈しており，長軸方向は，N－32°－Wを指している。壁は，締まったロームで，北東壁は，ほぼ垂直に，他は外傾して立ち上がっており，壁高は，21～29cmである。床面は，硬くほぼ平坦であるが，南東側が，やや低い。炉の周囲は，特に，硬く踏み固められている。炉は，中央から北側に位置し，長径85cm，短径68cmの楕円形を呈し，床面をわずかに掘りくぼめた地床炉である。炉内には，焼土が充満し，炉床は，ロームが熱を受けてレンガ状に赤く焼け凹凸が激しい。ピットは，4か所検出され，規模や配列からいずれも主柱穴と考えられる。主柱穴は，長径23～30cm，短径21～25cm，深さ36～42cmの規模である。柱穴の間隔は，全体に1.7～2.6mで，特に，P_1とP_2の間が2.6mで最も幅が広い。

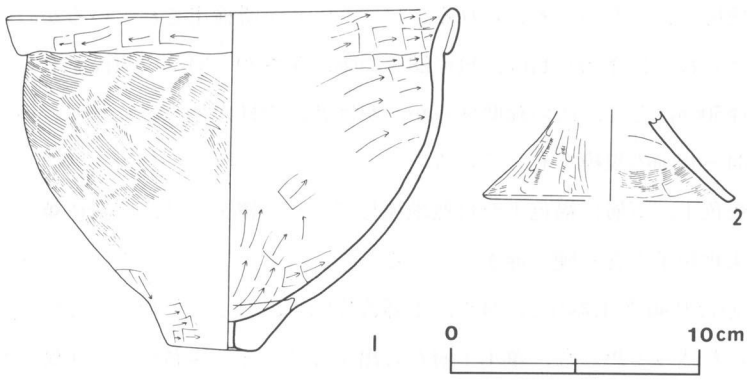
本跡の覆土は，2層からなり，北東壁際に一部攪乱がみられるが，レンズ状に自然堆積している。上層には，極少量の炭化材を含む暗褐色土が，下層には，極少量の焼土粒子を含む褐色土が



第110図　第28号住居跡出土遺物実測図



第111図　第29号住居跡実測図・遺物出土位置図



第112図　第29号住居跡出土遺物実測図

ともに締まりを帯びて堆積している。

遺物は，住居跡の全域にわたり覆土中から縄文土器片781点，土師器片125点が出土している。縄文土器片は，周囲からの流れ込んだものと思われ，覆土上層から出土している。

本跡に伴う土師器片は，住居跡の中央部及び東側に集中して，覆土下層から床面にかけて多く出土している。東側のほぼ床面上から，ほぼ完形の甑形土器（第112図1）が出土している。本跡は，出土遺物から古墳時代の五領期に比定される。

第29号住居跡出土土器

住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第112図 1	甑形土器 土師器	A 18.3 B 13.0 C 3.5	口縁部は複合口縁で，頸部からやや外反して立ち上がる。胴部は内彎しながら底部へ至る。底部に穿孔あり。(1.5cm)	口縁部内・外面共横位ヘラナデ。胴部外面は斜位のハケ目整形，胴下位は横位のヘラナデ。胴部内面は斜位のヘラナデ。	砂粒 橙色 普通	80% P146
2	高坏形土器 土師器	B(3.7) D(10.2)	脚部は「ハ」の字状に開いて裾部に至る。	脚部外面は縦位のヘラ磨き。脚部内面はヘラナデ，下位は横位のハケ目整形。	砂粒 明赤褐色 普通	10% P144

第30号住居跡（第113図）

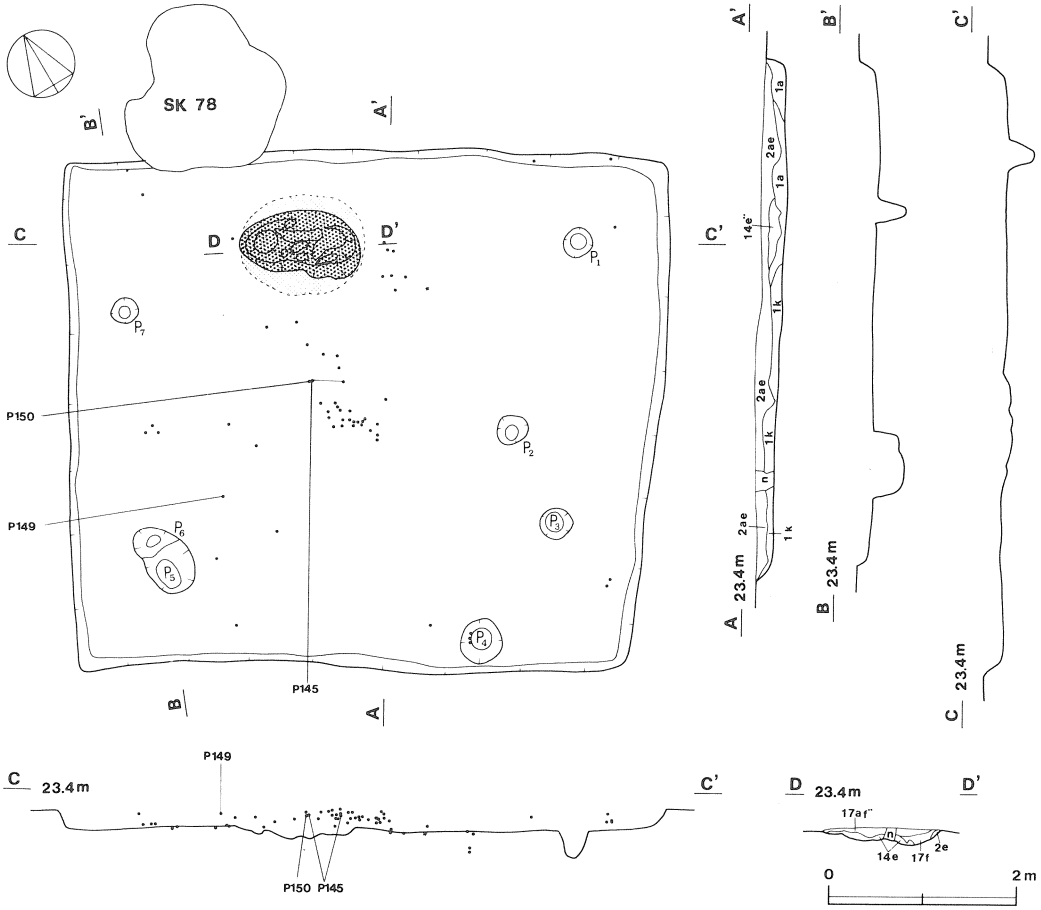
本跡は，調査区の南部K3a_5区中心に確認された住居跡で，第28号住居跡の北西側2.9mに位置している。本跡の，北東壁は，第78号土坑の南西部を切っている。

平面形は，長軸6.25m，短軸5.51mの長方形を呈し，長軸方向は，N－55°－Wを指している。壁は，明瞭で硬く，北西壁，南西壁は，ほぼ垂直に立ち上がるが，北東壁，南東壁は，外傾して立ち上がっている。壁高は，全体的にロームへの掘り込みが浅く，12～20cmである。床面は，硬く踏み固められており，全体的に凹凸が少なく平坦であるが，炉の周辺がわずかに高くなっている。炉は，北側の北東壁寄りのほぼP_1とP_4の間に位置し，長径130cm，短径70cmの長楕円形を呈し，床面を19cmほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉内には，多量の焼土粒子，焼土ブロックを含む暗赤褐色土が充満している。炉床は，レンガ状にロームが焼けて赤化し，

凹凸が激しいので，長期間使用されたものと考えられる。ピットは6か所検出されているが，主柱穴は，P_1・P_3・P_6・P_7と考えられ，長径29～44cm，短径28～33cm，深さ29～34cmの規模を有している。P_5は，長径55cm，短径50cmほどで，P_6の補助柱穴か，かけ替えの柱穴と考えられる。P_2・P_4は，長径37～48cm，短径34～40cmの規模を有している。

本跡の覆土は，上層に暗褐色土，下層に褐色土が自然堆積している。覆土には，少量の焼土粒子，ローム粒子，極少量の炭化粒子を含み硬く締まっている。

遺物は，住居跡の全域にわたり縄文土器片2,094点，土師器片93点，石1点が出土している。縄文土器片は，周囲からの流れ込みと思われ，覆土上層から出土している。本跡に伴う土師器片は，住居跡のほぼ中央部から出土している。半完形の高坏形土器（第114図2），高坏形土器の坏部片（第114図1）が中央部の覆土から，また，器台形土器の脚部（第114図3）が西側の覆土から出土している。本跡は，出土遺物から古墳時代の五領期に比定されるものと思われる。



第113図　第30号住居跡実測図・遺物出土位置図・遺物接合関係図

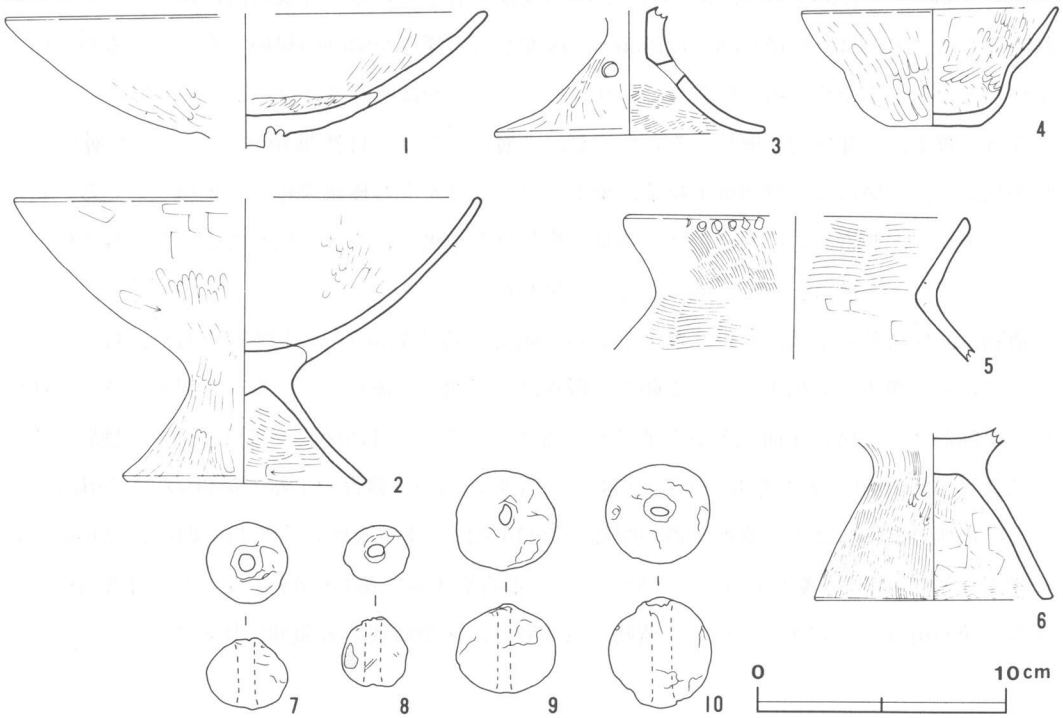
第30号住居跡出土土器

住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第114図 1	高坏形土器 土師器	A(19.5) B(5.5)	坏部は内彎しながら大きく開いて立ち上がる。	内・外面共ヘラ磨き。	砂粒 橙色 普通	10% P150
2	高坏形土器 土師器	A(18.8) B(11.5) D 9.4	坏部はゆるやかに内彎しながら立ち上がり，脚部は「ハ」の字状に開いて裾部に至る。	坏部外面は上位に横ナデ，中位から脚部は縦位のヘラ磨き。坏部内面は縦位のヘラ磨き脚部は横位のハケ目整形。	砂粒 橙色 普通	60% P145
3	器台形土器 土師器	B(5.2) D 10.9	脚部は裾部にむかって開き，裾部でさらに大きく開いている。	脚部外面は縦位のヘラ磨きが一部残る。脚部内面は上位に横位のヘラナデ，下位は横位のハケ目整形。	砂粒 明赤褐色 普通	70% 器受部欠損 摩滅気味 P149
4	埦形 土器 土師器	A 10.3 B 4.7 C 3.7	口縁部は頸部からやや内彎して大きく開き，胴部は平底の底部からほぼ直立気味に内彎して立ち上がっている。	口縁部，体部共内・外面は縦位の丁寧なヘラ磨き。	砂粒 橙色 普通	65% P147
5	甕形 土器 土師器	A(13.6) B(5.8)	口縁部は「く」の字状を呈する頸部よりほぼ直線的に立ち上がる。	口唇部に刺突文が巡る。口縁部外面に斜位のハケ目整形。口縁部内面は横位のハケ目整形。	砂粒 灰褐色 普通	10% P152
6	台付甕形土器 土師器	B(6.6) D 9.6	台部は接合部からやや内彎して開いている。	脚部外面は縦位のハケ目整形。脚部内面は上位に横位のヘラナデ，下位に横位のハケ目整形。	砂粒 にぶい赤褐色 普通	30% P148

土錘解説表（球状土錘）

図版番号	名称	長さ×幅 (cm)	孔径 (cm)	重さ (g)	備考	図版番号	名称	長さ×幅 (cm)	孔径 (cm)	重さ (g)	備考
第114図 7	球状土錘	3.0×3.2	0.7	29	橙色	第114図 9	球状土錘	3.6×4.0	0.4	59	橙色
8	〃	2.9×2.7	0.6	13	橙色	10	〃	4.5×4.2	0.9	61	黒褐色



第114図　第30号住居跡出土遺物実測図

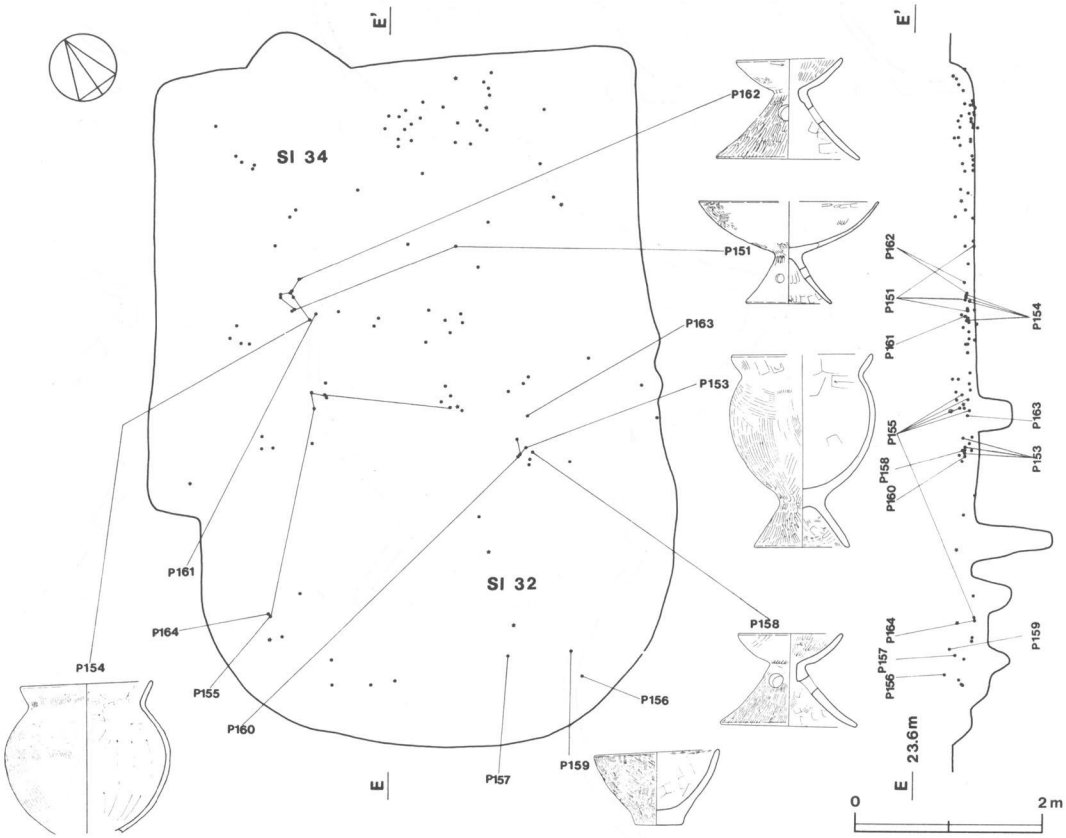
第34号住居跡（第40図）

本跡は，調査区の南部K3b$_1$区を中心に確認された住居跡で，第30号住居跡の南西側8.6mに位置している。本跡の北東壁は，第55号土坑の南西部を切っており，出土遺物からも本跡の方が新しい。また，南西壁は，縄文時代の第32号住居跡の北東部を切っているので本跡の方が新しい。

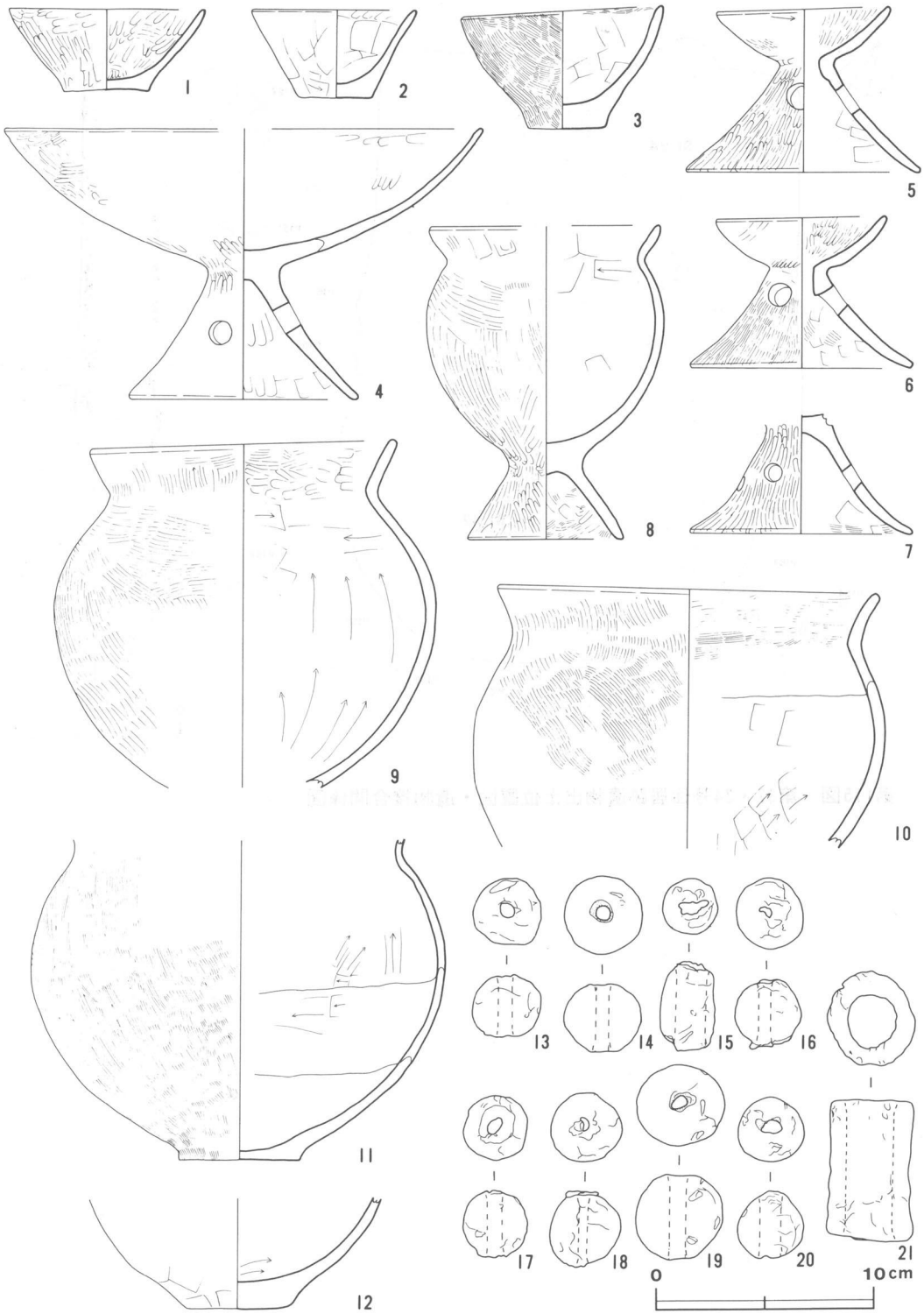
平面形は，長軸5.2m，短軸は推定で4.8mの隅丸長方形を呈しており，長軸方向は，N－56°－Wを指していると思われる。壁は，締まりのあるロームで，ほぼ外傾して立ち上がり，壁高は，18～24cmである。床面はロームが踏み固められて締まっており，全体的に平坦である。炉の周囲は，特に，硬く踏み固められ凹凸が激しい。炉は，中央からやや西側に検出され，第32号住居跡のP$_5$上に構築されている。長径56cm，短径45cmの楕円形を呈し，床面を6～13cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉内には，多量の焼土を含む極暗褐色土が充満し，炉床は，ロームが熱を受けて，レンガ状に硬く焼け凹凸状を呈している。貯蔵穴は，南コーナー部に検出されているが，北壁が攪乱されているため，立ち上がりは不明である。平面形は推定で，長径152cm，短径103cmの不整楕円形を呈しており，床面を28cmほど掘り込んで構築されている。覆土は，上層には，多量のローム粒子を含み締まりのある褐色土が，下層には，極少量のローム大ブロックを含み締まりのある褐色土が自然堆積している。しかし，北側の大部分は攪乱されている。本跡に伴うピットは，P$_1$・P$_3$・P$_4$の3か所が検出されており，規模や配列からいずれも主柱穴と考えられる。主柱穴は，長径39～53cm，短径36～44cm，深さ33～52cmの規模を有している。貯蔵穴内に検出されたピット状の落ち込みのP$_2$は，長径42cm，短径36cm，床面からの深さが54cmの規模を有しているが，他の主柱穴と比べるとやや内側に位置しており主柱穴かどうかは明確ではない。

本跡の覆土は，部分的に攪乱もみられるが，2層からなり，自然堆積している。上層には極暗褐色土が，下層には少量の焼土粒子，焼土小ブロックを含む極暗褐色土が堆積している。特に，やや中央から北側寄りの床面からは，多量の炭化材が中央に向かって倒れたような状態で検出されているので，本跡は，火災に遭ったものと思われる。

遺物は，住居跡の全城にわたり覆土中から，縄文土器片1,589点，土師器片81点，石2点が出土している。覆土から出土している縄文土器片は，周囲から流れ込んだものと思われる。本跡に伴う土師器は，北側の床面直上から半完形の高坏形土器（第116図4），ほぼ床面から甕形土器の大破片（第116図9）及び底部片（第116図12），完形にちかい器台形土器（第116図5）が出土している。南側のほぼ床面から甕形土器の胴部（第116図11）及び大破片（第116図10），高坏形土器の脚部（第116図7），覆土下層から完形にちかい器台形土器（第116図6），半完形の小型台付甕形土器（第116図8）が出土している。遺物から本跡は，古墳時代の五領期に比定される。



第115図　第32・34号住居跡遺物出土位置図・遺物接合関係図



第116図　第34号住居跡出土遺物実測図

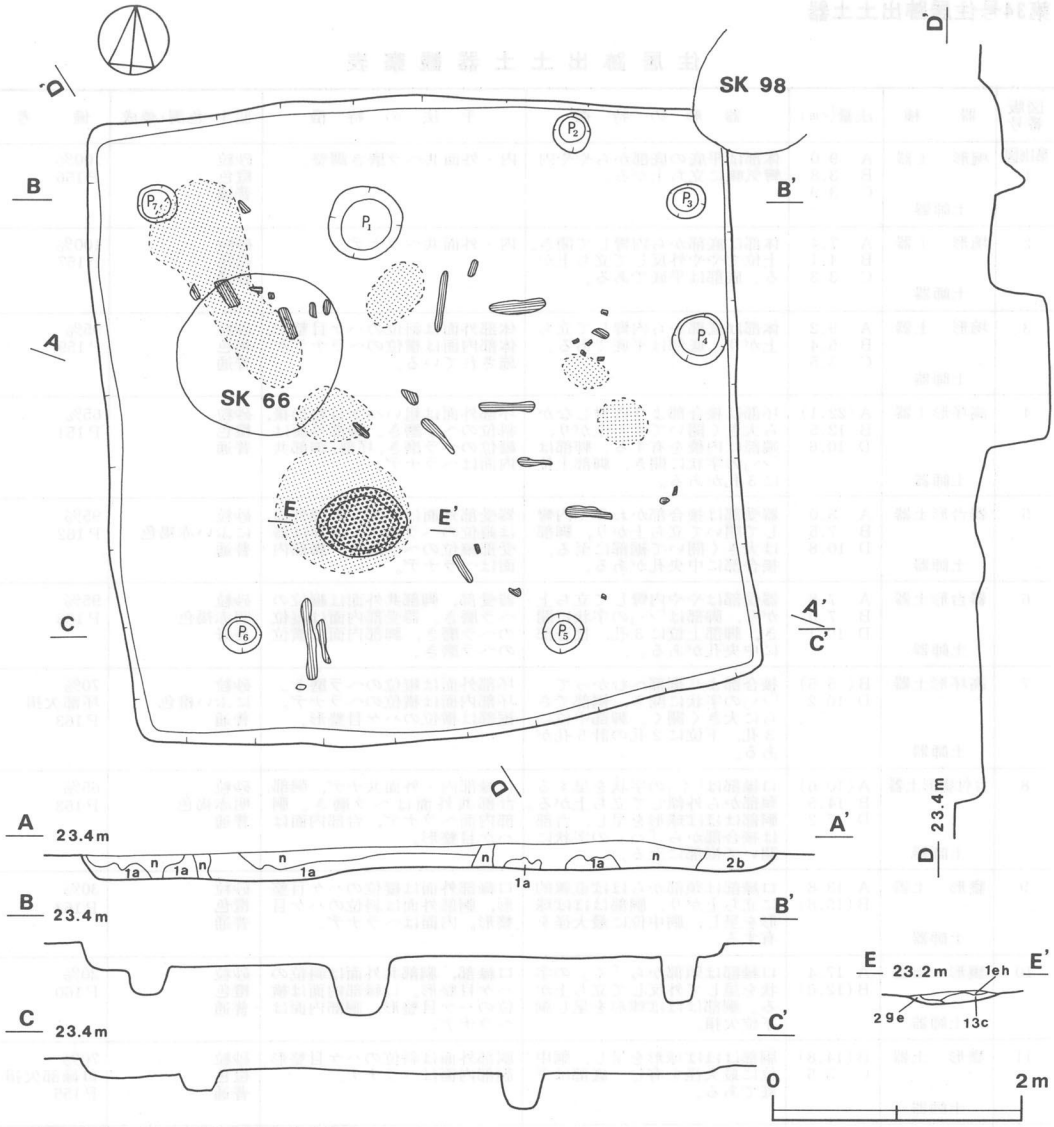
第34号住居跡出土土器

住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第116図 1	埦形 土器 土師器	A 9.0 B 3.8 C 3.9	体部は平底の底部からやや内彎気味に立ち上がる。	内・外面共ヘラ磨き調整。	砂粒 橙色 普通	100% P156
2	埦形 土器 土師器	A 7.4 B 4.1 C 3.3	体部は底部から内彎して開き，上位でやや外反して立ち上がる。底部は平底である。	内・外面共ヘラナデ。	砂粒 橙色 普通	100% P157
3	埦形 土器 土師器	A 9.2 B 5.4 C 3.5	体部は底部から内彎して立ち上がり，底部は平底である。	体部外面は斜位のハケ目整形，体部内面は横位のヘラナデが施されている。	砂粒 褐色 普通	95% P159
4	高坏形土器 土師器	A(22.1) B 12.5 D 10.6	坏部は接合部より内彎しながら大きく開いて立ち上がり，端部に内稜を有する。脚部は「ハ」の字状に開き，脚部上位に3孔がある。	坏部外面は粗いハケ目整形後，斜位のヘラ磨き。脚部外面は縦位のヘラ磨き，坏部，脚部共内面はヘラナデ。	砂粒 橙色 普通	65% P151
5	器台形土器 土師器	A 8.0 B 7.5 D 10.8	器受部は接合部かわやや内彎して開いて立ち上がり，脚部は大きく開いて裾部に至る。接合部に中央孔がある。	器受部外面はナデ，脚部外面は縦位のヘラ磨き。内面は器受部縦位のヘラ磨き，脚部内面はヘラナデ。	砂粒 にぶい赤褐色 普通	95% P162
6	器台形土器 土師器	A 7.8 B 7.0 D 10.1	器受部はやや内彎して立ち上がり，脚部は「ハ」の字状に開き，脚部上位に3孔，接合部に中央孔がある。	器受部，脚部共外面は縦位のヘラ磨き。器受部内面は縦位のヘラ磨き，脚部内面は横位のヘラ磨き。	砂粒 明赤褐色 良好	95% P158
7	高坏形土器 土師器	B(5.5) D 10.2	接合部より裾部へむかって「ハ」の字状に開き，裾部でさらに大きく開く。脚部中位に3孔，下位に2孔の計5孔がある。	坏部外面は縦位のヘラ磨き。坏部内面は横位のヘラナデ。裾部は横位のハケ目整形。	砂粒 にぶい橙色 普通	70% 坏部欠損 P163
8	台付甕形土器 土師器	A(10.6) B 14.5 D 7.2	口縁部は「く」の字状を呈する頸部から外傾して立ち上がる。胴部はほぼ球形を呈し，台部は接合部から「ハ」の字状に開いて裾部に至る。	口縁部内・外面共ナデ，胴部，台部共外面はヘラ磨き。胴部内面ヘラナデ，台部内面はハケ目整形。	砂粒 明赤褐色 普通	65% P153
9	甕形 土器 土師器	A 13.8 B(15.8)	口縁部は頸部からほぼ直線的に立ち上がり，胴部はほぼ球形を呈し，胴中位に最大径を有する。	口縁部外面は縦位のハケ目整形，胴部外面は斜位のハケ目整形。内面はヘラナデ。	砂粒 橙色 普通	30% P163
10	甕形 土器 土師器	A 17.4 B(12.0)	口縁部は頸部から「く」の字状を呈して外反して立ち上がる。胴部はほぼ球形を呈し胴下位欠損。	口縁部，胴部共外面は斜位のハケ目整形。口縁部内面は横位のハケ目整形，胴部内面はヘラナデ。	砂粒 橙色 普通	20% P160
11	甕形 土器 土師器	B(14.8) C 5.5	胴部はほぼ球形を呈し，胴中位に最大径を有し，底部は平底である。	胴部外面は斜位のハケ目整形。胴部内面はヘラナデ。	砂粒 橙色 普通	70% 口縁部欠損 P155
12	甕形 土器 土師器	B(4.9) C 4.8	胴部は底部から内彎して立ち上がり，底部は平底である。	胴部内・外面共ヘラナデ。	砂粒 橙色 普通	20% 摩滅気味 P161

土錘解説表（球状土錘）

図版番号	名称	長さ×幅 (cm)	孔径 (cm)	重さ (g)	備考	図版番号	名称	長さ×幅 (cm)	孔径 (cm)	重さ (g)	備考
第116図 13	球状土錘	2.9×3.1	0.7	32	明赤褐色	第116図 18	球状土錘	3.5×3.2	0.5	39	黒褐色
14	〃	3.1×3.6	0.6	41	黒褐色	19	〃	3.9×4.0	0.7	62	明褐色
15	〃	4.1×2.6	1.4	30	赤褐色	20	〃	3.1×3.0	1.0	28	黒褐色
16	〃	3.1×3.0	0.6	35	黒色	21	〃	6.3×4.1	2.2	125	橙色
17	〃	3.1×2.9	0.7	31	明褐色						



第117図　第35号住居跡実測図

第35号住居跡（第117図）

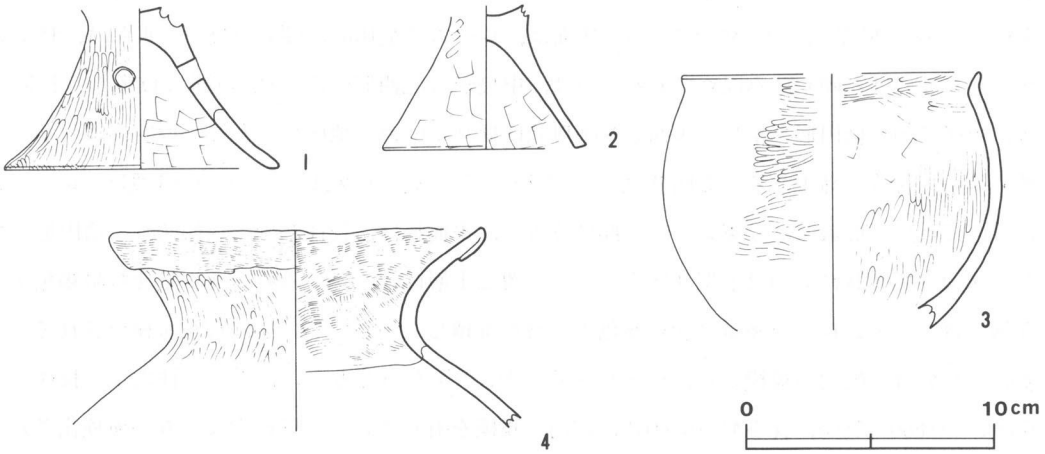
本跡は，調査区の南部J3g₃区を中心に確認された住居跡である。第21号住居跡の南西部2.1mに位置し，本跡の西側で第66号土坑，東コーナー部で第98号土坑と重複している。

平面形は，長軸5.23m，短軸5.13mの方形を呈し，長軸方向は，N－9°－Wを指している。北壁から東壁は締まったロームであるが，南壁から西壁は黒色土混じりで軟らかい。いずれの壁もほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は，5～24cmで，北壁から東壁の部分は，他の壁に比べると5cmほどで，特に低い。床面は，トレンチャーによる耕作のため凹凸がみられ，軟弱である。中央部から壁に向かい，ゆるやかに傾斜し低くなっている。炉の周囲は，若干高くなり，硬く踏み固

められている。炉は，中央から南西側に位置し，長径74cm，短径55cmの楕円形を呈し，床面を深さ７cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉内上層には，極少量の焼土粒子や炭化材を含む褐色土が，下層には多量の焼土粒子を含む赤褐色土が堆積している。炉床は，ロームが熱を受けて，硬く赤化し凹凸状を呈している。ピットは７か所検出され，主柱穴は，P_2・P_5・P_6・P_7の４か所と考えられる。主柱穴の規模は，径32～35cmのほぼ円形を呈し，深さ17～45cmである。出入口は，炉の位置や柱穴の配列などから，P_3とP_4の間が想定される。

本跡の覆土は，大部分が攪乱を受けているため，遺構本来の覆土は，少量のローム粒子を含む褐色土が部分的に10cmほど堆積しているだけである。

遺物は，住居跡の全域の覆土から縄文土器片1,241点，土師器片202点，石１点が出土している。縄文土器片は，周囲から流れ込んだものと思われ，覆土上層から出土している。本跡に伴う土師器片の多くは，住居跡の北側及び南東側に集中し，覆土下層から出土している。本跡は，出土遺物から古墳時代の五領期に比定される。



第118図　第35号住居跡出土遺物実測図

第35号住居跡出土土器

住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第118図 1	高坏形土器 土師器	B(6.55) D 11.0	接合部から大きく開いて裾部に至り，脚部上位に３孔あり。	脚部外面は縦位のヘラ磨き調整。脚部内面は横位のヘラナデ。	砂粒 橙色 普通	50% P166
2	台付甕形土器 土師器	B(5.8) D 8.2	台部は接合部から「ハ」の字状に開いて裾部に至る。	台部内・外面共ヘラナデ。	砂粒 橙色 普通	20% P165
3	埦形 土器	A(11.9) B(10.4)	口縁部はやや外反して立ち上がり，胴部は内彎してすぼまる。	口縁部内・外面は横位のハケ目整形。胴部外面は横位のヘ	砂粒 橙色	20% P168

	土師器			ラ磨き。胴部内面は横位のヘラナデ後，雑なヘラ磨き。	普通	
4	壺形　土器 土師器	A 14.9 B(8.1)	口縁部は複合口縁で，頸部から大きく外反して立ち上がる。	外面は口縁部上位に横位のハケ目整形，中位は縦位のハケ目整形の後縦位のヘラ磨き調整。内面は横位のハケ目整形。	砂粒 橙色 普通	20% 胴部欠損 P172

第37号住居跡（第119図）

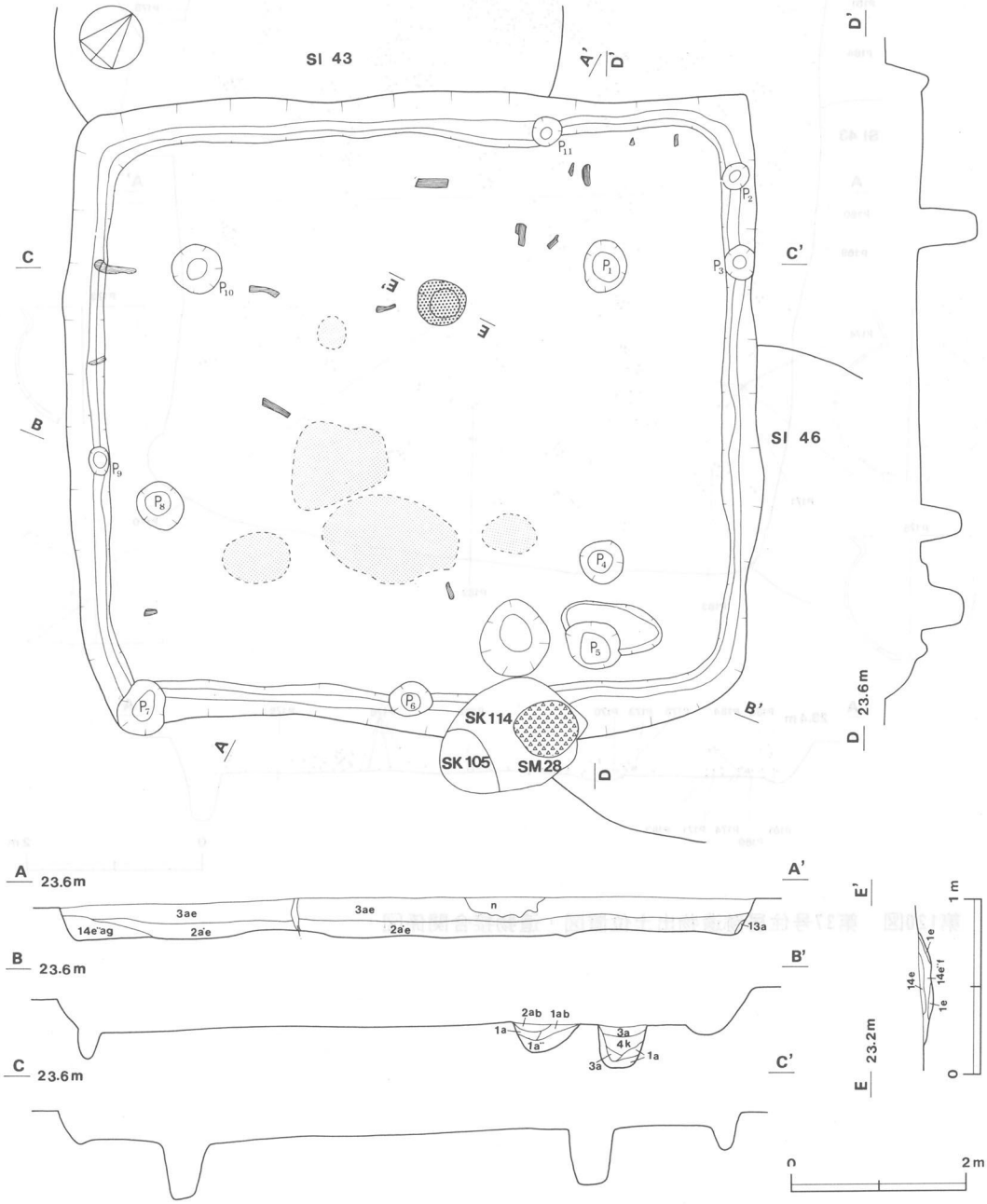
本跡は，講査区の南部J3d$_2$区を中心に確認された住居跡で，第20号住居跡の西側7.4mに位置している。本跡は，北東側で第38号住居跡と接し，東側では第46号住居跡と，北西側では第43号住居跡と重複している。本跡の北東側の壁は，第46号住居跡の床面及び覆土の第17号地点貝塚をも切り，また，本跡の北西壁は，第43号住居跡の床面を切っていることから，本跡は，第46号・第43号住居跡よりも新しい遺構と思われる。

平面形は，長軸7.91m，短軸7.50mの隅丸方形を呈し，長軸方向は，N－48°－Eを指している。壁は，締まりのあるロームであるが，北東壁の中央部から南東壁の一部は，第17号地点貝塚の貝層を切って壁としている。北東壁から南東壁は，ほぼ垂直に立ち上がり，他の壁は外傾して立ち上がっている。壁高は，32～49cmである。床面は，ロームで全体的に硬く中央から東側は，移植ゴテが通らないほど硬く踏み固めてある。炉は，中央から北西側のP_1とP_{10}の間に位置し，長径61cm，短径55cmの楕円形を呈し，床面を7cm皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉内には，多量の焼土粒子を含み，締まりのある暗褐色土が堆積している。炉床は，ロームが熱を受け，レンガ状に焼けて硬い。貯蔵穴は，東コーナー部に位置し，平面形は，長径86cm，短径80cmの楕円形を呈し，床面を擂鉢状に37cmほど掘り込んでいる。覆土上層には，ローム粒子を少量含む暗褐色土が，下層には，ローム粒子を多量に含む褐色土が自然堆積している。ピットは11か所検出されているが，主柱穴は，配列や規模から，P_1・P_4・P_8・P_{10}の4か所と考えられる。主柱穴は，長径52～63cm，短径50～58cm，深さ41～66cmのほぼ同一規模を有している。壁柱穴は，6か所検出されている。P_6・P_7の間は，柱穴の規模がほぼ同一であることや，床面が硬かったことから，出入口として使われたものと思われる。

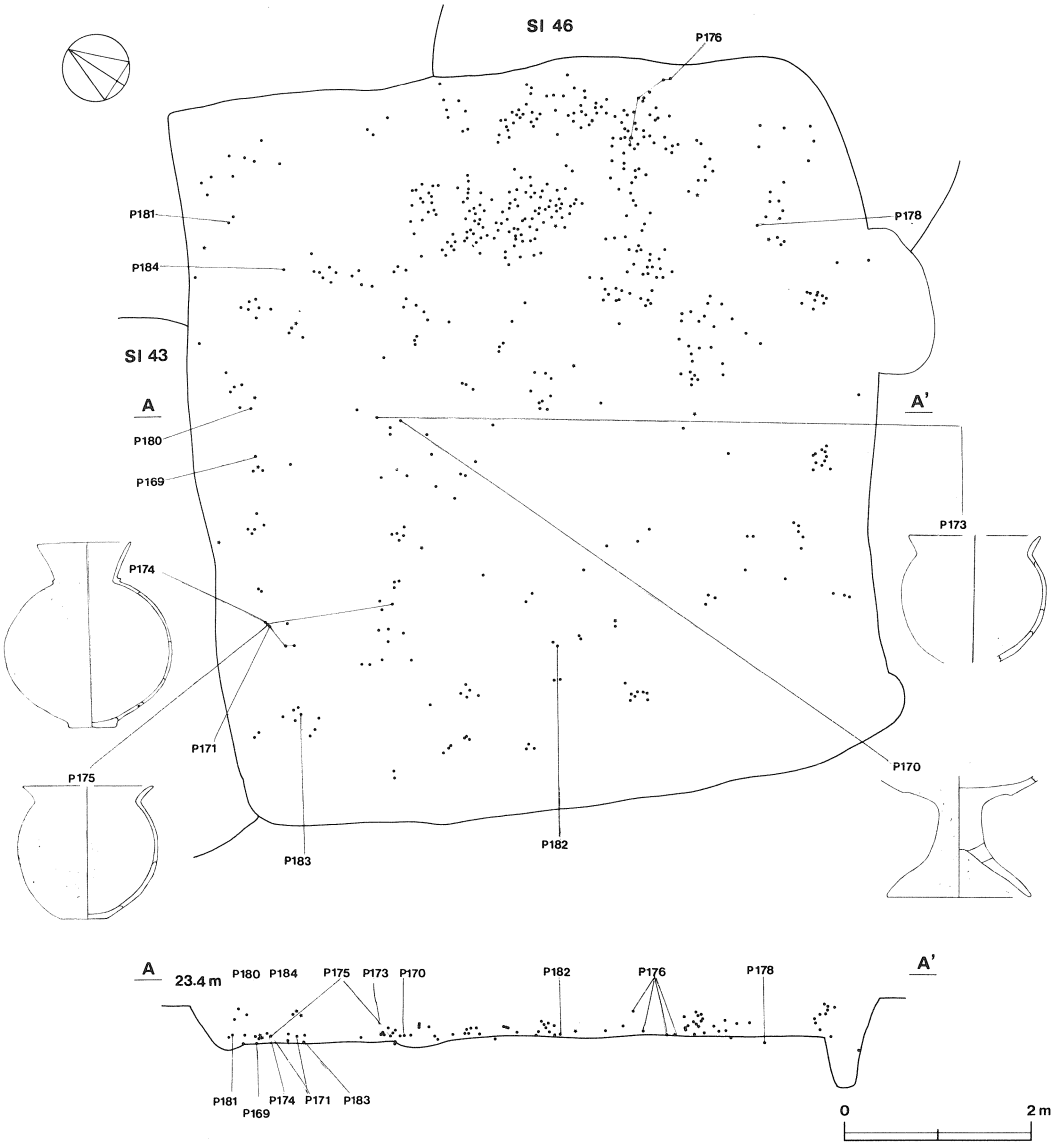
本跡の覆土は，上層に黒褐色土が，下層には暗褐色土が自然堆積している。覆土上層には極少量の焼土粒子，下層には少量の焼土粒子が含まれる。

遺物は，住居跡の東側及び壁際を中心に，土器片20,178点，石5点が出土している。縄文土器片は，周囲から流れ込んだものと思われ，覆土から出土している。本跡に伴う土師器片は，住居跡の北西側及び南東側に集中して，覆土の下層や床面から多く出土している。本跡の北側のほぼ床面から，高坏形土器の脚部片（第121図7），覆土から小型埦形土器（第121図1）の破片が出土している。東側の床面直上から，甕形土器の口縁部片（第121図12），東コーナー壁際のP5覆土から埦形土器（第121図2），南西側のほぼ床面から高坏形土器の脚部（第121図8）が出土してい

る。西側のほぼ床面から甕形土器の口縁部（第121図11），半完形の甕形土器（第121図９），床面直上からも，甕形土器の胴部（第121図13）が正位で出土している。西側の覆土からは，甕形土器の胴部片（第122図15），高坏形土器の坏部（第121図６），半完形の甕形土器（第121図10）が出土している。本跡は，出土遺物から古墳時代の五領期に比定される。



第119図　第37号住居跡実測図

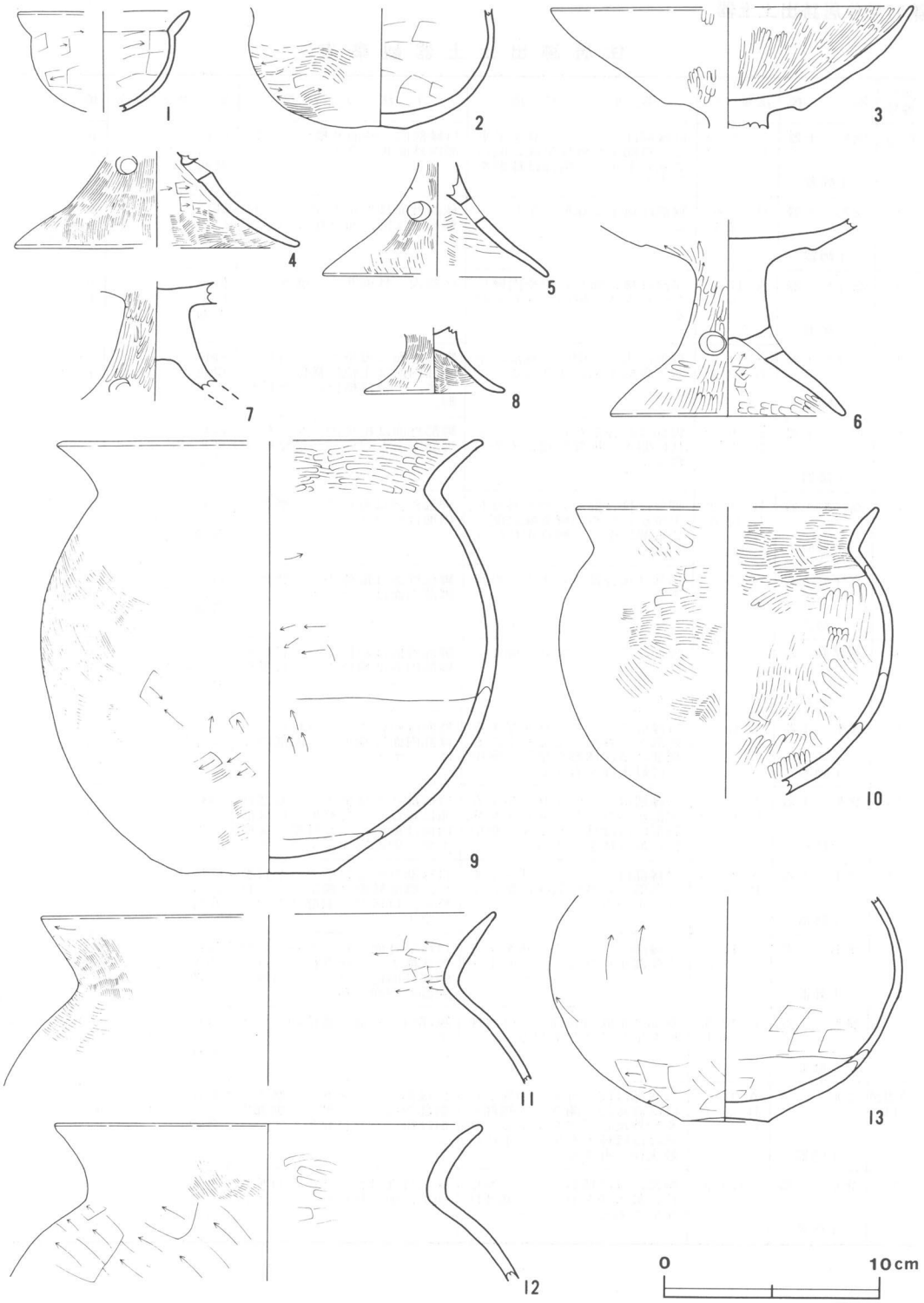


第120図　第37号住居跡遺物出土位置図・遺物接合関係図

第37号住居跡出土土器

住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第121図 1	埦形 土器 土師器	A(8.0) B(4.7)	口縁部は「く」の字状を呈する。頸部より外反気味に開いて立ち上がり，胴部は球形を呈する。	口縁部内・外面共横ナデ，胴部内外面共ヘラナデ。	砂粒 にぶい赤褐色 普通	10% P181
2	埦形 土器 土師器	B(5.6) C 2.4	胴部は扁平な球形を呈している。	体部外面は不正方向のハケ目整形。体部内面は横位のヘラナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	80% P178
3	高坏形土器 土師器	A(17.0) B(5.4)	坏部は接合部からやや内彎しながら大きく開いて立ち上がる。	坏部内・外面共ヘラ磨き。	砂粒 にぶい赤褐色 普通	40% P180
4	高坏形土器 土師器	B(4.5) D(13.2)	脚部は大きく開いて裾部に至る。脚部上位に3孔ある。	脚部外面は縦位のハケ目整形。脚部内面は上位に横位のヘラナデ，下位は横位のハケ目整形。	砂粒 橙色 普通	60% P179
5	器台形土器 土師器	B(5.3) D(10.5)	脚部は接合部から「ハ」の字状に開き，裾部先端はやや内彎する。	脚部外面は縦位のハケ目整形，脚部内面も粗いハケ目整形後ヘラナデ。	砂粒 にぶい赤褐色 普通	20% P177
6	高坏形土器 土師器	B(9.2) D 11.0	脚部は接合部からやや外反し，中位からやや内彎気味に開いて裾部に至る。脚部中位に3孔ある。	脚部外面は縦位のヘラ磨き。内面はヘラナデ。	砂粒 にぶい赤褐色 普通	35% P170
7	高坏形土器 土師器	B(5.6)	脚部は接合部から大きく外反する。	脚部外面は縦位のヘラ磨き。脚部内面はヘラナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	20% 脚部中位以下欠損 P184
8	高坏形土器 土師器	B(3.1) D 6.5	脚部は「く」の字状に開く。	脚部外面は斜位のハケ目整形。脚部内面は横位のハケ目整形。	砂粒 にぶい褐色 普通	60% P182
9	甕形 土器 土師器	A(19.7) B 18.2 C 6.7	口縁部は「く」の字状を呈する頸部から外反して立ち上がる。胴部はほぼ球形を呈し，胴中位に最大径を有する。	外面は斜位のハケ目整形。口縁部内面は横ナデ，胴部内面はヘラナデ。	砂粒 明赤褐色 普通	70% P175
10	甕形 土器 土師器	A(13.9) B(13,5)	口縁部は「く」の字状を呈する頸部から外反して立ち上がり，胴部はほぼ球形を呈す。胴中位に最大径を有する。	口縁部外面は横ナデ，胴部外面は雑なハケ目整形。口縁部内面は横位のハケ目整形後横ナデ。胴部内面はヘラナデ。	砂粒 にぶい赤褐色 普通	60% P173
11	甕形 土器 土師器	A(21.0) B(8.0)	口縁部は「く」の字状を呈する頸部から外反気味に開いて立ち上がる。	口縁部外面は斜位のハケ目整形，脚部外面は横位のハケ目整形，口縁部，胴部共内面はヘラナデ。	砂粒 にぶい褐色 普通	10% P183
12	甕形 土器 土師器	A 19.7 B(7.2)	口縁部は「く」の字状を呈する頸部から外反して立ち上がる。	口縁部外面は斜位のハケ目整形後横ナデが施されている。胴部外面はヘラナデ。口縁部，胴部共内面は横ナデ。	砂粒 明赤褐色 普通	10% P176
13	甕形 土器 土師器	B(10.5) C 4.1	胴部は平底の底部からほぼ球形を呈して立ち上がる。	胴部内・外面共横位のヘラナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	60% P169
第122図 14	壺形 土器 土師器	A 14.2 B 28.1 C 7.2	口縁部は段を有する頸部からほぼ直線的に開き，先端部ぜやや外反して立ち上がる。胴部はほぼ球形を呈し，中位に最大径を有する。	口縁部内・外面共ヘラ磨き。胴部外面はヘラ磨き。胴部内面は粗いハケ目整形。	砂粒 にぶい橙色 普通	60% P174
15	甕形 土器 土師器	B(21.9) C 7.7	胴部はほぼ球形を呈し，胴中位に最大径を有する。底部は平底である。	胴部外面は斜位のハケ目整形。胴部内面は横位のヘラナデ。	砂粒 褐色 普通	20% P171



第121図　第37号住居跡出土遺物実測図 (1)

第122図　第37号住居跡出土遺物実測図（2）

土錘解説表（球状土錘）

図版番号	名　称	長さ×幅（cm）	孔径（cm）	重さ（g）	備　考	図版番号	名　称	長さ×幅（cm）	孔径（cm）	重さ（g）	備　考
第122図 16	球状土錘	2.8×2.6	0.6	(19)	暗赤褐色	第122図 18	球状土錘	2.7×2.5	0.6	(14)	明赤褐色
17	〃	2.8×2.8	0.5	(12)	明赤褐色						

4　平安時代

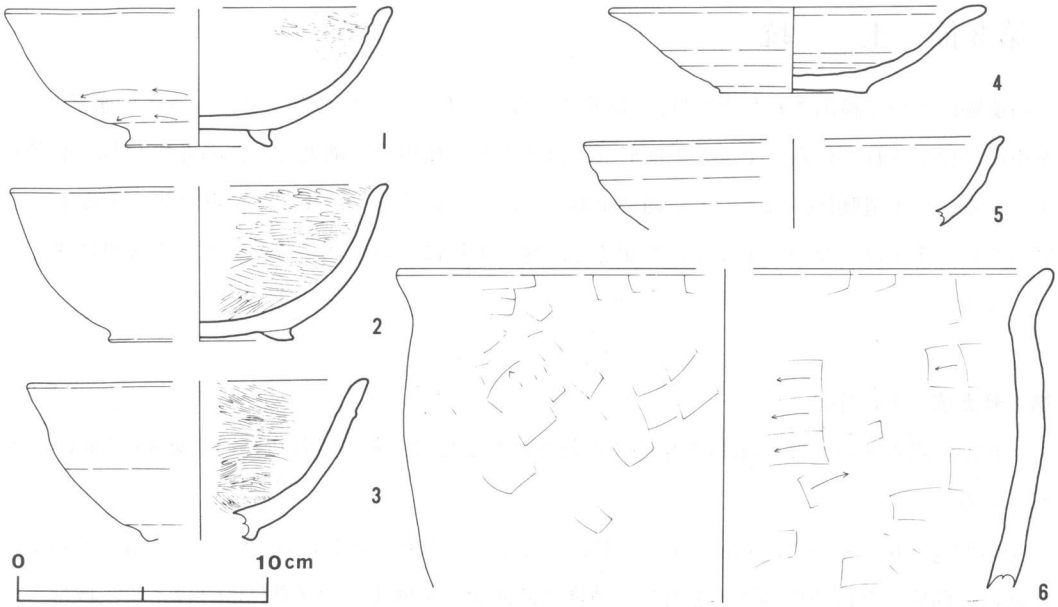
第23号住居跡（第107図）

本跡は，調査区の南部K3d$_8$区を中心に確認された住居跡で，第22号住居跡の南西側2.2mに位置している。本跡は，古墳時代前期の第27号住居跡の中央部を切って重なるように構築されており，出土遺物等からも本跡の方が新しい。また，本跡が構築された時に第42号土坑も切っており，本跡の方が新しい。

平面形は推定で，長軸4.9m，短軸4.28mの隅丸長方形を呈しており，主軸方向は，N－69°－Wを指していると思われる。壁は，本跡と第27号住居跡が重複しているため，部分的にしか確認できなかった。壁高は，19～25cmで外傾して立ち上がっている。本跡の床面は，東，南，西の各コーナー部によく残っているが，第27号住居跡の床面よりは若干高く，硬く締まっている。中央部は，第27号住居跡の大部分と重複されていたと思われる。貯蔵穴は，南コーナー部に確認され，平面形は，長径113cm，短径54cmの楕円形を呈しており，２段に掘り込んで，深さは30cmほどの規模で，底面は，硬く平坦である。貯蔵穴の覆土は，褐色を主体に堆積し，覆土には，上層にロローム粒子を，下層に焼土粒子を含み締まっている。ピットは，４か所検出され，P_1～P_4は規則性と規模から，いずれも主柱穴と考えられる。規模は，直径27～32cmの円形を呈し，深さ30～43cmである。

本跡の覆土は，自然堆積の状態を示し，焼土ブロックを少量，炭化物を極少量含む軟らかい黒褐色土が主に堆積している。カマドは，南東壁中央部に付設され，長さ105cm，幅56cm，焚口部幅23cmで袖部は砂粒を含んだオリーブ褐色の粘土で構築されている。煙道部は，南東壁を34cmほど掘り込み，火床は，長径53cm，短径27cmの楕円形を呈し，床面を５cm掘りくぼめている。奥壁は，ゆるやかに外傾して立ち上がっている。

本跡及び第27号住居跡より出土した遺物は，土器片706点，石３点である。土器片のほとんどは縄文土器片で，周囲からの流れ込んだものと思われる。本跡に伴う遺物は少なく，土師器片はわずかに13点のみである。中央部のほぼ床面から半完形の坏形土器（第123図４），高台付坏形土器の坏部片（第123図３），半完形の高台付坏形土器（第123図1）が，西側コーナー部の覆土中層から甕形土器の大破片（第123図6）が出土している。本跡は，出土遺物から平安時代の中葉に比定されるものと思われる。



第123図　第23号住居跡出土遺物実測図

第23号住居跡出土土器

住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第123図 1	高台付坏形土器 土師器	A(15.6) B 5.6 C 5.8	体部は底部より内彎して立ち上がり，端部で丸味を帯びている。外面底部は静止糸切りで高台が付けられている。	体部外面は上位に横ナデ，下位に回転ヘラ削り。体部内面は丁寧なヘラ磨き。	砂粒 にぶい橙色 普通	40% 内面黒色処理 P118
2	高台付坏形土器 土師器	A(15.2) B(6.2) C(7.2)	体部は底部より内彎し，口縁部先端は外反して立ち上がる。高台は「ハ」の字状に開いている。	体部外面は横ナデ。体部内面は丁寧なヘラ磨き。	砂粒 にぶい橙色 普通	30% 内面黒色処理 P116
3	高台付坏形土器 土師器	A(13.4) B(6.5) C(4.0)	体部下位は底部よりやや内彎し，中位からほぼ直線的に立ち上がる。口縁部先端はやや外反して尖っている。	体部外面は横ナデ，体部内面は丁寧なヘラ磨き。	砂粒 にぶい橙色 普通	20% 内面黒色処理 P122
4	坏形　土器 土師器	A 15.2 B 3.5 C 5.9	体部は底部よりやや内彎して立ち上がり，口縁部は大きく外反し，端部は丸くおさめている。底部は上げ底状を呈している。	体部内・外面共横ナデ。底部は回転糸切り。	砂粒 橙色 普通	60% P117
5	坏形　土器 土師器	A(16.8) B(3.6)	坏部片で体部はゆるやかに内彎して立ち上がり，口縁部先端はやや外反して立ち上がる。	体部は内・外面共横ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	10% P121
6	甕形　土器 土師器	A(26.1) B(13.0)	口縁部は頸部からやや外反して開き，胴部はほぼ筒状を呈している。	口縁部内・外面共横ナデ，胴部外面は斜位のヘラナデ，胴部内面は横位のヘラナデ。	砂粒 明赤褐色 普通	10% P119

第3節　土　　坑

当遺跡において検出された土坑は，113基である。これらの土坑の多くは，調査区の南部J３区を中心に検出されている。土坑の平面形は，ほぼ円形，楕円形，隅丸方形，隅丸長方形，不定形を呈する。出土遺物は，ほとんどが縄文土器片で，量的に少なく，また，時期を決定するような底面からの出土は少ない。主な土坑を記述し，他の土坑については一覧表をもって説明に代えることにする。

第２号土坑（第124図）

本跡は，調査区の北部H3g_6区を中心に確認された土坑で，第１号住居跡の北東側6.5ｍに位置している。

平面形は，長径1.85ｍ，短径1.57ｍの楕円形を呈し，長径方向は，N－85°－Eを指している。坑底は，西側で２段の掘り込みを有し，遺構確認面から坑底までの深さは60cmほどで，段部の底面までの深さは20cmほどである。壁は，外傾して立ち上がっている。底面は，ハードロームで平坦である。

覆土は，３層からなり，上層はローム粒子，炭化物を少量含む褐色土，下層はローム粒子を多量含む褐色土が自然堆積している。

遺物は，中央部の覆土上層から土器片476点が出土している。土器片は，縄文時代中期の加曽利Ｅ期に比定されるものと思われる。

第10号土坑（第124図）

本跡は，調査区の東側I4i_5区を中心に確認された土坑で，第13号住居跡の東側8.7ｍに位置している。

平面形は，長径1.63ｍ，短径1.36ｍの楕円形を呈し，長径方向は，N－１°－Wを指している。遺構確認面から坑底までの深さは，33cmである。底面は，ロームが硬く締まり平坦である。

覆土は，４層からなり，上層は極少量のローム粒子を含む褐色土，下層は少量のローム粒子を含む褐色土が自然堆積している。

遺物は，覆土上層から中層にかけて土器片77点，石２点が出土している。土器片の大半は，縄文時代中期の加曽利Ｅ期に比定されるものと思われる。

第16号土坑（第125図）

本跡は，調査区のほぼ中央部I3d_3区を中心に確認された土坑である。本跡は，第12号住居跡内

の中央から北西寄りで重複している。

平面形は，長径1.23m，短径1.10mの楕円形を呈し，長径方向は，N－21°－Eを指している。遺構確認面から坑底までの深さは，65cmである。壁は，東側が外傾して立ち上がっているが，他の壁は，ほぼ垂直に立ち上がっている。底面は，ロームが硬く締まり平坦である。

覆土は，3層からなり，上層は極少量のローム小ブロックを含む暗褐色土，中層から下層にかけては，ローム粒子を少量含む褐色土が自然堆積している。

遺物は，覆土上層から土器片5点，石棒1点，石4点が出土している。土器片は，縄文時代中期の加曽利E期に比定されるものと思われる。

第45号土坑（第127図）

本跡は，調査区の南部J3j_2区を中心に確認された土坑で，第44号土坑の南西側3.6mに位置している。

平面形は，長径1.15m，短径0.47mの不定形を呈し，長径方向は，N－15°－Wを指している。遺構確認面から坑底までの深さは，41cmほどであり，坑底は2段になり，段部から底面までの深さは，34cmほどである。壁は，外傾して立ち上がっている。底面は，ロームが硬く締まっている。

覆土は，3層からなり，上層は炭化粒子，焼土粒子を極少量含む極暗褐色土，中層は炭化粒子を極少量含む暗褐色土，下層はロームブロックを少量含む褐色土が自然堆積している。

遺物は，覆土中から土師器片が15点出土している。

第47号土坑（第127図）

本跡は，調査区の南部K3c_6区を中心に確認された土坑である。本跡は古墳時代の第28号住居跡内のほぼ中央部に検出され，出土遺物から本跡の方が古いものと思われる。

平面形は，長径1.30m，短径1.21mの楕円形を呈し，長径方向は，N－28°－Wを指している。遺構確認面から坑底までの深さは68cmで，壁は，ほぼ垂直に立ち上がっている。底面は，ハードロームで平坦である。

覆土は，3層からなり，上層は焼土粒子，炭化粒子を極少量含む暗褐色土，中層はローム粒子，炭化粒子を極少量含む褐色土，下層はローム粒子，焼土粒子，炭化粒子を少量含む褐色土がレンズ状に自然堆積している。

遺物は，ほぼ中央部の覆土上層から中層にかけて土器片179点が出土している。土器片は，縄文時代中期の加曽利E期に比定されるものと思われる。

第48号土坑（第127図）

本跡は，調査区の南部K3b_6区を中心に確認された土坑である。本跡は，古墳時代の第28号住居跡内の中央からやや北西寄りに検出され，本跡の上面に第28号住居跡の炉が構築されており，出土遺物等からも本跡の方が古いものと思われる。

平面形は，長径1.55m，短径1.37mの楕円形を呈し，長径方向は，N－16°－Eを指している。遺構確認面からの坑底までの深さは，103cmほどである。壁は，西側がほぼ垂直に，他の壁は，袋状に立ち上がっている。底面は，ハードロームで平坦である。

覆土は，4層からなり，上層は少量のローム粒子，極少量のローム粒子を含む褐色土，中層は少量のローム粒子，極少量の炭化粒子を含む褐色土が，下層は多量のローム粒子，少量のロームブロックを含む褐色土が自然堆積している。

遺物は，中央から東側寄りの覆土中層から下層にかけて土器片335点が出土している。土器片は，縄文時代加曽利E期に比定されるものと思われる。

第63号土坑（第129図）

本跡は，調査区の南部J2i_8区を中心に確認された土坑で，第32号住居跡の北西側15.8mに位置している。

平面形は，長径1.48m，短径1.29mの不整楕円形を呈し，長径方向は，N－35°－Eを指している。遺構確認面から坑底までの深さは，70cmで，壁は，南西側がほぼ垂直に，他は，外傾して立ち上がっている。底面は，ハードロームで硬く平坦である。

覆土は，3層からなり，上層にはローム粒子，焼土粒子，炭化粒子を極少量含む暗褐色土が，中層にはローム粒子，焼土粒子，炭化粒子を極少量含む褐色土が，下層にはローム粒子を少量含む褐色土が自然堆積している。

遺物は，中央からやや南西側のほぼ床面から，縄文土器片の上に，ほぼ完形の深鉢形土器が正位で出土している。深鉢形土器及び土器片は，縄文時代中期の加曽利E期に比定されるものと思われる。

第88号土坑（第130図）

本跡は，調査区の中央部I3i_1区を中心に確認された土坑で，第39号住居跡の北西側4.2mに位置している。

平面形は，径0.87mのほぼ円形を呈している。遺構確認面から坑底までの深さは，60cmであり，壁は，ほぼ垂直に立ち上がっている。底面は，ハードロームで平坦である。

覆土は，4層からなり，上層は焼土粒子を極少量含む極暗褐色土，中層は焼土粒子，炭化粒

子を少量含む暗褐色土，下層はローム粒子を少量含む褐色土がレンズ状に自然堆積している。

遺物は，北側の覆土上層から土器片580点が出土している。出土遺物は，縄文時代後期前葉に比定されるものと思われる。

第97号土坑（第130図）

本跡は，調査区の中央部I3j_4区を中心に確認された土坑で，第41号住居跡の南東側0.3mに位置している。

平面形は，径1.01mのほぼ円形を呈している。遺構確認面から坑底までの深さは46cmで，壁は，外傾して立ち上がっている。底面は，ハードロームで硬く平坦である。

覆土は，3層からなり，上層には極少量のローム小ブロックを含む暗褐色土が，下層には少量のローム粒子を含む暗褐色土が，壁際には，少量のローム粒子を含む褐色土が自然堆積している。

遺物は，中央部のほぼ底面から，大型の深鉢形土器が横位で出土し，また，その南東側に接して，大型の深鉢形土器の破片が出土している。深鉢形土器及び土器片は，縄文時代後期初頭に比定されるものと思われる。

第102号土坑（第131図）

本跡は，調査区の中央部I3i_2区に確認された土坑で，第101号土坑の南側1.3mに位置している。

本跡は，南東側で，第134号土坑と重複し，同じく南東側で第127号土坑，西側で第116号土坑と接しているが新旧関係は不明である。また，覆土上層の南側に第4号地点貝塚，北西側に第27号地点貝塚が形成されており，本跡廃絶後貝殻の投棄が行われたものと思われる。

平面形は，長径3.36m，短径3.08mの楕円形を呈し，長径方向は，N－57°－Eを指している。遺構確認面からの深さは，70cmほどである。壁は，ほぼ垂直に立ち上がっている。底面は，ハードロームで平坦である。本跡の中央部に長径0.33m，短径0.30mの楕円形を呈し，深さ69cmのピットが検出されている。

覆土は，上層にローム粒子を少量含む黒褐色土が，下層にローム粒子，ローム小ブロックを少量含む褐色土が北東側から流入した状態で自然堆積している。

遺物は，覆土上層から土器片259点が出土している。土器片の大半は，縄文時代後期前葉に比定されるものと思われる。

第127号土坑（第133図）

本跡は，調査区の中央部I3i_2区を中心に確認された土坑で，第39号住居跡の北壁の一部を切って重複している。

平面形は，長径1.40m，短径1.23mの楕円形を呈し，長径方向は，N－75°－Eを指している。遺構確認面から坑底までの深さは，120cmほどである。壁は，ほぼ垂直に立ち上がっている。底面は，ハードロームで硬く平坦である。

覆土は，上層から中層にかけてヒメシラトリを主体にハマグリ，シオフキ等を含む混土貝層が堆積し，下層にはローム粒子を多量，貝片を極少量含む軟らかい褐色土が堆積している。

遺物は，多量の自然遺物の他に，土器片83点が出土している。土器片は，縄文時代の後期前葉に比定されるものと思われる。

表2　土　坑　一　覧　表

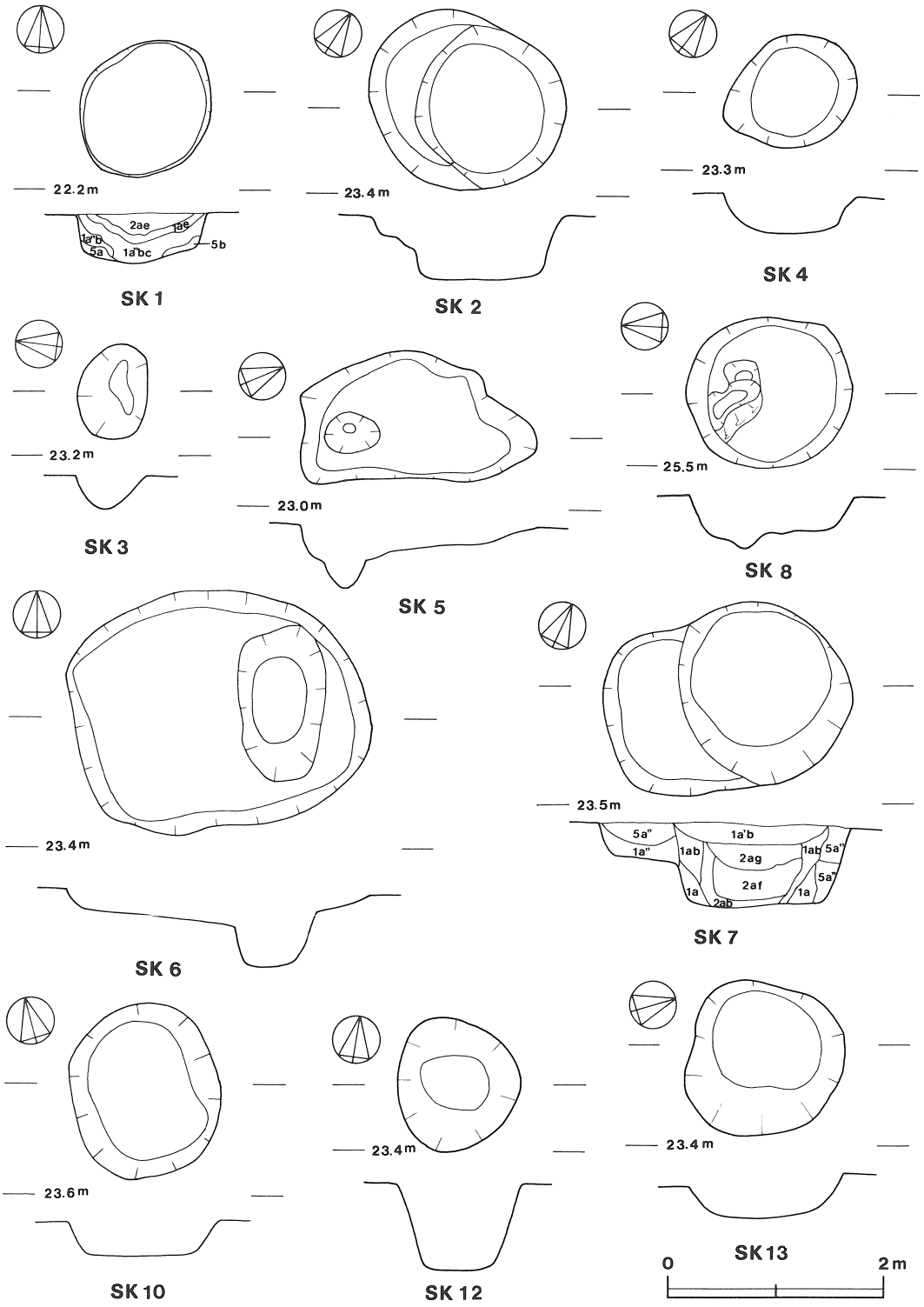
(1)

土坑番号	位置	長径方向（長軸方向）	平面形	規模 長径×短径(m)	規模 深さ(cm)	壁面	底面	覆土	形態	出土遺物	備考	図版番号
SK-1	G3d_5	N－43°－E	楕円形	1.38×1.21	30	垂直	平坦	自然	IIA_2a	縄文土器片7点		124
2	H3g_7	N－85°－E	楕円形	1.87×1.57	62	外傾	平坦	自然	IIA_2b	縄文土器片476点		124
3	H3e_9	N－87°－E	楕円形	0.88×0.65	34	ゆるやかに立ち上がる	皿状	自然	IIB_1a			124
4	H3g_8	N－31°－E	楕円形	1.3 ×1.06	36	垂直	平坦	自然	IIA_2a	縄文土器片4点		124
5	H3f_3	N－34°－E	不定形	2.24×1.21	35	ゆるやかに立ち上がる	ゆるい起伏	自然	VB_3a			124
6	I4c_2	N－75°－W	楕円形	2.89×2.13	33	ゆるやかに立ち上がる	皿状	自然	IIB_3a	縄文土器片19点		124
7	I4f_1	N－61°－E	楕円形	2.31×1.7	80	外傾	平坦	自然	IIA_3b	縄文土器片131点		124
8	I3f_0		円形	1.53×1.42	52	外傾	ゆるい起伏	自然	IB_2b	縄文土器片11点		124
10	I4i_5	N－1°－W	楕円形	1.63×1.36	33	外傾	平坦	自然	IIB_2a	縄文土器片77点		124
12	I3b_8		円形	1.25×1.15	80	外傾	平坦	自然	IA_2b	縄文土器片28点		124
13	I3e_1	(N-60°-W)	楕円形	(1.60)×1.38	45	ゆるやかに立ち上がる	皿状	不明	IIB_2b		馬骨出土	124
14	I3h_4	N－1°－E	楕円形	1.92×1.63	90	外傾	平坦	自然	IIA_2b	縄文土器片475点	SI-11	125
15	I3j_8	N－38°－E	隅丸長方形	2.56×0.93	45	外傾	平坦	自然	IVA_3a	縄文土器片21点	SI-12	125
16	I3d_3		円形	1.23×1.10	65	外傾	平坦	自然	IA_2b	縄文土器片5点	SI-12	125
17	I3e_3		円形	1.05×1.00	55	垂直	平坦	自然	IA_2b	縄文土器片25点	SI-17 P 1	125
18	J3f_9	N－41°－W	不定形	2.10×1.62	30	外傾	ゆるい起伏	自然	VB_3a	縄文土器片139点	P 1	125
19	J3i_7		円形	1.12×1.12	167	垂直	平坦	自然	IA_2c	縄文土器片53点	SI-18	125
20	J3f_6		円形	1.26×1.15	65	外傾	平坦	自然	IA_2b	縄文土器片9点	SI-19	125
21	J3d_6	N－0°	楕円形	1.36×1.15	99	外傾	平坦	自然	IIA_2b	縄文土器片50点 土師器片3点	SI-20	125
22	J3d_6		円形	1.24×1.18	68	外傾	平坦	自然	IA_2b	縄文土器片38点 土師器片35点	P 1 SI-20	125
23	J3d_5	N－30°－E	楕円形	1.32×(1.13)	84	外傾	平坦	自然	IIA_2b	縄文土器片13点	SI-20 SK-26	126

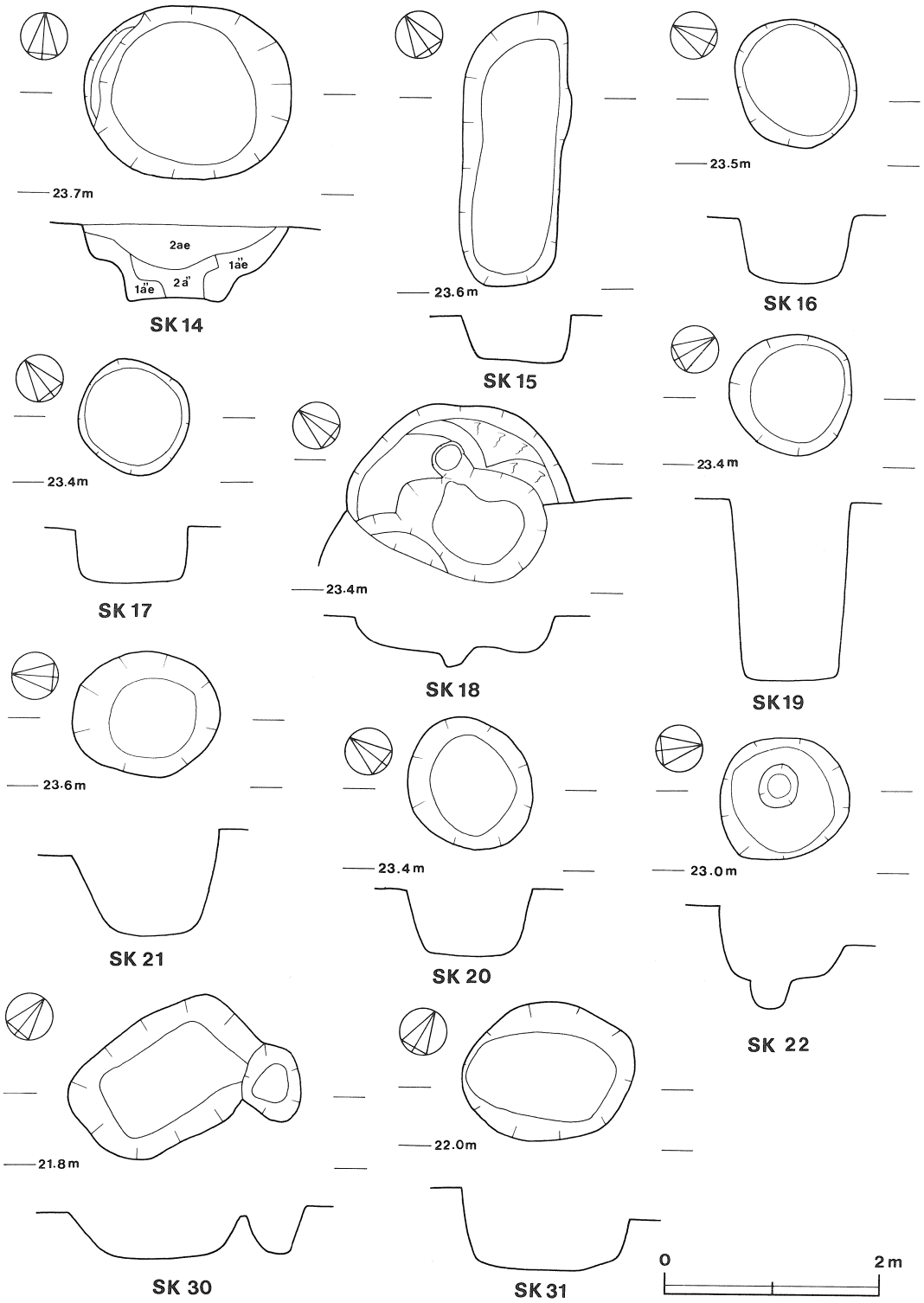
土坑番号	位置	長径方向(長軸方向)	平面形	規模 長径×短径(m)	規模 深さ(cm)	壁面	底面	覆土	形態	出土遺物	備考	図版番号
SK-24	J3c5	N－36°－W	楕円形	1.80×1.70	89	外傾	平坦	自然	IIA2b	縄文土器片242点	SI-20 P 1	126
26	J3c5	N－18°－E	不定形	1.37×1.15	203	外傾	皿状	不明	VA3c	縄文土器片44点		126
27	J2c4	N－60°－W	隅丸長方形	3.56×2.50	134	外傾	平坦	自然	IVA3c	縄文土器片20点		126
28	J3c6	N－32°－E	楕円形	1.58×1.40	60	ゆるやかに立ち上がる	皿状	自然	IIB2b	縄文土器片26点	SK-28はSK-29より古い	126
29	J3d6	N－32°－E	楕円形	1.45×1.10	35	外傾	皿状	自然	IIB2a	縄文土器片24点 土師器片3点	SI-20	126
30	J2h3	N－20°－E	隅丸長方形	1.76×1.23	43	外傾	平坦	不明	IVB2a			125
31	J2i2	N－52°－E	楕円形	1.63×1.30	70	外傾	平坦	不明	IIA2b			125
37	J3c6	N－20°－E	楕円形	1.23×0.7	41	外傾	皿状	不明	IIB2a	縄文土器片42点	SI-20 SK-29	126
41-A	K3d2		円形	1.70×1.70	101	外傾	平坦	自然	IA2c	縄文土器片73点		127
41-B		N－28°－E	楕円形	1.35×1.16	49	外傾	平坦	自然	IIA2a			127
41-C			円形	0.7 ×0.7	62	垂直	平坦	自然	IA1b			127
42	K3d8	N－75°－W	隅丸方形	1.35×1.24	61	外傾	平坦	自然	IIIA2b	縄文土器片84点	SI-23・27	127
43	K3a2	N－22°－W	楕円形	2.13×1.64	52	ゆるやかに立ち上がる	凹凸	自然	IIB3b	縄文土器片207点		127
44	J3i3	N－27°－E	楕円形	0.8 ×0.62	21	外傾	平坦	自然	IIB1a		SI-36	126
45	J3j2	N－15°－W	不定形	1.15×0.47	43	外傾	凹凸	自然	VB2a	縄文土器片28点 土師器片15点		127
46	J2f0	N－53°－E	楕円形	2.13×1.44	74	ゆるやかに外傾	平坦	自然	IIA3b	縄文土器片56点 土師器片1点		127
47	K3c6		円形	1.3 ×1.21	68	垂直	平坦	自然	IA2b	縄文土器片179点 土師器片3点	SI-28	127
48	K3c6		円形	1.55×1.37	103	袋状	平坦	自然	IC2c	縄文土器片235点	SK-47・48共 SI-28より古い	127
49	J2d0	N－19°－W	楕円形	1.95×1.36	46	垂直	平坦	自然	IIA2a	縄文土器片176点		127
50	J2d0	N－21°－E	楕円形	2.25×1.2	45	外傾	平坦	自然	IIA3a	縄文土器片17点	段差あり	127
51	J2d0	N－12°－E	楕円形	1.90×1.05	56	外傾	平坦	自然	IIA2b	縄文土器片58点	段差あり	128
52	J2d9		楕円形	2.40×2.02	70	垂直	平坦	自然	IIA3b	縄文土器片423点 土師器片3点		128
53	J3h3	N－30°－E	楕円形	2.12×1.87	74	垂直	平坦	自然	IIA3b	縄文土器片30点 土師器片1点		128
54	J2d0	(N-58°-W)	(楕円形)	(0.52)×0.45	24	外傾	皿状	自然	IIB1a			128
55	K3b1	N－37°－W	不定形	1.50×1.41	50	ゆるやかに外傾	平坦	自然	VB2b	縄文土器片75点 土師器片1点	SI-32・34	128
57	J3f1	N－30°－E	楕円形	1.27×0.98	57	外傾	平坦	自然	IIA2b	縄文土器片7点		128
58	J3f2		円形	1.45×1.33	40	ゆるやかに立ち上がる	ゆるい起伏	自然	IB2a	縄文土器片15点		128
59	J3e1	N－73°－E	不定形	1.20×1.03	60	外傾	凹凸	自然	VA2b	縄文土器片31点	P 1	128
60-A	J2g8	N－28°－E	不定形	2.35×1.63	65	外傾	平坦	自然	VA3b	縄文土器片346点	SK60-B・C	129
60-B	J2g8		円形	1.45×1.40	50	ゆるやかに立ち上がる	皿状	自然	IB2b		SK60-A	129
60-C	J2h8		円形	1.65×1.6	71	垂直	平坦	自然	IA2b		SK60-A	129
61	J2i9	N－27°－W	不定形	1.84×1.35	40	外傾	平坦	自然	VA2a	縄文土器片8点	段差あり	128
62-A	J2h8	N－15°－W	隅丸方形	1.8 ×1.65	76	外傾	平坦	自然	IIIA2b	縄文土器片109点 土師器片3点	SK62-A・Bは互いに重複	128
62-B	J2h8	N－19°－W	楕円形	1.3×(0.88)	67	外傾	平坦	自然	IIA2b			128
63	J2i8	N－35°－E	不定形	1.48×1.29	68	外傾	平坦	自然	VA2b	縄文土器片16点		129

土坑番号	位置	長径方向（長軸方向）	平面形	規模 長径×短径(m)	規模 深さ(cm)	壁面	底面	覆土	形態	出土遺物	備考	図版番号
SK-66	$J3g_2$		円形	1.35×1.23	52	垂直	平坦	自然	IA_2b	縄文土器片50点	SI-35	129
67	$J3c_4$		円形	1.55×1.53	49	外傾	皿状	自然	IB_2a	縄文土器片90点	SM-25	129
73	$J3c_3$	N－13°－E	不定形	1.43×1.0	38	外傾	皿状	自然	VB_2a		SI-38	129
74	$J3g_5$		円形	0.97×0.92	11	ゆるやかに立ち上がる	ゆるやかな起伏	自然	IB_1a	縄文地器片24点	SI-33	129
75	$J3g_5$	N－0°	不定形	2.15×1.82	65	外傾	平坦	自然	VA_3b	縄文土器片50点	SI-33	129
76	$J3h_5$		円形	1.3 ×1.25	66	外傾	平坦	自然	IA_2b	縄文土器片５点	SI-33	130
77	$K3b_3$	N－38°－E	不定形	1.87×1.66	55	外傾	ゆるい起伏	自然	VA_2b	縄文土器片140点	SM-22 P1	129
78	$J3j_5$	N－36°－E	不定形	0.72×1.40	86	外傾	平坦	自然	VA_1b	縄文土器片75点	SM-21	129
80	$J3b_5$		円形	1.65×1.56	15	ゆるやかに立ち上がる	皿状	自然	IB_2a		SM-13	130
83	$J3b_5$		円形	0.8 ×0.79	16	外傾	ゆるい起伏	自然	IB_1a		SM-13	130
85	$J3c_5$	N－51°－E	楕円形	1.6 ×1.44	70	外傾	平坦	自然	IIA_2b	縄文土器片38点	SM-15	130
86	$I3h_1$		円形	1.58×1.52	94	垂直	平坦	自然	IA_2b	縄文土器片35点		130
87	$I2h_0$	N－53°－W	隅丸長方形	1.61×1.13	28	外傾	皿状	自然	IVB_2a	縄文土器片184点		130
88	$I3i_1$		円形	1.36×1.27	59	外傾	平坦	自然	IA_2b	縄文土器片580点		130
89	$I2i_0$	N－80°－W	不定形	2.5×(1.64)	50	外傾	ゆるい起伏	自然	VB_3b	縄文土器片108点	SK-96	131
90	$I3j_1$	N－70°－W	楕円形	2.09×1.77	60	外傾	平坦	自然	IIA_3b	縄文土器片199点		130
93	$J3e_4$	N－80°－W	楕円形	1.16×0.88	39	ゆるやかに立ち上がる	皿状	自然	IIB_2a	縄文土器片２点		130
94	$J3c_4$	N－84°－E	楕円形	1.50×1.05	31	ゆるやかに立ち上がる	ゆるい起伏	自然	IIB_2a	縄文土器片13点		130
95	$J3f_4$	N－56°－E	隅丸方形	0.96×0.81	30	垂直	凹凸	自然	$IIIA_1a$	縄文土器片７点		130
96	$I2i_0$	N－７°－E	不定形	2.51×1.9	74	外傾	平坦	自然	VA_3b	縄文土器片423点	SK-89	131
97	$I3j_4$		円形	1.03×1.03	45	外傾	平坦	自然	IA_2a	縄文土器片２点		130
98	$J3f_3$	N－26°－E	楕円形	1.34×1.09	93	垂直	平坦	自然	IIA_2b		SI-35	130
99	$J3f_3$	N－12°－W	楕円形	0.84×0.75	16	ゆるやかに立ち上がる	ゆるい起伏	自然	IIB_1a			131
100	$J3f_3$	N－14°－W	隅丸方形	1.16×1.02	28	外傾	平坦	自然	$IIIB_2a$	縄文土器片74点		131
101	$I3h_2$	N－0.5°－E	楕円形	1.33×1.16	56	外傾	ゆるい起伏	自然	IIA_2b		SK-109	131
102	$J3i_2$		円形	3.36×(3.27)	73	外傾	平坦	自然	IA_3b	縄文土器片259点 土師器片１点		131
103	$J3a_1$	N－26°－W	楕円形	3.37×2.3	26	垂直	ゆるい起伏	自然	IIA_3a	縄文土器片181点		132
104	$J2a_0$	N－38°－E	楕円形	1.67×0.85	90	外傾	皿状	自然	IIA_2b	縄文土器片74点	段差あり	131
105	$J3e_3$	N－73°－W	不定形	0.82×(0.55)	25	外傾	平坦	自然	VA_1a	縄文土器片32点	SK-114	132
109	$I3h_2$	N－28°－E	楕円形	1.15×0.6	57	袋状	皿状	自然	IIC_2b			131
110	$I3h_2$		円形	0.61×0.57	17	外傾	皿状	自然	IB_1a			131
111	$J3a_1$	N－43°－W	楕円形	2.1 ×1.45	53	外傾	平坦	自然	IIA_3b	縄文土器片395点	段差あり	132
112	$J3d_1$	N－90°	楕円形	0.98×0.81	22	垂直	平坦	自然	IIA_1c		P1	132
113	$J3d_5$		円形	1.24×1.12	63	垂直	平坦	自然	IA_2b	縄文土器片38点	SI-42	131
114	$J3d_3$	N－31°－E	楕円形	0.93×0.81	49	外傾	平坦	人為	IIA_1a		SM-28 SK-105	132

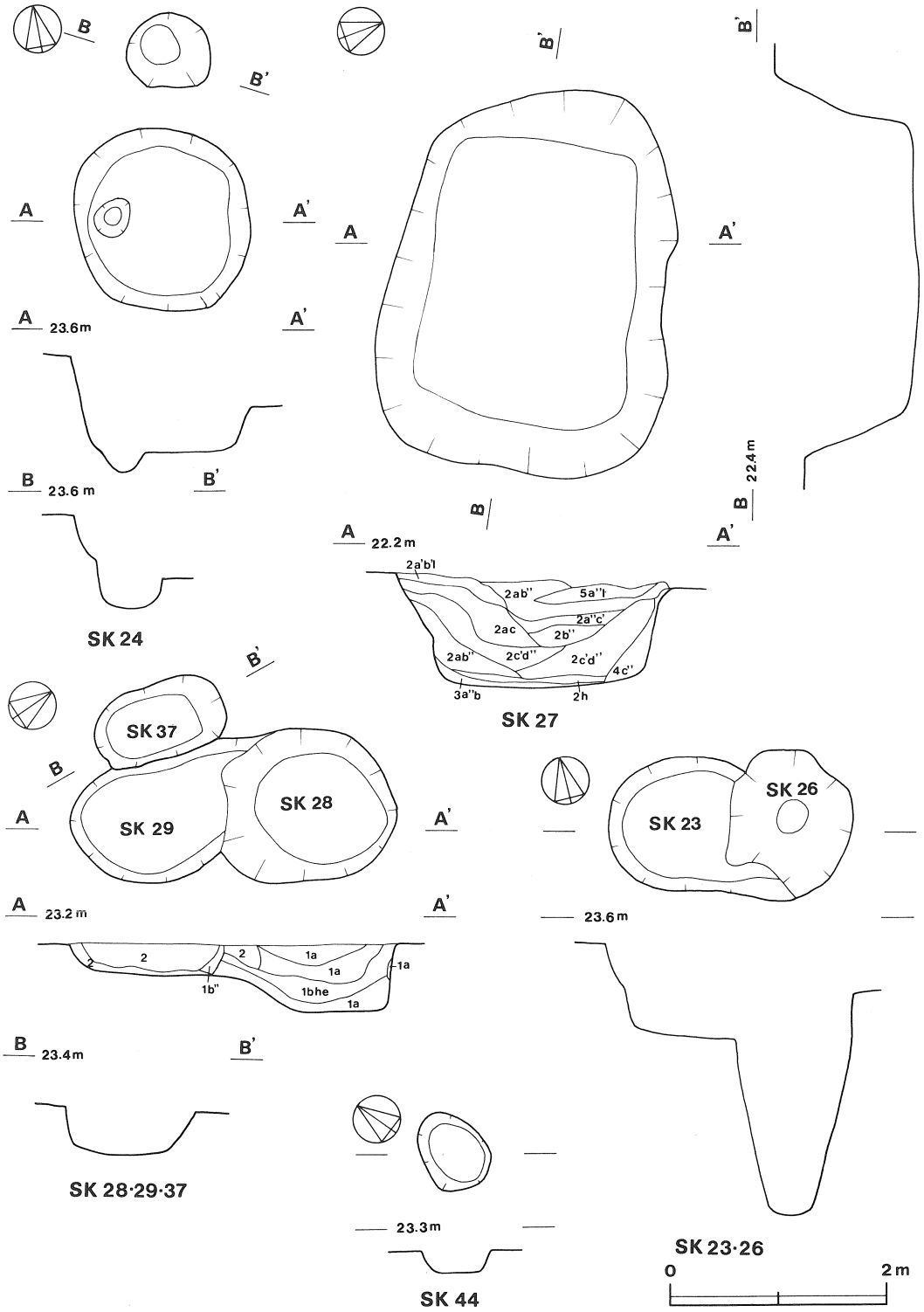
土坑番号	位置	長径方向（長軸方向）	平面形	規模 長径×短径(m)	規模 深さ(cm)	壁面	底面	覆土	形態	出土遺物	備考	図版番号
115	J3e$_3$	N－61°－E	楕円形	1.15×0.95	50	外傾	ゆるい起伏	自然	II A$_2$b	縄文土器片74点		132
116	I3i$_1$	N－47°－E	楕円形	1.04×0.88	20	外傾	平坦	人為	II B$_2$a		SM-31	132
118	I3j$_4$	N－84°－E	楕円形	1.64×1.29	50	外傾	平坦	自然	II A$_2$b	縄文土器片９点	SI-41	132
119	J3e$_1$	N－37°－W	楕円形	2.11×1.47	45	外傾	平坦	自然	II A$_3$a	縄文土器片51点		132
120	J3c$_1$	N－13°－E	楕円形	1.16×0.79	46	垂直	平坦	自然	II A$_2$a	縄文土器片27点	SI-43	132
121	J3c$_1$	N－60°－E	不定形	2.1 ×0.95	82	垂直	平坦	自然	V A$_3$b	縄文土器片136点	SI-43	132
122	J2c$_0$	N－29°－W	楕円形	2.0 ×1.25	72	垂直	平坦	自然	II A$_3$b	縄文土器片22点	SI-43 P１	133
123	J3d$_1$		円形	1.44×1.44	66	垂直	平坦	自然	I A$_2$b	縄文土器片74点	SI-43	132
124	J3d$_4$	N－64°－W	楕円形	1.45×1.11	84	垂直	平坦	自然	II A$_2$b		SI-42 段差あり	133
125	J3d$_4$		円形	0.93×0.85	20	外傾	皿状	(自然)	I B$_1$a		SI-42	133
127	I3i$_2$		円形	1.32×1.29	23	垂直	平坦	人為	I A$_2$c		SI-39	133
128	J3d$_4$	N－52°－W	楕円形	1.15×0.92	42	外傾	平坦	(自然)	II A$_2$a		SI-42	133
129	J3d$_5$		円形	1.03×1.01	41	外傾	平坦	(自然)	I A$_2$a		SI-42 SK-130	133
130	J3d$_5$		円形	0.87×0.82	21	ゆるやかに立ち上がる	皿状	(自然)	I B$_1$a		SK-129	133
131	J3d$_5$	N－20°－E	不定形	1.19×0.97	21	外傾	ゆるい起伏	(自然)	V B$_2$a		SI-42	133
133	I3j$_3$	N－90°	楕円形	1.1 ×0.95	89	外傾	皿状	(自然)	II A$_2$b			133
134	I3i$_2$		円形	3.37×3.33	122	垂直	平坦	(自然)	I A$_3$c	縄文土器片１点	SK-102	131
135	J3e$_4$	N－31°－E	楕円形	0.82×0.71	11	外傾	平坦	(自然)	II B$_1$a		SI-42	133
136	I3f$_2$	N－90°	楕円形	0.98×0.84	64	垂直	皿状	(自然)	II A$_1$b			133
137	J3e$_1$		円形	0.88×0.84	60	外傾	平坦	(自然)	I A$_1$b			133
138	I3h$_3$	N－23°－W	楕円形	1.1 ×0.95	57	外傾	皿状	人為	II A$_2$b		SM-1人骨出土	133
140	J3d$_3$		円形	0.96×0.9	35	垂直	平坦	人為	I A$_1$a		SI-46 SM-35	133



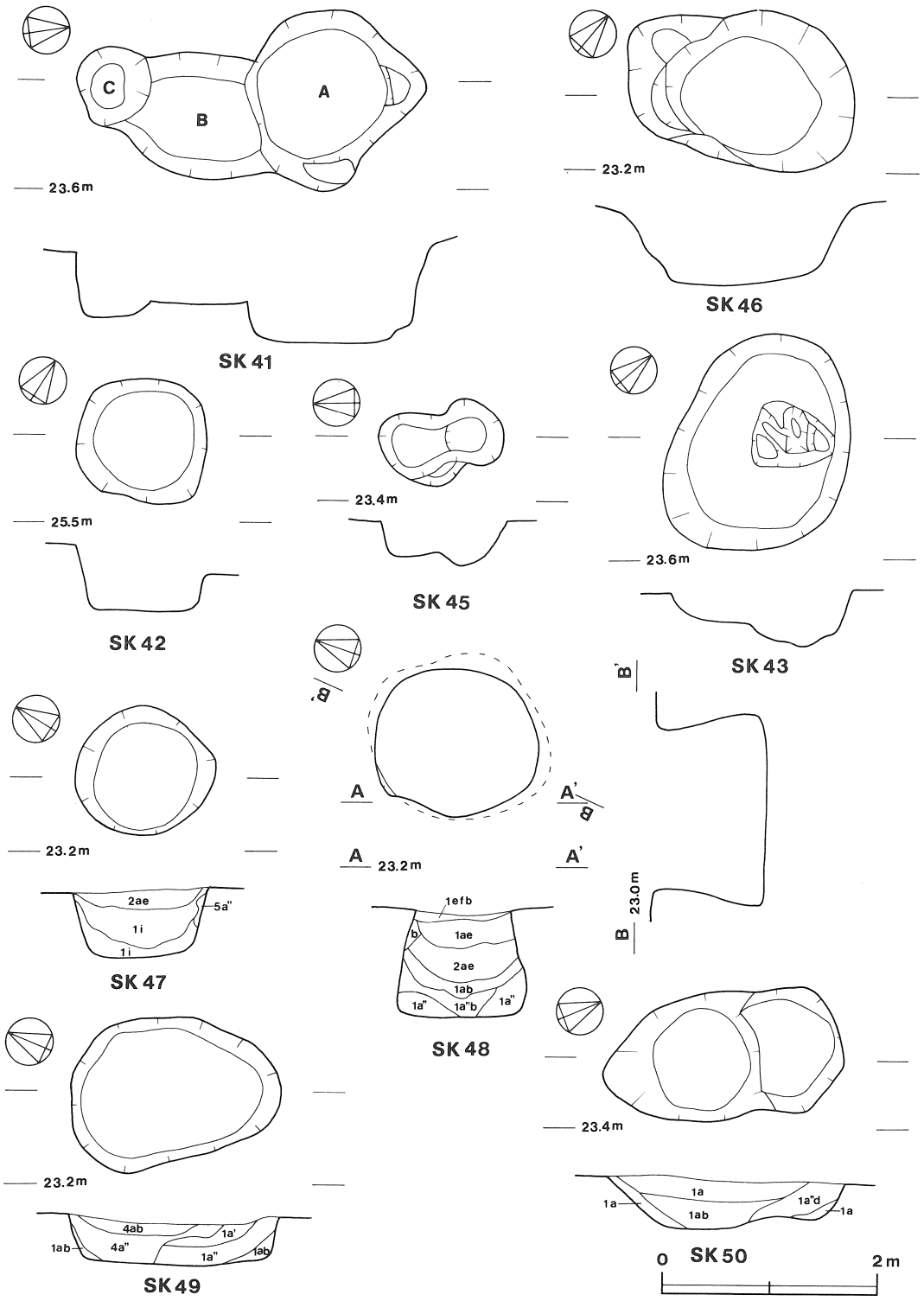
第124図　土坑実測図 (1)



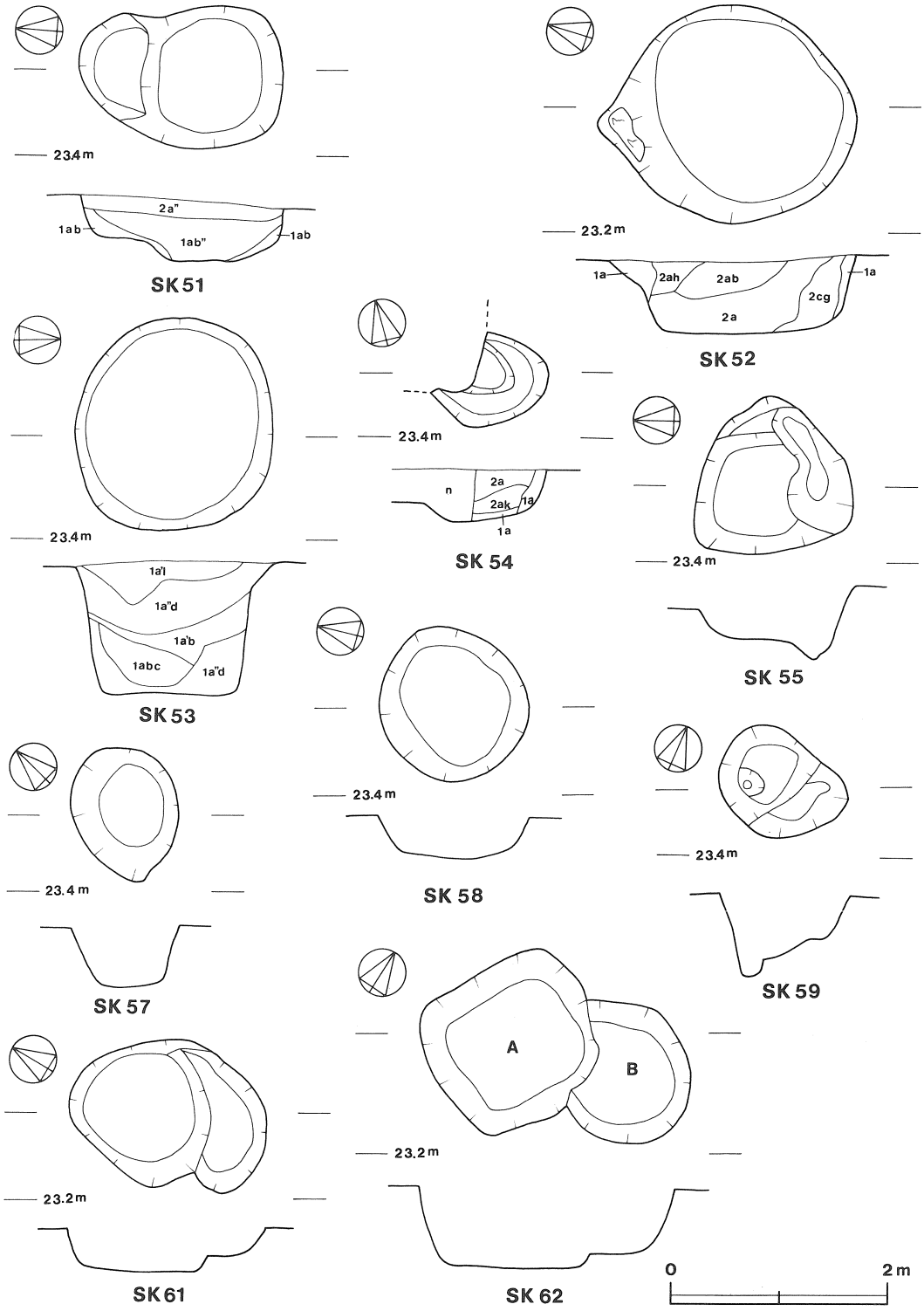
第125図　土坑実測図 (2)



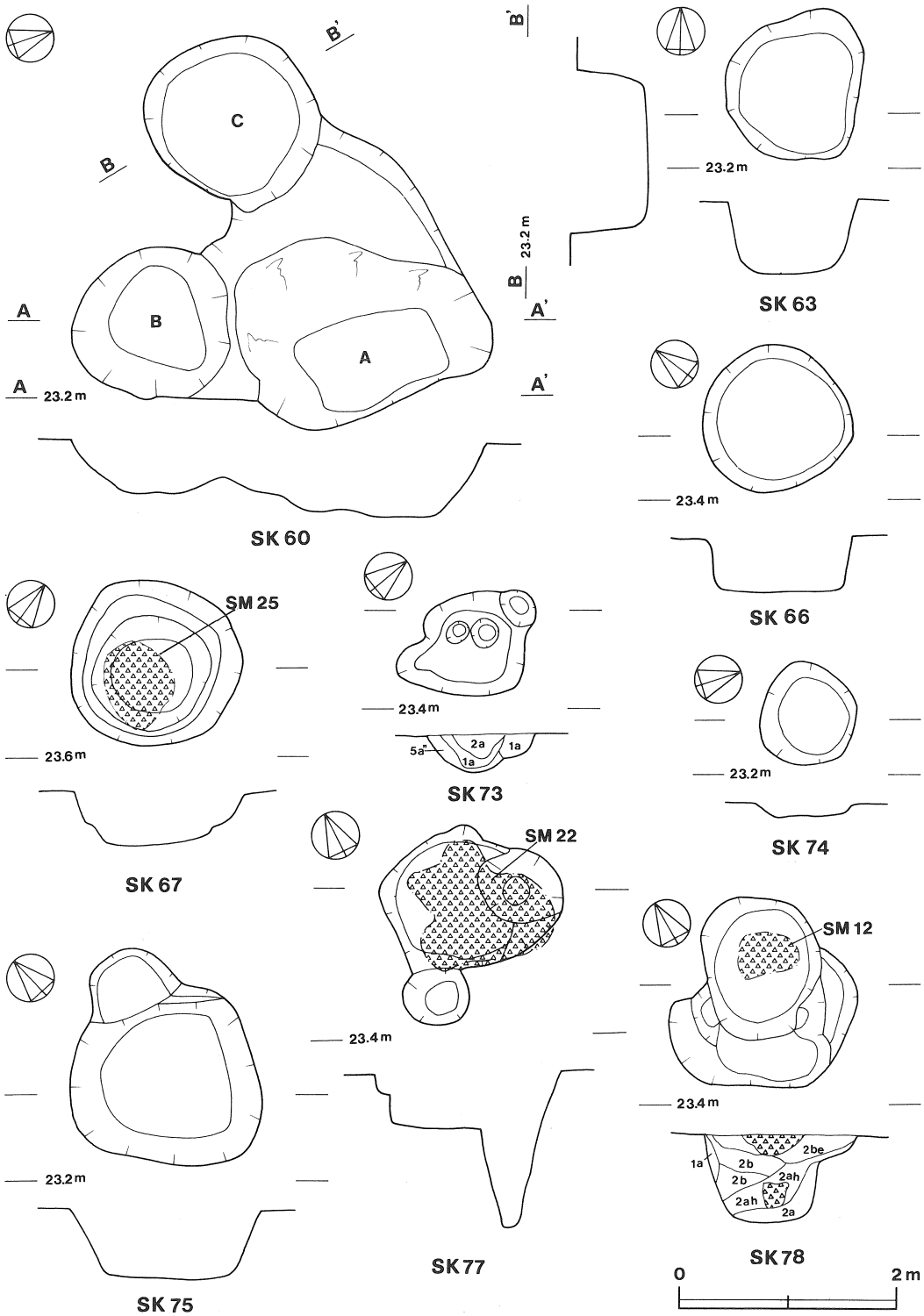
第126図　土坑実測図（3）



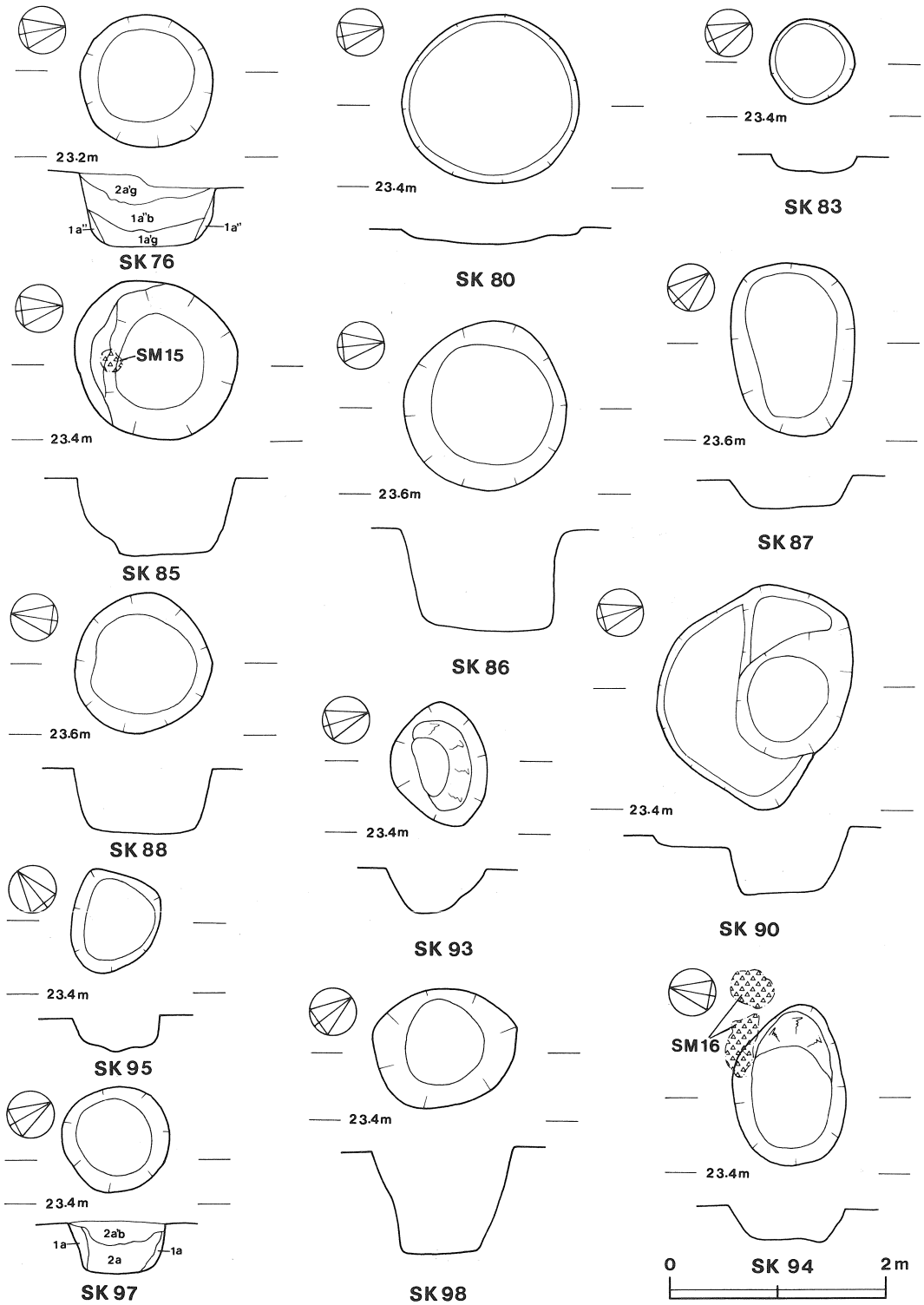
第127図　土坑実測図 (4)



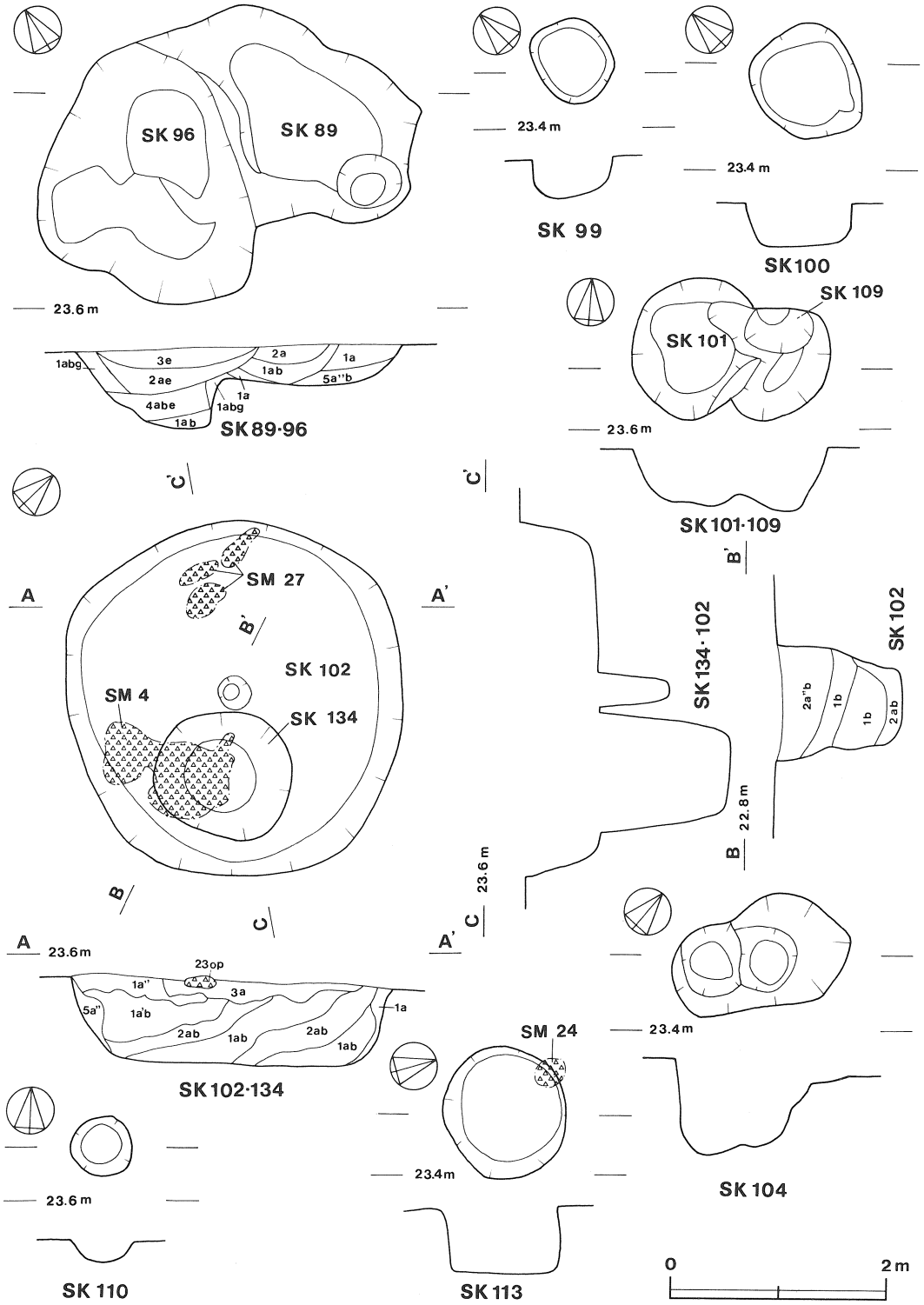
第128図　土坑実測図 (5)



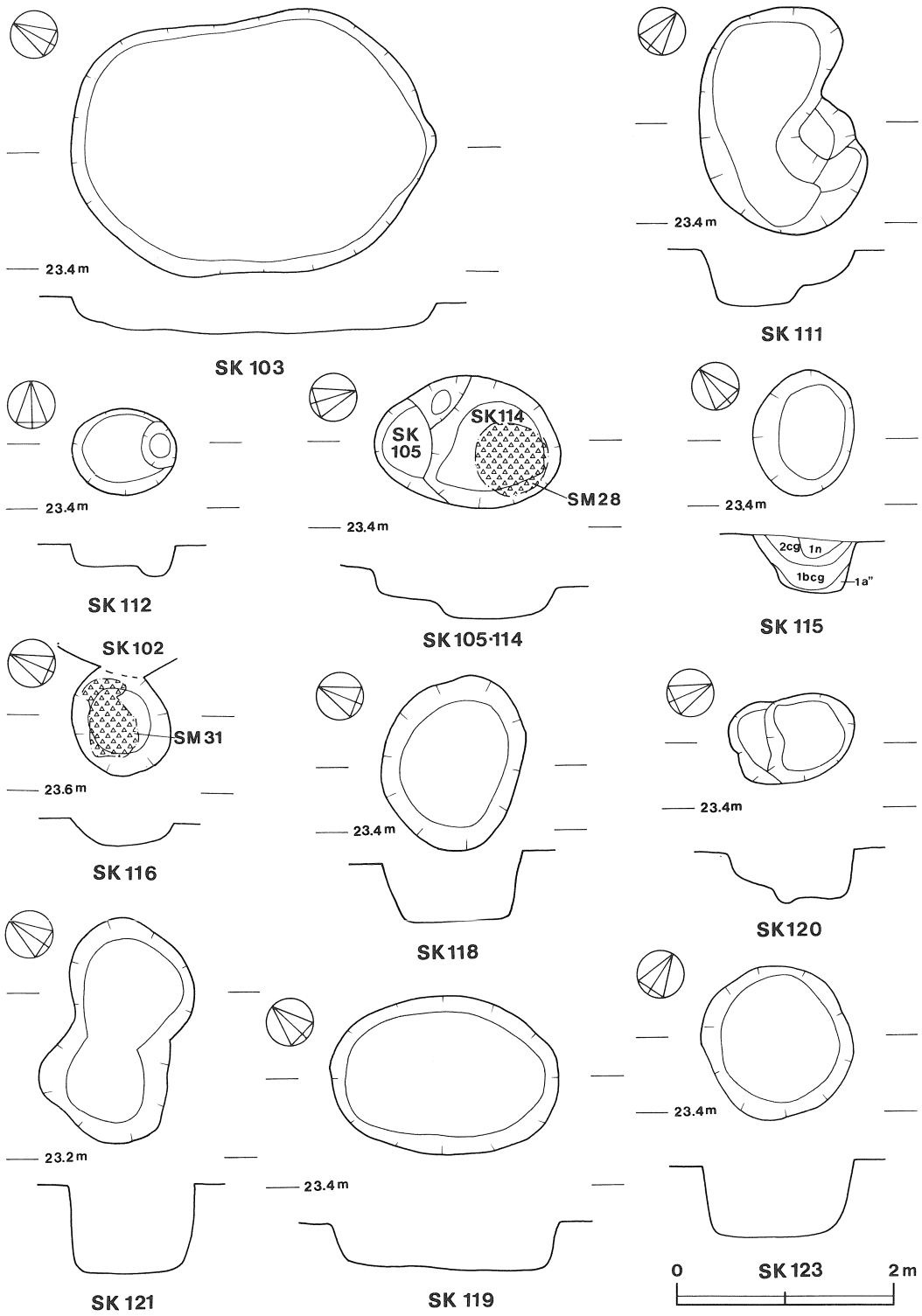
第129図　土坑実測図（6）



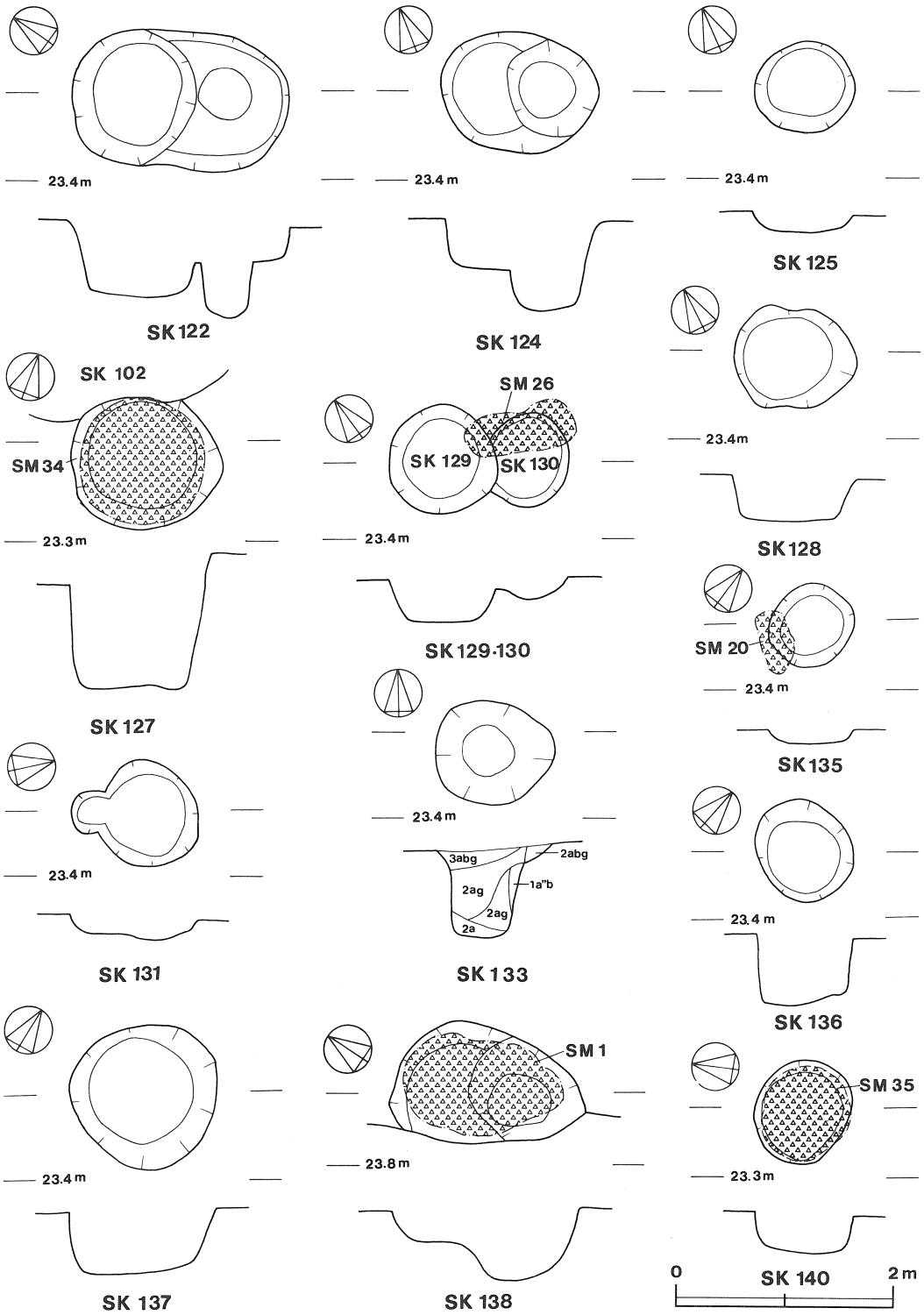
第130図　土坑実測図（7）



第131図　土坑実測図 (8)



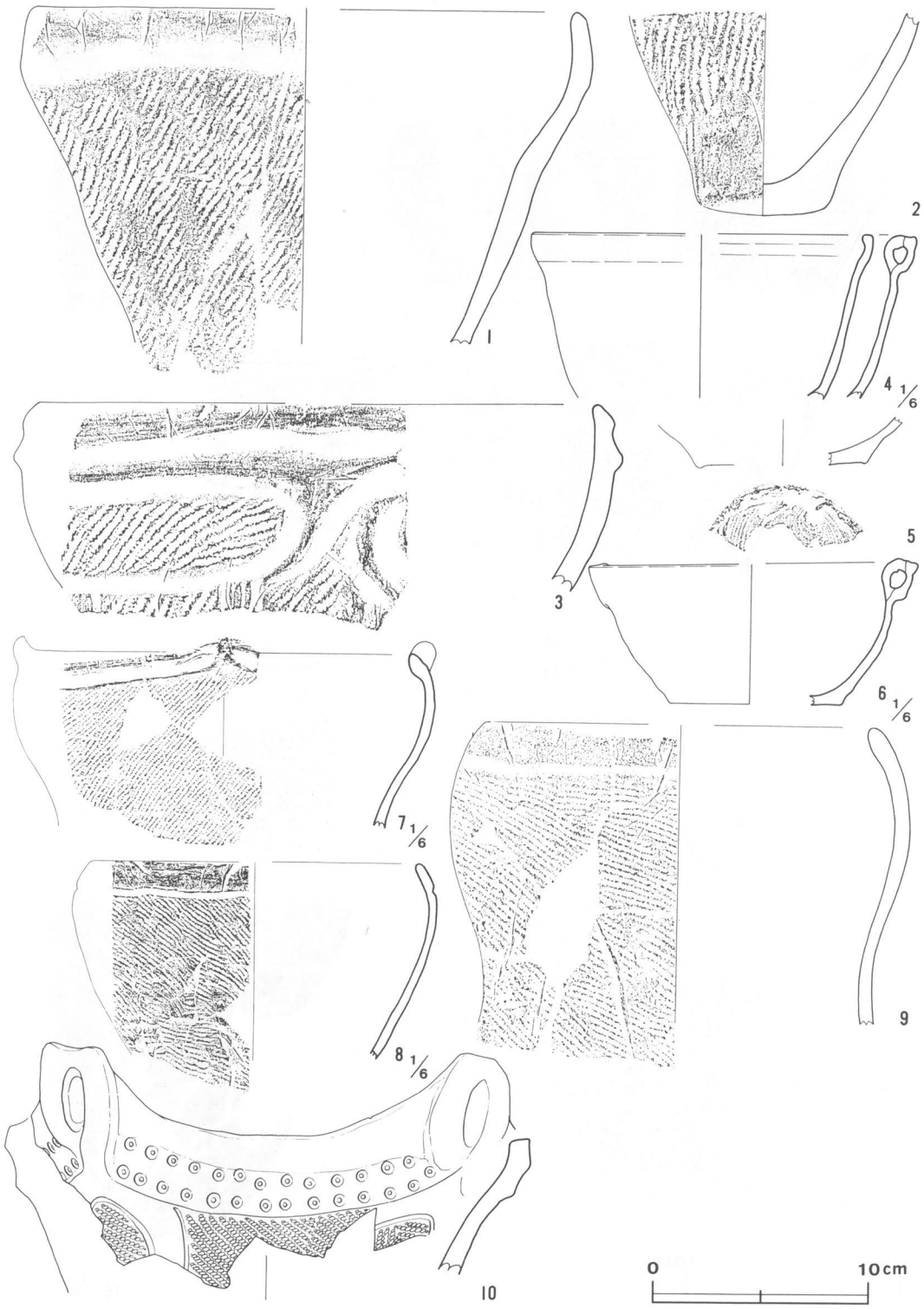
第132図　土坑実測図　(9)



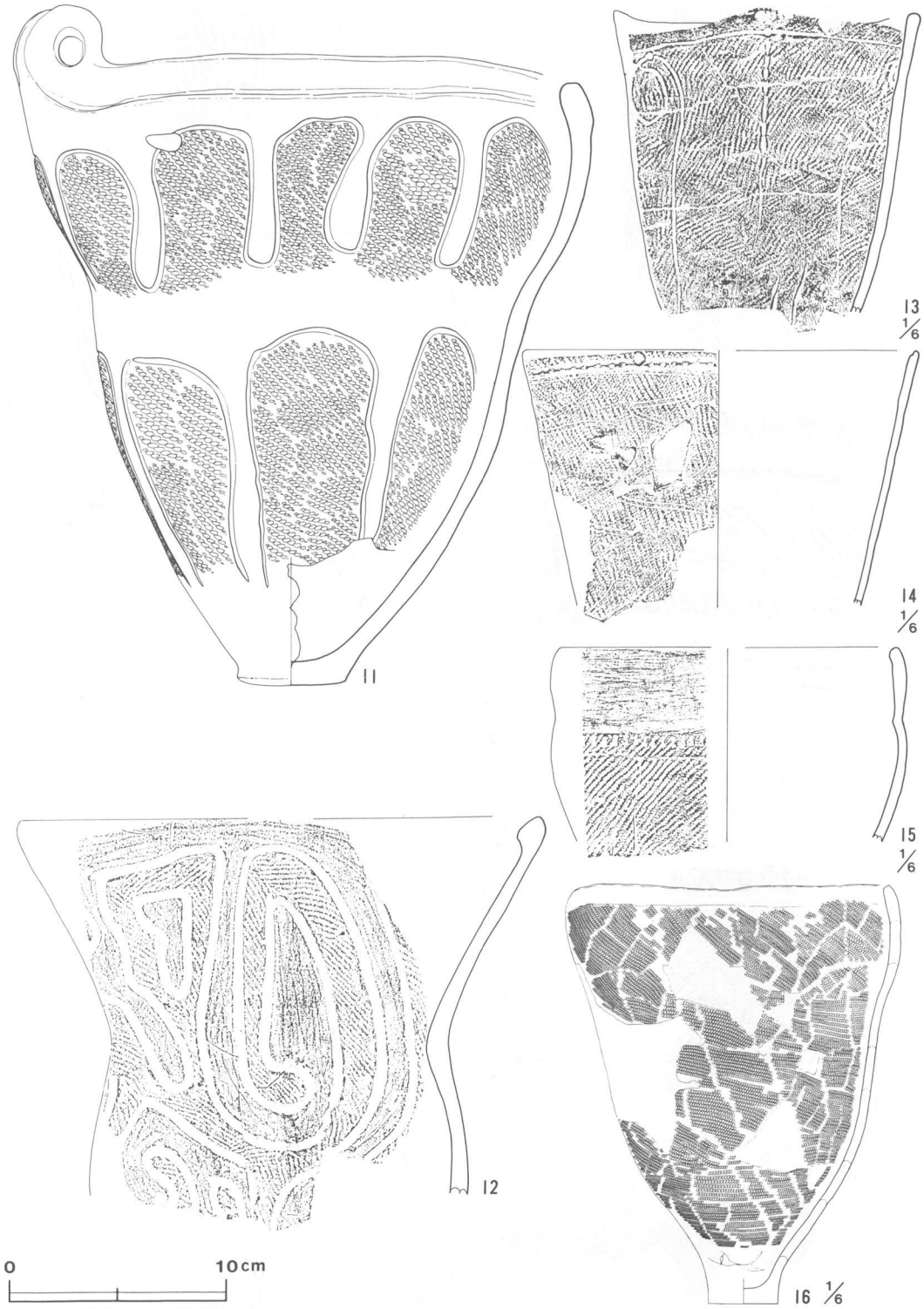
第133図　土坑実測図　(10)

土坑出土土器観察表 (1)

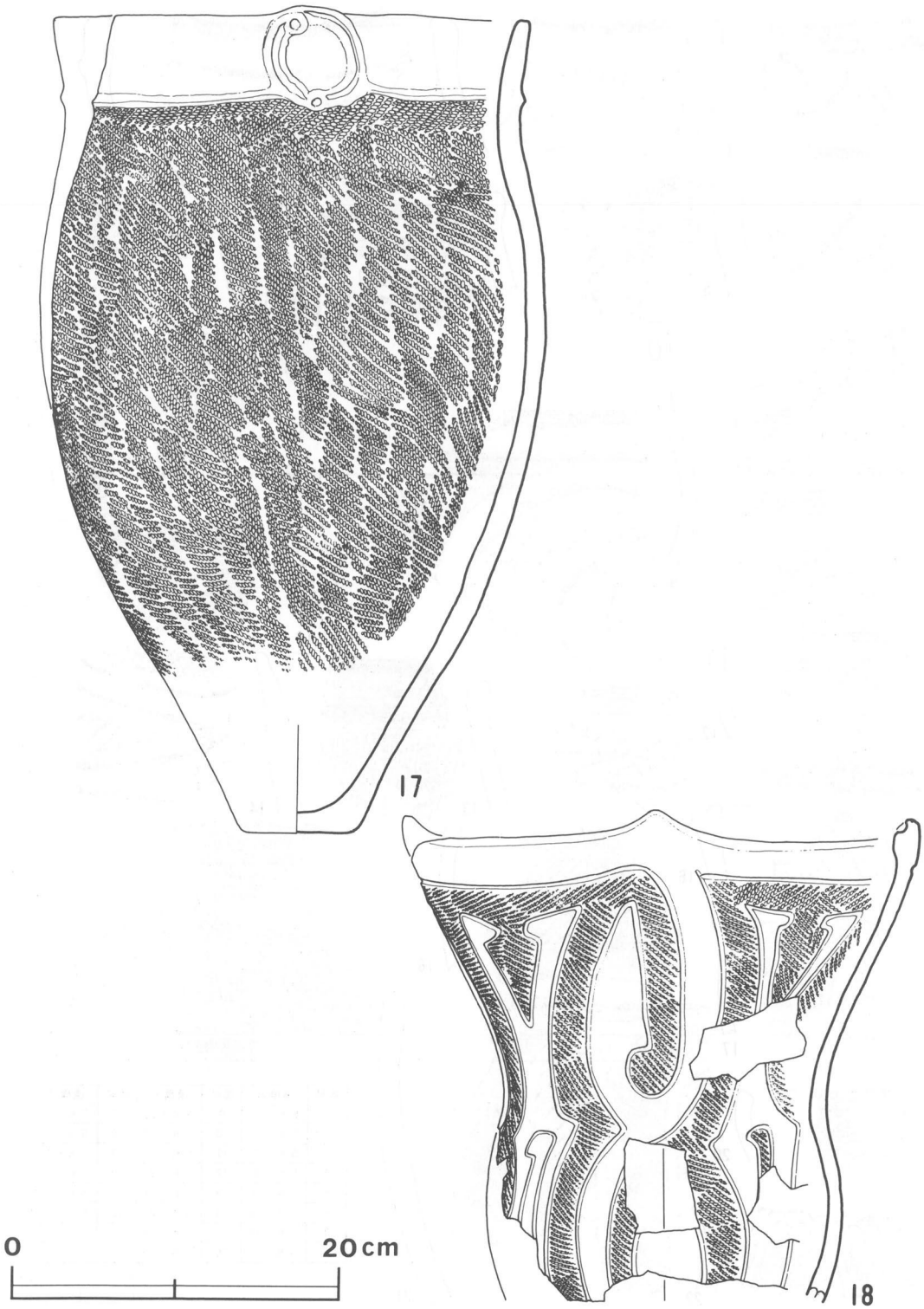
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
第134図 1	深鉢形土器	A(25.0) B(15.6)	平縁でキャリパー形を呈し，口縁部無文帯下に縄文が施されている。内面横ナデ。	砂粒 普通 にぶい橙色	20% P379 SK－2
2	深鉢形土器	B(9.4) C 5.8	底部片で，外面には縄文が施されている。内面縦ナデ。	砂粒 普通 にぶい橙色	10% P380 SK－2
3	深鉢形土器	A(25.8) B(8.6)	平縁を呈する口縁部片である。口縁部文様帯は隆線と沈線により，楕円区画文や渦巻状文により構成されている。区画内には縄文を施している。内面横ナデ。	砂粒 普通 にぶい橙色	10% P386 SK－24
4	内耳 土器 土師器	A(30.2) B(15.4)	体部から口縁部にかけての破片で，体部は外傾して立ち上がり，口縁部はやや内彎している。口縁部内面に内耳を1対付している。口縁部内・外面共横ナデ，体部外面は縦位のヘラナデ，体部内面は横位のヘラナデが施されている。外面は全面にススが付着している。	砂粒 普通 にぶい赤褐色	10% P193 SK－25
5	坏	B(2.1) C(7.5)	中世の土師質土器の底部片である。ロクロ整形で，底部に回転糸切がみられる。	砂粒 普通 にぶい黄橙色	20% P391 SK－25
6	内耳 土器 土師器	A(27.2) B(13.0) C(16.2)	体部は大きく内彎しながら口縁部に至る。内耳は1対2をなして3耳を有して，口唇部内面の縁から橋状に貼布されている。体部外面は横位，斜位のナデ，内面は横ナデ。内側の内耳を付した位置に指頭痕がみられる。体部外面は全面にススが付着している。	砂粒 普通 明褐色	10% P192 SK－35
7	深鉢形土器	A(37.2) B(17.7)	口縁部に小突起を有し，口縁部無文帯を微隆線で区画し，以下に単節縄文LRを施している。内面横ナデ。	砂粒 普通 褐色	20% P369 SK－47
8	深鉢形土器	A(30.2) B(18.2)	口縁部が内彎する深鉢形土器の破片である。口縁部無文帯下に1条の沈線が巡り，以下縄文が施文されている。内面横ナデ。	砂粒 普通 にぶい褐色	30% P370 SK－47
9	深鉢形土器	A(18.0) B(14.0)	口縁部から胴部にかけての破片である。口縁部無文帯下に1条の沈線を巡らし，以下全面に縄文を施している。内面口縁部横ナデ，胴部縦ナデ。	砂粒 普通 にぶい褐色	20% P362 SK－63
10	深鉢形土器	A(24.2) B(11.7)	波状縁の口縁部から胴部にかけての破片である。口縁部は，4単位の突起を有するものと思われる。口縁部無文帯に2条の微隆線が施され，下半部には微隆線に沿って円形刺突文が施されている。胴上半部には突起下に沈線により「C」字状を呈すると思われる曲線文が施されている。内面横ナデ。	砂粒 普通 褐色	20% P493 SK－49
第135図 11	深鉢形土器	A 26.0 B 31.7 C 5.0	平縁に1か所の突起を有し，胴中央部でゆるやかにくびれ，胴下半部がわずかに張る。口縁部無文帯に1条の微隆線を巡らし，胴上半部には連続する逆「U」字状のモチーフを11単位描き，区画内に単節縄文LRを施している。区画外及びくびれ部は，磨り消されている。胴下半部には，1条の沈線により逆「U」字状のモチーフによる区画が8単位施されている。区画内に単節縄文が施され，区画間は磨り消されている。底面近くは，横位のナデが加えられている。内面胴上半部横ナデ，下半部縦ナデ。	砂粒 普通 赤褐色	90% P487 SK－63
12	深鉢形土器	A(24.0) B(17.4)	口縁部先端がやや内彎し，胴中央部で強くくびれる平縁の深鉢形土器片である。沈線により逆「J」字状や「7」の字状を区画し，区画内には縄文を充塡し，区画間は磨り消している。内面ナデ。	砂粒 普通 褐色	20% P398 SK－77
13	深鉢形土器	A(25.8) B(27.6)	波状を呈する口縁部から胴部にかけての破片である。口縁直下に1条の沈線が巡り，波頂下には円形刺突文が施され，そこから沈線が押引状に垂下している。波底間には沈線による蕨手状文が垂下している。地文は縄文である。内面ナデ。	砂粒 普通 にぶい橙色	20% P402 SK－121



第134図　土坑出土遺物実測図 (1)



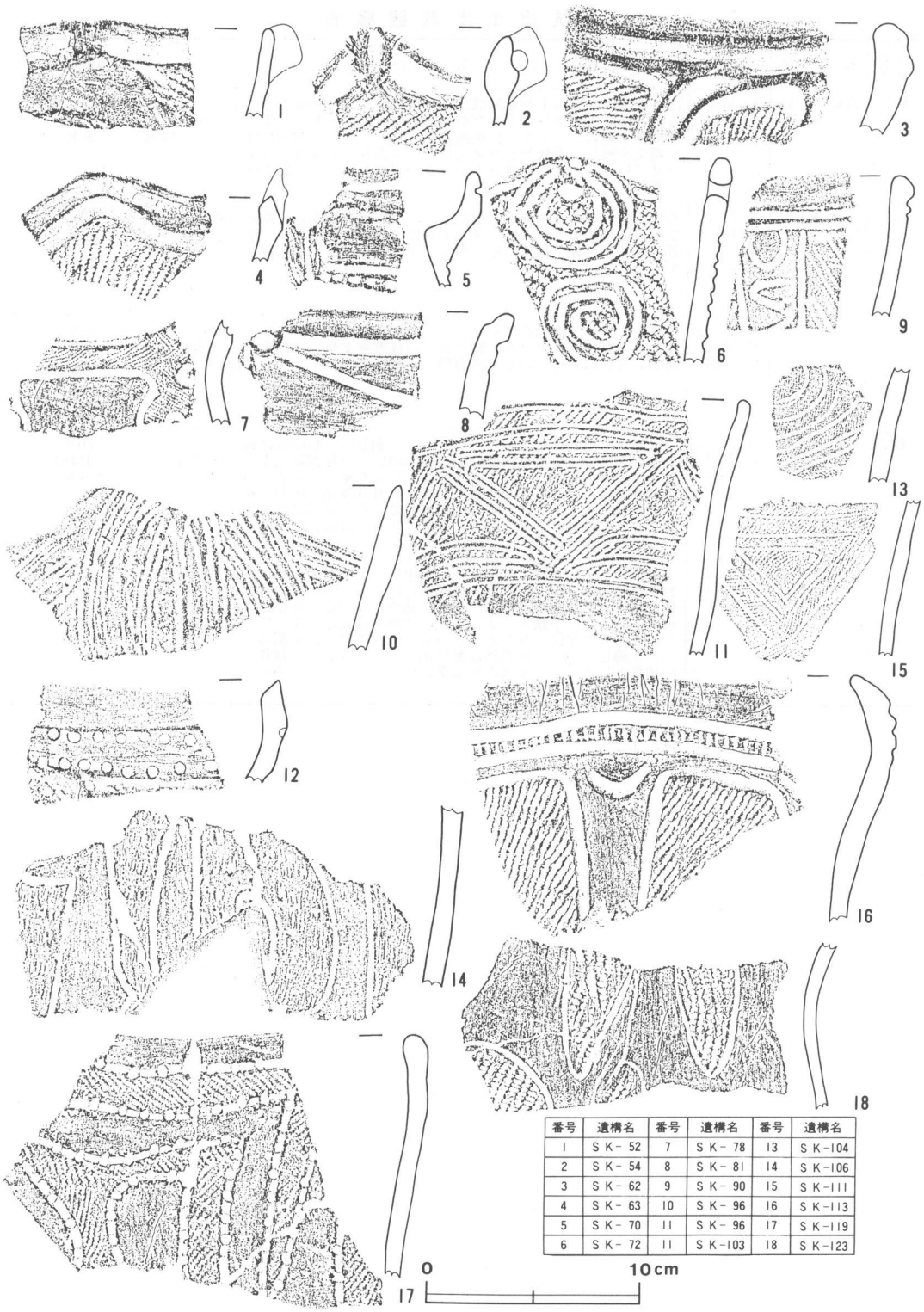
第135図　土坑出土遺物実測図（2）



第136図　土坑出土遺物実測図（3）

番号	遺構名	番号	遺構名	番号	遺構名
1	SK－1	9	SK－18	17	SK－37
2	SK－2	10	SK－19	18	SK－41
3	SK－7	11	SK－21	19	SK－42
4	SK－8	12	SK－23	20	SK－42
5	SK－9	13	SK－26	21	SK－47
6	SK－10	14	SK－27	22	SK－50
7	SK－14	15	SK－28		
8	SK－17	16	SK－29		

第137図　土坑出土遺物実測図　(4)



番号	遺構名	番号	遺構名	番号	遺構名
1	SK-52	7	SK-78	13	SK-104
2	SK-54	8	SK-81	14	SK-106
3	SK-62	9	SK-90	15	SK-111
4	SK-63	10	SK-96	16	SK-113
5	SK-70	11	SK-96	17	SK-119
6	SK-72	11	SK-103	18	SK-123

第138図　土坑出土遺物実測図（5）

土坑出土土器観察表

(2)

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
第135図 14	深鉢形土器	A(36.0) B(23.8)	ほぼ直線的に立ち上がる胴部から口縁部にかけての破片である。口縁直下に単位は不明だが円形刺突を施すと共に1条の微隆線を巡らし，キザミ目を連続して施している。器面全体に縄文を施し，半截竹管状施文具により波状に曲線文を垂下させている。内面の口縁直下に1条の凹線を巡らし，以下横ナデ。	砂粒 普通 にぶい褐色	20% P365 SK－119
15	深鉢形土器	A(31.0) B(18.0)	やや内彎気味の口縁部から胴部にかけての破片である。幅の広い口縁部無文帯下にはヘラ状工具による刺突文が巡り，胴部には縄文が施されている。内面上半部横ナデ，下半部縦ナデ。	砂粒 普通 にぶい橙色	15% P401 SK－102
16	深鉢形土器	A(29.2) B 38.5 C 6.4	口縁が内彎し，胴上位でややくびれ，胴下半部がややふくらみ，小さな底部へいたる。幅の狭い口縁部無文帯下には単節縄文LRが施されている。内面胴上半部横ナデ，下半部ナデ。	砂粒 普通 にぶい褐色	60% P394 SK－123
第136図 17	深鉢形土器	A(29.2) B(50.4) C 6.8	口縁部がやや外反しながら立ち上がり，胴部は，胴中位に最大径を有して，小さな底部に至る。幅の広い口縁部無文帯を1条の隆線で区画し，以下に単節縄文LRを施している。口縁部無文帯には，1条の沈線を加えて半月状隆帯を円形に組み合わせて，上下に円形刺突文を施している。胴部には単節縄文LRを隆線直下の一段は，横位に，以下は縦位に施している。内面口縁部横ナデ，以下縦ナデ。	砂粒 普通 橙色	60% P484 SK－97
18	深鉢形土器	A 32.0 B(30.0)	4単位の小突起を有する平縁で，胴中央でくびれ，胴下半がわずかに張る。胴下位欠損。口縁部には，幅2cm前後の無文帯を設け，突起の側面には，刺突が施されている。胴部は沈線により「M」字状と「J」字状の文様を連続して1単位とし，これを4単位くりかえしている。区画内には，単節縄文LRを施している。区画外は磨り消している。この文様作出の結果として「X」字状の無文帯が作出されている。内面ナデ。	砂粒・砂礫 普通 暗赤褐色	80% P489 SK－97

第４節　地下式坑

当遺跡において検出された地下式坑は，９基である。これらの地下式坑は，第９号地下式坑を除いて，調査区の南西部の谷津に向って傾斜している台地縁辺部にほぼ一直線上に検出されている。地下式坑の平面形は，楕円形，不整方形，凸字形の不定形を呈し，出土遺物は，少なく周囲からの流れ込みと思われる縄文土器片，内耳土器片，陶器片が覆土から出土している。

第１号地下式坑（第25号土坑を変更，第139図）

本坑は，調査区の南西部J2f_5区を中心に確認された地下式坑で，第６号地下式坑の北東側0.50ｍに位置している。

天井部は，既に崩落しており，確認時における平面形は，長軸3.25ｍ，短軸2.60ｍの不整楕円形であった。本坑は，竪坑と思われる一部と主室からなっている。竪坑部は，隣接する第32号地下式坑の天井部上に構築されていたものと思われ，大半は第32号地下式坑の天井部とともに崩落したものと思われる。これらのことから竪坑部の形状，規模については，明確ではない。主室底面は，長軸2.50ｍ，短軸2.12ｍの隅丸長方形を呈し，長軸方向は，Ｎ－49°－Ｗで，平坦で硬い。深さは，遺構確認面より2.89ｍほどで砂質粘土層に達している。壁は，ほぼ垂直に立ち上がっている。底面から2.04ｍのところで内彎しているが，これは天井部の崩落の痕跡と思われる。

覆土は，南西側から自然流入した状態で暗褐色土，褐色土，黒褐色土が自然堆積しており，暗褐色土は５層，褐色土は７層に細分される。下層の褐色土中には，ローム粒子，ロームブロックが，多量に含まれているので天井部が崩落したものと思われる。

遺物は，少量の内耳土器片，陶器片が覆土から出土している。陶器片は，瀬戸焼の瓶子の底部片，胴上部片の２点と同じ瀬戸焼の平碗の体部片２点であり，前者は，鎌倉時代に，後者は，室町時代の15世紀頃に比定されるものと思われる。

第２号地下式坑（第32号土坑を変更，第139図）

本坑は，調査区の南西部J2e_5区を中心に確認された地下式坑で，第１号地下式坑の北側0.5ｍに位置し，北側の上層部が第８号溝に切られている。

本坑は，竪坑と主室からなり，全長は3.13ｍほどで，主軸方向は，Ｎ－21°－Ｅを指している。南西側の竪坑の底面は，径1.03ｍほどの円形を呈し，平坦で硬く，深さは，遺構確認面より0.20ｍほどである。壁は外傾して立ち上がっている。主室は，竪坑底面より更に0.80ｍほど掘り下げられ，主室底面は，長軸3.20ｍ，短軸1.67ｍの不整長方形を呈し，平坦で硬い。深さは，遺構確認面より１ｍほどである。壁は，ほぼ垂直に立ち上がっている。

覆土は，黒褐色土，暗褐色土，褐色土からなり，黒褐色土は更に３層，暗褐色土は２層，褐色土も２層に細分される。下層には，多量のローム粒子，ロームブロックが検出され，天井部が崩れ落ちたものと考えられる。

遺物は，検出されなかった。

第３号地下式坑（第35号土坑を変更，第139図）

本坑は，調査区の南西部J2h_5区を中心に確認され，第４号地下式坑の北東側0.30ｍに位置している。

本坑は，竪坑と主室からなり，全長は2.67ｍほどで，主軸方向は，N－59°－Wを指している。北西側の竪坑の底面は，長軸0.85ｍ，短軸0.53ｍの隅丸長方形を呈し，平坦で硬く，深さは，遺構確認面より0.86ｍである。壁は，ほぼ垂直に立ち上がっている。主室は，竪坑底面より更に，1.68ｍほど粘土層を掘り抜いた砂質ロームまで掘り下げられている。主室底面は，長軸2.23ｍ，短軸1.52ｍの隅丸長方形を呈し，中央部に若干傾斜して締まっている。深さは，遺構確認面より2.54ｍほどである。底面から2.4ｍのところで内傾しているが，これは天井部の崩落の痕跡である。壁は，竪坑部のある北西壁が外傾して立ち上がっているが，他の壁は，オーバーハング状に立ち上がっている。また，南西壁の底面から1.5ｍほどのところのほぼ中央部に，径0.8ｍのほぼ円形を呈するトンネル状の掘り込みが検出され，南西側0.5ｍに隣接する第36号地下式坑に連結している。

覆土は，暗褐色土，黒褐色土，褐色土，灰褐色土からなり，暗褐色土は４層，褐色土は８層に細分される。下層の褐色土層には，ローム大・小ブロックが多量に含まれていることから天井部が崩れ落ちたものと考えられる。

遺物は，覆土上層からほぼ半完形の内耳土器（第134図６）が出土している。内耳土器は，中・近世に比定されるものと考えられる。

第４号地下式坑（第36号土坑を変更，第139図）

本坑は，調査区の南西部J2h_4区を中心に確認された地下式坑で，第３号地下式坑の南西側0.5ｍに位置している。

本坑は，竪坑と主室からなり，全長は，3.17ｍほどで，主軸方向は，N－74°－Wを指している。北西側の竪坑底面は，長軸1.14ｍ，短軸0.82ｍの不整隅丸長方形を呈し，平坦で固い。深さは，遺構確認面より1.53ｍほどである。壁は，ほぼ垂直に立ち上がっている。主室は，竪坑底面よりさらに0.8ｍほど白色粘土層まで掘り下げられている。主室底面は，長軸2.62ｍ，短軸1.83ｍの長方形を呈し，平坦で硬い。深さは，遺構確認面より2.33ｍほどである。底面から1.42ｍのところ

で内傾しているが，これは天井部の崩落の痕跡である。壁は，ほぼ垂直に立ち上がっている。北東壁の北東コーナー寄りに径0.8mのほぼ円形を呈するトンネル状の掘り込みが検出され，隣接する第35号地下式坑に連結している。

覆土は，暗褐色土，黒褐色土，褐色土，灰褐色土からなり，暗褐色土はさらに3層，褐色土は4層に細分される。下層には，ローム大ブロックを含む褐色土が堆積しており，天井部が崩落したものと思われる。

遺物は，覆土中層から馬骨片が出土しているのみで，他の遺物の出土はなかった。

第5号地下式坑（第38号土坑を変更，第140図）

本坑は，調査区の南西部K2a$_4$区を中心に確認された地下式坑で，第4号地下式坑の南側8.2mに位置している。

本坑は，竪坑と主室からなり，この竪坑は，本坑から南西側に接する第7号地下式坑の竪坑ともなっている。全長は，3.44mほどで，主軸方向は，N－27°－Eを指している。南西側の竪坑の底面は，長軸1.40m，短軸1.01mの隅丸長方形を呈し，主室へゆるやかに傾斜して硬く，深さは，遺構確認面より1.35mほどである。壁は，ほぼ中央部に第7号地下式坑の主室への入口部を有する北西壁がほぼ垂直に立ち上がり，他の壁は，外傾して立ち上がっている。主室は，竪坑底面より更に，0.75mほど白色粘土層まで掘り下げられている。主室底面は，長軸2.95m，短軸1.68mの隅丸長方形を呈し，平坦で硬く，深さは，遺構確認面より2.10mほどである。底面から1.2～1.53mのところで内傾しているが，これは天井部の崩落の痕跡である。壁は，南東壁がややオーバーハング状に立ち上がっているが，他の壁は，ほぼ垂直に立ち上がっている。

覆土は，暗褐色土，にぶい褐色土，褐色土からなり、暗褐色土はさらに3層，褐色土も3層に細分される。下層の褐色土は，ローム粒子，ロームの大・小ブロックを含みザクザクしており，天井部が崩れ落ちたものと思われる。

遺物は，少量の縄文土器片、土師器片，陶器片が覆土から出土している。陶器片は，常滑系の鉢の破片で室町時代の15世紀頃に比定されるものと思われる。

第6号地下式坑（第39号土坑を変更，第140図）

本坑は，調査区の南西部J2g$_4$区を中心に確認された地下式坑で，第1号地下式坑の南西側0.4mに位置している。

本坑は，竪坑と主室からなり，全長は3.34mほどで，主軸方向は，N－83°－Wを指している。西側の竪坑底面は，径0.90mほどの不定形を呈し，平坦で硬く，深さは，遺構確認面より1.23mmほどである。壁は，ほぼ垂直に立ち上がっている。主室は，竪坑底面よりさらに，1.16mほど白

色粘土層まで掘り下げられている。主室底面は，長軸2.24m，短軸1.72mの隅丸長方形を呈し，平坦で硬く，深さは，遺構確認面より2.39mほどである。底面のほぼ中央部に径0.80mほどのほぼ円形を呈し，深さ0.18mの皿状を呈する落ち込みが検出されている。底面から1,24mのところで内傾しているが，これは天井部の崩落の痕跡である。壁は，西壁の竪坑部が外傾して立ち上がっているが，他の壁は，ほぼ垂直に立ち上がっている。西壁の竪坑から0.41mのところに足場と思われる段を有している。

覆土は，褐色土，明褐色土，極暗褐色土，にぶい明褐色土からなり，褐色土はさらに2層，明褐色土は2層に細分され，下層に堆積している明褐色土は，天井部が崩落したものと思われる。

遺物は，出土しなかった。

第7号地下式坑（第40号土坑を変更，第140図）

本坑は，調査区の南西部K2a_3区を中心に確認された地下式坑で，第8号地下式坑の南東側5.90mに位置している。

本坑は，竪坑と主室からなり，この竪坑は，本坑から，北東側に接している第5号地下式坑の竪坑にもなっている。全長は3.50mほどで，主軸方向は，N－80°－Wを指している。本坑は，他の地下式坑と違い，天井部が残っていた。南東側の竪坑の底面は，長軸1.40m，短軸1.01mの不定形を呈し，主室へゆるやかに傾斜して続いている。深さは，遺構確認面より1.35mほどである。壁は，主室への入口部のある北西壁がほぼ垂直に立ち上がり，他の壁は，外傾して立ち上がっている。主室は，竪坑底面よりさらに，1.20mほど赤砂混じりの粘土層まで掘り下げられている。主室への入口部は，北西壁のほぼ中央部に位置し，径0.65ほどの不整円形を呈している。主室底面は，長軸1.76m，短軸1.32mの隅丸長方形を呈し，平坦で硬い。壁は，南，北壁がほぼ垂直に，西壁がやや内傾して，東壁が外傾して立ち上がり，底面から1.56mほどで天井部に達している。また，遺構確認面から天井部までの厚さは，1.15mほどである。

覆土は，入口部から自然流入しており，暗褐色，にぶい褐色，極暗褐色，褐色土が自然堆積している。極暗褐色土は3層に，褐色土は4層に細分される。

遺物は，陶器片1点が覆土から出土しているのみである。陶器片は，常滑系の鉢の破片で室町時代の15世紀頃に比定されるものと思われる。

第8号地下式坑（第64号土坑を変更，第140図）

本坑は，調査区の南西部J2j_2区を中心に確認され，第31号土坑の南西側1.4mに位置している。

本坑は，竪坑と主室からなり，全長は3.33mほどで，主軸方向は，N－69°－Eを指している。南西側の竪坑の底面は，長軸1.07m、短軸1.00mの不整方形を呈し，皿状を呈して硬く，深さは，

遺構確認面より0.69mほどである。壁は，外傾して立ち上がっている。主室は，竪坑底面よりさらに0.81mほど砂質粘土層まで掘り下げられている。主室底面は，長軸2.37m，短軸1.78mの長方形を呈し，平坦で硬く，深さは，遺構確認面より1.50mほどである。壁は，ほぼ垂直に立ち上がっている。南西壁のほぼ中央部，底面より0.20mのところに凹を有している。

覆土は，暗褐色土，褐色土，明褐色土からなり，明褐色土はさらに2層，褐色土は5層に細分される。下層は，崩れ落ちた天井部と思われる明褐色土が，ローム粒子，ロームの大・小ブロックを多量に含み堆積している。

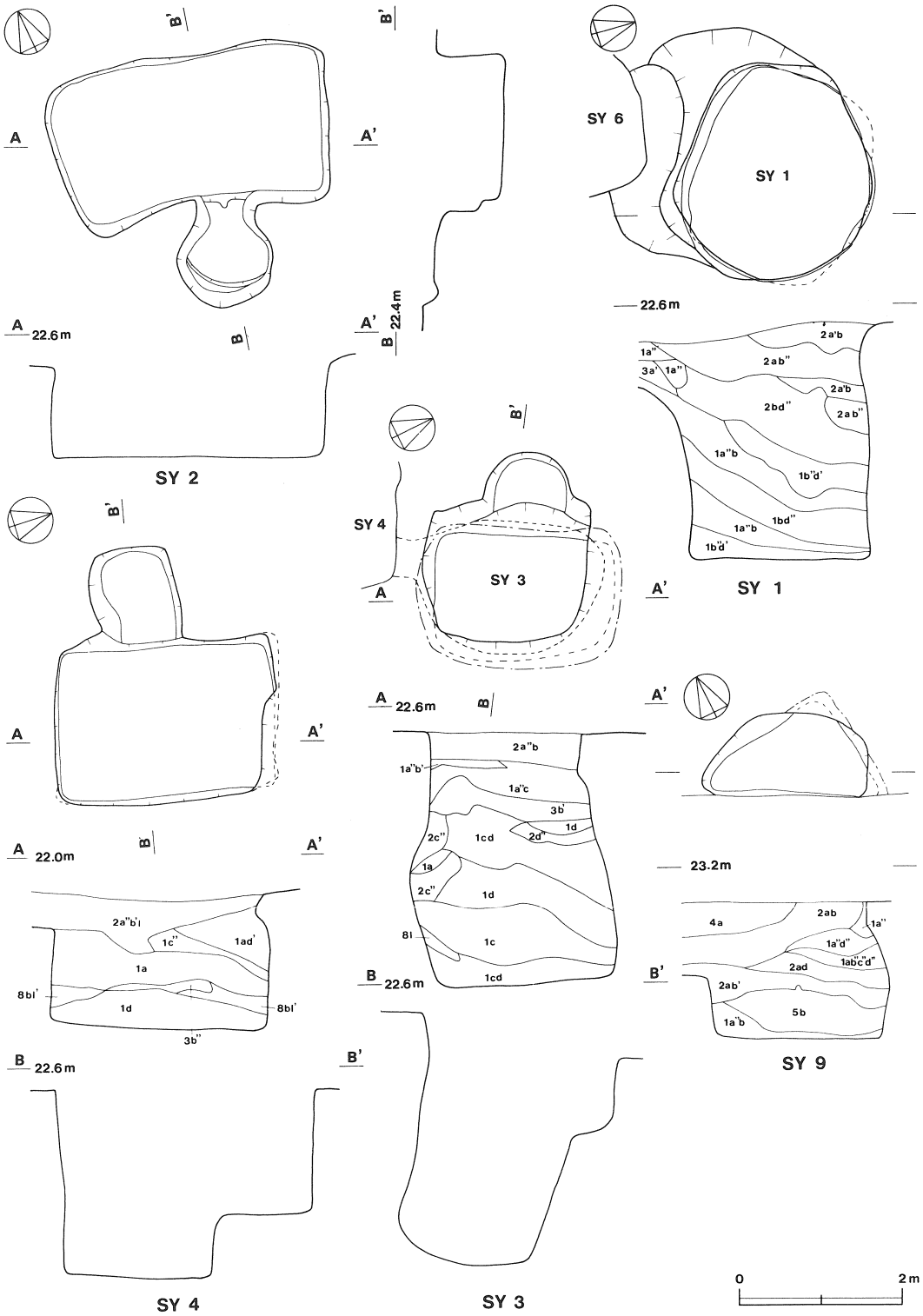
遺物は，縄文土器片が少量覆土から出土しており，周囲から流れ込んだものと思われ，本坑に伴うものではない。

第9号地下式坑（第71号土坑を変更，第139図）

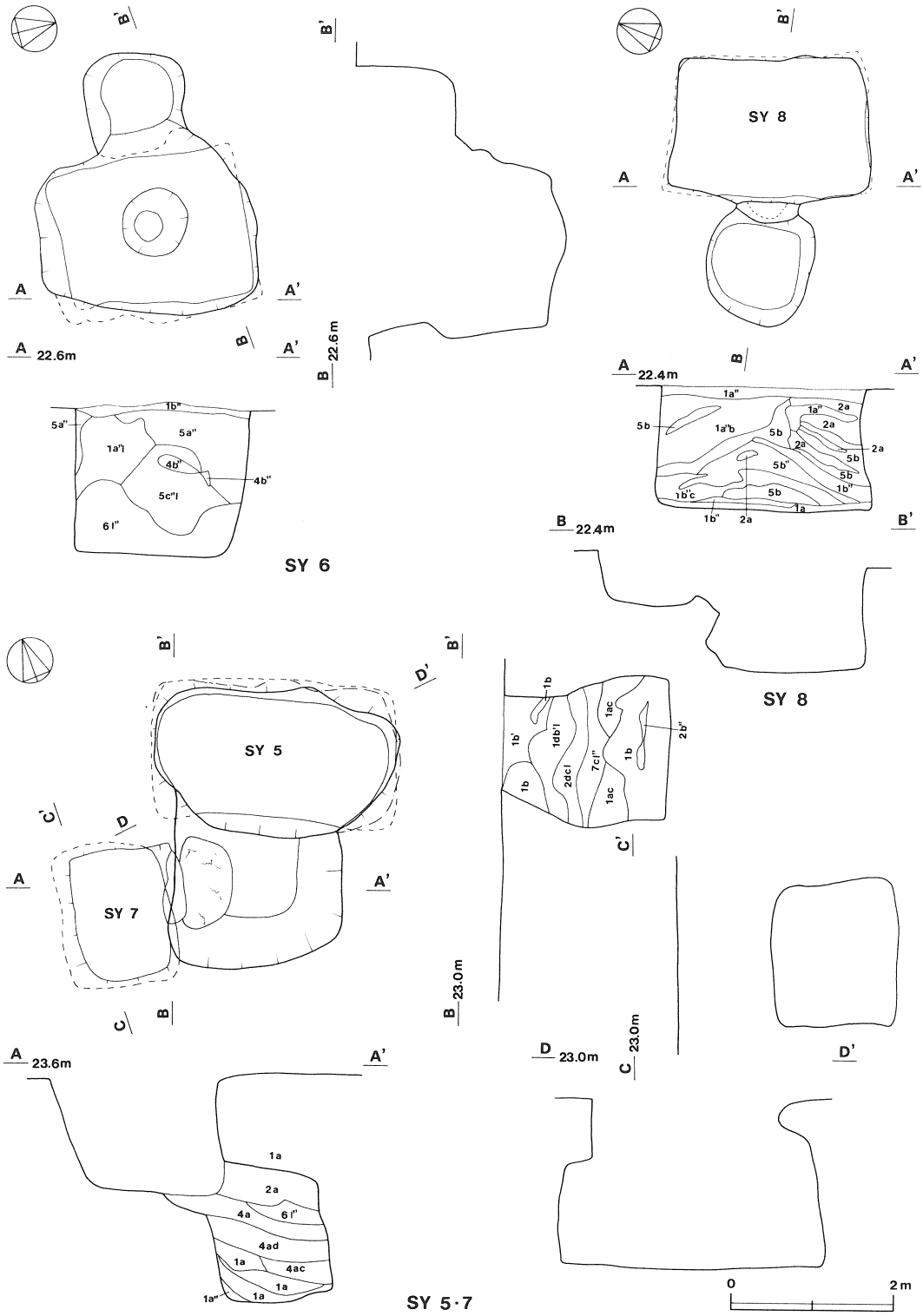
本坑は，調査区の南部K2c_8区を中心に確認された地下式坑で，第5号地下式坑の南東側15.8mに位置している。本坑の南西側は，農道下のため北東側半分だけしか調査できず，規模，形状は不明である。主室底面は，東西方向で1.07mであり，平坦で硬く，深さは，遺構確認面より1.70mほどである。底面から1.19mのところで内彎しているがこれは天井部の崩落の痕跡である。北，東壁ともほぼ垂直に立ち上がっている。

覆土は，極暗褐色土，暗褐色土，褐色土，明褐色土からなり，暗褐色土はさらに3層，褐色土は4層に細分されている。下層には，ローム粒子やローム大ブロックが多量に含まれており天井部が崩れ落ちたものと考えられる。

出土遺物は，縄文土器片が少量覆土から，また，覆土下層から非常にもろい獣骨片が出土している。



第139図　地下式坑実測図（1）



第140図　地下式坑実測図 (2)

第5節　埋　甕

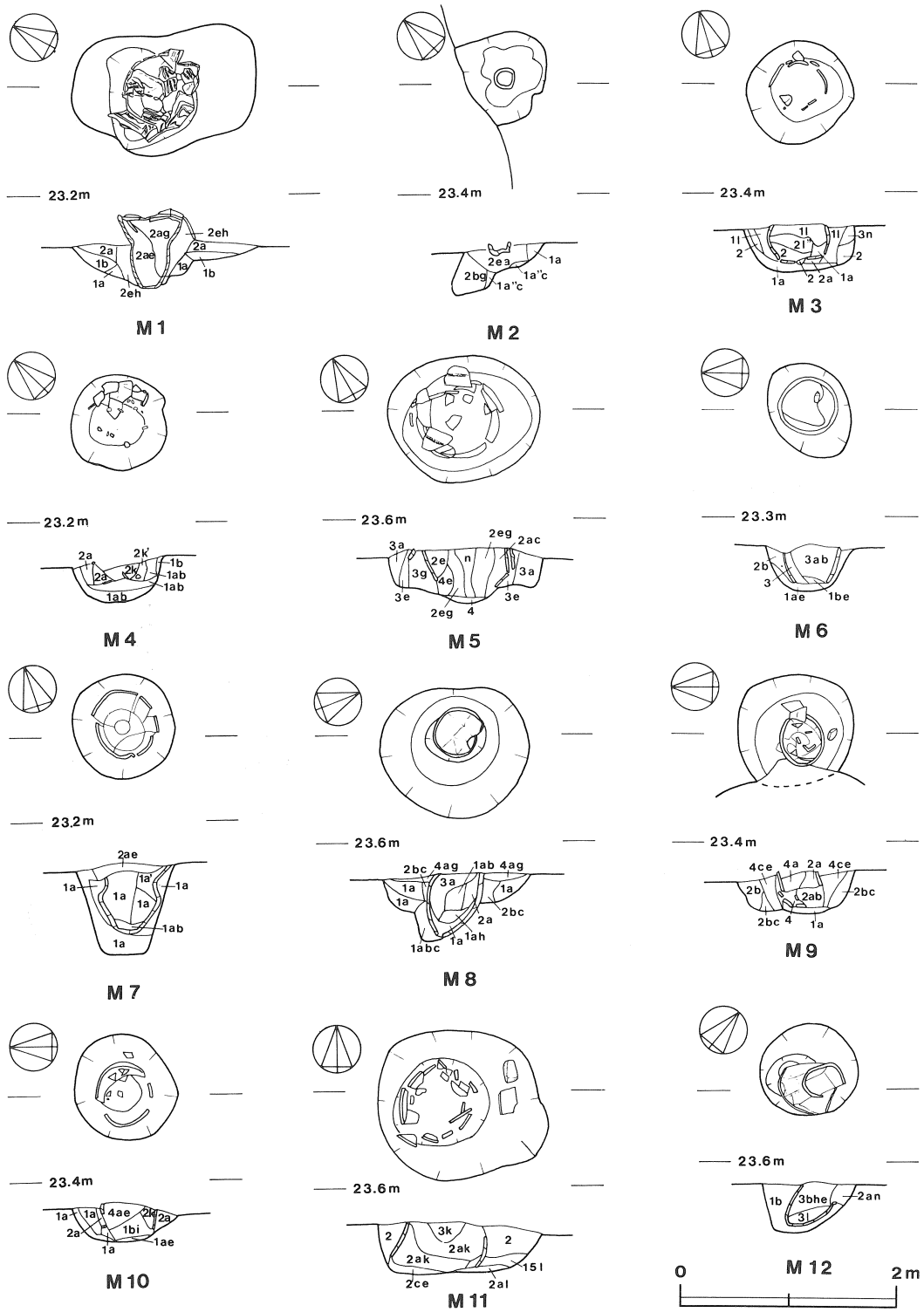
当遺跡から14基の埋甕が，調査区の中央から南側の住居跡や土坑の密集地域から検出されている。第33・38・44・45号住居跡から検出された5基は，屋内埋甕であり，特に，第45号住居跡からは，2基の埋甕（M6・13）が検出されている。その他の9基は，住居跡とは別個に単独で検出された屋外埋甕である。使用された埋設土器をみると，胴部片のみの2基を含めて底部を欠いているものが8基で過半数以上を占め，次いで口縁部の一部を欠くもの4基，ほぼ完形の土器と底部のみは1基ずつである。ほぼ完形の深鉢形土器を使用したのは，第33号住居跡内にある第1号埋甕遺構で，大型の深鉢形土器の胴部片を蓋としてのせていた。また，第6号埋甕遺構の土器内のほぼ中央部の覆土からは，折れた状態の磨製石斧が1点出土しており注目される。

埋甕遺構の時期は，縄文時代後期初頭に比定されるものが大半を占めるが，第10・14号埋甕遺構は，出土遺物から縄文時代後期前葉の堀之内Ⅰ式に比定されるものと思われる。

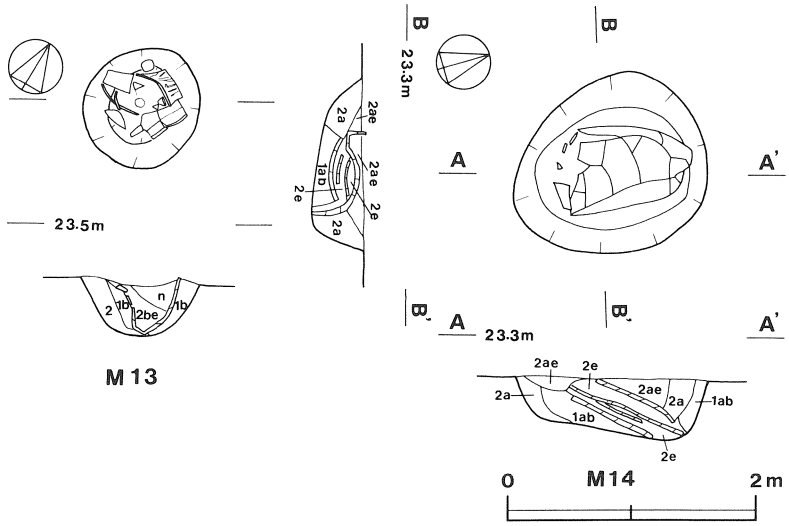
掘り方の長径方向は，第143図からみて各方向に散らばり，掘り方の規則性は見い出せないが，埋設土器の置き方は，垂直に近い置き方をしている。第14号埋甕遺構を除いては，底面と垂直，あるいは垂直に近い置き方である。性格については，決め手となる資料は出土していないが，墓壙的な施設と思われる。なお検出した埋甕遺構を一覧表にすると次の通りである。

表3　埋甕一覧表

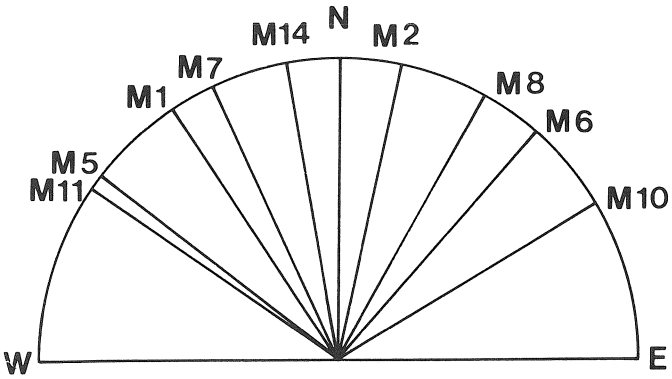
埋甕番号	位置	長径方向	平面形	傾斜角	掘り方規模 長径×短径(m)	掘り方規模 深さ(cm)	覆土	出土遺物	備考
M 1	J3g6	N－34°－W	不整長方形	90°	0.86×0.55	38	人為	深鉢，後期初頭（第145図1・2）	完形 第33号住居跡内（第141図）
M 2	I2h9	N－12°－E	不定形	86°	0.45×0.4	13	人為	深鉢，後期初頭（第145図3）	底部 第34号土坑を変更（第141図）
M 3	K3a6		円形	90°	0.49×0.49	21	人為	深鉢，後期初頭（第146図4）	胴上半部，底部欠 第56号土坑を変更（第141図）
M 4	J2j0		円形	計測不能	0.46×0.45	17	人為	深鉢，後期初頭（第146図5）	胴部片 第65号土坑を変更（第141図）
M 5	J3b5	N－53°－W	楕円形	88°	0.72×0.6	26	人為	深鉢，後期初頭（第146図6）	胴下半部欠 第72号土坑を変更（第141図）
M 6	I3i3	N－41°－E	楕円形	90°	0.49×0.38	22	人為	深鉢，後期初頭（第147図7）	胴上半部，底部欠，覆土内に磨製石斧出土，第81号土坑を変更 第45号住居跡内（第141図）
M 7	J3b6	N－25°－W	楕円形	88°	0.52×0.48	44	人為	深鉢，後期初頭（第147図8）	口縁部一部欠 第82号土坑を変更（第141図）
M 8	I3i1	N－29°－E	不整楕円形	72°	0.69×0.63	31	人為	双耳甕，後期初頭（第148図9）	口縁部，底部欠 第84号土坑を変更（第141図）
M 9	J3b3		円形	81°	0.57×(0.55)	20	人為	深鉢，後期初頭（第148図10）	口縁部欠 第91号土坑を変更（第141図）
M 10	J3c3	N－59°－E	不整楕円形	84°	0.53×0.44	19	人為	深鉢，後期前葉（第148図11）	胴部片 第92号土坑を変更 第38号住居跡内（第141図）
M 11	J3e4	N－55°－W	不整楕円形	76°	0.84×0.72	24	自然	深鉢，後期初頭（第149図13）	胴下半部欠 第106号土坑を変更（第141図）
M 12	I3i3		円形	55°	0.46×0.44	23	人為	深鉢，後期初頭（第148図12）	口縁部一部欠 第107号土坑を変更 第44号住居跡内（第141図）
M 13	I3i4		円形	66°	0.5 ×0.47	25	人為	深鉢，後期初頭（第149図14）	口縁部，胴下半部 第108号土坑を変更 第45号住居跡内（第142図）
M 14	K3e4	N－10°－W	不整楕円形	32°	0.81×0.70	25	人為	深鉢，後期前葉（第150図15）	口縁部，胴部，底部欠 第117号土坑を変更（第142図）



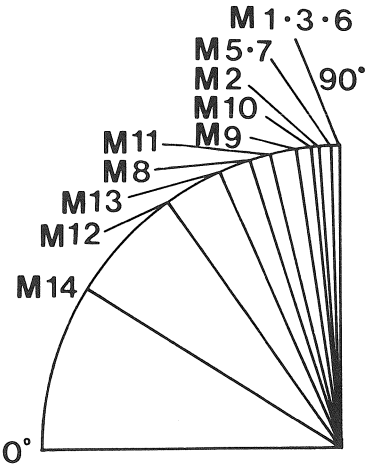
第141図　埋甕遺構実測図　(1)



第142図　埋甕遺構実測図 (2)



第143図　埋甕遺構の掘り方の長径方向

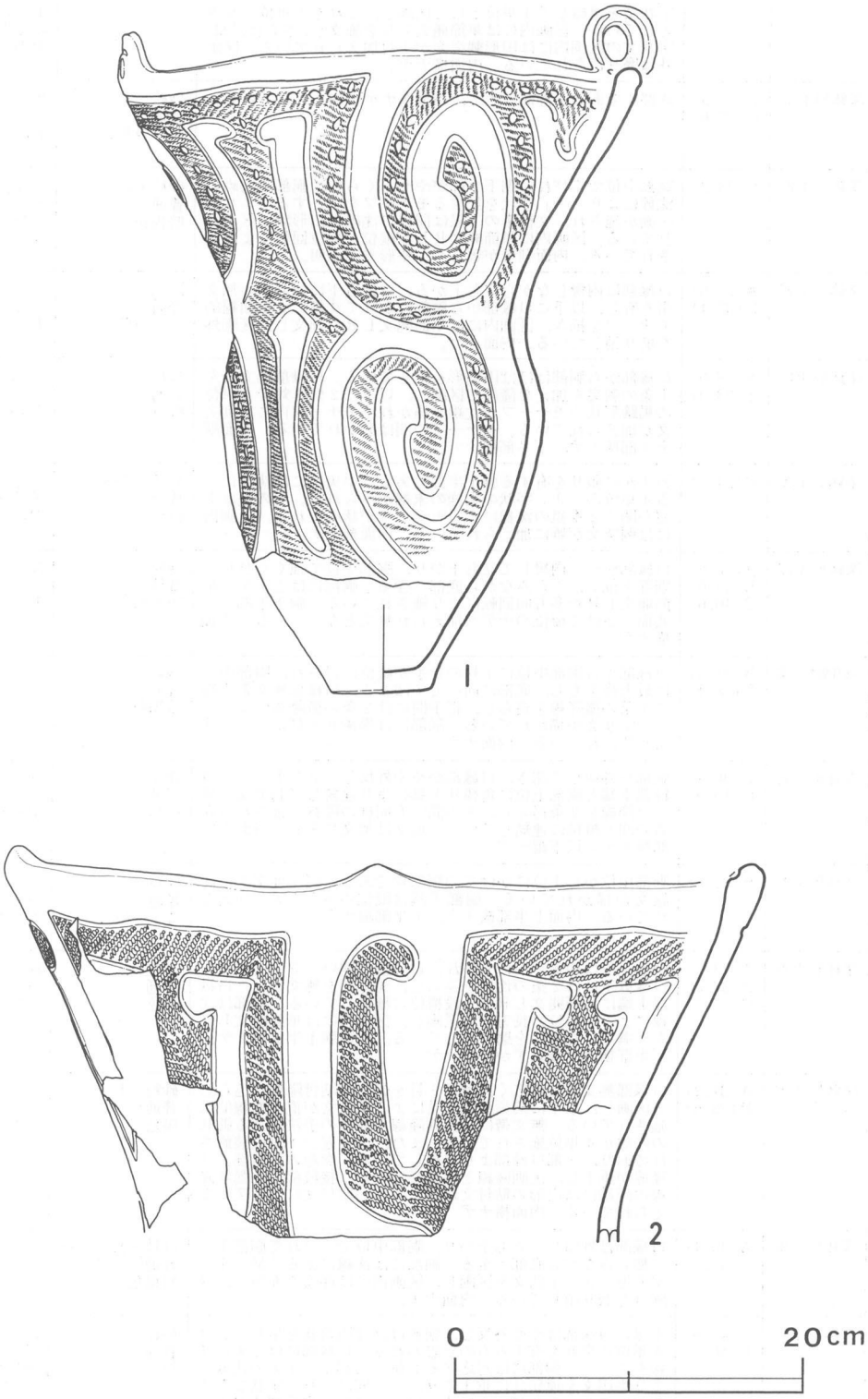


第144図　埋甕の傾斜角度

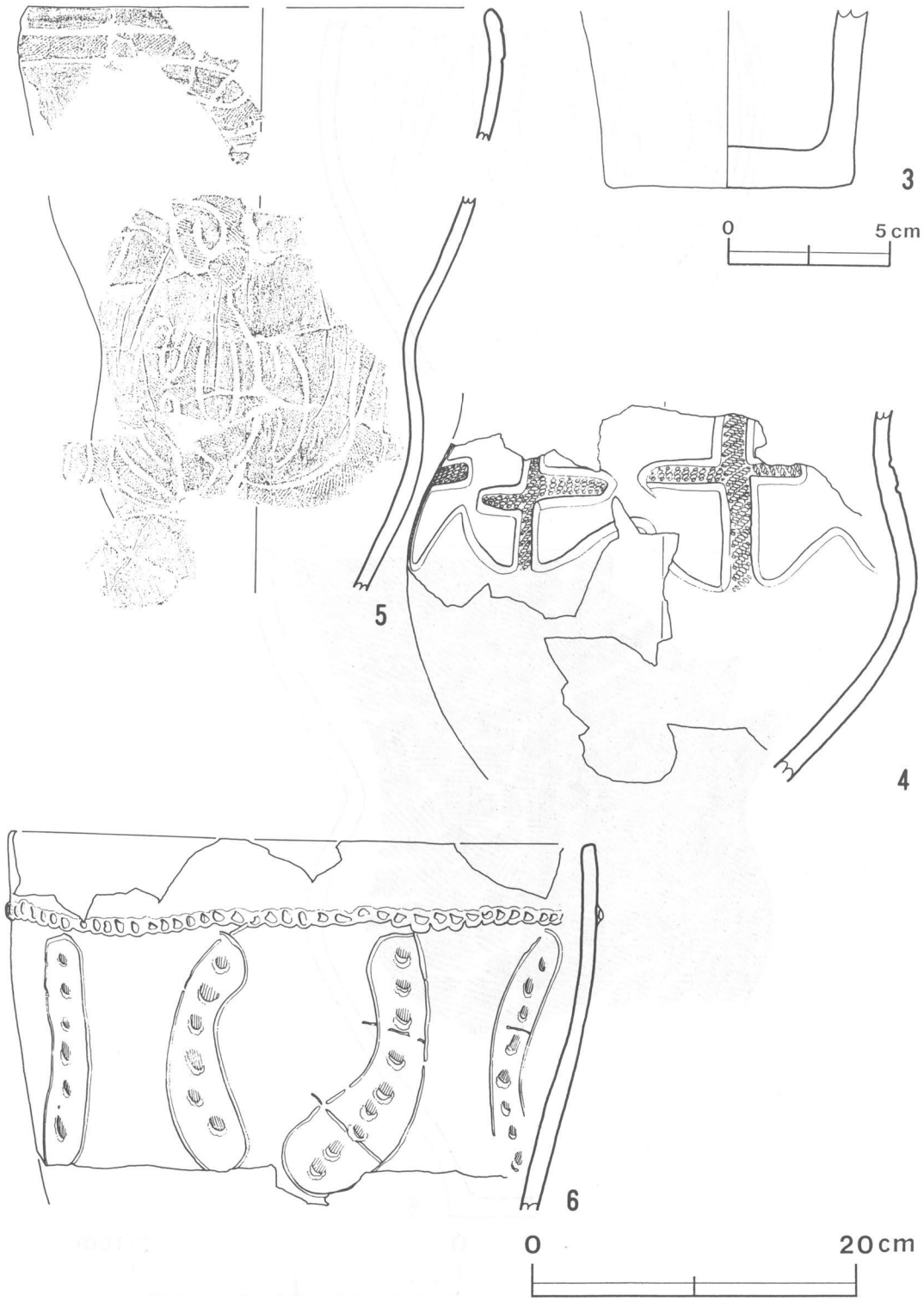
埋甕遺構出土土器観察表

図版番号	品種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
第145図 1	深鉢形土器	A 30.0 B 39.8 C 5.6	平縁で，大小1か所の対をなす突起を有し，胴部中央が少しくびれ，下半部がわずかに張る。胴上半部には沈線により右廻わりの，下半部は左廻わりの渦巻文を連続して区画している。区画内には縄文を施文し，さらに，円形刺突文を施している。内面横ナデ。	砂粒 普通 褐色	95% SI-33内出土 P264
2	深鉢形土器	A 43.0 B(22.4)	胴中央部がくびれ，くびれ部から口縁部が外傾して立ち上がっている。口縁部には4単位の小突起を有し，突起内に円形刺突文を施している。胴部には沈線により逆「J」字状文と「M」	砂粒・砂礫 普通 明赤褐色	50% SI-33内出土 口縁部片が

			字状文を連結して１単位として区画し，これを４単位くり返えしている。区画内には単節縄文ＬＲを施文し，さらに,「M」字状文の区画内には円形刺突文が１対加えられている。区画外は磨り消されている。内面横ナデ。		１の蓋の様に出土 Ｐ317
第146図 3	深鉢形土器	Ｂ(5.5) Ｃ 7.6	底部片である。外面はナデ，内面横ナデが加えられている。	砂粒 普通 にぶい褐色	10% ＳＫ－34 Ｐ366
4	深鉢形土器	Ｂ(23.2)	胴部中位でくびれ，胴下半部がややふくらむ。胴部に太めの沈線により「＋」字状を呈するモチーフを主とするパネル状区画が施され，文様帯の下限は同様の沈線で山形状に区ぎられている。区画内に単節縄文ＲＬが縦位，斜位回転により施されている。内面剥離が著しく，整形方向不明。	砂粒・砂礫 普通 暗褐色	40% ＳＫ－56 Ｐ492
5	深鉢形土器	Ａ(28.6) Ｂ(32.4)	口縁部は内彎しながら立ち上がる。口縁直下に幅の狭い無文帯を有し，以下に口縁部から胴部にかけて沈線による曲線的モチーフを描き，区画内には単節縄文ＬＲを施文し，区画外を磨り消している。内面ナデ。	砂粒 普通 にぶい橙色	30% ＳＫ－65 Ｐ494
6	深鉢形土器	Ａ 36.0 Ｂ(23.0)	口縁部から胴部はほぼ円筒形を呈している。口縁部無文帯を１条の刺突を加えた隆線で区画し，以下に２個１対で４単位の馬蹄形状のモチーフが沈線で描かれ，モチーフ内には刺突文が加えられている。モチーフの間は磨かれている。内面胴上半部横ナデ，下半部縦ナデ。	砂粒 普通 橙色	50% ＳＫ－72 Ｐ490
第147図 7	深鉢形土器	Ｂ(24.0)	わずかに張りを有する胴下半部である。中央部には沈線による４単位の「Ｊ」字状の文様の末端がみられる。その他は下端が開く２本組の沈線によるモチーフが認められる。区画内には刺突文が雑に加えられている。内面横ナデ。	砂粒・砂礫 普通 橙色	40% ＳＫ－81 Ｐ348
8	深鉢形土器	Ａ(36.6) Ｂ 42.0 Ｃ 10.6	口縁部がやや内彎して立ち上がり，胴部中位で強くくびれて胴部下位でふくらみながら底部へ至る。胴部にはこまかい単節縄文ＬＲが多方向回転により施されている。胴下半部から底面にかけて縦位のナデが加えられ無文となっている。内面横ナデ。	砂粒 普通 明赤褐色	70% ＳＫ－82 Ｐ485
第148図 9	双耳甕形土器	Ｂ(31.9) Ｃ(8.4)	口縁部から胴部中位に１対の把手が縦位に付され，胴部中位に最大径をもち，底部に向ってすぼまる。口縁部無文帯下端に１条の微隆線を巡らし，把手間には２条の微隆線により「Ｃ」字状文が描かれている。胴部には櫛歯状工具により波状文が描かれている。内面ナデ。	砂粒 普通 暗褐色	70% ＳＫ－84 Ｐ482
10	深鉢形土器	Ｂ(35.4) Ｃ 10.0	胴部が外傾して開き，口縁部がやや外反して立ち上がる。口縁部下端と胴部上位に角棒状工具により連続して刺突文を施した隆線を２条巡らし，その間にも同様の隆線が施され，両者の間を縦位に連結している。地文は無文である。内面上端部横ナデ，以下縦ナデ。	砂粒 普通 赤褐色	70% ＳＫ－91 Ｐ483
11	深鉢形土器	Ｂ(22.9)	胴部中位から下位にかけての胴部片である。縄文地文上に沈線文が描かれている。胴部下端は縦位のヘラナデが加えられている。内面上半部横ナデ，下半部縦ナデ。	砂粒 普通 にぶい橙色	30% ＳＫ－92 Ｐ364
12	深鉢形土器	Ａ 23.7 Ｂ 27.0 Ｃ 8.6	胴部上位はゆるやかにくびれ，口縁部は開いて立ち上がる。口縁直下には２条の沈線を巡らし，沈線間を無文とし，口縁部上端に単節縄文ＬＲを１段横位に施文している。胴部は沈線による５単位の長方形を区画し，区画内には単節縄文ＬＲを充填し，沈線間を磨り消している。内面胴上半部横ナデ，下半部横ナデ後わずかに縦ナデ。	砂粒 普通 褐色	80% ＳＫ－107 Ｐ350
第149図 13	深鉢形土器	Ａ(37.2) Ｂ(23.6)	口縁部無文帯は幅広く，キザミ目を付した貼付隆線を巡らして区画し，以下に櫛歯状施文具による条線文が直，曲線的に施されている。無文帯には区画隆線と同様の手法による弧状の隆線が４単位施されている。また，小突起が４単位装飾されており，一部口縁部より突出している。突起の波頂部より隆線が垂下し，区画隆線と接続している。接続部分と弧状隆線の両端には円形の貼付文が加えられ，貼付文には刺突が加えられている。内面横ナデ。	砂粒・長石 普通 褐色	40% ＳＫ－106 Ｐ489
14	深鉢形土器	Ａ(40.4) Ｂ 45.0 Ｃ 8.0	口縁部は外傾して立ち上がり，胴部中位でくびれて胴部下位で膨らみながら底部へ至る。胴部には沈線による「Ｍ」字状文や逆「Ｊ」字状文を区画し，区画内には縄文を充填し，区画外を磨り消している。内面ナデ。	砂粒・長石・礫 普通 暗褐色	70% ＳＫ－108 Ｐ349
第150図 15	深鉢形土器	Ａ(46.8) Ｂ(48.0)	平縁の口縁部はやや外反し，胴部はほぼ円筒状を呈しており，４単位の突起を有するものと思われる。口縁部には２条の沈線を巡らし，胴部には対応する２個の突起下に１条の沈線により半円文を連鎖状に垂下させ，その間に「Ｈ」字状などの曲線的モチーフを描いている。地文には粗い単節縄文ＲＬを横位回転で施文している。内面斜位，縦位ナデ。	砂粒 普通 橙色	60% ＳＫ－117 横位で出土 Ｐ481

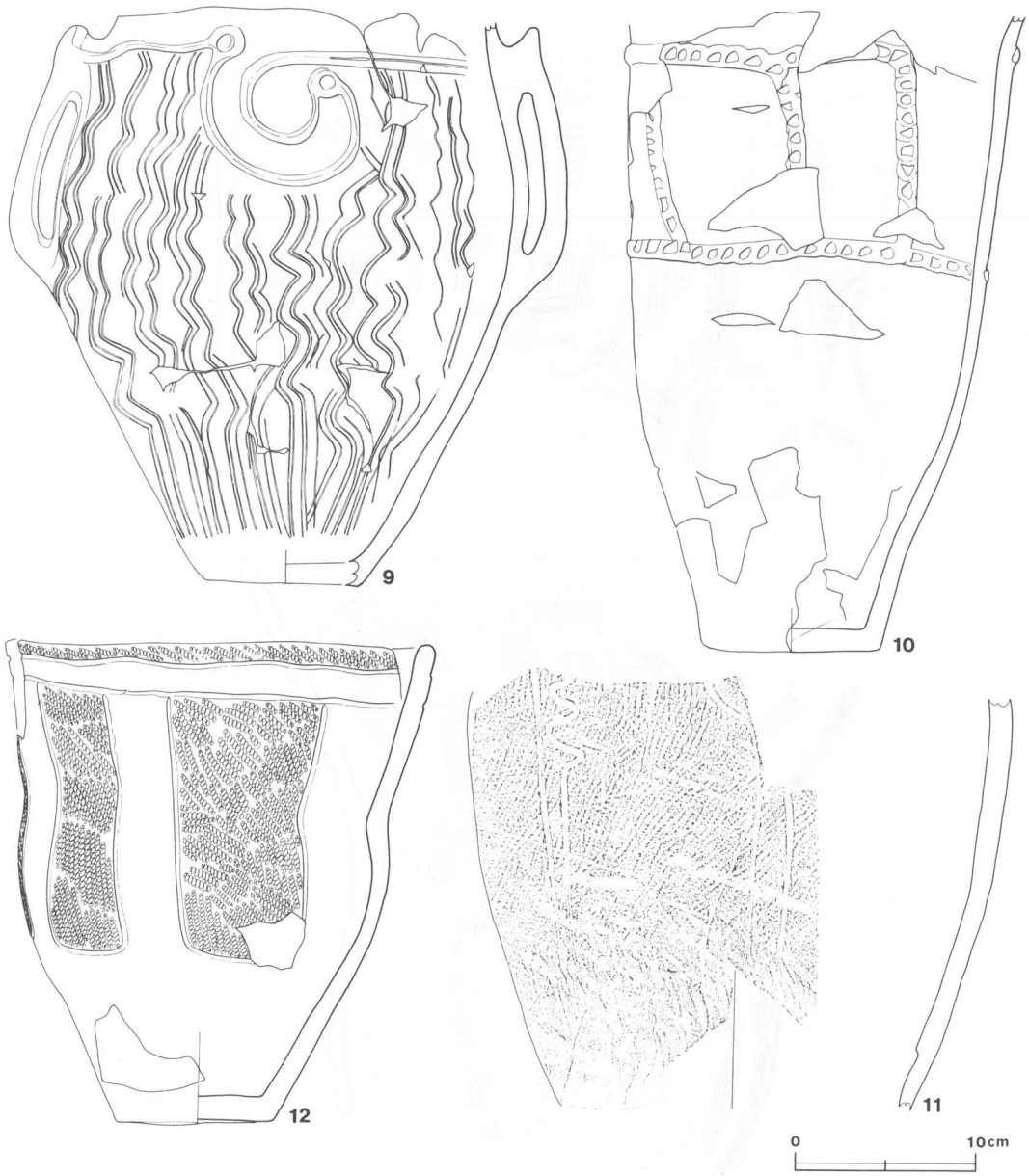


第145図　埋甕遺構出土遺物実測図 (1)

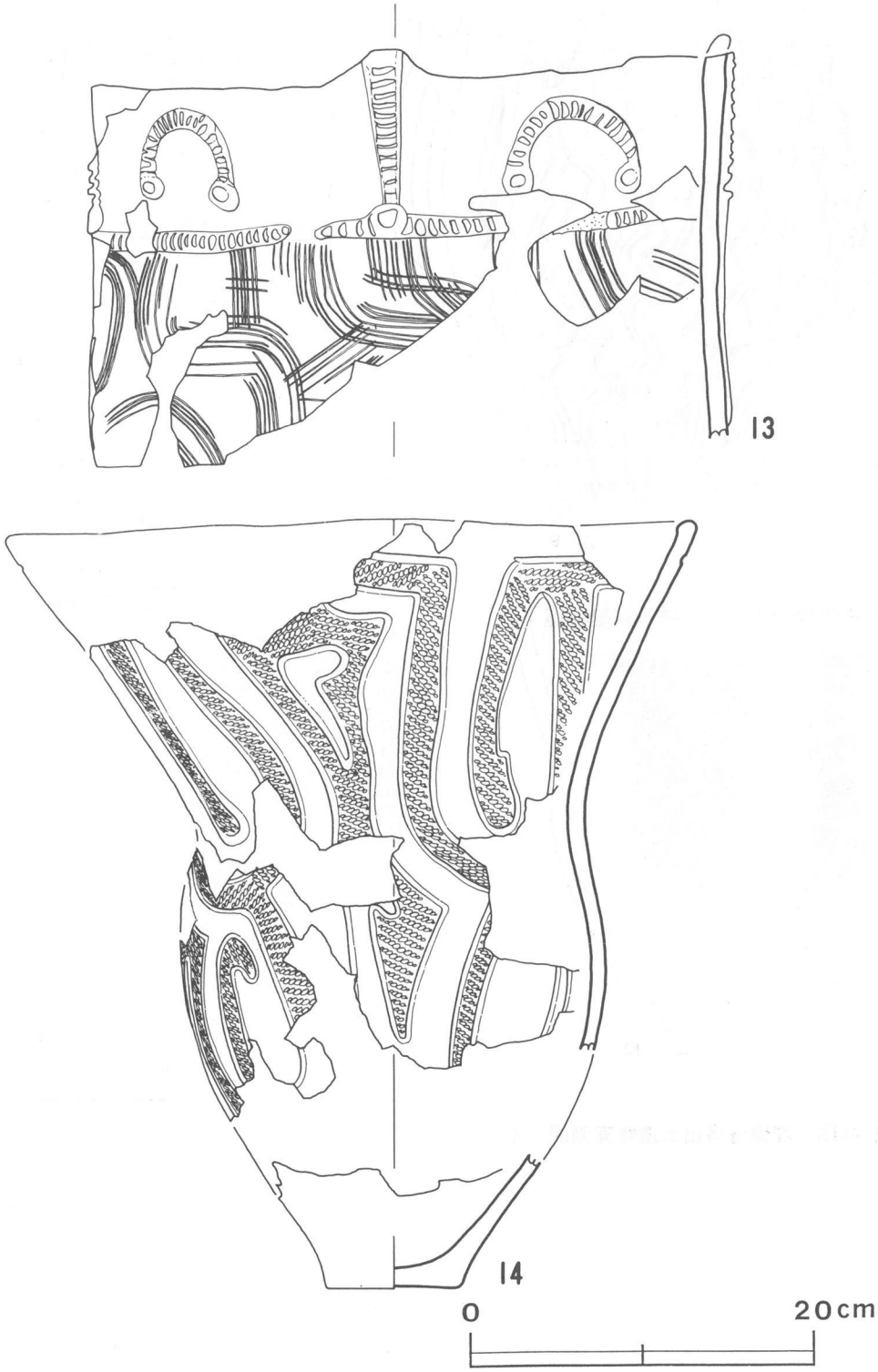


第146図　埋甕遺構出土遺物実測図（2）

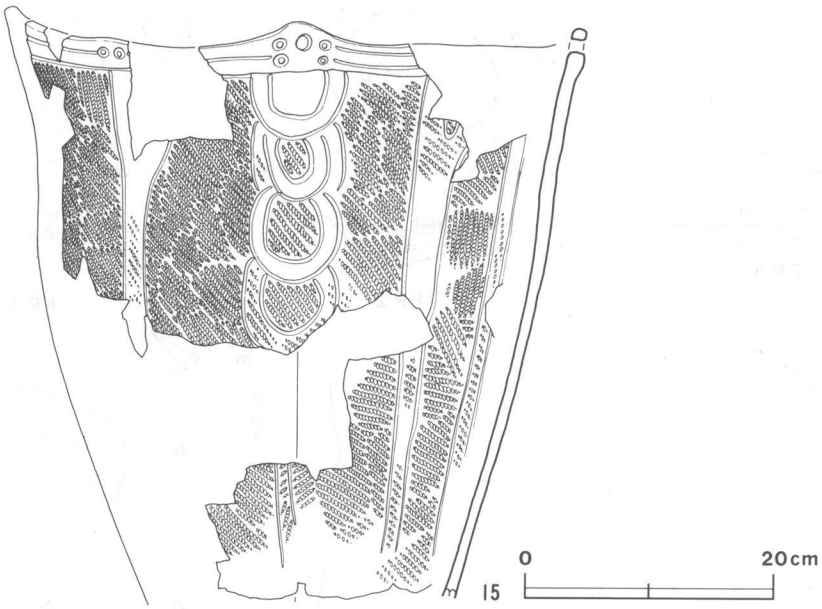
第147図　埋甕遺構出土遺物実測図（3）



第148図　埋甕遺構出土遺物実測図　(4)



第149図　埋甕遺構出土遺物実測図 (5)



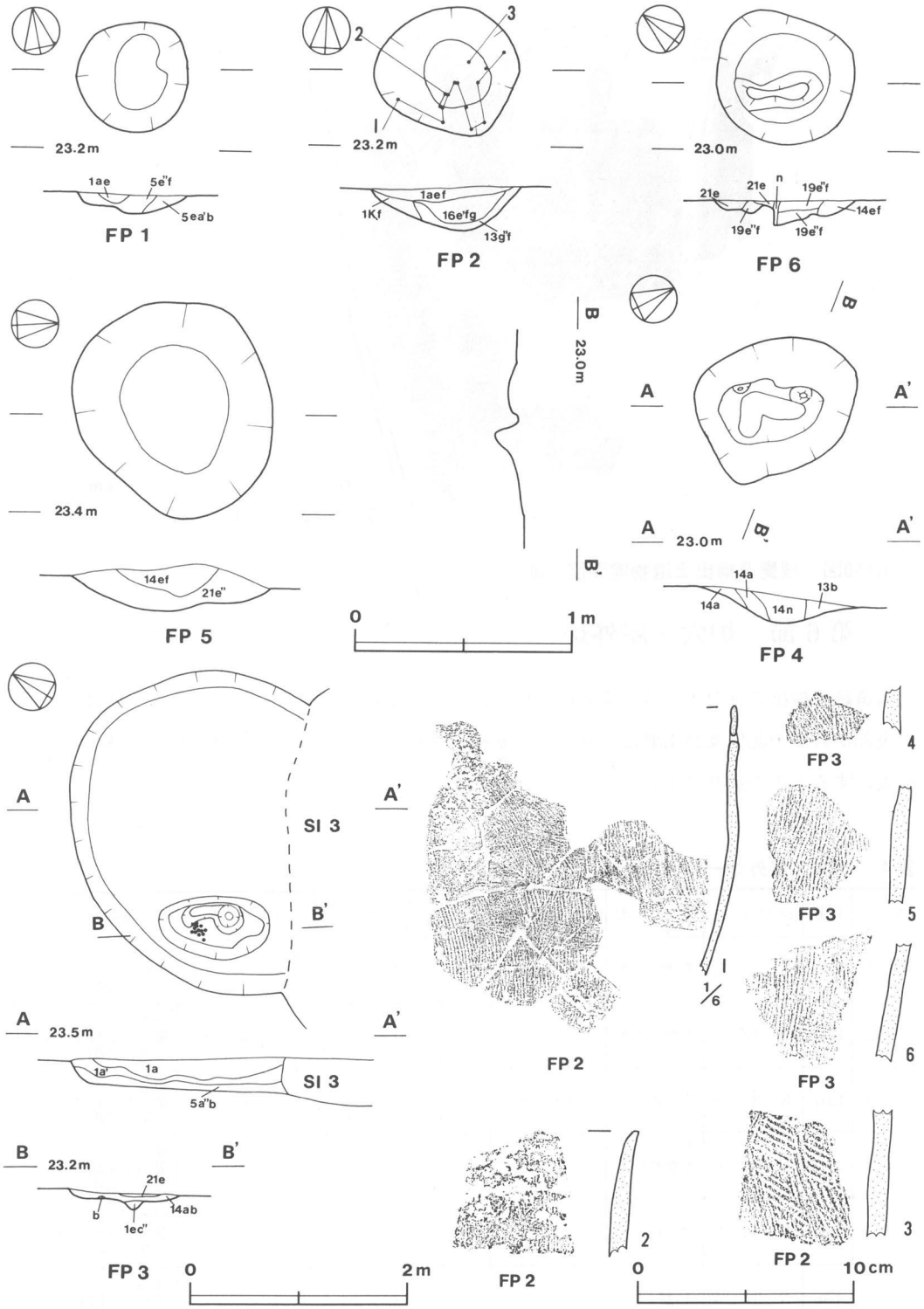
第150図　埋甕遺構出土遺物実測図（6）

第6節　炉穴・屋外炉

当遺跡で検出された炉穴は，調査区の中央部からやや北側で1基のみ検出され，他は屋外炉で，中央部からやや北側及び南側に点在して5基検出されている。これらの炉穴及び屋外炉を以下一覧表にすると次の通りである。

表4　炉穴・屋外炉一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模		炉跡の規模		出土遺物	備考
				長径×短径(m)	深さ(cm)	長径×短径(m)	深さ(cm)		
FP1	I3a8	N－23°－E	不整円形			0.54×0.51	8		屋外炉 第9－A号土坑を変更 （第151図）
FP2	I3b8	N－10°－W	不整楕円形			0.67×0.58	20	土器片13点	屋外炉 第9－B号土坑を変更 （第151図）
FP3	I3a5	N－35°－E	楕円形	3.06×(2.71)	33	1.05×0.58	13	土器片21点	炉穴 第11号土坑を変更 （第151図）
FP4	J3j1	N－4°－E	不整楕円形			0.76×0.61	13		屋外炉 第68号土坑を変更 （第151図）
FP5	J3j1	N－46°－E	楕円形			1.0 ×0.9	20		屋外炉 第70号土坑を変更 （第151図）
FP6	J3b6	N－17°－W	不整円形			0.67×0.65	11		屋外炉 第126号土坑を変更 （第151図）



第151図　炉穴・屋外炉実測図

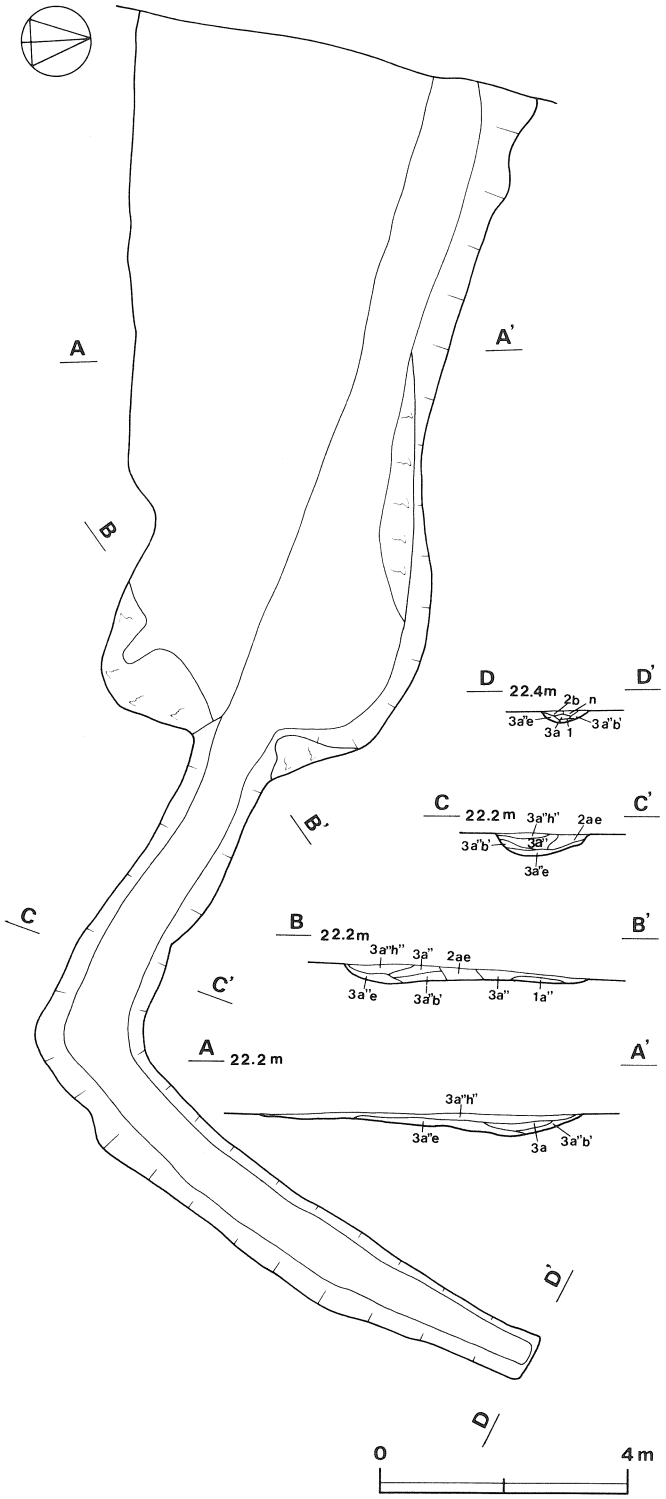
第7節　溝

第1号溝（第152図）

本跡は，調査区の北部G3区に確認され，第2号溝の北東側24.6mに位置している。溝の北東端はG3d_6区に確認され，主軸方向N－42°－Eを指し，南西方向のG3f_5区まで，直線的に9.7m延び，さらに，G3f_5区では北西方向に角度を変えて主軸方向N－63°－Wで直線的に17.5m延びて調査区外に至っている。なお，G3d_6区の北東側の延長は，農道の下を通って隣接する7区の第8号溝へと接続している。5区における長さは27.2mで，7区の第8号溝と合わせた総延長は55.6mである。

溝の幅は、G3d_6区からG3e_4区までが，上幅80～150cm，下幅37～90cmであり，G3e_4区からG3d_1区までは幅が広く上幅470～665cm，下幅450～570cmである。壁は，ロームで硬く，ゆるやかに立ち上がり，底面は，平坦で，遺構確認面からの深さは，18～34cmである。断面形は，皿状を呈しており，底面のレベルは，A～A′で22.02m，B～B′で21.86m，C～C′で21.93m，D～D′で21.86mである。

覆土は，上層に少量のローム粒子を含む暗褐色土が，下層に少量の



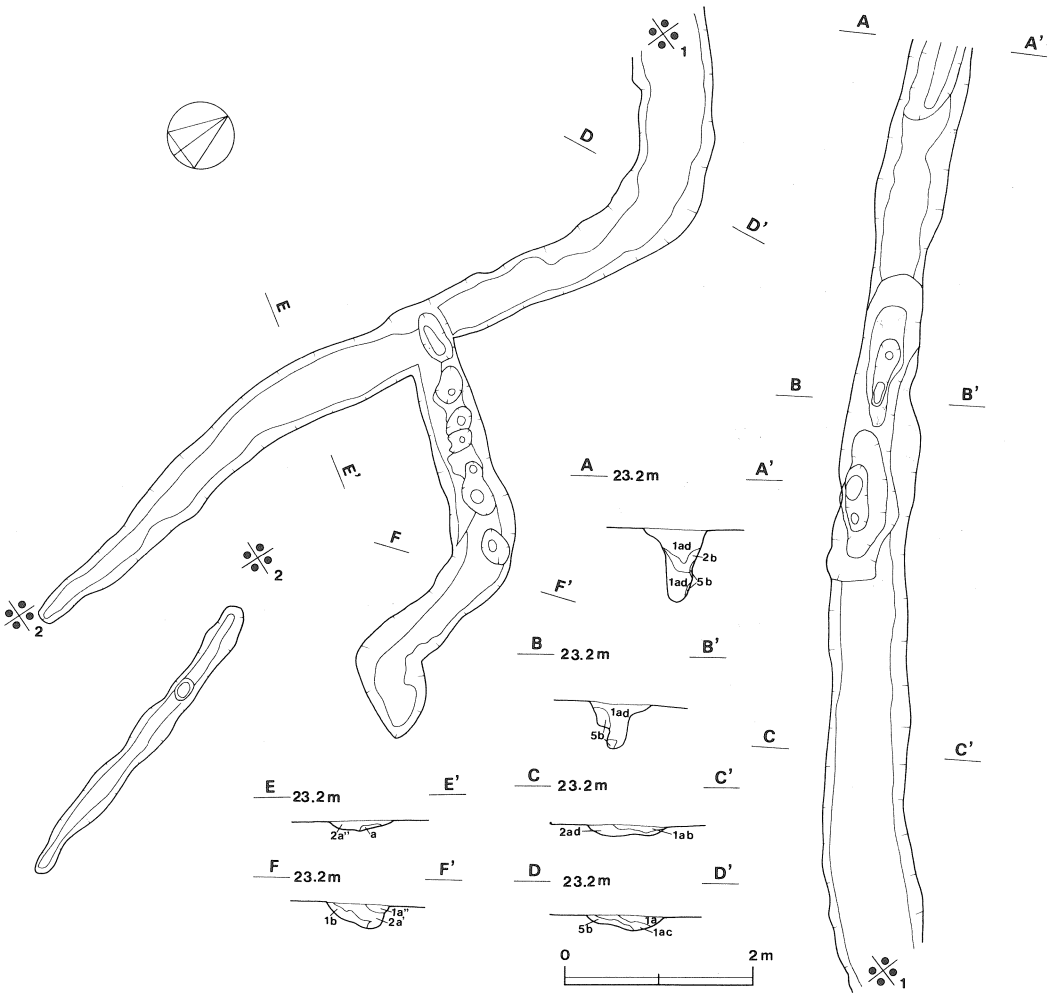
第152図　第1号溝実測図（1）

ローム粒子を含む褐色土が自然堆積している。

遺物は，縄文土器片が少量出土しているが，覆土上層からであり，本跡の時期決定の資料とはならない。

第2号溝（第153図）

本跡は，調査区の北東部H3区に確認され，第1号溝の南東側24.6mに位置している。溝の南東端は，H3g_8区に確認され，そこから，H3f_8区で途切れるが，直線的に北西へH3e_8区まで延び，さらに，北方向にH3d_8区まで延びている。H3e_8区から本跡は，2方向に分かれ，北西方向のH3b_6区の農道の下に至っている溝と，H3e_8区から，東方向にほぼ直角に曲がり，H3d_9区まで蛇行している溝とになる。H3g_8区からH3e_8区までの長さは7.2mで，主軸方向は，N－16°－Wを指して



第153図　第2号溝実測図（2）

いる。H3e_8区から北方向H3d_8区までの長さは，5.5mで，主軸方向は，N－13°－Eを指し，H3d_8区からH3b_6区までの長さは，12mで，主軸方向は，N－55°－Wを指している。また，H3e_8区でほぼ直角に東方向に蛇行して延びている長さは，4.7mで，主軸方向は，N－75°－Wを指している。総延長は，29.5mである。

溝の幅は，H3g_8区からH3f_8区の間は，やや狭く上幅19～33cm，下幅10～20cmであるが，その他は，上幅45～85cm，下幅15～71cmである。壁は，ロームで硬く，H3b_6区からH3c_7区までは，外傾して立ち上がり，他は，ゆるやかに立ち上がっている。底面もロームで硬く，H3b_6区からH3c_7区の間は，凸凹しているが，他は，全体的に平坦である。遺構確認面からの深さは，11～95cmで，特に，H3c_6～H3c_7区の間には，ピット状の掘り込みが検出されているために深く，断面形は，「U」形を呈しており，その他は，全体的に「⌣」形を呈している。なおピット状の掘り込みについては性格不明である。 底面のレベルは，A～A′で21.89m，B～B′で22.73m，C～C′で23.08m，D～D′で22.7m，E～E′で23.08m，F～F′で22.93mである。

覆土は，上層にはローム粒子，ローム小ブロックを少量含む褐色土が，下層にはローム粒子を多量に含む明褐色土が自然堆積している。

遺物は，縄文土器片や陶器片を少量出土しているが，ともに覆土上層からで，本跡に伴うものではない。陶器片は，中・近世に比定されるものと思われる。

第3号溝（第154図）

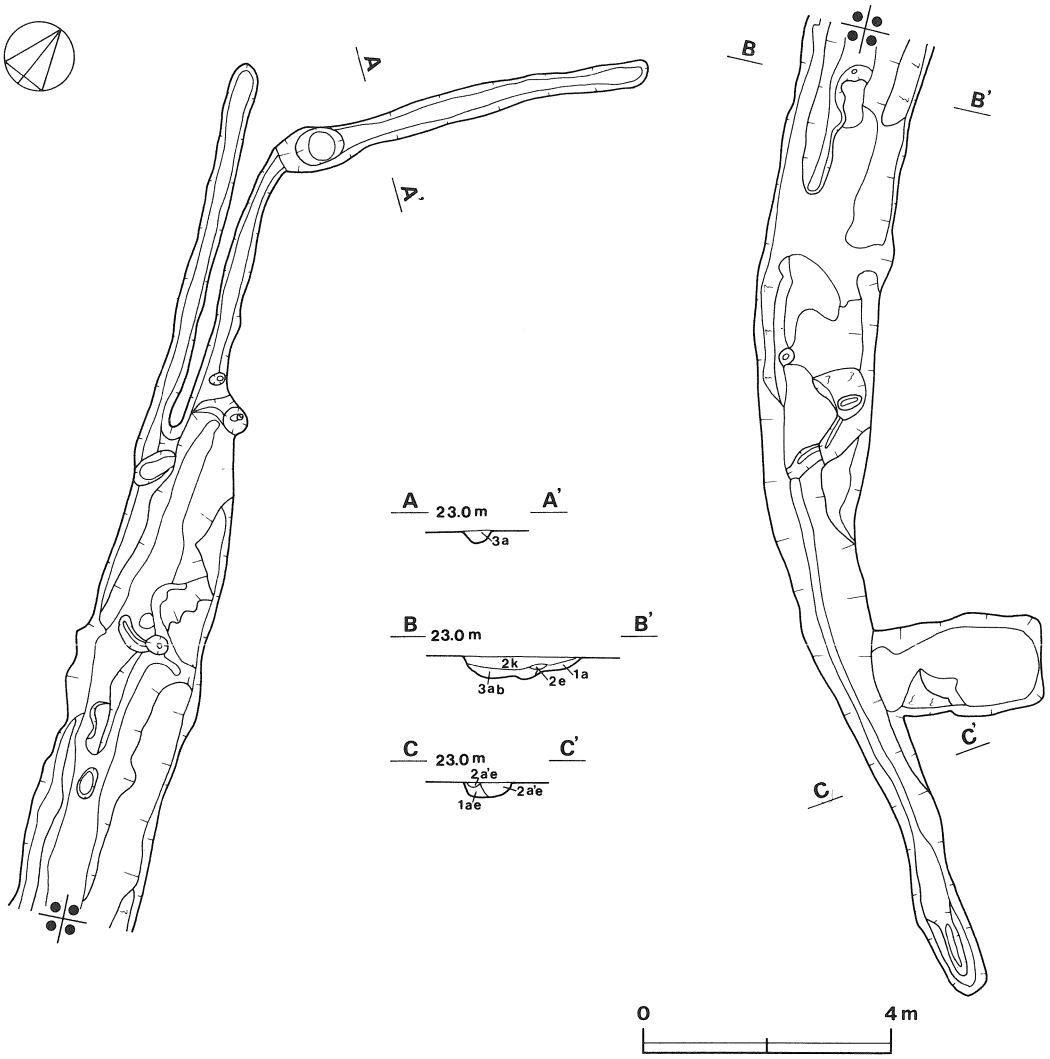
本跡は，調査区の北東部H3・I3・I4区に確認され，第2号溝の南東側10.6mに位置している。溝の南東端は，I4e_4区に確認され，そこから，北西方向にほぼ直線的にI4d_2区まで延びている。途中I4d_3区では，北東方向に角度を大きく変えて農道の下を通り昭和58年度調査した6区の第3号溝に接続している。さらに，I4d_2区で角度をやや変えて，ほぼ直線的にI3a_0区まで延び，ここで平行する2条の溝に分かれる。一方は，H3i_9区まで至り，他方は，H3i_0区で角度を北東方向に変えて延びながら農道の下を通ってやはり第6区の第12号溝に接続している。I4e_4区からI4d_2区までの長さは，9.6mで，主軸方向は，N－57°－Wを指し，I4d_3区から農道下までの長さは，2.8mで，N－45°－Eを指している。I4d_2区からH3i_9までの長さは，25.3mで，主軸方向は，N－27°－Wを指し，H3j_0区からH4h_1区の農道下までの長さは，4.4mで，主軸方向は，N－36°－Eを指している。5区の総延長は，42.1mである。また，5区と隣接する6区の間に農道があるため調査ができず推定になるが，本跡は，6区の第11号溝から5区第3号溝に，さらに，6区の第12号溝に続いている。第12号溝と6区の第13号溝とは，農道下でつながっているものと思われる。これらのことから，本跡は雷紋（らいもん）状に渦まいて連続しているものと思われる。

溝の幅は，I4e_4区からI3a_0区の2条に分かれるまでは，上幅65～203cm，下幅17～68cm，H3j_0

区からH4h_1区の農道下までは，上幅38～55cm，下幅14～26cmでやや狭くなっている。壁は，ロームで締まり外傾して立ち上がっている。底面もロームで硬く締まっており，特に，I4区では凸凹している。断面形は「⌣」状を呈している。遺構確認面からの深さは，18～34cmである。底面のレベルは，A～A′で22.81m，B～B′で22.74m，C～C′で22.82mである。

覆土は，主として，ローム粒子を少量含む暗褐色土が自然堆積している。

遺物は，少量の縄文土器片，土師器片，陶器片が覆土から出土している。陶器片は常滑系のもので室町時代に比定されるものと思われる。



第154図　第3号溝実測図（3）

第4－A号溝（第155図）

本跡は，調査区の西部I2・I3区に確認され，第4－B号溝の北東側0.6mに並行している。溝の南東端は，I3d_2区に確認され，そこからほぼ直線的に北西方向にI3c_9区まで延びて調査区外の農道下に至っている。I3d_2区からI2c_9区までの長さは13mで，主軸方向は，N－64°－Wを指している。溝の幅は，上幅36～118cm，下幅20～65cmで，北西側の農道に近ずくにつれて広くなっている。I2c_9区では，壁が攪乱されているため溝の幅が広くなっている。壁は，ハードロームで硬く，ゆるやかに外傾して立ち上がっている。底面は，ハードロームで硬く，I3d_2区・I3d_1区・I2c_0区では中央が皿状に凹んでいるが，他は平坦である。遺構確認面からの深さは，9～57cmである。断面形は，皿状を呈している。底面のレベルは，A～A′で22.53m，B～B′で23.08mで，南東側から北西側に向かって若干傾斜している。I2c_9区の北東側には，平面形が長軸1.43m，短軸0.43mの隅丸長方形を呈し，長軸方向は，N－67°－Wを指して，底面からの深さが31cmを有する性格不明の落ち込みが検出されている。

覆土は，上層にローム粒子，ローム少ブロックを極少量含む暗褐色土が，下層にローム粒子を多量に含む明褐色土が自然堆積している。

遺物は，少量の縄文土器片，土師器片に，極少量の陶器片が出土している。いずれも覆土から出土しており，周囲からの流れ込みと思われる。陶器片は，常滑系のもので室町時代の15世紀頃に比定されるものと思われる。

第4－B号溝（第155図）

本跡は，調査区の西部I2・I3区に確認され，第4－A号溝の南西側0.6mに並行している。溝の南東端は，第7号溝と合流しているI3d_1区に確認され，そこからほぼ直線的に北西方向にI3c_9区まで延びて調査区外の農道下に至っている。I3d_1区からI3c_9区までは13.1mで，主軸方向は，N－65°－Wを指している。

溝の幅は，どの区においても上幅73～90cm，下幅15～23cmであるが，農道際のI2c_9区では，攪乱されているため若干広くなっている。底面もハードロームで硬く，平坦である。遺構確認面からの深さは，15～42cmである。断面は，皿状を呈している。底面のレベルは，A～A′で22.98m，B～B′で23.25mで，南東側から北西側へ若干傾斜している。I2c_9区においては，径67cmほどの円形を呈し，深さ46cmのピット1か所が検出されている。

覆土は，上層に極少量のローム粒子，ローム小ブロックを含む暗褐色土が，下層に多量のローム粒子を含む明褐色土が自然堆積している。

遺物は，縄文土器片，土師器片，陶器片が覆土から少量出土している。いずれも覆土から出土しているので周囲からの流れ込みと思われる。陶器片は，常滑系のもので15世紀頃に比定される

ものと思われる。

第4－C号溝（第155図）

本跡は，調査区の西部I2・I3区に確認され，第4－B号溝の南西側0.3mに並行している。溝の南東端は，I3e_1区に確認され，第7－A号溝と合流して，そこからI3d_1区までほぼ直線的に延び，さらに，やや角度を変えて直線的にI2c_9区まで延びて調査区外の農道下に至っている。I3e_1区からI3d_1区までの長さは，3.3mで，主軸方向は，N－49°－Wを指している。I3d_1区から，I2c_9区までは，9.4mで，主軸方向は，N－67°－Wを指している。総延長は，12.7mである。

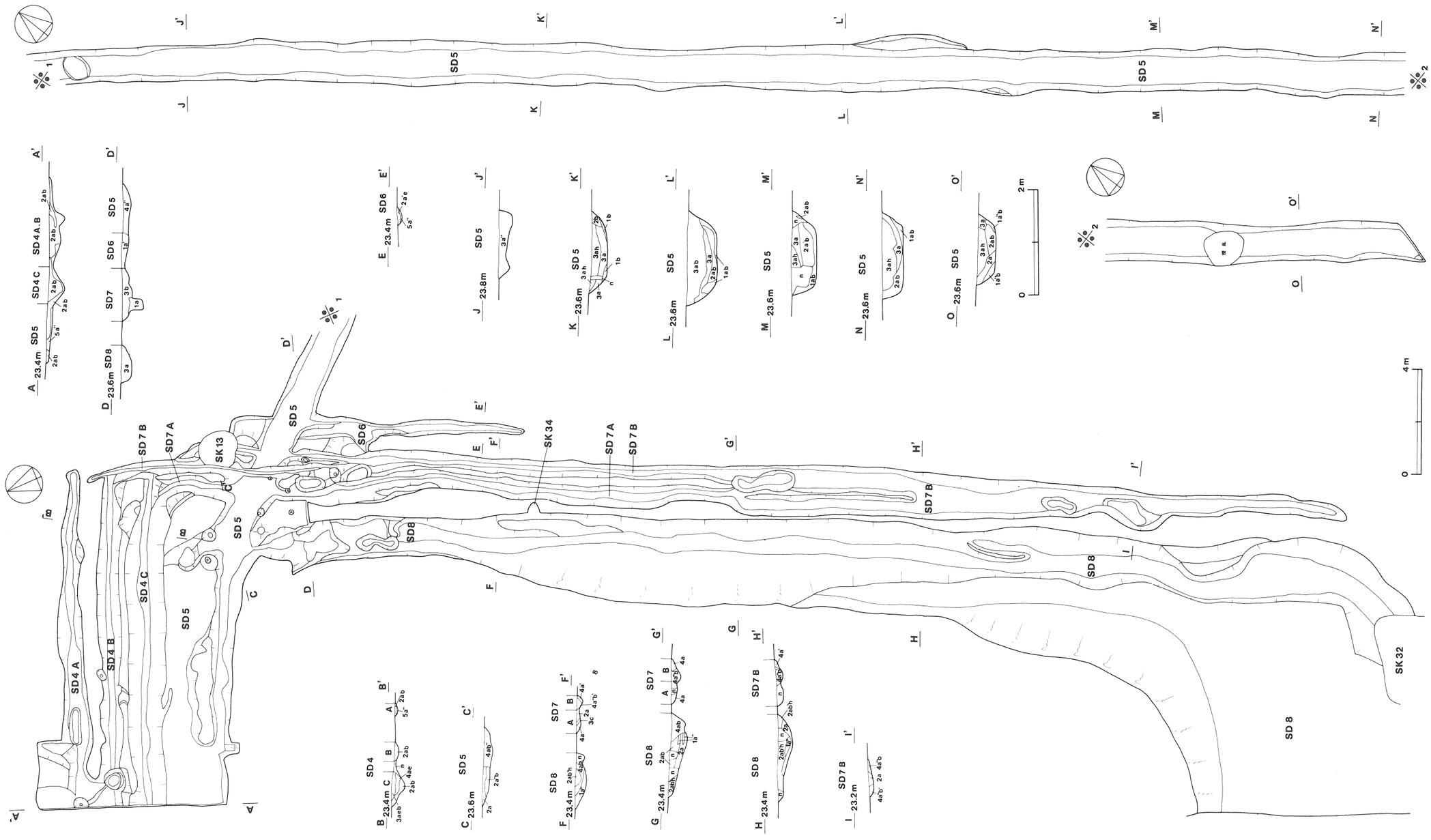
溝の幅は，どの区においても上幅120～147cm，下幅25～45cmである。壁は，ハードロームで硬く，ゆるやかに外傾して立ち上がっている。底面もハードロームで硬く，皿状に中央が凹んでいる。遺構確認面からの深さは，46～62cmである。断面は皿状を呈している。底面のレベルは，A～A′で22.47m，B～B′で22.77mで南東側から北西側に若干傾斜している。

遺物は，周囲から流れ込んだと思われる縄文土器片が少量覆土から出土しているが，本跡に伴うものではないものと思われる。

第5号溝（第155図）

本跡は，調査区のI2・I3・J3・J4区を南東方向から北西方向に横切る形で確認されている。溝の南東端は，J4i_2区に確認され，北西方向にJ2e_0区まで直線的に延び，さらに，J2e_0区からやや角度を変えて西側の調査区外の農道下に至っている溝と，角度を北側に向けて2.5mほど延びる溝の2条に分かれている。I3f_1区では，第6・7号溝と，I2c_0区では，第8号溝と重複している。また，J4i_2区の北東側は隣接する昭和56・57年度に調査した2区の第3号溝と農道下を通って接続している。J4i_2区からI2e_0区までの長さは，72.1mで，主軸方向は，N－39°－Wを指している。I2e_0区からI2d_8区までの長さは，10.7mで，主軸方向は，N－62°－Wを指している。5区の長さは，82.8mであり，2区の第3号溝と合わせた総延長は，95.6mである。本跡は，J3c_7区で古墳時代前期の第20号住居跡の東コーナー部を切り，J3b_6区では，第82・126号土坑を切っている。I3j_4・I3i_4・I3i_3区では，縄文時代後期の第41号住居跡の北東側を切って重複し，また，同住居跡に廃棄されて形成されている第5・10号地点貝塚の貝層をも切っている。さらに，I3i_3・I3h_3区でも縄文時代後期の第44・45号住居跡の北東側を切り，I3h_3区では，第138号土坑内に廃棄されている第1号地点貝塚の北西側を切っている。このように本跡は，第6・7・8号溝以外で重複しているいずれの住居跡や土坑よりも新しい。

溝の幅は，J3c_7区で上幅が173～213cm，下幅93～105cmで北東壁が2段に掘られ，I2e_0区からI2d_8区までは，上幅58～103cm，下幅30～70cmと若干狭いが，その他は，上幅133～160cm，下幅



第155図　第４－Ａ，４－Ｂ，４－Ｃ，５，６，７－Ａ，７Ｂ，８号溝実測図（4）

80～105cmである。壁は，部分的には攪乱もみられるが，全体的にハードロームで硬く，外傾して立ち上がっている。底面はハードロームで，平坦である。遺構確認面からの深さは，I2e_0区からI2d_8区までは，13～20cmと比較的浅いが，他は35～55cmである。断面形は，「⌣」状を呈している。底面のレベルは，A～A′で22.99m，B～B′で23.00m，C～C′で23.15m，D～D′で23.08m，E～E′で22.78m，F～F′で22.75m，G～G′で22.88m，H～H′で22.90mであり，本跡のほぼ中央部にむかい，若干低く傾斜している。

覆土は，上層に少量のローム粒子を含む黒褐色土が，下層に少量のローム粒子を含む暗褐色土が自然堆積している。

遺物は，周囲から流れ込んだと思われる縄文土器片が出土している。また，I3h_3区では，第2号地点貝塚が検出されているが，この貝塚は，第1号地点貝塚を切った時の貝が自然に流入して堆積したものと思われ覆土から検出されている。なお本跡に伴う遺物は検出されていないが，古墳時代前期の第20号住居跡を切っていることや，本跡の延長で2区の第3号溝の覆土から多量の須恵器片が出土していたことから古墳時代後期以降のものであると思われる。

第6号溝（第155図）

本跡は，調査区の西部I2・I3区に確認され，第7－B号溝の南東側0.7mに並行している。溝の北東端は，I3f_1区に確認され，第5号溝と重複している。そこから南西方向にほぼ直線的にI2h_0区まで延びている。I3f_1区からI2h_0区までの長さは，8.2mで，主軸方向は，N－25°－Eを指している。

溝の幅は，南西端に近づくにつれて狭くなり，上幅29～105cm，下幅11～46cmである。壁は，ハードロームで硬く，ゆるやかに外傾して立ち上がり，底面は，ハードロームで，平坦である。遺構確認面からの深さは，比較的浅く8～11cmである。断面形は，皿状を呈している。底面のレベルは，A～A′で23.16m，B～B′で23.15mで，南西方向に向って低く傾斜している。

覆土は，主に，中量のローム粒子を含む暗褐色土が堆積している。

遺物は，縄文土器片が覆土からわずかに出土しているだけである。

第7－A号溝（第155図）

本跡は，調査区南西部I2・I3区に確認され，第8号溝の南東側0.7mに並行している。溝の北東端は，I3e_1区に確認され，第4－C号と重複している。ここからI3f_1区で第5号溝と重複しながら南西方向にほぼ直線的にJ2a_8区の第7－B号溝との合流付近まで延びている。I3e_1区からJ2a_8区までの長さは，28.8mで，主軸方向は，N－27°－Eを指している。

溝の幅は，どの区も上幅66～104cm，下幅27～44cmである。壁は，ハードロームで硬く，ゆるや

かに外傾して立ち上がっている。底面もハードロームで，I3e_1区から第７－Ｂ号溝と合流するJ2a_8区までは，皿状に凹んでいるが，他は，平坦である。遺構確認面からの深さは，17cm前後であり，断面形は，皿状を呈している。底面のレベルは，Ａ～Ａ′で23.02m，Ｂ～Ｂ′で23.01m，Ｃ～Ｃ′で22.84m，Ｄ～Ｄ′で22.66mであり，北東方向から南西方向に向って低く傾斜している。I3f_1区からI2f_0区までは，ピット状や攪乱と思われる落ち込みが検出されている。

覆土は，上層に黒褐色土が，下層に極暗褐色土が自然堆積している。

遺物は，周囲から流れ込んだと思われる多量の縄文土器片と極少量の陶器片が覆土から出土しているが，陶器片は，中・近世に比定されるものと思われる。

第７－Ｂ号溝（第155図）

本跡は，調査区の南西部I2・I3区に確認され，第７－Ａ号溝の南東側0.2mに並行している。溝の北東端は，I3d_1区に確認され，第４－Ｂ号溝と重複して，ここからI3f_1区で第５号溝と重複しながら，南西方向にほぼ直線的にJ2e_6区まで延びている。I3d_1区からJ2e_6区までの総延長は，48.1mで，主軸方向は，N－27°－Eを指している。

溝の幅は，第７－Ａ号溝との合流付近のJ2a_8区からJ2c_7区までは，幅が広く上幅130～182cm，下幅80～125cmであるが，その他は，上幅60～107cm，下幅25～66cmである。壁は，ハードロームで硬く，ゆるやかに外傾して立ち上がっている。底面は，ハードロームで，皿状に中央が凹んでおり，遺構確認面からの深さは、15～31cmである。断面形は，皿状を呈している。底面のレベルは，Ａ～Ａ′で22.91m，Ｂ～Ｂ′で22.91m，Ｃ～Ｃ′で22.71m，Ｄ～Ｄ′で22.67m，Ｅ～Ｅ′で22.49mで，Ｅ～Ｅ′の部分が最も低くなっている。

覆土は；主として少量のローム粒子を含む極暗褐色土が自然堆積している。

遺物は，多量の縄文土器片，極少量の陶器片が出土しているが覆土からのものであり，本跡に伴う遺物は出土していない。

第８号溝（第155図）

本跡は，調査区の南西部I2区に確認され，第７－Ａ号溝の北西側1.5mに並行している。溝の北東端は，I2e_0区に確認され，第５号溝と重複して，ここから南西方向にほぼ直線的にJ2d_6区まで延び，J2d_6区で角度を西方向に変えてJ2d_4区の調査区域外の農道下に至っている。I2e_0区からJ2d_6区までの長さは，37.2mで，主軸方向は，N－28°－Eを指し，J2d_6区からJ2d_4区までの長さは，9.3mで主軸方向は，N－90°－Wを指している。総延長は，46.5mである。

溝の幅は，第５号溝と直交するように重複している。I2e_0区からI2g_9区までは，上幅68～85cm，下幅28～53cmであり，I2g_9区からI2d_6区までは徐々に幅が広くなり，上幅200～600cm，下幅50～

80cmである。さらに，J2d_6区からJ2d_4区までは，上幅100cm，下幅80cm前後で最も幅が広くなっている。壁は，ハードロームで硬く，ゆるやかに外傾して立ち上がり，底面は，ハードロームで，平坦である。遺構確認面からの深さは，40～61cmである。断面形は，皿状を呈している。底面レベルは，A～A′で22.86m，B～B′で22.76m，C～C′で22.48m，D～D′で22.32mであり，北東側から南西側に向って低く傾斜している。

覆土は，少量のローム粒子を含む暗褐色土を主体に自然堆積している。

遺物は，多量の縄文土器片に，少量の土師器片，須恵器片，陶器片が覆土から出土している。陶器片は，いずれも常滑系のもので室町時代の15世紀頃に比定されるものと思われる。

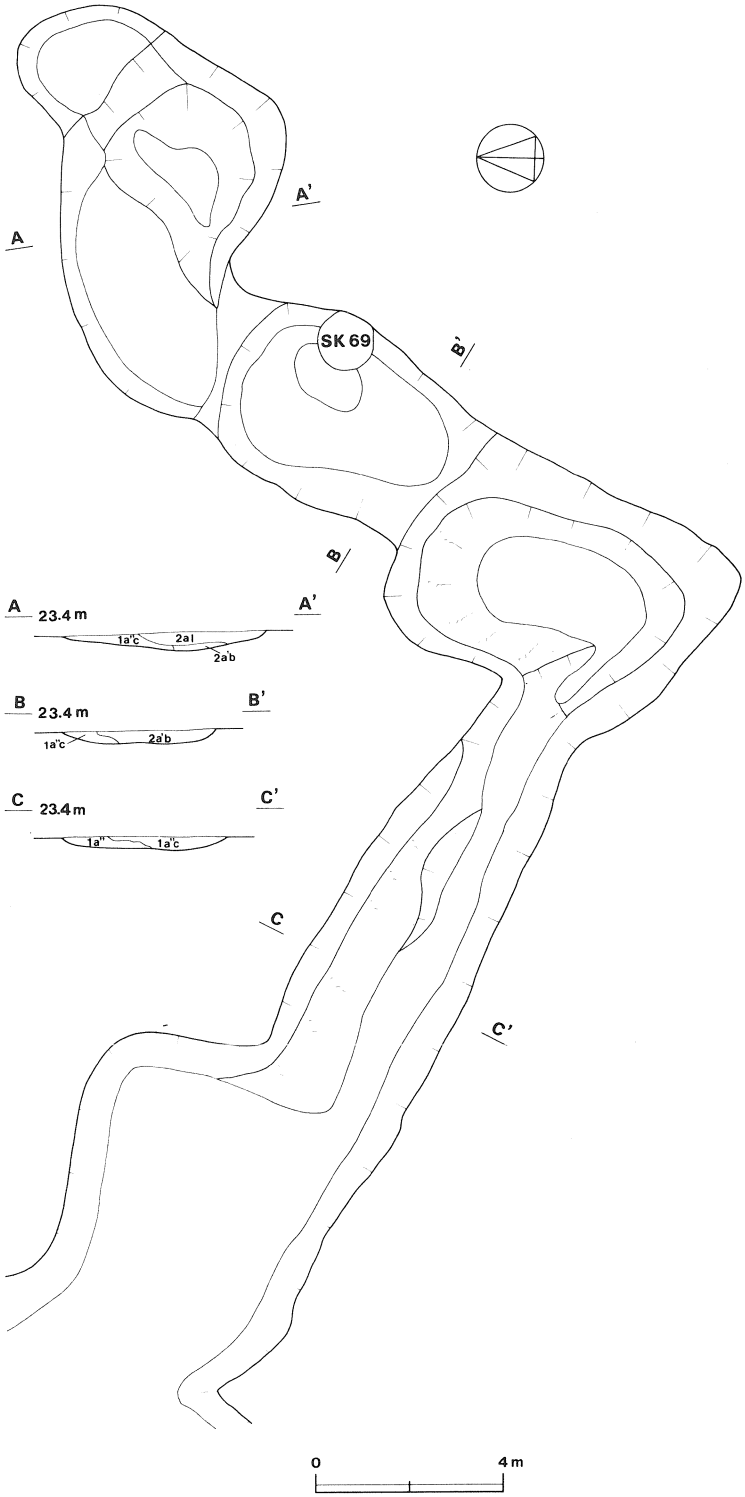
第9号溝（第156図）

本跡は，調査区南西部J2・J3・K2区に確認され，第5号溝の南西側28.5mに位置している。溝の東端は，J3i_2区で確認され，そこから西方向にJ2i_0区まで延び，ここで南西方向に角度を変えてK2b_9区までほぼ直線的に延び，さらに，ほぼ直角に向きを変えて北西方向のJ2i_5区に至っている。J3i_2区からJ2i_0区までの長さは，6.6mで，主軸方向は，N－90°－Wを指し，J2i_0区からK2b_9区までの長さは，11.9mで，主軸方向は，N－30°－Eを指し，さらに，K2b_9区からJ2i_5区までの長さは35mで，主軸方向は，N－60°－Wである。総延長は，53.5mである。本跡は，J3i_2区で第36号住居跡の北西側を切り，J2j_0区では，第69号土坑を切っている。

溝の幅は，全体的に広くJ3i_2区からJ2j_6区までは，上幅212～460cm，下幅80～294cmであり，J2j_6区からJ2i_5区までは，さらに広くなり上幅403～609cm，下幅320～491cmである。壁は，ソフトロームが硬く締まり，ゆるやかに外傾して立ち上がっている。底面もソフトロームが硬く締まり平坦である。遺構確認面からの深さは，25～35cmである。断面形は，皿状を呈している。底面のレベルは，A～A′で22.67m，B～B′で22.73m，C～C′で22.53mであり，C～C′が最も低く西側に傾斜している。

覆土は，上層にはローム粒子を少量含む暗褐色土が，下層には多量のローム粒子を含む褐色土が自然堆積している。

遺物は，少量の縄文土器片，土師器片，内耳土器片，陶器片が覆土から山土している。陶器片は，瀬戸系が1点，常滑系が2点出土し，いずれも室町時代の15世紀頃に比定されるものと思われる。



第156図　第９号溝実測図　(5)

第８節　井戸状遺構

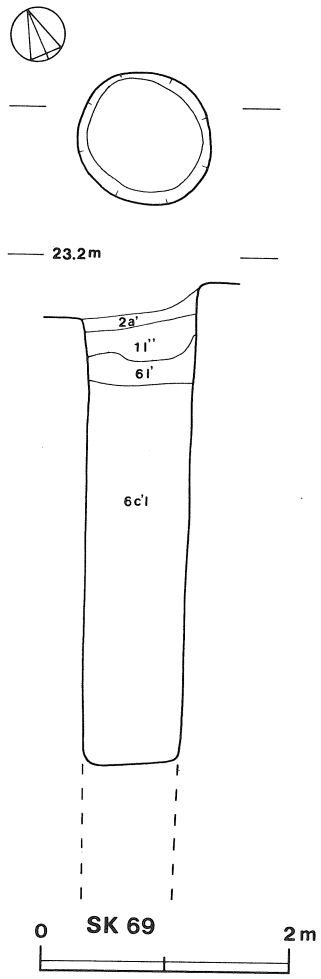
第１号井戸状遺構（第69号土坑を変更）（第157図）

本跡は，調査区の南部J2j_0区を中心に確認され，第35号住居跡の南西側13.2ｍに位置している。

平面形は，径1.09ｍの円形であり，深さは，遺構確認面から3.88ｍ以上である。壁は，ほぼ垂直に立ち上がり円筒状を呈している。

覆土は，遺構確認面から0.33ｍに少量のローム粒子を含む暗褐色土が，0.33～0.64ｍに多量の黄・白色粘土ブロックを含む褐色土が，0.64～1.2ｍに多量の粘土ブロック，ロームブロックを含むにぶい褐色土が人為堆積の状態で堆積している。調査中に湧き水は全くなかった。

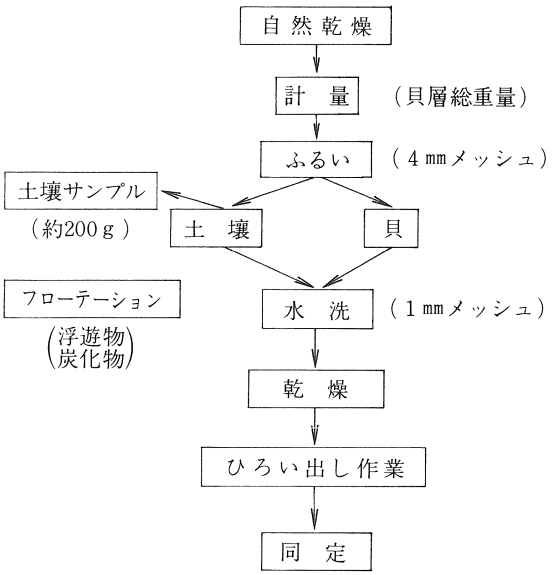
遺物は，遺構確認面から0.8ｍほどの覆土から縄文土器片が少量出土しているが，埋戻しの際に入ったものと思われる。



第157図　井戸状遺構実測図

第９節　地点貝塚

当遺跡５区における35か所の地点貝塚は，住居跡や土坑，一部には当時の地表面に投棄されて堆積していたものである。貝の出土量では，第34号地点貝塚が最も多く，次いで第13号地点貝塚である。なお，出土した自然遺物は，貝類と魚骨の他に少量であるが，獣骨，鳥骨に植物遺体である。これらの貝塚の調査については，２つの方法を採用した。１つの方法は，小規模な貝ブロックの場合に採用したもので，２分割法によって自然遺物を収納するという方法である。もう１つの方法は，比較的貝層規模の大きい場合に採用したもので，貝層を構造的に把握するために堆積順序に従って分層し，その分層ごとに遺物を収納するという方法である。なお，分層による調査方法は，埼玉大学助教授小池裕子氏の御指導によるもので，平面観察や断面観察を通して貝の密度や破砕貝等，さらに，貝の組成，大きさ，堆積方向等を基準として可能な限り最小の貝の廃棄単位を把握して貝層を分けて調査する方法である。発掘資料の分別作業については，(第158図)のように各貝層ごとのサンプルを自然乾燥し，乾燥重量の計量，完形貝，土器片などの分離，土壌サンプルの採集，フローテーション，水洗分離，ひろい出し作業，貝，魚骨，獣骨，植物遺体等の同定を行った。水洗分離においては，最初に４㎜メッシュのふるいを用い，つぎに１㎜のメッシュのふるいを使用して微細な魚骨，獣骨や炭化物，微小な陸産貝類の収集につとめた。同定等については，貝塚の調査方法時と同じ小池裕子氏の御指導と御助言を得，さらに，吉良哲明著『標準原色図鑑全集・貝』（保育社1967）などの記載を参考にした。



第158図　発掘資料の分別作業

貝層には，純貝層，混土貝層，混貝土層を呈するものがみられたが，大半は混土貝層ないしは混貝土層が主で，純貝層は部分的な個所に過ぎない。

貝種は，海産種，淡水産種，陸産種あわせて23種におよび，その内ほとんどの貝層から共通してハマグリ，シオフキ，サルボウが出土している。

当遺跡から出土した貝種は，以下に示す斧足綱11種，腹足綱13種であり，そのうち陸産種が3種である。

斧足綱

サルボウ	*Scaparca subcrenate (LISCHKE)*
ナミマガシワ	*Anomia chinensis (PHILIPPI)*
ヤマトシジミ	*Corbicula (Corbiculina) leana (PRIME)*
アサリ	*Tapes (Amyodala) japonica (DESHAYES)*
オキシジミ	*Cyclina orientis (SOWERBY)*
ハマグリ	*Meretrix lusoria (RÖDING)*
シオフキ	*Mactra veneriformis (REEVE)*
ヒメシラトリ	*Macoma incougrrura (MARTENS)*
サビシラトリ	*Macoma contabulate (DESHAYES)*
オオノガイ	*Mya(Arenomiya) arenaria oonogai (MAKIYAMA)*
イシガイ	*Unio douglasiae nipponensis (v. MARTENS)*

腹足綱

イボキサゴ	*Umbonium (Suchium) moniliferum (LAMARCK)*
ウミニナ	*Betillaria multiformis (LISHKE)*
イボウミニナ	*Batillaria zonalis (BRUGUIÉRE)*
カワアイ	*Cerithidea (Cerithideopsilla) djadjariensis (K. MARTIN)*
カワニナ	*Semisulcospira bensoni (PHILPPI)*
アカニシ	*Rapana thomasiana (CROSSE)*
イボニシ	*Thais clavigera (KÜSTER)*
ムギガイ	*Mitrella bicincta (GOULD)*
アラムシロ	*Hinia festiva (POWYS)*
ヒロクチカノコ	*Dostia violacea (GMELIN)*

腹足綱－陸産種

キセルモドキ科	*Family Eniclae*
オカチョウジガイ	*Allopeas Kyotoensis (PILSBRY et HIRASE)*
ヒダリマキマイマイ	*Euhadra quaesita (DESHAYES)*

当遺跡の地点貝塚を，隣接する昭和56・57年度調査した１・２区，昭和58年度調査した６・７区の地点貝塚と比較すると，斧足綱でマルサルボウ，イタヤガイ，マツカサガイ，マテガイ，腹足綱でムギガイが確認されなかった。マルサルボウについてはサルボウと同定したものの中に含まれている可能性も考えられるが，今回は確認できなかった。

各貝種の形態や特徴及び生活環境については，当遺跡の１・２区の報告書に詳しく記載されているので本稿では省略する。以下各住居跡，土坑及び当時の地表面に廃棄された貝類や土器片及び１体の人骨の出土状況等を記述した。なお，小池裕子氏による貝類の同定結果については別項を設けて掲載する。最後に各貝層出土の土器片については，出土層位が明確なものについては層位名を記述し，そうでない覆土や貝層の確認面から出土していたものについては無記名にした。

第１号地点貝塚（第138号土坑覆土内貝層）（第159図）

本跡は，調査区の中央部I3h_3区を中心に確認された第138号土坑の覆土内に検出されたもので，覆土内には厚い貝層の堆積がみられる。本跡の南西側には，第５号溝が重複しており，土層や貝層断面から，本跡の方が古いと判断される。

平面形は，長径1.73ｍ，短径1.12ｍの不整楕円形を呈し，長径方向は，N－28°－Wを指し，層厚は57cmほどである。本跡の最下層と土坑底面との比高は，18cmほどであり，第138号土坑廃絶後間もなく貝殻の投棄が行われたものと思われる。本跡の調査方法は，層位発掘を採用したので，11段階に分けて堆積の古い順に説明を加えることにする。

第１段階（11・10・９層）

11層は，本跡の最下層で，暗褐色土上に不定形を呈して堆積し，ハマグリを主体としシオフキ等を含む混土貝層である。ハマグリは，殻高22～30mmの個体のものが多く，最大殻高は42mmである。10層は，不整楕円形を呈して11層の北東側に接して暗褐色土上に堆積する層である。ハマグリを主体にシオフキ，サルボウを若干含む混土貝層である。ハマグリは，殻高24～33mmの個体のものが多く，最大殻高は40mmである。９層は，10層上に堆積し，不整円形を呈する層である。ハマグリを主体にシオフキ，サルボウを少量含む混貝土層である。ハマグリは，殻高23～25mmと33～35mmの間の個体のものが比較的多く，最大殻高は45mmである。

第２段階（８層）

８層は，暗褐色土上と一部11層の南端上に不定形を呈して堆積し，ハマグリを主体にシオフキ，サルボウを若干含む純貝層に近い貝層である。ハマグリは，殻高23～30mmの個体のものが多く，最大殻高は52mmである。

第3段階（7層）

7層は，11層上の一部と8層をスッポリ覆う形で堆積した不定形を呈する層である。ハマグリを主体にシオフキ，サルボウを含む純貝層で，本跡の中で，最もハマグリの出土量の多い貝層である。本貝層の北東側から人骨の一部が出土している。ハマグリは，殻高25～32㎜の個体のものが多く，最大殻高は48㎜である。

第4段階（6層）

6層は，7層上に不定形に広がって堆積する層である。ハマグリを主体にシオフキ，サルボウを含む混土貝層である。ハマグリは、殻高22～25㎜と30～35㎜の間の個体が多く，最大殻高は47㎜である。

第5段階（5層）

5層は，6層上に不定形を呈して堆積する層で，ハマグリを主体に，シオフキ，サルボウを含む純貝層である。ハマグリは，殻高27～35㎜の間の個体が多く，最大殻高は46㎜である。

第6段階（4層）

4層は5層上に不定形を呈して堆積する層である。ハマグリを主体にサルボウ，シオフキを含む純貝層である。ハマグリは殻高26～35㎜の間の個体のものが多く，最大殻高は41㎜である。

第7段階（3層）

3層は，4層上と5層上に不定形に広がって堆積する層で，ハマグリを主体にシオフキ，サルボウを含む混土貝層である。ハマグリは，21～30㎜の殻高のものが多く，比較的小型の個体のものが多く，最大殻高は47㎜である。

第8段階（2層）

2層は3層上に堆積し，不定形を呈する層である。ハマグリを主体とする混土貝層で，サルボウ，シオフキの他に，オオノガイ，アカニシ等を若干含んでいる。ハマグリは，殻高22～32㎜の個体のものが多く，最大殻高は51㎜である。

第9段階（1層）

1層は，2層上に楕円形を呈して堆積する層である。本貝層は，本跡の中で唯一のシオフキを主体とした貝層で，ハマグリ，サルボウ等を含む混土貝層である。シオフキは，殻が薄く破損している資料が多いが，殻高30～36㎜程度の個体が主となっている。最大殻高は40㎜である。ハマグリは，殻高22～28㎜の間に個体が集中し，最大殻高は39㎜である。

本跡は，調査結果からみると，北西方向から貝が投棄されたものと思われる。同定された貝種は，ハマグリ，シオフキ，サルボウ，カワニナ，ウミニナ，オオノガイ等17種である。中でも淡水産のカワニナが80点出土していることは特徴的である。また，他の遺構と比べて魚骨の出土量が多く，人間の頭骸骨も検出されている点では，顕著な遺構である。人骨については，国立科学

博物館人類部門の佐倉朔氏に鑑定していただいたので後述することにする。

なお，本跡II区の貝層番号は，I区の層位と対応させたので，発掘調査時の層番号とは異っている。相互の関連については層名対照表によられたい。

表5　第1号地点貝塚層名対照表

I区（層名）	1	2	3	4	5	6	7	8	9
II区（層名）	1	2	3・4・5・6	7・9・10・11	15・16・17	18・19	20	21・22	23

第1号人骨（第169図）

本人骨は，第1号地点貝塚の7層のハマグリを主体とする純貝層中から出土したものである。頭蓋骨，脛骨，手根骨の一部分が出土しているが遺存状態は良くない。また，第5号溝内で検出された第2号地点貝塚の覆土からも頭蓋骨の破片が出土し，これらの人骨は接合されたので，同一人骨と認められた。第2号地点貝塚は，第1号地点貝塚が，第5号溝の構築された時に削平され，溝廃絶後に溝の中に貝殻が流れ込んで形成されたものである。このことから本人骨は，本来の埋葬状態でない可能性が高いと思われる。本人骨の時期は，第1号地点貝塚から出土した土器片が，いずれも縄文時代後期前葉の堀之内I式期に比定されることから，ほぼ同時期のものと思われる。

第2号地点貝塚（第5号溝覆土内貝層）（第159図）

本跡は，調査区のI3・J3・J4区を南東方向から北西方向に横切る形で検出された第5号溝の覆土内I3h_3区に堆積している貝層である。ところで，第5号溝は，I3h_3区で第138号土坑覆土内貝層である第1号地点貝塚の南西側をも切っている。本跡と溝の土層断面や，第1・2号地点貝塚から出土した人骨片が接合されたことなどから，本跡は，第1号地点貝塚と同一貝塚として形成されていたものと考えられる。第1号地点貝塚が，第5号溝構築時に削平され，溝廃絶後に溝の中に貝殻が流れ込んで，本跡が2次的に溝の覆土内に形成されたものと考える。

本跡の平面形は，長径2.68m，短径1.18mの不整楕円形を呈し，長径方向は，N－36°－Wを指している。層厚は，18cmほどである。ハマグリを主体にサルボウ，シオフキ等を含む混土貝層である。ハマグリは，殻高19～30mmの個体のものが多く，全体的に小型であり，最大殻高は40mmである。貝類組成をみると，ハマグリ3,049点，サルボウ549点，シオフキ416点，アサリ113点，オオノガイ14点，アカニシ，カワニナ各4点，オキシジミ，ウミニナ，ナミマガシワ各2点，ヤマトシジミ，カワアイ各1点が出土し，第1号地点貝塚の貝類組成とほぼ同じ傾向を示している。